

牙狼 <GARO> — 戦国
ノ 希望 —

鳳凰白蓮

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

流浪の旅をしながら数々のホラーを退治してきた黄金騎士ガロの称号を受け継いだ青年道外流牙は番犬所からの任務を受け、ホラー狩りをしてきたが、小さな祠から不思議な刀を見つけた。

刀が突然不思議な光を放ち、流牙が目覚めるとそこは自分が生きてきた世界ではなく、ホラーの存在しない異世界だった。

流牙はそこで一人の少女と出会った。

少女の名は織田久遠信長。

久遠は流牙にとんでもないことを言い出した。

「私の夫となれ。そして共に天下への道を進もうぞ！」

「……ええっ!? お、俺が君の夫おっ!？」

久遠の夫に成れといわれ、夫になりたくない流牙は久遠と家臣達から逃げ出し、城を抜け出して町に着くとそこでホラーと異なる人を喰らう化け物……『鬼』が現れた。

鬼を前に流牙は人を守る為に牙狼剣を抜き、鬼を斬り裂いていく。

そして、闇夜に輝く黄金の鎧を召喚し、その身に纏う。

「俺は魔戒騎士、道外流牙！黄金騎士ガ口の称号を受け継ぐ者！」

闇を照らす希望の光……流牙はこの世界に蔓延る闇を斬り裂く為に久遠達と共に戦う！

※更新は牙狼のテレビ放送時間の毎週金曜深夜1時23分に必ず行うようにしますのでよろしく願います。

目次

『始』 En c o u n t e r 』

1

『光』 S h i n i n g 』

『試』 T e s t 』 18

『世』 J i d a i 』 30

『心』 L e g e n d 』 49

『動』 F a t e 』 65

『想』 H e a r t 』 79

『守』 G a r d 』 94

『旅』 T r a v e l 』 116

『都』 C a p i t a l 』 133

『舞』 D a n c e 』 154

166

『歌』 S o n g 』 190

『妹』 S i s t e r s 』 204

『思』 M e m o r i e s 』 224

『融』 F u s i o n 』 242

『狩』 H u n t i n g 』 258

『交』 C r o s s 』 273

『友』 Z a r u b a 』 294

『蝶』 Y u i n a 』 308

『降』 A d v e n t 』 326

『月』 M o o n 』 351

『戰』 W a r 』 365

『刀』 S o u l 』 379

『闇』 D a r k 』 389

389

信	子	愛	道	龍	獸	別	罨	夜	嫁	414	迷	勝
Trust	Children	Family	Road	Miku	Beast	Parting	Trap	Night	Bride		Ambivalence	Victory
567	549	528	516	500	485	469	458	446	431			400

武	誓	混	692	对	竜	星	勇	懂	繼	乱	宴	奪
Take	Pledge	Confusion		Continuing	Dragon	Stars	Brave	Yearning	Successor	Disorder	Party	Recovery
732	712	703			680	669	657	643	624	610	594	580

誇	激	波	虎	轟	鋼	鬪	怨	血
∫ P r i d e ∫	∫ C r a s h ∫	∫ H a k a n a ∫	∫ H i k a r i ∫	∫ G o u t e n ∫	∫ K o u g a ∫	∫ F i g h t ∫	∫ Z A J I ∫	∫ B l o o d ∫

842 830 821 811 791 780 769 757 744

『始 ～Encounter～』

魔戒騎士……それは暗黒の世で輝く希望の光。

その暗黒の世に蔓延り、人を食らう魔獣・ホラー。

暗黒の世に闇を照らす一筋の光があった。

その名は『ガロ』……大きな戦いで人々を守るために黄金の輝きを解き放ち、主を失い、鎧は漆黒となつてしまった。

それから長き時が流れ……漆黒の鎧の前で魔戒騎士を志す少年と母の間に一つの約束が交わされた。

少年は青年となり、大きな試練を乗り越えて鎧を継承した。

そして、青年と母の思いが募り、遂にガロの鎧に黄金の輝きを取り戻した。

青年は母の思いを胸に、その瞳に映る多くの人の未来を守るために数々のホラーを討滅し、黄金騎士の名に相応しい男として成長した。

その青年の名は道外流牙……闇を照らす希望の光である。

流牙は番犬所の依頼を受け、山奥に潜むホラーの群れを狩っていた。

既に多くのホラーや伝説のホラーを討滅した流牙にとっては簡単な依頼で赤い鞆に

納められた細身の直剣……ホラーを切り裂き、封印する魔戒剣を構える。

流牙の魔戒剣・牙狼剣で次々とホラーを切り裂いていき、僅か一分足らずでこの場にした全てのホラーを討滅した。

「これで依頼は終わりか。簡単だったな」

流牙は左手の中指に嵌められた指輪のカバーを上げると独特な形をしたスカルリングに話しかけた。

『ああ。この間のラダンとジンガに比べればお前さんにとって楽なものだろう』

口を開いて話すそのスカルリングは『魔導輪』と呼ばれ、人間と友好関係を結んでい
るホラーの魂が宿っている。

名はザルバ、黄金騎士ガロに代々受け継がれ、共に戦ってきた大切な友であり相棒である。

「さて、朝日が来るのを待って山を降りたらなんか食べなくちゃな」

『そうだな……ん？流牙、妙な気配を感じる』

「ホラーの群れの生き残りか？」

『違う。邪悪な気配ではないが、感じた事のないものだ』

「行ってみるか……」

流牙はザルバの案内で山の中を歩き、進んだ先には古びた小さな祠があった。

「祠……?」

『相当古そうだな。気配はこの中から感じる』

祠は長年の雨風によってボロボロで扉は半分開いていた。

慎重に扉を開いて中を見るとそこには一太刀の刀が納められていた。

流牙は刀を手に取り、月の光に照らしながら見るとそれは柄に龍の文様が刻まれた刀だった。

「ザルバ、これか?」

『ああ。邪悪な力を感じないが、何かの魔導具の可能性があるな』

「特にここで封印もされてないみたいだから……リユメ様に見てもらってから指示を仰ごう」

リユメとは強力な法力を持つ高名な魔戒法師で流牙とは何度も協力して強大な敵に立ち向かった。

流牙はひとまず一休みできる場所を探し、朝が来るのを待とうとしたその時だった。

刀から淡い白い光が放たれ、光が少しずつ大きくなっていく。

「ひ、光った!?!」

『なんだこの光は!?!流牙、刀を離せ!』

「は、離れない!?!うわあああああつ!?!」

刀を手放そうとしたが流牙の手から離れず、やがて光はさらに強くなり流牙とザルバを包み込んだ。

そして……光が消えると同時に流牙とザルバはこの場から……否、この世界から消えてしまった。

☆

「ん、んんっ……あれ……？」

「おお。起きた起きた」

流牙が目を覚ますとそこには綺麗な長い黒髪に琥珀のような瞳を持つ少女が布団越しに跨っていた。

「えっ!? 誰っ?!」

人生で初めて遭遇した謎の状況に流牙は頭に大量の疑問符を浮かべた。

「貴様、一日中眠りっぱなしだったぞ? 壮健なのか? まあそれだけ騒げれば壮健でだろうが。いや、そんなことより貴様に聞きたいことがある、一体どうやって天からおちてきた? いやそもそもどうやって天に昇った? あれか、貴様は死人でいわゆる幽霊という奴か、いや幽霊ならば触れないと聞くが貴様はちゃんと触れているな。では違うか、他にも聞きたいことがあるぞ、あの光の玉は何なんだ? どうゆう手妻を使ったのだ? あれほど強い光を我は初めて見たのだが。燃料は何だ?? 荏胡麻か? それとも昨今流行りだ

したという、新しい菜種油というやつか？」

「ま、待つて待つて！君は何を言っているんだ？」

「何つて……それかあれか？お前は仏教徒共がいう、大日如来とやらの化身とでも言うのか？」

「俺は神じゃないつて……とところで、君は誰？」

「お前こそ誰だ？」

「ああ、ごめん。まずは俺からだよね。俺は道外流牙」

「道外？道外氏というのは聞いたことはないが、どこの出だ？」

「どこつて……言われても、元々人里離れた所に住んでいたし……」

チリーン……………！

「ん？ザルバ？」

カバーを被ったザルバから呼び出しの鈴の音が響き渡るが、人前で話すことができないのでどうしようかと悩んでいたその時に少女は衝撃的な発言をした。

「ああ、ザルバの事か？先に話したらどうだ？」

「えっ!!ザルバと話したの!？」

「お前が気絶していた時に少しな。驚いたぞ、まさか指輪が話すとは思わなかったぞ。

まあ、あまり話してくれなかったが……」

まさか少女にザルバの事がばれてしまったのは痛い過ぎてしまったことは仕方ないかと腹をくくり、カバーを開いてザルバと話す。

『ようやく目覚めたか、流牙。早速で悪いが少々面倒な事になった』

「面倒な事？」

そして、ザルバは少女の言葉以上にとんでもない衝撃的な発言をする。

『俺たちは元いた人界から別の世界に来てしまったらしい』

「……はあ!？」

『外に出て町を見てみる』

「お、おい!」

少女の制止を振り切り、流牙は障子を開けて外に出て、そこからジャンプして屋敷の上に登る。

そして、そこから見た周りの景色は今まで色々な地を旅してきた流牙ですら見たことないものだった。

それは大昔の国を思い出すような広い草木が生い茂る山に囲まれた町にその奥には大きな城が建っていた。

「何だこれ……?」

『少なくとも今の人界にこんな場所は何処にもない。どういう因果かあの刀によってこ

の世界に飛ばされてしまった。そして、驚くことにこの世界にはホラーも増してやゲートの気配が感じられない』

「ホラーとゲートの気配が感じられない!?!」

『こんな感覚は初めてだ。だが事実だ。お前さんはこの世界の戦場に召喚され、倒れていた所にさっきの嬢ちゃんに助けられてここまで運ばれた。だが、その道中から今この時までホラーもゲートの気配が感じられなかった。ありえないと思うがこの世界はホラーが存在しない世界かもしれない』

ホラーは魔界から『陰我』と呼ばれる負の心を宿った物体を『ゲート』にして心に闇を持つ人間に憑依し、姿形をコピーして、近づく人間を次々と襲い、その血肉を喰らう。しかし、この世界にはそれが存在しない……もはやホラーとゲートの概念がないのかもしれない。

流牙たちの住む人界は古より魔界から現れるホラーと戦い続けてきた。

人間が存在する限りホラーとの戦いが永遠に終わる事がないと言われてきたのである意味夢のような世界を目の当たりにし、流牙は不思議な感覚をして呆然としていた。

「ホラーのいない世界か……」

「おい！何をしているのだ流牙よ！早く降りてこい！まだ話は終わってないぞー！」

「あ、ごめんごめん。今降りるから」

流牙は屋根から降りて自分が寝ていた部屋に戻り、少女と改めて話し合う。

流牙のいるこの場所は織田が納める尾張清洲の城下町で、この屋敷はその少女のものだ。

先日、この尾張清洲に向けて駿府屋形の今川治部大輔が攻めてきて田楽狭間という場所を奇襲し、勝利を得た。

その時に流牙が天から光を纏いながら落ちてきた。

「まさか戦場のど真ん中に落ちるとはね……」

「私もまさか戦で勝利を挙げて喜んだところにお前が落ちてくるとは思わなかったぞ」

「そうだよ。ところで、君の名前は？俺は名乗ったんだから教えてよ」

「よかろう、聞いて驚け！我の名は織田三郎久遠信長！織田家当主にして夢は日の本の統一なり！」

「えつと……長いね、久遠と信長、どっちが名前？」

「信長は諱で真名は久遠だ」

「真名？じゃあ久遠ちゃん」

「ちゃん付けするな、無礼者！」

「ご、ごめん！」

「そう言えば貴様は道外流牙と言ったな。どこが諱で、真名はどれになるのだ？」

「諱？道外が苗字で、俺の名前は流牙。母さんが付けた大切な名前です。みんなから流牙と呼ばれてる」

「ほお、真名がないとは面妖な」

諱は己が己が使える主君のみが呼んでもいい名前でもいい名前でも敵対勢力が呪いを込めて呼び捨てにすることもあり、その人物の霊的な人格と強く結びついたものらしい。

もつとも久遠はそれは不合理だと思っっているの、親しいもの達とで真名を呼び合っている。

「ところで、ザルバが昨日呟いていたがお前は別の世界から来たというの？本当か？」

「……ああ、そうだよ。信じられないかもしれないけど、俺はこことは異なる別の世界から来たんだ。信じられないと思うけど……」

「確かにお前の話には確かに信じられない。そのザルバみたいな面妖なものは私は今まで見たことないものだが、それだけではまた不十分だな」

「そうだよね……」

「……おい、流牙。私の目を見ろ」

「えっ？」

「私の目を見ろと言っている」

久遠に言われ、流牙は久遠の琥珀色の目を見つめた。

「……うむ。嘘のない瞳をしている。良かろう。貴様の言うことを信じてやる」
「ええっ!？」

久遠は流牙の目を見て信じることにした。

乱世であるこの世界で立場が上の人間は瞳を見ればそれがどんな人物かわかるらしく、それがわからなければ下剋上となつてしまつてしまうらしい。

久遠は流牙が何故この世界に来たのか尋ねるが、流牙もそれは分からずお手上げ状態だが。

「俺は立ち止まるわけにはいかない。歩き続ければ道は開けるはずだから」

どんな時でも諦めずに前に進み続けてきた。

だからこそ流牙は数々の試練を乗り越えてきたのだ。

「なるほど。良い心がけだ。ますます気に入った。流牙よ、我の家臣となれ」

「……断る」

流牙は久遠の提案を即答で断つた。

「何故だ？ 我の家臣となれば衣食住が保障されるのだぞ？」

「君の家臣になるということは戦場で人を殺さないといけないことでしょ？ 悪いけど俺には生涯を通して貫く大切な使命があるんだ。その使命で俺は人を殺すことを許されてはいない。もちろん、君達の生き方を否定しているわけじゃないからね。俺は多くの

人の思いを背負って生きている。だから、この使命を果たさなきゃならないんだ」

流牙は優しい声音で、しかしその声には強い意志が込められていた。

それを感じ取った久遠は目を少し閉じてから新たな考えを導き出した。

「……分かった。家臣というのは撤回しよう。我が新たに提案してやる」

「新たに提案って……」

「衣食住を満たしてやる。その代わりに——我の夫となれ」

おそらく流牙の人生で衝撃的過ぎる言葉に流牙は耳を疑った。

「……ええっ!?!お、俺が君の夫おっ!?!」

まさかの求婚に流牙はあたふたと大慌てをするが、本当に祝言を挙げるつもりはないらしい。

実際はただの他国との婚約を避ける男避けの魔よけみたいな意味で久遠は提案した。

しかしそれだけではなく、小国である織田家が大国である今川家に勝ったその時に流牙が現れた。

日の本の全てが注目していた戦いであるが故に織田家が勝ったのは流牙の存在があつてことだと思ふ者もいる。

もちろん久遠はそんなことを信じないが流牙を手に入れば戦に勝てるという考えを持つ者が現れるかもしれない。

他人に盗られるくらいなら自分の手元に置きたい、そういう意図があったのだ。

「でも織田さん……」

「まあ、いきなりこんな話をされてすぐに受けるとは思わん。我は公務が残っておる。夜にでももう一度話を聞かせよ。絶対だぞ！約束だからな！」

「あつ……」

流牙は最初断ろうとしたが、久遠は公務があるので話の続きは夜になってしまった。

流牙は幼い頃に修行で十年間無人島で修業し、放浪の旅をしながらホラー狩りをしていたので衣食住が無くてもサバイバルで何とかなる。

しかし、久遠は助けてくれた恩人なので勝手に出て行くわけにはいかなのできちんと話し合ってからこれからのことを決めていくことにした。

「お客様、よろしいですか？」

「ん？あ、はい。どうぞで」

すると久遠とは違うお淑やかな声が聞こえ、襖が開くとそこには声のイメージとよく合う蝶の髪飾りをした美少女がいた。

「ただいま、お食事をお持ちいたしました」

「あ、どうも」

丁寧に頭下げている少女に流牙もつられて思わず頭を下げしてしまう。

頭を上げて足つきのお盆を持つてくる少女の美しさに流牙は息を呑んだ

「給仕を承ります。私、織田三郎が妻、帰蝶と申します。不束者ですが、よしなに」

「君が織田さんの奥さん？俺は道外流牙です。よろしくお願いします」

「いえ、久遠より言い付かっております。ではただいまお給仕を」

「あ、飯なら一人で大丈夫ですよ」

「ですが……」

「気にしなくても大丈夫だよ。それよりご飯を……あはは、ごめんね。ここ数日何も食べてなかったから」

「あ、はい……」

流牙の腹から大きな虫の音が鳴り、苦笑を浮かべながら帰蝶からお盆を受け取り、早速料理を頂く。

「では、いただきます」

両手を合わせ、ご飯やおかずを箸を伸ばしていく

「……どうしたの？」

流牙が料理を食べていると、帰蝶にあからさまな警戒と共にジーツと見つめられている。

「あなた、久遠の夫になるのですか？」

「え？あ、うん。と言つても魔よけ代わりだけどね。織田さんは夜までに考えて返答を
してつて言つてくれたけど」

「貴方に久遠の夫が務まるとは思いませんが。貴方にあの子の何が分かるんです？気楽
な気持ちで受けたのなら、すぐに撤回してこの国から出て行つてください」

「……………もぐもぐ」

「ちよつと、あなた、私の話聞いているの？」

「……………美味い」

「え？」

「美味いよこれ！この料理、全部君が作ったの!？」

流牙は太陽のような輝く笑顔で帰蝶を見つめ、純真無垢な流牙の笑顔に帰蝶は心臓が
弾み、顔が熱くなった。

「え!?!あ、そうだけど……………」

「こんなに美味しい和食は初めてだよ！帰蝶さん、ありがとう!!」

「えつ、あの、ど、どういたしまして……………」

予想外な喜びように帰蝶は呆然としてしまい、うまく受け応えが出来なかつた。

その後おかわりをしたりして美味しそうに食べる流牙に終始困惑される帰蝶だつた。

「ふう、ぐ馳走様でした!」

「は、い……」

「あ、そうそう。話が途切れちゃったけど、あなたの言う通り、俺はまだ織田さんの事を何も知らない。でもそれを理由にして今勝手に俺がこの国を出て行けば織田さんの約束を破ることになる。それにまだちゃんとお礼の言葉も言っていないから、この事は織田さんが帰ってきてからじゃダメかな？」

流牙は今の気持ちを帰蝶に伝えると筋が通っているので反論出来ず素直に頷く。

「それは、そうですね」

「分かってくれた？」

「わかりました。ではこの事は久遠が公務から帰ってきてから話しましょう」

「ああ、ありがとう」

「あなたの頭は、よほどにお安いのですね」

「え？」

「先ほどから頻繁に頭を下げたり感謝の言葉を何度も。男ならもつと凜とされてはどうです？」

「そう言われても他人から受けた感謝は言葉や形にして表さないと。それに、帰蝶さんの料理は本当に美味しかったから!!」

「そ、そうですね……ありがとう、……ございます……」

流牙の表裏のない純粋な言葉に悔しさと恥ずかしさが入り混じった感情で白い肌が赤く染まっていた。

「そ、それでは私はこれにて失礼いたします。久遠が戻り次第、お声おかけいたしますので、しばしの間、おくつろぎください」

そう言った帰蝶は食器をもって部屋を出て行った。

流牙は障子を開けて綺麗に整備された庭を見ながらザルバとこれからどうするか話し合う。

『流牙、お前は どうするつもりだ？あの嬢ちゃんと本当に結婚しちまうか？』

「馬鹿言ってるんじゃないよ。俺は織田さんとは結婚出来ない。俺はこの世界の住人じゃないし、何より……」

『何より何だ？もしや莉杏の事か？』

莉杏は流牙のパートナーを組んでいる女の魔戒法師。

流牙の母の遺言と己の意思で流牙……黄金騎士を支える魔戒法師になるべく共に戦ってきた。

「ばっ!?!お前いきなり何言うんだよ!?!」

『あの織田や帰蝶のお嬢ちゃん達はなかなかの器量を持っているが、やはりお前に一番近い女は莉杏だからな』

「それは否定しない……莉杏は俺の大切な人だし……早く元の世界に帰らないと」

『そうだな。なら、いつでも出る準備をしないとな』

「ああ。一先ずは織田さんにありがたうを伝えてから行くよ。よし、それじゃあまづは寝るかなー！せつかく布団があるんだから寝れる時に寝ないとね！」

『それじゃあ俺様も寝るとするかな。流牙、カバーを掛けてくれ』

「ああ、おやすみ」

流牙はザルバのカバーを掛けて眠らせ、流牙も再び布団に横になって体を伸ばしながらゆっくりと眠りについた。

『光　　〕Shinning〕』

流牙はパチツと目を覚まし、布団から起き上がると体を伸ばしたりした。

「よく寝たなあ……もう夜か。ん……？」

隣の部屋に四人の気配があり、常人よりも強い聴力を持つ流牙は耳を澄まして聞いた。

内容は正体不明の流牙を久遠の夫にする話であり、久遠と帰蝶、更には久遠の家臣である二人……壬月と麦穂が話していた。

そして、寝込んでいる流牙を襲いかかり、実力を図ろうとしている。

流牙はそつと布団から出て部屋の奥に立ち、相手からのタイミングを見計らいながら右手の拳を作る。

「麦穂。私が合図したら、襖を開け放つてくれ、抜き打ちをかける」

「了解です。では……」

「……三、二、一……今だ!!」

奥の扉の襖が開かれ、二人同時に布団に向かって刀を振り下ろすがそれよりも早く流牙が動いた。

「はあっ!」

流牙は軽く飛んでから全体重を乗せた拳を床に叩きつけて衝撃波を放った。

「なっ!?!」

その衝撃波により、襲いかかってきた二人は驚き、それと同時に流牙が使った布団が宙に浮かんだ。

「はっ!!」

流牙は一瞬の隙を突き、おっとりとした感じの女……麦穂の手にある刀を手刀で叩き落とした。

そして、宙に浮かんだ布団を麦穂に巻きつかせ、あつという間に簀巻きに似た状態にしてそのまま組倒す。

「きゃっ!?!」

「麦穂!?!」

「悪いけど布団に巻かれてもらうよ。あまり怪我をさせたくないし」

布団に巻かれ、男である流牙の力で組み倒され、麦穂は動くことが出来なかった。

「はっはっは!やるな、流牙!」

「やるんじゃないよ……」

「それにしても、今の一連の動きは素晴らしかったぞ!布団を吹き飛ばし、麦穂を布団で

巻いて組み倒すとはな！」

「貴様あ！どこの草だ!!」

麦穂と対照的に赤い髪をして怒りを露わにしている女……壬月の言葉に流牙は首を傾げた。

「草……?草つて何?」

「草とは忍、つまり忍者の事だ」

「あ、そういう事?俺は忍者じゃないよ」

「身のこなしもよく、機転も利く。草の真似事をしながら、その体捌きは武士の組討術そのもの。どうだ壬月、麦穂、結菜!なかなかの武者振りではないか!我の目に狂いは無かったであろう!よし流牙、お前に危害は加えさせん。麦穂を離してやれ」

「分かった。ごめんね、お姉さん。痛かった?」

「い、いえ。大丈夫です……」

流牙は麦穂を布団から解放してその手を握って立ち上がらせると何故か麦穂は頬を赤く染めていた。

「よし!これで流牙は私の夫として認めて……」

久遠はこの場にいる三人に流牙の実力から認めさせようとしたが、流牙は申し訳なさそうに両手を合わせて言う。

「あー、織田さん。その話なんだけど……」

「ん？どうした？」

「俺、君の夫になるのを辞退するよ」

その言葉に久遠達に沈黙が走った。

「なっ……何いつ?!」

久遠は目を見開き、口を大きく開けて驚いていた。

帰蝶達も耳を疑って同様に驚いていた。

「本当は早く言おうと思ったけど、仕事で行っちゃったから言えなくて。それにちゃんと感謝の気持ちを伝えたくてね」

流牙は本当に申し訳なさそうに言い、庭に出ると魔法衣の内側から一枚の赤い札を取り出して上空に投げると札が弾け飛び、色取り取りの無数の花卉が現れて舞い散る。

月が輝く夜に舞い散る花卉は風情があり、初めて見る光景に久遠達は目を見開いた。

「これは……?!」

「綺麗……」

「何と……?!」

「月夜に舞う花卉……」

これは想い人に気持ちを伝える法術、安穩の儀。

ボルシテイで建てた流牙の母の墓に莉杏が使った法術で、流牙はあらかじめ莉杏に頼み、いつかまた母の墓参りに向かった時のために安穩の儀の法術を札に込めてもらっていた。

色取り取りに舞う花卉に久遠達は見惚れてしまう。

「お金とかないけど、これが俺に出来る最大限の感謝の気持ち。織田さん、助けてくれてありがとう！帰蝶さん、ご飯美味しかった！」

お金や贈り物が出来ない流牙は安穩の儀で久遠達に感謝の気持ちを伝えた。

「それじゃあお元気で、じゃあねーっ!!」

そう言つて流牙は元氣よく手を振りながら走つてその場を後にし、屋敷の門へ向かった。

未だにゆっくりと舞い落ちる花卉とさきさと立ち去つた流牙に呆然とする一同。

「……はっ!?!り、流牙を逃がしてたまるかあっ!追えっ!今すぐ追いかけて捕まえるのだ!!」

いち早く正氣に戻つた久遠はこのまま流牙を逃すわけにはいかず、捕らえるよう命令する。

「し、しかし、せつかく出て行つてくれたのに……」

「そ、そうよ!こんな感謝の気持ちを表してくれて出て行く人を追いかけるのは……」

流牙を疑って反対していた壬月と歸蝶はこのまま流牙を帰らせようとしていたが久遠は首を激しく左右に振った。

「ええい！このまま黙って行かせる訳にはいかない！私の誇りにも傷が付く！私も行くから早く行け!!」

「壬月様……ひとまず行きましよう……」

「殿の命とならば仕方ないか……」

もはやワガママとしか言いようのない久遠の命令に麦穂と壬月は呆れ顔でため息をつき、流牙の後を追いかける久遠の後について行く。

「えっと、出口はこっちだな……さて、とりあえずは適当な場所で野宿を……」

「待てええええええ!!」

「えっ?」

振り向くと久遠と壬月と麦穂が走って近づいて来た。

「ええっ!?お、織田さん!?何で!」

「いいから待たんか流牙あつ!!」

流牙は何故自分を追いかけてきているのか分からないが、このままだとなんかヤバイと察して自分も走って逃走する。

「ねえ、どうして追いかけられてるの!?ちゃんと断つたよね!?ちゃんと感謝の気持ち

表したよね!？」

『知らん。お前の態度にあの嬢ちゃんの気に障ったんじゃないのか?』

「逃がさんぞ、このうつけめえ!!」

鬼気迫る表情で走ってくる久遠に流牙は恐怖を感じ、捕まらないように全力疾走をして屋敷を出て町に入る。

「ひいひいひいひいっ!?こ、怖っ!?今まで出会った女の子の中で一番怖いよ!」

「流牙ああああああっ!!!」

「うおおおおおっ!!!」

流牙は全力疾走で走り、久遠達との距離を離しながらジャンプし、城下町の建物の屋根に登り、姿を晦ました。

「はあはあ……こんな人に追いかけられたのってボルシティのSG1の時以来だよ……」

未だに木霊して聞こえる久遠の自分を呼ぶ声に少々ビビリながら夜空を見上げる。

チリーン………!

ザルバから鈴の音が鳴り、流牙はカバーを開いた。

『ははははは!モテモテだな、流牙』

「からかうなよザルバ……さてどうするか、ひとまずこの国から出ないと」

『それもそうだが、これからの方針を考えないといけないな……ん？流牙』

「どうした？」

『血の匂いだ。それに、邪悪な力を感じる』

「ホラーか!? ホラーはいないはずじゃ……」

『いや、ホラーとはまた違う気配だ。ここから近い……流牙!』

「ああ! 行こう!」

流牙はザルバの案内でできるだけ音を立てないように走り、邪悪な力のある気配の元へ向かった。

そして、暗闇で行動することが多い流牙はすぐに目が慣れると邪悪な力の正体に目を疑う。

「ザルバ……あれはホラーじゃないんだよな?」

『ああ……だが、あんな化け物は初めて見たぞ。おい、奴らの喰っているものをよく見てみろ!』

ザルバに言われ、目を凝らして見ると化け物は人と思われるものの血肉を食べていた。

「人を、喰っているのか……!?!」

流牙はホラーとは異なり、文字通り人の血肉を食べ物として音を立てながら喰っている

る謎の化け物に対し、怒りが込み上げてきた。

すると化け物は流牙の気配に気付き、口から血を垂らしながら振り向くとその邪悪な存在に流牙は声を荒げた。

「貴様は……貴様は何なんだああああーっ!!」

流牙は怒りを爆発させると同時に魔法衣の内側から牙狼剣を取り出して鞘から抜き、化け物に切り掛かる。

「うおおおおおーっ!!」

大きな爪を用いた攻撃を流牙は体を捻ったりジャンプをしたりして回避する。

また牙狼剣で爪を捌きながら隙を伺い、化け物の体を切っていく。

牙狼剣の刃は化け物の体を次々と切り裂いていき、大きな傷を作っていく。

一方、流牙の戦いを影から見つめる者達がいた。

「強い……！服の上からでも分かる体の作りや先程の見事な動きで只者ではないと思っ
ていたがここまでとは……！」

「ええ。『鬼』に対して一步も引かず、あそこまで戦うとは……」

「それに彼の持つあの獲物は相当な切れ味を持つ業物ですね……」

流牙を追いかけていた久遠と壬月と麦穂の三人は剣と爪がぶつかり合う音を聞きつけてきた。

三人は流牙を見極めるために影から見ていたのだが、その見事な戦いっぷりに感心していた。

『素体より少し固いぐらいだな。流牙、行くのか?』

「ああ、切り裂いてやるよ……!!」

ホラーとは異なる存在だが、人々の幸せと未来を奪う邪悪な存在は守りし者である流牙の憎むべき敵だった。

覚悟を決めた流牙は牙狼剣を一旦鞘に納め、力を込めるように体の左側へ垂直に立てると一気に鞘から引き抜いて天に向けて高く掲げた。

掲げた牙狼剣で頭上に円を描くと、空間を切り裂くような光の輪が浮かび上がる。

光の輪の内側がひび割れたような模様を描くと、太陽のような光が降り注がれて流牙の体を包み込んだ。

暗い闇夜に輝く眩き光に久遠達は一瞬目を閉じてしまう程だった。

剣を下ろした流牙に円の中から複数の光の塊が舞い降りる。

一秒にも満たない短い時間の間に光の塊は両足、胴体、両腕、そして最後に頭部へと流牙の体全体に装着される。

それは眩き光を放つ黄金に輝く鎧だった。

しかし、それは久遠達の知る鎧とは大きくかけ離れた形をしていた。

全身を全て包み込む鎧は隙間が殆どないほどに密着され、無数の部品が重なり合ったような作りとなっていた。

鎧の細部にまで施された紋様は美しく、その鎧が一つの芸術品のように見事なものだった。

黄金に輝く鎧から光の粒子が溢れ、まるで闇夜を照らす朝日を彷彿とさせるような輝きを放っていた。

鎧の中で一番印象に残るのは狼を模した兜でその瞳は橙色に輝いており、化け物を射殺すような気を放っていた。

細身の直剣だった牙狼剣は幅広い大剣へと変化し、それを納める赤い鞘も大きくなり、鎧と同じ金色のものとなっていた。

流牙が右足を一步前に踏み出すと背後に炎と金色の文字が彩る紋章が大輪の花の如く広がり、堂々たる騎士の姿を現していた。

その神々しい姿を目の当たりにした化け物達は無意識に恐れ、確実に近づくと死を察して震えていた。

そして、対する久遠達は恐れよりもまるで神に対峙したかのように畏怖と尊敬が混ざり合った気持ちだった。

金色に輝く鎧と剣……道外流牙が受け継いだ、魔戒騎士中最高位にして伝説と崇めら

れた最強の称号。

旧魔戒語で『希望』を意味する名。

人々の希望と願いを守り、闇を照らす光。

そして、鎧に溜まった邪気を浄化され、新たな姿へと形を変えたその名は『牙狼・翔』。
今、戦国の世に闇を照らす希望の光が降臨した。

『試　　〕 Test 〔』

謎の邪悪な化け物と対峙し、流牙はガ口の鎧を召還し、その身に纏った。

黄金に輝くその鎧に化け物達は恐れを感じ、流牙は鞆に納められた大剣の牙狼剣を抜いて片手平手突に似た型を取る。

「はあああああつ!!!」

魔戒騎士の鎧を纏った者の独特な掠れたような声を発しながら流牙は足に力を込めて飛び、牙狼剣を振り下ろす。

一番手前にいた化け物は爪で対抗しようとしたが、流牙は牙狼剣で爪ごと叩き斬り、化け物の体を切り裂いた。

次に体を横に回転しながら遠心力を込めた牙狼剣を叩き込み、化け物を肩から胴体を切り裂く。

そして、最後の一体に一瞬で牙狼剣を胸に突き刺し、そのまま力づくで上に切り上げて化け物の顔を真っ二つにし、この場にいた化け物を全て切り裂いた。

化け物の息が絶えるとガ口の鎧が流牙から外されて魔界に送還され、大剣から元の細身の直剣に戻った牙狼剣の刃を見ながら流牙は呟く。

「魔戒剣に邪気が封印されていない……」

『やはりホラーとは異なる存在らしいな』

牙狼剣を鞘に収め、退治した化け物を見るといつの間にか消滅していた

「何だったんだ、さっきのは……」

ホラーに似てホラーとは異なる邪悪な存在……流牙は未知なる敵に頬に汗が流れた。

するとそこに槍を持った二人の親娘が現れた。

「あれえ？母、鬼がいねえぞ」

「ああん？どこに行きやがった？まさか……おい、その小僧。てめえがやったのか？」

「……あんた達は？」

「質問しているのはこっちだ！どこの組のもんだコラ？」

ヤクザのような話し方をする女に流牙は警戒しながら静かに言う。

「ああ。俺が斬った」

「ちっ、せつかくの獲物をてめえが奪ったのか。おい、代わりに戦え」

「そうだそうだ！責任取れ」

「……何言ってるんだ？俺は人を食らっている化け物を斬っただけだ。あんた達と戦う

理由は俺には無い」

「はっ……いい度胸じゃねえか、その面を歪ませてやる！」

流牙の言葉に気に障った女は槍を振り回して流牙に襲いかかる。

「その喧嘩、待てえい!!」

そこに久遠の怒声が鳴り響き、女は槍を止めた。

「つ!? 殿? どうしてここに……」

「織田さん……」

「すまぬな、桐琴。その者は私の客人だ」

「殿のお?」

「そうだ、小夜叉。そやつは田楽狭間に現れたのだ」

「田楽狭間と言やあ……ほお。ということ、この小僧が例の?」

桐琴と呼ばれた女が流牙を下から舐め上げるように覗き込んだ。

「ああ。ひとまず、この場は私に免じて槍を収めてくれないか?」

「承知した。おい、クソガキ! 帰って酒だ!」

「応よ、付き合うぜ、母あ!」

そう言つて二人はさっさと帰って行つた。

「誰なんだ……?」

「あれは森家の当主で名は森三左衛門可成殿。娘の方は森長可ちゃんですよ」

「随分とそっくりな親子だね……って、俺追いかけているんだつた!」

「逃がさん」

「逃がしませんよ」

ハツと気付いた流牙は逃げようとしたが両腕を壬月と麦穂に掴まれて逃げられなくなった。

「くっ!しまった!」

「流牙、逃げるで無い。お前には聞きたいことがあるのだ」

「聞きたいこと?」

「あの金色の鎧……お前は何者だ?」

「……見られちゃったか」

化け物を斬るために致し方無いとはいえ、ガ口の鎧を見られたのは流牙にとって厳しいものだった。

記憶を消す魔導具は莉杏に任せっきりだったので持つておらず、久遠達から記憶を消すことはできない。

「じゃあ、俺からも聞くけどあの化け物は何なんだ?」

「……質問を質問で返すか。よし、一度屋敷に戻って話し合おう。良いな?」

「分かった。行こう」

流牙は久遠達と共に屋敷へ戻っていった。



久遠の屋敷に戻り、帰蝶が淹れたお茶を飲みながら謎の化け物とガ口の鎧について話をする。

「さて……先程お前が戦った化け物だが、あれは我らにも良く分からないが、人を喰らう妖の存在として奴らの事を『鬼』と呼んでいる」

「鬼……」

「鬼は流牙が来る少し前に突然現れたんだ」

「俺が来る少し前か……」

『だとしたら何かそいつらが現れた原因があるかもしれねえな。他に何か情報は無いかな？』

「いや……どこに潜んでいるかさえ分からず、夜に食事をしたらしばらく出てこない。常日頃から探索に人を割いているし、何匹か成敗したが何の目的かどういいう存在なのか分かってないんだ……」

「人を喰らう鬼か……」

流牙はホラーと同じく人を喰らう鬼に対して強い怒りが生まれ、握りしめている拳を震わせていた。

「では流牙。話してくれないか？お前は何者なのか、鬼を最も簡単に斬り裂いたあの金

色の鎧の事を」

ガロの鎧を見られた流牙は腹をくくり、魔戒騎士の事について話すことにした。

「織田さん、まず……」

「久遠でよい、流牙」

「……分かった、久遠。まず俺がこことは別の世界から来て、使命があるって言ったよな？」

「ああ、言ってたな」

「その使命はさっきの化け物みたいな邪悪な存在から人々を守るってことなんだ」

「何だと……!?!」

流牙の使命に眉をひそめる久遠、他の三人はその話をあまり聞いていなかったので疑問符を浮かべる。

「その名は魔獣・ホラー。人に憑依し、人を喰らう邪悪なる存在。古よりホラーから人々を守るのがホラーを切り、封印する力を持つ武器で戦う俺たち魔戒騎士とそれを支える数多の術を使う魔戒法師の使命なんだ」

「なるほど、流牙以外にもそのホラーと呼ばれる化け物を退治する者達が沢山いるのか。魔戒騎士と魔戒法師か……にわかには信じられないが、先ほどの戦いや金色の鎧を目の当たりにしたら信じるしかないな」

「ちよつと久遠、こいつの言うことを信じるの?」

結菜はジト目で流牙を睨みつけて信じられぬと言った表情をする。

「結菜よ、お前は見てないからそう言えるが流牙の戦いは見事だった。人と言うよりも最初から化け物と戦うことを目的とした見事な剣技、そして闇夜を照らすかの如く輝く現れた黄金の鎧。私はあの時、神か仏の化身が現れたのかと思ったぞ」

「本当なの? 壬月、麦穂」

「ええ。久遠様の仰る通りです」

「特に黄金の鎧はとても美しく、素晴らしいものでしたわ」

「そうなの……ねえ、流牙。今ここでその鎧を出しなさいよ」

「ダメだ。ガ口の鎧は誰かに見せびらかすものじゃない。ガ口の称号を受け継いできた英霊達と多くの人の思いが込められ、ホラーから人々を守るためのものだ」

「ケチね……」

「ほう、あの鎧はガ口と呼ぶのか?」

「ああ。それが俺が受け継いだ魔戒騎士の鎧の名だ」

『ただの鎧じゃないぜ。黄金騎士ガ口は数ある魔戒騎士の中で最高位にして伝説と崇められた最強の称号だ』

ザルバが少し自慢するように話すと久遠は目を輝かせてテンションを上げた。

「さ、最高位で最強だ?! おおっ! やはり我の目に狂いはなかった! しかし、流牙。これからどうするつもりだ? またこの国から出ていくのか?」

「俺は……」

久遠の問いに流牙は迷った。

少し前までは元の世界に帰る方法を探そうとしていたが、この世界には鬼と言うホラーと大差ない邪悪な存在がいる。

魔戒騎士として、黄金騎士としての使命を持つ流牙は大きな選択が迫られていたがザルバが静かに話す。

『流牙。お前の好きにしろ』

「ザルバ?」

『分かってる。優しいお前の事だ、この国に蔓延る鬼から人々を守りたいんじゃないか?』

魔戒騎士の中でも特に優しい心を持つ流牙の事をよく知るザルバは流牙の思いを汲み取り、背中を押してあげた。

「……ああ。少なくとも鬼の元凶をこの手で討つ。守りし者として戦う……」

この世界に残り、鬼の元凶を討つ覚悟を決めた流牙に久遠は立ち上がって声を上げた。

「よし！人々を守る為に己の身を呈するその心意気、見事！流牙よ、お前に新たな提案を
するぞー！」

「えっ!?!久遠!?!ここ、今度は何!?!」

「流牙、お前は表向きは我の夫として男の魔除けになってもらう。だが、裏ではお前は鬼
を斬る、または元の世界に帰る方法を探すなど好きに行動しろ。もちろん、衣食住は確
保しよう。そして約束する、お前を戦には出さない、人を殺させない」

それは守りし者である流牙にとつて最上級の条件だったが、どうして久遠がそこまで
してくれるのか流牙には分からなかった。

「どうしてそこまで……」

「鬼を専門とする者が居てくれば少なくとも現状よりはるかに犠牲になる民は少なくな
る。それからこれは個人的な話だが、お前を気に入った、お前の事をもっと知りたいと
思ったのだ」

好奇心からの考えか、それともまた別の感情による考えか……流牙は迷いに迷い、考
えた末に静かに頷いて答えを出した。

「分かった……了承するよ。よろしくな、久遠」

「ああ、こちらこそよろしくな。流牙。さて、壬月、麦穂。今日は下がれ。苦勞であつた。
明日の評定で会おう」

「はっ」

話は一旦終わりとなり、久遠は二人を帰らした。

「結菜、今日はもう終わりだ」

「わかったわよ。でも私はこの男をまだ信じたわけではないから」

「うむ、流牙。すまん、明日までゆっくり休んでくれ」

「ああ、わかった。おやすみ」

流牙は元いた部屋で再び横になった。

今日は色々な事がありすぎたのでまた布団の中ですぐに眠ってしまった。

☆

翌朝、流牙は久遠と結菜と共に城に向かい、評定で織田家の家中が揃う前で流牙を夫にするお披露目が行われたのだが……。

「うーん……どうしてこうなった……？」

案の定、反対の声が多く武闘派が多いので流牙は立会いをしてその実力を認めてもらうことになった。

ようするに強ければ問題ないと言う無茶苦茶な答えでもある。

流牙は大きく溜息を吐きながら自分の置かれた状況に頭を悩ませた。

「あくまで模擬戦と考えるしかないよな……」

頭痛を感じながら城から久遠の屋敷に戻ると既に試合の準備が整っていた。

「まあ、精々頑張れば良いんじゃない？」

「棘のある応援だね……」

「当たり前でしょ？」

未だに流牙を認めてない帰蝶に苦笑を浮かべながら息を吐く。

「今はやれることをやるしかないよな。とりあえず見ていてよ」

「ええ。しつかり見せてもらおうわ」

「うーん、帰蝶さんのこの感じ、どこかで感じたことのある感覚だな……」

「何か言った？」

「いや別に」

試合会場の準備が整い、流牙はまず赤い髪をした少女と対峙する。

「両者、位置につけ！」

「謝るなら今のうちだぞ！」

「俺、君に何かしたつけ？」

「ボクに勝てる訳ないからに決まってるだろ！黒母衣衆筆頭、人呼んで織田の特攻隊長。

佐々内蔵助和奏政！」

「じゃあ和奏ちゃんって呼ぶね」

「てめえにちゃんって呼ばれたくないよ！」

「さて。それじゃあ俺もそれらしく名乗るかな……」

流牙は魔法衣の内側から牙狼剣を取り出し、鞘に施された三角形の形をしたガロの紋章を見せながら名乗る。

「俺は守りし者。魔戒騎士、道外流牙!!」

「なーにが守りし者だ!とつとと片付けてやるよ!おい猿!ボクの槍を持ってこい!」

「は、はいいいい〜!」

猿と呼ばれた少女は不思議な形と構造をした槍を持ってきた。

「この槍は国友一貫斎のカラクリ鉄砲槍だ!」

「槍に鉄砲?へえー、面白い組み合わせの武器だね」

流牙は特に驚くことなく牙狼剣を自分の前に持っていく。

「では尋常に始め!」

「一発で仕留めてやる!そりゃー……っ!」

槍先から放たれた弾丸が流牙に向かって飛ぶが、

キン!

流牙は牙狼剣を鞘から抜刀すると同時に弾を真つ二つに斬り、再び鞘に納めた。

僅か一秒にも満たない時間でのあまりにも素早い動作だった。

「はあっ?! た、弾を斬ったあっ?!」

対峙した和奏のみならず観戦していた久遠達も驚いていた。

銃弾に対して回避や防御で防ぐならともかく、その場で全く動かずに剣で斬ったと言う驚くべきことを平気でやる流牙に和奏は信じられないと言った表情を浮かべていた。

「くそおっ! すぐにもう一発撃ってやる!」

和奏は槍の穂先を覗き込んで棒のようなもので掃除をしていた。

何をしているんだ? と流牙は思いながら近づき、鞆に収められたままの牙狼剣を軽く振り上げた。

「えいつ」

「痛っ!?!」

流牙は鞆で軽く和奏の頭を叩き、手に持っていた道具が溢れた。

「あああ! 玉葉が溢れた!?! 何するんだよ!」

「もうこれで銃は撃てないし、それに今俺が本気で殴ってたら和奏ちゃんは負けてたよ?」

「ぐぬぬ!?! 卑怯だぞ!」

「卑怯って何処が?」

和奏の槍の連続突きを流牙は牙狼剣を抜かずに捌いていく。

確かに強いことは強いが、まだ荒削りで流牙にとって和奏の攻撃は武人としての力が籠っていない。

「そらあああああ！」

渾身の突きを大きく弾き、流牙は一瞬で和奏の間合いに入って右拳を作る。

「甘いよ」

そして、流牙の右拳が和奏の腹部に狙いを定めた。

「はあっ！」

「ひいつ!? つて、あれ……?」

和奏は流牙の拳が腹部にめり込むと思っていたが、右拳は腹部に触れるだけで力も込められておらず、めり込んでもいなかった。

「これで俺が本気の一撃を与えれば和奏ちゃんも倒れてるね。久遠、俺の勝ちでいいね？」

「うむ！ 良い手際なり！」

「お、お前！ どうして！」

本気で殴らなかつた流牙に対し、理解出来なかつた和奏は尋ねると流牙は笑みを浮かべて答えた。

「俺は守りし者。この力は人を傷つけるものじゃないからね」

「守りし者……」

「それに、和奏ちゃんみたいな可愛い女の子に手荒な真似はできないからね」

「ばっ!?!な、何言ってるんだてめえは!!」

顔を真っ赤にする和奏の次に流牙と戦うのはのんびりとした感じをした青色の髪をした女の子だった。

「次は雛の番だねー。……でも和奏ちゃんが負けたのに雛が勝てるとは思えないんですけどー」

「グダグダ言つとらんで、さっさと仕合えい!」

「ぶー……相変わらず怖いですよ、壬月さまー」

「次は君か」

「はいはいー。和奏ちんとの立ち合いは見せて頂きましたよー。なかなかつよいですね、お兄さん」

「幼い頃から鍛えてからね」

「普通だったら負けるかなーと思うんで、雛、ちよつとだけ本気を出しちやいますね」

そう言いながら雛は二本の小太刀を構える。

小太刀はリーチが短いがその分早く動かせて防御も固い。

どう仕掛けるのかと流牙は考えると雛の周囲に白い霧が発生する。

次の瞬間、雛の姿が消えた。

「っ!?後ろか!」

背後から殺気を感じた流牙は牙狼剣を後ろに持って行き、背後から現れた雛の二本の小太刀を防ぐ。

「ありやー、外したかあ……」

「何だ、これは……」

「んじゃ、もういつちよ行くよー!」

「……そこか!」

再び姿を消した雛の気配を察し、小太刀を避ける流牙。

「普通の動きじゃないな……何だい、それは?」

「これが滝川家お家流、頑張って足を動かせば、速く動く事ができるの術!」

「何その壊滅的なネーミングセンスは!」

「阿呆。滝川家お家流。蒼燕瞬歩、だ」

「ふふふ、それでーす」

「それぞれの家門に伝わる秘技だとも思っておけ」

「なるほど……魔戒騎士の鎧みたいなものか」

魔戒騎士の鎧は一子相伝で代々受け継がれてきたもので妙な親近感がある。

ちなみに流牙のガ口の鎧は一度その鎧を継承する系譜が途切れてしまっていたが、ガ口の鎧に認められて継承する事が出来た。

「じゃあもう一回いくよー!」

「……見えない相手にどうする流牙」

「速い……目では捉えられないか……」

流牙は目を静かに閉じ、両腕を下ろして自然体となる。

「おや? 諦めたの? でも雛は手加減しないからね。流牙君、お覚悟ーーー!!」

雛は更に速度を高めて流牙の背後から襲いかかる。

「……はっ!」

「えっ!? うわあ〜!」

背後から攻撃してきた雛の手を掴み、そのまま背負い投げをして組み倒した。

「あう〜!」

「はい、俺の勝ち」

魔戒剣の鞘で雛の頭をコツンと叩き、流牙の二連勝となった。

「ふむ……姿が見えない相手によくぞ勝てたな。……どうして分かった?」

久遠は流牙が雛を捉えることが出来た理由を聞いた。

「音だよ」

「音?」

流牙は自分の耳を軽く指で叩きながら言う。

「いくら速く動いても走るから地面を蹴っているだろ?俺、耳がいいから雛ちゃんが攻撃する時の音を聞き分けていたんだ。それに殺気が分かりやすいし」

「何と……:どうやら流牙は常人よりもかなり耳がいいらしいな。何か特別な訓練でも受けたのか?」

「うーん、耳に関しては生まれつきかな?俺、物に込められた声を聴き取る能力があるから」

「物に込められた声を聴き取る?何だそれは!後で詳しく聞かせてくれ!」

「分かった。それで三人目は誰?」

「ほう。余裕だな」

「まだまだいけるよ」

「それは頼もしいな」

「じゃあ次は犬子の出番!良いですか、久遠さま!」

三若の三人目、人一倍元気な印象のある女の子が出てきた。

「許す。存分にやれい!」

「やった!へへっ、赤母衣衆筆頭、前田又左衛門利家!通称犬子が流牙殿のお相手をいた

しまーす！」

「随分元気な子だね。それじゃあ犬子ちゃん、よろしく頼むよ」

「では両者構え！始め！」

一分後……。

流牙は特に苦勞することなく今まで通り痛手を与えず、犬子に勝利した。

「きゆうううう……」

「勝者、道外流牙！」

「これで三連勝だね」

「三人抜きか。……やるとは思っていたが、なかなかどうして。強いな流牙」

魔戒騎士になるべく長年無人島で修行の日々を送り、ホラーを狩るべく流浪の旅をしてきた流牙の強さは黄金騎士の名に相応しい存在となつてゐる。

少なくともこの三連戦で流牙は本気の一割か二割程度の力しか出してゐない。

三若に対し圧倒的過ぎる力を見せつける流牙に久遠は上機嫌となる。

「これぐらい強くないとホラーを……鬼を狩ることなんて出来ないからね」

残るは麦穂と壬月の戦いが流牙に待ち受けるのだった。

『世 ~J i d a i ~』

流牙の実力を試すために三若との戦いが終わり、次に待ち受けていたのは織田家家老の一人、麦穂だった。

「次は麦穂さんね……」

流牙は今までの三人よりも警戒して牙狼剣を構える。

「ふむ……一見して麦穂の技量を見抜くか」

「お優しい顔して、麦穂さまはお強いでもんねー。雖、一度も勝ったことないですし」

「麦穂さま、ボクの仇、頼みますよー！」

「犬子のもついでによろしくですー！」

外野の応援に笑みを浮かべた後すぐに流牙に向けて真剣な顔に戻る。

静かな時が流れ、決して自分から動かない流牙は鞘に収められた牙狼剣を構えながら麦穂の出方を待つ。

「やあー！」

そして、麦穂から先に動き、一気に間合いを詰めて流れるような突きを放った。

流牙は冷静に麦穂の動きを見て牙狼剣で捌き、スピードを上げて振るうがあつさり

麦穂の刀に受け止められてしまった。

「その攻撃は読んでいましたよ」

そう言われ、流牙は試しにフェイントや様々な起動を描く剣閃を放つが、それすらも麦穂には通用しなかった。

「動きを読まれている……?」

「いくつもの可能性を考え、その備える。……私の得意とすることです」

「なるほどな。それならこれで行くしかないな」

流牙は動きを読まれていると知ると、牙狼剣を鞘ごと地面に突き刺さすと左右の手を交差し、右の拳を後ろに引いて左掌を前に出す構えを取る。

「何のつもりですか……? 剣を無しに私に勝つつもりですか?」

「動きを読まれているならそれよりも速く、予想しづらい体術の攻撃を繰り出すだけだ。それに……俺の尊敬したある男は剣で戦わなくても体術でとても強かったから!!」

流牙は地を蹴ると同時に蹴りを中心とした体術を繰り出す。

麦穂の剣の攻撃は両手で捌き、時に放たれる強力な拳の一撃に今度は麦穂が追い詰められていく。

そして、拳の一撃に集中していた麦穂に流牙は刀を持っている手を思いつきり蹴り上げて刀を手放してしまった。

「せいっ!!」

「しまっー」

「はあっ!!!」

流牙の渾身の拳が麦穂の顔を捉えるが、本気で殴れるわけがなく麦穂の直前で拳は止まる。

「ひゃん!?!」

しかし、反射的に下がってしまった麦穂は足を崩してそのまま尻餅をついてしまった。

流牙は一息をついて自分の勝ちを宣言しようとしたが、

「……グスンッ」

麦穂は目尻に涙を浮かべ、涙を流してしまった。

「えええええっ!?!む、麦穂さん!?!」

まさかの涙を流すという事態に流牙は慌てふためき、周りからはブーイングの嵐が巻き起こる。

「うわあああああ!?!こいつサイテーだああー!」

「ひどい男の人ですねー。麦穂さんをなかせてしまうなんて」

「女の敵ー!最低ですー!麦穂様に謝るですー!」

「ええっ!? お、俺が悪いの!? ちゃんと手加減したのに!？」

「酷いです流牙殿。和奏ちゃん達にはあんなに優しくしていたのに私だけ強く蹴るなんて……手が痛いですよ……」

「ごめんなさいごめんなさい! だって麦穂さんは強いし動きを予測されるからあれぐらしいしいといけなかつたし……」

「責任とつてもらいますからね……」

「ああああ……あの、俺に出来ることがあれば何でもするから泣かないでください……」
「本当に?」

「約束しますよ」

「なら。許してあげます」

涙をゴシゴシと拭い、麦穂さんはどこか名残惜しそうにその場をはなれた。

「ふむ……四人抜きか。これで皆も流牙の力を認めざるを得んな。……なあ壬月よ」

「さてそれはどうでしょうな。……おい猿! 私の得物を寄越せ」

「はい! ただいまあー!」

少女は元氣よく挨拶をすると大きな大八車を持つてきた。

そして……そこには、見た事も聞いた事もない、大きな斧が乗っていた。

壬月はその斧を簡単に持ち上げた。

「うわあ……これは大きいなあ」

「あまり驚いてないようだな」

「まあその斧よりも更に馬鹿でかい武器を持つ奴と戦ったことがあるからね……」

「なるほどな。これは我が柴田家の家宝、金剛罰斧だ……では参るぞ。小僧！」

壬月は全身から赤い気を放ち、それが斧にまで纏われていく。

「おおおおおおおおお!!!」

振り下ろされた斧が流牙に襲いかかり、衝撃波と共に土煙が舞う。

「ふむ……五割の力でのびてしま……」

「ぐうっ!!!」

「なっ!?!」

流牙は斧が振り下ろされる前に牙狼剣を抜き、その細身の刃で壬月の斧を受け止めていた。

「嘘おっ!?!」

「壬月様の五臓六腑を……」

「受け止めたあっ!?!」

三若は声に出して驚いていたが、久遠達も壬月の斧を受け止められるとは夢にも思わず、驚きすぎて声が出なかった。

「はっ……まさかそんな細身の剣で受け止めるとはな……ならば、ここからは力比べだ!!」

先ほど五割程度の力を出してないと言っていた壬月は笑みを浮かべ、更に力を出しながら流牙を押しつぶそうとする。

剛腕と剛斧と言う力の組み合わせによる圧倒的なパワーを見せつけるが、流牙は諦めてはいなかった。

「うおお……うおおおおおおおおおおお……っ!!!」

流牙は全身に力を込め、怒号と共に壬月のとんでもない重量と大きさを持つ剛斧を弾き返した。

「うおっ!?!」

「はあああああ……っ!!!」

そして、流牙は流れるような動作で牙狼剣を持ちながら手を強く握りしめて拳を作り、鋭い拳を突き上げた。

しかし、流牙の拳は壬月の腹で止まり、痛手を与えることはなかった。

「はあ、はあ……これで、俺の勝ちだ……!」

決して流牙は五人を相手にしても全く傷つけずに拳を直前で止めていた。

守りし者として、人を守るその強い意志に壬月は少し呆れたような笑みをする。

「まさかここまでとはな……私の負けだ」

「ありがとうございます、壬月さん……」

「呼び捨てで構わん。流牙よ」

壬月は手を差し伸べて流牙に向けて笑みを浮かべる。

「ああ……壬月」

流牙と壬月は互いを健闘し、固い握手を交わした。

「嘘……織田の武将達を相手に全勝利……？」

流牙の全勝利に家臣一同はその力を認めたが、帰蝶だけは違った。

「でも、まだ認めてあげない……」

「そうか。……ならば仕方ない。もともと、お前自身の目で見て確かめるといふ約束だったからな。好きにせい」

帰蝶はこくりと頷くと和奏はあることを尋ねる。

「でも殿ー。流牙を夫にするって本気なんですか？」

「本気だ。……が、何か懸念でもあるのか？」

「いや、いくら他家からの政略結婚の申し込みを袖にするためとはいえ、殿可愛いから流牙が変な気を起こすんじゃないかなーって」

「そうなればなったで、本当の意味で夫にやってやっても良い。その覚悟はあるぞ」

流牙を気に入っている久遠は流牙と本当に結婚して夫婦になる覚悟を持っていると言ったが……。

「心配しなくて大丈夫だよ、久遠。俺、君を抱くつもりは絶対に無いから」

その瞬間、この場が氷のように冷たい空気が流れて凍結した。

「……………え？」

「……………はっ？」

流牙の言葉に久遠だけでなく帰蝶や家臣一同驚愕していた。

そうとは知らず流牙は自分の気持ちを正直に話す。

「久遠は確かにとつても可愛いけど、俺としてはちゃんとお互いを思いやり、全てを受け入れる覚悟を持ち、愛してからこそその結婚だと思ふからさ。久遠に対してそういうやましい気持ちを持つ事は決して無いよ。それに、子供のことを考えると、親として責任を

持つてちゃんと二人一緒にその子を愛せるようになりたいからね！」

微笑みながら言う流牙の言葉に全員が言葉を決した。

まさか流牙がこんなことを言うとは思ってもみなかった様子でそんなことをつゆ知らず流牙は牙狼剣を魔法衣の中にしまうと体をぐいと伸ばす。

「さーて。とりあえずみんなに認めてもらったし、早速鬼の情報収集と行くかな。じゃあ、お昼頃には帰ってくるから行ってきまーす！」

流牙は軽く手を振り、その場から風のように素早い動きで立ち去り、鬼の情報収集に出掛けてしまった。

「……結菜よ」

「何……？」

「今時あんな恥ずかしい台詞を言う男を見たことあるか？」

「無いわね……」

「少なくとも、我より年上で二十歳はすぎているよな？」

「多分そうだと思うけど……でも、あいつ昨日私の料理を食べて子供のように目を輝かせていたわ」

「……あれほどの強い力を持ちながらいったいどんな幼少期を過ごしたらあんな純粋な心を残せるのだ？」

「知らないわよ……」

織田家の家臣達を倒した強さを持つ流牙の意外な一面に頭を悩ます久遠と帰蝶だった。

☆

流牙は城下町の人から鬼に関しての情報を聞き、その後は山に入って動物とは違う痕跡が無いか調べるがなかなか有力な情報は得られていない。

ザルバに邪気を探知してもらっているが、あまり成果はなかった。

ひとまずお昼になったので久遠の屋敷に戻るとそこには久遠の側で武器などを運んでいた少女が帰蝶と共に待っていた。

「あの私！木下藤吉郎ひよ子秀吉と言います！お殿様より流牙様のお世話を命じられました！今後ともよろしくお願いします！」

少女の名は木下藤吉郎、通称ひよ子。

親しい者の間ではひよと呼ばれており、武士になりたくて久遠の雑用係となり、今回の事で流牙の従者へと命じられた。

久遠は流牙を中心に据えた部隊を作ろうとしているらしく、自分のいないところで話がどんどん進み、苦笑いを浮かべた。

「あ、あの……お頭、よろしくお願いします！」

「まさか俺が部下を持つことになるとはな……とりあえずよろしくね」

「はー」

流牙が戻ったら城に來いと久遠に呼ばれているので流牙はひよと一緒に城に向かう。

その間、人懐っこい流牙はひよ子と色々な話をした。

ひよ子の夢は出世して妹を取り立てて一緒に太平の世を築くことや仲良しの幼馴染が野武士を束ねる頭領など。

話をしているうちに城に到着すると、中の人たちが慌ただしい動きをしていた。

途中で会った和奏の話によると、隣国の美濃に放っていた草から急報があったらしい。

今から評定が行われ、久遠の夫である流牙も参加する事となった。

ひよ子は身分の違いから参加出来ないが、この世界や時代のことを何も知らない流牙は和奏に頼んで久遠にひよ子も一緒に参加させることを頼んでもらった。

そして緊張感が漂う中で始まった評定だが、何を言っているのか流牙にはチンプンカンプンでひよ子のサポートを受けながら少しずつ理解していく。

ひとまず、戦のために黒俣と呼ばれる場所に城を建てる事が重要となる。

「戦か……」

流牙のいた世界では人間同士が争うこの時代の戦はほとんど無くなっていたが、いざ

自分もその戦に関わることになり、不思議な感情があった。

何故人は争うのか？何のために武器を持って殺しあうのか？その先に明るい未来があるのか？

そんな考えが頭の中に過る。

その後も評定は続いたが結局いい案が見つからず、続きは明日となった。

久遠の屋敷に戻った流牙は庭を眺めながらぼーっとし、様子がおかしいと思ったひよ子は恐る恐る話しかける。

「お頭、どうしたんですか？」

「なあ、ひよ。この国の大名達は日の本を統一するために戦っているんだよな？」

「え、ええ。そうですけど……」

「大名だけでなく多くの武士達は名を上げて手柄を上げ、そして隙あらば下剋上をして自分が上に立つ……その繰り返しでどれだけの血が流れているんだろうな……」

「確かお頭は天の国から来たんですよね？天の国は平和ですか？」

「天の国じゃないけど、俺のいた世界はここと比べると比較的平和だったかな？」

ホラーという人類に対する恐怖はあるが、それでも今のこの世界に比べればまだ平和な方だ。

ひよ子は少し暗い表情をしながらこの世界の現状を簡単に話す。

「この日の本は治めていた幕府も力を失い、国同士で天下統一を目指してあちこちで勢力争いが生まれてきたのです……お頭の言う通り数え切れないほどの血が今でも流れています。時代……というものだと思います」

「時代、か……」

人間の歴史は平和と戦争の繰り返しだ。

今まさに戦争の時代という事だ。

しかしそれでもこの世界の人間は懸命に生きている。

流牙の目の前にいるひよもその一人だ。

「でも、私はいつか絶対にこの日の本が平和な国になると信じています！その為に今を強く生き、久遠様達と共に戦うしかないのです！」

「……強いな、ひよは」

流牙は健気なひよ子に感心しつつ、父性みたいなものが目覚めたのかひよ子の頭を撫でた。

「ふえっ?!いい、いえとんでもありません!ですが、私達はこれからどうしたら……」

「……ひよ、俺はある目的の為に人を斬ることは出来ない。久遠にも認められているが、戦には参加出来ないんだ」

「ええっ?!じゃあ……」

「だから、ひよが俺の代わりに戦場に立って功をあげるんだ。本当はダメだけど、今の俺には助言しか出来ない。まずは地図を用意して！」

「は、はい！ただいま！」

ひよはすぐに戦場となる美濃周辺の地図を流牙に見せた。

そこは幾つもの川が流れておるが、流牙の知っている地図とは違って情報が少なすぎるので更に頭を悩ませる。

「これが戦場となる地図か……それでこの黒俣に城を建てるね……どうしたら……」

チリーン……。

「ザルバ？」

ザルバからの呼び出しでカバーを開いた。

『流牙。お前に一つアドバイスをしてやる』

「おおっ！これが噂の話す指輪さんですか……！」

話す指輪に興味津々のひよ子に対し、流牙は呆れ顔をして話を聞く。

「何だよ急に……」

『お前のその名前と同じようにどんな物事にも流れと言うものが存在する。その流れを掴んでこそ人はさらなる成長を遂げる』

「流れね……」

流れと言われ、流牙は黒俣の側に流れている長良川を眺めた。

頭の中で川の流れを想像すると流牙に一つのアイデアが浮かんだ。

「あ、そうか。この手があった」

「流牙様、何か思いついたんですか!？」

「ああ。まだ不確定な要素があるけど、上手くいくかどうかはひよと君の幼馴染にかかっているね」

「え!? 私とこころちゃんですか!？」

流牙の思いついた作戦はこうだ。

先ほど言っていたひよの幼馴染、野武士達の頭領である……蜂須賀小六転子正勝に協力を依頼し、黒俣の側にある長良川の上流で予め城の部品などを作成して下準備をする。

その後、部品を持って川を下り、一気に黒俣に入って城を組み上げるといふ作戦だ。

ちなみに織田の軍を使うと敵側に警戒される恐れがあるのであえて野武士達に依頼をする。

初めての築城のやり方にひよは絶賛するが、これには転子達野武士の協力や久遠に費用の工面や城を組み立てる間の困役などをお願いしなければならない。

「やっ……行くよ、ひよ。」

「はい！お頭！」

流牙はひよと共に出掛け、早速行動に移すのだった。

魔戒騎士としての使命や掟……それに縛られながらも流牙はこの世界で生き残る為に自分に出来ることをするつもりだ。

それが、この世界から鬼を全て倒し、元の世界に戻る為の第一歩だと信じて。

『心 ~Legend~』

流牙はひよ子の幼馴染で野武士達をまとめる棟梁をしている転子の元へ向かった。

ひよ子と転子は久しぶりの再会に喜び合い、流牙を紹介したが、久遠の夫という立場とあつて転子は慌てて跪こうとしたが流牙はそれを止めた。

名義上は流牙は久遠の夫だか、あくまで協力関係を築いているだけで、更には流牙の性格上年下の者でも共に戦う『仲間』として考えている。

ひとまず転子に先ほど考えた作戦の協力を要請すると、画期的な方法に関心した。

しかし、それには準備と報酬でかなりの銭が必要になる。

こればかりは久遠に頼むしかないので流牙が頭を下げるしかなかった。

転子は依頼を了承し、城に戻る際に流牙は銭の計算をどうしようかと思いつくとひよ子は空を睨みながら指折り数えていた。

ひよ子は計算が得意であつと言う間に計算が完了してしまい、流牙はこの部隊のお金の計算をひよ子に全て任せる事にした。

流牙とひよ子は城に戻り、難しい顔をしていた久遠に早速今回の作戦の内容と銭の予算を説明した。

明日の評定までに何か策が決まればいいと思っていたので、流牙の画期的な方法にとっても関心していた。

銭と囀の件も了承し、そして最後に流牙は転子を士官として認めてくれるよう頼んだ。

ひよ子だけでは本人はとて不安がると思い、共に動いてくれる信頼できる仲間を得るためだ。

久遠は了承したが、あくまで面倒は流牙が見る事になったが仕方ないと思いい流牙もそれを了承した。

「銭は用意させる。……頼むぞ流牙」

「ああ。戦には出られないが、準備とかは手伝うよ」

久遠に資金援助を取り付けた後、流牙達はすぐに仕事に取り掛かった。

流牙は野武士達と共に力仕事を手伝い、そして鬼がいなかどうか注意深く調査をしていた。

そして、時が流れて決行の日。

城の作業は指揮はひよ子と転子に任せ、とても心苦しかったが流牙は戦場を見渡せる場所まで戦を見守っていた。

「これが……戦か……」

刀と刀がぶつかり合い、鉄砲が鳴り響き、悲鳴が聞こえる……人と人とで互いに争い、殺しあうその光景は流牙にとって初めて見るものだった。

なぜ人は争うのか……守りし者として戦い続けてきた流牙は悲しい気持ちになった。

耳の良い流牙は聞こえる戦いの声に心を酷く痛め、胸を強く握りしめるとカバーを開けていたザルバから信じられない言葉が響く。

『流牙！ 鬼の気配がする、どうやら戦場に現れたらしい！』

戦場から鬼の邪悪な気配が現われ、目を凝らして見るとあちこちに鬼が現れて織田と美濃勢を関係なしに攻撃し始める。

「鬼が!? だけど……」

鬼が出たとはいえ、今出て行けば流牙はこの戦に参加するという事となる。

人を殺さないようにしてもそれは人間同士争いに介入することを許さない魔戒騎士の掟に反する事になる。

ザルバは迷っている流牙に『友』として投げかける。

『流牙。確かにこれは人間の愚かな争いかもしれない。だが、お前は何者だ?』

「ザルバ……」

『お前は何のために戦う? その称号を背負う者の心には何が宿る!』

ザルバに問われ、流牙は目を閉じてその問いを答える。

「……決まっているじゃないかザルバ。俺は守りし者。魔戒騎士にして黄金騎士の称号を受け継ぐ者として、人々をホラーから守り続ける。そして……これからもこの力で闇を照らす希望の光になる為に!!」

『そうだ。ならば迷う事なく己の道を進むんだ、流牙!』

「ああ。ありがとう、ザルバ!」

覚悟を決めた流牙は魔法衣から牙狼剣を取り出し、走り出して風のように大地をかける。

守りし者として、魔戒騎士として……そして、黄金騎士ガ口の称号を受け継ぐ者として人々を守り、鬼と戦う為に!

「はあああああつ!」

流牙は自分の部下であるひよ子と共に動いてくれた転子を助けに向かう。

戦場に降り立った流牙は襲ってくる敵の兵の攻撃をかわしながら城の近くに現れた鬼を牙狼剣で切り裂いていく。

「ひよ、ころろ!無事か!?!」

「お、お頭!?!」

「流牙様!?!」

「鬼は任せろ。それが俺の、魔戒騎士の勤めだ!!」

流牙は牙狼剣を構え、最初から全力で鬼を狩る。

鬼の主力武器である両手の爪を使わせないように手を切り落とし、人間と同じく頭や心臓などの急所を狙って牙狼剣を突き刺し、斬り裂いて倒す。

城の前に現れた鬼を一掃するとひよ子と転子が流牙に近づく。

「すごい……お頭！ありがとうございます！」

「お陰で助かりました！」

「ひよ、ころ。俺は久遠達の方にいる鬼を切る。君たちは自分のなすべきことをするんだ。最後まで諦めるな！」

「はい!!」

流牙はその場を後にし、次は久遠達の元へ走った。

その際、敵国の兵士達が襲いかかってきたり、矢で狙われたりした。

しかし、流牙はかなり手加減しながら兵士を殴り飛ばしたり、軽やかな動きで矢を回避して止まることなく走り続ける。

☆

「くっ！まさかこの大事な戦の時に鬼が現れるとは……！」

「久遠様、おさがり下さい！」

久遠と麦穂のところにて二体の鬼が現れ、久遠を守るために麦穂が戦っている。

「久遠——っ!! 麦穂さ——んっ!!」

流牙はザルバの案内へ久遠と麦穂の元に行き、牙狼剣を鞘に収めると鞘に施された二つの仕込み刃が十字の形に展開する。

「流牙!」

「流牙さん!」

「うおおおおおっ!!」

そして、体を横に回転しながら牙狼剣を振るうと仕込み刃が鞘から外れて手裏剣のように鋭く飛び、久遠に襲いかかろうとしている二体の鬼の顔に突き刺さった。

顔に仕込み刃が突き刺さった事で悶え苦しむ鬼に対し、流牙は牙狼剣を再び鞘から抜き、鬼の顔や心臓部を斬り裂いて倒し、鬼は消滅して仕込み刃が地面に落ちる。

「久遠、大丈夫か!」

「あ、ああ。だが流牙、どうして戦場に! 流牙は戦場に出ない約束を……」

「鬼を切るのが俺の使命だ。久遠、お前達は自分のなすべきことに集中するんだ」

流牙が守りし者として共に戦ってくれることを嬉しく思い、久遠は強く頷いた。

「流牙……! 頼むぞ、この先の前線にいる鬼を切ってくれ!」

「流牙さん、気をつけてください」

「任せてくれ!」

地面に転がる二枚の仕込み刃を回収すると流牙は再び走り出し、前線にいる鬼の元へ向かう。

そして、その頼りになる夫の後ろ姿に久遠の心が熱くなり鬼の乱入に恐れていた織田軍に向けて声援を送る。

「織田の勇士達よ、鬼を恐れるな！鬼は我が夫、流牙が全て切り裂く!! さあ、我らの戦いを突き進むのだ!!」

久遠の言葉に織田軍の兵士達は声を上げて突撃する。

一方、前線にいた和奏、雛、犬子の三人は突然現れた鬼と戦っていたが苦戦していた。

「くっ！鬼が邪魔だあ！」

「もう、こんなのを相手にしている暇は無いのにくー！」

「こんなところで負けるわけにはいかないよ！」

「三人共、下がれえええええっ!!」

流牙は戦場を疾風の如く駆け抜け、大ジャンプをして和奏達の前に降り立つ。

「流牙あ!!」

「流牙君!!」

「流牙様!!」

自分達の前に颯爽と現れた流牙に三人は驚き、ザルバはこの場にいる十体近くの鬼を

見て口を開いた。

『どうやら鬼はここに集中しているようだ。ここは特に血肉の匂いが漂っているからな』

「和奏ちゃん！雛ちゃん！犬子ちゃん！そこで待っている！」

「ま、待っている……」

「和奏ちゃん、ここは流牙君に任せの方がいいかもよ？」

「流牙さまー！お願いしますー！」

二人は鬼を流牙に任せて下がると流牙は鬼を睨みつけながら牙狼剣を構える。

『流牙、さっき言った通りに派手に名乗れよ！』

「ちよつと恥ずかしいけど、やるしかないよな！」

流牙は苦笑を浮かべてからすぐにキリツと真剣な表情をすると、戦場に響き渡るような大声で告げる。

「この国に蔓延る邪悪なる者達よ……聞け、そして慄け！」

ロングコートである黒の魔法衣を翻し、鞆に納められた牙狼剣の柄を右手で握りしめる。

「織田家当主・織田久遠が夫にして、貴様ら鬼を殲滅せし力を持つ者！」

流牙は牙狼剣を勢いよく鞆から引き抜いた。

魔を切り裂き、白銀に輝くその刃を太陽の光に反射させながら天に高く掲げ、己の名と受け継いだ称号の名を轟かせる。

「俺は魔戒騎士、道外流牙!!黄金騎士ガ口の称号を受け継ぐ者!!」

名乗りを告げた流牙は天に掲げた牙狼剣で円を描いて光の輪が浮かび上がらせ、魔界に眠るガ口の鎧を呼び出す。

光の輪から金色に輝くガ口の鎧が召還され、一瞬で流牙の体に装着される。

闇を照らす希望の光、黄金騎士ガ口……今、戦乱渦巻く戦国の戦地に降臨した。

大剣となった牙狼剣を構え、獲物を狙う狼の如く鋭い橙色の瞳が鬼達を睨みつける。

「「ええーっ?!?!」」

ガ口の鎧を纏った流牙に和奏達は戦場に響き渡る程の驚愕の叫び声を上げた。

「な、何だこれえっ!!」

「これには雛もびっくり……!」

「き、金色の狼……かつこいいい!」

流牙は和奏達の言葉をとりあえず無視し。地を蹴って牙狼剣を振り上げる。

「はあああああ!!」

振り下ろされた牙狼剣で鬼を一刀両断し、十体近くいた鬼を瞬殺した。

和奏達が手こずった鬼を瞬殺した事で流牙の本気を知り、その強さに感動した。

しかし、鬼が討滅されて喜ぶのも束の間だった。

『流牙！また新しい鬼の気配だ！』

「何!?!」

今度は森の奥から今までよりもひとときわ大きな体にその身に鎧を身につけて手に刀を持った謎の鬼が現れた。

「鎧を身につけた鬼……!?!」

『流牙、こいつは今までの雑魚とは比べものにならないほどの力を持っているぞ。それに、鎧の時間制限も迫っている。一気に決めろ!』

「分かってる!」

ガ口の鎧を始めとする全ての魔戒騎士の鎧には時間制限があり、その時間は鎧を纏ってから99・9秒。

その時間を過ぎてしまうと鎧に魂を食われてしまう。

だからこそ、その前にこの鬼をすぐに倒さねばならない。

「はあああああああああーっ!!」

流牙の咆哮と共にガ口の鎧から翡翠の如き炎が現れ、鎧と牙狼剣に灯された。

それは魔戒騎士の技の一つで魔界の炎である『魔導火』を鎧と武器に纏い、攻撃力と防御力を劇的に向上させる。

その技の名は……『烈火炎装』。

流牙は魔導火を纏った烈火炎装で鬼に一気に近づき、牙狼剣と鬼の刀が交差する。

しかし、数千度を越える超高温の炎である魔導火を纏った牙狼剣の前になんの力も込められていないただの鋼鉄の塊である刀の刃はバターののように溶けてしまった。

武器を失った鬼は戸惑いを見せ、流牙は容赦なく鬼を連続で殴り、最後に空へと思いつき蹴り飛ばした。

「うおおおおおつ!!はあつ!!」

そして、流牙も鬼を追いかけられるように地を蹴って空を飛び、全ての魔導火を牙狼剣に集中させて渾身の横薙ぎを振るう。

牙狼剣から巨大な翡翠の炎の剣閃が飛ばされ、鬼を真つ二つに切り裂いて燃やし尽くした。

そして、炎の剣閃はそのまま飛び続け、空に浮かんだ数多の雲を切り裂いた。

「空が……割れた!?!」

空が割れた事で戦場にいた誰もがその事に驚愕した。

鬼を切り裂き、空を切り裂いた張本人である流牙は魔導火の小さな火の粉を撒き散らしなが静かに降りていく。

さながらその姿は天から神が降臨したかのようなものだった。

そして、鬼を斬り殺したその姿を見た敵国は鬼の襲撃などで敗戦間近となっていたことに加えて流牙に恐れをなして兵士達は敗走していき、戦況は織田軍に軍牌が上がり、織田軍に再び奇跡の勝利を飾った。

流牙が地面に降り立つとガ口の鎧を魔界に送還し、戦いを終えた牙狼剣を鞘に納めた。

久遠は戦いを終えた流牙の元へ走って来た。

「流牙ー!」

「久遠……」

久遠の顔を見た流牙は笑顔を向けるが、久遠が近づいた瞬間、流牙は力を失ったかのように倒れてしまう。

久遠はとっさに倒れる流牙を受け止める。

「流牙!?!どうしたのだ!?!すっかりしろ!」

『心配するな、嬢ちゃん。流牙はさっきの炎……烈火炎装で体力を使い果たしちゃったのさ!』

「ごめん……ちよつと疲れちゃった。久遠、ちよつとこのままでいさせて。少ししたら起きるから……」

流牙はそう言うと久遠に抱きとめられながら眠りについてしまった。

ここ何日も徹夜続きでひよ子達の警護や鬼の調査をしていた。

そして体力を激しく消耗する烈火炎装で魔戒騎士として無尽蔵な体力を持つ流牙も限界が来てしまった。

「この、うつけが……」

久遠は流牙がどれだけ頑張っていたか、受け止めたその重みでよく分かった。

「我に抱きとめられる人間は、妻の結菜と……夫のお前だけだぞ?」

そう言つて久遠は流牙を優しく抱きしめて頭を撫でた。

そして、戦場に神の如き威光を放ちながら現れ、鬼を切り裂いた黄金の鎧を纏った剣士……流牙の存在は瞬く間に全国に轟いた。

それにより、様々な思惑が力を持つ者達の間で交差した。

ある者はその存在を疑い。

ある者は興味を抱き。

ある者は恐れを抱き。

ある者は傍観し。

ある者は手に入れようと目論む。

そして、この瞬間から人と鬼の壮大なる戦いが幕を開けるのだった。

その中心にいるのが流牙と久遠……運命によつて出会う事となつた二人の存在であ

る。

二人に待ち受けるのは希望の光か、絶望の闇か……その答えは二人の信じる道の先に
歩む長く、険しい戦いの果てにある……。

『動 　　＼F a t e　　』

戦場に現れた鬼を全て討滅し、睡眠不足と疲労困憊で流牙は倒れてしまった。
そして……。

「あら、起きた？」

目を覚ますとそこは久遠の屋敷で側には帰蝶が見ていてくれたいた。

「ああ……みんなは？」

「無事よ。あなたが鬼を全て倒してくれたから」

「そうか……良かった」

「全く……戦が終わったとはいえ、睡眠不足と疲労困憊で倒れるなんて呆れものだわ」

「何も言えないな……」

この世界に来てから流牙がまともに寝たのは最初の日だけでそれ以外はほとんど寝ていなかった。

流石の帰蝶も今回は流牙を邪険に扱わずにいる。

「あなた一人の体じゃないんだから、体調管理ぐらいしつかりしなさいよね？」

「ふふっ……」

「何笑ってるのよ?」

「いや、帰蝶さんの雰囲気や言葉が俺の知っている人に似ていたから」

「それって天の世界にいるあなたの家族?」

流牙を心配する人を思いついて帰蝶は家族の事を聞いたが、流牙は首を左右に振って少し暗い表情を浮かべた。

「家族はもういないよ。数年前にたった一人の家族……母さんが亡くなったからね……」

「……ごめんなさい」

家族を亡くしたとあって帰蝶も暗い表情をする。

「いいよ。帰蝶さんで俺が思い出した人は俺の大切な相棒に似ていたんだ」

「相棒って……前に言っていた魔戒法師?あなたが相手だとその相棒さんも苦勞するわね……」

「……確かに心配ばかりかけていたからな」

「まあ良いわ。すぐにご飯の用意をするわ。それから……鬼からみんなを……久遠を守ってくれてありがとうね。みんなあなたの事をとて褒めていたわよ」

帰蝶は流牙に初めて笑顔を見せて感謝の気持ちを伝えた。

「ありがとう。でも俺は守りし者としての使命を果たしただけだよ」

「守りし者ね……今度、ゆつくり話をさせてね」

「ああ……」

帰蝶は部屋を出て台所に向かい、流牙は再び布団に横になる。

そして、畳まれた魔法衣に付けられた牙のお守り……無人島で十年間共に修行をしてきた魔戒獣・羅号の形見の牙をアクセサリーにしたものに触れる。

このアクセサリーは邪気を払う力があり、少し前に儀式で月光の光を当てて力を取り戻していた。

そして、その儀式を行った者は流牙の一番大切な人……。

「莉杏……」

出会ってから今までこれほど離れ離れになったことがなかったので流牙はとてつもない寂しさを覚え、牙を握りしめながら目を閉じる。

「必ず帰るからな……待っていてくれ」

一つの大きな出来事が終わり、流牙は必ず元の世界に帰る誓いを立てる。

☆

帰蝶に作ってもらったご飯を食べ終わると流牙は城に向かうと、ひよ子と転子と合流した。

「お頭〜!」

「流牙様〜！」

「ひよ、ころ」

「体はもう大丈夫ですか？」

「心配したんですよ、ひよなんかはこの世の終わりと思うぐらい泣いていたんですから」

「こ、ころちゃん！」

「ありがとう、二人共。ところで……戦での被害はどんな感じだった？」

「はい、負傷者は五十人ほど。討ち死が十名ほどですね」

「相手との戦力差を考えれば完勝と言っても良い戦果ですよ！それにお頭のお陰で鬼の被害は無かったんですから！」

「そうか……十人も……」

幸い鬼に食われた人はいないが、それでも十人という尊い犠牲が出てしまった。

この世界の戦からしてみればある意味奇跡に近い数だが、流牙にとっては辛いものがある。

城には評定をしていた久遠達が流牙の復活を知ると挙つて集まり、戦場での鬼との戦いを褒め称えた。

「おい流牙！お前あんなに強かつたんだな！すげえじゃねえか！」

「あんなに強いんじゃないや雛達も負けるのも領けます」

「犬子はやつぱりあの狼の鎧です！ かつこよくて素敵でした！」

「流牙さん、久遠様やみんなを守ってくれてありがとうございますがとうございます」

「そして、最後の戦場に映える翡翠色の炎は美しかったですぞ」

みんなは武将として流牙の戦いを褒め称えるが、流牙自身は素直に喜ぶことは出来なかつた。

流牙は戦で戦う武将ではなく、守りし者として、魔戒騎士として戦ったからだ。

「流牙！ よくぞ……よくぞやってのけた！」

久遠は満面の笑みを浮かべて力一杯流牙に抱きついた。

「あれだけの鬼をたつた一人で殲滅するとは……流石は黄金騎士だ。戦場に鬼が現れた時はどうすれば良いのかと心の臓が止まりかけたぞ。なんと感謝すれば良いのか、我には言葉が浮かばん。……とにかくありがとうだ、流牙」

流牙は久遠の頭を優しく撫でながらゆっくり離れる。

「ありがとう。じゃあ約束通り、転子は俺の隊に入れさせてもらおう。それから……城を建てるのに協力してくれて、討ち死した十人に何かして欲しい」

「……分かつた。我に任せておけ」

「ありがとう。じゃあ俺はこれで失礼するよ。ちよつとやる事ができたから」

流牙はそう言うとうひよ子と転子を連れずにそのまま城を出た。

城を出た流牙は街の市場で紐などを買い、森で木の枝などの木材を集めて黒俣の戦場近くの丘に訪れた。

紐と木材を組み合わせてアスタリスクの形をしたものを作り、それを地面に突き刺した。

そして、野原に咲く花を摘み、供えるように置き、手を合わせると背後から一つの影が近づく。

「それは……墓か？」

「……そうだけど、織田家の当主様がお供を連れずにここに来ているの？」

後ろを振り向くとそこには流牙の……一応であるが、妻の久遠が立っていた。

城主がお供を連れずに城を出るなど以ての外だが、久遠は縛られるのが嫌いで時折城から脱走して壬月達を困らせている。

「城にこもるだけだと息が詰まるからな。それにお前の様子が少し気になったからな。それはこの戦場で……」

「そうだ。これは戦で死んでいった人達の墓だ。久遠達にとつて戦で死ぬのは当たり前な事だろうけど、俺にとつてはそうじゃない。戦と一緒に戦うことは出来なかったから、せめて墓だけは作っておこうと思つてね……」

「本当に優しいな、お前は……なら私もお前の夫として共に手を合わせよう」

久遠は流牙の隣に座り、手を合わせて目を閉じた。

死者の魂が無事に黄泉の国へ旅立つようにと願いを込めて。

死者への祈りを済ますと、久遠は流牙が作った手作りの墓を興味津々に見る。

「それにしても、星の形をした墓か、よく出来てる。それにやけに作り慣れている感じがするな」

「昔……ホラー狩りの旅で、街一つ一つでそこにいるホラーを倒した後に街を見下ろせる場所に母さんの墓を作っていたからね」

「そうか……どんな人だったのだ？流牙の母上は？」

「母さんと一緒に過ごせた時間は短いけど、とっても優しく俺に有りつ丈の愛情を注いでくれていた。そして、俺の事を信じて最後まで想い続けてくれたんだ……」

流牙は目を閉じ、瞼越しに両目に触れながら母のことを思い出す。

「素敵な母上だな……」

「ああ、俺の最高の母さんだ」

「そうか……やはり母は素晴らしいものだな」

久遠も自分の母のことを思い出していた。

しばらく二人でのんびりしていると久遠は思い出したかのように布に包まれた長物を取り出した。

「忘れるところだった。流牙、受け取れ」

「これって……」

チリーン！

ザルバの呼び出しでカバーを外すと珍しく焦ったような声を出した。

『おい流牙！気をつけろ！それはあの刀だぞ！』

「えっ!？」

布を解くとそれは流牙がこの世界に訪れるきっかけとなった祠に仕舞われた謎の刀だった。

「本当はすぐ返そうと思っていただけだったが、初めて会った日はドタバタしていたし、流牙は牙狼剣を持っていたからすっかり忘れていた。改めてそれをお前に返そう」

「ありがとう、久遠。どうだ？ザルバ」

『不思議な力は感じるが、光に包まれたあの時ほどじゃない。本当にこいつは何なんだ？』

「分からない……けど、何か意味はあるはずだ。俺をこの世界に呼んだ何か……」

「私にもよくわからないが、ひとまずそれは常に腰に差しておけ。刀は武士の魂でもあるからな」

「俺は武士じゃなくて魔戒騎士だって……」

「そう言わずに差しとけ。郷に入って郷に従えと言うじゃないか」

「仕方ないか……」

流牙は慣れてないが刀を腰のベルトの間に差して武士らしくしてみた。

「おお、良いじゃないか。しかし、その長い上着と中の鎧が少しな。もしよかったら私が新しいのを……」

『お嬢ちゃん、その必要は無いぜ。中の鎧は流牙の母が手作りしたものだ。それから魔法衣は霊獣の毛皮から作られ、特殊な加護が施されているんだ』

外部からのダメージを抑える効果があるので魔法衣を纏う魔戒騎士はホラー相手に生身でも戦うことができる。

「と言うわけだから、俺はこのままで良いよ」

「むう……それは残念だ……私好みの感じにしようと思つたのに」

「それより、そろそろ帰ろうか。みんな心配しているよ?」

「そうだな。壬月達に怒られそうになったら流牙も道連れだ」

「ちよつ、どうして俺も怒られなきゃならないの!？」

「お前は私の夫だろ?怒られる時も一緒だ!」

ニヤニヤと笑みを浮かべる久遠に流牙も焦りを見せ始まる。

「いやいやいや、そんなの困るよ!?!それに壬月とかが怒ったら超怖そうだし!」

「はっはっは！ さあ共に行くぞぞ！」

「いい、嫌だあ〜！」

手を握られて逃げられなくなった流牙は久遠に連れて行かれるのだった。

☆

黒侯の戦から一週間の時が過ぎた。

相変わらず流牙は元の世界に戻る手立てを見つけていなかったが、あまり焦ってはいなかった。

ザルバ曰く、この世界の時の流れは流牙のいた人界とは大きく異なるらしい。

この世界の時の流れは速く、ホラーであるザルバの体感では人界の一日分がこちらの世界では一か月に相当するとのこと。

つまり、流牙は長くこの世界にいても、人界ではあまり時間が流れていないのだ。

しかし、流石に長く居座るわけにはいかなので人界に戻る手立てを探しているがなかなか見つからない。

唯一の手掛かりである謎の刀も力を放っておらず、今ではただの刀で流牙とザルバも困り果てていた。

そして、鬼の事だがこれに関しては僅かだが動きが出てきた。

流牙が森に入ったり夜に街を歩くとまるで待ち構えるかのように現れて襲いか

かつてきた。

先日の黒俣の戦で流牙は鬼を討滅する存在だと名乗り、その名はおそらくは全国に広がっている。

何故名乗ったかと言うとそれはザルバの一つの作戦だった。

流牙とザルバの経験上、この鬼の騒動には黒幕が存在すると睨んでいる。

そこで鬼を討滅する存在……魔戒騎士、そして黄金騎士ガロとしてその名を広げることとで敵が何らかの動きを見せるのでは無いかと思った。

まだ鬼が少し頻繁に現れる程度だが、流牙とザルバは必ず黒幕を見つけ出すために戦い続ける。

そして、現在……流牙は久遠の屋敷を出て長屋に住んでいる。

その長屋は久遠が設立した流牙の部隊、『流牙隊』の長屋でひよ子と転子も一緒に住んでいる。

流牙隊の方針は前線には出ず、裏方の仕事メインとなっている。

そして、頭である流牙は戦場には参加しないが、鬼が出現した時のみ戦場に現れることとなっている。

今や織田最強の呼び声も高い流牙が戦に出ないことに反感の声も出ていたが、誰よりも流牙の事を理解している久遠が鶴の一声で片付けた。

「さて……起きるか」

流牙は長屋で目を覚まし、布団を片付けて朝食を食べにひよ子と転子と一緒に出かけた。

すると、早馬が城の方に向かうのを見かけ、流牙達も城へ向かうと既に評定の間には久遠達が揃っていた。

そして……早馬からの情報によると美濃にある稲葉山城が誰かによつて落された。

しかもその人数はたったの十六人。

一体何があったのか誰にも分からずにいる。

「どうやったのか気になりますし。まず誰がやったのかそこを知る必要がありますね」

「そういうことだ。首謀者の情報は一切無いのだが……」

「じゃあ、久遠。俺たちが行つてくるよ。ちやうど美濃周辺の鬼の調査もしたかったからな。それに潜入捜査も魔戒騎士の仕事だからな」

稲葉山城の真偽や首謀者を確かめるのだが……それを聞いて久遠は不思議そうに尋ねる。

「魔戒騎士はホラーを倒すのが仕事ではなかったのか？」

「ホラーは人間に寄生して人間社会に溶け込むことが偶にあるんだ。だから、ホラーがいるところに潜入して誰がホラーなのか見つけるんだ」

「なるほどな……それはかなり厄介だな」

「よし。ひよ、ころ。二人共行けるか？」

「はい！」

「いつでもだいじょうぶです！」

「よし。飯食べたらすぐに出よう。十日で戻ってくるよ」

「分かった。よろしく頼むぞ。……それと流牙」

「ん？」

「その……なんだ。気をつけてな」

久遠の心配する言葉に流牙は嬉しくなり、久遠の頭を撫でる。

「ありがとう。心配しなくても必ず帰ってくるから」

「うむ。待っているぞ。……あ、ちが、その、し、知らせを待っているぞ、ということだからな！」

「わかってる。行ってくるよ」

そして流牙達は城を出て朝食を食べた後に早速美濃へと向かった。

一日かけて美濃に到着し、宿に泊まり、翌日から城の様子や町の聞き込みを行う。

流牙はそれに踏まえて美濃の鬼の調査を行うのだが……。

「はーい！じゃあみんな張り切っていこー！」

「どうして犬子ちゃんがここにいるのかなあ……？」

何故か犬子が勝手についてきてちやつかり同じ宿に泊まっていた。

犬子は雛に面白半分で煽られ、それを真に受けてついて来てしまったらしい。

「まあ犬子ちゃんは二人より強いからもしもの時には守ってくれから良いか……」

仮に敵に見つかつたり鬼に襲われた時にひよ子と転子を守つてくれると割り切り、流

牙は犬子も同行することを許可した。

その後二手に分かれて情報収集する事になり、流牙と転子は稲葉山城の偵察、ひよ子

と犬子は町で聞き込みを任せた。

「それじゃあ、ちよつと城の中に行つてみますか」

「ちよつ!?だ、だめですつてばお頭!!」

城に近づき、内部の様子を調査しようと流牙はやる気まんまんで乗り込もうとしたが

転子に全力で阻止された。

流牙に掛かれば潜入捜査くらい朝飯前なのだが、危険だからダメだと転子は有無を言

わせない態度で流牙を抑えた。

とりあえず城内の様子だけを見ただけでも良しとし、ひとまず宿に戻った。

宿に戻るとひよ子と犬子は疲れ切った様子で、ひよ子曰く、犬子は怪しいと決めつけ

てきた徒士と喧嘩をしまいなんとか逃げてきたらしい。

「やっぱり犬子ちゃんには諜報活動は無理だったか……」

二人が無事だったから良かったので流牙はそれ以上咎めず、町の聞き込みは流牙とひよ子の二人にして転子と犬子は先に尾張に帰らせて城の情報を久遠に届けさせる事にした。

翌朝、転子と犬子は尾張へ戻り、流牙とひよ子は町の市で聞き込みをする。

そして、話を聞いていくと早馬の情報通り、首謀者は竹中半兵衛と西美濃三人衆が協力したと裏が取れた。

「それにしても、何で竹中さんはそんな事をしたのかな？」

「お教えしましょうか？その理由を」

「えっ？！」

声に気づいて振り返るとそこには綺麗な衣に身を包んだ清楚な雰囲気漂わせ、目を長い前髪で隠した不思議な少女がいた。

この出会いが流牙と少女に新たな運命を刻む事となるのだった……。

『想　　〕Heart〔』

町で情報収集をしていた流牙とひよ子の前に竹中を知っているという謎の少女と出会った。

「こんにちは」

「……こんにちは」

「こ、こんにちは」

少女のただならぬ雰囲気、流牙とひよ子は少し警戒しながら話す。

「君は？」

「詩乃と申します」

「詩乃ちゃんか。俺は流牙。こっちはひよ。よろしくね、詩乃ちゃん」

「どうも。……」

「ところで、教えてくれるってどういうこと？」

「教えることはあなた方が知りたがっている竹中さんのことです。竹中さんに城を落としましたが野心はありません。多分、馬鹿な人たちに馬鹿にされた事が、我慢できなかったんだと思います」

「つまり、その意趣返しに稲葉山城を落とすこと?」

「難攻不落の城などというものは、この世に存在し得ません。敵は外にもあらず。内にもあり。……ということを抑っていました」

「なるほど。外が駄目なら内側から崩していくか。定跡だね」

流牙はうんうんと頷いて詩乃の話を聞いていく。

「その基本をやっただけです。と。竹中さんならばそう応えるでしょう」

「なるほど。詩乃ちゃんをよく知ってるんだな。竹中さんのこと」

「はい。……ちなみにお二人のことも。私は良くご存知ですよ」

自分たちの正体を知っていると分かり、流牙はフツと笑みを浮かべて腕を組む。

「よく見える眼とよく聞こえる耳を持っているね」

「光が強ければ遠くでも分かる。音が大きければ遠くでも聞こえる。ただそれだこのこと」

「なるほどね」

流牙は目を細め、これまでの数々の洗練された言葉で何となく詩乃が何者なのか理解できた。

「竹中さんはすごい人なんだね」

「そうですね。きつと竹中さんならば。そんな事はないと仰る事でしょう。彼女は

ただ。美濃を愛するが故に行動を起こしたんだそうです。盛者必衰のことわりといえ。あまりにも酷すぎるのがかなしいと……」

「愛故にか。良いね、俺は好きだよ、そういう考えは。誰かのためを想い、自分の心にあり強い誇りを持つている人は俺は尊敬するよ」

流牙と詩乃の初めて会ったとは思えない会話をしていく。

そして、話をしてくれた詩乃に流牙はお礼がしたくなつた。

「そうだ、詩乃ちゃんに竹中さんの事を話してくれたお礼をしたいんだけど」

「お礼なんていりません。私はあなたと話せてよかつたですから」

「そんなことを言わないでさ。うーん、手持ちのお金はあまり無いから……あ、そうだな！」

流牙は魔法衣のポケットを探るとそこには二つ折りになつた小さな鉄の棒を取り出した。

「何ですか、それは？」

「これはヘアピン、髪留めだよ」

「髪留め……？」

「そう、こうして使うんだ」

流牙は詩乃に近づいて目を覆い隠すような前髪に触れた。

「ひゃっ!？」

詩乃の前髪を掻き分けると、その素顔は美少女と言っても過言なぐらいの可愛さでその両目には綺麗な緑色の目が輝いていた。

「おっ! やっぱり……長い前髪で目元を隠していたけど、とっても可愛いよ!」

流牙は詩乃の前髪をヘアピンで留めながら可愛いと褒めた。

「か、可愛い? 私がですか……?」

「ああ。それに、瞳の色が翡翠みたいに綺麗だし、詩乃ちゃんは前髪は短くするかこうやって髪留めで留めた方が絶対に似合うよ。ひよもそう思うよな?」

「へっ? そ、そうですね! 詩乃さん、顔を隠さない方がとつてもいいと思います!」

呆然としていたひよ子だが、流牙の言う通り本当に詩乃の素顔が可愛かったのと同じように褒めた。

「は、初めてです……人から可愛いと言われたのは……」

可愛いと連呼され、顔を朱色に染めていき、ますます詩乃の可愛さが増していく。

「最後に詩乃ちゃん。竹中さんに会ったら伝えてくれないか?」

「伝言ですか?」

「ああ。俺は……必ず君を奪うからね」

「……っ!？」

流牙の突然の宣言に詩乃は言葉を失って息を呑み込んだ。

「稲葉山城を落としてみたんだ。竹中さんもきつとここにいられない。俺個人としては誇り高き心と素晴らしい知識を持っている人を失うのは惜しいし、君はもつと生きるべきだ。この世界の為にね、だから……」

流牙は詩乃に手を差し伸べ、真剣な眼差しをしながら言った。

「君が危機に会った時、必ず君を攫いに来るから……待つててね?」

最後に笑みを浮かべると詩乃は焦った様子で両手で顔を隠す。

「わ、私は竹中さんじゃないですよ!」

「ふふつ、わかってるよ。それじゃあ伝言頼むよ、じゃあね。ひよー!行くよ!」

「へあ?あ、はい!!」

流牙はひよ子を連れて詩乃に手を振りながら別れた。

☆

流牙達と別れた詩乃は流牙と言葉を交わして胸が熱くなるのを感じていた。

「……あれが田楽狭間の天人、鬼狩りの劍神、金色の天狼、翡翠の火神……」

それらは流牙の事で各地で囁かれている数々の異名だった。

「黒俣の地で鬼を相手に無双の剣を振るい、天から光り輝く黄金の狼の鎧を纏い、空を切り裂く翡翠の炎を操る天人……道外流牙ですか。まさかあれほどの人物とは……」

流牙の事を初めから知っていた詩乃は流牙から言われた言葉や自分に向けられた笑顔に惹かれていた。

「ですが……あんなに激しく求められたのは生まれて初めてです。この……胸のときめきは、どういうことでしょう？ トクントクンと心が痛くなってくる……だけどとても幸せな気分……」

詩乃は流牙に付けてもらったヘアピンに触れながら体全体に熱を帯びさせている心臓の鼓動を高める。

「流牙……さま」

☆ 今の詩乃の心を完全に支配していたのは紛れもなく流牙だった。

「お頭。さっきの子誰ですか？」

ひよ子は詩乃の正体に気づいておらず、一人だけ気づいていた流牙はまっすぐ宿の方へ向かう。

「ひよは気づかなかったの？ とりあえずすぐに尾張に帰って久遠に報告しなくちゃな」「えっ!! 帰るって、あの子が何者か分かったんですか!？」

「決まっているじゃないか、あの子こそ俺たちが探していた竹中半兵衛本人だよ」

「……ええーっ!!？」

その後、流牙とひよ子は尾張へ戻り、長屋に到着すると転子が出迎えてくれた。

ちなみに犬子は赤母衣衆筆頭なのに母衣衆を放置して美濃に来ていたらしく、帰ってからですと壬月にお仕置きを受けているらしい。

後で何か差し入れを持っていくかと流牙は苦笑を浮かべ、ひよ子と転子と別れて一足先に久遠の屋敷へ向かった。

流牙は久遠に近々、竹中こと詩乃は後々のことを考えて手に入れた城を放棄する可能性がある。

そして、城主は見せしめの為に詩乃を切り捨てるだろう……。

一方、流牙達が旅立ったその頃に早馬が来て詩乃と共に城を奪った西美濃三人衆が高値で売るから買えと言ってきた。

詩乃の言う通り敵は外だけでなく内にも居る状況となった。

流牙の脳裏には詩乃の顔が思い浮かんでいた。

「久遠……」

「構わん。お前の好きにすれば良い。我はその考えを全力で支持してやる」

「ありがとう……すぐに行つてくるよ」

「それからこれを持っていけ」

久遠は小さな袋を流牙に渡した。

「私のへそくりだ。路銀の足しにしろ」

「良いの？久遠のなに……」

「まとまった金は結菜が管理しているから使えんだ。だからその金のことは結菜には内緒だぞ？」

「……分かった。二人だけの秘密だね」

「我にはこれぐらいしか出来ん。すまんな流牙」

「すまんって何のこと？」

「……初めの約束では、ただ横に座って後はお前の好きな事をさせようと思っていたのだが、いつのまにかこのような荒事に任せることになってしまった」

「俺はこの事が自分の無駄になるとは思っていないよ。久遠の元で動けば何か掴めると思っているからね」

「だが……出会って間もないのに、我はお前にどれだけ助けられたらうか……」

「お互い様だよ。久遠は俺の為にできる限りの事をしてくれている。ほら、一応夫婦の関係だからお互いを助け合いが大切でしょう？」

「そ、そうだが……それでもお前を縛り付けているのではないと思って……」

「俺はこの世界で久遠と出会い、こうやって一緒にいることが運命だと思ってているんだ。だから、俺が鬼との戦いが終わるまで、久遠が天下を統一するまでは一緒にいるよ」

「……………?!」

久遠は一緒にいると流牙から言われ、頬を赤く染めた。

「それじゃあ。竹中さんを攫いに行つてくるよ」

「……………うむ。気をつけて。無事に帰つてこい」

「ああー！」

流牙は久遠の屋敷を後にしてひよ子と転子の元へ向かった。

☆

流牙が町を歩いてしていると黒侯近くで演習をしていた和奏が早馬の報せを久遠に伝えるところだった。

内容を教えてもらおうと稲葉山城に龍興が戻ったらしく、城を占拠していた奴が返却しづらい。

流牙の予感が的中し、和奏から鉄砲槍に使う薬玉を貰つてひよ子と転子に美濃に行く準備をさせる。

二人は驚いていたが、詩乃を攫うために協力してくれてすぐに準備をしてくれた。

準備を整えて馬を引きながら町の出口に向かうと……………。

「はあ……………おっそいわね。待ちくたびれたわよ」

なぜか旅支度をした帰蝶が待っていた。

「帰蝶さん？何で旅仕度なんかして……」

「私もついて行くのよ」

「……………ええっ!？」

「貴方たちと一緒に美濃に行くわ」

「……………勘弁してくれ。俺たちは今から荒事に行くんだ。悪いことは言わない帰ってくれ」

「あら？どうしてかしら？」

「危ないからにきまつているだろ！それに……………あまりこう言いたくはないけど、邪魔だ」

「な……………!？」

「隠密行動になれていない足手まといを連れて行って、肝心の竹中さんを誘拐できなかつたら、目も当てられない」

「……………はつきり言ってくれるわね」

「生半可な気持ちでついてこられちゃたまらないからね。言う時に言わないと誰かが怪我をするかもしれない。下手したら命を失うかもしれない」

「いや。それでもついていくわ」

「どうして君はそこまで……………」

「久遠のためよ」

「久遠の？」

「そうよ。……あなたを見極めるのは、久遠から命じられた私の役目。だから私は、駄目だつて言われてもあなたについていく」

初めて出会った時から感じていた流牙の相棒と似た雰囲気の高い意志を持つまっすぐな視線に流牙は大きなため息を吐いた。

「はあ……わかったよ。そこまで言うなら仕方ない。だけど、無茶はするなよ」

「ふん。ちゃんと母様から手ほどきは受けています。自分の身ぐらい守れなくては、久遠の妻なんて務まりませんから」

「分かった。よし……行こう！」

流牙隊と帰蝶は竹中……詩乃を攫うために再び美濃へと旅立った。

☆

美濃へ到着した流牙達は町民から情報を収集すると、詩乃は斉藤家に辞して逃げたけど追っ手がかかっているらしい。

そして、帰蝶は自分の母と姉が戦をしたという長良河畔合戦の事を話すと、流牙は手を強く握りしめて呟いた。

「気に入らないからって自分の家族と戦をするなんてふざけている……！」

この世界では当たり前前の事の一つだが流牙にとっては狂っているもの一つだと感

じ、強い怒りを持った。

そして、今の城主である龍興は結菜にとつて姪御で力も人望もない人だった。

「帰蝶さん。辛い事を教えてくれてありがとう」

「……ふんっ」

「よし、状況が分かったから後は動くだけだ。二手に分かれよう西に向かっているから、ひよところさ南方から回り込む街道。俺と帰蝶さんはこのまま西を目指す」

「じゃあ菩提城近くで合流ってことですね」

「そうだけど、多分どちらかで竹中さんとかち合うこともある」

「やはり追っ手がついてくると？」

「確実に。だからみんなにこれを渡しておく」

流牙は魔法衣から紐の付いた竹筒を取り出す。

「ほえ？なんですか？これ」

「簡易の信号弾……つて言っても分からないか。和奏ちゃんの薬玉を使って、作ってみたんだ。この紐を——」

「これ？えい！」

「お、おいつ!?!」

帰蝶の持つ竹筒から派手な花火の音が上がり、流牙は頭を抱えた。

「何やってるんだよ……」

「ご……ごめん」

「なるほど。何かあった際にはこの紐を引いて、応急を報せる、という事ですね」

「そうだ。竹中さんを見つけたらすぐに鳴らしてくれ。俺は耳がいいからすぐに反応して行動出来る」

「わっかりましたー!」

「ねえ?なんだか人が集まってきてるわよ?」

「そりゃあ、町のど真ん中であんな派手な音を鳴らしたらそうなるよな。みんな早く行くうー!」

「はいー!」

「ちよ、こちら!待ちなさいよおー!」

井之口の町を出発した流牙たちは、途中で別れ、打ち合わせした通りの道を西へと進む。

「はあ、はあ、はあ……ちよ、ちよつと待つて……少し休憩させて……」

「……あ、ごめん。歩くの早過ぎたね……」

流牙はいつも相棒と同じように歩いていたので帰蝶のペース配分をすっかり忘れていた。

帰蝶は今にも崩れ落ちそうだったので休憩させる事にした。

「分かった。少し休憩しよう。そっちの木陰に入ろう」

「はあ、はあ、はあ、はあ……お、おんぶして」

「はいはい……よっこらせ」

流牙はおんぶと言われたが帰蝶をお姫様抱っこで持ち上げた。

「ちよっ!?!誰が持ち上げてって言ったのよ!?!恥ずかしいでしょ!?!」

「え?だつてこつちの方が運びやすいから。ほら休むなら大人しくして」

帰蝶を木陰に連れていき、優しく下ろした。

「なんで裏に回るの?……ちよつと変な事考えてるんじゃないでしょうね?」

「変な事って何?どうせ休むなら木陰の涼しい方がいいし、あと稲葉山の連中に見つかりにくいようにしたんだけど……」

「あ、そっか」

「とりあえずゆつくり休んで。はい、竹筒」

「……ありがと」

帰蝶はぶつきらぼうにお礼を言うと、流牙から水の入った竹筒をかつさらって口をつけて水を飲む。

流牙は魔法衣の内ポケットから和紙に包まれた物を取り出した。

それは久遠から貰った砂糖を固めたお菓子である金平糖だった。

「何してるの？」

「久遠から貰ったんだ。疲れている時に甘いものはとても良いんだ。食べる？」

「うん。あ、でも……」

「あ、手が離せないか。じゃあ、口を開けて」

「え？」

「はい、あーん」

「う、うん。……あーん」

流牙は帰蝶に金平糖を食べさせる。

「……あ、美味しい」

「じゃあ俺も。んー！甘い！」

金平糖の甘さに二人はホッと息をつく。

「……ねえ」

「ん？何？」

「質問をしてもいい？」

「質問？いいけど」

「……あなた、どうしてそこまで、久遠の為に何かをしようとするの？」

「久遠の為というか、俺は守りし者として戦っているだけだから」

「また守りし者……確かあなたの世界にいるホラーっていう鬼みたいな化け物から人を守る為に戦っているのよね？……もしかして、仮に悪人が化け物に襲われていたら助けるの？」

「そうだよ。たとえ悪人でもホラーに襲われていたら助けるよ。人間だからね……」

「難儀なものね。そこまで己を戒めながらよく今まで死なずに生きてこれたわね」

「俺は幼い頃から魔戒騎士に……黄金騎士になる為に修行をして、そして人を守る為にホラーを狩る旅をずっとしていたからね」

「はあ……何があなたをそこまで動かすのかいまいち理解出来ないわ。平和に生きようとする民を守るならまだしも、悪人すら守ろうとするなんて……」

守りし者として戦う流牙にいまいち理解できない帰蝶に今度は流牙が質問をした。

「……ねえ、一つもしもの話をしたい？」

「何よ急に？」

「良いから。もしも帰蝶さんに自分のお腹を痛めて産んだ大切な子供がいるとするね」

「……ええ、とりあえず想像したわ」

「もしもその子供が敵に目を潰されたら自分の目を犠牲にしてもその子供の目を元に戻したい？」

「……どうしてそんな突飛もない質問をするのか知らないけど、そうね……もしも子供の目が本当に元に戻るならこの目を犠牲にしても構わないわ」

「そう言うと思ったよ……実は俺の母さんはそれと同じ事をしたんだ」

「……はあ!!？」

流牙は瞼に触れながら自分の目に何が起きたのかを帰蝶に話す。

「実はこの両目は一度、ある強大な敵にガロの鎧越しに剣で貫かれて、目を潰されて何も見えなくなったんだ」

「うっ、あつ……ね、ねえ！私の髪の色と目の色を答えなさい！」

「えっ？えつと……髪の色は茶色……いや、栗色かな？目の色はこの青空と同じ空色かな？」

しっかりと帰蝶の髪と目の色を答える流牙に帰蝶は流牙の顔に手を添えてじっくりとその潰されたと言う目を睨みつけるように見るがどこにも変なところは見当たらなかった。

「本当にあなたの目は潰されたの……？」

「ああ……あの時は想像を絶する痛みが走って、何も見えなくなつて絶望と恐怖しかなかったよ。でも、俺は幼い頃に魔戒騎士を目指して修行をしていた頃を思い出し、牙狼剣から放たれた声を頼りに暗闇の中走り続けたんだ」

「目が見えないのにどうやって走れたのよ？」

「俺の耳が良いことは言ったよね？音を頼りにどこに何かあるのか分かったんだ。そして、牙狼剣を取り戻してアジト……その当時に使っていた拠点に戻るとそこには死んだと思っていた母さんがいたんだ」

「死んだと、思っていた……？」

「母さんは俺が七歳の頃に修行に行つた直後に亡くなつたと師から教えられたが、実は邪悪な野心を持つ人間に囚われていたんだ。師が救い出し、俺と再会する十五年も長い間を……」

「じゅ、十五年……!?!」

流牙の母が囚われたあまりにも長すぎる時間に帰蝶は驚愕して言葉を失った。

「母さんは俺に戦う決心と勇気を与えてくれた……そして、術で自分の目の力を代償に俺の目を元に戻してくれたんだ」

「そう言うことだったの……それで、流牙のお母様は……」

「俺と再会した時にはもう既に残りの時間が無くなっていた。最後に母さんは俺にこう言つたんだ。『何があつても生き抜いて。願いは一つ……この目にあなたの未来を……たくさん笑顔を映して』って……最後は安らかに眠って行つたよ……」

「生き抜いて……あなたの未来を、たくさん笑顔を映して……か。流牙のお母様は同

じ女としても尊敬する素晴らしいお方ね」

流牙の母の強い不屈の心と息子への深い愛に帰蝶は尊敬の念を送った。

「俺の自慢の母さんだよ。俺は母さんの想いや今まで出会って来た多くの人々を胸に守りし者として、魔戒騎士として、そして……黄金騎士ガ口の称号を継承する者として今まで、そしてこれからも邪悪な存在から人間を守る為に戦い続けるんだ」

流牙の秘めた母の約束と願いを胸に戦うその想いに帰蝶も少しだけ理解する事ができた。

「少しだけ……あなたの事を理解できたわ。それにしても、そんな苦行な人生を送っていながら曲がることなくただ真っ直ぐ自分の道を歩くなんて凄いわね。久遠が気に入ったのも分かるわ」

「俺はまだまだだよ。それにこの世界に来たのには何か理由があると思う、だから久遠の元で自分の出来ることをするんだ。竹中さんに関しては単にあの子を助けたいと思っただけなんだ」

「やっぱりあなた、とんでもないお人好しね」

「よく言われるよ」

「……はあ。もう良いわ、話してくれてありがとう。それより休憩は終わり！ さっさと移動するわよ！」

「はいはい。承知しました」

帰蝶の行動にやれやれと思いながら荷物を纏めて向かおうとしたその時だった。

「合図!? 南をちよつとか。全力で行けば間に合う! 帰蝶さん!」

「分かつてる! 先に行つて! 私もすぐに追いかけるから!」

「信号弾は全部渡しておく、何かあつたらすぐに連絡してくれ!」

「分かつたわ! 竹中さんを絶対に助けてあげて!」

「ああ!!」

流牙は守りし者としての表情を見せると風の如く全力疾走をし、南へと向かつた。

☆

一方、斉藤飛驒と数人の足軽たちに詩乃は追い詰められていた。

詩乃は武の心得を持つてないので相手をする事はできず、体力も尽きようとしていく。

そして、短刀を抜き、流牙から貰った髪留めと一緒に握りしめた。

「でもここが切所……!」

「ははなつ! 抜いたな! 上意討ちに逆らう反逆者として始末してやる!」

「くっ……!」

「最後に愚者の手などを借りず! 雑兵に討たれる辱めを受けるのなら、自らの手

で————！」

「立ち腹など切らすな！さっさと殺せ！」

短刀を手に自ら腹を切ろうとしたその時だった。

キーン!!!グサツ!!!

詩乃の目の前に赤い柄に銀に煌めく刃をもつ剣が地面に突き刺さり、それに驚いた詩乃と斉藤たちが驚いていると詩乃の背後に黒い影が降り立った。

「この剣は……?」

「全く……こんな危ないものを持って」

「あ、あなたは……!」

「言ったよね? 君が危機に会った時、必ず君を攫いに来るから。ってね」

流牙は刀を逆手に持って自ら腹を貫こうとした詩乃の腕を掴み、間一髪で自決を止め

た。

「まさか……本当に……っ?」

「ああ、詩乃ちゃん。約束通り、君を攫いに来たよ。今までよく頑張ったね」

詩乃の短刀を鞘に収めると、流牙は詩乃をあやすように優しく頭を撫でる。

「流、牙、さまあ……」

詩乃は今まで溜まっていたものが溢れるかのように涙を流し、流牙に抱きついた。

『守くGardく』

詩乃の危機に間一髪駆けつけた流牙。

流牙の後にひよ子と転子が遅れてやってきた。

「ひよ、ころ。詩乃ちゃんを頼む」

「はいっ！」

「了解です、お頭！」

「くっ、貴様は何やつだっ!? 我らを美濃国主・斉藤龍興さまの臣と知つての狼藉！」

「そんなこと知らないよ。少なくとも……たつた一人のか弱い女の子を寄つてたかつて武器を持った男を使って困つた大馬鹿者を俺は許せないね」

「お、大馬鹿者だど!?!」

「全く……莉杏がいたらブチ切れて手がつけられなくなつてるよ」

ボソツと呟きながら斉藤達を睨みつける。

普段は激昂しやすい流牙を宥める莉杏だが時折女の子関係などで流牙以上に激昂することがある。

「とにかくあんた達の相手は俺一人で十分だ。かかつて来な」

「何を呆けたことを！ たった一人に何が出来る！ それに、武器を放り投げた愚か者の癖に！」

齊藤は流牙が投げた牙狼剣を掴んで武器を奪い取ろうとしたがそれは無理だった。

「なっ……!? う、動かない!? そんな馬鹿な!?」

牙狼剣……魔戒剣の刃であるソウルメタルは女には扱うことはできない。

増してや、守りし者ではない悪き心を持つ人間に魔戒剣を持ち上げることすら不可能である。

「どけ」

「うわあっ!?!」

流牙は齊藤の前に立ち、片手で思いつきり飛ばして地面に突き刺さった牙狼剣を軽々と引き抜く。

「この剣はあんたみたいな人が持つもんじゃないんだよ」

「どこまで我に侮辱を……ええい、何をしている！ 相手は一人だ！ 取り囲んで討ち果たせ！」

齊藤家の足軽が流牙を取り囲もうとするが、牙狼剣を鞘に戻した流牙はパキポキと手の関節を鳴らす。

「怪我はあまりさせないつもりだが……痛いのは我慢しろよ!!」

流牙はアクロバットな動きをして足軽を翻弄し、刀や槍の武器を踏みつけたたり、叩き割ったりして破壊する。

「女の子をいじめる奴らには、俺の相棒に代わって性根を叩き直してやる！覚悟しろ!!」
そして、流牙は拳や蹴りで鎧越しにダメージを与え、足軽を怪我をしない程度に叩きのめして戦意を喪失させていく。

「ええい！何をやっておるのだ！たかが山賊に遅れを取るなど、日の本最強である美濃八千騎の名の穢れであるぞ！」

「し、しかし………奴はかなりの手練れ！徒士風情では相手が務まりません！」
「ちっ。………ならばあれを出せ！」

「はっ！」

齊藤は足軽に鉄砲を持たせて流牙達を撃ち殺そうとした。

「鉄砲か………」

「て、鉄砲だー！」

「まずいですよお頭！すぐに退かないと！」

鉄砲の登場にひよ子と転子は驚くが、流牙は驚いておらず、つまらないと言った表情をしながらひよ子に尋ねる。

「ねえ、ひよ。初めて会った日の屋敷の模擬戦の事を覚えてる？」

「え？あつ！そうだ、お頭は……」

「ふははははつ！貴様ら山賊など、鉄砲一丁あれば皆殺しにできるのだ！我ら美濃武士に逆らつたことを死んで後悔するが良い！」

「じゃあ撃てば？」

「何!？」

「ほら早く撃つてみなよ。その鉄砲で俺を殺してみろよ」

「はつ！そんなに死に急ぎたいなら今すぐ殺してやる！撃てえつ！」

流牙に向けられた鉄砲から弾が飛んでくるが、

キーン!!!

鞘から牙狼剣を抜き、弾の弾道を見切つて弾を真つ二つに切り裂いた。

「なつ!?!ば、馬鹿な……」

「ええつ!?!鉄砲の弾を切つたあつ!?!」

「えへへ。実はね、お頭は和奏様と模擬戦をした時に弾を今みたいに切つたんだよ！」

「何と、そんなありえない事を最も簡単に出来るなんて……」

「それで終わり？日の本最強も大したことないね」

「くつ、おのれえつ!!」

斉藤達が鉄砲の弾を切られたことで動揺しているとそこに激しい音と煙が足軽達を

襲う。

それは流牙が作った竹筒の花火だった。

「俺が作った花火……おー、効いてるな」

その花火を撃ったのは一足遅れてやってきた帰蝶だった。

「流牙！大丈夫?!」

「帰蝶さん。心配しなくて良いよ。あと少しで全員の性根を叩き直すから……」

花火で足軽達を倒しやすくなり、帰蝶に礼を言おうとしたその時だった。

「っ?! 帰蝶さん！伏せろ!!」

「グオオオオオオ!!」

帰蝶の背後に何と鬼が現れ、流牙は叫びながら牙狼剣の柄を握る。

「えっ? きゃあっ?!」

「はっ!!」

流牙は牙狼剣を鞘から抜くと同時に投げ飛ばし、真っ直ぐ飛んだ牙狼剣は鬼の顔に突き刺さってそのまま後ろに倒れて消滅する。

「大丈夫か、帰蝶さん!」

「え、ええ……ありがとう」

帰蝶に駆け寄り無事を確認するとザルバからの呼び出しでカバーを開く。

『流牙！どうやら今までの派手な音で鬼が出てきたようだ！』

「そうみたいだな……帰蝶さん、こっちに！ひよ、ころ！帰蝶さんを頼む！」

流牙は帰蝶の手を握って引つ張り、ひよ子と転子の元へ向かうが続々と鬼が現れた。

その数は十体ほどで更に奥から続々と姿を表す。

「お頭様、鬼がこんなに……」

「これはちよつとまづいですよ……」

「まさかこんな事になるなんて……」

「流牙あ……」

流牙以外の全員が鬼の出現に恐れ、特に帰蝶に関しては襲われかけたことで不安になり、流牙の手を強く握りしめていた。

今、この四人を守ることが出来るのは流牙だけ……流牙は守りし者として四人に勇気と希望を与える。

流牙は腰に差した刀を守り刀として帰蝶に渡し、軽く抱き寄せてポンポンと背中を軽く叩く。

「大丈夫だ、帰蝶さん。君は久遠の一番大切な人だ。君には鬼の指一本触れさない」

「流牙……」

帰蝶は初めて男性に抱き寄せられ、顔を真っ赤にしながらも嫌だとは思わず、寧ろ先

程まで不安だった心が消えていき、素直に頷いた。

「ひよ、ころ。俺が傍にいる、恐れるな、勇気を持って。みんなを頼む」

次にこの中で比較的戦えるが鬼に怯えるひよ子と転子の肩をポンと叩く。

「詩乃ちゃん……心配するな。必ず君を攫うからね」

最後に詩乃の頭を撫で、獲物を目の前にしてよだれを垂らしている鬼達の前に立ちはだかる。

「必ず、俺がみんなを守る。黄金騎士の名にかけて!!!」

流牙は牙狼剣を掲げ、円を描いて光の輪が浮かび上がらせ、魔界からガ口の鎧を呼び出す。

光の輪から金色に輝くガ口の鎧が召還され、流牙の周りを舞うかのように一周するとそのまま流牙の体に装着される。

人々に希望を与える金色の光……黄金騎士ガ口が降臨した。

「あれが……みんなが言っていた、黄金騎士……ガ口……!」

「あれがお頭様の鎧……!」

「戦場に現れた希望の光……!」

「金色の天狼……!」

話を聞いていただけで実際には初めてガ口の鎧を目にする帰蝶達はその金色の輝き

に心の中に希望の光が灯された。

「はあああああつ!!!」

流牙は地を蹴り、飛びながら牙狼剣を振るい、鬼を切り裂いていく。

しかし、予想よりも鬼の数が多く流牙の攻撃が間に合わなくなる。

「くっ、数が多い!?!」

帰蝶達を守りながら戦っており、尚且つ鬼の数が多し。

こういう時に相棒である莉杏との法術の連携がどれほどありがたかったがよく分かる。

このままではすぐに鎧の制限時間が過ぎてしまう。

烈火炎装で一気に決めようと考えていたその時だった。

「流牙! 刀が光ってる!」

「えっ!?!」

帰蝶に守り刀として渡した刀が光を帯びていた。

刀を流牙に渡したら何か起きると直感を信じた帰蝶は刀を抜いて流牙に向けて投げた。

「受け取って!」

回転しながら飛ぶ刀を流牙は左手で握ると、淡い光がだんだん強くなり、不思議な事が

起きた。

刀が金色の輝きを放ち、一回り大きくなると同時に牙狼剣のような金色の輝く装飾を持つ大刀へ変化した。

「刀が……変化した!?!」

『どういうことだ? こいつは魔戒剣だったのか?』

「いや、そんなはずはない。久遠と帰蝶さんが普通に持っていたし……」

仮にソウルメタル製の魔戒剣なら女である久遠が持てることは不可能である。

しかし今はそんなことを考えている暇はない。

「とにかく、使えるなら使うしかない!」

急遽二刀流となった牙狼剣と刀を握りしめて流牙は全力で振るう。

単純に攻める武器が二つになった事でより効率よく大量の鬼を斬ることができる。

「うおおおおおっ!!!」

色々な状況下で戦えるように日々修行をしていたので難なく二刀流を扱え、鬼を次々と斬り裂いていく。

変化した刀は牙狼剣とほとんど変わらない鋭い切れ味で鬼を難なく斬ることが出来る。
る。

そして、ようやく鬼をほとんど斬り裂いて消滅してこれで終わりかと思っただが一

体残っていた。

その一体は怯えている斉藤に襲いかかっていた。

鉄砲で痛手を与えているが何故か鬼は斉藤を執着して狙っている。

鬼の恐ろしさに斉藤は腰を抜かしてしまい、足軽達は逃げてしまった。

「ま、まて！我を置いていくな！最後まで戦え!!」

もはや戦う力のない斉藤に鬼が襲いかかろうとした。

「……はあっ!!」

鬼の背後から流牙は牙狼剣と刀を突き刺し、左右に斬り裂いて鬼を両断した。

「あ、ああ……な、何で……助けた……?」

「例えお前が誰だろうと、鬼から人を守るのが俺の使命だからだ。さっさと行け」

「まさか、お前は……黒俣の戦場に現れた、金色の天狼……!?!」

「何だそれ?もしかして俺の事か?」

「ひ、ひいひいっ!!ば、化け物!!」

斉藤は流牙のガ口の鎧を見て化け物呼ばわりし、屁っ放り腰でかつこ悪く逃げた。

「無様で散々な言い様だな……」

流牙は帰蝶達の方を振り返ると同時にガ口の鎧を解き、魔界に送還する。

ガ口の鎧が送還されたことで牙狼剣と刀が元の姿に戻る。

しかし、それと同時に刀に異常が起きた。

刀の龍の文様が描かれた柄に大きなひびが入り、砕け散って地面に突き刺さった。

流牙は一瞬刀が壊れたのかと思ったが、刀身は無事で安心する。

すると、柄の下にある中心と呼ばれる部分に何か刻まれていた。

「まさか……この紋章は……!」

流牙は刻まれていた紋章をザルバにも見せると驚いたように声を上げた。

『こいつは驚いたな。こいつに刻まれているのは紛れもなくガ口の紋章だ!』

それは牙狼剣やガ口の鎧の腰にある三角形の形をしたガ口の紋章だった。

何故この刀にガ口の紋章が刻まれているのか分からないがやはりこの世界に流牙が

来たのは何か大きな運命があるのではと考える。

しかし、今は考えるよりも先にやる必要があるので流牙は刀を牙狼剣と共に魔法衣の

中にしまった。

流牙はまるで家に帰る子供のような笑顔で帰蝶達の元へ行った。

「みんな、ただいま」

「お頭あー! ううー、怖かったですー、怖かったですよお!」

「あはは、ひよ怖がつていたからね。でも、流牙様の剣技、やはりお見事です! 是非お暇があるときにも稽古をつけてください!」

「俺の剣は我流で他人から見たら少し無茶苦茶なところがあるんだけど……」

「それでもお願いします!」

「あ、じゃあ、私も!」

ひよ子と転子は流牙に師事を仰ごうとしたが誰かに剣を教えるなどやったことないため迷ったが、鬼から生き残るためにと考えて仕方ない感じで頷いた。

「分かった。剣の相手ぐらいはしてやるよ」

「「やったー!」」

二人は手を叩いて喜び、次に流牙は詩乃に視線を向けた。

「無事でよかったよ、怪我はない?」

「お陰様で、大事ありません。それより……私は攫われるのですか?」

「ああ。君には強い意志と素晴らしい才能がある。こんなところで死んではいけない。

俺たちと一緒にいこう」

「……己がこうも求められるとは思ってもみませんでした……この室町の世はしきたりやつまらない慣例などで私は変人として扱われていますので……」

「そうなんだ。そういう意味だと俺も変人だ。俺の名字は道を外れた道外、名前は流れる牙の流牙。変人同士、一緒に流れてみないか?」

「一緒に流れる……ふふっ」

「あれ？俺変なことを言った？」

「いいえ。あなたのその不思議で魅力的な言葉で私はこうして逃げに参つたのですよ」
 「君を攫えて本当に良かったよ。詩乃、俺たちと一緒に来てくれるか？」

流牙は改めて手を差し伸べると、詩乃は満面の笑みを浮かべてその手を取った。

「……我が身、我が魂の全てを持つて、あなた様にお仕え致しましょう。我が名は竹中半兵衛茂治。通称、詩乃。……流牙様に我が才の全てを捧げます」

「え？俺に？久遠は？」

「はい。分かっておりますよ。織田久遠様にも間接的に我が才を捧げましょう」

「……間接的？」

「当然です。何故なら私は流牙様のモノ。……となれば流牙様が織田殿の側にいる限り、私の全てを捧げることと同義となるでしょう。だから間接的、です」

「え、いや、あの、詩乃が俺のモノ？全てを捧げる？」

詩乃の言葉に訳が分からず頭に疑問符を浮かべていると左手から高笑い響き渡る。

『アハハハハッ！こいつは傑作だな！』

「ザルバ！何笑ってるんだ!？」

ザルバは珍しく大笑いをして口をパクパクと開いていた。

『流牙、お前はなかなかの女誑しじゃないか！これで未来の黄金騎士の跡取りに問題は

ないな!!」

「何を言ってるんだお前は!？」

「これは……!?!やはり聞き間違えではなく、本当に指輪が喋った!？」

『俺様の名前はザルバだ、お嬢ちゃん』

「では、ザルバ殿と。ザルバ殿の仰る通り、流牙様は人誑し、女誑しの天才でしょう。この私さえ……その……」

「まあでも、お頭はそれで良いんじゃないかなあ?」

「正室は久遠さまってというのは盤石だけど、色んなところで噂を聞くもんね」

ひよ子と転子の言葉に流牙は驚いて焦り始める。

「待って!?!なんかみんなに物凄い勘違いされているだけ!?!それからその色々な噂って何のこと!?!」

「……誑すのも良いけど、ちゃんと面倒見なさいよ?あと正室は絶対に久遠だからね!そこを蔑ろにしたら……わかってるわね?」

今度は帰蝶がジト目で流牙を睨みつける。

「ちよつ、帰蝶さん!?!どうしてそんなに睨みつけているの!?!面倒は見るけど誑して本当に何のこと!?!」

「教えてあげない……それから、結菜よ」

「えっ?」

「私の名前。帰蝶という名とは違う、もう一つの本当が結菜。本当は母様と父様、それに久遠と家中の者にしか呼ばせたくはないんだけど。……あなたも呼んでいいわ」

帰蝶……結菜の名前を呼ばせるということは流牙を認めたという事と同義である。

その事に気づいた流牙は嬉しくなり、子供のような笑みを浮かべる。

「結菜か……良い名前だね。それじゃあ、改めてよろしくな、結菜」

「あ……あり、がと……」

「よし……それじゃあ帰ろうか。尾張に！久遠の元に！」

「ええー！」

「「はー」」

流牙達は詩乃という新しい仲間と一緒に尾張へ戻った。

☆

一方、遠くから流牙を見つめる一つの影があった。

それは中性的な顔立ちをし、良質な服を着ている者で邪悪な笑みを浮かべていた。

「ふむ。あれが噂の天人か。あははっ！良い、あれは素晴らしく良いな。既に磨かれて
いるが、更に磨きをかければ眩き金色の如く輝く美しい器だ！」

流牙の今までの鬼との戦いを遠くから静観しており、その磨かれた力を絶賛してい

た。

「しかし、まさか『あの刀』があのように姿形を変えとはな……わざわざ見に来た甲斐があつたというものだ。ふふっ……彼奴にはこの乱れた世を救うために、もつともつと活躍して貰おう！」

流牙の持つ謎の刀について何か知っており、これからも流牙の戦いを遠くから監視するようだった。

「応援しておるぞ、道外流牙……黄金騎士ガロよ!!」

☆

その後、尾張に戻った流牙達は早速詩乃を久遠に紹介し、織田家の……流牙隊の一人として働く事になり、詩乃は流牙隊の長屋に住むことも決定した。

そして、一発屋という料理屋で軽い歓迎会を行い少々騒いで夜となり、皆が寝静まつた頃……。

「やっぱり、運命だったんだな……」

外に出て月明かりに照らされながら刀をもう一度よく見ていた。

刀の中心に刻まれている紋章は牙狼剣に施されている紋章の飾りと見比べても同じものだった。

そして、その裏には更に驚くべきことに日本語でも英語でもない魔界に古くから伝わ

る旧魔戒語で文章が刻まれていた。

「旧魔戒語か……ザルバ、読めるか？」

『ああ。しかしまさかこの刀に旧魔戒語が刻まれているとは思わなかつたぞ』

「俺もだよ。ザルバ頼む」

『読むぞ……この刀に導かれし者、守りし者として大いなる闇が覆う外なる世界を救え

……と書いてあるな』

まさしくそれは番犬所からの依頼のような言葉だった。

流牙がこの世界に来たのは偶然ではなく必然だったと。

「大いなる闇が覆う外なる世界を救え、か……言われるまでもない」

流牙は確かにこの刀に導かれてこの世界に来た。

しかし、鬼と戦うと決め、みんなを守ると誓ったのは自分自身の心と意志。

「俺はこの世界を守ってみせる。そして……必ず元の世界に戻る！」

流牙は新たな決意を胸に刀を次に向かつて掲げる。

『旅
～Travel～』

詩乃を攫つて流牙隊に配属となつた次の日、久遠は今までの流牙の活躍に褒美を上げることになつたがあまり欲が無い流牙はそれを断つた。

「無欲な男だな……そうだ、流牙。結菜から聞いたが、あの刀の柄が壊れたそうだな」
「ああ、そうだけど」

「なら私が刀の新しい柄を、ついでに鞘と鐔も用意しよう。せつかくだからお前の牙狼劍の赤い鞘と柄のような物でどうだ？」

「良いのか？ 柄が粉々に壊れちゃつたからどうしようかと思つていたんだ」

「刀は武士の魂だ。それに貴様は私の夫だ。格好がつくように良いものを用意しよう」
「分かつた、せつかくだからお願いするよ」

流牙は久遠に刀を渡して職人に頼んで柄と鞘と鐔を作ってもらふことにした。

そして、一週間近くで完成すると刀は牙狼劍に似た赤い鞘と柄がはめられ、鐔にはガ口の三角形の紋章が彫られたもので見事な刀となつた。

せつかくなのでこの刀を『牙狼刀』と呼ぶことにして流牙のもう一つの武器となつた。
牙狼刀の完成を喜んでいと久遠に行きあつた。

「久遠！」

「おお、流牙か。どうだ？牙狼刀の方は？」

「バツチリだよ」

「うむ、見事な装飾だな。そうだ、今から屋敷に来てくれるか？」

「城じゃなくて？」

「少し色々あつてな」

「色々？わかつたよ」

久遠の言葉に疑問を抱きながら一緒に屋敷に向かう。

「今、帰った」

「お帰りなさいませ」

屋敷に入ると三つ指をついてお辞儀をしている結菜がいた。

（……ねえ久遠。結菜になにかあつたのか？）

（どうもせんで）

（そうか？なんか俺の知ってる結菜じゃないって言うか……大和撫子っぽいというか）

「……………」

（怖い！笑顔がものすごく怖い！）

いつもとかなり違う反応に流牙も思わず警戒してしまう。

「今は置け。後で説明する」

「あ、ああ……」

そう言つて屋敷の中を進んでいく。

「まあ、座れ」

「ああ……」

「お茶をお持ちしました」

「うむ、苦勞。そこに控えておれ」

「はい」

結菜は久遠の斜め後ろに座る。

「よいな、結菜」

結菜は頷いてから流牙をジツと見つめて口をあけると、

「織田久遠が妻、結菜。本日より流牙さまの側室として御奉公させて頂くことになりました。久遠様共々、お可愛がりくださいますよう。何とぞよろしくお願いいたします」

「……………はい？」

あまりにもとんでもない内容だったので流牙も頭が一瞬真っ白になった。

「我が妻は、我が夫であるお前の妻でもある。……そういうことだ」

「え？えっ？ええっ？な、なんでそんなことに？」

「帰蝶……結菜がな、お前の事を認める、といってくれたのだ。そして二人で話し合った結果、流牙を奉公することとなった」

「詩乃……竹中殿の救出劇を側で見て、あなたのことを信用できると思ったの。だから……」

「ちよ、ちよつと待つてくれ、側室でことは愛人みたいなもの……だよね？いきなりなんで」

「ふむ。不満なのか流牙は？」

「いや、そうじゃなくて……」

「はあ……あんたは鈍感且つ純粹だからちやんと言葉にしないと駄目よね。私はね……流牙、あなたの事を好きになったのよ」

「……ええっ!!？」

まさかの結菜からの告白に驚愕する流牙。

「全く、最近の貴様は誑しすぎる」

「待つてよ久遠！だからそれはみんなには何回も言うけど誤解だから！俺はそんな気は全くないんだよ!!？」

「良いか！貴様が誰とどうなろうと我は束縛するつもりはないが……正妻は我だという事を忘れるでないぞ！」

「い、いや、分かってる、分かってるけどさー!」

「まさか……薄々気づいていたけど。流牙、向こうの世界に恋人がいるんじゃないでしょうね?」

「何?!それは本当か!?!」

「おかしいと思ったのよね……自分で言うのもなんだけど、私や久遠、壬月と麦穂、三若、ひよところと詩乃……みんな結構可愛いと思うのに全然手を出してこないし……」

「確かにそうだな……流牙、夫婦に隠し事は無しだぞ!正直に白状するのだ!」

久遠と結菜の二人の圧力に流牙も正直に自分の気持ちを話す。

「……恋人はいないよ。でも……俺の相棒……母さんの遺言と自分の意思で俺と一緒にいてくれる大切な女の子……莉杏がいるんだ」

「莉杏か。流牙よ、その莉杏のことを好きなのか?」

「好きかどうかと言われれば、多分好きだと思うし、『あの事』があるから絶対に莉杏を失いたく無い気持ちは強い……」

「あの事?」

「もし良かったら、教えてくれない?」

「……実はこの世界に来る少し前に世界を闇に変えようとした伝説のホラー、ラダンの戦いで莉杏がジンガという奴に捕まってラダンの動力源にされたんだ。莉杏は俺た

ちと人々を守るために……特別な魔導具を使って自爆して命を絶ったんだ……」

「自爆、だと……!?!」

「それで、その莉杏さんはどうなったの!?!」

「一度は命を落としたけど、空から降り注いだ命の光でなんとか生き返ったんだ。あの時は母さんの時と同じ、俺の大切な人がいなくなってしまうと大きな悲しみに暮れてしまったよ……」

「そうか……無事で何よりだな」

「でも、誰かのために自決するなんてそうそうできる事じゃ無いわよ。やっぱり流牙と同じ守りし者なのね。でもこれではつきりしたわ」

「はつきりしたって……何が?」

「流牙、あなたは莉杏さんの事をとても大切に想ってる。そして、莉杏さんもきつと……だから、宣戦布告よ!」

結菜はビシツと流牙を指差して宣言する。

「せ、宣戦布告?」

「ええ! 私と久遠は絶対にあなただを莉杏さんから振り向かせるわ。そして、絶対にお互いを愛し合う本当の織田家の夫婦になってもらうわ!!」

「おお、そうだな! 流石は結菜だ!」

「ちなみに、私の予定では久遠と流牙の子供は織田家次期当主！そして私と流牙の子供は黄金騎士の後継者として育てるわ！これで後継者問題は解決ね！」

まさかの織田家の未来の当主どころか未来の黄金騎士の後継者のことを考えている結菜だった。

「うおおおおおい!?!ちよつと結菜!?!君は何を言ってるんだ!?!」

「そ、そうだぞ結菜！まだ我には子供の事は……」

「そんな事を言ってる余裕は無いわ、久遠！これは流牙の妻としての責務よ！どんな手を使っても流牙を魅了しなさい!!」

「み、魅了か……よし！我に出来ることを全力でしよう！」

「それでこそ私の久遠よ!!」

流石は親友と言う名の夫婦の会話に流牙も頭を悩ませた。

「お二人はお忙しそうだから、そろそろ立ち去らせてもらうよ……」

暴走する二人を止める術を知らない流牙はこっそりとその場から逃げ出そうとする。

「逃がすかこの女誑しめ!!」

「今日は屋敷で泊まりなさい!!」

しかし妻の二人がこのまま逃すはずがなかった。

「俺は鬼狩りの仕事があるから失礼します!!」

流牙はこの世界に来た初日の夜と同じく全速力で逃走する。

「待てえいっ!!!」

「か、勘弁してよおっ!!」

久方ぶりに流牙を狙う追いかけっこが始まってしまった。

今度は久遠と結菜の二人だが途中で麦穂や三若や流牙隊の三人も参加してきて城下町を舞台にドタバタした追いかけっことなった。

結局最後は鬼柴田の壬月に怒鳴られ、説教を受けるといふ結果になってしまったが、流牙の女難はまだ始まったばかりだった。

☆

ドタバタの追いかけっこから少し経ち……穏やかな夜を過ごしていたある夜、遂に美濃との決戦の時となった。

織田を先頭にあちこちの小豪族が名乗りを上げて集結していく。

流牙隊は以前稲葉山城を調べた時に見つけた獣道を進んで城内に進入して城門を開ける事となった。

そして、例によって戦には参加しない流牙は陣で久遠の側にいた。

着々と作戦が完了していき、一つ一つ城攻めが近づき、久遠は本陣を動かし始める。

「時は来た！美濃の虻、斎藤山城より受けた国譲り状を今こそ現実にする時だ！勝負は

二度あらじ！皆、奮え！」

織田家が一気に攻める時が来るがここで一つの変化があった。

「あれ？流牙……？」

気がつくくと久遠の隣にいた流牙は陣から姿を消していた。

☆

その後、戦は織田が優勢となり、織田家最強の森一家の桐琴と小夜叉が前線に出てきた。

そして、森一家が城門をあつさり突き破るとそこには信じられない光景があった。

「何だあ……？鬼の死体……？」

そこには数多の鬼の死体が転がっており、煙のように消滅していつてる。

「おい、母。あれ……」

小夜叉の指差した方には暗闇の中で輝く黄金の光があった。

狼をモチーフにした金色の鎧を纏うその者は金色の剣を手に鬼を一掃し、全ての鬼を

斬り倒すと黄金の鎧が解除される。

そこにいたのは漆黒の魔法衣を身に纏う……。

「あ、みんな。お疲れ」

久遠の夫にして流牙隊の頭、道外流牙だった。

「お、お頭あつ!？」

「流牙様あつ!？」

「ど、どうしてここに流牙がいるんだよ!？」

「扉、閉まってましたよね?」

「どうやって乗り込んだんだの!？」

「確か久遠様と一緒に陣にいるはずですが……」

「流牙!何故お前がここにいる!?!そしてどうやって先回りをした!?!」

ひよ子、転子、和奏、雛、犬子、麦穂、壬月の順で驚いていると流牙は牙狼剣をしま
いながら答える。

「何故って、ザルバが鬼の気配を察知したから来たんだよ。あと、正直に門から入るわけ
にはいかなかったからあれを使った」

流牙が指差した方には城に矢が突き刺さっており、その後ろには長い紐が繋がれてい
た。

「矢と、紐……?？」

「遠くから紐をつけた矢を投げて城に差して綱渡りをして来たんだ」

『『……はあつ!?!』』

流牙の衝撃的な発言に一同声を上げて驚いた。

約十分前……久遠と一緒に陣にいた流牙はザルバの呼び出しでこっそりと抜け出した。

『流牙、鬼の気配だ。面倒だがあの城の中からだ』

「城の中か……今はみんなが城攻めをしているから正面から行くのは難しいな。それなら……」

流牙は魔法衣から流牙隊の装備の中から少しもらった矢が入っている矢筒と丈夫な紐を取り出した。

紐をしつかりと近くの木に括り付け、紐の先を矢の後ろに結ぶと弓を使わずに思いっきり矢を投げ飛ばした。

「はっ!!」

紐の付いた矢はしつかりと城に突き刺さり、なんの障害もない一直線の道が完成した。

「ふっ、はああああつ!!」

そして、流牙は気合いを入れると紐の上を走り、門の開閉に苦労していた織田軍を見下ろしながら見事な綱渡りをしてあっさりと城内に進入した。

城内に進入するなりどうやって進入したか不明だが複数の鬼を発見し、牙狼剣を抜き、ガ口の鎧を召喚しながら鬼の討滅をするのだった。

「何だその無茶苦茶なやり方は……」

「流石の森家でもそんな馬鹿げた事はできないぜ……」

織田最強の桐琴と小夜叉も流牙のやり方に呆れ果て、

「ころちゃん……私達のお頭つて凄いな……」

「凄いなというか、もはや神業だよ……」

ひよ子と転子は自分達のお頭の凄さに乾いた笑みを浮かべ、

「なあ、もし流牙が戦に加わったらもつと楽に終わるんじゃないか？」

「そうですねえ……剣術と体術は超一流で矢と紐だけであつさり城に進入できますし

……」

「もう流牙様一人でいいんじゃないかなあ……？」

和奏と雛と犬子は流牙のハイスペックに軽く心が消沈し、

「でも流牙殿は人を殺さない、戦に参加しないという固い約束を久遠様と交わしていますからね……」

「全くもつたない……その力があれば歴史に名を残す戦国最強も夢ではなからうに」

麦穂と壬月は流牙の実力や能力を知っているからこそもつたないと苦笑を浮かべた。

天下の名だたる堅城と呼ばれた稲葉山城を矢と紐だけであつさりと進入した流牙に

一同は複雑な心境だった。

「さて、俺は鬼を討滅したから久遠の元に戻るよ。みんな気をつけてね」

「……待ちな、小僧！」

立ち去ろうとする流牙に少し不機嫌な様子の桐琴が止めた。

「……何？」

「私達森一家より先に城に入っておきながらそのまま黙って帰るとは良い度胸じゃないか」

「俺は鬼を討滅しただけだ。戦ならあんた達の仕事だろ？」

「人を斬らない信条らしいが、そんな事でこの戦国の世を生きていけると思っているのか？」

「生きるよ。俺は死なないし、必ず生きて鬼からみんなを守る」

「そう言う台詞はな……強くなきゃただの戯言だ!!」

桐琴は東海一と謳われる槍を流牙に向けて振り下ろした。

流牙は牙狼剣を取り出して抜刀し、桐琴の槍を捌いて弾き返した。

「は、母の槍を捌きやがった!？」

森一家の当主である桐琴の槍を捌いた流牙に小夜叉だけでなくこの場にいた全員が驚いていた。

流牙と桐琴の剣と槍の刃を交わし、桐琴は面白いと思ったのか笑みを浮かべて槍を引いた。

「……はっ！どうやら口先だけじゃ無いみたいだな。小僧！今度また会ったら手合わせを願おうか？」

「時間があつたらね。じゃあね、桐琴さん」

流牙は軽く手を振りながらその場を後にした。

その後、稲葉山城内の戦いは鬼を流牙が討滅した事もあつてあつさりとカタが付いた。

稲葉山城に入城した久遠は稲葉山城を岐阜城と改名した。

岐阜というのは周の文王が岐山より起こり、天下を定む……という故事からとつたらしい。

この国の歴史にはあまり詳しく無い流牙にはちんぷんかんぷんだったが、久遠は岐阜という名前に天下布武の決意を表明したのだ。

流牙は戦には参加出来ないが、久遠の夫として久遠の進む道を見守ろうと思うのだつた。

☆

それは朝に長屋でのんびりと寝ている時だった。

「D・リンゴのケバブ食べたいなあ……」

流牙の協力者である謎のお爺さんであるD・リンゴのケバブは好物であるのでこの世界に来てから和食中心の食事だったので、ケバブを食べている夢を見ていた。

「いつまで寝ている！さっさと起きろ！」

「ぐおっ!？」

腹の上に思い衝撃が走り、流牙は目を覚ますとそこには……。

「久遠!?!なんだよこんな朝っぱらから!」

流牙の上に馬乗りになっている久遠であつた。

「ちよつと遠出するからついてこい!」

「またいきなりだな……」

「思い立つたが吉日とも言うからな。ついて来い流牙」

「ついていくのはいいけど、何処まで？」

「遠くだ」

「その遠くがどこなの？」

「……………」

「なんで黙る!？」

「言いたくないから黙ってる。壬月にも麦穂にも内緒で行く。だから供をしろ」

「織田家当主様がそんなことしていいの？」

「良い。我は十年後のために今動くのだ。文句は言わせん」

「文句を言わせないなら、ちゃんと伝えてからのほうが良くないんじゃないのか？」

「……………」

「また黙る……何でだよ」

「やかましく言われるのが嫌だ」

「子供……」

「ふんっ。子供で悪いか。人としての経験は壬月たちのほうが上かもしれないが、好きなものは好かんだ」

「まあ。気持ちにはわかるけど」

「供をするのはいいけど何人いる？」

「多くは要らん。流牙部隊の主要な三人でいいだろう」

「了解」

「ほら、とにかくさっさと起きろ」

「起きるけどさ……とところで、見えてるんだけど」

「何がだ？」

「それ」

目をそらしながらスカートの所を指差した。

「それ?.....つ!!いい.....いつ.....からだ?」

「最初から」

「そうか。ならば思い残す事はないな.....」

「え?」

すると久遠はゆらりと立ち上がり.....。

「そこに直れ!根切りにしてくれるわ!」

刀を抜いて流牙に襲いかかった。

「危なっ!!?」

布団から飛び出し、間一髪で避ける。

「おおおおお、落ち着け!下着見られたぐらいで刀を抜くな!!」

「うるさいうるさいうるさい!好きな男に見られて死にたいと思うから、刀を抜いたのだ!貴様も殺して我も死ぬ!安心して死ねい!」

「安心要素がどこにも無いんだけどおっ!」

「ご乱心となった久遠は無茶苦茶な軌道で刀を振るう。」

「うおおおおお?!本当に殺す気か!?!久遠、少し落ち着いてくれ!!」

久遠が振り回してくる刀を流牙は冷静に見極めて避けていく。

「当たり前だ！死ぬ！いや我が殺す！共に土塊となれば寂しくもあるまい！安心せい！」

「まてまて！可愛いのにそんなことで死のうとするな!!」

「……………っ！」

「お、おい？どうした久遠？急に止まって」

「……………うな」

「え？」

「か……………かわ、いいとか……………言うな！」

「なんで？とつても可愛いのに」

「……………っ!!!こここここここの痴れ者め！ねねねきりにしてくりえりゆわ！」

舌を噛みすぎて^{!!}もはや何を言ってるのか分からない状態だった。

「ああもう、どうしたらいいんだよおっ!？」

混沌と化したこの場に救い主が現れる。

「あー、はいはい。落ち着きなさい久遠。照れ隠しに逆ギレしても、噛んでいたら迫力も何もあつたものじゃないわよ」

結菜が久遠をなだめる為に来てくれた。

「ゆ、結菜あ……………た、助けろお……………」

涙目になりながら久遠は結菜の後ろに隠れてしまう。

「た、助かった……結菜、ありがとう」

「心配しなくても良いわ。可愛いって言われて恥ずかしくなっただけならいいのだから」

「ああ、なるほど。慣れていないんだな」

「まあね」

「そ、そんなことないぞ！べ、別に我はいつもと変わらん！何を勝手な事を言うか！」

「……私の背中に隠れながら言っても。まーったく説得力ないわよ？」

「ぐぬぬ……」

「ふふっ……やっぱりなんだかんだ言っても年頃の女の子だね。それで、結局用件はなんだっけ？」

「ほら、拗ねるのもいい加減にしなさい。流牙に用事があるんでしよう？さっさと聞かないと、壬月や麦穂が事態に気付いてしまうわよ」

「うっ……そ、それは嫌だ」

「なら、さっさとしなさいって」

「う、うむ……流牙、我について来い」

「それはいいけど、どこまでか言ってくれないと準備できないぞ」

「堺に行く。その後、京に寄るつもりだ」

「堺と京って確か西の方にある大きな都市だよな？」

「うむ。美濃を評定した今、将来のことを考えるために、広く見聞を広めたい。堺では堺の商人どもと繋ぎを持ちたい。今後は米中心ではなく錢を中心にすべてを動かす」

「ふむ。西の地方の鬼を調べるのにも丁度いいな……分かったよ、久遠は俺の部隊で護衛する。出発はいつから？」

「今からだ」

「マジかよ……準備なんてまだ」

「それならば、既に手配は完了しておりますよ」

「詩乃？」

いつの間にか詩乃が起きていた。

「流牙様の馬と荷台の準備を。流牙様は先に久遠様とご出立を。ひよところとあとで追いますので」

「そっか、ありがとな詩乃」

流牙は詩乃の頭を優しく撫でる。

「っ！は、はい！道中、お気をつけくださいませ……」

「ああ、速く来てくれよ、先に行って待ってるから」

「は、はい!!」

詩乃の笑顔の返事を聞いた俺はすぐに自分で出来る準備をする。

「流牙!早うせい!」

「はいはい、それじゃあ結菜。行ってくる」

「ええ、いつてらつしやい」

流牙と久遠は西に向けての旅を始めるのだった。

『都　　Capitol』

久遠と堺に向かつて出発して数十分……ようやく馬の走るペースを落とした久遠に流牙は尋ねた。

「なあ、久遠。一ついいか？」

「なんだ？」

「これからの行動は決まってるのか？」

「そうだな。……まずは美濃を統治し、その後、多方面を同時に攻略する事になるだろう」

「多方面、というと？」

「尾張、美濃両国を押さえた我の当面の敵は、伊勢の坊主と一揆衆。……それに江南の六角、越前の朝倉、その三勢力だ」

「まだまだ戦は続くのか……」

「ちなみに北の浅井には我の妹が興入れしておる。まず敵に回ることにはなからう」

「え？久遠、妹がいたんだ。それで、その妹さんの嫁いだ浅井って奴は信用できるのか？」

「出来る。小心者のきらいもあるが、まっすぐで、純粹で根はとてもいい奴だ」
「そうか。一度会つてみたいな」

まだ見ぬ久遠の妹夫婦に流牙は会つてみたいなと思うのだった。

それから少しして詩乃たちと合流し、船などに乗つて数日後、堺に到着した。

大津に到着したがひよ子が船によつてしまい、一休みするために転子がオススメの茶屋を提案してそこに向かった。

茶屋で休んでいると流牙は周囲にいる多種多様な人々を見て呟いた。

「戦乱が続いているけど、少しは平和なのかな？」

「プツ……なかなか楽天的な人だね、君は」

流牙の呟きに噴き出したのはすぐ側にいた浪人風の少女だった。

「やっぱりそんなことは無いのか」

「当然と言えば当然だろう？ 地方でさえ、すでに下剋上の世になっているよ。まあそういう世だからこそ、私のような素浪人にとつては有り難いだけだね」

流牙は浪人の少女から色々な話を聞き、お代は団子の支払い持ちとなった。

あまりこの世界の情勢などを知らない流牙にとつては有意義な話だった。

「さて、私はそろそろ行くよ。団子、ごちそうさま」

「ああ。お題は俺が払つておく。旅を気をつけてね、あと士官成功も祈っているよ」

「ははっ、そちらこそ旅の安全を祈ってる。じゃあね、お兄さん」

屈託の無い笑顔を浮かべながら少女は茶屋を後にし、最後にちらつと流牙の姿を見ながら呟いた。

「不思議な黒衣に左手中指に銀の指輪……なるほど、あれが噂の天人か。ふふっ、これからの行く末が楽しみだな」

少女は流牙の正体を知っており、これからの流牙の行動を楽しみにしていた。

そして、流牙達はしばし旅の疲れを癒し、小腹を満たした上で堺に向けて出発した。

堺に到着して早速中に入って大通りを歩いているのだが、通りの両端には比較的大きな商店が数多くあり、人足や町娘、商人たちがごった返していた。

「へえー。凄いな、かなり賑わってるじゃないか」

「反物や木材、鎧刀鉄砲、食料も豊富で、ホント、なんでもござれですね、この町は」

「ああ！あの髪飾り可愛い！あんな意匠の、清洲ではみたことない！」

「あ、ホントだ。でもちよつと高い。……あ！でもあつちのも可愛くない？」

「うわー！すつごく可愛い！欲しいなあ……」

「うーん、これは一日でお金が無くなっちゃいそうね」

「おいおい、夢中になりすぎだろ。言つとくけど、今回は久遠の護衛だからな」

「良い。この町では、どのような理由があつたとしても武士同士の争いはご法度だ。堺

に入ってしまったれば比較的的安全と言える」

「この町で喧嘩をすれば、会合衆を敵に回しますからね。会合衆が物を売らない、と決定すれば、小名ならばすぐに干上がってしまうでしょう」

「会合衆の力……というよりも、銭の力を怖がって、皆、堺では規則を守って大人しいのですよ」

「そつか。銭の力か……。喧嘩とかのトラブルには巻き込まれないようにしないとな」

「とらぶ……？まあそういうことだ。二人の手綱を放すなよ？」

「何かあつたらすぐに俺が動くよ。それでこの後どう動く？」

「まずは店々を回った後で湊に向かいたい」

「堺津は西国海運の中心、それに大陸や南蛮との貿易によつて昨今は特に繁栄していると聞きます。狙いはやはり南蛮ですか」

「うむ。南蛮商人と繋がりを持ち、鉄砲の調達量を増やしたい。それに玉葉は国内では安定供給が出来んからな。だが、南蛮の知り合いはおらん。流牙、何とかならんか」

「俺に振るの!? うーん……あ、宣教師っている？」

以前海を越えた国から南蛮人という人間が貿易のために来ていると聞いたことがあるのを思い出した。

そして、南蛮人の宗教を広めており、天守教と呼ばれている。

「宣教師というと、天守教の宣教師ですか？確かに堺には天守教の宣教師が寺院ゆ構えていると聞いたことがありますね」

「ならばそこに南蛮商人を紹介してもらうか」

「ひとまずそれだな。おーい！ひよ、ころ、行くよー！」

「はーい！」

そして道行く人に教会が無いか尋ね、裏町を通つて行くとお目当の教会を発見した。

流牙の想像した教会と違つてかなり質素なのだつた。

神を信じていない流牙はその程度の興味しかなかったが、ひとまず教教会の中に入るとそこには金髪に不思議な身なりの少女……この世界の言葉に表すと南蛮人の少女がステンドグラスの前で跪いて祈りを捧げていた。

少女を見守つていた流牙たちに他の信者らしき人達を連れて別室に通された。

やがて幾ばくかの時間が過ぎ、祈りを終えた少女が俺たちを出迎えた。

「……こんにちは。皆様もお祈りですか？」

「あ、日本語……えつと、司祭に用事があるんだけど」

「こちらの礼拝所の司祭さまは、今、お出かけでございます。私も司祭の身でありますので御用は私がお聞き致します。それにしても……ふふつ、私が日本語をしゃべっているのに驚かないのですね」

「いや、一応驚いているよ。でも上手だね」

「子供の頃から、母に教えているのです。なかなか上手なものでしょう?」

「ということはお母さんは日本人? 君はハーフなのかな?」

「はい。父はポルトウス・カレの武人。母は日本の名家出身と聞いております。我が名はルイス・エーリカ・フロイス。母が与えてくれた日本式名は、ジュウベエ・アケツと申します」

「あけつ……ふむ。なるほど、あなたのお母上は明智の方ですね」

「アケチ?」

詩乃はエーリカの言葉から自身の持つ知識からそのルーツを読み取った。

「はい。アケツではなくあけち。明るいに智恵と書いて明智と読みます。清和源土岐氏の支流で明智の住人、美濃でも名流の家ですね」

「なるほど。母のファミリーネームは明智と言うのですか……ふふつ。なんだか自分のルーツがこのような形で判明するのは、とても嬉しいですね」

「ということは、君の名前は明智十兵衛つてことか……ところで、エーリカさんは何しに日本へ?」

「私はとあるお方にお会いするためにこの日の本を訪れたのです」

「とあるお方?」

「はい、母に聞いた日本のサムライのトップに立つアシカガシヨーグンに……」

「足利将軍に会いに来たのか。……ならば貴様、我一緒に來い。うむ。我は五日後に京に向かい、将軍に拜謁するつもりだ。我について來れば、将軍に拜謁することも可能かもしれないぞ」

足利将軍はこの日本を統べる総大将である。

「そうですね。南蛮人のあなたが将軍や畏きところに拜謁を賜うことはまず不可能でしょう。強いツテがあるのなら話は別ですが……」

「そういったものは残念ながら……しかし、出会ったばかりの方々にご迷惑を掛けるのも気が引けてしまいます……」

「ふむ？我は一向に構わんが」

久遠はエーリカを助けようとしたが、流石に突然過ぎてエーリカが断るのも無理も無かった。

「久遠……あつて間も無いのにエーリカさんに信用出来ないだろう。エーリカさん、一つ提案があるけど良いか？」

「提案ですか……？」

「等価交換で俺たちと契約しないか？久遠は南蛮人と繋がりをもちたい、だから堺にいる間の南蛮人の通訳を頼みたい。もちろん、宿代食事代など負担する。その通訳のお礼

に足利將軍に拝謁させる……つていいのはどうかね？」

「……良いでしょう、その契約であれば私自身も納得ができます」

エーリカも納得し、流牙との契約が成立した。

「よし！なら契約成立だな。これからよろしくね」

「ええ。よろしくお願い致します。まさかこの国で契約の概念を知っておられる方と出会う事になるとは。あなたはこの日の本の方では無いのですか？」

「まあそうだな。俺にとつて契約は身近なものにあるからね……」

流牙はちらつと左手のザルバを見ながら答える。

「とにかく、約束は守るから安心して」

「はい。あなたを信じましょう。では私が乗ってきた船の、フェルナン・デ・ソウサ船長をご紹介しましょう」

こうして久遠は会合衆と呼ばれる大商人たちとも面を通し、エーリカの知人の南蛮商人とも関係が持てた。

武器・弾薬などの供給元を確保が出来た事に久遠は喜んでいたが、流牙には個人的にはそれ以上の収穫があった。

それはこの日本には無く、ヨーロッパにある果物や家畜なんかを手に入るように交渉が出来た。

病原菌なんかの対策もしないと駄目だが、それは詩乃たちに手伝ってもらいながら様々な手を打つつもりである。

ちなみに魔戒騎士である流牙は毒の耐性があるので特に問題無く食べる事が出来て大満足だった。

☆

堺に滞在しているある日、流牙は久遠と一緒に堺の町を出掛けることとなった。

目的は結菜への土産を買うためだ。

「何も買ってこなかったと言ったらどうなるかくらい、想像も付こう」

「雷が落ちるね」

「おや、気づいていたか？」

「まあね。よし、結菜に何を買おうかな？」

流牙と久遠は小物や飾り物が多く並んでいる小物屋に向かった。

アクセサリーなどを普段から身につけている流牙は慣れた感じで見えていくと目を惹かれるものがあつた。

「おっ？これは……」

流牙が見つけたのは蝶の飾りがついたかんざしだった。

結菜は帰蝶という名があり、本人も蝶の髪飾りなどを持っていたので流牙は直感でこ

れが良いと思った。

その隣に対となったデザイナーの色鮮やかな蝶のかんざしがあり、思い立ったが吉日と言わんばかりにその二つのかんざしを持った。

「すいません、これをください」

「流牙!?! そんなあつさりど結菜への土産を決めたのか!?!」

「こういうのは直感だよ。あまり悩みすぎるといけないからね」

かんざしの路銀を払い、木の箱に入れてもらって店主からかんざしを受け取る。

「本当にそれで良いのか?」

「良いんだよ。仮に結菜が気に入らなかつたらその分何かで埋め合わせをするからさ」

「そうか……」

「それから、はいこれ」

「えっ? 流牙、お前……」

「久遠に似合うと思ったからね。思い切つて買ったんだ。お土産というより贈り物だね」

「……まつたくもう。お前という奴は」

「気に入らなかつた?」

「この度の土産だからな。美濃に戻つてから、結菜と一緒につけてもらうことにする。」

……良いか？」

「ああ」

「だが、先にお前につけてもらうのは正室の我だからな！忘れるなよ！」

「俺で良ければ喜んで」

「うむ。約束、忘れるでないぞ」

久遠はよほど嬉しかったのかその後は上機嫌で買い物続けた。

そして、流牙はこつそりともう一つ土産を買っていた。

それは桜の模様が描かれた櫛で遠く離れている大切な人……莉杏への贈り物だった。

心配をかけた莉杏へのお詫びと日頃の感謝の気持ちを込めての贈り物だ。

ちなみに男性から女性に櫛を贈るのはプロポーズと同じことなのだが……外界から

隔離された無人島で十年も過ごして流牙がそのことを知るはずもない。

その後、色々な店を回っていると流牙の目にあるものが映った。

「え？これは……」

「見たことないものだな。琵琶に似ているが……楽器なのか？」

「ギターって言って多分南蛮の楽器だよ。驚いたな、ギターも売ってるなんて」

それは琵琶に似た絃楽器、いわゆるクラシックギターと呼ぶものだった。

「流牙よ、このぎたあを弾けるのか？」

「うん、まあね。結構うまいよ?」

「そうなのか。よし、店主よ。このギタあを買わせてもらう」

「えっ!?! 久遠!?!」

「さっきのかんざしの札だ。それにお前の演奏を聞いてみたいからな」

久遠は悪戯つ子のような笑みを浮かべながらギターを専用のケースに入れられ、路銀で支払うとそのまま流牙に渡された。

「えっと、ありがとう、久遠」

「気にするな、その代わり良い演奏を期待しているぞ」

「あはは……久しぶりだからちやんと練習しておくよ」

ギターを魔法衣の中にしまい、残りの時間を久遠と二人でゆっくり過ごすのだった。

『舞　　Dance』

堺から次に流牙達が向かったのは西の都、京都。

しかし……。

「京都って確か、日の本で一番優雅な所なはずだよな……う？」

今まで見た町の中で一番静かで、一番みずぼらしい町だった。

「応仁の乱以降、京は寂れる一方なんですよ。何でも公方さまは言うに及ばず、畏き所でさえ、その日の食べ物にご苦労なさっていると聞きます」

「戦乱の世とは言え、お勞しい限りですね……」

「どこも大変なんだな……」

そう話しながら町を歩いていると……。

「お頭、危ない！」

「うおっ!？」

後ろから何かが走って来て流牙にぶち当たった。

「流牙!」

ぐらりと傾いた時、流牙はとっさに地面に背を向けてその人影を庇って倒れた。

「いてて……え？」

「お頭、大丈夫ですかっ!？」

「お怪我はありません……うわー、綺麗な人！」

ひよ子が驚き、流牙は目の前にいる少女を見つめる。

陽光を浴びて光り輝く艶やかな髪に紫色の瞳が流牙を見つめていた。

久遠と似た綺麗な容姿だが、触れたものを骨まで切り落とすような殺気に満ち溢れていた。

「えっと、大丈夫？」

「借りるぞ」

「えっ?」

少女は流牙の腰にあった牙狼刀を引き抜いて立ち上がった。

向こうから複数の男達が近づいており、どうやら少女を狙っているようだった。

「穏やかな状況じゃないな……」

「ふむ。どうやらあの女が追われているようだな。……我への刺客かと思ったが」

「刺客じゃなくても、面倒なことに巻き込まれているな。しかたない、やるか!」

「ふふふ、流石は守りし者だな」

「久遠たちは下がって。エーリカ、行くぞ」

「はい！」

久遠はこの状況を楽しそうに見つめ、流牙とエーリカで少女の助太刀に入る。

「助太刀するよ」

「微力ながらお手伝い致します」

「……要らん。それにお前は刀を持ってないじゃないか」

「そう言うな。こっちの好きでやってるからね。それに刀が無くても戦えるからね」

流牙は拳を交差させてからファイティングポーズを取る。

「……好きにせい」

「好きにさせてもらおうよ。さあて……女の子一人に男達が囲むこの状況、莉杏がブチ切れ事案の第二弾だな。とりあえず怪我しない程度に痛めつけるか」

流牙と少女は同時に動いた。

流牙はまずは男達の武器を捌き、破壊しながら急所を軽く攻撃し、悶絶して動けなくしていく。

「さて、あつちは？」

少女は見事な剣捌きで男の持っていた槍を細切れにした。

「……粧がつているのも良いが、少しは自分の腕を弁えたほうがよいぞ」

「へえ……やるねえ」

少女の強さに感心していると男たちは仲間を呼んできた。

「まずいな、仲間を呼んできたな」

「乱戦になる前に止めないと」

「だな。しかし、それにしても……すごいな、あの子」

戦っている少女は息を荒げる事もなく、刀と蹴り技を駆使してまるで舞いのように刀を振っている。

流牙も軽く男たちを相手にしていると、この世界に来てから聞き慣れた鉄砲を構える音が遠くから聞こえた。

「っ!?!危ない!」

流牙は牙狼剣を魔法衣から取り出すと男に向けて放たれた弾丸を鞘で受け止めた。

「大丈夫か!?!」

「な、何で俺を……」

「俺はあんたを死なせるつもりはないからな。撃たれる前に早く逃げろ!」

「ひいひいっ!?!」

鉄砲で狙われることを知り男たちは一斉に逃げていった。

「余計な事を……返す」

何かを知っているのか少女は牙狼刀を流牙に投げ渡してそのまま京の町中へと消え

ていった。

「なかなか良いものを見たな」

「ああ、あの子は強いな。魔戒騎士と同等に戦える強さだ」

「ほお。そこまでか。流牙、魔戒騎士の最強の称号を持つお前とどっちが上か？」

「そうだな……実際に戦ってみないとわからないけど、剣士としては是非とも相手をしてみたい」

謎の少女の剣の腕に一度手合わせをしてみたいと思う流牙だった。

「それにしても……鉄砲の音、気になりますね」

「周囲を探ってみましたけど、鉄砲を撃った人物は見当たりませんでした。よほどうまく隠れているか……」

「それとも鉄砲の音真似がすごくうまい人とか！」

「なるほど、確かにその可能性もありますね」

真剣に考えるエーリカだが、そんなはずはない。

「ええええ……ボケたつもりだったのにい」

「音真似じゃないよ。俺たちには見えない所からの狙撃だろう。性能が良く、遠距離射撃のできる者だね」

そうやって色々考えていると、周囲が騒がしくなり、京の都の治安を守る検非違使が

近づいてくる。

「ここに居たら面倒な事になる。みんな、逃げるぞ」

検非違使に絡まれないように走ってその場から離れた。

「詩乃！大丈夫か？」

「は、はい……ひやつり、流牙様！何を……!？」

みんなに比べて体力が無く、既に息切れしている詩乃を流牙は抱き上げた。

「詩乃は体力ないから走れないから運んでやるよ、嫌か？」

「え、いや、あの……ぜ、是非ともこのまままでお願いします!!」

「よし、しつかり掴まってるよ！」

突然抱き上げられて少し混乱した詩乃だがこんなチャンスは滅多にないと顔を赤くしながら頷いた。

「全く、この誑しが……」

「いいなあ、詩乃ちゃん。お頭に抱き上げられて……」

「つて言うか詩乃ちゃんを抱き上げたまま速度を落とさず、息を切らずに走れるつて凄
いよね……」

「とてもお優しいのですね流牙さんは」

久遠はジト目で睨みつけ、ひよ子と転子は羨ましそうに見つめ、エーリカは微笑まし

く見ていた。

しばらく走り、都で一際大きな屋敷の前で止まる。

「ふう、ここまで来れば大丈夫だろう。詩乃、降ろすよ」

「は、はい！ありがとうございます！」

名残惜しかったが流牙に密着できてご満悦な詩乃だった。

そんな詩乃にひよ子とと転子が近づいて尋ねた。

「ねえねえ、詩乃ちゃんどうだった？」

「流牙様に抱き上げられてどんな気分だった？」

「えっと、その……凛々しいお顔と幼さの残る瞳を間近で見られて……もう最高でした」

「羨ましいい〜」

「ところで適当に来ちゃったけど、ここはどこだ？」

「ここは足利將軍の住まい、二条館ですよ……」

「え？ここなの!？」

適当に走ってきたが目的の場所に運良く辿り着いた。

しかし、屋敷と言っても門はかなりボロボロになっていた。

「ここが將軍の屋敷……？本当にここなのか？人の気配がないような……」

「いえいえ。間違いなく住んでおりますよ」

「……誰だ？」

流牙達の背後に現れたのは右目を髪で隠した上品な服を着た少女だった。

「ふむふむ……小名風を装った方が一名。その護衛らしき方たちが四名、異人さんが一名、ですか……珍しい組み合わせですなあ。それで、將軍さまに拝謁に来られたのですかな？」

「そうだ」

「……… 手土産は？」

「ある」

「これはこれは！ようこそいらっしゃいました！さあさあご遠慮なくお入りくださいませー」

いきなりテンションが変わりこちらに來い來いと手招きをする。

「いきなり雰囲気変わりすぎだな。あんたは誰だ？」

「これは申し遅れました。我が名は細川与一朗藤孝。通称は幽。足利義輝さまの御側衆を務めております……と名乗ったところで、さあさあ、早速お持ちになった手土産をそれがしに」

「流牙、渡してやれ」

「ああ、とりあえず目録だけどいいかな？」

「はいはい。現物をいただけるなら、全く問題ございません」

「えつと、尾張国長田庄住人、長田三郎より足利將軍へのご進物目録。銅錢三千貫、鎧一領、刀劍三振り、絹百疋だ」

「銅錢三千貫!?これはこれは誠に剛毅であらせられる!いやあさすが尾張と美濃に跨る家のご当主であらせられますなあ」

久遠の正体をすぐに見破った幽に流牙立ちに緊張が走る。

「では……お客様方を、二条館客殿に案内しましょう」

そうして流牙たちは幽に案内され、二条館に招かれ入っていった。

「それでは公方様にお繋ぎ致す。……今しばらくご歓談の程を」

素晴らしい残して幽は流牙達を古びた客室に案内した。

「……流牙、あやつをどう思う?」

「幽さん?食えない人だと思つたかな」

「うむ。あやつ、食えん」

見た目や振る舞いは武士の礼儀作法に沿っているが、久遠の正体を見破りながら脅していた。

「まあとにかくあの人にはなにか魂胆がありそうだな。で?どうなんだ、幽さん?」

「いえいえ、別に魂胆などございませんよ?」

「ひゃーっ!?!」

「それにしても、なかなか鋭いお方ですな」

「それほどでも」

いつのまにか幽が部屋の端っこにいて茶を飲んでいた。

「あ、粗茶ですがどうぞどうぞ。織田三郎信長殿?そして……田楽狭間の天人、道外流牙殿」

「やっぱり、最初から俺と久遠の正体に気づいていたんだな」

「で、藤孝とやら。……私の事を知ったとして、何とするつもりだ?」

「今のところは特に何も。ただ公方さまのお側衆を自称する私としては、今後のことを考え、各地の有力者と懇意にしておく必要がございますば」

「その割に人を見ん。……我は好かん。最初に言え。我を試すのならそれなりの覚悟を持つておくがよい」

「……はっ。でもねえあの場でご正体を見抜いたならば、進物は置いていってくれました?」

「織田家当主として正式に公方と話をしてきたわけではない。……見抜かれていたら踵を返しただろうな」

「でしょう。だからあれは方便ということ一つ手を打って頂けますと助かるのです

が……どうでございましょうねえ？」

「將軍様はそれほどまでお金に困っておいでなのですか？」

「それはもう……まあでも毎日毎日町を練り歩いて悪漢どもから銭を巻き上げてるらしいですが……」

「今、悪漢から銭を巻き上げてると聞こえたけど？」

流牙の耳の良さに幽は驚いて思わず口を手で押さえた。

「っ!? 良い耳をお持ちですが、なんでもございませぬ! こちらの話でございますよ!」

「本当に……? それじゃあ……」

流牙は出された欠けた茶碗を手に取り、耳に当てる。

「何をなさっておるのですか？」

「俺には物に込められた声を聞けるんだ。これで將軍がどんな人なのか確かめようと思つてね……」

目を閉じて耳に神経を集中すると將軍の姿がどんなものか聞こえてくる。

「……白に近い綺麗な長髪、左右に開いた大きな額、紫色の瞳……?」

「なっ!? ぶ、無礼ですぞ! 流牙殿!!」

將軍の姿がピンゴと言わんばかりに正解だったのか幽は珍しく大慌てをした。

「え? ダメ? じゃあ次はそこらへんの道具を……」

「お、お待ちくださいませー!!」

流牙の能力……いわゆるサイコメトリーに翻弄される幽だった。

その光景に久遠達は大笑いをして時間が過ぎるのだった。

「はあはあ……全く、物に込められた声を聞くとは流石は天人と言うべきですか……ではそろそろ公方様の元へ案内仕る」

「デアルカ」

「それで、流牙殿はどういたしますか?」

「俺?俺は堅つ苦しいのは苦手だから庭で良いよ。のんびりみんなと一緒に待つてるから」

「……なるほど。面白いですなあ。これはやはり、公方様には会わせられない」

「どうして?」

「いえいえ、では三郎殿。主殿に案内仕る」

客室を出て廊下を歩き、久遠とエーリカは主殿へと向かう。

流牙はひよ子と転子と詩乃と一緒に庭で平伏して待っているがかなり遅かった。

久遠がイライラしていたその時によく奥から將軍が来た。

「足利参議従三位左近衛中将源朝臣義輝様、御出座あー!」

將軍だと思われる少女が現れ、一斉に頭を下げ、流牙も慌てて下げる。

流牙はちらつと將軍を見るが、それは先程のサイコメトリーで聞いたのとはと違う体が細い子が出てきた。

ガサツ……。

「……ん？」

不審に思っている庭の一角から小さな音が流牙の耳に届くとそれは先程の乱戦の時と同じ鉄砲を構える音だった。

「下座に控えまするは、尾張国長田庄が御当主、長田上総介申すもの。幕府への献上品として銅線三千貫、鎧一領、刀劍三振、絹百疋」

「殊勝なり」

「公方さまよりのお褒めの言葉でござる。恐れ入り奉り、今後も謹んで御忠勤めされい」「忠勤？阿呆らしい」

「お、長田殿！御前であるぞ！頭が高い！控えなさい！」
「公方でもない奴に頭を下げられるか」

久遠の言葉に騒然とし、庭の一角がガサガサと動き出し、流牙は立ち上がると同時に走り出した。

「「流牙様?!」」

隣にいたひよ子達が驚くなか、流牙は魔法衣から牙狼剣を抜いて鞘から刀身を抜くと

すぐに納めて鏗鳴りを起こすと、鞆に取り付けられた三つの仕込み刃が十字に展開する。

そして、久遠を守るために右手でそのまま牙狼剣を抜き、いつでも仕込み刃を飛ばせるよう鞆を左手で構える。

「久遠下がれ！鉄砲で狙われてる！」

「何?！」

「り、流牙殿?!このような場所で剣を抜くなど無礼ですぞ!!」

「無礼?ふざけるな……妻を鉄砲で狙われて黙っているわけがないだろ!庭にいる狙撃手……撃ちたかったら撃て!その代わり、弾は全て叩き斬り、この刃を代わりに投げ飛ばすぞ!!」

本気で仕込み刃を投げ飛ばすつもりはないが、久遠を守る為に庭にいる狙撃手に向けて軽い脅しをかけた。

そのお陰もあつてか庭から驚いたような高い声が小さく響いていた。

そして、流牙の気の込められた怒声に奥にいた將軍と思われた少女はビクビク震えていた。

「……当代の公方は剣の達人と聞く。その足音などはまるで手弱女のように弱々しく、そして何より我が夫の怒声に震える者が公方であるはずがあるまい。のお、その小姓

よ」

「……………ふっ」

久遠は襖の近くで平伏していた小姓の一人に目線を向けると、その小姓は顔を上げて笑みを浮かべた。

「君はあの時の……………!?!」

それは先程町で流牙と共に戦ったあの謎の少女だった。

「用心が行き届いているようで何よりだ」

「その男が気付くのが遅かったなら、貴様の頭に穴が開いていただろうよ」

「この男はただの男じゃない。私の自慢の夫でな。……………で?」

「良いだろう、なかなか面白き奴だ。話をしてやろう」

「一葉様!?!」

「お姉さま……………」

襖が開くと中から怯えている少女が謎の少女に抱きついていた。

「双葉、代役大儀である。後ほど呼ぶ。それから……………お主よ、剣を収めよ。我が妹が怖がっている」

「あつ……………ごめん……………」

震えている少女に流牙は慌てて牙狼剣を鞘に収め、仕込み刃を閉じる。

「長田の。場所を変えるぞ。良いな？」

「デアルカ。流牙、感謝するぞ。また後で」

「ああ……」

そうして久遠と謎の少女は主殿を後にした。

「……それで、どうということが説明してもらえるかな？」

「ぎくつ!？」

流牙は有無を言わせない笑みを浮かべながら逃げ去ろうとした幽の肩を掴んだ。

その後、幽に何が起きたのか説明させることを約束させて流牙達は客室に戻った。

客室に戻るや否や、流牙は詩乃に説教されてしまう。

いくら久遠を助けるためとはいえ無礼すぎや無茶のしすぎと言う理由でぐちぐちと説教をし、流牙は軽く落ち込んでしまう。

そして、ようやく久遠と先程の少女がやって来た。

「一葉、私の夫を紹介しよう」

「夫か。……」

「やっぱりあの時の子だったんだね」

「その節は世話になったな」

「ああ。ところで君が本当に公方様なのか？」

「うむ。改めて名乗ろう。我が名は義輝。足利幕府十三代将軍である」

「君が将軍という事は……さっきの小さな女の子は？」

「あれは我が妹だ。名は双葉というが……」

一葉の妹は幽に連れられて来たが、先程の流牙の怒声にまだ怖がっているらしく幽の後ろに隠れていた。

流牙はゆつくりとその子に近づいて申し訳なさそうに小さな笑みを浮かべながら挨拶をする。

「さっきは驚かせてごめんね。俺は流牙、道外流牙だ。君の名前は？」

「……わたくしの名は足利義秋。通称は双葉と申します。あなたが……黄金の天狼様ですか……？」

「まあね。でもその天狼の本当の名前は黄金騎士ガ口と言うんだよ」

「黄金騎士、ガ口……？」

「そう。よろしくね、双葉ちゃん」

「は、はい……流牙様……」

少しだけ流牙への警戒が薄れた双葉は笑みを浮かべる。

その後、一葉から力を失った幕府の内情を伝えられ、久遠と一葉が手を組む事を告げられた。

すると一葉はある事を流牙に提案してきた。

「さて、流牙よ。我は久遠に協力してやつても良いがお前に条件がある」
「条件？」

「この日の本全域に轟いているお主の異名である黄金の天狼……その噂が本当かどうか私に見せてみよ」

「ガロの鎧を見せろということか……？」

「ほう、その金の鎧はガロの鎧と言うのか？ そうだ、それを我に見せてみる」

「……ガロの鎧は見世物じゃない。黄金騎士ガロの称号を受け継いできた英霊の魂と多くの人の想いが込められ、ホラーや鬼から人を守るためのものだ」

「なるほど、お主のお家流みたいなものか。じゃがまだ我はお主の事を認めてはおらん。それに……」

將軍として生きてきた一葉の不敵な笑みを浮かべた。

「私の最愛の妹の双葉を怯えさせた罪は重いぞ？ 幸い双葉も噂に名高い黄金の鎧を見たがっていたからな。それとも何か？ お主はこんな可愛い娘をこのまま悲しませる冷血漢なのか？」

「うぐつ……」

そう言われて心にぐさつと刃が刺さった気持ちになり、たじろぐ流牙。

「流牙……お前の気持ちはよく分かるがここは我慢してくれるか？これからの事で一葉の力は必要なんだ」

久遠からの後押しもあり、流牙は少し考えてから大きなため息を吐いた。

「……分かった。だけど、条件が二つある」

「ほう？どんな条件だ？」

「まず一つ、鎧を見せても良い人間はこの場にいる者だけ。それ以外は駄目だ」

「うむ、良かろう。我と双葉と幽の三人だな」

「次にガ口の鎧に絶対に触れないでくれ。触れたら皮膚が引き裂かれるから」

「何と!?!しかしお主は大丈夫なのか？」

「鎧は魔戒騎士である男が触れても問題はないんだ。だから絶対に触れないでくれ」

「分かった。皮膚が引き裂かれるのは御免だからな。よし、では今夜の小さな宴の席で

鎧を見せてもらおう」

「か、一葉様!?!幕府は財政難だということをお忘れですか!?!」

突然の宴の席を用意する事を決めた一葉に幽は目を見開いて驚きながら反論する。

「固いことを言うな。せっかく噂の金の鎧を拝めるのだぞ？宴ぐらい良いではないか」

「ならば我らも酒と肴を用意しよう。せっかくだから少しでも豪華にしよう」

「それはありがたい！今夜が楽しみだ！」

久遠の提案に既に息ぴったりの一葉は笑みを浮かべて今夜の宴を待ち望んだ。

流牙は気が乗らなかつたが仕方ないと言つた様子で静かにその時を待つた。

そして、夜……月が輝き、屋敷の一角で織田家と足利家の小さな宴が行われた。

この場にいる面々は流牙、久遠、ひよ子、転子、詩乃、エーリカ、一葉、双葉、幽の九人である。

早速ガロの鎧をお披露目する事になつたが、流牙はそれではいけないと思いちよつとしたサプライズをする。

「ただ鎧を見せるだけじゃつまらないから簡単な劍舞を見せるよ」

劍舞と聞き、ひよ子たちの拍手が広がる。

流牙は魔法衣から牙狼劍を取り出し、静かに鞘から抜いた。

「ほう……改めて見ると流牙の劍、不思議な拵えをしておるが、最上大業物と遜色ない輝きと鋭さを持つておるな」

灯りに反射する牙狼劍の刃を見て、一葉は一目で牙狼劍の作りが超一流の物だと分かつた。

もつとも、牙狼劍が古より何百年、何千年も脈々と受け継がれてきたとんでもない代物だとは知る由もないが。

流牙は心を深く沈めて目を静かに閉じた。

脳裏に今まで戦い、切り裂いてきたホラーや鬼の姿を思い浮かべて目を開いた。

そして、牙狼剣で普段と変わらぬ平手突きに似た我流の剣の構えをして流牙の剣舞が始まった。

周囲にホラーや鬼がいることを想定しながら牙狼剣を振るう。

ホラーや鬼を切り裂くための剛の一閃と言うべき力の込められた剣を振るい、空気を切り裂いていく。

しかし、時折強弱をつけるように指と手首を巧みに使い、牙狼剣を回転させたり宙に浮かせて持ち手を変えたりする柔の一閃と言うべき曲芸に似た剣を振るう。

この場にいる半分以上が武士である一同は流牙の剣舞にとても驚いていた。

剣術の流派は数あれど基本的な動作や構えなど共通する部分など多い。

しかし、流牙は今亡き友との十年に及ぶ実践の修行と数々のホラーを相手にした命懸けの戦いの中で生み出された流牙だけの剣術はどれにも当てはまらない正に型破りの流離の剣だ。

少なくとも流牙の剣術を真似することはできても完璧に模倣する事は叶わない。

そんな流牙の剣術に久遠達は感動していると、いよいよ鎧を召喚する時が来た。

周囲のホラーや鬼を吹き飛ばすような体を横に回転させながら振るう回転切りを行った直後に牙狼剣を天に掲げた。

掲げた牙狼剣で頭上に円を描き、空間を切り裂いた光の輪が浮かび上がる。

光の輪の内側にひび割れたような模様が描かれ、静かな光が降り注がれて流牙の体を包み込むと円の中から複数の光の塊……黄金に輝くガ口の鎧が舞い降りる。

黄金の鎧の部品達は流牙の周囲を舞い踊り、静かに流牙の両足から装着され、胴体から両腕……そして最後に頭部へと体全体に装着される。

『狼』の意匠を持つ鎧……それは古の時代、ホラーに立ち向かっていったとされる黄金の狼の伝説に因んで作られている。

更にとある強力な法力を持つ者によつて浄化されたことでその形は変化し、鎧の細部に刻まれた紋様や飾りは美しく、見るもの全てを魅了するほどの輝きがあった。

いつもはホラーや鬼を射殺するような気を放っている流牙の瞳と一つになっている兜の瞳は今だけ優しい朝焼けの太陽のような綺麗な橙色に輝いていた。

そして、細身の直剣である牙狼剣は幅広い大剣へと変化し、それを納める赤い鞘も大きく変化して鎧と同じ金色のものとなっていた。

流牙が右足を一步前に踏み出すと背後に炎と金色の文字が彩る紋章が大輪の花の如く広がり、鎧の召喚と装着が完了した。

その天上から舞い降りた神の如く神々しく、気高い姿を初めて目にした一葉、双葉、幽、そしてエーリカの四人は驚きのあまり言葉を失った。

しかしそれと同時にガ口の鎧の美しさに目を奪われてしまう。

これほどに美しい輝きを放つものを今まで見たことない、夢ではないかと錯覚するほどに。

対する久遠達は今まで何度も見てきたガ口の鎧を始めて正面からじっくり見られることに喜びを感じた。

そして流牙は大剣となった牙狼剣を鞘から抜き……魔戒騎士の最強にして最高の称号である黄金騎士ガ口……その金色に輝く剣舞を始める。

ホラーや鬼に対して一撃必殺の威力を誇る牙狼剣の剣閃はまさに豪快なものだった。

しかし、豪快と言いなながらも時にふわりと軽やかに舞う大剣に一体どんな構造をしているのかと久遠達は驚きを隠せない。

それもそのはず、魔戒騎士の鎧と剣の原材料であるソウルメタルは持ち主の心で重くもなり軽くもなる不思議な金属で作られているからである。

つまり流牙にとって今の牙狼剣は見た目に反して羽のように軽いのだ。

そして、鎧を纏える制限時間である99.9秒はあつという間に近づいていき、最後に流牙は激しくて素早い動きをしてクライマックスを演出する。

最後にガ口の鎧を魔界に送還しながら牙狼剣を鞘に納め、鏗鳴りが鳴り響く。

一瞬の静けさの後……久遠達から鳴り止まない拍手がわき起こった。

流牙は照れながら席に戻ると久遠達から絶賛の声が矢継ぎに出され、上機嫌となった一葉は將軍自ら流牙に酌をする。

こうして一葉は流牙の事を認めるが、エーリカからこの国に起きている異変が語られるのだった。

『歌　　』
　　（Sonng）

宴の席で流牙のガロの鎧のお披露目と劍舞を見せ、共に食事と酒を楽しんでいるとエーリカはどうしても話したい事があると云つて全員に耳を傾けてもらった。

「私はとある役目のためにこの日の本に来たのです」

「役目？」

「私はポルトウス・カレから派遣された天守教の司祭。……というのは表向きの役目で、本当の使命は、日の本に潜む、とある人物を暗殺することなのです」

暗殺と聞き、全員に静かな緊張感が漂う。

「暗殺？ 穏やかじゃないな」

「その人物の名は分かりません……」

「分からない？」

「はい。司祭様より命じられた任務は、この極東の国で異形の悪魔を操る人物を暗殺せよというものです。任務を受け、私は日の本の武人たちを従える將軍に協力を要請しようとしたのですが……」

「もはや將軍としての力のない余に落胆としたか」

「も、申し訳ありません！」

「よい、事実だからな。それより話を進めてくれ」

「エーリカ、その異形の悪魔はどんな存在だ？」

「悪魔とは異形の姿をした化け物のことです。膂力強く、敏捷性、体力……どれもこれも、普通の人では太刀打ちできないほどの力を待っている。対象の人物は、その異形の者を増やして、この国を悪魔の楽園にしようとしている。……司祭様からそう伺っております」

その悪魔の話聞き、既に流牙たちの脳裏にはあの化け物の姿が浮かんでいた。

「つまりエーリカはその悪魔を操る謎の人物を切るためにこの国に？」

「はい。……」

「……」一つ質問があります。その悪魔とやらは、人を襲いますか？」

詩乃は確認のためにエーリカに質問を投げかける。

「はい……悪魔たちは人肉を喰らいます。それに女性を襲って悪魔の子を孕ませるのです」

流牙以外全員女性なのでその話を聞いて背筋が凍り、顔を青くする者が出る。

「おぞましい生き物です。しかも悪魔たちの生命力は凄まじく、人間は決して打ち勝つことはできないでしょう。その見た目はおぞましく、口から牙が生えて驚異的な身体能

力を備えています。人肉を好み、夜な夜な街に現れては人を喰らう。そして悪魔に殺された者は、呪法を施せば同じような悪魔として復活する。神の力を行使できる司祭や司教ならいざ知らず。普通の人では悪魔に対抗することもできず、殺されてしまいうでしよう」

強大な力を持つ悪魔……しかし、その存在を流牙は切り裂いていた。

「エーリカ。俺はその悪魔……鬼と常日頃から戦って狩りをしているんだよ」「えっ!? 狩りをしているとは流牙さんは一体……」

戸惑うエーリカに流牙は牙狼剣を見せながら答えた。

「俺は……とは違う別の世界から来た、魔界から現れて人を喰らう魔獣・ホラーから人々を守りし者、魔戒騎士だ」

「魔戒騎士……? 流牙さんは騎士様だったのですか!？」

「金柑よ、流牙はただの騎士ではない。流牙は邪悪なる異形を討滅する存在として最高位にして最強の存在、黄金騎士ガ口の称号を受け継いでいるのだ!!」

何故か久遠が自慢げに話し、それに衝撃を受けるエーリカだった。

「お頭の鬼退治は凄いですからね!」

「鬼に反撃させないくらいに容赦なく切り倒しますからね」

「流牙様は鬼殺しの劍神とも呼ばれていますからね」

「何と!?!それに黄金騎士という最高位にして、最強……では先ほどの金色の鎧がその証と!?!」

「ああ。この牙狼剣はホラーや鬼など邪悪な存在を切り裂くことができ、ガ口の鎧はその力を高めることができる……」

流牙は声のトーンを落として静かに話していく。

「流牙、さん……?」

いつしか流牙は牙狼剣を強く握りしめながら今まで久遠達にも見せた事のない炎を纏ったかのような怒りに満ちた憤怒の表情を浮かべていた。

「許さない……人を化け物に変え、その人の人生を無茶苦茶にする奴は絶対に許さない!!」

「落ち着け、流牙!怒る気持ちは分かるが何故そこまで……」

「そうだ……ザルバ殿!」

久遠が流牙を落ち着かせようと駆け寄り、詩乃はとつさに流牙の左手にはめられているザルバのカバーを外して話せるようにした。

『ふう、感謝するぞお嬢ちゃん。おい、流牙。お前の気持ちはよくわかる。だが今怒りを出しても何も変わらないぞ?』

「ザルバ!だけど!」

『確かにお前や波奏はあの男に人生を狂わされ、何度も辛い目にあった。しかし、お前の使命は何だ？ 守りし者としての心を忘れるな。冷静になれ。今ここで怒りを解き放つても意味は無い』

「流牙よ……お前に何があつたのだ？ あまり人の過去を聞きすぎるのは良くないと思うが、我はお前の妻だ。それに、ここにいるものはお前の怒りを理解しようとしている。だから、話してくれないか？」

「……分かった。少し長くなるけど、聞いてくれ」

それは流牙の運命でもある戦い……ガ口の鎧が金色を失い、漆黒の鎧となっていた時の物語。

独立国家・ボルシティを舞台に流牙と仲間達でホラーを相手に戦っていたが、流牙……ガ口にしか倒せない魔導ホラー。

謎が深まる魔導ホラーを倒す度に金色を失ったガ口に黄金の輝きが宿る。

全ての元凶……多くの人の人生を狂わせた邪悪で卑劣な男、金城滔星の邪悪な魔の手。

かつて熟練の魔戒騎士であったが金城滔星によって魔導ホラーにされてしまった尊士との壮絶なる戦い。

しかし、その戦いで流牙は尊士の剣で両眼を貫かれて光を失い、絶望と敗北を与えら

れた。

絶望のどん底に叩き込まれながら見出した僅かな希望……牙狼剣に認められ、黄金騎士として認められた。

そして……死んでいたと思われていた母・波奏との十五年ぶりの再会。

波奏はガロに金色を取り戻すという流牙との約束を果たすため、十五年前に流牙が修行に旅立った後、ガロに金色の輝きを取り戻すためにゼドムと呼ばれるホラーの種子を体に取り込み、浄化してソウルメタルの金色の光を育てる儀式を行った。

しかし……そこに滔星が現れて波奏を連れ去り、それから十五年も飼育しにして魔導ホラーを生み続ける存在となってしまうた。

波奏はいつか必ず魔導ホラーを流牙が討滅することを信じ続け、歌を奏でて魔導ホラーに宿るガロに金色を取り戻す光を育て続けてきた。

そして波奏の信じた通りに流牙はほとんどの魔導ホラーを倒し、ガロに金色を取り戻していく。

全てを知った流牙は守りし者としての再起の決意を胸に抱き、波奏は己の瞳の光を対価に流牙の失われた瞳を元に戻した。

激闘の末に尊士を含む全ての魔導ホラーを打ち倒し、完全なる金色の輝きを取り戻したガロ……しかしそれは波奏との永遠の別れを意味していた。

魔導ホラーを生み続けてきたその体はホラーになりつつあり、波奏を人間として死なせるため、流牙に生き続けてという約束を交わし……波奏は自ら牙狼剣を突き立てて眠りについた。

そして、最後の戦い……殺戮の闘将と呼ばれる強大な力を持つホラー、ゼドムを抑え込もうとした師……符礼は消滅してしまう。

しかし、残された魔導筆で弱点を指し示し、流牙たちを勝利に導いてボルシテイに本当の平和が戻った。

流牙のボルシテイでの壮絶な戦いと悲しき別れ……それを聞いたこの場にいる半分以上の者は涙を流していた。

「流牙よ……お前を絶望に追いやり、母上殿を飼い殺しにした滔星という愚か者はどうなった？」

久遠は体を震わせてこの場にいる誰よりも怒りを募らせていた。

「そいつはゼドムとの戦いの時に現れたホラーに憑依された」

『あいつの陰我はホラーでも驚くほどのものだった。最後は流牙が斬ろうとしたが、黄金騎士が相手にするまでもない雑魚ホラーと一蹴して嬢ちゃんによって射殺された。まあ嬢ちゃんにとってもそいつは父親と叔母の仇だったからな』

「そうか……もしまだ生きていたら私が流牙の代わりに手を下していたところだ」

滔星に引導が渡されて久遠は少し安心した。

そして、流牙の話を聞いてそれぞれが自分の思いを口にする。

「ううっ……まさかお頭にそんな悲しい過去があったなんて……」

「でも、流牙様のあの優しさと強さの起源が分かった気がする……」

「鬼やホラーから人々を守ろうとする強い意志……なるほど、これが守りし者、魔戒騎士ということですか……」

「一度絶望に落とされながらも母との約束で再び立ち上がり、戦い続けるか……」

「流牙様……そこまで辛い思いをしてまで使命を……」

「公方様や久遠殿も壮絶な過去をお持ちでしたが、いやはや流牙殿のもなかなか壮絶でしたな……」

そして、エーリカは……。

「……流牙さん」

涙を浮かべながら流牙に近づき、その手を取って強く握りしめた。

「あなたと私は立場は違えど人間の幸せと未来を奪う、悪しき化け物を憎む者同士。共に鬼からこの国を守りましょう!!」

「エーリカ……ああ、共に戦おう!」

同じ志を持つエーリカに感化され、流牙も手を握り返して深く頷いた。

「我らを忘れてもらつては困るぞ、流牙」

「久遠？」

「我もこの日の本から鬼を排除し、天下布武を目指してこの命尽きるまで夫である流牙と共に戦おう!!」

「お頭!流牙隊の一番最初の仲間として、最後までついていきます!」

「私も流牙様と共に戦います!」

「流牙様、私は既にあなた様のもの。我が知恵でお導きします!」

久遠達はエーリカの目的と流牙の過去を聞いて鬼と戦う決意を示した。

「なら、余を使うが良い。流牙、久遠よ」

「一葉？」

「力無き公方とはいえ、余はまだ公方であるのだ。日の本の民のことを考えれば手を貸すしかあるまい。今幕府は様々な勢力の脅威にさらされている。そこに久遠達織田家が救出に来ればやがて広がっていく鬼を駆逐する一大勢力が生まれる。皮肉な事だが、勢力を持たない余だからこそ、勢力に担がれるには最適だ」

力を持たない公方だからこそ久遠達が神輿を担ぐ者になって力を集めるのだ。

「それに……余の持つお家流は鬼相手に絶大な威力を発揮する。必ずお主達の力になる」

「わ、私も微力ながらお手伝いします〜」

「やれやれ。これはどうやら大事になってきましたな」

双葉も協力すると言い、幽はやれやれと言った様子だった。

こうして久遠と一葉は共に日の本から鬼を倒すために手を組んだ。

まずは一度久遠達は尾張に戻って兵を整えてからすぐに京へ向かうことが先決だった。

それから各地の諸勢力を糾合し、日の本から鬼を駆逐し、久遠の考える天下布武を行うという考えだ。

時間がかかるがそれが鬼から日の本を救うための一番確実に近道だと流牙とエーリカも納得した。

そして、話がひと段落すると、再び宴が再開され、色々な話を盛り上げていくのだった。

☆

その夜……遅くまで宴会をやっている流牙達は二条館に泊まることになった。

そんな中、眠れない双葉は目を覚まし、喉が渴いたので水を飲みに行った。

廊下をゆつくり歩いていると……。

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

「弦の音……?」

こんな真夜中に弦の音が聞こえ、不審に思った双葉はその音の元へ静かに向かった。琴や琵琶とも異なる初めて聞く弦の旋律にうっとりしながら進むと、物陰に隠れている見慣れた後ろ姿を目にした。

「お姉さま……?」

「ん? おお、双葉か。あれを見てみよ」

姉の一葉に手招きされ、恐る恐る近づいて弦の音の正体を目にすると……。

「流牙様……?」

二人の目線の先には月明かりに照らされている縁で流牙が堺で久遠に買ってもらったギターを演奏していた。

穏やかな表情をして静かにピツグで弦を弾くその姿は様になっており、二人はその姿に目を奪われた。

「……こっさり見てないでこっちに來たら?」

「ふむ……ばれていたか」

「すみません、覗き見をしてしまつて……」

「いいよ。それより二人も座つたら?」

一葉と双葉はそれぞれ流牙の隣に座り、初めて見るギターを興味深そうに見る。

ちなみに流牙は二人に対してタメ口だが、二人が良いと許可したので流牙はいつも通りの口調で話している。

「琵琶に似ておるが細部がかなり異なるな」

「これはギターって言って、南蛮の楽器なんだ。この前堺で久遠に買ってもらったんだ」

「南蛮の楽器ですか。初めて見ました」

「流牙よ、南蛮の楽器であるこれを弾けるのか？」

「まあね。一曲弾こうか？」

「うむ、是非とも」

「お願い致します」

「それじゃあ、ギターの演奏と俺の歌を」

「歌？」

「あ、そうか。この世界の歌は違うんだったな……俺たちの世界だと歌は音楽に乗せて気持ちを含めた言葉を乗せるんだよ」

「音楽に言葉か……それで流牙はどんな歌を聞かせてくれるのか？」

「うーん、そうだな……夜中だからあんまり激しいのはダメだよな。少し落ち着いた感じの歌でいい？」

「うむ、それで頼むぞ」

「お願いします」

「それじゃあ歌います。曲名は『風　　く旅立ちの詩　　』！」

右手でピッグを構え直し、左手でギターのコードを押さえながら弦を静かに弾いている。

流牙が演奏するその曲は旅立つ一人の男とそれを待ち続ける一人の女のお互いを想い続け、いつか巡り会うことを夢みる一つの物語を描いた歌である。

かつてボルシテイでホラー狩りのためにライブに乱入し、あつという間に大勢の観客の心を掴んで盛り上げたその魅惑の歌声は健在ですぐに一葉と双葉を魅了させた。

歌にはちよくちよく英語……一葉と双葉からしたら南蛮語が入っていたので意味はわからないが、それ以外の流牙の歌声もあつて歌詞はとても心に響くものだった。

そして、歌い終わると一葉と双葉から拍手が送られる。

「素晴らしかったぞ、流牙！なるほど、これがお主の国の歌か！」

「とつても綺麗な歌声でした。もつと聞きたいぐらいです

「そうじゃな、双葉。流牙よ、他には無いのか？」

「え？他に？うーん……じゃあ、俺の世界で昔流行っていた歌を歌うね。曲名は……『S

AVIOR IN THE DARK』！」

「せいば……何じゃ？」

「SAVIOR IN THE DARK。闇の中の救世主、つて意味だよ」

「闇の中の救世主か……ふむ、面白そうだ。早速頼むぞ」

「かしこまりました、將軍様」

再びピッグを構えた流牙は先ほどの演奏とは違う早さのある曲だった。

それは戦いに身を投じる一人の男が一人の女と出会い、成長して本当の意味で戦いに大切な心を目覚めさせた物語の歌である。

普段から京都の町で暴れている一葉はその歌に興奮してすぐに気に入った。

「素晴らしいぞ、流牙！これを余が暴れている時に流れて欲しいくらいだ！」

「なんか妙に一葉に合いそうな気がするのは気のせいかな……？」

「ふふふ、お姉さまったら」

月夜の中、三人は音楽を通じて仲良くなり、絆を深めていった。

そして、流牙の守りし者としての強い意志と人を惹きつける不思議な魅力によって一葉と双葉はいっしょか惹かれるようになったのだった。

そのことを鈍感である流牙が知る由もなく、翌日にはいつの間にか仲良くなっていることに久遠達が嫉妬するのは必然であった。

『妹（Sisters）』

京で一葉と双葉と幽と出会い、色々な事があつた。

久遠と一葉が京の町のごロツキ共と乱闘して流牙が止めに入ったり、幽とエーリカと共に京の神社や寺を見物したり、二条館の外を知らない双葉の為に流牙が町の外へデートに向かったりと充実した日々を送つた。

仲良くなつた一葉達と別れるのは名残惜しかったが、これからやる事がたくさんあるので流牙と久遠達は京を後にした。

「流牙、そういえば堺に向かうときに浅井の事を気になつていたな」

「そりやあ久遠の妹夫婦だからな」

「ふむ……それなら寄り道をして二人のいる小谷城に向かおうと思つたのだが、よいか？」

「え？ 本当？ やつた！ 久遠の夫として妹夫婦に挨拶したいしな」

「そ、そうか」

「ところで久遠、市って子はどんな子なんだ？」

「市は活発な娘でな、小さいころは壬月を相手に暴れておつたのだ」

「壬月相手に!?!でも流石に手加減していたよな?」

「いや、ガチだぞ?」

「……どんな子が想像出来ないんたけど」

久遠の妹がどんな子なのか全く想像出来ないまま流牙達は小谷城を見渡せる場所へ来た。

久遠はひよ子と転子を先触れに向かわせ、流牙達はゆっくり馬を進める。

詩乃とエーリカは城の素晴らしさに話を弾ませると、流牙にとつての城を思い出した。

「城といえば……」

「流牙様も何か城に思い出が?」

「思い出というか、この世界に来る少し前に巨大な城のホラーを破壊したんだよ」

「……は!?!」

「し、城のホラー!?!何ですかそのスケールは!?!」

「ラダンって言って、あの小谷城よりも少し大きなホラーで巨人のような姿に変形して動いていたな」

「ど、どうやって倒したのですか!?!」

「あの時はラダンが吸収していた人々と自然の命の光をガロの鎧が取り込んで巨大なガ

口の幻影を作り出して、ラダンを粉碎したんだ」

あの時はガロの鎧が思いに応えて上手くいったと思いつつながら流牙は懐かしむように言う。詩乃とエーリカは頭を抱えた。

「え、えつと……理解を超えてしまつて全く想像出来ません」

「私もどういふ戦いなのか……もはや神と神の戦いでは……?」

もはや人知の戦いを超えた魔戒騎士とホラーの戦いに二人は考えるのをやめた。

そして、ようやく小谷城に到着すると二人の少女が出迎えた。

「お姉様!」

「お姉ちゃん!」

「うむ。二人とも出迎え苦労」

「あれ?可愛い子……」

「こちらがお兄様ですよね!」

「お、お兄様?」

赤い髪に少し男性風の着物を着た女の子に人生で初めて『お兄様』と呼ばれ、困惑する流牙。

確かに姉夫婦の夫なのだから兄なのは間違いないが、流牙にとっては呼び慣れてないものだ。

「うわー！お姉ちゃんの手紙に書いていた通りの人だ！すごい！」

「久遠、なんて書いたんだ？」

「見た感じから胡散臭そうな男だ、と書いたが、何か間違っていたか？」

「ほう……夫をそんな風に思っていたなんて。酷い奥さんだ、せつかく久遠の為に練習していたギターの披露目やめようかな？」

魔法衣からギターをチラ見させながら流牙は意地悪く言った。

「何い!?そ、そんな！酷いではないか流牙よ！」

「ふははっ、冗談だよ。可愛い奥さんをちよつとからかいたくなくなっただけだよ」

「こ、この！根切りにしてくれりゅわ!!」

「おおつと！ここは外だから刀でかわすまでもなく逃げられるよ？」

「お、おのれえ……もう知らん！」

いつでもダッシュして逃げられる体勢の流牙は爽やかな笑顔を浮かべ、対する久遠は悔しそうな表情を浮かべた。

「あははっ！お姉ちゃんと仲良くやれてるんだね、流牙お兄ちゃんは！」

「久しいな、市。元気そうだな」

「うん♪お姉ちゃんも元気そうだなによりだよ！」

「うむ。お陰様だな」

「お頭ー！」

「いらつしやいませー！」

先に来ていたひよ子と転子が出迎えた。

「二人ともお疲れ様」

「へへー♪」

「えらいごきげんだな」

「はい！お先にお市さまとお話できましたから」

「そっか」

「流牙！こちらに来てくれ。正式に紹介しよう」

「道外流牙。我の夫である。二人とも見知りおけ」

「ざっくりした説明だな」

「長々と喋るのは好かん」

「そうか。紹介された通り、俺が道外流牙。二人ともよろしく」

「うん！市は市だよ！お姉ちゃんの妹で浅井家当主、長政さまの奥さんなの！」

「あ、僕がその……長政です。兄様、よろしくお願ひします……」

「はいまこっちゃん、もつと元気出してー！大きな声で挨拶だよー！」

「ほ、僕、長政って言います！通称は眞琴！兄様、どうぞよろしくお願ひします！」

「よーさはよしよし！元氣一杯に出来たね、まこっちゃん♪」

「う、うん！僕、頑張れたよ、市！」

「うん！さっすが市のまこっちゃんだよお♪」

「二人とも仲良しだな」

「うん！」

「はいっ！」

「それでは、改めまして。ようこそ、浅井が誇る堅城、小谷城へ！」

流牙達は小谷城へと招待され、宴を用意してくれるらしいのでそれが始まるまで楽しい話で盛り上がるが、その時に鬼の話も出てきた。

エーリカに鬼の事を話してもらい、浅井家も久遠達に協力して共に戦うことを約束した。

その後、流牙と久遠は同じ部屋に案内され、旅の疲れを癒すために風呂を勧めたが……。

「織田家の模擬戦以来だけど、どうしてこうなった……？」

流牙は小谷城の風呂場で何故か久遠と一緒に風呂に入ることになった。

それはかれこれ十分前、部屋で休んでいると突然市が現れて流牙と久遠は夫婦だから一緒に風呂に入るようにと強制的に運ばれてしまった。

「ぜ、絶対にこちらを見るなよ！絶対だぞ！」

「善処するよ……」

久遠は初めて男と風呂に入るので当然緊張して体を腕で隠す。

雪のような綺麗な素肌に流牙は見惚れそうになったが騎士としての不屈の精神で己を制していた。

「はあ……市ちゃん、押しが強すぎるね。まさかこんなところで久遠と一緒に風呂に入ることになるとは」

流牙は溜息を吐きながら体の汗を流し、できるだけ久遠の体を見ないように目を閉じている。

すると、久遠は後ろから流牙の背中に触れた。

「……傷だらけだな」

流牙の体は切り傷やすり傷の痕が身体中に痛々しく残っていた。

「ほとんどは修行の時のだけだね。ホラーとの戦いは魔法衣や鎧があるから大体の攻撃は防げるけど」

「幼い頃からこれだけの傷を負って、やつとの思いでガ口の鎧に認められたのか？」

「ああ……と言っても、初めて鎧を身に付けた時は……友を斬る時だったけどな」

「と、友を!？」

「魔戒獣って言う見た目は金属の獣みたいな存在だけど、ちゃんと意思はあるんだ。名前は羅号……俺と十年間、無人島で共に修行してきた大切な友なんだ」

「何故その羅号を斬らなければならなかったんだ……？」

「無人島で十年間の修行を終えてガ口の鎧と契約を交わす直前に符礼法師が最後の試練に術で羅号を操って俺を殺すようにしたんだ。『たとえ親しいものであっても斬らなければならぬ時には斬る』……魔戒騎士としての覚悟を試すために」

「そんな……人じゃないにしても流牙にとつて大切な友を斬らせようとするなんて……」

「魔戒騎士はホラーから人を守り、人を斬ってはならない掟はあるけど、時には人を斬らなければならぬ時があるんだ。母さんの時もあるけど、それとは別にホラーの血を浴びた者……『血に染まりし者』はホラーにとつて最高のご馳走で常にホラーから狙われる。そして、血を浴びてから100日後には気絶することも許されない激痛の中で悪臭を放ちながら溶け崩れていくんだ。だから、最後の慈悲として斬るんだ……」

「……符礼法師はわざと流牙の憎まれ役を？」

久遠は波奏を斬ったことを思い出し、流牙のこれからを考えて憎まれ役を引き受けたと察した。

「ああ……羅号に殺されかけて、俺は覚悟を決めるしかなかった。そして、今まで誰も抜

けなかつた台座に刺さつた牙狼剣を引き抜き、飾られたガ口の鎧を纏つて……羅号を斬つた……」

苦楽を共にした大切な友を斬る事は心の優しい流牙にとって人生で初めての大きな辛い出来事だ。

「俺は符礼法師を憎んだまま、ホラーを狩る旅に出た。ある時、番犬所から指令が来てポルシティに訪れた。だけどその指令は符礼法師が送つたものだ……俺は最初、符礼法師の言うことを全く聞いてなかつたけど、母さんと再会した時に全てを打ち明けてくれた。符礼法師はずっと母さんと莉杏のお父さんと叔母さん、そしてホラーにされた尊士を助けられず、一人で生き残つたことにずっと苦しんでいたんだ」

「確かに一人だけ生き残ることはこの上辛いことないな……」

「符礼法師はゼドムに向かう前に最後こう言い残したんだ。『絶望の中から俺を救つてくれた』つてね」

「絶望か……なるほど、法師にとってお前は最後の希望だったんだな」

「あと莉杏もだよ。莉杏にとって符礼法師は育ての親であると同時に法術の師匠でもあつたから」

「そうか……法師の想いと希望は流牙と莉杏に託されたと言うことか」

「そうだな。魔戒騎士には『親から子へ受け継がれる想いこそが真の永遠』つて信条が

あつて、父親のいない俺にとって符礼法師は父親みたいな存在だったな……」

今思えば父親のいない流牙にとって自分に厳しく接し、導いてきた符礼が父親代わりだったと強く感じる。

「受け継がれる想い、か……私も母や結菜の母から沢山の想いを受け継いできた。いつの日か、自分の子にもこの想いを受け継いでもらいたいな……」

うつけと呼ばれてきた久遠の幼き日の理解者は親友の結菜と二人の母だけだった。

だからこそ魔戒騎士の受け継がれる想いにはとても共感できた。

「……な、なあ、流牙」

「何？」

「前に、結菜が言ったことを覚えているか？」

「前につて、どの事？」

「そ、それはだな……私とお前で、織田の後継者……」

「おねーちゃん！お布団の準備が出来たよー！」

「うわあああああつ！」

久遠が何かを言いかけたその時、市が風呂場にやってきて二人は瞬時に離れた。

「……二人ともどうしたの？」

「な、なんでもないぞ！」

「も、もうすぐ上がるからねー！」

「そう？なら別に良いけど。それじゃ宴が始まるまで、ゆっくり休んでねー！」

そう言うとき市は忙しそうに風呂場から出て行った。

「……久遠、さつき何を言おうとしたんだ？」

「き、気にするな！その……そういう雰囲気になったら言うから……」

「そ、そう？じゃあ久遠、先上がって」

「わ、分かった……」

久遠は先に風呂を上がり、着替えが終わるまで流牙はのんびりと湯船に浸かった。

風呂を上がり、しばらくゆっくり過ごして夜になると宴の準備が整い、大広間へ向かった。

大広間で眞琴の号令で宴会が始まり、近江の名物が並ぶ料理を食べる。

「お姉ちゃん！どう？近江も名物尽くしの料理の味は？」

「うむ。美味であるぞ」

「へへー、お姉ちゃんの好きそうなの、たくさん用意したから、たくさん食べてね♪」

「ああ、ありがとう、市」

微笑みを浮かべながら、姉妹団欒で寛ぐ久遠。

今となつては同じ血を引く織田の家族は二人だけとあつて家族の絆を大切に思う流

牙はそつと席を外して詩乃達の元へ向かった。

宴が終わり、少し経つと……。

「おにいーちゃん！」

「ん？市ちゃん、どうしたの？」

「市と遊ぼうよ！おにいちゃん！」

「いいよ、何する？」

「もちろん果たし合いだよ！」

「えっ!?!は、果し合い!?!」

流牙の頭の中にある遊ぶという定義が突然崩れて驚愕する。

「闘ぼう！お兄ちゃん！」

ワクワクとした顔つきで流牙の腕を取る市の力と、その手の感触に、流牙はただならぬものを感じた。

これは本気だ……と、そう感じた流牙は頷いた。

「分かった。闘ぼう。俺も市ちゃんの力が知りたいから。久遠、いい？」

「好きにせい」

「ありがとう、眞琴もいい？」

「僕は構いませんけど。……お兄様、大丈夫なんですか？市はこう見えて、かなり強いで

「すよ？」

「大丈夫。負ける気はないよ」

「分かりました。市、お兄様に怪我なんかさせちや駄目だよ？」

「えー。そうは言っても手抜きはしたくないもん」

「怪我は心配しなくていいよ、全力で頼む」

「うん！」

場所を庭へと移動し、流牙と市の果たし合いが始まろうとする。

「お兄ちゃん。得物は何にする？確かお兄ちゃんは剣の達人なんでしょ？」

「達人ってほどじゃないけど、剣は要らないよ。無手でいく」

「え？無理しなくていいよ」

「心配いらないよ、俺は剣以外でも強くなるよう鍛えてきたから」

「分かった」

久遠、流牙隊、エーリカ、眞琴は濡れ縁まで来て果し合いを見学している。

「おっと、その前に……久遠、ザルバを預かっててくれ」

拳で戦うとなったら左手のザルバで市を傷つけるかもしれないと思い、ザルバを久遠に渡した。

「分かった。ふむ……」

流牙からザルバを預かると、ふと思つた久遠はそのまま自分の左手の中指にはめてカパーを外した。

『……おいおい、お嬢ちゃん。俺様を指にはめるとはなかなか度胸があるな』

「わっ?! 指輪が喋つた!？」

「心配するな、眞琴。こやつは鬼ではない、流牙の相棒のザルバだ」

『まさかお嬢ちゃんの指にはめられるとは思わなかつたぞ』

「ふふん。夫のものは妻のものであるからな、つまりザルバは我の物でもあるのだ」

『いやいや、黄金騎士である流牙以外がつけても何の意味がないぞ』

「それでも構わぬ。我はザルバのその姿を気に入つておるからの」

『俺様を? ふはは! 男ならともかく、女で俺様の姿を気に入るとは本当に面白いお嬢ちゃんだな』

「お主もな、ザルバ」

いつの間にか仲良くなつて久遠とザルバに驚く流牙に市はあることを尋ねる。

「ところでお姉ちゃん、お兄ちゃんってどれくらい強いのか?」

「ふむ? 和奏と雛、犬子、それと麦穂、壬月は全員こやつにやられ、桐琴とも対等に戦えるかもしれない力を持つ。特に鬼相手に無双を發揮するほどだ」

「へー、なかなかやるねえ、お兄ちゃん!」

「ありがとう。よし、やるか！」

市はひよ子が京で買った闘具を構えてファイティグポーズを構えると、流牙は度々久遠達にも見せている左右の手を交差し、右の拳を後ろに引いて左掌を前に出すファイティングポーズを取る。

「変わった構えだね。それにお兄ちゃん、良い闘気を持つてる」

「これは俺がかつて戦った強敵の敬意を評して模倣しているんだ」

「強敵の構えを模倣か……面白いね、お兄ちゃん！」

果し合いが始まり、まずはどちらも動かずに相手の出方を待っていた。

流牙は深呼吸をしながら待つており、いつでも来ていいように心を鎮めていた。

「ちよわー！！」

対して市は我慢出来ずに可愛らしい気合の声と共に地面を蹴って一気に距離を詰めてきた。

「……速い！」

「せいや！せいせいせいせいせいやー！」

「ふっ！はっ！」

次々と繰り返される市の怒涛の攻撃を流牙は見極めてかわして行く。

「さあ！お兄ちゃん！どんどん行くよ！」

そう言つて更に素早い攻撃を繰り出してきた。

流牙も拳で攻撃すると、市の繰り出してきた右の闘具と流牙の右拳がぶつかる。派手な音が鳴り、市はしまったと思つたが流牙は涼しい顔をしている。

「お兄ちゃん、痛くないの!？」

「この程度で痛がったら魔戒騎士なんてやってないよ！」

「あはは！そうこなくっちゃ！せいや！」

すぐさま左の闘具で殴るが今度ははたき落ちて

その女の子のものとは思えない力にまともには喰らえば流牙でもただじゃすまない。

織田の模擬戦と同じく下手に傷つけるわけにもいかなないので流牙はしばらくは守りに徹する。

しかし、それでは市に悪いので守りながら時折本気で攻める。

初めて見るであろうアクロバットな動きから繰り出される鋭く、そして重い拳と蹴りは市を驚かせると同時に凄いと興奮の笑みを浮かべた。

ふと久遠達の話で市が日頃から鍛錬と称して鬼退治をしていると耳にした。

やりたいことをとことんやる織田の血に流牙は苦笑を浮かべた。

しばらく拳と蹴りの応酬が続き、流牙は魔戒騎士としての無尽蔵の体力で軽い準備運動程度のものであったが、市に関しては顔に汗が垂れて軽く息切れをしていた。

市は幼いながらも武の才能に恵まれた少女だが、その反面まだ体の作りが成長途中で体力も年相応に少ない……最初から全力で戦っていたら体力が無くなるのも時間の問題だった。

だんだん闘具で放つスピードとパワーが落ちてきたのを瞬時に見極めた流牙は一気に勝負を決める。

「ふっ！はっ！」

両手の闘具をほぼ同時に拳と蹴りで叩き落とし、大きな隙ができた市に向けて流牙は数々の敵に痛手を与えてきた得意の正拳突きをする。

「はあっ!!」

「ひやっ!?!」

避けられない正拳突きが顔に目掛けて放たれ、市は目をぎゅつと閉じてその痛みを待った。

しかし……。

「痛っ!?!」

流牙は拳を顔の前で止めてデコピンで市の額を弾いた。

「これで俺の勝ちだね」

「あう、負けたあ」

あのまま正拳突きを受けていたら確実に負けており、市は素直に負けを認めたが意外にデコピンが痛かったたので額を押さえながら涙目になっていた。

「でも、市ちゃんは本当に強かったよ。あとは成長に合わせて体力を作っていて、あとはペース配分……えっと、体力の使いどころを考えないとね。ずっと全力でやっているとすぐに体力が無くなるからね」

市はまだまだ幼いのでこれから伸びしろがある、そう判断した流牙は分かりやすく問題を説明した。

「体力と使いどころか……うん、分かった！またしようね！今度は負けないよ！」
「望むところだ」

市の手を掴んで立ち上がらせ、二人は久遠たちの元に戻る。

「戦いの後に相手に問題点を指摘するとはな。流牙よ、指導者としてもやれるんじゃないかなにか？」

「よしてくれよ、俺は導師には向いてないんだから」

「導師？何故仏門を導く者を？」

「違うよ、導師は魔戒騎士の先生の位なんだ。将来魔戒騎士を目指す子供達に戦い方や騎士としての心得を教えるんだ」

「ん……？流牙はその導師から教わって……」

「俺は教わってないよ。ほとんどの魔戒騎士を目指す子供は幼い頃に修練場で導師から訓練を受けるけど、俺の場合は伝説だったガ口の鎧を受け継ぐから特殊だったんだ」

「ほう……聞けば聞くほど魔戒騎士は面白いな」

「長い歴史があるからね。魔戒騎士と魔戒法師の存在は一枚岩じゃないってことさ」

流牙と久遠は魔戒騎士の話をしてしていると……。

「あ、あの、流牙さん。私とも果し合いをしてくれませんか？騎士様である流牙さんの力を拝見したいのですが……」

流牙の力を見たエーリカが果たし合いを申し込んできた。

「エーリカも？分かった、やろうか」

「は、はい！分かりました！準備してきます」

エーリカはすぐに剣を準備し、流牙は詩乃から受け取った手拭いで汗を拭き、水を飲んで喉の渇きを潤した。

「ふう、よしー」

流牙は再び気合を入れてエーリカを待った。

数分後には剣を携えたエーリカがやって来て、その表情は優しい司祭から武人のものとなっていた。

エーリカは剣を、流牙は魔法衣から牙狼刀を抜いて構える。

エーリカの体からお家流なのか不明だが青白いオーラを体から湧き上がっていた。

本日の第二戦目、流牙とエーリカの果し合いが始まる……その時。

『流牙！強い邪気だ！鬼が近づいてる!!』

「何!?!」

久遠の左手にあるザルバからの声に一同は驚愕した。

すると、牙狼刀から詩乃と結菜達を鬼から助けた時と同じ淡い光が溢れ出した。

「ぐるぐる……」

そして、どこからともなく小谷城の庭に鬼が出現した。

鬼の侵略が少しずつ日の本に広がっていくのだった……。

『思　　ゝ　M e m o r i e s　　ゝ』

流牙がエーリカと果し合いを行おうとした時に鬼が小谷城に進入してきた。

「なんで鬼がこんなところに！」

「落ち着いてひよ、今は鬼の迎撃が先！久遠さまと詩乃ちゃんを守るよ！」

「エーリカ、模擬戦は中止だ！急いで鬼を討滅する！」

「はい！」

「くせ者である！皆の者、出会え出会えー！」

眞琴の声に、城内が一気に慌しくなった。

そんな周囲の気配に煽られたのか、鬼たちの動きも激しくなる。

「ひよところは久遠と詩乃を守れ！」

「はい！」

「待って！流牙様、あれを見てください！」

「っ!?!あれは……」

塀をよじ登ってくる鬼を見るとその身に鎧を纏っていた。

「あの鬼は足軽たちが着ける桶川胴を着込んでいます！そしてその胸に……」

「三盛木瓜の家紋だどっ!?」

「そんな……これは一体……っ!?」

「どういふことだ!?」

「三盛木瓜は朝倉の家紋なんです! その家紋が入ったものを鬼たちが着ているという事は……」

「……その朝倉がやられたとしか考えられないな」

「私にも分かりません! あの鬼が朝倉の兵を喰らい、鎧を奪っただけなのか。それとも朝倉の人たちが鬼にされてしまったのか……どちはにせよ、鬼は朝倉の方達を襲い、そして鬼が勝ったのでしよう……つまり越前はもう……!」

「そんな……! もし朝倉が鬼に攻め入られていたとしたら、同盟国である浅井にも報せが来るはずだ! 鬼が足軽の着ていたものを奪っただけだよ! きつとそうだ!」

「まだ分からん。が、今はとにかく目の前にいる奴らを成敗するのが先決であるぞ!」

「そ、そう……うん、そうですね!」

「みんなは下がって!」

久遠は自分の左手からザルバを抜いて流牙に投げ渡す。

「流牙! 受け取れ!」

「おう!」

ザルバを受け取った流牙はいつものように左手中指にはめて魔法衣から牙狼剣を取り出す。

「市もお手伝いするよ！お兄ちゃん！」

「いけるか？」

「もちろん！エーリカさんはいける？」

「いつでもいけます！」

「よし、俺が前に出る！二人は俺が討ちもらした鬼を頼む！それと、これだけは約束してくれ、怪我をしたらすぐに下がれ。決して無理をするな！」

「ぼ、僕も行きます！」

「ダメだ！眞琴は下がってろ！」

「そんな！僕だって武士です！お兄様たちと共に、前に出て戦います！」

「眞琴は浅井の当主だ、何かあったら困るだろ。それに……俺は魔戒騎士だ！人を喰らう魔獣を狩るのが俺の使命だ！」

牙狼刀を地面に突き刺し、牙狼剣を鞘から抜いて構える。

「行くぞ!!」

「うん！」

「はい！」

流牙を先頭に三人は地を蹴り、それぞれ剣と闘具を振るい、鬼を退治する。

体力を温存しておいた流牙は先陣切って牙狼剣を振るい、鬼を切り裂いていく。

流牙の豪快で軽やかな動きに対し、エーリカの剣技は素早く的確に鬼の急所を狙って攻撃している。

そして、市は流牙との果し合いと同様に豪快な連撃を放つが、やはり先ほどの果し合いの疲れが残るのか、市はなかなか鬼を倒せないでいた。

敵はまだ潜んでいる可能性があるのもこれ以上長引かせるわけにはいかないと流牙は判断した。

「二人共、下がっててくれ。後は俺がやる……」

「お兄ちゃん！まだ私は大丈夫だよ！」

「そうはいかない。君は久遠の大切な妹、俺にとつても大切な妹だ」

流牙は市ちゃんの頭を撫でながら優しく諭す。

「俺はもう……二度と大切な家族を失う訳にはいかないんだ」

「お兄ちゃん……？」

「市さん、ここは流牙さんに任せましょう。流牙さんには鬼を討滅する絶対的な力がありませんから」

「エーリカさん……うん！分かった！お兄ちゃんを信じる！」

「ありがとう、市ちゃん、エーリカ」

市とエーリカを下がらせた流牙は鬼達を睨みつけ、その内の一体が斬りかかると牙狼剣で叩き斬り、回し蹴りを食らわせてぶっ飛ばす。

そして、牙狼剣を鞘に収め、力を込めながら体の左側に持つていくとすぐに鞘から引き抜いて牙狼剣を高く掲げた。

満月のような綺麗な円を描き、ひび割れた円の中から闇夜を照らす金色の輝きを放つガ口の鎧が召喚され、流牙の体に装着される。

牙狼剣が大剣に変化し、鞘から抜いて地面に突き刺すと代わりに牙狼刀を地面から引き抜いて逆手で構えた。

牙狼刀も牙狼剣と同様に光を帯びて大刀へと変化した。

「お、お兄ちゃんが金の鎧を……!?!」

「お姉様、あれは一体……!?!」

「あれは……流牙が数多の試練を乗り越えて継承した邪悪なる魔獣を討滅し、人々を守る最強の称号を示す金の鎧……黄金騎士ガ口だ!」

ガ口となった流牙に呆然とした市と眞琴に久遠は堂々と説明した。

流牙は変化した牙狼剣と牙狼刀を構え、再び地を蹴る。

二刀流で鬼達の鎧を次々と破壊して急所を攻撃できるようにする。

すると、他の場所にも現れていた鬼達が流牙がガ口の鎧を纏うなり、誘われるように集まってきた。

『こいつら、ここに集まっている。何が目的だ?』

「目的は分からないがまだ他にもいるかもしれない。集まっているなら一気に決める!!」

流牙は牙狼剣と牙狼刀の刃を交差させ、左右に切り開いて火花を散らす。

火花を散らした牙狼剣と牙狼刀に翡翠色の炎……魔導火が灯されて刃全体に纏い、烈火炎装を発動する。

「うおおおおおっ!!!」

牙狼剣と牙狼刀を十字に交差させて振りはらい、十字の炎の斬撃を放つ。

回転しながら徐々に炎の斬撃は巨大化し、この場にいた鬼達は一瞬にして炎に焼かれて全滅し、断末魔の叫びすら上げずに倒されてしまう。

鎧を解除し、魔界に送還すると流牙は警戒しながら鬼の死骸を見るとそこには……。

『間違いない、こいつは人間のものだ……』

「人間の、死体……」

鬼が人間の死体……朝倉の足軽へと戻って行った。

「殺された後に鬼にされてしまったのか。それとも何らかの呪術により鬼にされてし

まったか……」

エーリカは冷静に分析する中、流牙はその足軽が持っていた刀を拾い、耳に当てて『声』を聞いた。

『なんだってんだよ、あいつらなんなんだよ！急に湧いて出て、みんな殺しやがった……！武士もら農民町人も、全部殺しやがった……！お終いだ……もうお終いだ……っ！』それは鬼に襲われ、死にながら鬼にされた足軽の声……その最期の声を聞いた流牙は抑えきれない怒りを地面にぶつけるしかなかった。

「くそおっ!!くそおおおおおっ!!」

魔導ホラーとの戦いの苦い記憶が蘇り、手の皮膚が破れそうになるほど流牙は何度も何度も地面を叩いた。

すると、突然腕を掴まれて地面を叩くのを中断された。

「もう止めろ……自分を責めるな、流牙……」

その手は久遠で流牙の手から無理やり刀を剥がしてそのまま強く抱きしめた。

京でボルシティでの戦いを聞いた久遠は流牙が辛い過去を思い出して自分を責めていると気づいた。

「今は辛いだろうが、我慢して耐えてくれ……必ず鬼をこの日の本から排除し、平和な世界にしよう……」

目の前で鬼にされた人間を見た久遠は決意を新たにした。

その思いを感じ取った流牙は久遠にしがみつこうようにして怒りや悲しみの負の感情を耐えた。

眞琴と市は浅井家の名にかけて越前からの鬼の進行を止めることを約束した。

流牙とエーリ力はすぐにでも越前に行こうとしたが、詳しい事態を知れば暴走する可能性があると指摘して久遠は止めた。

今は情報を集めて態勢を整えることが先決……二人は渋々了承した。

ひよ子たち流牙隊は小谷周辺の情報収集をすることになり、流牙は鬼殺しの切り札として英気を養いながら小谷城で待つ事になるのだった。

☆

早朝……流牙は適度に休憩しながら夜遅くから小谷城の周りを警備していた。

あれ以来鬼の襲撃がなくて少し安心しているが、それと同時に鬼の勢力が少しずつ広がっている事に大きな不安があった。

もし番犬所や他の魔戒騎士や魔戒法師の力を借りられればなんとか出来るかもしれないが、この世界に魔戒騎士は流牙一人だけ。

いくら最強にして最高の称号を持つ黄金騎士ガ口とはいえたった一人で未知なる敵の存在や数え切れない鬼を相手にするのは難しい。

そんな中、流牙は部屋に戻ろうとするとそこに寝間着姿の久遠が既に起きていた。

「おはよう、久遠」

「おはよう、流牙。早速だがこれから遠乗りをする。供をせい」

「良いけど、こんな朝から？」

「ああ。お前に見せたいものがあるんだ」

「分かった」

「市が遠乗りの用意している。馬屋に行こう」

久遠は着替えなどの支度をし、先に流牙は馬屋に行くと市が二人分の馬と朝と昼の弁当を用意してくれていた。

「お兄ちゃん、遅くまで警護をありがとう」

「気にしなくて良いよ。魔戒騎士として当たり前のことをしているだけだ」

「そっか、やっぱりかっこいいね！」

「ありがとう」

「ところでお兄ちゃんに一つ聞きたいことがあるんだけど……」

「何？」

「お兄ちゃんってお姉ちゃんの事が好きなんだよね？」

突然の市の問いに驚く流牙だが嘘をつくわけにはいかないので正直に話した。

「……久遠のことは好きだよ」

「でも、市が用意した一緒に布団で一緒に寝ていないよね？夫婦なのにどうして？」

幼き故の純粋な考えか女としての感がわからないが、市の考えに流牙は苦笑を浮かべた。

「市ちゃんには敵わない……みんなに話さないって約束するなら理由を教えるけど」

「うん！市、約束を守るから！」

「分かった、教えるよ。俺が久遠の夫になったのはあくまで男除けの魔除けって知ってるよな？」

「うん。最初は驚いたけど、今はちゃんとお兄ちゃんの事をとて大切に思ってるって」

「俺は久遠の事を大切に思っている、これは本当だよ。でも……一線を越える事は出来ないよ」

「どうして？」

「俺はこことは違う世界から来たのは知ってるよな？」

「……もしかして、その世界に家族が？」

「家族はいないけど、俺の帰りを待つ大切な相棒がいるんだ。それに、俺は黄金騎士としてホラーと戦い続ける使命があるから、元の世界に必ず帰らなきゃならない」

「どれだけ使命が大切か分からないけど、この世界にずっといれば良いじゃん！お姉

ちゃんや結菜お姉ちゃん、私やまこっちゃん、流牙隊や織田家の家臣のみんながいるんだら!!」

初めて出来た大好きな兄に行つてほしくないと願うばかりに子供らしく駄々をこねてしまう市。

いつもなら声を荒げてしまいそうになったが、流牙は優しく笑みを浮かべ、腰を下ろして市の視線を合わせると頭を撫でながら諭す。

「ごめんね、市ちゃん。それは出来ないよ……俺には今まで出会つた沢山の人たちの思いを背負つて戦っているんだ。黄金騎士としてホラーから人々を守り、闇を照らす希望の光にならなければならないんだ」

「でも……ホラーつて鬼よりも強くて強いんだよね?怖くないの?」

「怖くない……と言えば嘘になるけど、俺はこの命が続く限り、守りし者としてホラーと戦い続ける。だから、いつかは必ず元の世界に帰る」

「お兄ちゃん……」

「でも、少なくともこの世界から鬼を全部倒して、久遠の目指す天下布武で天下を統一するまでこの世界にいるからね」

「本当に?」

「ああ。大切なみんなや市ちゃんと眞琴が未長く平和に暮らせる世界になるように、黄

金騎士の名にかけて俺は戦うよ」

「……お兄ちゃん。必ず生きて、お姉ちゃんを、みんなを必ず守ってね」

「ああ……約束するよ」

「うん！市との約束、もし破ったら地獄の果てまで追いかけて愛染挽歌をお兄ちゃんにぶつけるよ!!」

「おう……それは恐ろしいな。市ちゃんにぶつ飛ばされないように必ず約束を守るよ」

流牙は拳を作ってから小指を立てて市に見せる。

「市ちゃんの小指を絡ませて。指切りげんまん、って言ってる俺の世界では親しい人同士で約束を交わす時の小さな儀式なんだ」

「指切りげんまんか、良いね！やろうよ！」

市も小指を立てて流牙の小指を絡ませて約束を交わす。

「指切りげんまん！約束守る！」

流牙と市は二人だけの約束を交わした。

（必ず守ろう、この太陽のような笑顔を悲しみに染めないように……）

流牙にとって初めてできた大切な妹の笑顔を守るために必ず約束を果たすと心に強く誓うのだった。

その後、着替えた久遠と合流し、市に見送られながら小谷城を出た。

まだ夜が明けてないうちに馬を走らせ、久遠の案内で着いたところは小谷城の近くにある大きな湖、淡海の岬だった。

「ここは市から朝日が見える場所だと聞いてな」

迎り着いた岬の先端……そこには素晴らしい光景が広がっていた。

昇る朝日と彼方に見える今浜の平野……そして広大な淡海の水平線。

湖だがるまで海のように一面の青で見るもの全てを感動させるような美しさだった。

「なるほど、これは絶景……。市の目は相変わらず確かだな」

「ああ。こんなに綺麗で大きな湖は初めてだよ」

「そうなのか？」

「でも、世界には俺たちの想像出来ないようなものがたくさんある……。いつか久遠やみんなにも見せてあげたいよ」

「本当か？いつか……お前の世界をこの目で見てみたいものだ」

久遠は淡海を眺めながら流牙のいる世界に思いふけていると、朝日の中から何かを見つけた。

「何だ？あれは……白鷺か……？」

久遠は白い鳥のように見えたので白鷺か何かの鳥かと思った。

流牙は目を凝らしてその小さな影を見つめると……。

「っ!? あ、あれは……!?」

その影が一体何なのかすぐに理解し、立ち上がってザルバのカバーを開いた。

「ザルバ!」

『どうした、こんな朝から……む? この気配は……!?』

「こんなところで出会えるなんて……あ、そうだ!」

流牙は魔法衣から本来なら魔戒騎士が持つことはない、魔戒法師の武器である魔導筆を取り出した。

その魔導筆は亡き母、波奏の物であり、ボルシテイで弔った後に遺品として流牙が受け取って大切に持っていた。

そして、その影がだんだん近づいてくるとその馬よりも大きく、空を軽やかに飛ぶその姿に久遠は驚愕した。

「鳥……じゃない!? な、何だあれは!?」

少しずつ近づくとつれ、まず目に映ったのは純白に輝く雪のような穢れなき毛皮だった。

その綺麗な毛皮を持つ白い生物はゆっくりと流牙と久遠の前に降りた。

近くで見るとその生物はこの世のものとは思えないほどの美しい姿をしていた。

まるで想像上の生物である麒麟を彷彿とさせるような姿をしており、背中から生えて

いる翼はとても大きく上下に羽ばたく度に光の粒子を撒布していた。

地面に降り立っていた白い生物は翼を羽ばたかせると、流牙はとつさに久遠を抱き寄せた。

「り、流牙!？」

「じつとして……」

『「こいつは驚いた。滅多にお目にかかることができない霊獣だぞ!」』

「霊獣……?」

「ああ……俺も見るの初めてだ。まさかこの世界で見られるなんて……」

霊獣とは魔界に住むホラーとは異なる存在で時空を行き来すると言われている伝説の生物である。

流牙は波奏の魔導筆を右手で持ち、久遠の前に持つていく。

「一緒に魔導筆を持つて」

「う、うむ……」

流牙と久遠は魔導筆と一緒に持つと、霊獣は静かに宙に浮いてそのまま流牙と久遠の周りを静かに飛び始めた。

周りを飛ぶ霊獣は既に手が届く距離まで近づいており、二人は魔導筆を翳してそのまま優しく霊獣の体を撫でるように触れた。

魔導筆が靈獸に触れると白く輝く粒子が筆先に宿り、靈獸から放たれる光が強くなつて流牙と久遠を優しく包み込んだ。

その瞬間、二人にはある光景が見えていた。

その光景とは光の中に浮かぶ人の姿……それは流牙と久遠で異なっていた。

流牙には莉杏と波奏と符礼と久遠。

久遠には結菜と流牙。

それぞれ別の人を思い浮かべていたが、互いを強く思いあつていた。

二人に大切な人の姿を見せた靈獸はもう一度二人を凝視すると再び翼を羽ばたかせて空へと飛んで行った。

靈獸が飛び去るとその翼から二つの白い羽根が舞い落ち、流牙と久遠は羽根を優しく掴んだ。

そして、二人は靈獸の姿が見えなくなるまでその白き光を瞬きをせずに見続けたのだった。

やがて、靈獸の姿が見えなくなると久遠は全身の力が抜けるようにその場に座り込んだ。

「久遠、大丈夫……?」

「う、うむ、大丈夫だ……あまりにも美しすぎて言葉が出なかつたぞ……」

「そうだな……俺も感動したよ。でもどうして霊獣を見れたんだろう？ 確か霊獣は時空を歩き来して、俺たちとは違う時の流れを生きているから特殊な薬を飲まないで見られないはずだけど……」

『恐らくはこの世界の時の流れが流牙のいた世界と異なるからだだろう。偶然かどうかは知らないが、この世界の時の流れが霊獣の時の流れと一致したから二人に見えたんだろう』

「一つ気になることがある。流牙と一緒に霊獣が触れた時、結菜の姿が思い浮かんだんだが……」

　本当は流牙の姿も見えたのだが久遠は恥ずかしくてそのことは言わなかった。

「霊獣の体に触れることが出来た者は、その人にとって最も大切な人や物が見えてくると言われてるんだ。俺も母さんや法師の姿が思い浮かんだよ」

『霊獣は魔戒法師にとつても貴重な存在だ。その毛皮は流牙が今持っている魔戒法師の武器である魔導筆の材料になったり、肝は黒母の実で煮込めば万病の薬になると言われている。それに、流牙の魔法衣も霊獣の毛皮から作られている』

「そうだったのか……流牙達の世界にとって貴重な存在を見られた私はとても幸福だな」

『霊獣を見て触り、羽根を手に入れたんだ。幸福どころの話じゃない。お嬢ちゃん、きつ

とお前さんの目指す天下布武も夢じやないぞ?」

「本当か? 霊獣がこれからの未来を祝福してくれたのかもしれないな……」

羽根を空にかざしながら見果てぬ夢に思いをはせる久遠だった。

一方、流牙は霊獣の羽根を見ながら幼い頃、母が読み聞かせしてくれた絵本……『白い霊獣と仮面の森』を思い出した。

まさかこの世界で幼い頃の夢を叶えることができるとは思わなかった。

そして、霊獣の光を宿した魔導筆を見ながら次は波奏と符礼のことを思い出していた。

「母さん……符礼法師……」

二度とその姿を見ることないと思っていた母と師を霊獣の奇跡で見ることが出来て流牙はこの上ない感謝の気持ちを霊獣に送る。

「ありがとう、霊獣……」

流牙は魔導筆と羽根をしまい、再び腰を下ろしてしばしの間、霊獣と出会えたことの余韻に浸りながら綺麗な湖を眺めるのだった。

『融』 Fusion 『』

流牙隊は小谷周辺の調査を行うこととなり、二手に分かれることとなった。

流牙は鬼の動向などを調べ、ひよ子達は周辺の村々で聞き込みをする。

夜にとある村で合流し、情報を伝え合うとエーリカは美濃方面に鬼が向かっているという情報を掴み、流牙は翌朝に一人でその鬼達を探しに向かった。

すると、鬼の悲鳴や剣戟の音が響き、森から開けた場所に出ると……。

「ひゃっはー……」

槍を持った親娘が鬼を蹂躪して全滅させていた。

「あれは……森一家の親子？」

呆然として見ていると森一家の頭……桐琴が流牙に気付いた。

「おう何見てんだ小僧……って、てめえは……殿の夫、道外流牙、だったな？」

「ああ。そちらは森一家の桐琴さんと小夜叉ちゃんだったよね？」

「あーっ!? 誰がちゃんだ誰が! きめで呼び方すんじゃねーよ!」

「じゃあ小夜叉って呼んでいい？」

「ちっ……それなら良いぞ」

「それで小僧。貴様、何故ここににいる？ここは織田の勢力圏じゃねーぞ？」
「実は……」

不審がる桐琴に流牙達は堺行きから二条館、そして小谷城で起こった事を順に説明した。

桐琴は壬月達に黙って久遠と遠出したことを面白がって大笑いし、流牙は何故森親子がここににいるのか二人の性格からすぐに察した。

「もしかして、二人がここにいてももしかして、暇つぶし？」

「ほう？分かるか、小僧？」

「こう見えても旅をして色々な人間を見てきたからね。戦いが無くて暇だから鬼を狩っていてここまで来た……ってところかな？」

「ふつ、当たりだ。だけどお前にも原因があるんだぞ？」

「俺に？」

「お前が夜な夜な鬼を狩り続けているから尾張や美濃の鬼がめつきり少なくなっちゃったんだよ。だからここまで足を運んだのさ」

「なるほどね……。桐琴さん、小夜叉。二人に頼みがあるんだけど」

「頼みだと？」

「ああ。鬼の動向を掴むために手伝って欲しいんだ」

「ワシらがお前に手を？この悪名高き森一家に、鬼の探索なんてクソつまらん仕事に手を貸せと？」

「鬼の探索の仕事じゃない。尾張と美濃を守るため……そして、久遠の天下布武の夢を叶えるための仕事として手を貸して欲しい。二人は俺が知る中でもとても強い……鬼には決して遅れをとらない。だから、お願いします……」

流牙は姿勢を正し、頭を深く下げて二人に頼んだ。

「お、おい！殿の夫が頭なんか下げて良いのか!？」

立場上、仕える主君の夫が頭を下げてきたので流石の小夜叉も動揺していた。

「俺は立場は気にしない。今頭を下げているのは魔獣から人々を守る、魔戒騎士として二人に頼んでいるんだ」

「……分かった。手伝ってやる。但し！ワシらはワシらのやりたいようにやる。口を出したらぶつ殺す。それで良いな？」

「ああ。俺も出来る限りの事を手伝わせてもらおう」

すると桐琴は楽しむようなニヤリとした笑みを浮かべてさらなる提案をする。

「それから……これは個人的な事だが、ワシと戦え」

「桐琴さんと……!？」

「織田の家臣達を退けたその力……ワシに見せる」

「つまり、仕事の報酬として桐琴さんとの決闘か……分かった、良いよ。でも今じゃなくて後でお願い」

「おう！楽しみにしているぞ、小僧」

「おいおい！母だけずるいぞ！」

「じゃあ、小夜叉とも決闘もするよ。それで良いかな？」

「おう！おめえから強え気を感じるからな、楽しみにしているぜ！」

「その代わり、仕事の方は頼むね」

「分かってるって！」

桐琴と小夜叉の協力を約束してもらい、一旦その場で別れた。

ザルバはいくら相手が悪国最凶の武将親娘とはいえ、本当に決闘をするのか尋ねた。

『流牙、本当にあのお嬢ちゃん達と決闘するのか？』

「ああ。でも流石に命のやり取りのような戦いはやらないし、魔戒騎士としての正式な戦いの方法を提案する予定だよ」

『……そうか、お前が出ることはできないが、あの戦いのルールを使うんだな？それならお互い全力でやらないとすぐに負けるからな』

「そういうこと。よし、早くみんななところに戻ろう」

その魔戒騎士同士の正式な戦いのルールを決闘に適用させることにザルバも納得し

た。

流牙は小谷城へ戻り、先に帰っていると思われる流牙隊のみんななどの情報を整理しようとした。

しかし、小谷城は何やら慌ただしい様子で城の人に話を聞いてみると近くにある三田村で鬼が出現したと情報があり、真琴と市、そして久遠達が討伐に向かったとの事だった。

流牙は三田村の場所を教えてもらい、すぐに加勢に向かった。

流牙は風よりも早く走り、三田村近くまで行くとすでに鬼との戦いが始まろうとしてきた。

そして前線には真琴や久遠の姿があり、三体の鬼が真琴に襲いかかろうとしていた。

牙狼剣を引き抜いてから鏗鳴りをさせると鞘の三つの仕込み刃が展開する。

「はあああああつ!!!」

素早く振るった牙狼剣の鞘から三つの仕込み刃が空を切り、三体の鬼の顔に突き刺さり、その痛みに怯んだ。

流牙はその三体の前に降り立ち、牙狼剣を振るい、鬼を切り裂いた。

「流牙!」

「兄様!」

「遅くなった。俺も戦う！」

牙狼剣を構える流牙だが、この戦いは小谷を守るための戦いで浅井家の当主である眞琴さ手出し無用と流牙を下がらせようとした。

「いけません、兄様。これは浅井の戦いです！お下がり……」

しかし、その命令を黙って聞く流牙では無かった。

「悪いがそれは却下だ。俺達魔戒騎士は古の時代より、魔獣から人々を守るために戦ってきた。例え久遠が止めても、目の前に鬼がいるのを黙っているわけには行かない！」

流牙は地を蹴って鬼の群れに飛び込んだ。

「兄様!!」

「無駄だ、眞琴。流牙を……魔獣を狩り、人々を守るためだけに生きてきた魔戒騎士を止めることは出来ん。無論我にもな。ここは流牙の好きにさせる」

仮にエーリカなどが動いていたら止めていたかもしれないが、流牙の生い立ちや信念を知っている久遠は今の状況で流牙を止めることは不可能だと理解している。

「……仕方ありませんね。さて、兄様は……えっ?」

眞琴もようやく諦めて流牙を見ると一分にも満たない時間で既に十体の鬼を牙狼剣で斬り伏せていた。

死人を鬼に変える呪法を知り、魔導ホラーとの戦いを経験した流牙は一刻も早く鬼か

ら解放してあげたい気持ちが強くなり、ガ口の鎧を呼び出さなくてもいつも以上の力を発揮していた。

流牙のあまりの強さに眞琴や浅井の足軽達は絶句していたが、流牙の性格を知る久遠達はその強さの理由を分かっていた。

「……どうやら昔受けた心の傷に触れられていつも以上の力を発揮しているようだな」

「うひゃあ……お頭凄すぎ……」

「流牙様の強い気迫がこつちまでピンピンに伝わってくるね……」

「それに人を鬼へ変えている怒り……そして、鬼にされた人を解放したい慈悲の心が現れていますね」

「心の力が体に反映しているということですか……」

詩乃の言う通り、今までの人を喰らう鬼への怒りと鬼から人を守る信念で戦ってきた。

そこに小谷城の一件で人を鬼へ変える怒りと鬼にされた人を解放する慈悲が流牙の心の中で渦巻き、それが力となって流牙の強さを底上げしていた。

しかし、流牙だけが強くなっておらず、彼の持つ剣、牙狼剣も変化していた。

牙狼剣の刃を構成しているソウルメタルは使う者の精神力で硬軟と軽重を変化する特殊な性質を持つ。

今、流牙の高まりつつある心……強い精神力は当然牙狼剣にも影響を与える。

今まで簡単に断ち切ることが出来なかった鎧を纏った鬼……鬼を斬る瞬間に牙狼剣を鋼より硬く、そして人が持てないようなとんでもない重さに変化させて鬼をまるで豆腐を切るかのように一刀両断で斬り裂いている。

そんな今の流牙の姿を見て眞琴は浅倉家の当主として負けられない気持ちが出てきた。

「……浅倉衆よ！我が兄に続き、鬼達を殲滅せよ!!」

眞琴が浅井衆の先頭に立ち、刀を抜いてお家流を発動する。

「淡海の天行く鳩の羽は、悪を切り裂く正義の翼！北近江、浅井が当主・眞琴長政が諸悪の根源鬼を討つ！我が正義の刃を受けてみよ！出でよ、夕波千鳥！」

眞琴が刀を大きく薙ぎ払った瞬間、闇を斬り払うかの如く煌めいた刀の軌道を描くように現れたのは水の鳥だった

「行け！夕波千鳥！全ての鬼を切り刻め！」

眞琴の声に応えるように鳴いた水鳥は意志を持つかのように宙を滑り、凄まじいスピードで鬼を切り刻んだ。

しかし、その後信じられない光景が広がった。

傷ついた鬼達は他の鬼にかぶり付いてその肉を喰らっていた。

その衝撃的すぎる光景に誰もが恐怖という感情に支配され、動けなくなってしまうた。

しかし、たった一人だけは恐怖に支配されていなかった。

「恐れるな、江北の勇者達よ!!!」

それは数々のホラーと戦ってきた歴戦の魔戒騎士、流牙だった。

流牙は浅井衆を立ち上がらせるために声を上げた。

「お前達の手にはこの国と平和を望む民の未来が掛かっている！そして、未来を信じる民の希望だ!!」

牙狼剣を掲げ、円を描いてガ口の鎧を召喚し、その身に纏う。

「お前達の希望はこの場で共に戦っている真琴だ！真琴の心が折れない限り、お前達の希望の光は消えない!!」

黄金騎士ガ口の金色の輝きは浅井衆の心を震わせ、希望の光が宿る。

「……っ！道外殿の言う通り！僕はここにいます！ここに居るぞ！浅井衆！共食い鬼など何するものぞ！武功をあげよ！名を知らしめろ！江北が勇者ここにありと！」

「それでこそ私の旦那様だよ！まこっちゃん！」

「市っ！」

「お待たせ！あなたのお市、ただいま参上！さあ浅井衆のみんな、反撃だよっ！」

市の率いる別働隊がやって来て鬼の大群へ飛び込む。

そして、両手に闘具を装着し、その身に光を纏う。

「あなたの愛で私が染まり、私の愛であなたが染まる！この愛は全てを打ち貫く鋼鉄の愛！愛染が慈悲、しっかり受け止めて成仏するのよ！」

市は馬から高く飛んで闘具を掴む手の力を強くする。

「能滅無量罪、能生無量福！砕け！愛染挽歌あああー！つ！！」

雄叫びと共に殴りつけた拳は地面を砕き、天を貫くほどの威力だった。

吹き飛ばされた地面は鬼達をも巻き込み、天高く飛ばされてしまう。

「やるね、市ちゃん！」

「へへん！これが私の本気！愛染明王の力を借りて全てのものを粉碎する、愛染挽歌だよー！」

「我が妻、お市の愛により敵は総崩れとなった！浅井衆これより呐喊する！皆の者、僕に続けえー！！」

市の攻撃で敵の体勢が崩れ、浅井衆が一丸となって切り込んでいく。

しかし、切り刻まれ、共食いした鬼達の体が元に戻っていた。

「仲間を喰らって身体を復元したのか!?ふざけるなああああああ!!」

流牙の怒りが爆発し、同じく鬼の行動を許せなかった真琴と市も同じ気持ちで身体を

復元した鬼を攻撃していく。

こんな外道な鬼には負けたくない、そしてこの国と民を守る……そんな想いが流牙達の心を一つにした。

「うおおおおおおおおおー………うおおおー！！！！」

流牙の気合いの込められた咆哮……この場にいる戦う者達の心が重なり合った瞬間、奇跡が起きた。

「えっ!?ぼ、僕の夕波千鳥が!!」

「愛染挽歌の光が………!!」

眞琴が作り出した夕波千鳥の氷鳥が勝手に動き出し、市の纏う光が同時に流牙の元へ飛んだ。

そして、ガロの鎧が金色の輝きを増すと夕波千鳥と愛染挽歌を取り込んで青白い閃光の輝きを放った。

その青白い閃光に人と鬼関係なしに目をつぶり、光が止むとそこにいたのは今までのガロでは無かった。

その姿に久遠と眞琴と市は目を疑った。

「ガロの鎧が………」

「僕の夕波千鳥を纏った………!!」

「それに、愛染挽歌の力が……」

流牙の纏うガ口……牙狼・翔は夕波千鳥の氷鳥と愛染挽歌の光を取り込んでその姿を変えていた。

鎧を覆うような氷の美しい装甲に背中には巨大な氷の双翼。

両腕の鎧は一回り大きくなり、闘具に似た全てを粉碎するかのような手甲を装着していた。

そして、周囲には流牙の意思で自由自在に動く無数の氷の槍が浮いていた。

流牙と真琴と市、そしてこの小谷を守るために勇気を振るい立てて戦う者達の思いが集い、具現化した。

その名は……『氷天鳳凰・牙狼』。

ガ口の姿が変わり、流牙自身も驚いていたがそんな暇はなく、真琴と市に視線を向け

る。

「……真琴、市」

「は、はい！」

「う、うん！」

「行こう、一緒に！」

「……はいっ!!」

「うん！お兄ちゃん！！」

眞琴と市は流牙のガ口と自分達のお家流が一つになり、一緒に戦っていると気持ちが高まる。

「夕波千鳥!!!」

再び夕波千鳥で氷の白鳥を作り出し、鬼を切り裂いていく。

「愛染挽歌!!!」

切り裂いた所に市の愛染挽歌を纏った闘具で全力で殴り飛ばす。

「はあああああっ!!!」

流牙が牙狼剣を掲げて振るうと無数の氷の槍が一斉に舞い、鬼達を次々と串刺しにして氷漬けにする。

そして、握りしめた拳を全力で氷塊を殴りつけ、中にいた鬼と一緒に氷を粉々に砕いた。

牙狼剣と同じソウルメタル製のガ口の鎧が夕波千鳥と愛染挽歌を取り込んだことで、魔獣に絶大な効力を与える『氷の力』と『剛の力』を精製した。

次々と精製する氷の槍を操り、そして拳で粉碎して鬼の数を一気に減らしていく。

「これで終わりだ!!!」

氷の槍を集め、掲げた牙狼剣に収束させて巨大な氷の大剣を作り出した。

最後の鬼達に向けて振り下ろし、全ての氷の力を叩きつけて一瞬にして鬼達を氷結させ、小さな氷の山を作り出した。

最後に流牙の必殺の右拳で氷山を粉碎し、全ての鬼を討滅すると、ガ口の鎧を魔界に送還する。

呆然とする流牙に眞琴と市が駆け寄る。

「兄様！どうして僕の夕波千鳥が鎧と一つに!？」

「私の愛染挽歌もだよ！あれでドカーンって拳で氷を粉碎しちゃったし！」

「俺も何でああなったのか……」

チリーン！

鈴の音が響き、ザルバのカバーを開いた。

「ザルバ？」

『それなら俺様が教えてやろう』

ガ口の鎧と共にあるザルバはあの現象について説明する。

『ガ口の鎧の素材であるソウルメタルは人の心と精神に感応してその形が変化する性質を持つている。纏っている騎士やその周りにいる人々の強い想いに反応してさつきみたいな現象が起こることがある。今回はお嬢ちゃん達や足軽達の鬼からこの国を守りたい強い気持ちがあつたガ口を生み出したのだろう』

「僕達の想いで……?」

「あのガ口を……?」

「ザルバ殿、一つお尋ねしますが、ガ口は今後あの氷を纏った姿にいつでもなれるのですか?」

聡明な詩乃は今までの話を聞いて氷天鳳凰・牙狼の力をいつでも使えるのか尋ねた。

『いいや。この変化はあくまで偶発的なものでいつでも使えるものじゃない。恐らくは今回だけだろう』

「そうですか……」

詩乃は流牙が氷天鳳凰・牙狼の力がいつでも使えれば戦略の幅が広がると密かに期待していたが、流石にそう上手くいくわけがないので少しがっかりした。

「しかし、ガ口とお家流の力が一つになるとは……もしかしたら今後他のお家流を持つ者と流牙が戦う時、そういうことがあるかもしれないな」

「そうかな……?」

久遠に言われるがピンとこない流牙は頭をかきながら牙狼剣を見つめる。

「とりあえず、この辺にいる大体の鬼は倒せたけどまだ残りがいるかもしれないから見回りに行ってくるよ。みんな、後のことは頼む」

「……流牙、無茶はするなよ。持っていけ」

久遠は陣中食としてもってきた金平糖の入った包みを流牙渡した。

「ありがとう。行ってくる」

「うむ、行って来い」

流牙は久遠の頭を撫でてそのまま村を後にして鬼の探索へ向かった。

『狩　　〜　H u n t i n g　〜』

小谷城や三田村での鬼との戦いから早数日。

流牙達は眞琴が越前に放った草の持つてくる情報を静かに待っている。

うららかな日差しに包まれた部屋で、真剣な眼差しで書物台に向かっている久遠。

エーリカで庭で剣を抜いて、精神を集中しており、流牙はそれを眺めていた。

すると、その身に青白い光を放って剣の型の練習をしていた。

「エーリカ、その光はなんだ？」

「これは、天より降り注ぐ神の御力を、私という媒体を通して剣に流し込んでいるだけの物です。鬼には絶大な効果を発揮しますが、もつとも先日鬼との戦いでは見せられませんでした」

「神の御力ね……　神様っているんだね」

見たことない神の存在を頭の片隅に置きながらふと久遠にあることを尋ねた。

「なあ、久遠。エーリカのは神の御力ってやつらしいけど、他のみんなが使ってるお家流は、何なんだ？あれってみんなが修行して会得したもののなのか？」

「ふむ。お家流にはいくつ種類があつてな。一子相伝のものもあれば、修行をすれば

誰でも会得できるものもある。それに、その氏族しか使えない秘術というものもある。
……人それぞれだな」

「なるほど、やっぱり魔戒騎士の鎧や魔戒法師の法術に似ているな」

「そうだな。そう言えば魔戒騎士の鎧は一子相伝のものだったな。鎧は祖父から受け継いだのか？」

父親の存在を知らないと言っていたので祖父からガ口の鎧を受け継いだのかと尋ねるが、流牙は首を傾げた。

「……さあ？」

「さあつて、お前の先代から受け継いだのではないのか？」

「俺さ、黄金騎士の系譜の一族じゃなくて、『ジンケイ』って言う魔戒法師の一族の末裔なんだよ。ちなみに莉杏と符礼法師も同じ一族で、今じゃ生き残りは俺と莉杏だけだよ」

「どういうことだ……？」

「俺が生まれるよりも前の話だけど、先代の黄金騎士は大きな戦いでホラーから人々を守るために黄金の輝きを解き放って、鎧は漆黒になったんだ。そこで一旦黄金騎士の系譜が途絶えて、少なくとも母さんたちが子供の頃から俺が継承するまで長い間ガ口の継承者は現れなかったんだ」

「つまり……本来なら黄金騎士の系譜を持つ者が継承するはずだったガ口の鎧を、全く関係のない流牙が受け継いだということか!？」

実際、黄金騎士ガ口が復活したことは対峙したホラーにとっても衝撃的で伝説だと目を疑うほどだった。

「そう言うことだね。今まで誰にも抜けなかつた牙狼剣を俺が抜いて鎧を纏った時、符礼法師は興奮したって言ってたぐらいだし」

「血筋というのはとても大切に束縛されるものがある。だがお前は血筋や系譜の概念を打ち破り、その不屈の精神でガ口の鎧を継承したのだな……」

「でも、本当の意味で牙狼剣が認めてくれたのは一度この目を失ってから、絶望から這い上がって、諦めずに走り続けたからだけどね。それに母さんのお陰で鎧の輝きを取り戻したから、俺と母さんの二人でガ口を蘇らせたんだ」

「親子でガ口の鎧を復活させた……お二人の絆は素晴らしいです」

ガ口の小話が終わったちようどその時に小走りで市がやって来た。

「お兄ちゃん！お姉ちゃん！越前に放っていた間者が戻ってきたよ！」

「来たか……！うむ、眞琴と共に聞く。報せ、苦勞」

「行くか……」

評定の間では既に眞琴や武将達が集まっていた。

小谷を発した五十の足軽達は、越前の国境を超え、各所に分散して情報を収集していた。

しかし戻ったのは、たった三名のみ。

そのうちの一人が越前一乗谷まで侵入し、重大な報せを持ち帰った。

それは……一条谷が満ち溢れ、地獄と化していることだった。

鬼は一乗谷の城を中心に巣くっている様子で、まるで誰かに統率されているようだった。

エーリカが言うには鬼には幾つかの階級があり、本能のままに動く下級の鬼、その下級を統率する中級の鬼、そしてその上にいるのが……全てを統率する上級の鬼。

今まで流牙達が相手をしてきたのは殆どが下級の鬼で、手強かったのは中級の鬼らしい。

更に鬼は素材の質によって、その能力が大きく変わり、運動能力が優れた者が鬼となれば、鬼もまた運動能力の高い鬼になる。

知力についても同じで、もし武士が……それも仕官級の武士が鬼となれば、鬼も軍隊として機能し始める。

「ますます魔導ホラーに似ているな……」

実際に魔導ホラーにされた熟練の魔戒騎士だった尊士はホラーと騎士……両方の力

を備えていたので、並の魔界騎士ではまともに相手に出来ないほどとても強力な敵だった。

そして、眞琴は尊敬する姉である義景が鬼になったことを信じられず酷く落ち込んだ。

しかし、落ち込んでいる余裕は無かった、この国を守るために越前からの鬼の侵略を抑える決意を新たにしたら。

小谷で報告を受けたあと、流牙達はすぐに旅支度を整えて美濃へ出発した。

幾つものの山を越え、見慣れた風景が見えてきてようやく美濃へ到着した。

「帰ってきたな」

「結菜に帰ってきた事を伝えに行こう」

評定を開く前に流牙達は結菜の待つ久遠の屋敷に向かった。

「ただいま！」

「あら、お帰……異人さん!？」

出迎えた結菜は流牙と久遠を笑顔で迎えるが、エーリカの存在に驚いていた。

「お初にお目にかかります。我が名はルイス・エーリカ・フロイス。日の本の名は明智十兵衛と申します。母の名は槇」

「はあ、つて!?! 槇おばさん?！」

「母を知っているのですか？」

「榎おばさんのお姉さま……明智光安どのと、私の母である斎藤利政は親友だったもの。私とは遠い親戚になるはね、よろしくエーリカ」

「はい、よろしくお願ひします」

結菜とエーリカが遠い親戚だと知り、喜び合う二人だった。

「話は終わったか？」

「終わったわよ。……二人ともお帰りなさいませ」

「ただいま」

「うむ。積もる話もあるが、すぐに軍議に出る。夕食の用意を頼むぞ」

「はいはい。久遠が食べたいのは分かるからいいけど。流牙は食べたいものはある？」

「そうだな、ご飯と味噌汁があればいいよ！」

「そんなので？まあ、楽だからいいけど」

「よろしくな」

「はいはい。じゃあ軍議を終えたらぐらいいにご飯にありつけるようにしとくから。がんばってらっしゃい」

「行ってくるよ」

急いで評定の間に向かうと、そこには懐かしの三若の和奏、雛、犬子に麦穂と壬月の

姿があつた。

ちなみに壬月から凄いい睨みを利かせた目で流牙を見ていたが、流牙は知らん顔をしていた。

そして、軍議が始まり、エーリカの話と流牙が聞いた小谷の話……現在、この日の本で起きている異変を伝えた。

鬼の話聞き、一同は表情を曇らせる。

「だが、我の方針は変わらん。天下布武である!!」

堂々と言い放つた久遠は勢いよく立ち上がりながら壬月達に指示を出す。

「此度の戦は織田・松平勢の総力を挙げ、疾く疾く中山道を駆け下り、六角、松永、三好を破り、公方と共に小谷で浅井と落ち合う流れとなる。全てにおいて疾きことを要求される、難しい戦となろうが皆の奮戦を期待している! 皆のもの戦支度に取りかかれい!」

「「はっ!」」

久遠の言葉に応えたみんなが戦の準備に掛かるため、我先にと駆け出していく。

「いよいよだな、久遠」

「……………」

流牙の言葉に久遠は応えず、誰もいなくなつた上段の間の天井を、まるでにらみつけ

るように見つめていた。

「久遠、今考えてる事当ててやるよ。未知の敵との戦うという不安、戦への恐怖、後々のことを考えて臆病になっている……どうだ？」

「……………ふんっ」

認めたくないようにそっぽを向き、その顔を両手で優しく掴んで無理やり目線を向けさせる。

「素直になれよ久遠。俺達が支えてやる、お前を支えてやりたい奴らがいるんだ。だからだ、仲間を、自分を、俺を信じろよ」

「……………そんなこと、できるはずが」

「やれやれ………当主と言ってもやっぱり年頃の女の子だよな」

「なっ!?! 我を愚弄するつもりか!?!」

「そんなつもりはないよ。今から久遠に希望を見せるよ」

「希望………だど?」

流牙は久遠から少し離れると魔法衣から牙狼剣を取り出して抜き、頭上に円を描いて光の陣を浮かび上がらせる。

「流牙、何を……?」

普段ならこのままガ口の鎧を纏うところだが、流牙は牙狼剣を手放して一步後ろに下

がる。

牙狼剣は宙に浮きながら大剣の姿となり、陣が魔界を開く扉となつて中からガロの鎧が召喚されて久遠の前に現れた。

大剣を構えるガロの鎧が飾られるように現れ、何度見ても飽きないその金色の輝きに久遠は思わず手を伸ばしそうになつた。

「触っちゃダメだ。ソウルメタルに触ったら皮膚が裂かれるよ」

「そ、そうだったな……」

久遠は慌てて手を引っ込め、流牙はガロの鎧に触りながら話を始める。

「ガロと言う名前は旧魔戒語で『希望』を意味するんだ」

「ガロが希望……?」

「ああ。古の時代からガロはホラーに狙われる人々と共に戦う魔戒騎士と魔戒法師の希望なんだ。そして、ガロは数々の奇跡を起こしてきた……」

黄金騎士ガロ……その名の通り、生きとし生ける人々の希望であり、ホラーにとって最大の脅威である唯一無二の存在。

それはこの世界でも変わらぬ希望の存在となりつつある。

「久遠、恐怖や不安は俺にもある。かつて俺は敵の罠に落ちて、絶望を与えられて闇の中に落ちかけた……だけど、莉杏の言葉で俺は光を見つけることができた」

「光、か……」

「久遠、君は一人じゃない。俺や結菜、流牙隊のみんなにエーリカ、壬月に麦穂さんに三若、小夜叉に桐琴さん、眞琴に市ちゃん、そして京にいる一葉に双葉に幽……みんなの心は久遠と共にある」

「流牙……」

久遠は流牙の言葉で少しずつ勇気が湧いてきて、流牙は飾られた牙狼剣を抜き、そのまま鎧を纏うと牙狼剣を久遠に向けて掲げる。

「黄金騎士ガ口の称号を受け継ぐ者として、久遠の希望の光になる。必ず、鬼を全て討滅してこの日の本を平和にし、みんなが幸せに暮らせる天下布武を掲げよう!!」

そして、久遠は流牙の言葉に応えるために置いてある刀を取り、鞘から抜いて牙狼剣と刃を交差させる。

「流牙……私の希望の光、お前に託した！お前が絶望に消えぬ限り、私の希望も消えない!!この国を平和にし、私の夢を現実にするため、最後まで共に戦おう!!」

二人の固い絆が結ばれると共に一つの誓いが交わされた。

それはこの国を鬼から守り、人々が平和に暮らせる世を作るため。

しかしそれは二人に困難な道が待ち受けるのであるが、その事をまだ知る由も無かった。

☆

美濃に戻ってから早数日、織田家では上洛の準備が進められていた。

しかし、勝手にわからない流牙は特にやることがないので……。

「おーい、流牙あー！早く行くぞー！」

「ああ、行くうか」

森一家の桐琴と小夜叉と共に鬼狩りに向かっている。

小谷での依頼をしてから桐琴と小夜叉は積極的に鬼の巣を探し、それを流牙と共に狩りに出かけている。

ちなみに流牙との決闘の件はすぐに行われるかと思つたが楽しみは後に取つておくと言ふことではばらく後に行うらしい。

そして、鬼狩りをしていくうちに凶悪な鬼と遭遇した。

その鬼は鬼に犯された女が産んでしまった鬼と人のハーフ、鬼の子。

成長はとも早く、知恵もあつて強く、流牙はすぐさまガ口の鎧を召喚し、烈火炎装などを使つた全力で何とか倒すことができた。

国産の鬼はとも強く、鬼の子を発生させないためにも地道に鬼の巣を狩つているのだ。

流牙達は馬に乗り、桐琴と小夜叉と共に東の方へ向かう。

「そう言えば森家には有名な馬があるって聞いたことあるけど、小夜叉が乗ってるのがそれ?」

「これは普通の奴だぜ。百段はここにいるぜ」

小夜叉は腰につけている瓢箪を指差す。

「え?その中に?」

「百段は普通の馬ではないからな。瓢箪にでも封印しとかんと、誰でもかれでも喰らって手がつけられん」

「何それ!?もしかして魔導馬?!」

「魔導馬?何だそれ?」

「名前からして、お前達魔戒騎士関連のものか?」

「ああ。魔導馬は通算で百体のホラーを討滅した魔戒騎士が自らの内なる世界で課せられた試練を乗り越えることで得られる大いなる力なんだ。主人に忠実で止まることのない強靱な足で戦場を疾駆し、その蹄音で魔戒剣やわ変質させる力を持つんだ」

魔導馬を召喚出来る魔戒騎士は他の魔戒騎士とは一線を越える強さを持つ事と同じ意味を持つのだ。

「たった百体か?それならすぐに手に入れられるんじゃないの?」

既に何百体の鬼を殺している小夜叉はそう言うが、ホラーに関してはそうもいかな

い。

「そう言っても、そもそも魔戒騎士はホラーの発生を抑える仕事もあるから熟練の騎士でも百体単位のホラーと戦い続けるのは極稀なんだよ」

「流牙は最強と呼ばれている黄金騎士なんだろ？百体ぐらいもう倒してるんじゃないかねえの？」

小夜又は流牙と一緒に何度も鬼狩りに出かけていて、間近でその実力を目の当たりにした。

その狂気じみた強さ故にあまり他人を認めない小夜叉だが、流牙の事はすぐに認めた。

「うーん……確かに百体は倒していると思うんだけど、まだ試練が来てないんだよね。何でだろう？」

流浪の旅で向かった各地とボルシティとラインシティなど色々な地でホラーを狩り続けてきたので既に魔導馬を継承する試練が来てもおかしくないが、今の所ガロや流牙自身に何の変化はない。

「単純に小僧がぶち殺す数が足りてないか、その魔導馬に何か原因があるのかもしれない」

「まあ、魔導馬が無くても一応それに代わる力があるからいいけど」

それは流牙が手に入れたガロのもう一つの姿にする力でこの世界に来てからはまだ使用していない。

「ほう、それは興味があるな。おい、この後の鬼狩りでそれを見せろ」

「いやいや、切り札は最後まで取っておくからお預けですよ」

「はっはっは！ なかなか言うな、小僧！ ん？ あれは……」

すると桐琴は目を細めて何かを見つけた。

「何やら向こうに砂埃が見えてな。……馬が何頭か駆けてくるな。それに、あそこには流牙隊の確か詩乃と言う小娘が見える」

「詩乃が!? 三河に使いに行つてたはずだけど……」

「まさかウチのモンに手出しを!? どうなるか思い知らせてやるぜ!」

「ちよつ、小夜叉!」

「ワシも行くぞ!!」

「桐琴さあん!!」

敵か味方か分からずに二人して馬を走らせて突撃していく。

「ああもう! この戦闘狂親子があっ!!」

流牙は頭を抱えてすぐに馬を走らせて二人の後を追う。

『交 ～Cross～』

ある日……上洛の準備がひと段落し、屋敷で一休みしている久遠に結菜が訪ねて来た。

「ところで、久遠。京と堺の旅で流牙とどれくらい進んだの？」

「ぶっ!?!いきなり何を言い出すんだ！」

久遠は飲んでいたお茶を吹き出しそうになり、顔を真っ赤にする。

「だって気になるじゃない。流牙に聞いてもあの鈍感さんに聞いてもねえ……」

「た、確かにそうだな……流牙とは堺で買い物をして、小谷で一緒に風呂に入って……」

「あれ？一緒の布団で寝てないの？」

市から小谷城での久遠と流牙の日々を書いた手紙を貰っており、一緒の部屋で一組の布団で寝ていると書いてあったが久遠は首を左右に振る。

「……流牙は小谷の一件以来、寝る間を惜しんで鬼の調査や城の警護、更には討滅に出掛けていたからな……」

「はあ……魔戒騎士の自ら行う重労働は恐ろしいわね。久遠一人じゃ、いつまで経っても莉杏さんには勝てないわね……でも流石にそれだけじゃないわよね？旅だから何か

話でもしたんじゃない？」

流牙の世界風に言うならワーカーホリック気味な夫に呆れる妻の結菜だった。

「話、か……」

久遠は流牙の話で暗い表情を浮かべた。

「ちよつと久遠、どうしたの？」

「……結菜、流牙の妻として知っておいて欲しいことがある」

久遠は京で聞いた流牙の過去であるボルシテイの戦いを話した。

「壮絶で過酷な戦いと愛する者の悲しき別れ……それを知った結菜は大粒の涙を流した。」

「そんな……流牙と流牙のお母様にそんな辛い事が……」

流牙から母の波奏が自分の目を犠牲に敵に潰された目を治してもらった事を聞いていたが、まさかそれ程までに辛い出来事が降りかかっていたとは思わなかった。

特にガ口に黄金の輝きを取り戻し、大切な約束を果たしたその直後にホラーになりかけている波奏を人間として死なせる……優しい流牙にとつてこの上ない悲しみであると理解した。

「流牙は母上殿の愛と約束があつたからこそ、優しく、強い魔戒騎士になれたのだ……」

「そして、お師匠様である符礼法師さんの厳しさと思いやりがあつたからこそ痛みも苦

しみも乗り越えてきたのね……」

「うむ……だが、それと同時に恐ろしいのだ」

「恐ろしい……?」

「流牙は私の希望の光になってくれると言った。流牙はとても優しく、情の深い男だ……この何が起こるかわからない戦国の世で流牙は闇に堕ちてしまうのではないかと不安でいっぱいなのだ」

「そうね……支えてくれる誰か、この世界に来るまでは莉杏さんが支えていたのよね。よし……決めた!」

結菜は何かを決心した表情をすると拳を握りしめて立ち上がった。

「結菜?」

「久遠、一つお願いがあるわ!!」

「お願いだと?」

「ええ!」

結菜の願い……それは表舞台には決して出なかつた結菜の一大決心だった。

その願いは久遠、そしてこれから知る流牙を驚かせる内容だった。

☆

一方……鬼狩りに出掛けていた流牙は一足遅れて詩乃の元に到着すると既に桐琴と

小夜又は詩乃を襲っていると思われる。騎馬武者達に喧嘩をふっかけていた。

詩乃は無事です。その後ろにいたのは松平家中の武士で美濃に連れて行く途中だった。

「桐琴さん……知ってて喧嘩をふっかけてた。久遠の夫として面倒なことにならない内に止めないと……」

「心の底より、ご武運をお祈り致します……」

「ああ。行ってくるよ……」

頭に若干の痛みを抱えながら流牙は魔法衣から牙狼剣と牙狼刀を取り出して走り出した。

すると、小夜又と桐琴は大きな数珠に鹿のような角をつけた少女と戦っていた。

その少女はとても強く、小夜又と桐琴を押ししていた。

流牙は牙狼剣と牙狼刀の鞘を抜いて三人が槍を振り下ろした間に飛び込んだ。

「それまでっ!!!」

ギイン!!!

「くっっ?!?!」

流牙は三人分の槍を牙狼剣と牙狼刀で受け止め、全身に力を込めて何とか踏ん張った。

「ああ!?!」

「おう!？」

「あや!？」

「三人共、戦いはそれまでだ!この場は俺が預かる!!」

そして、三人の槍を弾き返し、謎の少女の方に視線を向ける。

「あなたは……」

「俺は道外流牙。織田家中、流牙隊の隊長で松平へ使いに行つた詩乃の上司。そして二人は織田家中の武士だ。すまないことをした……」

「あなたが流牙様でしたか。なるほどお、これはあれですか?力試しとか腕試しとかいう、そういうのです?」

「まあそんなところだね……」

少女は納得すると槍を引いて名乗つた。

「我が名は本多平八郎忠勝、通称、綾那というです。見知りおいてくださいです、流牙様!」

「こちらこそよろしく」

「へへ~~~~♪」

綾那は流牙を見るなり照れながら喜んでいた。

「どうしたの?」

「あのですね。綾那はですね、ずーっとずーっと流牙様にお会いしたかったです♪」
「え？俺に？何で？」

「実はですね、流牙様は田楽狭間で、綾那の前にご降臨なされたのです！」

「田楽狭間って俺がこの世界に来た時か……その時俺は意識を失ってたけど、近くにいたの？」

「そうです！三河衆は、田楽狭間では隅っこに追いやられていて、異変に気付くのが遅れたです。で、慌てて駆けつけた時にー」

「俺が落ちてきたのか？」

「です！雨が降る中、流牙様が落ちてきたところだけ、お日様がブワーツと照らしてて……話聞く阿弥陀様がご降臨されたのかと思っただです！」

「俺は仏じゃないし、人間だからね」

「あの時の光景を綾那は今でも夢に見るですよ！それに、綾那、流牙様の後ろにピカーツて光が見えてるですよ？」

「光ってないよ!?!むしろ光ってるのはガ口の鎧の方だから！」

「やれやれ。相変わらずの誑しっぷりですね、流牙様は……」

「詩乃おっ!?!だからそれ誤解だから！何もしてないよ!?!」

呆れ果てている詩乃に流牙は弁明したいが、既に諦めている詩乃の耳には届かなかつ

た。

一方で桐琴と小夜叉と綾那は気が合うのか互いに笑いあっていた。

そして、流牙達がここに來た理由を話すと……。

「はあ~~~~~……」

詩乃は呆れ果てていた。

「そこまで呆れなくても……」

「いくら流牙様が魔戒騎士とはいえ、最近は無茶しすぎです!」

「魔戒騎士は多少無茶をしてなんぼだよ」

「それでも!これほどまでに危険なオイタは感心できません!久遠様と同様、流牙様は我らの玉体で在らせられるのですから!」

「なんか前にダイゴが少し似たようなことを言ってた気がするけど……大丈夫、俺は絶対に死なないから」

「全くあなた様は……それに久遠様がお考えになつていゝであろうことを実現するためには流牙様のお力が絶対に必要なのです!」

「久遠の考へてること?」

「さて。今の状況と結菜様が先日お話しして鑑みた上で導き出した持論ですから確たることは言えませんが、それは時期が来れば久遠様よりお話があることでしよう」

謎解きのような詩乃の言葉に首をかしげる流牙に桐琴達は待ちきれない様子で、今回の鬼狩りに詩乃も力を貸すと言う。

すると、綾那は足軽に誰かを呼ぶよう頼んだ。

「誰か、歌夜を呼んでくるです！」

「歌夜？」

「歌夜は綾那の親友なのです！元康様の親衛隊の一人で榊原小平太康政つて言うです！歌夜は頭が良いですからさつきの話も聞いてもらおうです！」

少しして奥から一人の少女が近づいてきた。

「綾那、何か用？」

そこに現れたのはおっとりとした雰囲気少女でまるで綾那の姉のような感じだった。

「こちらが詩乃のご主人様であり、織田の殿さんの夫さん！それに歌夜と二人で見た、あの田楽狭間のー」

「もしかして、道外流牙様？」

「ですすですーっ♪」

「まあ……これは失礼しました。まさか本物の流牙様にお会いできるとは思いもよりませんで……我が名は榊原小平太康政。通称、歌夜と申します。流牙様はお気軽に、歌夜

とお呼び捨ててくださいませ。そして綾那ともども、お見知りおきを」

「こちらこそよろしく、道外流牙だ。えっと、歌夜さん」

「歌夜、でございますよ、流牙様」

「分かった、歌夜。鬼の巣のことなんだけど……」

流牙はこの近くに鬼の巣があり、今から鬼狩りに向かうことを説明した。

ちなみに鬼の規模は三十でかなり多く、その事実を知った詩乃は更に呆れ果てあ。

「はあ………三十の鬼を、たった三人でどうしようと思っていたのですか!」

「ぶち殺そうと思っていた」

「ぶち死なそうと思ってた」

「切り裂いてやろうと思ってる」

重なった桐琴、小夜叉、流牙の三つの声に詩乃は大きな頭痛を抱える。

「はあ………! 全く、この三人は!」

「心配するな、詩乃。織田最強の二人に黄金騎士の俺、この三人が行けば三十の鬼ぐらいなんてことないさ」

「がははっ! 良い良い、それでこそ殿の夫だ!!」

「よっしやあ! 早い所鬼の巣に行つてぶち殺そうぜ!!」

「綾那も行くです! 五人なら楽勝です!」

「そうですね、それに……今話題の流牙様の黄金の鎧を目に出来るかもしれないですか」

綾那も歌夜も鬼狩りに参加し、六人で鬼の巢へ向かった。

薄気味悪い洞窟の近くに到着すると、洞窟の中に複数の気配があり、流牙はザルバのカバーを開いた。

「ここか……ザルバ、他に鬼の気配は？」

『あの洞窟以外にはいないな。まだ昼間だから眠りにについている』

「分かった……まずは驚かせて引きずり出そう」

「おお……流石は流牙様、喋る指輪さんを持つてるです！」

「本当に不思議ですね……とところで、どうやって攻めますか？」

「考えがある……洞窟の中に火を放って鬼達を混乱させてそこを叩く！ザルバ！」

『おう！』

流牙は牙狼剣を抜き、刃をザルバの歯に噛ませる。

そのまま牙狼剣を引いて刃を歯を噛ませたザルバに滑らせると火花が散り、翡翠色の魔導火が刃に灯される。

「おおっ！」

翡翠の炎を操る烈火炎装に思わず拍手をする綾那と歌夜だった。

「凄いです！流石は阿弥陀如来の化身、流牙様です！」

「綺麗な炎……翡翠の火神の名前通りね、それから詩乃の瞳と同じで綺麗ね」

「あ、ありがとうございます、歌夜殿」

「今から炎の斬撃を洞窟に投げ飛ばす……みんな、準備はいいね？」

「おうよ！」

「いつでも来いや！」

「綾那もやるです！」

「準備は出来ています！」

詩乃以外の全員が各々の愛用する槍を構え、詩乃は岩陰に隠れると流牙は魔導火を纏った牙狼剣を振り払う。

「はっ！」

放たれた炎の斬撃は洞窟の中に放り込まれ、中にいた鬼達は突然の襲撃に驚愕し、魔導火で体を焼かれながら出てきた。

流牙の作戦通りとなり、我先にと動く桐琴と小夜叉だが、それよりも早く流牙が前に出て牙狼剣を放り投げた。

武器を放り投げて何をしているんだと皆が驚く中、牙狼剣は流牙の意思に応えてきつ先で空中に円を描いた。

円が光の陣となり、ガ口の鎧が召喚され、走る流牙の体に装着される。

そして、牙狼劍の姿が変化するとそのまま流牙の右手に飛び、一番手前にいた鬼を斬り裂いた。

「あつ！流牙てめえ！」

「ワシらより先に飛び込むとは！」

「悪いけど、一番槍……いや、この場合は一番劍か？とにかく、いただいたよ」

「くつそお！だったら母と流牙よりも沢山ぶつ殺してやらあ！」

「ぬかせえ！ワシが一番殺してやる！」

流牙に一番槍を奪われ、悔しがる小夜叉と桐琴は更に気合を入れて鬼狩りをする。

一方、黄金騎士ガ口の姿を見た綾那と歌夜は感動しながら鬼を倒していた。

「おおうっ！あれが流牙様のもう一つのお姿、黄金の天狼ですね！」

「美しい……本当に鎧が金色に輝いておりますね」

「補足させていただくと、流牙様のあのお姿は黄金騎士ガ口です」

「黄金騎士ガ口……」

二人はガ口の名前を呟きながら流牙の戦いを目に焼き付ける。

そして、流牙と四人の戦国武将達の活躍で三十体の鬼がわずか数分で討滅された。

しかし、あまりにもあつさり討滅してしまったので殺したりない桐琴と小夜叉は別の

鬼の巢へ向かうことになった。

流牙は詩乃と一緒に近くの村で三河衆を待つことになり、本日宿屋で泊まることになった。

そこで改めて流牙は鬼の事を綾那と歌夜に説明し、共に戦う決意を示した。

そして……詩乃達が風呂に入り、流牙は外に出て夜の星空を眺めていた。

この世界は流牙のいた世界と違って電気などは無いので星は綺麗に見えるので修行時代の無人島で見た星空に似ていた。

草叢に横たわり、静かに過ごしているとカバーを開けていたザルバから知らせがあった。

『おい、流牙。そこに子供が生き倒れているぞ』

「ふーん……って、何だと!？」

のんびりとしたせいで反応が遅れ、すぐに起き上がった。

ザルバの言う通り、小さな女の子が行き倒れており、流牙が近づいてその小さな体には見合わない強い気迫を放っていたが、

「うにゆううう……」

そのまま流牙にしがみついて力なく崩れ落ちてしまった。

「お、おい!？」

「おなか……すいたの……」

そして、女の子は気絶してしまった。

見たところ外傷はなく、本当に空腹だったらしく腹の虫がなっていた。

すぐに流牙は女の子を連れて宿屋に戻り、宿屋の人に頼んでお粥などを作ってもらった。

すると、女の子の顔を見て歌夜と綾那は何処かで見たような気がすると言っていた。

そして、お粥の匂いに女の子は目を覚ました。

「おはよう、目が覚めた？」

「う、うん……」

「食べる？ お腹が空いていただろ？」

「うん！」

流牙は優しく接しながら女の子にお粥を勧め、満面の笑みで食べ始める。

最初は元氣よく食べていたが、途中でゆっくりと礼儀正しく食べていた。

恐らくは良家の子だろうと推測し、流牙は女の子の頭を撫でて話しかける。

「ねえ、ここには礼儀作法で文句を言う人はいないから自分の好きなように食べなよ」

「いいの……？」

「ああ、お腹いっぱい食べて元氣を出して」

「うんっ！」

女の子は余程お腹を空いていたのかガツガツとお粥やおかずを食べて腹を満たしていく。

そして、お腹が満たされ元気になった女の子は流牙の姿を改めて見て目をパチクリさせた。

「黒衣に銀の指輪……もしかして、道外流牙殿……？」

「そうだけど、どうして俺の名前を？」

「え、えつとえつと！赤い鞆の剣を持つてる？」

「牙狼剣を？持つてるけど……」

流牙は魔法衣から牙狼剣を出して見せるとぱあつと表情が明るくなってピョンピョンと嬉しそうに跳ねた。

「やった！やつと会えたの！私は鞆！今川彦五郎氏真。駿河から、尾張の織田三郎殿に会いに来たの！」

「今川……？」

女の子……鞆の本名に詩乃達は衝撃を受けた。

鞆は流牙がこの世界に来た時の田楽狭間の戦で久遠が戦った今川義元の娘で今川家の現当主。

国を追放され、保護していた武田家当主の母、武田信虎に国を乗っ取られてしまった。今川の家臣である泰能が書状を書き、久遠は母の仇であるが、書状は久遠か流牙に渡すことになっており、流牙は鞠から受け取った書状を詩乃と読む。

内容は鞠が話したのと同じだったが、周辺の国には任せられず久遠の織田家に鞠を任せたいと書いてあった。

美濃まで一人で旅をしてきたが、途中で路銀が尽きてあそこで倒れていたらしい。

「えつと……鞠ちゃん」

「鞠でいいの!」

「分かった。俺のことは流牙で」

「うん、流牙!」

「ああ。鞠、一つ提案があるんだけど子供一人で旅するのは少し危ない。俺たちと一緒にいて、美濃に来ないか?」

「それって、流牙の客人つてこと?」

「ああ。一緒に美濃に行つて、すぐに久遠に会わせてやるよ。俺も同席するし、悪い扱いにさせないよ」

「流牙様……また安請け合いを……」

詩乃はジト目で流牙を睨みつけるが、それを爽やかな笑みでスルーしながら鞠の頭を

撫でる。

「こんな小さな子が大きなものを背負って頑張ってるんだ。大人として少しは手伝ってあげないとね」

「うん……！ありがとう、流牙！よろしくなの！」

「ああ、よろしく」

鞠は流牙の客人となり、しばらく一緒に過ごすことになった。

「はあ……全く……」

相変わらず安請け合いをする流牙に詩乃は呆れ果てて頭痛に悩まされるのだった。

☆

数日後、朝早く綾那が起こしに来て外に松平の当主が到着したと連絡し、流牙は身支度を整えて外に出た。

鬼狩りに出ていた桐琴と小夜叉も若干寝不足だったが帰ってきた。

そして、優雅な雰囲気少女が近づいて挨拶をしてきた。

「これは……。田楽狭間に舞い降りた天人とはあなた様のことでしたか。お初にお目にかかります。我が名は松平二郎三郎元康。通称は葵と申します」

「道外流牙だ。久遠の誘いに応えてくれてありがとう、久遠の夫として感謝する」

「い、いえ！そんなあなた様が頭を下げることなど……」

「なななんとーっ!」

流牙は葵に頭を下げ、感謝の印を見せると、葵の後ろから派手な格好をした少女がわざとらしい声を上げた。

「田楽狭間の天人と言われる道外流牙様が葵様に頭を下げるとは!これはつまり葵様の方が更に高貴となりますぞ!」

「いい加減にするです!全く、悠季はからかいすぎなのです!」

謎の少女の言葉に綾那は怒り出した。

「はっはっは!。ちよつとした戯言を真に受けるなど、相変わらず融通が効かないわね!」

「ぐぬぬです!……!」

「えつと……君は?」

「我が名は本多弥八郎正信。通称は悠季と申します。流牙殿においては、以後、お見知りおきを!」

「本多?綾那のお姉さん?」

「違うですよ!悠季は綾那の従姉になるです。全く……悪知恵ばかりの女狐なのです!」

「どうやら綾那は悠季の腹黒なところに腹を立てているらしく、悠季の雰囲気懐かし

さを感じた流牙はポンと手を叩く。

「ああ、なるほど……どこかで感じたことのある雰囲気だと思ったら、この皮肉っぽい感じはガルドに似ているな」

「ガルド？ 誰ですか？」

「ガルドは俺の仲間なんだけど、初めて会った時は俺を結構悪く言ってきたな」

「えっ!? 悠季みたいな腹立つ奴が流牙様の仲間ですか!？」

「ちよつと！ めんどくさいことで有名な三河武士の筆頭にそういうこと言われたくないわね！」

「俺も最初は何だこのガキと思ったけど、実はガルドはとても妹思いで優しい奴なんだ。俺の事を信じてからは頼りになる、信頼できる仲間になったんだ」

「そうでしたか……あ、でも！ 悠季の事は気をつけてです、そのガルドさんみたいに優しい奴じゃないです！ 悪知恵ばかりが働いて口が悪いです！」

「まだ言うか!？」

「その時は怒らずに笑って無視すればいいんだ。気にしたら負けって奴だよ。綾那もいちいち突っかからないで笑って吹き飛ばせば良いんだよ。綾那はいつも元気だから嫌なことを吹き飛ばすために笑うのも得意だろう？」

「な、なるほど……流石は流牙様です！ 今度から悠季の悪口も笑って吹き飛ばすです！」

犬猿の仲と言つてもよい綾那と悠季だが、流牙の言葉で今まで翻弄されていた綾那に一筋の光が見えてくるのだった。

流牙には皮肉な言葉は通じない……そう感じる悠季は頭を悩ますのだった。

一方、ようやく起きてきた鞠は葵を見るなり喜んでいた。

鞠と葵は幼馴染で小さい頃によく遊んだ仲だ。

流牙は鞠の事情を葵に説明したが、葵は難にそれで良いのかと尋ねた。

「……鞠様はそれで宜しいのですか？」

「うんなの！でも、どうしてそんなことを聞くの？」

「それは、その……」

言いづらそうにする葵に流牙は腰を下ろして鞠の目線に合わせ、代わりに聞いた。

「鞠……俺は詩乃から話を聞いただけで詳しくは知らないけど、久遠は鞠のお母さんの

仇なんだろう？それでも頼ることができるのか？」

「流牙さま!？」

「ごめん、こういうことは隠さずにまっすぐ聞いた方が良いと思うからさ。それで、どう

なんだ、鞠？」

「……あのね。信長と戦つて母様は負けちゃったけど、それは兵家の常だから仕方ない

と思うの。だから鞠は、別に久遠を恨んだり、怒ったりなんてしてないの」

鞠は久遠が強かったから、凄かったから勝った……ただそれだけで自分の国を奪った信虎のことも恨んでいない。

しかし、いつか必ず駿府に戻って国を取り戻す、幼いながらも強い意志を示した。

そんな鞠に葵は感動し、流牙は笑みを浮かべて鞠の頭を撫でる。

「強いな……鞠。小さいのにここまで強い心を持つてゐることはそう簡単に出来ることじゃない、尊敬するよ。葵、鞠は俺たちが預かり、必ず守る。久遠にも頼んで決して悪いようにはしない」

「……はい。しかしながら鞠様は我が旧主。松平家からも手厚い保護を、切に切にお願い申し上げます。鞠様のこと、お頼み致します、流牙様」

「ああ。任せてくれ」

葵から鞠を託され、流牙は領いて約束を交わす。

そして、身支度を整えて流牙達と葵達松平衆一向は美濃へ向かった。

『友　　＼Zaruba＼』

鞠と松平衆を美濃へ無事に案内し、葵達の対応を壬月に任せた流牙は鞠と詩乃を連れて久遠の屋敷に向かった。

「ただいまー!」

「あらお帰り。いつ帰ってきたのよ?……久遠、心配してたんだからね」

迎えてくれた結菜の言葉に流牙は苦笑を浮かべる。

「ごめん。でも俺は魔戒騎士だからそこは勘弁して」

「私達の旦那様は、風来坊だって、久遠と愚痴を言い合ってるから別に良いわよ」

「俺は流れ者だからね。この世界に来る前までホラー狩りの流浪の旅をしていたし」

「それでもたまには帰ってきなさいよね。ここはあなたの家でもあるんだからだから」

「……分かったよ。それで、今日の要件なんだけど、ちよつと急用だね」

「急用?何それ?」

「実は……」

流牙は鞠の一件を事細かに詳しく説明し、外で待っていた鞠を結菜に紹介した。

人懐っこく、可愛らしい鞠に結菜はすぐに気に入り、名前で呼び合う仲になった。

「それで鞠ちゃんをどうするの？」

「久遠に相談してからだけど、こんな小さな子が大きなものを背負って頑張ってるんだ。保護をしてあげたい」

「ふむ。……」

「どうしたの？」

「……小さな子に欲情するとか、そういう特殊な癖がある訳じやかいわよね？」

「あのね……俺の好みはそんなのじゃないし、もしそんな癖になってたら母さんが悲しむし、莉杏に軽蔑されるよ……」

「それもそうね。ちなみに流牙の好みは？」

「好みってほどじゃないけど、同じ歳かある程度歳が離れてなくて、しっかりした心の持ち主なら良いよ」

「旦那様が特殊な癖を持ってなくて安心したわ」

「それはどうも。それで久遠は？」

「ああ、そうね。お入りなさいな。部屋であなたのことを待ってるから」

「ありがとう」

屋敷に上がり、鞠と詩乃と共に久遠の元へ行く。

久遠に鞠の一件を説明し、預かった手紙を見せて鞠をどうするか考えた。

「俺は鞠を保護をしてあげたいと思う」

「ふむ……保護をするのは構わん。だが今は上洛と越前が先だ。駿府を取り返す戦をするのはかなり先になるぞ？それは分かっているのか？」

「鞠、それでいいか？」

「鞠は構わないの。国を追われて流浪人になった今、鞠、ワガママ言わないよ？」

「……ふむ。鞠とやら。お前は何かできる？」

「できるって？」

「働かざるもの食うべからずと言つてな。お前はもう駿府のお屋形様ではなく、一人の武士だ。ならば食い扶持は自らの手で稼がなければなるまい？銭や米を手に入れる代わりに、お前は何を対価とするか」

「うーん……んとね、鞠、流牙の護衛になるの！」

「……はあ？」

考えた末の鞠の応えに流牙は冗談だろと思ひながら声を漏らす、冗談どころの話ではなかった。

「鞠ね、鹿島新当流皆伝だよ！あとね、幕府のれーしきとか作法とか、そういうの、全部知ってるの！」

「なるほど、それで護衛、か」

「詩乃、鹿島新当流って？」

「鹿島新当流は劍豪として名高い塚原ト伝によつて生み出された最上級の兵法。確か一葉様もト伝様より皆伝を受けていたかと思ひます」

まさかの劍豪と謳われる流派の教えを受け、なおかつ免許皆伝を言い渡された鞠に流牙は目を見開いて驚く。

「え!? そんなに凄い流派なのか!? つて、一葉もその流派の皆伝を受けてるのか!」

「あれー? みんな一葉ちゃんの事知ってるの? 鞠、最近全然会つてないの。元氣にしてるかなー?」

「一葉の事を知っているのか?」

「うん! 一葉ちゃんは鞠の従姉なの! それに新当流ではお姉ちゃんだしになるんだよ」

「……そうか。今川家は確か足利宗家の親族、吉良家の流れであつたな」

「そうなの!」

「一葉と鞠が従姉妹だつたなんて……世間は狭いと言うけど、まさにその通りだな。ところで、話が変わったけど、鞠が俺の護衛つて事は流牙隊に入るつてことか?」

「うんなの! 流牙、よろしくね!」

「危険……と言つても、鞠も武士なんだよな。覚悟は出来ているのか?」

「覚悟、あるの! 鞠を助けてくれた流牙に尽くして、その恩を返すのが武士なの! それが

今の鞠がしなくちゃならないことなの！」

「……分かった。鞠の覚悟、確かに受け取ったよ。一応俺が流牙隊の頭だから、ちゃんと言うことを聞くつて約束できる？」

「もちろんなのー！」

「よし。これで鞠は俺たち流牙隊の一員だ。よろしくな」

「うん！」

こうして流牙隊に新たな仲間、鞠が加わり、長屋に戻ってひよ子と転子に紹介するとあまりの身分の違いに跪いたが、鞠の一件や鞠自身が仲良くしたいという気持ちからひよ子達と仲良くなった。

ちなみに鞠はその幼い性格と可愛らしい姿からあつという間に流牙隊のみんなから愛でられる妹的な存在となるのだった。

☆

着々と上洛の準備が完了していくある日の早朝……。

流牙隊の長屋で自室にいる流牙は慣れない筆で手紙を書いていた。

「よし……何とか書けたな。ザルバ！」

手紙を畳んで布団の枕元に置き、流牙は横になり、ザルバのカバーを開く。

『流牙、契約の新月だ』

「ああ……」

ザルバの付けた左手を自分の胸に持っていていき、静かに目を閉じると流牙の意識が無くなった……。

それから少し時間が経過し、流牙の護衛となった鞠は朝起きて目を覚まし、ひよ子に頼まれて流牙を起こしに向かう。

流牙の部屋に入るなりジャンプして眠っている流牙にダイブする。

「流牙~~~~~!」

流牙を起こすために流牙の腹に向かってダイブし、幼女一人分の体重による大きな衝撃が流牙の腹部に襲いかかる。

鞠はこれで流牙が起きると思ったが、全く起きる気配が無かった。

普通ならこれで誰もが目を覚めますが、鞠は流牙がよほど疲れて起きないのかと思いい、体を揺すったりペチペチと頬を叩いた。

「流牙、朝だよ」

しかしそれでも流牙は起きず、鞠も不審に思う。

「流牙……?」

鞠は小さな手を流牙の口元に持っていくが……流牙は息をしてなかった。

「?!」

鞠の顔が青ざめ、すぐに流牙の胸に耳を当てるが心臓の鼓動すら聞こえず、鞠はガタガタと体が震えて流牙に呼びかける。

「あつ、ああ……流牙！流牙あつ！起きて！起きてよおっ!!」

「雛ちゃん、どうしたの!?!」

「流牙様がどうかしたの!?!」

「流牙様に何か!?!」

鞠の悲痛な呼びかけにひよ子達が慌ててやって来た。

「り、流牙が……息をしてないの……」

「「ええっ!?!」」

息してないと聞き、すぐにひよ子達は流牙の元へ行き、必死に起こそうとする。

「流牙様！起きてください!」

「冗談はやめてください!朝ですよ!ご飯食べに行きましょう!」

「昨日は普通に使っていたのに……はっ、これは……?」

ひよ子と転子が鞠と一緒に流牙を起こそうとする中、詩乃は枕元に置いてある手紙に気がついて封を開いて中を読む。

「な、何と!?!このようなことがあり得るのですか!?!」

「詩乃ちゃん、どうしたの!?!」

「皆さん、落ちて聞いて聞いてください！流牙様は『今日一日』は目を覚ますことはありません！明日の朝には目を覚まします!!」

「はあ!?!」

「どういうことなの……?」

「一応この事は久遠様達にもお伝えしましょう。ひよさん、ころさん、すぐに久遠様達を呼びに行きましょう!」

「は、はい!」

詩乃の指示ですぐに久遠と結菜とエーリカを呼んだ。

死んでいる流牙の姿を見て久遠は顔を真っ白にして倒れそうになったが、結菜が何とか踏ん張らせ、詩乃は流牙の書いた手紙を皆に見せた。

その手紙の内容とは新月の日、ザルバに契約の対価として流牙の一日分の命を食わせる事だった。

一日分の命を食わせることは流牙は今日一日は体の全ての機能が停止した仮死状態で明日になれば目を覚ますので心配するな……というものだった。

その内容に久遠達は信じられないと言った様子だったが、エーリカだけは違っていった。

流牙と僅かに怪しげな光を帯びているザルバを見てある仮説を立てた。

「もしやザルバ殿は流牙さんの世界で討滅する存在……ホラーではないのでしょうか？」

「馬鹿な……ホラーは流牙達、魔戒騎士と魔戒法師の倒すべき存在なのぞ？」

「実は私の国で鬼とは別に古くから悪魔の伝承がありまして、地獄から呼び出した悪魔は召喚した人間の願いを叶える代わりに重い対価を要求するのです。例えば大切な人や己の寿命、そして魂……」

「それって、つまり流牙は今、ザルバに対価を支払っているの？」

「おそらくは……明日に目覚めると言うことは流牙殿は契約で定期的に一日分の命をザルバ殿に捧げる……という事ではないでしょうか？何故ホラーであるザルバ殿が流牙さんと契約しているかわかりませんが、初めて流牙さんに会った時、契約の言葉は身近にあると言ってザルバ殿を見ていました」

エーリカの推測は正しく、よくよく考えればザルバは指輪の姿をしているが久遠達からすれば鬼と同じ異形の存在だ。

生きているのなら何らかの『食べ物』が無いと動くことは出来ない。

「とにかく、今私達に出来ることはありません。流牙さんを信じて明日を待ちましょう……」

仮死状態とはいえ、死者と変わらない姿の流牙に対し何も出来ない久遠達は自分の無

力さを感じる。

しかし、もし流牙ならなんて言うだろうと思ひ、今自分たちのなすべきことは上洛の準備を出来る限り終わらせること。

それしかないかと久遠達は立ち上がって仕事に取り掛かる。

流牙の面倒は結菜と鞠が見ることとなり、時折仕事の合間を見つけて久遠達は流牙の見舞いに来ていたりした。

そして、新月の夜が終わり……朝を迎える。

ザルバの不気味な輝きが収まり、流牙の仮死状態から一気に体の機能が回復し、何事もなかったかのように目を覚ます。

「ふう……終わったか。ザルバ、どうだ？」

『ああ、これでまた一ヶ月動ける。ところで……どうやら周りの奴らに余程心配させたらしいな』

「えっ?」

周りを見渡すと久遠と結菜、ひよ子と転子、詩乃と鞠が眠っていた。

流牙が目を覚ますまで昨夜からずっと一緒にいたのだ。

「大丈夫だと言ったのに……」

「んっ、んう……」

流牙は隣で眠っている久遠の頬に触れると目を覚ました。

「あ……起こしちゃった？」

「流牙……？」

「えっと、おはよう」

「流牙あつ!!」

「うおっ!？」

久遠は起き上がって流牙に抱きついた。

「心配したんだぞ！契約かどうか知らんが事前に知らせんか馬鹿者!!」

「で、でも手紙を書いたし……」

「そんなものは知らん！夫が死人同然の状態になったら冷静になれるわけがなからう!!」

「みんなだつて心配したんだぞ！」

「久遠の言うとおりよ」

ふと周りを見渡すと結菜達が目を覚ましており、流牙は申し訳なさそうに頭を下げる

「みんな……ごめん」

「謝るなら、今日一日は私達のために尽くしなさい!!本当に……心配したんだから……」

結菜は泣きそうになり、流牙は結菜の頭を撫でて頷く。

「わかったよ。今日はみんなのために出来る限りの事をするよ」

流牙は今日一日、心配してくれた久遠達のために尽くすこととなった。

しかし、それはこれほどまでに久遠達が流牙の事を想ってくれていると改めて実感し、嬉しく思うのだった。

☆

ザルバとの契約の騒動から数日後、流牙隊で朝から一発屋で食事していると早馬の気配があり、まだご飯を食べているひよ子と鞠を残し、流牙と詩乃と転子は急いで城へ向かった。

評定の間には続々と家臣や松平衆が集まり、久遠は早馬からの手紙の内容を伝えた。

早馬からの手紙は一葉からで京を我が物顔で歩いていた三好・松永党のうち、松永の動きが活発化し、これに伴い出陣を本日の午後に早めることとなった。

そして、久遠の言葉で評定に出ていた武士達が雄叫びをあげ、準備のために駆け出していく。

最後に流牙と久遠が残り、静かさが広がる。

「予定より早くなったけど、いよいよだな」

「うむ。ようやくだ。……時間をかけた以上、一気呵成に京に向かうぞ」

「確か、六角を倒して一葉達と合流してそのあとに越前だよな？」

「御輿である一葉と合流してしたあと、少し思いついたことがある」

「へえ。どんな事を？」

「それは……」

「どうしたの？」

「一つ、確認しておきたい。……流牙。貴様は私の夫だな？」

「何を今更。俺は久遠の夫だよ」

「本当か……？本心だ、と信じていいのか？」

「俺は嘘をつかない、本当だよ」

「……うむ。ならば心は決まった。その時が来れば、貴様に助力を頼むことになるう」

「俺に？」

「そうだ。お前にしか出来ないことだ」

「今は教えてくれないか……わかったよ、その時になったら教えてくれ」

「うむ……」

何かを迷っている久遠に流牙はそれ以上何も聞かなかつた。

今はただ目の前のことに集中する、そう思った流牙は立ち去ろうとした。

「あ、待て！流牙！お前に渡すものがある！」

「俺に？」

久遠は大きな包みを持ってきて中を開けるとそこには戦場で使う旗が綺麗に畳まれ

ていた。

「これは……旗？しかもこれは……ガ口の紋章？」

旗にはガ口の紋章である円形の中にある三角形、そして三角形の中にはガ口の兜を模した狼の顔が綺麗に描かれていた。

「今回からの戦のために用意した流牙隊の旗だ。流牙……黄金騎士ガ口が率いる部隊だ。それなりの旗を用意しないと格好がつかないからな」

「そうか。うん、いい感じの旗だ。気に入ったよ、ありがとう、久遠」

「流牙。前に約束を覚えてるな？私の希望、貴様に託すぞ」

「任せてくれ。君の希望として一緒に夢を叶えよう」

遂に鬼を排除するための上洛への戦いが始まる。

流牙と久遠にはこれから数々の苦難と戦い……そして、まだ見ぬ者達との出会いが待ち構えているのであった。

『蝶　　＼Y u i n a　　』

久遠達は上洛のためにまず観音寺城に向かった。

久遠の方針で流牙隊は試験的に鉄砲特化の部隊となり、大量の火縄銃が支給された。

流牙はいつものように戦には関与せず、隊をひよ子達に任せ、護衛でいつも一緒にいることになった鞠と一緒に陣の近くで待機していた。

「久遠、一つ聞いていいか？」

「何だ？」

「どうして結菜がここにいるの……？」

流牙の視線の先には暇があればいつも眠たそうにしている鞠が木陰で腰を下ろしている結菜の膝枕でスヤスヤと眠っていた。

端から見れば姉と妹のような微笑ましい光景だが、本来なら美濃の屋敷にいるはずの結菜が一緒に出陣していることに流牙は疑問に思っていた。

「結菜はお前のお目付役として一緒に来たのだ」

「お、俺のお目付役??!」

「貴様は自分の身などを考えずに無茶ばかりをするからな。結菜が流牙の側にいたいと

お願いしてきたのだ」

一瞬流牙の頭に莉杏の顔が浮かんだがそれは口に出さないのでおくことにした。

「気持ちは嬉しいけど、大丈夫かな？何が起きるか分からないし……」

「その時はお前が守ればいい話だ。それにまだお前には見せてはいないが、結菜には見事なお家流があるからな」

「そうなんだ。分かったよ、結菜は何があっても守るよ」

結菜に何を言っても一度決めたことは聞かないことを知っている流牙は半端諦めた形で了承した。

「ああ、頼むぞ」

結菜はこれから流牙と共に行くこととなり、久遠と更にもう一つの約束を交わした。

その後、鞠は目を覚まして流牙の側においてその隣に結菜もいるようになった。

久遠と詩乃を中心に軍議が始まるうとしていた頃に松平衆の葵達が来て久遠から指示を聞くこうとしていた。

久遠達の話あまり聞いていない流牙に葵はふと久遠から聞いた話を思い出した。

「話には聞いていましたが、流牙殿は戦には参加しないで人を斬らず、鬼だけを斬るのでしたね」

「魔戒騎士って言って、古の時代から人々を魔獣から守る存在だ」

「なるほど、自分の血が穢れているから同じ穢れた存在を相手に戦うのですね！」

流牙を警戒し、更には気に入っていない悠季は皮肉を込めた酷い言葉を言い放った。

「穢れた血だと……？」

流牙はピクツツと体を震わせて悠季を睨みつけた。

皮肉屋の悠季の言葉は今まで笑ってスルーしてきたが、今回ばかりは聞き捨てならなかった。

流牙自身のことは別に構わなかったが、穢れた血と言う言葉は流牙だけでなく自分を産んでくれた母、波奏も侮辱されている事と同じだった。

自分を深く愛し、幼き日の約束を果たすために命をかけ、己の目の光を与えてくれた母を侮辱され、流牙は怒りで我を忘れて拳を握りしめた。

しかし、流牙の前に怒気をまとった一つの影が割り込んだ。

「あなた……歯あ食いしぱりなさい」

スパアーン!!!

『『『……えっ??』』』

派手で小気味のいい音が鳴り、突然の事態に流牙や久遠を含む一同が呆然としていた。

「……………痛あゝっ!? ゆ、結菜様！何をするんですか!？」

悠季は左頬にできた大きな紅葉に涙目になりながら結菜を見る……そう、今の派手な音は結菜が悠季の頬を思いつきり叩いた音だった。

「あなた……今まで何度も流牙に酷いことを言ってきたわね。流牙が気にしてなさそうだから黙っていたけど、流牙のお母様を侮辱した事だけは絶対に許さない……」

結菜は今まで見たことないほどに憤怒し、誰もが恐れる怒りの形相を浮かべていた。

「私は流牙のお母様、波奏様には会ったことがない。だけど、流牙を想う深い愛情、敵に捕まりながらも流牙との約束を果たす為に十五年も耐え続けた不屈の精神、そして……己の目を犠牲にしても流牙の目を直した自己犠牲……私は波奏様の事を尊敬しているつかそんな母になりたいと思っている。それをあなたは軽々しく波奏様と流牙の親子を穢れた血と言つて侮辱した!!」

流牙や久遠から波奏の話の聞き、尊敬の念を持った結菜は波奏みたいな母になりたいと思つていた。

だからこそ人を傷つけられない流牙の代わりに悠季を思いつきり引つ叩いた。

「もう二度とそのふざけた口が開かないようにしてあげましょうか……?」

完全にプツンと切れている結菜の周りに青白い電光が轟き、それが形をなして無数の雷の蝶へと姿を変えた。

「な、何だあれ……!?雷の蝶……!?!」

おもむろに流牙はザルバのカバーを開くと、目の前で優雅に舞う雷の蝶に驚いていた。

『何だこいつは？おい、久遠のお嬢ちゃん。どういう事だ？』

「……結菜のもう一つの名前、帰蝶を知っておるな？実は結菜にはお家流から更にもう一つの名前で呼ばれている」

「もう一つの名前？」

『雷閃胡蝶』。雷の蝶を作り、敵の近くに飛ぶと爆発するお家流だ。結菜はこのお家流から鬼の蝶……『鬼蝶』と呼ばれておるのだ」

結菜の異名に流牙は驚きを隠せないで雷閃胡蝶を凝視する。

「き、鬼蝶……？」

『なるほどな、確かに今のお嬢ちゃんは鬼のように恐ろしいな』

「聞こえているわよ、ザルバ！後でお仕置きで雷閃胡蝶を喰らわせるわよ！」

『な、何いつ!?!』

結菜にちやつかり聞こえ、後でお仕置きが決まったザルバは衝撃を受ける。

「だ、誰かお助けください!!」

口は災いの元と言わんばかりに絶体絶命の危機に陥っている悠季だが、ブチ切れている結菜の前に久遠達は後ずさりする。

「無理だ。鬼蝶となった結菜を止める事は我でも出来ん」

「結菜……怖い……」

結菜の夫の久遠はこうなったら止められないと諦めて首を左右に振り、結菜に懐いていた鞠はその恐ろしさに流牙にしがみついていた。

「悠季……助けてあげたいけど、今までの行いが自分に返って来たのよ……」

「自業自得です！さんざん流牙様を侮辱してきた罰が降りかかったんです！」

「そうですね……流石に死なないと思えますから大丈夫ですよ」

主君の葵、同志の綾那と歌夜にも見捨てられ、悠季は絶体絶命の危機へと陥る。

「死なない程度にやるから安心しなさい……喰らいなさい、雷閃胡蝶！」

「ひいひいひいひいっ!？」

雷の蝶が一斉に舞い飛び、戦う力を持たず動けない悠季は尻もちをついていた。

結菜は殺さない程度に放ったが、流石に見過ごすことは出来なかった。

「ああもう！仕方ないな!!」

流牙は鞠を引き離し、牙狼剣を取り出して円を描き、牙狼の鎧を纏って悠季の前に降り立った。

そして、結菜の雷閃胡蝶が流牙とガ口の鎧に爆雷が襲いかかる。

「ぐあああああつ!？」

「流牙!？」

結菜はまさか流牙が来るとは思わず、慌てて雷閃胡蝶を操作するが一度出した雷の蝶は消すことは出来ない。

上に舞い上がらせて消滅させるが、流牙の側において次々と爆発している蝶は消すことが出来ず、爆雷が流牙とガロの鎧に容赦なく襲いかかり続ける。

「くっ、うおおおおおっ!!!」

体中に轟く雷撃を流牙は牙狼剣を掲げ、流牙の意思に応えたガロの鎧が結菜の放った全ての雷閃胡蝶を牙狼剣に収束させた。

「私の雷閃胡蝶が牙狼剣に……!?!」

結菜が驚く中、流牙は膨大な雷を帯電した牙狼剣を手に陣から飛び出し、被害を出さないよう開けた場所の空に向かって振るった。

「おおおおおっ!!!」

全力で振り下ろし、牙狼剣に帯電した全ての雷撃を解き放つと、かつて電気を操るホラー・ゼラーザの時と同じ、牙狼剣から金色の狼を模した雷の斬撃が空を駆け抜けた。

「くっ、はっ、はっ……」

流牙はガロの鎧を解除すると精神力をかなり使ったのでその場で膝をついて休む。

「流牙！大丈夫!？」

「ああ……ちよつとビリリつて来たけど大丈夫だ」

「ごめんなさい……私は……」

「結菜が謝ることないよ。あと少しで俺も怒りで我を失いそうになったからさ。代わりに悠季を叩いてくれてありがとう。それにしても、まさか結菜がそこまで母さんを尊敬していたなんてね」

「……久遠からあなたの過去を少し聞いたのよ。流牙と波奏様、親子の強い絆に感動したからよ」

「……そうか。母さんもきつと喜んでるし、結菜ならきつと素敵な母親になれるよ」
「ありがとう、流牙」

ひとまず流牙と結菜は陣に戻ると悠季を助けたことに葵は大変感謝し、悠季も一応流牙に謝った。

ちなみに終始、結菜の貫くような視線が悠季に向けられていた……。

そして、久遠の口からとんでもない情報が伝えられた。

「流牙よ……先ほど放ったあの狼の雷で観音寺城にいる者達は驚いて混乱しているという情報が入った……」

それは先程流牙が牙狼剣に雷の力を収束して放った狼の形をした雷の斬撃が運悪く観音寺城の上空へ飛び、そして数多の落雷が降り注いってしまった。

晴天の青空にいきなり空の果てから狼の雷が現れて落雷が降り注いだのだ、観音寺城にいたもの達は雷神か仏の裁きが降ったのだと勘違いをしてしまった。

そのせいで観音寺城の敵兵達は大混乱し、その隙をついて織田軍が一気に攻め立てていく。

「し、しまった……雷を操るのに集中していたから間違えて観音寺城に放っちゃった……」

「大丈夫かしら……ちようどお城の上で爆発したから誰かに当たらなければいいけど」

結菜の心配そうな言葉に流牙は何かを決心するとぼつと立ち上がって久遠を見る。

「久遠、ちよつと観音寺城に進入してくる。今の雷撃で誰か傷ついていないか確認してくる」

「流牙様!?何を言っているのですか!」

「うむ、行つてこい」

「久遠様!」

「心配するな、葵。流牙はどんな城でもあつさり進入できるからな」

「鞠も行くの!」

「えっ!?鞠、付いてくるの!」

「鞠、流牙の護衛だからいつも一緒なの!」

「うーん……。鞠の剣の實力は知ってるし、別に危ない事をするわけじゃないからな。よし、行こうか」

「お待ちください！鞠さまっ！例え領国を追われてるとはいえ、今川家棟梁であらせられる鞠さまが、危ないことをしてはいけません!!」

「そう言われても、鞠は行く気マンマンだよ?」

「うん！鞠、流牙の護衛だからいつも一緒にいるの!」

鞠は流牙に抱きつき、流牙は愛くるしい妹分の頭を撫で撫でする。

「……ならば、私の配下の同行をお認め下さるのならば、鞠さまのご同行については、口出すことを我慢しましょう」

「配下?」

「はい。小波、おいでなさい」

「お側に」

葵の背後に音も気配もなく、現れた銀色の髪のに口元をマフラーで隠した、いわゆる忍者のような少女に流牙は感心したようにうなずいた。

「へえ、ずつと気配を殺していたのは君だったのか」

「流牙様、万が一の為に、この者をお連れください。小波、名乗りなさい」

「……松平衆・伊賀同心筆頭。服部半蔵正成。通称は小波と申します。よしなに……」

「小波か。俺は道外流牙、よろしくな」

流牙はチラツと悠季を見るとニヤリと笑っていた。

恐らく悠季は織田家や流牙の内情を調べるために小波を埋伏しておきたいのだろう。といつても流牙自身は別に調べられて困ることはないからあまり気にしない。

「小波は流牙隊の一員としてお預けします。鞠様の護衛はもちろんのこと、流牙様の護衛や任務の手助けなどに使ってくださいませ」

「何でしたら夜伽をさせても構いませんよ。ついでに孕ませちゃったりしても問題ございませぬ。ああ、お氣遣いなく！天人の子だねは松平が誠心誠意、育ててさせて頂きますから！」

懲りずに誰が聞いても愚かな事を口にする悠季だった。

悠季の戯言に流牙とザルバは呆れた様子で呟く。

「……ごめん、悠季が何を言ってるのか全然意味が分からないんだけど」

『流牙、このお嬢ちゃんは馬鹿か？』

「なっ!?ば、馬鹿とは何ですか！」

『じゃあ馬鹿じゃなかったら阿呆か？』

「そうよ！流牙の赤ちゃんを産むのは私と久遠なんだからそんなことは許さないわ！」

「ゆ、結菜あ!!」

「まだ未来の織田家当主と黄金騎士を諦めていなかった結菜の爆弾発言に久遠は顔を真っ赤にした。

「結菜……その話は後にしようね。行ってくるよ」

「はい、行ってらっしゃい」

流牙は頭痛を耐えながら鞠と小波と一緒に陣を離れ、小波に話しかける。

「さっきの悠季の言葉は気にしなくていいからな。君は俺たちの仲間だ、よろしくな」

「はい。よろしくお願ひします、流牙様」

「ああ。ところで、小波はどんなことができるんだ？」

「……服部家お家流。句伝無量。遠くの離れている者と会話が出来ます」

「本当か？それは凄いな……俺とも会話出来るのか？」

「可能です」

「それなら一つお願ひしてもいいかな？」

「畏まりました。では失礼します」

そう言うのと小波は下腹部へと手を伸ばした。

「へ？」

「んっ」

プツンと音が聞こえたと同時に、小波がもそもそと何かを取り出した。

「えっと、それは？」

取り出したものに指差して尋ねる。

「自分の陰毛です」

「……………はあ?!」

あまりにも衝撃的過ぎて流牙は酷く驚いて耳を疑った。

その最中に小波が陰毛を持っていたお守りに入れていた。

「これを肌身離さず持つておいてください。さすればいつでも自分の声がご主人様に届きます」

「そ、そうなんだ……………ありがとう」

お守りを受け取り、ひとまずポケットに入れながら流牙はザルバに尋ねた。

「……………なあ、ザルバ」

『お前の聞きたいことは分かっている。魔戒法師の法術にそういうのは使わないから安心しろ。使うとしたら血か髪の毛ぐらいだ。髪の毛は比較的他人でも取りやすいから下の毛だろう……………』

「そうか……………と、とにかく、行くとするか。小波、足の速さに自信は？」

「幼き日より鍛えていますので問題ありません」

「分かった。鞠、ちよつといいか？」

「ん？なーに？」

「これから観音寺城に行くんだけど、鞆はまだ俺たちと同じくらいに速く走れないから俺がおぶってくよ」

「流牙が連れて行ってくれるの？」

「ああ。だからその前に鞆の刀を預からせてくれないか。おぶるときにちよつと邪魔になるから」

「うん！はいどうぞ！」

「ありがとう」

流牙は鞆から受け取った小さな背丈ほどに大きな刀を魔法衣の中にしまう。

「……流牙様、不思議な衣をお持ちですね」

「剣をいつでもとり出せるし何でも入るの？」

「ああ。他にも機能はあるけど、この魔法衣の内側には何でもしまえるよ。ただ、生き物は入ったら危ないから。よし、鞆。早速俺の背中に乗ってくれ」

「うん！」

流牙は鞆を背中に乗せ、首に腕を巻いてしっかりと掴ませる。

「よし……行くぞ！」

気合を入れた流牙は鞆を背負いながら全力疾走で観音寺城へ向かった。

「っ!?速い……………」

流牙の走る速度の速さに驚きながらも小波も何とか後を追う。

幼い頃から武士とはいえ忍者と同じ訓練を受けてきた小波は脚力など足の速さに自信が有った。

しかし、それを軽く凌駕する流牙の身体能力に驚きを隠さないでいた。

「わはは——!流牙、速いの——!」

ちなみに鞠は流牙の馬より速い走りにはしゃいでいるのだった。

たった数分で観音寺城の裏の森に到着し、流牙は僅かに乱れた呼吸を整えて鞠を下すと魔法衣から矢と紐を取り出した。

それで何をするのかと見守っていた小波を流牙は気にせず矢の矢尻を紐で強く縛り、反対側の紐の端を丈夫な木にしつかりと縛り付けて矢を持つ。

「はあっ!!」

そして、矢を思いつき投げ飛ばすと弓を使ってもないのに城壁に思いつき突き刺さった。

「よし、成功!」

「流牙凄いの!」

「……………は?」

強力な弦を張った弓を使うならまだしも腕の力だけでしつかりと作られた城壁に矢を刺したことに小波は呆然とした。

「よし、最上部までの縄の道を作った。鞠、ここから一気に登るぞ」

「……はっ!? おつ、おつ、お待ちください! ご主人様!」

「え? どうしたの、小波?」

あまり声を荒げない小波だったが流牙のとんでもない発言に黙っていられなかった。

「いくらなんでも綱渡りで城の最上部に向かうなんて無茶です!」

「大丈夫だって、俺は向こうの世界で断崖絶壁みたいな場所をこの方法向こう側まで渡ったし」

正確には高層ビルの、ビルとビルによる二つの建物の間だが流牙は平然と綱渡りをして向こう側まで向かった。

「し、しかし……」

「鞠、もう一度俺の背中に乗ってくれ。一気に登るぞ!」

「はいなの! 今度は綱渡り〜!」

もう一度鞠を背中に乗せた流牙は小波の心配など気にせずに縄に乗って見事なバランス感覚で走った。

現在城攻めをしている織田軍を他所に、見事に観音寺城の最上部まで数秒で登りきつ

てしまった。

そして、流牙と鞠は城内に侵入し、小波は忍者の正攻法で確実に崖を登りながら思った。

「そんな馬鹿な……」

流牙は自分は天人じゃなくただの人間だと言っていたが、ただの人間が忍者より速く動け、弓を使わずに矢を投げて城壁に突き刺し、そして不安定な縄の上を綱渡りをして堅城と呼ばれている観音寺城をあつさり侵入出来るだろうか。

小波は流牙は人間ではなく自分が仕えている松平家家臣である綾乃の言う通り阿弥陀如来か、もしくは他の神仏の化身なのではないかと疑ってしまう。

そして、何とか小波も観音寺城の最上部に到着すると、人の気配はほとんどなく、先に侵入した流牙と鞠を探す。

すぐに二人は見つかり、腰を下ろして何かを見ていた。

それは気を失って倒れ、髪がくるくると渦巻いて梅の花の飾りを身につけた珍しい雰囲気の少女だった。

「小波、来たか！」

「ご主人様、鞠様。その娘は……？」

「ここに倒れていたのを見つけたの。でもここにはこの子以外ないよ」

「ひとまずこのままにはしておけないから、その小屋に運ぼう。小波は周りの警戒を頼んでいいかな？」

「承知しました。何かあれば随時、句伝無量でお伝えします」

「頼んだよ」

小波はその場から消え、流牙は倒れている少女を抱き上げて鞠と一緒に近くの小屋へと運んで出来る限りの看病をする。

その後、織田軍は無事に観音寺城を攻略して制圧し、久遠と流牙達は合流した。

ちなみに保護した少女だが……これがまた面倒な性格で流牙を困らす要因の一つとなるのだった。

『降　　　　　〕
　　〕 Adventure 〕
　　』

久遠達は観音寺城を攻め落とし、先に進入していた流牙達と合流した。

観音寺城は城主が逃げて抵抗が少なかったことと森一家の活躍で難なく攻め落とすことができた。

「それに、お前と結菜が放った雷の狼……あれで敵は大分怯えていたみたいだ」

「ああ……やっぱりか……」

流牙は間接的に戦に関わってしまったことに消沈してしまったが、過ぎてしまったことは仕方がないのでひとまず抑えた。

「あ、実は進入した時に女の子を一人保護したんだ」

「女の子だと……？」

「外傷はないから多分雷で驚いて意識を失ったみたいで。他の人はいなかったー」

「こんの色情魔ああああー……」

「うおつと!」

突然飛び蹴りで流牙を襲ってきたのは保護した少女で、流牙は体を捻って回避した。

「んべつ!」

少女は流牙に蹴りが当たらないままを地面に直撃した。

「流牙、こやつか？」

「ああ……」

「デアルカ」

少女は勢い良く起き上がると流牙に指を差し怒声を飛ばす。

「ちよつとそのあなた！このわたくしを穢した責任、どう取ってくださいなのですっ！」

「いやいや、そんな事をしてないから」

「そんなの信じられませんわ！いまここで貴方を……」

「おい、何を揉めている……」

流牙と少女が言い合っている間に久遠が仲介に入る。

「ちよつとあなた！いきなり入ってこないでくださいまし！何者ですか？」

「我が名は織田上総介久遠信長だ！」

「……………え？」

少女は口をポカンとあけ、電池の切れた人形のように動かなくなってしまった。

「どうしたの？」

流牙は少女の目線の前で手を振り問いかけると、いきなり動き出して久遠に跪く。

少女の名は蒲生忠三朗賦秀、通称は梅。

六角家家老蒲生賢秀が三女で六角家の大黒柱と呼ばれる蒲生の娘で久遠に憧れていた。

久遠は流牙の誤解を解くために梅に話しかける。

「梅とやら」

「は、はひう！」

「なにやらこの男に色々な事をやられたと言っておるが、状況から見れば、貴様の勘違いだと思ふのだ。我はこの男を良く知っておる。誰にでも優しく、困っている者がいれば手を貸し、そして邪悪なる存在から己の命をかけて人を守る……言うなればお人好しな男だ。それに、こやつは俺の夫であるのだからな」

「お、夫？久遠さまのっ!？」

「そうだ。貴様も聞いた事があるだろう？織田久遠の夫である、田楽狭間の——」

「田楽狭間の天上人っ!?!こいつがっ!?!」

「そうだ。梅がここに居るのは何故なのか、事の次第を説明してやれ。流牙」

「ああ」

久遠に促され、流牙は小波や鞠の助けを借りつつ、梅を保護した経緯を説明した。

「勘違いですね。……良かった。では、あの雷はこの男が？」

「正確には我が妻、帰蝶のお家流を流牙が受け止め、誤ってこちらに飛ばしてしまったの

だ」

「き、帰蝶様とはあの斎藤のですか……？あの時の雷は音と光があまりにも激しく、私は驚いて意識を失いました。他の方が見当たらないとなると、多分あの雷が神の祟りと思つて逃げ出したのだと思いますわ」

「じゃあ他に怪我人とかいない訳だな。よかつた……」

流牙はあの雷で被害者がいないことを知ると安心した。

「さて、梅よ……」

「は、はい！」

「貴様さえ良ければ、織田の者にならんか？」

「なります！」

「おお、即答だね」

即答で久遠の配下に降つたことに流牙は少し驚いた。

「ちよつとその人、うるさいですわよ？わたくし、ずつと織田家に。いいえ、久遠さまに憧れていましたの、この乱世に舞い降りた、革命の戦士。古き習慣に縛られず、どんなことにも次々と挑戦していくその姿は、まさに英雄！墨俣に一夜城を築いた方法など、因循な年寄り達には思いつくことさえ出来なかつたでしょう！その久遠さまに直々に、ご勧誘されるなんて！この蒲生梅、命を賭しても久遠さまにお仕え致しますわ！」

「我らは貴様を歓迎しよう。梅、励め」

「はっ！有り難き幸せでございます！」

「うむ。……流牙、こやつの世話をせい」

「えーーーーーーっ！！」

「俺の部隊で？いいよ」

「何あつさり了承しているんですか!? 久遠さまっ！わたくしの貞操を、こんなケダモノに捧げろとっ!」

「ケダモノって……まあ、狼の鎧を纏ってるから間違っではないけど、君の貞操を捧げなくていいからね」

「方針は変わらん。梅、我の夫をよろしく頼むぞ？」

「は、はあ……」

久遠に言われ、梅は渋々といった調子で頷いたが流牙を睨みつけていた。

「それで、久遠。観音寺城を落として次はどうするんだ？」

「壬月たちの到着を待つ。恐らく数日は掛かるだろうが……その後、京に入るつもりだ」

「了解。なあ……俺たちが先行して、京の内部を探っておこうか？」

「いや、麦穂たちに任せておけば良い。……貴様も少し休め」

「そう？分かったよ。久遠もすっかり休んどけよ。これから忙しくなるからな」

「ああ。あの……流牙……」

「あ、そうだ。久遠、今夜空いてる？」

「今夜？うむ……大丈夫だぞ」

「久遠にどうしても聞かせたいものがあるからさ」

「聞かせたい……そうか、分かった！待っておるぞ！」

「ああ、楽しみに待っていてね」

流牙は久遠の頭を撫でると、久遠は笑みを浮かべてその場を後にした。

その後、流牙隊で新しく仲間になった小波と梅の歓迎会を開くことになった。

結菜とエーリカも一緒に参加することになり、みんなで鍋を囲いながら歓迎会を始めた。

小波を呼んで一緒に食べようと誘った時は酷く驚いていたが、身分の差を考えない流隊の方針に従って一緒に食べる。

食事が終わるとエーリカは梅に鬼の話をする。

「……なるほど。久遠さまとエーリカさんは、その鬼を操るといふ者を追って越前まで……」

「はい。先に京で足利將軍達を松永・三好の包囲からお救いした後、近江の浅井さまと合流して越前を攻める事になります」

「梅は鬼のこと知ってるのか？」

「噂くらいは聞いた事もありますけど、まだ実際に見たことはありませんわ。この辺りでは、報告もそう多くはありませんでしたし……」

「恐らくここでは見つかる鬼は北近江經由ではなく、近江の西側……若狭を經由して回りこんできたのでしょうか」

「この辺りは琵琶湖の南側で、眞琴や市達のいる小谷城が越前から防壁になっており、鬼が流れてきたのだろう。」

「そうですね。鬼の報告は、観音寺城よりも西からの方が多くはすわ、それにしても、どうすの教えに逆らうだけでなく、日の本の女性を辱め、そんなおぞましい企みに利用するだなんて……断じて許すわけには参りませんわ」

「お手伝いいただけますか？」

「もちろんですわ！この蒲生忠三郎がお手伝いするからには、大船に乗った気でいてくださいまい！」

「は、はあ……」

「まあ、あなたが倒せるような相手ですから、このわたくしにかかれば、ひとひねりですけれど！」

「……魔獣を侮るな、梅」

流牙は声のトーンを低くし、鬼に対して油断している梅に対し、鋭い視線で睨みつけた。

「な、何ですの、いきなり……」

「もう一度言う。魔獣を侮るな。油断していたら足元を掬われる。すぐにその身と魂を食い殺されるぞ……」

魔戒騎士として鬼を相手に油断している梅に警告をする。

「は、はん！そう言つて私を脅かそうとしても無駄ですわよ！」

「奴らは人の命と未来を奪う存在だ……二度と油断すー痛あつ?!」

隣にいた結菜に扇子で思いつきり叩かれ、流牙は軽く撃沈した。

「全く……いきなり流牙隊の頭から魔戒騎士の道外流牙にならないでよ。みんな怖がってるじゃない」

いつも穏やかな流牙が突然鋭い刃のような性格になり、結菜以外のみんなは軽く怖がっていた。

「で、でも、鬼は危険な存在だからその事を……」

「お黙りなさい。あんまり女の子を怖がらせると……雷閃胡蝶を放つわよ？」

「はい……」

ニツコリと笑顔で体からバチバチと紫電を迸らせる結菜に流牙は頷くしかなかった。

「おーい、流牙ー！鬼ぶつ殺しに行こうぜー！」

「小夜叉？」

そこにまるでこれから遊びに行く子供のようにノリノリな感じで小夜叉がやって来た。

「鬼がいたのか？」

「むぐむぐ……おう。偵察に出したウチの若い衆が見つけたんだよ」

鍋に残っていた雑炊を掻きこみながらの小夜叉の説明を聞いた。

梅から鬼は少ないと聞いたばかりだったので一同は言葉を失っていた。

「それはもしかして、城の北側ですか？」

「や、違うけど、どうかしたのか？」

どうやら眞琴たちのいる北近江から入ってきた鬼達ではないようだった。

「それで、敵の規模は？」

「この城の西の方と、南よりもう一隊。むぐむぐ……西の方は十匹ちよいで、南側は数

匹つてとらしい」

「流牙殿、でしたら、私達は……」

「俺達は南側つてことだな」

「えっ？」

「ああ、雑魚はいちいち回るのはめんどくせーから、流牙に殺させてやる」

「あの……すいません」

「なんだ？この変な髪の奴」

「エーリカだよ。久遠の客将だ」

小夜叉は評定に出てなかったのでエーリカとは面識がなかった。

「我が名はルイス・エーリカ・フロイス。ポルトウス・カレという異国より、参りました。天守教の司祭です。日の本での名は、明智十兵衛と申します」

「オレは森長可。通称は小夜叉だ。……で、何だつて？」

「あなた方の隊はどれだけの戦力があるのですか？」

「？オレと母の二人だけど？」

「たった二人で、十体以上もの鬼を……!?流牙殿。でしたら数に優れる我々が敵の数が多い方を……」

「……流牙」

「ああ、わかってるよ小夜叉。エーリカは事情とか知らないから抑えてくれ。エーリカ。桐琴さんや小夜叉は強い。二人だけで多くの鬼を狩っていたからな」

エーリカに怒鳴り散らそうとした小夜叉を宥めながら流牙は説明する。

「お二人だけで鬼狩りを!？」

「おうよ！あんな奴ら、私と母だけでぶち殺してやるよ！むぐむぐ……」

「あの小夜叉ちゃん？おかわりは？」

「あんまり食べ過ぎると動けなくなるからな。雑炊美味かったよ。ご馳走さん！」

「あ……おそまつさまでした」

「じゃ、オレ達は先に行くぜ。場所はウチの若い奴に案内させるから、ちよつと待ってろ」

「了解。それまでに準備をしとく」

「せいぜいしくじるなよ、流牙」

「そつちも油断しないでね」

「たりめーだ。こんなの準備運動にもなりやしねえ」

ニヤリという、不敵……否、神をも恐れぬ笑顔を一つ残して、小夜叉は大股で去って行った。

「そんなにお強いのですか？あの小夜叉という方と、そのもう一人は」

「……強いよ。その内見ることになるから」

「どうすに逆らう不浄の者達を許すわけには参りません。このわたくしが成敗してあげます」

鬼狩りに梅が参加の意思を示し、流牙は鬼狩りに向かうメンバーを考える。

「わかった。あとは鬼との戦いに慣れてる俺とエーリカと……」

「鞠も行くの！鞠は流牙の護衛なの！」

「なら私も参ります。私は流牙様の草ですから」

鞠と小波が手を挙げ、流牙は少し考えてから答える。

「……鬼との戦いを知るに良い機会か。よし、詩乃はここから小波のお家流で指示を出してくれ」

「御意」

「みんな、気をつけてね」

「ありがとう、結菜。みんな、行くぞー！」

出発の準備を整え、流牙達は案内役の森兵と共に向かったのは観音寺城の南にある小高い丘の上。

「……道外殿。あそこです」

警戒に残っていた森衆が指した先には、いくつかの巨大な影が草原をゆつくりと進んでいるのが見えた。

小夜又は数匹と言っていたが、どうやら途中で増援した様子だった。

「いるな……近くに人は？」

「あと半刻ほど進めば、小さな村が……。とりあえず、途中で数体合流して増えました

が、それからは増える気配はありません。あれで全部でさ」

「あれが……」

「百鬼夜行みたいなの……」

鬼がぞろぞろと群れをなして不気味に歩いていった。

まさに妖怪が夜に歩き回る百鬼夜行そのものだ。

「なら今のうちに片付けよう。もう一度作戦を確認するぞ。鞠、小波、梅は鬼とは初めて戦うよな？」

「でも、あんな奴らになんかに負けないの！」

「さつき梅にも言ったけど、油断は禁物だ。今回は俺とエーリカを主体で戦う。だから三人は戦い方を先に覚えてくれ」

「……鞠は流牙の護衛なの」

「差し出がましいようですが、自分もです」

「だからだ。今日の戦いで鬼との戦い方を身につければこれからの鬼の戦いで俺を守れるだろ？ それに、俺は大切な仲間を失いたくない。わかってくれるな？」

「……分かったの」

「承知いたしました」

二人はそれでも不満そうだが、流牙の説得で渋々ながらも頷いてくれた。

「梅もいいな？」

「分かっていません。……どうしてわたくしだけ改めて聞くんのですの？」

「俺は梅の戦っているところを見たことはない。いきなり飛び込んで鬼に返り討ちにあわないか心配なんだ」

「そのような心配は無用。皆様にもわたくしの実力がどれほどのものか、見せてさしあげますわ！」

「……わかった」

あまり人の話を聞かない人種だと半分諦めながら森兵にも言葉をかける。

「森衆のみんなは周囲の警戒を。もし討ち漏れがあつたらお願いね」

「へへっ。心配無用ですぜ！」

「ヒヤツハー！ぶち殺してやるぜ！」

「みんな……行くぞ」

「ご主人さま。まだ連中には気取られていないようです」

辺りを警戒しているのか、普通の鬼よりも少し小柄の鬼が二匹、群れから少し離れたところにいる。

闇に紛れて素早く動けば、多分本隊に感づかれることなく仕留めることはできるだろう。

「俺とエーリカで一匹ずつ。鞠と小波は俺、梅はエーリカを……」

「雑魚の二匹はお任せしますわ！わたくしは本隊を叩きます！」

「梅!?!」

梅は馬に跨り全速力で鬼の本隊の方へと駆けて行った。

「あの馬鹿！エーリカ、後ろを頼む。鞠と小波はエーリカを助けて！絶対に敵に後ろを向けるな！」

「流牙殿は！」

「梅のところに行く!!」

流牙は先走った梅を追いかけ、魔法衣から牙狼剣を取り出し、鬼の群れへ突撃する。

☆

「てえええええええいっ！」

裂帛の気合と共に振り落とされた刃の一撃で崩れ落ちるのは、梅よりはるかに大きな異形。

「あら……思ったよりも簡単な相手ですね。この程度の相手なら……やはりわたくし一人で十分ですわ！次はあなたがお相手ですね！参りますわよ！」

正々堂々の戦いならば、掛かって来いと言っても言うべきところだろうが、今日の相手は神に仇なす悪鬼羅刹の類である。

わざわざ待つてやる理由などない。

「でうすの加護を受けた正義の刃、受けて御覧なさい！はあああああつっ！」
「グホア……」

名門蒲生家に生まれ、武芸百般に通じる梅の実力はかなりのものだった。
初めて戦う鬼に対して勇敢に戦っている。

「これなら行けますわ！さあ、どんどんかかっていらつしやい！」

次に定めたのは、今までの鬼よりもふた回りは大きな鬼であった。

「次はあなたですわ！覚悟なさい！」

月光を弾き爛々と輝く瞳も、その巨大な体躯も。

神に仇なす悪の使徒は、全て自身が下してやる。

「はああああああー！」

そんな想いと共に振り下ろされた刃は。

「え……………？」

あっさりと受け止められた。

驚きにもらず言葉も間に合わない。

丸太のような巨大な腕が横薙ぎにぶうんと空を裂き。

その先にあつた細い体を巻き込んで、速度緩めぬままに振りぬかれる。

「ぐ……………が、はっ!？」

打撃の重みに重なったのは、地面に叩きつけられたときの大きな痛みと、そこから転がった先、止まるまでに幾度となく打ち付けられた連続の痛み。

「かは……………は……………」

全身を揺さぶる一打に、杯の奥底までの空気全てを吐き出されたようで、今は呼吸もままならない。

痛みに至っては体中に広がり、もはや何処が痛いのかすらも分からない。

「は、は……………っあ……………」

そんな梅に掛かるのは、月光を背にした巨大な影だ。

大きい。

それは、これほどに大きな相手だったのか。先ほど倒した鬼達よりも、幾分か大きいだけではなかったのか。

「……………ひ……………」

爛々と輝く瞳に見据えられ、漏れるのは、言葉どころか歯が震えてぶつかりあうかちかちという音だけだ。

鬼とは、これほどに恐ろしいものだったのか。

(わ……………わたくしの剣……………でうすの祝福を受けた剣が……………どうして……………)

心の中に渦巻くのは、そんな混乱と怯えに彩られた黒い嵐。目の前の恐怖からにげようとするが、かち合う視線は彼女を捉えたまま、逃げることを許さない。

「あ……………あ、あ……………っ」

目の前の大きな闇が一步を踏み出す度に、体が震え、視界が恐怖にぐらりと揺れる。

（お、鬼は……………攫った女性を襲って……………）

そして、どうするのだったか。

（孕ま……………せて……………生まれた子供は……………）

どうなるのだったか。

天守教の司祭から聞いた話はあまりにもおぞましく、それ以上は思考の端に浮かべる事すら汚らわしいものだ。

「いや……………っ」

故にその恐怖は、限界を超えた。

「いや……………いやいやいやいやいや……………っ！」

口から止めどなくあふれるのは、拒絶を示す言霊だ。

けれど少女の拒絶の声など涼風のごとく。

巨大な手は涼風を前に一分の速度も緩めることなく、梅の甲冑に伸ばされて……………。

「いやあ……………っ！」

「はあっ!!」

ズシヤツ!!

「……………え？」

梅の悲鳴を掻き消すかの如く響き渡ったのは、裂帛の気合と、梅のそれよりはるかに鋭い斬撃の音。

そして怪物の断末魔と、巨大な体が崩れ落ちる轟音だ。

「あ……………」

涙に揺れる視界に映るのは、夜の闇と同じ色をした漆黒の衣に身を包んだ大きな背中。
中。

そして、闇を切り裂く白銀の輝きを放つ直剣の刃。

「…………梅、大丈夫か？」

切り伏せた大鬼は、立ち上がってくる気配はない。

その後ろに控えた鬼達も、今の一撃と喉が割れるほどに吐き出した気合に驚いたのか、近付いてくる様子もない。

「梅!」

「あ……………」

「立てるか、梅!」

鬼に視線を向けたまま流牙は梅に問うた。

「あ、あの……わ、わた……わたくし……」

「心配するな、俺が必ず守る。だから立つんだ！」

「うっ……あつ、くっ……」

梅は震える体で刀を杖代わりにして何とか立ち上がった。

立ち上がるのを確認した流牙は牙狼剣を鞘に収め、左側で垂直に構える。

そして、牙狼剣を鞘から引き抜いて頭上に掲げ、円を描く。

円の内側がひび割れて満月のような光り輝く円となり、その中から黄金の塊が降り注いで流牙の体に装着される。

眩い金色の輝きを放つ狼を横した鎧が闇夜を照らし、鬼たちはその神々しい姿に恐れる。

「金色の、天狼……?」

まるで目の前に邪悪なる存在を倒すために降臨した救いの神が現れたかのような光景が梅の瞳に映っていた。

魔を戒める黄金の騎士……黄金騎士ガ口となった流牙は牙狼剣を引き抜き、静かに鬼の元へ歩き、鋭い緋色の瞳で撃ち抜く。

「貴様らに俺の大切な仲間を、手出しはさせない！」

闇夜に魔獣を狩る天狼の咆哮が轟いた。

☆

流牙達の帰りを待っているひよ子達はまだかまだかとそわそわしていた。

「うう……流牙様達、遅いなあ……」

「小波さんからは戦いは終わったと連絡がありましたから、そろそろ戻ってくる頃だとはおもうのですが……」

「あー！見えてきたよ！おーい！おーい、流牙さまーっ！」

「あ、ひよ、待つてよー！ほら、詩乃ちゃんも行くこう！」

「ええ。ひよ、単騎駆けはしないと約束したではありませんか！」

「あらあら。みんな本当に流牙が好きなのね」

ひよ子達は流牙の姿を確認すると一目散に走り出し、みんなのお姉さんである結菜はニコニコしながら後を追う。

「流牙さまーっ！お帰りなさ……」

「皆さんご無事で……」

「……………」

「あーあ、またなの？」

ひよ子達はその光景に無言になり、結菜は苦笑を浮かべていた。

「えっと、さっきの連絡通り、みんな無事だ」

「それは何よりです」

「ただいま帰りましたわ！」

そんな微妙な空気の中……流牙の側で腕を組んでいたのは、出掛ける前まで流牙の事を嫌っていた梅だった。

「またですか」

「……あはは」

出掛ける前までは毛嫌いしていたのにいつの間にかニコニコしていたら誰でも驚くのは無理はない。

「ただいまなのー！」

「鞠ちゃん、お帰りなさい」

マイペースな鞠もペースを崩さずになっていた。

「うん、きつと鬼の群れに一人で突っ込んでいった梅さんが……」

「それを流牙さまが必死に追いかけて助けたら。な・ぜ・か、こうなっちゃったんですね？」

ひよ子達はどうしてこうなったのかあつさり推理をして言い立てた

「当たってるよ……」

どうしてこうなったのか流牙には分からず、頭を悩ませる。

「流牙……あなた、どんだけ天性の女誑しなのよ」

結菜は呆れから大きなため息をついてジト目で睨みつける。

「だから誤解だよ……ただ梅を助けただけなのに……」

「ああ……あの時のハニーは最高に勇しかったですわ！黄金の鎧を召喚し、その身に纏って鬼を切り裂くその姿……まるで神話の神様をも彷彿とさせるものでしたわ!!」

「は……はにー……?」

「南蛮の言葉で愛しの君という意味だよ……」

何故か流牙への呼び名がハニーとなり、頭を悩ませる原因が増えてしまった。

ちなみに小夜叉と桐琴はあっさりど鬼を倒して陣で不貞寝をしているらしい。

周囲の警備は流牙隊や明智衆、それと森衆で行うので大丈夫と詩乃は言う。

「ひとまず、今夜はもう遅いから早く休もう」

流牙が解散してみんなを休ませようとしたその時だった。

「ではハニー。南蛮では、好き合う二人は寝る前にお休みの口づけをすると聞きますわ。

ハニーもぜび……」

「はあっ?!」

静かに終わろうとした矢先に投入された爆弾に流牙は驚愕する。

「あーっ。梅ちゃんばっかりずるいのー。鞠も流牙に口づけしてもらいたいのー！」
「だ、だったら、私も……っ！」

「エーリカさん。南蛮とは、そのような破廉恥な風習が公然とまかり通るような場所な
のですか？」

「は、破廉恥……!?!」

「うう……流牙様ーっ！梅さん一人だけなんてずるいですーっ！」

「み、みんな！一旦落ち着こうか？」

「ハニーー！わたくしに、熱い口づけをーっ！」

「ま、待て待て待てえっ!!」

これは非常にマズイ……そう思った流牙は急いで梅から離れて走る準備をする。

「あ、あー！俺用事があるんだった！みんなは先に休んでいてね、じゃあねー！」

思い出したように棒読みで言いながら流牙はダツシユでその場から逃げた。

「あ！逃げましたわ！」

「待ちなさい！逃がさないわよ、流牙!!」

「流牙、待つのーっ！」

「みんなで追いかけるよ！ひよ達は反対側から回り込んでっ！」

「ほら、小波ちゃんも！」

「じ、自分もですか!？」

「……はあ。なら、私達も行きますか。エーリカさん」

「ははは……。皆さん、お元気ですね」

即席の割には何故か妙に連携が取れている流牙隊+ α が流牙にお休みのキスをしてもらうために奮闘する。

流牙はこの世界に来て三度目となる追いかけてここに巻き込まれる事となった。
「もう勘弁してくれえええええっ!!」

流牙の叫びが夜の観音寺城に響き渡るのだった。

『月 ～Moon～』

お休みのキスをしてもらうために流牙と流牙隊+αと追いかけてしまいが始まってしまい、必死に逃げている流牙。

しかし、風よりも早く走る足で全力で逃げる流牙に見失ってしまう流牙隊+α。すると、警備をしていた足軽を見つけたひよ子は流牙がどこに行っただか尋ねた。

「はっ、はっ、あの、今ここに流牙様はいませんか!？」

「流牙様ですか?それなら、あっちの方へ走って行きましたよ?」

「そうですか、ありがとうございます!みんな、流牙様はあっちに行っただよ!」

ひよ子は近くににいるみんなに呼びかけて流牙が向かったとされる方向へ走って行っただ。

残った足軽は視線を隠していた笠を取りながら呟いた。

「……………めんね、ひよ子」

その足軽は織田家の足軽ではなかった。

足軽はその場で回転すると鎧は漆黒の魔法衣へと姿を変えた。

そう……………足軽の正体は流牙だったのだ。

流牙の纏う魔法衣は本人が望む衣装に変化することができ、ホラー狩りの潜入捜査でこの魔法衣の能力を重宝している。

今回はひよ子達の目を欺くために足輕の格好にしたのだ。

「さてと……久遠の元に行くか」

流牙は魔法衣を翻し、流牙隊＋αに見つからないようにしながら久遠の元へ向かった。

☆

観音寺城の数ある屋敷の一つの縁側で久遠は一人で座って月を眺めていた。

戦いが終わった後の静けさで妙な静寂が広がっていた。

そこに一つの影が近づいた。

暗闇に紛れることができる漆黒の闇と良く似た衣に身を包んだその影に久遠は笑みを浮かべて話しかけた。

「よく、この場所がわかったな」

「ザルバが久遠の匂いを辿れたからだよ」

ザルバの探知でようやく探すことができた久遠の隣に流牙が座る。

「ふう……」

「疲れているようだな。何かあったのか？」

「ちよつとね……」

流牙は梅と起きた騒動について説明した。

「会つてまだ少ししか時間が経つてないと言うのに貴様と言う奴は……そこまで女を誑しこんで……」

「だから誤解だつて……梅を助けただけなのに……」

「もはや天性の女誑しだな」

「それ、結菜にも言われた……」

「ふむ、流石は我が妻だ。夫の性質を的確に言い当ててるな」

「もう止めてくれ……」

流石にこれ以上は流牙の心に大きな傷を与えかねないので久遠はそれ以上言わないようにした。

月を眺めながら流牙は久遠に言う。

「一つ一つ、久遠の夢に向かつているな」

「次は京……一葉の元に行かなくては」

「三好を倒して、その後は越前……頑張っている市ちゃんと眞琴の為に、俺たちも頑張らないとね」

「そうだな……道のりは険しいが、我には頼れる者たちがおる。この夢も現実になるだ

ろう」

まだ始まったばかりだが着実に進んでいる久遠の夢への道。

思いにふけている久遠に流牙は立ち上がり、魔法衣からギターを取り出してピックを構える。

「色々忙しくて遅くなったけど、堺の約束を果たす時が来たよ」

「おお……遂にか。我が夫がどんな演奏をするのか楽しみだ」

「この曲を久遠に捧げるよ」

「わ、我にか……？」

自分に捧げる曲と言われ、ドキツとなる久遠に流牙は笑みを浮かべる。

「ああ。聞いてください……『篝火ノ夢』」

流牙はピックでギターの弦を鳴らし、淡い曲調の演奏をし、歌い始める。

それは魔戒騎士と魔戒法師の生き様を表すような淡く切ない歌だった。

しかし、人と人が紡いだ絆や縁はとても大切なものだということを伝える心に響く歌詞だった。

曲が終わわり、流牙は久遠に感想を聞こうと思ったが……。

「く、久遠!?!どうしたの!?!」

「え……？」

久遠の目からは一筋の涙が溢れ、流牙は何があったのかとオロオロしてしまふ。

「あつ、す、すまん！あまりにも素晴らしかったから呆然としていた……」

「そう？よかった……」

「たまに南蛮語があつたから分からなかったが、少し寂しげな歌で今のこの場に良い雰囲気

の歌だった……しかし、一つだけ解せないところがあったな」

「え？どこ？」

「闇を纏った……というところだ。闇を纏うとは闇に墮ちる、という事ではないのか……？」

鬼のこともあり、闇をよく思っていない久遠に流牙は苦笑を浮かべながら隣に座る。

「そうだね。闇は人を悪に染めるかもしれない……だけど、乗り越える事で正の心でも闇の力を使えるんだ。……俺もそうだからね」

「何!?流牙、どういう事だ!?お前が闇を……」

「今は見せられないけど、俺は……ガ口の鎧は闇を纏えるんだ。だけど、俺の心は悪に染まってるんでしょ？」

「確かにそうだが……本当に大丈夫なのか？」

「大丈夫。俺の闇は光と共にある。そして、人間に仇なす邪悪なる存在を討つための力だ。久遠……俺を信じて」

流牙は久遠の瞳をじっと見つめた。

久遠は初めて流牙に会った時に目を見ればどんな人物か分かると言っていたが、今は夫婦で久遠は流牙の事を夫として大切に想っている。

なのでお互いに見つめ合うだけで久遠は顔を真っ赤に染めてしまう。

「わ、分かった！我は何があっても流牙を信じる！だからあんまり見つめるな！」

「ありがとう。闇の力はその内見せることになると思うから、見守っていてね」

「ガロが闇を纏うか……ガロだけでも凄いのそこに闇を纏うとはどんなものになるのか想像もつかないぞ」

久遠にとって闇を照らす金色の輝きが闇を纏う姿を想像する事が難しかった。

「誰もが驚くあつと驚く能力があるよ」

「それは楽しみだ。皆に新たな希望を見せてあげてくれ」

「ああ、任せてくれ」

流牙と久遠の月夜の密会……それは二人の絆を深める大切な時間となった。

しかし、久遠と過ごせる時間がこれから少なくなってしまう事を今の流牙は知らなかった。

☆

観音寺城を落としてから、はや数日が経過した。

江南の小城を攻めていた壬月たちとも無事に合流を果たし、観音寺城で出陣の準備に手間取っていたが、ようやく準備が整い、いよいよ京に向けて出発となる。

途中、森一家の桐琴と小夜叉が来て、たわいもない話をしていたが、馬が合わないのか梅と小夜叉が喧嘩をし出した。

口喧嘩だけならよかったが、互いの獲物を取り出して殺し合いの喧嘩をしようとしていたので流牙は近くにあった岩の元に行き、拳を強く握りしめた。

そして……。

ドゴオオオオオオン!!

「うおっ!?!」

「はひっ!?!」

流牙は岩を拳で粉々に粉砕し、喧嘩していた二人はビクツと驚いて止まった。

「二人共……喧嘩を止めてって、言ったよな……?」

流牙は満面の笑みを浮かべているが体中から怒気を放っており、あまりにも恐ろしい姿に小夜叉と梅は震えていた。

「この岩を砕くお仕置きは拳骨か、大人しく喧嘩を今すぐやめる……どっちがいい?」

拳には傷一つ付いておらず、岩を粉砕した際の細かい小石や砂埃が付いていた。

「すみませんでした……」

二人はすぐに頭を深く下げて喧嘩を止め、消沈しながら大人しくなった。いつも強気な小夜叉が消沈したので桐琴は大笑いしながら自分の持ち場に戻っていった。

喧嘩も収まり、京への歩を進めると、犬子から報せが来た。

「流牙様——！本陣にて久遠さまがお呼びですよ！」

「久遠が？何があつたのかと？」

「京への露払いに出ていた麦穂様と雛から早馬が到着したらしいんです」

「分かつた。すぐ行く。詩乃、部隊を頼んだ」

「はい、行つてらっしゃいませ」

流牙は詩乃に流牙隊の指揮を任せ、久遠の元に急いだ。

「久遠！何があつた？」

「流牙……予想してはなかつたことが起こつた。胡散臭い変事だがな」

「胡散臭い？」

「うむ。実は……あの松永弾正少弼が降伏したらしい」

「松永つて、一葉たちを狙っている敵の親玉だよな？」

「そうだ。だかは予想だにしなかつた変事が起こつた、と言つたのだ。今から松永と謁見を行うつもりだ。それで流牙には護衛を頼みたい」

「分かった。だけど、その前にちょっと待ってくれ。小波」

「お側に」

「悪いけど俺たちの謁見の時に、周囲に松永、それか三好の草や兵が居ないか探ってきてくれないか？」

「御意。……いた場合は？」

「出来るだけ殺さないで欲しいが……小波に任せる」

「承知。では速やかに処理に向かいます」

小波は流牙の前から消えて周囲の様子を探りに向かった。

「行くぞー！」

「ああー！」

それから流牙と久遠は軍を率いて走りだし、瀬田に到着したのは夜になった。

陣幕で区切られた本陣、久遠の座所に到着した。

床几に腰掛けた久遠の横に立つように、流牙が護衛として立つ。

すると、ザルバからの呼び出しでカバーを開けて耳元で声を聞く。

『流牙、微かだが……』

ザルバの話を聞き、流牙は声に出さず驚いて目を見開きながら魔法衣のポケットにある不気味な一つ目の化け物のような姿をした小さな箱を取り出して客人を待った。

「松永弾正少弼様をお連れ致しました」

麦穂と雛、そして妙齡な女性が在所に入ってきた。

「まずは謁見の機会を与えていただき、深くお礼言上仕る。織田上総介殿」

「貴様が松永弾正少弼か」

「いかにも松永弾正少弼久秀。通称は白百合。見知り置き願おう」

その女……白百合は何も恐れられないような不敵な様子で久遠と対峙する。

「単刀直入に聞く。何を考えて降伏を——」

「久遠、ちよつとごめん」

「流牙？」

流牙は久遠から白百合の元に行き、用意していた小さな箱を取り出した。

カチャ！ボウツ！！

箱を開くと中から翡翠色の火が灯され、白百合の目の前に近づけて翳した。

「な、何をする！」

「黙ってる……よし、あんたは人間だな」

白百合の赤い瞳には何の変化は起きず、流牙は一息をつき、箱を閉じて翡翠色の火を消す。

「流牙、松永に何をしたのだ？」

「これは魔導火ライター。魔界の炎を灯すことができ、人間の眼前で翳すと、魔獣が憑依しているなら瞳孔に模様が浮かんで見抜くことが出来るんだ。ザルバがこの人から鬼の匂いがするから人間かどうか確かめたのさ」

魔戒騎士は魔導火ライターを使って人間に憑依したホラーを探知している。

鬼の匂いがするとザルバから聞き、白百合が鬼かどうか確かめたのだ。

「鬼の匂いだと……？ 貴様、何があつた！」

「うむ。我に思うところあり。三好と手を切り、上総介殿を頼る決意を致した……三好三人衆、外道に堕ち申した」

「外道？」

白百合の話は久遠たちが観音寺城を落とした当日、勝竜寺で白百合と三好三人衆は抗戦の準備をしていた。

そこに若狭から若い謎の占い師がやってきて巧みな話術で三好三人衆を誑かし、飲めば百人力となる妙薬を献上した。

白百合は己の力で戦わず、訳のわからない薬に頼るような外道と共に歩くことは出来ない、織田に降伏を申し出た。

「これが三好と袂を分かつ時にくすねた例の丸薬よ。服用するつもりはないが、後で調べようと思っていたのだ」

白百合が取り出した小さな印籠の中には丸薬が入っており、流牙はその薬をザルバを近づけさせるとすぐにその正体が分かった。

『こいつは薬なんて代物じゃないぜ。鬼の体液を固めたものだ。こんなものを食ったら心は壊され、たちまちその姿が鬼になるぞ』

白百合から鬼の匂いがしていたのはこの薬が原因だった。

流牙はこの薬を与えたザビエル、そしてそれを服用して自ら鬼となって外道に堕ちた三好達へ強い怒りを持った。

「力を手に入れるためにこんなものに手を染めるなんて……白百合さん、この薬を処分させてもらうね」

「好きにしろ」

「ザルバ！」

『おう！』

流牙は丸薬を全て空に放り投げてザルバを掲げると、ザルバの口から魔導火を放射させ、丸薬を灰も残らず全て燃やし尽くした。

流牙は滅多に使わないがザルバの口からも魔導火を出すことが出来る、魔獣に攻撃できる。

「さて、弾正少弼。話は少し逸れたが、以降我が手足となって働け」

「はっー！」

白百合は久遠の元で働くことになり、壬月と麦穂は反対したが久遠は手元に置くことにして麦穂に預けることになった。

多少の不安が残るが、白百合は織田軍に加入する事となった。

「流牙。我は後続を待つて態勢を整える。だが、白百合が織田に降つたとなれば三好が動く可能性が高い」

「了解。流牙隊で先に京に向かつて一葉と合流する。そして、一葉たちを守る」

「頼む。我も出来る限り早く体制を整えるつもりだが、今しばらく時間がかかる」

「魔戒騎士として魔獣に身を落とした三好はこの俺が斬る」

「頼もしい限りだ。一葉たちを頼む」

「任せて」

流牙は陣に戻る前に白百合の元へ行った。

そして、魔戒騎士として三好と共に戦っていた白百合に言っておくことがあった。

「白百合さん……あんたの昔の仲間、外道に堕ちた三好は俺が斬る」

「なるほど……ただの優男かと思いきや、ずいぶん強い意志を持つ男よのお。田楽狭間の天人、道外流牙殿」

「鬼を切るのが俺の使命だ。だからあんたは久遠の為に働いてくれ」

「ふふふ……任せよう。そして、お主がどれほどのものか見せてもらおうぞ」
白百合との話を終え、流牙は陣に戻った。

陣に戻ると既に出陣の準備が出来ており、小波が先回りして伝えてくれていた。

そして、流牙率いる流牙隊とエーリカ……後はどうしてもついて行くと言う結菜を連れて一足先に京へ向かった。

小波の先導の元、何の妨害も無く無事に二条館に辿り着くのだった。

『戦
　　〽War〽』

二条館に到着すると、門の前で幽が流牙達を出迎えてくれていた。

「流牙殿！良くぞお越し下さいましたか！」

「幽、久しぶりだな。一葉と双葉ちゃんは？」

「ご無事です。ただいま寝所に在らせますが、いつもと同じであるならば、まだご就寝されてはいないでしょうな」

「すぐに会わせてくれ。話したいことがあるんだ」

「承知しました」

「あ、でもその前に……ひよ、ころ、梅！三人は二条館の防衛を頼む。敵が来るとしたら……」

「南。桂川の方から来るでしょうな」

「なら、三人は南を重点的に警戒していてくれ」

「……はいっ！……」

流牙は結菜と詩乃とエーリカと鞠を連れ、幽の先導の元、二条館の奥に進む。

「夜分に失礼致します。織田より先駆けとして流牙殿が来てくれました。お通ししても

よろしいですか？」

「許す」

「はっ」

部屋に入ると中には一葉と双葉が座っていた。

「流牙か、久しいな」

「一葉もな。双葉ちゃんも久しぶり」

「はい。お久しぶりでございます。流牙様」

「久しぶりだから色々話したいことがあるけどそれは後だ。まずは状況整理と情報交換だ」

一葉達の方では流牙達が京を去った後は平穏な日々が続いていたが、その平穏は破れ、緊迫感が漂うようになった。

久遠と密約を交わした一葉は、将来に備えて二条館の堀や堀、門の改修を命じた。

しかし、それがどうやら三好・松永の徒を不用意に刺激してしまったらしい。

織田上洛の噂を確認するとほぼ同時に三好・松永の徒との狼狽は、極限まで張り詰めてしまった。

そして、流牙達は観音寺城でのこと、先ほどあった松永弾正……白百合が織田に降つた事を話した。

白百合の話をしたら三人はとてつもなく驚いていた。

ザルバが調べた服用すれば鬼となる鬼の魔薬は恐らく三好衆三千人に使われ、こちらに向かっているはず。

「三好衆が鬼となつて余らの頸を取りに来るといふことか。……ゾツとせんな」

「お姉様! そのような戯言を仰つてゐる場合ではありません!」

「落ち着け双葉。狼狽えても仕方あるまい。……相手が三好衆であれ、鬼であれ、何の力もない事実は変わらんのだ。やることは一つ。久遠が来るまで二条館を守り切る。……ひいては双葉、そちを守り、幕府の礎を残すことこそ、余のすべきだった一つのこゝろだ。例え誰が相手であろうと、この刀に賭けて。命ある限り余はそちを守る」

「お姉様……」

日の本の未来のため、そして愛する妹のために命をかけて戦うと言う一葉。

そんな一葉に流牙はため息をついて一葉に近づく。

「……一葉」

「ん? 流牙、どうしー」

バチーン!

「痛っ!?!」

流牙は他人より額の開いた一葉に思いつきデコピンを食らわせた。

現將軍にデコピンを食らわせた流牙に一同は驚愕していた。

「な、何をするのだ！流牙！」

「一葉が馬鹿な事を言っているからちよっとお仕置き」

「ば、馬鹿な事とは何じゃ！」

「大切な人を守るために命をかけるのは戦う者として一つの心だと思う。だけど、もしそれで本当に命を落としたら残された双葉ちゃんはどうなる？」

「そ、それは……」

「一葉は一人で戦うわけじゃない……俺たちがいる」

「流牙……」

「俺たち流牙隊、そして……黄金騎士ガ口の俺が必ず一葉と双葉ちゃんを守る。だから、軽々しく命をかけて戦うなんて言うな。戦うなら、必ず生き残って大切な人の元に戻る……そのぐらいの覚悟で戦ってくれ」

流牙の何があっても生き残るという約束を持つ流牙の言葉にはとても重みがあった。「……分かった。流石は魔獣を相手に戦ってきた男だ。言葉の重みは違うな」

一葉は流牙の思いを理解し、そのまま二条館防衛について打ち合わせをしようとした時。

（敵軍発見。三階菱に五つ釘抜きの城門を纏った異形の者どもが、たった今、桂川を渡り

ました)

(数は?)

(およそ三千)

(分かった。引き続き監視を頼む。それから、無茶だけはするな)

(承知)

小波から句伝無量で知らせが来て敵が近づいている事を皆に伝えた。

「流牙、流牙隊と二条館の兵、合計三百を貴様に任せよう」

「二条館の兵を……?分かった。流牙隊で仕切らせてもらうよ。詩乃、指揮権を任せる」

「御意。……しかし丸投げですねえ」

「適材適所だよ。俺は魔獣相手に戦うこと専門だからさ。頼んだよ」

「……御意。我が際を振るうに足る戦場。ほして流牙様よりの激昂を受けた今、神仏と

さえ戦つてご覧に入れましょう」

「俺たちの命、預ける」

「はっ。この竹中半兵衛。必ずや、あなた様の望むべき未来を、そして希望を勝ち取つて

みせます」

「頼りにしている。よし、俺たちはみんなと合流して戦線を構築しよう。エーリカ、行く」

「了解です」

「……待て流牙。余も行く」

そう言いながら一葉が刀を手に取って立ち上がる。

「……一葉」

「心配するな、余はそう簡単に死ぬつもりはない。双葉を守るため、双葉と一緒にいるために戦うのだ」

先程とは違う、一葉は大切な者を守り、未来を歩くために戦う覚悟をした目をしていった。

「……分かった。俺の背中を預けても良いか？」

「うむ。そなたに余の背中を任せよう」

一葉は流牙たちと共に戦う事となり、部屋を出て臨戦態勢を整える。

最後に流牙が部屋を出ようとする、双葉に魔法衣をギョツと握られて止められた。

「流牙様……」

「ん？双葉ちゃん、どうしたんだ？」

流牙は腰を下ろし、双葉と視線を合わせながら尋ねる。

「あの……どうか、お姉様を……お守りください……」

姉を思う妹の切なる願いに流牙は優しい笑みを浮かべて双葉の頭を撫でる。

「ああ。必ず君のお姉さん、一葉を守るよ。だから、願っていてくれ」
「願い……………」

「俺たち魔戒騎士の鎧は人々の願いが力を与えるんだ。だから、双葉ちゃんは願っていてくれ。一葉の無事と俺たちの勝利を」

「……………はい！流牙様、御武運を！」

「ありがとう、行つてくる！」

双葉の想いを胸に流牙は鬼と化した三好との戦いに向かった。

☆

篝火が煌々と夜空を照らす、二条館の広い庭。

そこに流牙隊、明智衆、そして足利幕府の兵たちが雑然と固まっていた。

そんな兵たちは、流牙や一葉の姿を見て、次々に集まつてくる。

兵たちの顔を一人一人、見つめながら、端然とした姿で前に進み出た一葉が、力強く言葉を放った。

「皆の者！ たつた今、報せが入り、三好衆が二条館に迫っていることが判明した！ しかも三好の衆は南蛮の呪法を頼り、人たることを辞め鬼と化している！ 日の本の侍として、何と恥ずべき行いか！ そのような恥ずべき者どもに、幕府が負けてなるものか！ 異形の鬼となった敵の数は、多い。……………だが！ 余は皆を、一騎当千の荒武者たちだと信じてお

る！各々、九重の天に向かって旗を掲げよ！誇り高き侍、源氏の白龍旗を！足利の二つ引き両を！足利將軍義輝、幕府の勇者たちの力を借りて逆臣三好を討つ！」

「……みんな、戦いの前に今度は俺の世界の話聞いてくれ！」

一葉に続き、流牙が力強く言葉を放った。

「大体の人は知っているとと思うが、俺はこの世界とは異なる天の世界から来た！しかしその天の世界もこの世界と同じように鬼とよく似た邪悪なる異形……魔獣の脅威に晒されている！」

流牙は自分のいた世界のことを話し始め、天の世界でも鬼と似た存在の脅威に晒されていると知って皆は戸惑いを隠せない。

「古の時代より、そんな魔獣の魔の手から人間を守るために戦ってきた勇者たちがいる。それが、俺たち魔戒騎士だ！」

流牙は魔法衣から牙狼剣を取り出してそのまま鞘から抜き、数々のホラーと鬼を切り倒して来たその白銀の刃を見せる。

「魔戒騎士は『守りし者』と呼ばれている。魔獣から人間を守るため、己の命を賭して最後まで戦い続ける者達の事だ。そして、この場には俺以外にも守りし者達はある……それはこの場にいるみんなだ!!」

流牙は牙狼剣を掲げ、円を描いてみんなの眼の前でガ口の鎧を召喚してその身に纏

う。

流牙と行動を共にしてきた詩乃達にとつては見慣れた光景だが、まだ一度しか目にしていな一葉や梅、そして初めてその目にする足軽達はその美しくも気高い黄金の鎧に目を奪われた。

そして、流牙は大剣となつた牙狼剣を天に掲げるように見せながらここに宣言した。

「魔戒騎士最強にして最高位の称号、黄金騎士ガロがここにいる者達を俺の同志……『守りし者』として認める事とする!!!共に戦おう!!この日の本を鬼共から救い、誰もが安心して暮らせる平和の世を作るために!!!」

それは身分を関係ない流牙と心を同じくし、戦う者として部下ではなく仲間として認められたとあつて足軽達は武器を掲げて歓喜の叫びを上げた。

「そして、もう一つ!ここにおる道外流牙を、たつた今より余の馬廻衆の頭に任じる。皆も知つての通り、織田上総介の夫だ。そしてこの戦いを終えた後、流牙は余の良人になる男である。皆、心して下知に従え!」

「応っ!」

「ええっ!?!お、良人!?!一葉、一体どういうことだ?」

一葉からまさかの爆弾発言を投下され、流牙は耳を疑つた。

「ふふっ……それは久遠に聞くのだな」

「そうそう。久遠からちゃんと聞くのよ。だから今は頭の片隅に置いておきなさい」
既に事情を知っている結菜の悪戯つ子の笑みに流牙はガ口の鎧の中で大混乱して大いに悩ませた。

とりあえず詩乃の指示で南を中心に防衛の準備をし、それぞれが自分の持ち場につき中、流牙は結菜と鞠、そして先程妻になると宣言した一葉がいた。

「一葉……さっきの事、本気なの？」

「余がそんな冗談を言うと思っただか？本気も本気だ。この戦いを無事に生き抜いたならば、余が妻となり、双葉が側室になるという件が、久遠との間で決しておる」

「ふ、双葉ちゃんも側室に!!？」

「うむ。しっかりと可愛がってやってくれ」

「いやいやいや！もう何が何だか分からなくなってきたらいいんだけどー！」

戦いの前だというのに流牙はこれまで以上に頭が大混乱している。

『これで黄金騎士の後継者不足は解消されそうだな……』

カバーをされているザルバの眩きに深い重みが込められていた。

先代の黄金騎士は子供がいなかったのか、はたまた別の理由があつたのか不明だが流牙が受け継ぐまでガ口の鎧は英霊の塔で待ち続けていた。

なので、次の世代の黄金騎士を継承する者は必ずいなければならない。

また何十年とガ口の継承者が不在というわけにはいかないのだ。

流牙の血を継ぐ男子……その子が生まれればザルバも一安心するのだ。

「まあ何にしても、俺の妻になるっていうなら……これだけは言うよ。一葉、絶対に死ぬな」

「いまいち一葉が妻という自覚はないが、生きていて欲しいという願いからそう言う。

「当然じゃ。余の力の全てをそなたに貸そう。主様よ」

「ぬ、主様？」

「なんだ。良人のことをこう呼ぶのではないのか？ 幽がそう言っていたのだが……」

「幽……何を吹き込んでるんだよ。一葉、出来れば名前で呼んで欲しいな……ダメかな？」

「そうか、仕方ない……ではこれまでと同じく流牙と呼ばせてもらおう」

「ああ、頼むよ。一葉」

流牙は一葉の頭を撫で、初めて男に頭を撫でられた一葉は嬉しそうに微笑む。

そして流牙はこれから始まる戦いに向け、軽く作戦会議を開く。

「さて。前線は俺と一葉と鞠、そして……結菜だな」

「ええ。大丈夫。常に雷閃胡蝶を放っているから。それに、流牙と私の『連携技』を使うのに近くにいる方が良いでしょう？」

「連携技……？何じゃそれは？」

「偶然というか、結菜の思いつきで考えた必殺技みたいなものかな？」

それは観音寺城を落とした後、暇を持って余していた流牙に結菜と話をしていた時に思いついたものだった。

試しにそれを近くの山でそれを実践したら見事に成功し、流牙の新たな技として追加されたのだった。

「という事だから前線の前衛は俺と一葉。後衛は結菜と鞠だ。鞠、結菜の事を頼んだよ」

「任せるの！結菜は鞠が守るの！」

「頼りにしているわ、鞠ちゃん」

「うんなの！」

前衛は無双の剣を扱う流牙と一葉、後衛は中距離攻撃の雷閃胡蝶を放つ結菜と素早い動きで敵を翻弄する鞠。

即席だが今の現状では最高の布陣と言える。

そして、南の方から鎗矢が上がった……いよいよ鬼との戦いが始まる。

流牙は近くにいる小波を呼んで指示を出す。

「小波！」

「お側に」

「小波、君の力がこの戦いを左右する要だ。俺たちの言葉の繋ぎ、任せたよ」
「承知」

「それから、余力があれば結菜と一葉と鞠を守ってくれ」

「しかし……その場合、自分はご主人様を守ることが出来ません……」

「心配するな。俺は黄金騎士だ。鬼に遅れをとるほどやわじやないよ。小波にしか頼めないんだ……頼む」

「……承知しました。ですが、あの……ご主人様も、どうかご無事で」

「ありがとう……小波も絶対に無事に帰って来い。そしたらまたみんな楽しくご飯を食べよう」

「自分如きが、また参加してもよろしいのですが……？」

「当たり前だろ。小波は俺たちの大切な仲間だ。だから、戦いが終わったらみんな楽しく過ごそう。な？」

「はい……!では、行って参ります、ご主人様」

「行ってらっしゃい。でも、無理だけはするな。もしもの時は生きること考えるんだ」
「……承知!」

小波は姿を消し、流牙は大きく深呼吸をすると守りし者……魔戒騎士として心を切り替えて真剣な表情をする。

「みんな、行こう！」

「一刻の間、死力を振るうのみ！」

「鞠の宗三左文字が火を噴くのー！」

「なら私は、雷閃胡蝶で闇を照らすわ！」

流牙、一葉、鞠、結菜は互いを見て頷き、南門へ向かった。

流牙隊＋ α と対するは鬼へと身を墮とした三好衆三千……久遠たちが来るまでの一刻に及ぶ二条館の攻防戦が幕を開けた。

『刀 ～Soul～』

鬼と化した三好衆との戦い、二条館攻防戦……その要は鉄砲と弓矢である。

強力な鉄砲とそれを補う弓矢で近づいてくる鬼を撃退している。

ひよ子と転子と梅の命令の元、的確な指示を出して戦況は五分五分となっている。城門に取り付いた鬼は千……残りの二千は何処かに潜んでいるはず。

このままでは時期に城門が打ち破られ、そこから鬼が次々と進入してくる。それだけは何としても止めるために流牙達が前に出る。

「はあっ!!!」

「ふっ!!!」

流牙の牙狼剣と一葉の刀が闇を切り裂く光が如く鬼を次々と切り裂いていく。

一騎当千、天下無双……正にその言葉が似合うように隙や反撃を与えずに鬼をかした三好の兵を切り伏せる。

「雷閃胡蝶!!」

「随波斎流! 疾風烈風砕雷矢!!」

結菜は爆雷を発生させる雷の蝶を呼び出し、鞠は光速で放たれる無数の光弾、それぞ

れのお家流で鬼を倒していく。

流牙は牙狼剣だけでなく牙狼刀を魔法衣から取り出し、二刀流で鬼を切り裂いていくが一つの異変が起きる。

「刀が光っている……!?!」

小谷城の時と同じ、牙狼刀が不思議な光を帯び、鬼が流牙に引き寄せられるように近づいている。

「こつちに来ているか……それなら好都合だな!」

「阿呆!自分だけで戦おうとするな。流牙、自分を囮にして戦うなど阿呆のする事だ。お主はこの日の本の最後の切り札となる男だ!」

「だけど、鬼を引き寄せられるならそれを利用しない手はない!」

「ならば……余がお主を守る刃となり、盾となろう。余の思い人を守るために、余は全力を持って鬼を討つ。……見ている主様。お主の妻が真の力を!」

「何をするつもりだ?」

「一葉様?」

すると鞆が流牙と結菜の手を引き、一葉の後ろに下がらせた。

「下がってないと危ないの。一葉ちゃんは今から、足利のお家流を使おうとしているんだよ!」

「足利のお家流……?」

「うん。足利家お家流、三千世界なの!」

「三千世界……?」

きよんとする流牙と結菜の言葉に反応するかのように一葉は静かに語り始める。

「そう。須弥山の周りに四大州。その周りに九山八海。その上は色界、下は風輪までを一世界として、千で小千世界、その千で中千世界、更に千で大千世界」

一葉の周囲の空気が変わり、そこだけが別世界のような不思議な雰囲気を出していた。

「全てを称して三千代世界、通称・三千世界という。三千世界は果てもなく、この世にあるとも、しかしながら、ないとも言える。現であり、幻である。そんな三千世界より、足利の名を慕う力を集める。それが足利家お家流……見るも醜き鬼どもよ。足利將軍である余の力、存分に味あわせてやろう!」

不敵な笑みを浮かべた一葉がまるで舞のように宙に手を滑らせる。

「な、何だ……!?!」

そこに空間を突き破って突如現れたのは、本物なのかそれとも幻なのか……数十、数百にも見える数多の刀だった。

『おいおい、冗談だろ……?こいつは凄いな……』

ザルバのカバーを開けてその光景を見せると、ザルバは目をパチクリとさせて思わず感心してしまった。

「相手が相手だ。余のまだ知らぬ時より馳せ参じた、安綱、国綱とやら。両刀で存分に暴れてみせい」

そんな一葉の言葉を聞いて、宙に浮かぶ刀の中から特に二本がまるで意志を持つかのように一葉に懐き、嬉しそうに瞬く。

「足利の。流牙の敵を殲滅せよ。……いけ」

短く発した一葉の命令を受け、安綱、国綱と呼ばれた刀が先陣を切り、その後には続々とばかりに、数多の刀が宙より鬼に襲いかかった。

先ほどよりも更に増え、七十匹はいようかという鬼たちに襲いかかった刀たちが、一瞬にして鬼をナマス斬りにしてしまった。

「……ふむ。久しぶりに使ったが、少々腕が鈍ったか」

「あれで鈍ったの!？」

「顕現する刀の数が少なかったからな。……余の力が鈍った以外には考えられん」

『一葉のお嬢ちゃん。今の技、魔戒騎士が魔界から鎧を召喚する時と同じ、異世界と繋いで刀を召喚したな? 一体どういう仕組みだ?』

「知らん。足利の棟梁にしか使えんお家流で、訓練したこともないのだからな」

「足利のお家を継ぐ時にね、魂に契約の呪が刻み込まれるんだって。そうすることで、三千世界と繋がれるって泰能が言ってたの！」

「泰能さんって本当に何者……？」

「私の知らぬ、見たことも聞いたことも、どこにあるかも分からぬ三千大千世界。そんなものと交信せんといかんのだ。この力を使うとかなり疲れる。身体が疲れるのではなく、頭というか……魂が疲れるのだ。だからこのお家流は一日に一度か二度が限度だな」

『三千大千世界か……俺様でも知らないそんなとんでもない世界があるとはな。ところでお嬢ちゃん、そのお家流で魔戒剣を召喚出来るのか？』

「魔戒剣……流牙の牙狼剣と同じホラーを切る剣だったな。試したことはないから分からないな。だが、多分出来ると思うぞ？ 召喚する武器は実在や空想を問わないからな」

「え……？ 本当に……？」

『マジか……本来なら女が使えない魔戒剣を召喚して操るとか規格外すぎるぞ……』

「本当に凄い……私もあまり他家のお家流には詳しくないけど、ここまで凄いのは初めて見たわ……」

結菜の雷閃胡蝶も充分凄い力を持っているが、流石は將軍家のお家流……三千世界は人知を超えるほどの力を持っていた。

三千世界で鬼の数は減ったが、まだまだ鬼がぞろぞろと現れる中、流牙は一葉の三千世界にちよつとした対抗心が芽生えた。

「一葉に負けてられないな……結菜！・連携技、やるぞ！」

「その言葉、待っていたわ！」

流牙は牙狼刀を地面に突き刺し、牙狼剣で円を描いてガ口の鎧を召喚し、その身に纏うと結菜は雷閃胡蝶を流牙の周囲に展開した。

雷閃胡蝶は結菜が敵と判断したものに近づくと爆発するので味方である流牙の近くにおいても爆発しない。

流牙は牙狼剣を構えると、精神を集中させて気合いを入れる声を発する。

「はああああっ……!!」

すると、ガ口の金色が点滅するように輝きが徐々に増すと、雷の蝶がガ口の鎧の中に入っていく。

「はああああ……はあっ!!」

そして、ガ口が膨大な雷をその身に纏い、闇夜を裂く雷光となった。

「鎧が雷を纏った!？」

「ピカピカで綺麗なの！」

「これが私と流牙の連携技。ガ口の鎧に私の雷閃胡蝶を取り込ませ、膨大な雷を宿す

……その名は『閃迅雷装』!!」

魔導火を纏う烈火炎装からヒントを得て結菜が自分の雷閃胡蝶を纏う事は出来ないかと流牙に提案した。

烈火炎装の要領でなんとかなるかもしれないと思った流牙は観音寺城の近くの人のいない山で試したところ、何回かの失敗を重ねて完成することができた。

攻撃力と防御力を大幅に増す烈火炎装とは違い、閃迅雷装は雷の特性が反映される。流牙は地を蹴り、走った後に光の軌跡を残しながら一瞬で鬼の間合いに入り、目にも留まらぬスピードで牙狼剣を振るう。

鬼を切り裂き、雷が爆せて熱と電撃の爆発を起こす。

目にも留まらぬ速力と敵を仕留める爆発力……それが閃迅雷装のもたらす効果である。

「結菜!牙狼剣に雷閃胡蝶を!」

「ええ!!」

今度は雷閃胡蝶を牙狼剣に宿し、白と黒の刃が雷光の輝きである金色へと彩る。

「うおおおおおっ!!!」

「決めなさい!『天雷狼牙』!!」

「はあっ!!!」

振り下ろした牙狼劍の刃から雷の力が解き放たれ、大きな狼の姿を模した雷の斬撃が放たれる。

地を駆ける狼の雷撃は鬼の大軍の体を焼き切ると同時に爆発して灰や肉片も残さずに消滅させた。

「灰も残さずに焼き切るとは凄まじい威力じゃな……」

「凄いの！流牙と結菜の連携技！」

「私の雷閃胡蝶だけじゃここまでの威力にはならない。人々の想いを力に変えるガ口の鎧と牙狼劍があるからこそ実現出来たのよ」

流牙はガ口の鎧を解除し、一息いれる間も無く牙狼劍を構え直す。

一葉の三千世界と結菜との連携技である閃迅雷装でかなりの数を減らしたが、それでもまだまだ鬼の襲来は終わらない。

「ご主人様！」

「小波、どうした!?!」

（北門に鬼の姿を発見しました。数、五百です）

（分かった、引き続き警戒を！）

（承知！）

「詩乃！」

(はっ！聞こえておりました。長柄上手を二十人、弓を十人、北門に移動させます。それらにも何人か派遣しましょう)

(ありがとう！)

(いえ、これだけしか割けず、申し訳ない限り。北門を頼みます。そして……どうかご無事で……！)

(心配するな、俺は死なないからさ！)

小波と詩乃と話を終えると一葉たちに視線を向ける。

「みんな、北門に行くよ！結菜、恥ずかしいかもしれないけど我慢してね！鞠、俺の背中に乗って！」

流牙は結菜をお姫様抱っこで持ち上げ、鞠は流牙の背中に乗る。

「え、えつと……重くないかな？」

「むしろ軽い方だよ！一葉、行こう！」

「行こうなの！」

流牙は前に結菜、後ろに雛がいるにも関わらず相変わらず風よりも早く走って北門へと急いだ。

「……二人分の女子を持って背負って、よくもまあ、あんなに早く走れるものだな。流牙の体の造りはどうなつとるのだ？」

幼い鞠ならともかく、結菜を抱っこして早く走れるのは成人男性でもキツイ。

それなのに一葉が走つてようやく追いつけるぐらいのスピードで走れる流牙の体の造りに疑問を持つのは当然だった。

「それにしても……結菜と鞠め、流牙にあんなにも密着するとは……この戦いが終わったら今度は余の番だからな」

流牙に惹かれつつある一葉の心には嫉妬心が芽生えていた。

少しでも流牙に近づきたいという乙女心が一葉を年相応の可愛らしい女の子にしていくのだった。

『闇 ～Dark～』

二条館の北門に現れた五百の鬼。

その鬼の軍勢に北門を警備していた流牙隊の兵と足輕達は恐れていた。

「俺の仲間……手を出すなあああああつ!!」

流牙達が駆けつけ、一番近くにあった鬼を斬る。

「鬼は俺と一葉と鞠で三方向に攻める。その後ろに五人ずつ付いて来い！結菜は雷閃胡蝶で援護を頼む！」

「では再び鬼狩りに興じようかの」

「鞠も頑張っちゃおうの！」

「ここを食い止めなくちゃね！」

流牙達が加勢しに来たことで兵士達の士気が高まり、気合の入った雄叫びと共に鬼を退治していく。

しかし、数の違いは圧倒的。

そんな圧倒的な差を流牙達は士気の高さでカバーしていく。

全滅するかもしれない悪夢が兵士達の間を過るが、それを振り払うのは流牙の言葉

だった。

「守りし者は最後の最後まで可能性がある限り、諦めることなく戦い続けることだ！俺はまだ戦える！お前達もまだ戦えるぞ！」

流牙の言葉は兵士達の心に火を灯し続ける。

そんな流牙の姿に一葉は一瞬だけ見惚れて微笑み、すぐに真剣な表情をして鬼と戦う。

そして、流牙が牙狼剣と牙狼刀で次々と鬼を切っていく中、突如一匹の鬼が牙狼刀の一閃を弾き飛ばした。

「何!?!」

『ふむ?この刀が例のものか。なかなかどうして。面白い匂いになっておる。だが……!カツカツカツ!小童の鈍刀に斬られるほど、この釣竿斎、まだもうろくはしておらんわ』

「鬼が喋った……?」

それは他の鬼と比べて上質な鎧を着ており、纏うオーラも桁違いの赤い鬼だった。

『鬼……鬼か。確かに見た目は鬼となったが、人の皮を被っていた頃より、甚だ気分は爽快よ。この釣竿斎宗渭に逆らいし、小童公方の頸を頂きに参ってやったのだ。有り難く思え』

釣竿斎……それは三好三人衆の一人、三好政康だった。

喋る鬼とは即ち中級以上の力を持った鬼を意味していた。

「貴様が……三好三人衆の一人か!!」

『いかにも。さあ義輝よ。その頸を寄越せ。貴様の頸と胴、引きちぎって、公方の生き血を啜ってやろうぞ』

釣竿斎は公方が狙いで不気味な舌で唇を舐めていた。

「余の血を啜ると?……下賤で穢れた貴様ならば、腹を下すことになるぞ?」

『下してみたいたいものよな。高貴なる者の血を浴びるほど飲んで!』

「……口が臭いな。去ね、下郎」

『ガハハハッ!この姿に恐れをなしたか、小娘が!剣豪將軍などお持て囃されておつても、所詮は小娘。せいぜい恐怖に震えておればー』

「黙れ」

ヒュン!グサツ!!

『グオツ!』

釣竿斎の言葉を遮るために流牙は牙狼剣の鞘の仕込み刃を飛ばして体に突き刺した。

「それ以上……その穢れた言葉で一葉を侮辱するな」

流牙は一葉の庇うように前に立ち、怒気を放ちながら釣竿斎を睨みつけていた。

「流牙……」

「一葉、ここは俺に任せてくれないか？」

「しかし……これは余に売られた喧嘩じゃぞ？」

「白百合と約束したからさ。三好の鬼は俺が斬るつて。それに……可愛い奥さんを狙う悪漢から守るのは夫の役目だろ？」

流牙は顔だけ振り向いて一葉に笑顔を見せながらウインクをすると、キュンと胸がときめいた一葉は顔を赤く染めて頷くしかなかった。

「……仕方ない。ここは夫殿に任せるとしよう。あの穢らわしい鬼から妻である余を守ってくれ」

「ああ。夫のかわつこいい姿をその目に焼き付けてくれ」

一葉は結菜と鞠の元へ下がり、流牙は静かに釣竿斎の元へ向かい牙狼剣を構える。

『我を斬るだど？ そうか……お前が噂の天人、そして……金色の天狼か』

「貴様……どうして鬼の魔葉に手を出した？ もう人間には戻れないんだぞ？」

『決まっておる！ 絶大な力が手に入るからだ！ 丸葉を一つ飲めば誰にも負けぬ強靱な力を手に入る！ 人からこの異形の姿になってしまったが、そんなことは些細なことだ！ この力で公方の生き血を啜つてより高みに上つてくれるわ!!』

既に人としての心や尊厳を失っている釣竿斎に流牙は怒気を静めて呟いた。

「そうか……貴様はやはり人間の心を失っているんだな」

近くにいた鬼を無言で切り裂いていく。

「哀れだな。闇の力に魅入られ、そして……闇の力に振り回されているその様は哀れで無様としか言いようがない」

『何だと……？ 我らが哀れで無様だと!? この力はこの国を支配する絶対的な力だ! この力で日の本を我が物とするのだ!!』

鬼の力を慢心している釣竿斎に流牙は牙狼剣の切っ先を向けた。

「力に溺れ、人の尊厳を捨て、鬼に堕ちた貴様の陰我……この俺が断ち切る!!」

魔戒騎士として、守りし者として、そして……黄金騎士として流牙は自ら鬼となった釣竿斎の陰我を断ち切る宣告をする。

『ふざけるな! 貴様の小さな力に比べたら我らの闇の力は最強だ!!』

「だったら見せてやる……お前たちの知らない、光と共にある俺だけの闇の力を!」

流牙は牙狼剣で頭上に円を描き、再び魔界からガ口の鎧を召喚してその身に纏う。

大剣となった牙狼剣から不気味な黒い霧が現れ、それがガ口の鎧を包み込むように広がる。

すると、近くにいた鬼が隙ありと言わんばかりに無謀にも流牙に襲いかかった。

流牙は落ち着きながらカウンターの拳を鬼に喰らわせて殴り飛ばし、金色の輝きを放

つガ口の鎧が黒い霧を？み込み、その輝きを静めた。

徐々に金色の輝きが無くなり、最後には頭部の狼の兜、そして胸部と腕部の鎧以外……全ての金色の鎧が漆黒に染まる。

それは闇を照らす金色の光が相反する漆黒の闇を纏う驚くべき姿となった。

「ガ口が闇を纏っただと……？」

「キラキラしていた鎧が真つ黒なの……」

「まさかこれが流牙が前に言っていた、もう一つの力……？」

一葉達は流牙が見せてきた金色の輝きを放つガ口が漆黒の闇を纏う姿になり、呆然としていた。

それは歴代の黄金騎士でも成しえなかった流牙だけの奇跡の力。

心の闇を受け入れ、闇を纏う希望の光。

その名は『牙狼・闇』。

『ば、馬鹿な！それはこの身に宿る鬼と同じ闇の力！闇を纏っていて、何故人でいられる!?!何故心が壊れない!?!』

闇の力を纏うガ口の姿に鬼は目を疑い、驚愕して声が震える。

鬼の力とガ口の纏う闇の力……性質は異なるがどちらも悪しき力であることには変わりない。

しかし、闇の力を纏いながらも心は正常で肉体は人間という事に釣竿齋は信じられないと言った様子だった。

「俺は闇の中で知り、受け入れた。弱さを含めて、俺自身である」と！

ラダンを巡る戦いの中で闇に堕ち、ホラーとなった魔戒法師・アミリの罠により流牙は魔鏡の中に閉じ込められた。

そこに流牙がかつて自分が切った友……羅号にも似た姿をした闇の魔獣と戦い、絶望に追いやられて心が折れかけた。

しかし、魔鏡の中に届いた莉杏の声に心の光を取り戻し、己の弱さを受け入れ、心の強さを取り戻した。

流牙の決意を汲み取り、闇の魔獣は自らの闇の力を授けた。

それにより本来なら光と相反する存在である闇の力を手に入れ、操ることが出来るようになった。

それが漆黒の闇を纏いし希望……『牙狼・闇』。

「人の心には光がある。『希望』という強い心だ！心の闇はその光で、自分を思ってくれ
る誰かの光で、打ち消す事ができる!!」

『そんなちっぽけな光で闇を操ることが出来ただと?！』

「ちっぽけじゃない！人は己の弱さを受け入れる事で強くなれる……人には、無限の可

能性があるんだ。お前たちは自分の弱さと可能性を否定して鬼の力を頼った。そんな奴らに俺たちを決して滅ぼすことは出来ない!!」

『くっ！所詮そんな力はまやかしに過ぎん！懸かれ！公方の前にまずはあの男を八つ裂きにするのだ!!』

釣竿齋の命令に鬼達は一斉に流牙に襲い掛かる。

一葉達が加勢しようとしたが、ガロに宿った闇の力が背中から放出され、闇の粒子が固まっっていく。

「ふんっ！」

そして、流牙がジャンプすると牙狼の鎧に大きな漆黒の翼が出現し、鬼を吹き飛ばした。

『な、何いつ!?!』

「と、飛んだ!?!」

牙狼の鎧に本来は存在しない蝙蝠のような形をしたマントのような大きな漆黒の翼が現れ、流牙は宙に浮いた。

牙狼・闇はただ闇を纏っただけの姿ではない。

闇の力で闇を討ち、闇の力で生成された漆黒の翼で空を自由自在に飛ぶことができる。

月をバックに漆黒の翼を広げ、流牙はジンガに初めてこの力を披露した時と同じ台詞を言う。

「光に照らせぬ、闇などない!!!」

漆黒の翼を得て飛翔する事で天を翔ける鷹のように滑空して鬼の大群に飛び込む。

そして、徐々に上がるスピードに乗りながら牙狼剣で次々と鬼を切り裂く。

毒を以て毒を制するかの如く、闇の力を宿した牙狼剣は同じ闇の存在である鬼にも絶大な威力を發揮している。

あつという間に数百の大量の鬼を討滅し、呆然としている釣竿斎の間合いに入ると、流牙の牙狼剣と釣竿斎の鬼の爪が激しく激突して火花が散る。

「はあっ!!!」

そして、鬼の爪を切り裂き、武器を失った釣竿斎の胸に流牙は牙狼剣を突き刺した。

『な、何故だ……それほどの力がありながら、何故人間を守ろうとする……!?!』

何故人間を守るのか……その問いの答えは守りし者である流牙は既に持っていた。

「人間には守るに値する『光』があるからだ!」

流牙は牙狼剣を釣竿斎から勢いよく引き抜き、釣竿斎の胸から大量の血が流れ出し、その体が消滅していく。

『貴様は……貴様は一体、何者なのだ!?!』

絶命寸前の釣竿齋が最後に投げかけたその問いに流牙は古の時代から受け継がれてきた『その名』を宣言した。

「我が名は牙狼!!黄金騎士だ!!!」

希望の名を宣言し、牙狼剣を鞘に収め、鐸鳴りを響かせた。

威風堂々にして神々しい黄金に輝く天狼の姿を目にした釣竿齋はそれを最後に爆散し、消滅した。

そして、ガロの鎧を解いて一葉達の元に戻ると闇を纏った者とは思えない、いつもの……みんなが大好きな流牙の優しい笑顔を見せる。

「みんな、ただいま」

「流牙よ、あれがお主の隠し玉か？ 凄いいではないか！」

「凄かったの！ ビューン！ って飛んで、まるで鳥さんみたいだった！」

「凄かったけど、まさかガロの鎧が漆黒に染まるとは予想外だわ。でも……流牙らしいわね。己の弱さを知り、力に溺れることなく闇を操るなんて」

一葉達は闇を纏い、空を翔ける牙狼・闇に興奮しながら流牙に駆け寄る。

「この力を使える直前は絶望しかけて、かなり危なかったけどね。それよりも、ここの鬼は片付けた。他の場所に出た鬼を片付けよう！」

「うむ！」

「うん！」

「ええ！」

三好の鬼の襲撃を幾度も防いできた流牙達。

二条館攻防戦はいよいよ最終局面に突入する。

『勝　　〕Victory〕』

釣竿齋を討滅した流牙は北門の鬼をも全て討滅し、一旦二条館に戻って中に侵入してきた鬼を倒していく。

すると、鬼達は少しずつ後退していった。

「態勢を整えるためか……?」

「兵法の定石だな。立て直した後、再度、攻撃を開始するということだが……」

「きつとそうなると思うの……」

「でもこのままじゃまずいわ。みんな疲れているし、兵力も足りないから……」

「でも考えてもあまり良い案は浮かばないだろう。俺が前に出て鬼達を抑える……手伝ってくれるか?」

「当たり前だ。流牙にだけ辛い思いはさせぬ」

「鞠も頑張るの!」

「私もまだ雷閃胡蝶を出せるわ。久遠達が来るまでもうひと踏ん張りよ!」

「ありがとう。よし……やってやろうじゃないか!!守りし者の誇りを見せてやろう!!」

流牙の気合の叫びに呼応するように、二条の夜空に八百匹の鬼の猛り切った咆哮が木

霊した……その時。

「てえ……つ!!」

「てえ……つ!!」

どこからともなく聞こえてきた鉄砲の音と同時に、鬼達が次々と倒れ伏していく。

「鉄砲!? 二方向からだ!」

「どこからだっ!」

「ご主人様。正体不明の集団が乱入し、鬼の横腹に向けた一斉射撃をしたようです」

小波が瞬時にやってきて情報を伝えてきた。

久遠達とは別の二つの軍勢が鉄砲で鬼を討伐していた。

そして、双葉の護衛をしていた幽がエーリカと交代して一葉の元にやってきた。

一つの軍勢は度々幕府に献上品を届けていた黒田官兵衛と言う者で、もう一つの鉄砲隊の軍勢は八咫鳥隊と呼ばれる幼女で構成された鉄砲の傭兵部隊で足利家に雇われている。

「おーい幽さん! 八咫鳥隊到着だよ! へへ、公方様の危機に駆け付けたんだから、お給料は弾んでくれるよね! ね! ね! ね!」

「雀か。やれやれ、相変わらずやかましいことで……」

「……鳥よ。よく来た。これからと余を守れ」

「……（コクツ）」

八咫鳥隊の隊長と副隊長の姉妹、鳥と雀がやって来た。

「……………!?!」

すると言葉を発していない隊長の鳥は流牙を見て驚き、少したじろいだ。

「……もしかして、二条館で久遠……織田信長を狙撃しようとしたのは君?」

流牙は初めて二条館に来た時、久遠を狙った狙撃手に向けて牙狼剣を構えて怒声を放った。

まさかこんな小さな女の子だとは思ってもよらず流牙も悪いことをしたなど少し反省する。

「話は後じゃ!幽よ!」

「はっ。相方仕る」

目を合わせ、同じタイミングでニヤリと笑った二人が鬼に向かってゆっくりと歩き出し、二人同時に地面を蹴った。

「おっ?」

トップスピードで駆け出した二人が鬼の集団へと突入する。

「へー。二人は主従の関係だけど相棒みたいな関係でもあるんだな。俺たちも行こう。

結菜! 鞠! 小波!

「ええー！」

「うんなのー！」

「はっー！」

流牙も結菜と鞠を連れて行こうとしたその時だった。

「そこにおわしまするは、織田上総介様が御夫君、道外流牙様とお見受け致します！」

凜々しく現れたのは柔らかな雰囲気少女だった。

「うおっ!?!えっ!?!君誰?!

行こうと思つた矢先に出鼻をくじかれ、初めて見る子に驚く流牙だった。

「我が名は小寺官兵衛孝高、通称雫！播州御着より、將軍家並びに織田家への援軍に馳せ

参じ候ー！」

「詳しい話は後でするとして、まずは言わせてくれ。官兵衛ちゃん、ありがとうー！」

「い、いえ！とんでもありません！」

「俺たちは前線に行く。兵のことは……おーい、詩乃！後は頼んだ！小波、来てくれるか

？」

「もちろんです！」

ひよ子と走ってきた詩乃に黒田官兵衛……雫の事を頼んで流牙は結菜と鞠と小波を連れて一葉達の後を追う。

門を抜けると前後左右から鳴り響く鉄砲の音。

その音が夜空に響くたびに鬼がバダバタと倒れ伏していく。

流牙達は鉄砲が飛び交う前線で舞うように鬼を狩っていく。

「凄いな……莉杏の魔戒銃を思い出すよ」

「莉杏は流牙の相棒だったな？銃を使うのか？」

「と言つても火縄銃みたいに細長いのじゃなくて掌の大ききぐらいの小型銃だけだね。騎士と法師の連携技を練習してホラーを倒していたよ！」

鉄砲の音に莉杏とのホラー狩りの事を思い出しながら鬼狩りをしていくと、流牙の耳に鉄砲の音や鬼の断末魔とは違う『音』が聞こえてきた。

「……この音は……」

「気づいたか。流石は流牙、噂通りの耳の良さじやな」

「うん！鞠も聞こえてきたの！」

「それがしも、それなりには」

「この音……まさか！」

結菜の顔が笑顔に輝き、その音は遠くから鳴り響いていた。

「地を駆ける虎となり、空を見上げよ、山を見よ。夜空を駆ける龍となり、星に、風に聞いてみよ。人の身として天に、地に。人の叫びを受け止めよ」

一葉は雅な言葉でこれから訪れるものを表していた。

「多くの刀を携えて、この日の本で鬼を斬る。第六天魔の波旬となりし、己の力の足音が！」

それは待ち望んでいた軍勢。

天下布武を目指し、鬼を討滅し、平和な世を作るため奔走する乙女。

その影に流牙と結菜は名を叫んだ。

「久遠!!!」

馬に跨り、愛刀を掲げ、織田の勇者達を引き連れた大将……久遠が鬼を睨みつけながら叫んだ。

「武士の衣をかなぐり捨てて、鬼と変じた外道どもが、一体誰に触れようとしているのだ！三好衆うう！そやつらは我が夫と妻であるぞ！貴様ら外道の小汚い手で私の愛しき者達に触れること、我は許した覚えなし！掛かれ柴田よ！鬼五郎左よ！」

「応っ！」

壬月と麦穂が駆け、

「攻めの三左よ！槍の小夜叉よ！」

「応っ！」

桐琴と小夜叉が駆け、

「我が頼もしき母衣衆どもよ！」

「応！」

「はい！」

「おー！」

和奏と犬子と雛が駆ける。

「蹂躪せよ！」

織田軍による鬼と化した三好衆への鬼狩りが始まる。

「行くぞクソガキ！」

「応よ、母あ！」

「織田の家中が一番槍はあ！」

「悪名高き、森一家あ！」

「逆らう輩の返り血浴びてえ！」

「槍を朱色に飾り立てーん！」

「喧嘩上等、鬼上等！鬼一家あ、腐れ三好に目にももの見せてやんぞお！」

「ひゃつはーっ！皆殺しだぜえええーっ！」

相変わらぬ森一家の危ない口上が二条の空に木霊し、血と汗と火薬の匂いに満ちた戦場に、森鶴の丸の旗が翻る。

「うわー……すごい！」

「……なんですかアレは」

「アレ扱いだよ。気持ちには分かるけど」

桐琴と小夜叉の暴れっぷりに苦笑を浮かべる。

久遠たちの救援に既に疲れている流牙の体に力が湧いてきて牙狼剣と牙狼刀を構え直しながら結菜に頼み事をする。

「ここは派手に暴れてやるか。結菜、もう一度雷閃胡蝶を頼む！」

「良いけど、流牙は大丈夫なの？随分無理して戦っていない？」

「魔戒騎士は無理をしてなんぼだよ！久遠達が戦っているんだ。男としてカッコ良いところを見せたいんだよ！」

「全く見栄っ張りね。良いわ、私の全力を出すから行つてきなさい！」

結菜は目を閉じて手を組んで祈るように精神を集中させる。

「ああ！」

流牙は牙狼剣で頭上に円を描き、本日四度目のガ口の鎧を召喚する。

魔戒騎士は基本的に一夜でそう何度も鎧を召喚することは殆どない。

あるとしたらホラーが普通では考えられないくらい大量にいる場合、もしくは強大な力を持つ伝説のホラーとの戦いの時である。

流牙が纏ったガ口の鎧はいつもと同じ金色に輝く牙狼・翔だが、牙狼剣を掲げると再び闇の力が溢れ出して一瞬で漆黒の闇を纏う光、牙狼・闇となる。

背中にマントの漆黒の翼を生成すると、それに合わせて精神を集中させていた結菜が有りつ丈の力を込めて雷閃胡蝶を放った。

「流牙！受け取って!!」

「おうっ!!」

流牙は漆黒の翼で舞い上がるように空高く飛ぶ。

流牙の……ガ口の空を飛ぶ姿を見て久遠達が驚く中、流牙は更に驚くべき事を行う。

雷の蝶達が流牙を追いかけて静かに舞い上がる中、流牙は気合の咆哮を上げる。

「はああああ……はあっ!!!」

ガ口の鎧から翡翠の炎……魔導火が灯され、烈火炎装を発動させる。

そこに上がって来た雷の蝶達を流牙の思いに反応し、流牙の全身を包み込むように近づいた。

そして、雷の蝶がガ口の鎧の中に入り込み、閃迅雷装を発動させた。

烈火炎装と閃迅雷装……ガ口の鎧にそれぞれ性質や能力が異なる魔界の炎と鬼蝶の雷……二つの力が入り込んだ。

二つの性質が異なる力が混ざり合うことで暴発するか、拒絶反応が起きてもおかしく

はなかった。

しかし、流牙と結菜の思い……そしてこの場にいる大勢の人達の思いがガ口の鎧に力を与え、新たな力を呼び起こす。

「うおおおおおおおっ!!!」

ガ口の鎧が炎と雷を取り込み、一つに合わせて暴発も拒絶も起こらない新たな力を作り出した。

炎と雷を同時に纏い、攻撃力と防御力、速力と爆発力……爆発的な四つの力を持つガ口の新たな力。

その名は……『雷炎天装』。

炎と雷を鎧に纏いながら流牙は久遠達に触発されて自分も口上を叫んだ。

「闇を切り裂き、人々の夢と未来を守りし者！我が名は道外流牙!!黄金騎士ガ口の称号を受け継ぐ者!!!」

そして流牙は漆黒の翼を羽ばたかせながら鬼の軍勢に飛び込み、炎と雷を纏わせた牙狼剣と牙狼刀で切り裂いていく。

「美しい……」

炎と雷が調和して纏ったその姿は夜の闇の中で煌びやかに、色鮮やかに輝いており、久遠はその美しき姿に見惚れてしまう。

闇を焼き尽くす雷炎の鎧に鬼は少し触れるだけで一気に体が燃やされ、蹂躪されている鬼達に更なる恐怖を与える。

戦況は流牙のお陰で五分五分以上の戦いとなった。

あともう一押しがあれば確実に鬼の軍勢を倒すことができる。

そう詩乃達が話していると一葉が名乗りを上げた。

「よし……もう一押し。余のお家流を使おう。疲れておるからそこまでの威力は出んが、流牙の助けになろう」

一葉は流牙の為にもう一度お家流を使う決意をし、優雅な動作で刀を抜いた。

三千大千世界と交信し、力を貸してくれる刀を呼ぼうとしたその時だった。

「これは……!?!」

一葉は今夜の一度目に使った時と同じく数多の刀を呼び出そうとしたが、まるで割り込んだかのように一葉の前に一つの剣が召喚された。

それは人が扱うには到底不可能なあまりにも巨大な剣で刃には波のような紋様が刻まれていた。

それはただの剣ではなく魔獣を狩るソウルメタルの剣、魔戒剣だった。

しかもそれは流牙がかつて敵として対峙した者の魔戒剣……『号殺剣』だった。

「夢を追い求めし者の刃……号殺剣!!流牙の……黄金騎士の力となり、鬼を滅せよ!!!」

号殺剣は鬼達に向けて飛び、まるでその剣の持ち主が操るように回転切りや勢いよく振り下ろして鬼を討滅していく。

号殺剣を召喚した一葉の目には一瞬、鈍色の鋼の鎧に全身を包み込んだ騎士の姿が映った。

遙か昔、ホラーのいない世界を夢見た魔戒法師・双竜法師が作り出した人型魔導具……阿号。

阿号は長き眠りから目覚め、リユメの法力と古のホラー・デゴルを利用することでホラーのいない世界を実現するため……人類の消滅を目論んでいた。

流牙と莉杏と戦い、言葉を交わしたその時にデゴルの復活の贄としてその肉体を取り込まれてしまう。

流牙は阿号と双竜法師の夢、莉杏の約束を果たす決意を宣言した。

心を取り戻した阿号は最後の力で号殺剣を流牙に託し、その力でデゴルを討滅した。

デゴルを討滅すると同時に阿号は眠りにつき、号殺剣も消滅した。

しかし、一葉の三千世界で号殺剣が蘇り、再び流牙の力となる為……守りし者として馳せ参じた。

「あれは！阿号の剣!?!」

『驚いたな、本当に魔戒剣を召喚しちゃった』

号殺剣が鬼を大量にバツバツサと切り裂いていき、その光景に流牙は目を疑った。
「流牙！号殺剣を使い！」

号殺剣は流牙の近くまで来ると地面に突き刺さり、小さな輝きを放ちながらこれを使えと流牙に訴えていた。

流牙は牙狼剣と牙狼刀を地面に突き刺し、号殺剣の柄を握り締める。

「ぐっう！うおおおおおおおっ！！」

精神力で重さが変わるソウルメタル製の魔戒剣とはいえ、号殺剣は巨大な大剣、操るのは少々難しく全身の力を使いながら持ち上げる。

号殺剣から伝わる阿号の魂の欠片と声を流牙は耳にした。

『この世界で……我らの夢を叶えろ』

それはこの世界を魔獣のいない世界にしてくれと言う阿号の願いだった。

「行くぞ、阿号！！」

号殺剣に宿る阿号の魂を感じながら空高く飛び、雷炎天装の雷炎を全て号殺剣に纏わせた。

「はああああああああっ！！」

天高く掲げた号殺剣を振り下ろし、鬼の軍勢の中心に叩きつけた。

巨剣の衝撃波と雷炎の爆撃が鬼を一瞬で消滅させる。

その一撃はこの戦いを終える最後の輝きとなり、流牙はガロの鎧を解除して魔界に送還した。

流牙の体は闇の力と雷炎天装の使用で体中が汗びっしりよりで体力もかなり消耗していた。

息を切らしながら未だにこの世界に顕現している号殺剣に近づき、刃に触れた。

「阿号……この世界の鬼を必ず俺が全て斬る。そして、人々が平和に暮らす世界にしてみせる」

流牙の決意の言葉に満足したように号殺剣は霧のように静かに消えていった。

二条館を囲んでいた鬼は全て討滅され、夜空に白々とした光が広がっていた。

短かったようで、たまらなく長く苦しく感じた戦いがここによくやく終結した。

『迷』 Ambivalence』

二条館攻防戦を戦い切り、三好の鬼を殲滅し、一葉と双葉を守り切った流牙と久遠達。本来なら戦いの勝利を祝つて宴の一つでも行はずだが……流牙は浮かない表情をし、二条館を出て京の外れの野原で横たわっていた。

「はあ……どうしたもんかなあ……」

夜空の星を眺めながら流牙は大きなため息を吐いた。

その理由は三好の鬼を殲滅し、久遠と再会したところから始まる。

「皆に一つ、伝えておきたいことがある。此度、鬼と三好衆の叛乱を無事に鎮圧出来たのは、ひとえに皆の力があつたればこそだ。しかしこの先、鬼との戦いが続いていく中で、我の力も、皆の力も及ばない事態がきつとあるだろう。だが今、この日の本には、鬼という異形の者について詳しく知る者は少ない。比較的多くの情報を握っているのは、織田、浅井、松平の者だけなのだ。これは非常に危険なことだと我は考えている。なぜなら鬼を良く識る我らが負ければ、この日の本は、鬼との戦いに大きく遅れを取るようになるからだ。だから我は考えた。……そして決めたのだ」

それは久遠が考えた日の本を救う為の苦肉の策で唯一の道だった。

「我が夫、道外流牙を、私の夫というだけでなく、公方の夫として……いや。この日の本に居る、鬼との戦いを決意した者達全ての良人とすることを、我はここに宣言する！」
それは足利幕府公認のお触れだった。

つまり、流牙は鬼と戦うと決めた者、敷いては各地の有力者を嫁にするという事だ。鬼と戦うための立場はともかく、男として沢山の素敵な女性を妻に出来るのは素晴らしい事かもしれない……しかし、流牙はそれを快く了承しなかった。

相談せずに勝手に決めたことは些細な問題ではない。

一番の大きな問題は流牙が魔戒騎士であることだ。

誰もが既に知っているが、流牙はこの世界の人間ではない。

元の世界に帰り、魔戒騎士として人々を守り、ホラーを討滅する使命を背負っている。まだ元の世界に変える方法は見つかってはいないが、いつかは帰らなければならぬ。

しかし、久遠が決めた事は流牙の心を強く縛り付けてしまう。

流牙は優しい心の持ち主であるが故に大切な人が増えすぎてしまうと、仮に帰る時になつたら流牙だけでなく久遠達も辛くなってしまう。

見方を変えれば流牙がこの世界に残り続ける為の理由の外堀を作ったようなものがある。

その事を久遠は重々分かっていたはず……しかし、日本の武士を一つにするには流牙の存在は欠かせない。

「俺は……みんなとずっと一緒にはいられない……その事を分かっているのか!?俺は……こんな事のために君の側にいたわけじゃない!!」

「っ!？」

流牙も久遠の気持ちを理解はしたが、その事を強く当たってしまった。

責められる事を覚悟していた久遠だが、実際に流牙に言われて余程堪えたのか、その場に崩れてしまう。

そんな久遠を見ていられなくなり、そして頭を冷やすために流牙は逃げるように二条館を後にした。

その場にいた者達は流牙を引きとめようとしたが、流牙は声を荒げて叫んだ。

「来るな!頼むから一人にしてくれ……戦いが終わってこんな空気にして悪いとは思ってる。だけど、俺は魔戒騎士だ。この世界にずっとはいられない。いつか必ず別れの時が来る……それだけは分かってくれ」

改めて流牙は自分が魔戒騎士であると皆に伝えて二条館を出て行った。

誰もいない静かな野原で横たわり、両目を閉じて右腕を乗せながらぐちゃぐちゃに混乱している頭の中を少しずつ整理していく。

久遠の考えは理解出来る、流牙という希望の旗の元に有力者を集わせ、皆で協力して鬼と戦う。

理解は出来るのだがやはり納得するのは難しい。

仮にもし流牙が魔戒騎士ではない何のしがらみも持たない普通の人間ならここまで悩む事はなかっただろう。

魔戒騎士はホラーを狩る者……特に流牙は黄金騎士ガ口の称号を受け継いでいる者、全ての人間と魔戒騎士の希望になるべき存在だ。

大切な人の約束と命と共に蘇らせたガ口の鎧……流牙は魔戒騎士として、守りし者としての道を外れる事は決してない。

しかし、この世界で流牙は大切な者が出来すぎてしまった。

紡がれた掛け替えの無い縁が……絆が流牙を深く苦しめているのだ。

「ああもう……こんな事になるなんて!!どうしたらいいんだよ!!!」

流石にこんな事態になるとは予想外で流牙もどう対処をしたらいいのか分からなくなっている。

そんな流牙の背後に一つの影が近づく。

「やれやれ、流石の黄金騎士殿もお困りのご様子じゃな」

「……君はさつきまで大量の鬼に狙われていた事を自覚してないの?」

「心配は無用じゃ。近くに幽達が控えておるからな」

その影は先ほどもで流牙と共に戦った一葉だった。

今は鎧を外しており、いつもの見慣れた服装で流牙の隣に座る。

「すまなかつたな……流牙。お主の気持ちを考えずにしてしまった」

「もう良いよ……はあ、元の世界に未練の無い男だったら楽だったんだけどな……」

「流牙以外の男が呼ばれるとしたらどんな男だろうな……」

「さあな。案外、凄い女誑しかもな」

「……流牙以上の女誑しだったらとても恐ろしいのだが」

「ちよつと、俺以上ってどういう事だよ？俺は女の子を誑した覚えは無いよ？」

「どの口が言っておる。実際に余はお主の言葉で何度も惚れてしまったのだが……」

一葉は頬を赤く染めながら照れ臭そうに言う。

実際に先程の二条館攻防戦での流牙の言葉に一葉の心は何度もときめいている。

「そ、そんな馬鹿な……」

「自覚なしとはまた面倒だの……その言葉で向こうの世界でどれだけの女子を誑した？」

「……そういう事なら多分、莉杏だけだよ。莉杏とは一緒に旅をしているし、魔戒騎士の仕事上、あまり女の子と会う機会は無いらねえ」

「むっ……やはり余らの最大の敵は莉杏か……」

流牙にとつて莉杏は掛け替えの無い存在だと改めて思い知った一葉はため息をついた。

一葉との話で少し心が安らいだ流牙は久遠の事を聞いた。

「久遠は……どうしてる？」

「結菜が見ておる。お主に責められる事を覚悟していたがやはり応えたようだな」

「そうか……」

「……流牙よ、久遠はお主の事を心の底から愛しておる。だから何度も悩んで苦しんだ。その末に日の本を救うための手段として考えたのだ」

「分かってる！分かってるけど……俺は……」

流牙は心が苦しく、胸を強く手で押さえながら一葉に問うた。

「一葉は……嫌じゃ無いのか？こないつかは消えるような男の妻になって……」

「余は構わぬぞ。何ならお主と一緒に天の世界に行っても構わぬからな」

「……はあ!?何言ってるんだよ、将軍がいなくなったらこの国はどうするんだよ……」

「将軍職なら双葉に任せようと前々から思っていたのだ。それに……余は堅苦しいものや縛られるのは嫌いだから旅に出たかったのじゃ！」

「確かに……」

將軍らしからぬ自由すぎる性格故に常に自由を求めている一葉に流牙は思わず納得してしまつた。

「だから、もし流牙が天の国に帰るときが来たら余も一緒に連れて行つてくれ」

「あのね……まだ方法も見つかつてないのにそう簡単に了解出来るわけないだろ……」

「それもそうだな。まあ流牙が元の世界に帰る方法は何とかするとして……流牙よ、お主に皆の気持ちを伝える」

「皆の気持ち……?」

今、二条館にいる久遠達から流牙への気持ち……それを一葉が代わりに伝える。

「確かにお主はいつかは必ず元の世界に帰らなければならぬ……しかし、それでも皆はお主と一緒にいたいのだ」

「俺と一緒に……?」

「そう……ずっと一緒にいらなくても、思いが交差しなくても、たった一人の想い人……道外流牙の側にいたいのだ。それほどまでに皆はお主の事を慕い、想つておる。だから今はただ側にいれば良い」

「側にいるだけで……?それで良いのか?想いを伝えたり、体を交わしたりとかは……」
「女としてはそれは強く望むものだが、皆はお主の性格をよく知つておるからの。添い遂げるとしたらたった一人としかしないのだろ?」

「おっしやる通りです……」

「だからお主は今まで通り、魔戒騎士としての使命を果たせ。しかし、これだけは忘れるでないぞ。流牙の側にはいつも余らがおる。お主を思い、共に戦う乙女たちがな」

一葉の言葉を聞き、流牙は目を閉じて頭の中を整理した。

自分は何者なのか、何のためにこの世界にいるのか。

そして、気がつくとは側には結ばれた縁から生まれた大切な人たちがいる。

「俺は黄金騎士……魔獣の手から人々を守る。俺は一人じゃない、この世界で出会った大切な仲間達と共に全ての鬼を討滅する……それが俺の使命だ！」

「ふふつ、ようやく余らの愛しき騎士様となったの」

「一葉、ありがとう。お陰で少し吹っ切れたよ」

「大したことはしておらん。それに、余は流牙の妻だからな。夫が悩んでいる時に支えてやるのが妻の役目だろう？」

「そ、そうか……よし、早く久遠に謝らないとな。二条館へ帰ろう」

「ではここは夫婦らしく……」

一葉はニヤリと悪戯つ子の笑みを浮かべると流牙の左腕に抱きついた。

「か、一葉!?!何をするんだ!?!」

「良いではないか。夫婦なのだから妻が夫の腕に抱きつくくらい」

「いや、その、あ、当たってる！当たってるから！」

スタイル抜群の一葉の胸が服越しに流牙の左腕に当たっていた。

服越しでも分かるその柔らかさに暗闇でも分かるぐらいに流牙の顔が赤く染まっていた。

「ほう……なんだかんだでも流牙はやはり男じゃな。よし、久遠や結菜にも胸を当てると良いと伝えておこう」

「か、一葉!?君は俺をどうしたいんだ!?!」

「別にどうもせんぞ?だがまあ、ガ口と同じく流牙も狼になつてくれれば良いのだが……よし、流牙よ。明日の夜に余と双葉と一緒に風呂に入るぞ!まずは裸の付き合いだ!」

「どうしてそうなるの!?!頼むから勘弁してくれ!」

「ふはははは!覚悟するのじゃ、流牙よ!」

「うわあああああつ?!」

自由奔放にして大胆不敵な將軍・一葉が妻となり、悩まされる日々が始まる流牙だった。

その後、二条館に戻った流牙は久遠にちゃんと謝り、無事に仲直りをした。

そして、次の目的である越前への準備を進めるのだった。

☆

翌朝、流牙は戦いの疲れを癒すためにのんびりしていた。

本当は流牙隊の準備を手伝いたかったが流牙は二条館攻防戦で誰よりも戦い、一番の功労者である。

そんな流牙に久遠達に休めと言われ、仕方なく体と心を休めている。

昼寝をしたりギターを弾いたりしてゆったりと時間を過ごす。

ギターの音色に導かれるように初めてその音を耳にした一葉と双葉がやって来る。

「相変わらず流牙の音色は素晴らしいの」

「はい。通りがかって耳にした皆さん、うっとりとしていましたよ」

「ありがとう。後で新しい歌を聞かせるからね」

「うむ！楽しみにしているぞ！」

「楽しみです！」

自分が歌う歌をこれほどまでに楽しみにしてくれている二人に流牙も笑みを浮かべる。

双葉は流牙と一葉にお茶を淹れ、美味しいお茶に一息を入れると流牙はふとある事を思い出した。

「そうだ、一葉。昨日の戦いでよく魔戒剣を召喚出来たね」

「ああ。確か……号殺剣だったな。いや、最初は召喚するつもりは無かったのだがな」
「どういう事？」

「本当は一度目と同じく数多の刀を呼び出そうとしたのだが、号殺剣が割り込むように現れたのじゃ。しかし、まさかあれほどまでに巨大な剣だとは思わなかったぞ」

「号殺剣は魔戒騎士じゃなくて阿号だけの剣だからね」

「阿号……？流牙様のお知り合いですか？」

「ああ……」

双葉から阿号の事を聞かれ、流牙は空を見上げながら静かに答える。

「阿号は俺がいた世界よりも大昔に双竜法師と言う魔戒法師に作られた人型魔導具なんだ」

「作られた……？人型……？流牙よ、その阿号は人ではないのか？」

「阿号は見た目は人間なんだけど、その中身はえっと……絡繰で作られているんだ」

「か、絡繰ですか？」

「絡繰と言っても人のように頭で考えてちゃんと話せるんだ。阿号は俺たち魔戒騎士と同じくホラーを討滅するために作られた。だけど……深き眠りから目覚めた阿号は人間を滅ぼそうとしたんだ……」

「滅ぼす……!?何故じゃ、阿号は守りし者として人を守る存在じゃなかったのか!？」

号殺劍を召喚した一葉はその劍に込められた人々を守る強い意志を感じていた。

それなのに阿号が人間を滅ぼそうとしていたとは信じられなかった。

「阿号を作った双竜法師の夢……ホラーのいない世界をどうしたら実現出来るか阿号は何十年、何百年と眠りながらずっと考え続けた。考えた末に阿号は人間がいるからホラーは出現する、それなら人間を全て滅ぼせばいい……そう言う歪んだ考えを導いてしまったんだ」

「そんな……法師様はそう言う意味で夢を語ったわけではないはずなのに……」

「俺は莉杏とも同じ約束した。そして、阿号と対峙してお前は間違ってるって否定をして法師はどんな思いでお前に夢を語ったんだって何度も言葉を伝えたんだ。阿号は法師の事を思い出し、考えようとした矢先に阿号の体内にあった古の伝説のホラーに体を乗っ取られてしまったんだ」

「乗っ取られじゃと!?!」

「それじゃあ阿号さんは……」

「かつて最強の名を欲しいままに猛威を振るった伝説のホラー、デコル。大昔に阿号が退治した時に体の一部が体内に入っていて、阿号が再び目覚めるのをずっと待っていたんだ。俺はデコルの中にいる阿号に叫んだ。お前と法師の夢、ホラーのいない世界を俺が必ず果たすと……その時、デコルの中にいた阿号が最後の力を振り絞って号殺劍を俺

に託したんだ。そして、その号殺剣でデコルを討滅することができた。けれど、阿号と号殺剣は戦いの後に消滅してしまった……でもまさか一葉が召喚してくれるとは夢にも思わなかったよ」

「きつと……他の魔戒騎士や魔戒法師のいないこの世界で必死に戦っておるお主の力になりたく馳せ参じたのじゃろ」

「阿号さんはきつと流牙さんの想いが伝わってるはずですよ！」

「そうだな……俺たちの夢は果てしない道のりかも知れないけど、まずはこの世界を……この国に蔓延る鬼を全て討滅する。それが俺の使命でもあり、夢だからな」

まだこの国には果てしない数の鬼がいるだろう。

だけど流牙は一人じゃない。

共に戦うたくさんの仲間たちがいる。

流牙はお茶を口に含み、この世界から来て飲み慣れてきた苦味を味わいながら一時の平和を噛み締める。

☆

京から遠く離れた越後の国。

その国に只ならぬ雰囲気を持つ少女たちが話をしていた。

「御大将。織田信長が洛中に入り、公方を保護したとの報せが、軒猿より入って参りまし

た」

赤く長い髪をし、お淑やかな雰囲気で『誠』の文字が描かれた服と髪飾りをした女性がそう告げた。

「ふーん……。公方……。一葉様が織田と手を結んだって事かしら？」

「あり得る事ではありませんが……。一体、何のためにでございましょう？」

「さて……。尾張や美濃を落とした織田は、今、中央でも注目の勢力になってる。その辺りかもね。で、他に報せは？」

「はっ。軒猿曰く、二条館を襲撃したのは、三階菱に五つ釘抜きの定紋を纏った、異形の者だったとか」

「何それ？」

「異形の者って言えば、旅の雲水にちよこーつと聞いた事があるっす。何でも畿内から東海にかけて、人を食べる変な生き物がいるらしいっす」

語尾に『っす』を付けているのは露出度の高い服を着て、橙色の髪をした活発そうな少女である。

「人を食べるう？どんな生き物よ？」

「鬼だつて噂っす。人を喰らう鬼っす」

「鬼？鬼、ねえ……。ふふっ……。あははははははっ！」

「お、御大将！本当に二条館に鬼が出たのならば、これは笑い事で済まされることではっ
！」

「鬼、良いじゃない！最近、武田とも殺り合つてなかつたし、暇していたところだもん。
その鬼とやら、この目で確かめてやるわ。柘榴、付き合いなさい！」

「了解つすー！」

「秋子は私が城から居なくなつた事を伏せて、春日山を守つておきなさい」

「え、ええーっ!?!本気ですかつ!?!」

活発そうな少女は柘榴、お淑やかな女性は秋子。

秋子と柘榴が仕えている主人……その少女は綺麗な白髪をツインテールに纏め、空色
と白色を基調とした服装に身を包んでいた。

「本気も本気よ。……ああ、姉上がまた馬鹿をやるかもしれないから、そこだけは注意し
ておきなさいよっ。」

「は、はあ……」

「相変わらず貧乏くじつすねー、うちのおつかさんも」

「誰がおつかさんですか！とにかく、くれぐれも……くれぐれも危険な事はしないでく
ださいよ！御大将！長尾景虎様！」

越後の龍と言う異名を持ち、戦の天才にして越後・長尾家の当主……長尾景虎。

「分かつてるわよ！相変わらず秋子は心配性ね〜」

「あ、そう言えばおつかさん。鬼と言えどもう一つの噂……金色の天狼さんはどうすか？」

「金色の天狼？ああ、織田信長の夫、田楽狭間の天人で……」

「名は道外流牙。黄金に輝く狼の鎧を呼び出してその身に纏い、人とは戦わず鬼だけと戦う天人……二条館の前線で鬼を誰よりも多く倒したとの事です。それから……これは余りにも信じられないのですが、金色の鎧が漆黒に染まり、背中に翼が生えて鳥のように空を飛んだそうです……」

「はあ!?空を飛んだですって!?何よそれ！そんなお家流は聞いた事ないわよ!」

「いえ……その鎧がお家流かどうか怪しいですが、本当らしいです……後は炎と雷を鎧に纏ったり、何処からともなく現れた巨大な剣を持って大暴れして鬼を皆殺しにしたと……」

「ふーん……今まであまり見向きもしなかったけど、その天人に興味が出てきたわ。良いわ、その男を見定めてやりましょう」

鬼、そして全国にその名を轟かせている天人……流牙に興味を持つ景虎。

「柘榴は是非とも手合わせをしたいっす!」

「待ちなさい柘榴！私もやりたいわ!」

「はあ……全くこの二人は……」

戦いが好きな景虎と柘榴に呆れて溜息を吐く秋子だった。

この少女たちの興味から出た行動が後に流牙に新たな出会いを果たすのだった。

『嫁
（Bride）』

二条館の戦いを終え、越前への向かう準備をする中、二条館に滞在する流牙達。流牙はこれから激しさを増す鬼との戦いに向けてひよ子達に稽古をつけていた。魔法衣を纏い、身支度を整えるとザルバが流牙に話しかける。

『流牙、一つ頼み事がある』

「頼み？ 珍しいね、ザルバが頼み事なんて」

『まあな。簡単な事だ。少しの間、俺様を久遠のお嬢ちゃんに託してくれるか？』

「久遠に？」

『お嬢ちゃんと話したい事がある。あの歳で国の当主になったその経緯とか聞きたいからな』

「へえー、ザルバもそう言うのに興味あるんだ。分かった、じゃあみんなとの稽古が終わるまで久遠と話していて」

『ああ、頼んだぞ』

流牙は稽古が始まる前に久遠の元へ向かった。

久遠は部屋で一休みしており、茶を飲んでいた。

「久遠、ちよつといい？」

「おお、流牙か。構わぬぞ」

「ちよつとザルバが久遠と話がしたいんだって」

「ザルバが？ 珍しいな。我は構わぬぞ」

「ありがとう。それじゃ俺はひよ達の稽古をしているから後でな」

「ああ。しつかり頼むぞ」

流牙は久遠にザルバを渡して部屋を後にする。

早速久遠はザルバを自身の左手の中指にはめてカパーを開ける。

『…………お嬢ちゃん、悪いがすぐに結菜と一葉と詩乃のお嬢ちゃん達を呼んでくれるか？』

「…………何か重要な話のようだな」

ザルバの言葉でスツと目を鋭くする久遠。

『頭の回転が早くて助かる。流牙の事で話がある』

久遠に当主として聞きたい話があるのは実は嘘だった。

「分かった。すぐに呼ぼう。流牙には知らせない方が良いな？」

『そうしてくれ。流牙に下手に圧力を掛けたくないからな』

ザルバの頼みですぐに久遠は部屋に結菜と一葉と詩乃を呼んだ。

「どうしたの、ザルバ。あなたが私たちに話があるなんて」

「しかも流牙には秘密とは只ならぬ話のようじゃな」

「ですが、どうして我々だけに？」

『お前さん達がこの世界で流牙に一番近く、そして心を支えられる存在だからだ』

流牙の相棒であるザルバから認められ、嬉しく思う反面何を話すのか緊張する久遠達。

そして、ザルバの口からこれからの戦いで流牙に『起こりえる可能性』がある事柄を話し始める。

『お前さん達にこれから話す事は流牙……いや、全ての魔戒騎士が抱える大きな闇……禁断の力だ』

人知れず、人を守る為に闇を狩る魔戒騎士。

そんな彼らは多くの闇を抱えている。

そして、心の闇を乗り越え、闇を纏う流牙にもその禁断の力が眠っている……。

☆

一方、流牙は二条館の庭の一角でひよ子達を相手に稽古をしていた。

我流とはいえ魔獣との戦いの専門家である魔戒騎士である流牙の稽古を受ける事は鬼との戦いに有益で且つ、自分自身を強くする為に多くの者が参加している。

流牙隊からはひよ子と転子と梅の三人。

それに加えて三若の和奏、雛、犬子の三人である。

「ひよ、お前は身軽に動くことができるから軽やかな動きで相手を翻弄して攻撃するんだ！ 膂力が無い分は跳んで切り落とすんだ！」

「は、はい！」

「ころは相手の動きをよく見ながら隙のある部位を構わず斬れ！ 怯んだら尽かさず斬り伏せろ！」

「了解です！」

「梅は常に次の攻撃の手を考えるんだ。例え攻撃を止められても思考を止めるな！」

「はいですわ！」

「和奏は槍の技術面を徹底的に磨け。切り札の仕込み鉄砲は大きな相手、硬い皮膚を持つ相手にゼロ距離で撃ち込んで風穴を開けてやれ！」

「おう！」

「雛は心を静めて殺気を出るだけ抑えて走りながら急所や足を切れ。そうすれば例え仕留められなくても鬼はほぼ動けない！」

「お〜！」

「犬子は自慢の怪力で思いつきりやれ！ だが技術面も忘れるなよ。力と技、両方備わればもっと強くなれる！」

「わんー」

六人の問題点や改善点を指摘しながら指導をし、まだまだ成長期で発展途中なので着々と実力を上げていく。

そして、稽古の終わりには全員が流牙との一対一の模擬戦を行う。

流牙は魔法衣から牙狼剣でも牙狼刀でも無い白い鞘の直剣を取り出す。

それはまだガロの鎧が金色を取り戻す前の白い鞘の牙狼剣とほとんど同じ拵えの剣だった。

前々から稽古をお願いされていた流牙は訓練用の剣として牙狼剣と同じ拵えの剣を鍛冶屋に作ってもらっており、京から美濃に戻った時に完成した。

ソウルメタルではないただの鉄の剣なのでこれなら安心してひよ子達相手に稽古をすることが出来る。

その稽古風景を三若の上司である壬月と麦穂が見ていた。

「ほう……三若の奴ら、最近知らぬ間に強くなっていたと思っていたが、まさか流牙に師事を受けていたとはな」

「ふふっ。みんなまだまだ若いですから伸び代は充分ありますね」

「これだと道場の師範と弟子達の稽古みたいな光景だな」

「道場ですか……そうですね、道外流道場と言ったところかしら？」

「外れた道の道場か……あくまで弟子達の武を高めるためのものだから間違つてはいないか。よし……」

「壬月様？」

「私もちよつと動きたくなくなった。道場破りではないが、師範と手合わせをしよう」
「では私も一緒に」

壬月と麦穂はひよ子達が流牙と模擬戦をしたいる間に自分達の武器を取りに行つた。

それから六人連続で模擬戦を行つたにも関わらず流牙は全く疲れを感じさせない爽やかな笑顔をして稽古を終わりにする。

「もうすぐ大きな戦だ。後は自分達のやるべき事をやったらしつかり休んでくれ」

「「「「ありがとうございます！」」」」

ひよ子達は挨拶を終えると縁に座つて手拭いで汗を拭き、水を飲んで休む。

「ふうく、疲れたあ……」

「ひよ、どんどん強くなつてるね。やっぱりお頭の指導は的確だね！」

「ええ！ハニーのお陰である時のような不覚を取ることなく己を高めましたわ！」

「へへつ、流牙のお陰で前よりも断然強くなつてるぜ！」

「そうだねえ。みんなにそれぞれ自分にあつた鬼との戦い方を身につけてきたからね

」

「わん！もつともつと強くなって鬼を蹴散らしてやるわん！」

流牙の指導で確かな強さを感じている各々。

我流で独特な流牙の剣は教えられないがその代わりそれぞれの武の良さを高め、弱さを補えるように指導していたので好評である。

「みんなが頑張っているからだよ。俺はちよつと助言しただけだよ」

流牙は剣を手に剣術や体術の型の練習をしていると二つの影が近づいていた。

「おいおい……そんな物騒な物を持ってどうしたんだ、お姉様方？」

壬月は言わずと知れた巨大な斧・金剛罰斧を、麦穂は愛刀を手にしていた。

「ふつ、氣づいていたくせに白々しいな」

「道外流道場の師範さん、私達とお手合わせをお願いします」

「ど、道場……？？？どういふこと……？」

「そこにいるではないか、六人の弟子が」

「ああ、そういう事？弟子ってわけじゃないけど……良いよ、相手になるよ」

流牙は剣を構えるとまずは麦穂から相手をする。

「こうして流牙さんと戦うのは試合の時以来、久々ですね」

「そうだな。あの時は牙狼剣だったから抑えていたけど、鋼鉄の剣なら思いつきりいけるよー」

「ええ、私も全力でいきます！」

流牙と麦穂は久方ぶりの模擬戦を行った。

その後、壬月とも戦い、騒ぎを聞きつけた綾那や歌夜、更には小夜叉や桐琴といった武闘派達が次々と押し寄せることとなるのだった。

☆

ある日、流牙は一葉達に呼ばれて二条館の一室に呼ばれた。

そして、幽が持ってきたのは大量の書物と巻物だった。

流牙に公方である一葉の夫になるので幽から軍略に政略、礼式、歴史、家系図……などなど、公方の夫として相応しい良人になる為、たくさん勉強をすることになったのだが……。

「今いる検非違使を総動員して何としても流牙様を捕らえるのです!!」

「幽よ……それは無駄な労力を使うことになるぞ?」

「流牙様、風のように立ち去っていきましたからね」

結論から言うとうと流牙は幽から逃げた。

山ほどある書物や巻物を目にし、面倒極まりないしきたりや儀式の内容に流牙は「覚えきれない、絶対に無理」と判断して全力で逃走した。

せめて武士のたしなみである茶の湯や和歌だけでも教えようとしたが、堅苦しいのが

苦手な流牙は「俺は騎士だから茶の湯と和歌なんか必要ない！」と言って更に逃げる理由となつてしまった。

幽は検非違使を使つて流牙を捕まえようとしたが、魔戒騎士である流牙が捕まるわけがなく、日が暮れるまで見つからなかつた。

基本的に流牙の味方である一葉と双葉は幽の悔しそうな顔に笑つていた。

ちなみに幽の目から逃れた流牙は久遠と結菜の元にいた。

灯台下暗しとはこの事で流牙は奥を取り仕切ることとなつた結菜から現在における流牙の奥さんについて話された。

「まず正妻は久遠と一葉様よ」

「えっと、それつて一番身分の高い妻つてことだよね？」

「ええそうよ。次に側室だけど、これは私と双葉様よ」

「正妻の次に身分の高い妻か……この時点で四人も妻がいるのか……」

性格も見た目も違う絶世の美少女が四人も妻を迎え、男冥利につくというものだが流牙の場合はそういうわけにはいかない。

「何を言つてるの？あなたの妻はまだまだいるわよ」

「フワツ!?!」

結菜の宣告に流牙は心臓が止まりかけるような衝撃を受けた。

「立場では正妻と側室の次に低いけど、愛妾で流牙隊のひよ子、転子、詩乃、鞠ちゃん、梅。織田家の麦穂、和奏、雛、犬子。現状ではこの九人よ」

まさかの流牙の知らないところで妻が一気に三倍も増えていることに驚きを隠せない。

「多い多い多いっ!?!つまり俺には今、合計で十三人も奥さんがいるの!?!流牙隊のみんなにも驚きだけど、麦穂さんと三若はいつのまに!?!」

「ふむ……我が宣言したとはいえ、まさか数日でこれ程とはな……流牙よ、やはりお主は天下御免の女誑しだな」

「く、久遠っ!?!止めて!頼むからそんなこと言わないで!!黄金騎士が天下御免の女誑しだなんて……魔戒騎士や魔戒法師の仲間、そして英霊に顔向けできなくなるから!?!」

「はあ……この時点でこれだと、あと奥さんが十人や二十人増えても不思議じゃないわね……」

「結菜!怖いことをサラリと言わないでくれ!!本当に仲間達と英霊から蔑まされそうなんだけど!?!」

背筋が凍るような発言にビクビクと怯える流牙だった。

「まあ冗談はさておき。ひとまず愛妾の九人に話を聞いてきたら?」

「そうする……」

幽達に見つからないよう隠密行動を心掛けながら愛妾となった九人の元に行き、話を聞きに……ではなく、愛の告白を受けた。

「流牙様！私は武将として、奥さんとして側にいさせてください！」

「え、えつと……流牙様！あまり上手くは言えませんが、私は流牙様が大好きです！」

「流牙様……私は初めてお会いした時からずっとあなたの事をお慕いしております」

「鞠は流牙の事が大、大、大好きなの！」

「ハニー！私はどんな形でもあなたの妻になれて幸せですわ！」

「流牙さん、あ、あの……私をあなたの妻にしてください！」

「りゅ、流牙！私はお前が大好きだぜ！」

「流牙くーん。雛ね、流牙君のこと大好きだよー」

「流牙様ー！あのね、犬子すつごく流牙様のことが好きー！」

ひよ子、転子、詩乃、鞠、梅、麦穂、和奏、雛、犬子の九人から愛の告白を受け、流牙は今までにない恥ずかしい気持ちとなったが、ひとまずその告白を受け取って九人が愛妾になる事を了承した。

そして、九人からの告白を受けて心臓の鼓動が最高潮に高まり、一人で静かに落ち着かせている中、ザルバが話しかける。

『流牙よ』

「何？ザルバ……」

『こんなにも女に愛される黄金騎士……いや、魔戒騎士は多分お前だけだ』

「……まさか友にトドメを刺せられるとは思わなかったよ」

心にグサつと大きな言葉の刃が刺さり、撃沈する流牙だった。

しかしこの時の流牙はまだ知らなかった。

流牙の妻がまだまだたくさん増える事となるのを……。

☆

戦いの傷も癒え、英気も充分……とは言えないまでも、これなりに養えたと判断した久遠は、小谷、そして越前侵攻の下知を下す。

「上洛し、足利公方との合流を果たした！次は鬼に支配されし越前の解放に向かう！
各々、存分に手柄を立てよ！」

久遠の宣言の下、流牙達は京を離れ、近江路を小谷に向けて進発した。

流牙隊には二条館攻防戦に駆けつけてきた雫が新たな仲間として加わる事となった。

雫は優秀な人材だが小寺家から色々な事を丸投げ同然で任されており、流牙はこのままにしておくのも勿体無いと思い、更には雫の意思もあつて流牙隊の一員として加わる事となった。

ちなみにその際、一葉に頼んで小寺家に雫を貸すよう依頼をしたのでその対価として

流牙は一葉と京の町をテートする事になった。

流牙達は小谷にまでの長い道のりを経て市と真琴のいる小谷城の近くまで到着したが、小谷近郊まで兵が出ていた。

何かがおかしい、そう感じ取った流牙と久遠は急いで小谷城へ向かった。

城門に近づくと市と真琴の姿があり、ひとまず二人が無事で安心するが、二人の表情はどことなく厳しかった。

そして、二人の口から衝撃的な事が話される。

それは越前から江北に鬼が群れをなして進行してきたのだ。

六日程前、越前の国境、賤ヶ岳方面から鬼の群れが江北に入り、周辺の村を荒らし尽くして越前に帰って行った。

市達救援隊が到着する直前で方向転換して逃げていった。

それは鬼に統率が取れているということだった。

エーリカの考えでは上級の鬼が存在するという事、そして越前内部が上級の鬼に仕切られ、戦略を持って動くようになった。

鬼との戦いがまた一段階も困難になってしまった。

流牙と久遠達は真琴と共に近くの窪地に陣幕を張り、軽い食事を取りながら情報交換をして軍議を行う。

「鬼の行動が変わり始めたな」

『ああ。流牙達が初めて対峙した鬼はただ食事を求めて人を襲っていたが、知恵をつけて戦略的に動いている』

「……今思えば三好衆は京で俺たちを足止めする為に利用したのかもしれない」

『そう考えると俺たちは今回の黒幕の掌で踊らされている可能性がある。手下の鬼を操り、俺たちを遠くから見て遊んでいるように見える』

数々のホラーとの戦いを経験した流牙とザルバの推測には説得力がある。

「しかし越前を捨て置く事はできません。……今も越前の民は鬼に怯え、恐怖に戦っている事でしょう。弱き者達を守る為にも……」

「この日の本を異形の者どもの好きにさせる訳にはいきません。今、越前を討たないと……っ！」

越前と日の本を強く思う真琴と葵は少し焦っているようにも見える。

「分かってる。二人の気持ちは俺も同じだ。だけど……嫌な予感がするんだ」

流牙も二人と同じ気持ちだったが、胸騒ぎがしていた。

果たしてこのまま越前に討ち入って良いのかどうか。

あまりにも敵の情報が少ない事もそうだが、流牙はボルシテイでの戦いから自分自身が目を失い、仲間達が大きく傷ついた時の光景が頭の中に過る。

今動いたら何か大きなものを失ってしまう……そんな思いが流牙の心にあるのだが、久遠の心は変わらない。

「流牙、我々はやらねばならん」

「……そうだな。分かった、まずは越前の解放だな」

一刻も越前を解放する……そんな気持ちから流牙も自分を抑えた。

「共々！ 次の戦は異形の者との戦いである！……今宵は無礼講を差し許す。英気を養い、この日の本の為に全力を尽くせ！」

越前討ち入りの準備を命じ、共に戦う者達の英気を養わせる。

いよいよ越前討ち入りが始まる……流牙は大きな不安を心に秘め、手を強く握りしめながらその時を静かに待つ。

『夜　　〕 N i g h t 〕』

「出陣するー！」

凜とした久遠の声が響き、小谷の馬出に待機していた連合軍の面々が一齐に動き出す。

目指すは越前国の中心、朝倉義景が鎮座する一乗谷。

流牙達はまず一乗谷に近い賤ヶ岳で本陣を設営し、最後の軍議を開く。

一乗谷を落とす為には各所に築かれた城を叩かねばならず、各軍勢で攻める。

織田衆一の強さを誇る森一家は流牙隊の護衛となり、後日一乗谷には一番乗りに向かわせる事で納得した。

流牙や一葉は自分達も前に出ようとしたが、二人は森一家に匹敵する強力な切り札となる存在なので後ろで待機し、ここぞという時に前に出るといふ事でひとまずは納得した。

軍議を終え、翌朝には陣幕を払い、連合軍は最初に敦賀城を攻めに入る。

しかし……敦賀城に攻めるのは良かったがあまりにもあっけなく落城してしまった。

鬼が抵抗してなく流牙とザルバもあまりにもおかし過ぎると疑問を抱いていると久

遠からの早馬で松平衆と合流し、このまま一乗谷を目指すと言う知らせが入った。

流牙は詩乃と一葉を連れて久遠の元へ向かった。

「久遠、このまま一乗谷に行くのか？」

「うむ。そのつもりだ」

「もう少し慎重に行動しないか？ 相手は魔獣……正体が不明な鬼だ、慎重に行動した方が良いと思うけど……」

「確かにな。だが……金柑がな」

「今の鬼と互角以上に戦えるからといって、満月時の鬼達と武士が互角に戦えるかどうか分からない。そして、満月はもうすぐ……となれば、早々に一乗谷に乗り込み、決着をつけるにしかず」

『なるほどな。確かに古の時代から月は悪しき存在に力を与えてきた。お嬢ちゃんが焦っていた理由はそれか』

「……分かった。そういう事なら確かにすぐにでも一乗谷に向かわないと」

エーリカの焦っていた理由をようやく理解し、流牙も納得した。

「久遠。分かっていると思うけど、経験者として言っておく。焦るな、常に冷静に考えるんだ」

「ああ……」

久遠と言葉を交わし、流牙は流牙隊へと戻っていった。

連合軍は決戦の地である一乗谷近くまで進行し、そこで最後の休みを取る為に野営の準備をする。

☆

すつかり夜となり、暗き闇の夜空には星と月が綺麗に輝いていた。

流牙隊の野営の準備を終え、一息をつくくと流牙は久遠の元に行く。

「久遠」

「流牙? どうしたのだ?」

「ちよつと良いかな?」

「あ、ああ! 大丈夫だ!」

緊張感の漂う中、久遠は流牙に会えて笑みを浮かべ静かになれる森の奥で二人だけで話をする。

「いよいよだな……」

「うむ……」

久遠は不安な表情を浮かべている。

戦なら何度も経験しているがそれは人同士の戦、これは鬼との未知なる大戦……緊張しない方が無理な話だ。

「大丈夫だ。久遠は一人じゃない、みんながいるからさ」

「そうだな……それに、お前がいるからな」

「君の希望になるって約束したからね。あと……忙しくて渡せなかったけど、久遠。君にこれを渡すよ」

流牙は魔法衣のポケットから己の尾を噛んで環となった龍のような形をした銀色の指輪を取り出した。

「指輪……？流牙、これは……？」

『これは俺様の片割れで作った指輪だ』

「ザルバの片割れだと？」

『そいつは俺の半身みたいなものだ。お嬢ちゃんが指にはめて付けていけば、何処にいるか分かる』

「久遠とは離れて戦うから、せめて何処にいるか知っておきたかったからさ」

「何と……ザルバはそんなこともできるのだな。分かった、喜んで受け取ろう。そ、そうだ……流牙」

「何？」

「そ、その……せつかくだから左手の薬指にはめてくれないか？金柑が南蛮の夫婦は結婚した証に……左手の薬指に指輪をはめると聞いたからな！」

時折見せる乙女チックな久遠に流牙は可愛いなと思いつながら、普段はあまり素直になれない久遠のその思いに応える。

「……ああ、分かったよ。手袋を外して」

「う、うむ……」

久遠はいつも付けている白い手袋を外し、左手を流牙に向ける。

流牙はザルバの半身の指輪を手に取り、ゆつくりと久遠の左手の薬指にはめた。

銀色の指輪は月明かりで仄かに輝き、久遠は嬉しくて満面の笑みを浮かべ、薬指にはめた指輪を撫でながら自分の顔の近くへ持つて行った。

「ところで……そこにいる奥さん二人は何をしているのかな？」

「なっ!？」

草陰から久遠の可愛い妻としての姿を見てニヤニヤしていたのは久遠の妻の結菜と同じ正妻の一葉だった。

「うふふ、久遠く。見ちゃったわよく、可愛いおねだりなんかしちゃって♪」

「流石は第一正妻。やはり侮れんな。よし、余も今度はそのような感じに流牙に甘えよう」

「なっ、なっ、ななな……!」

久遠は二人に見られて顔を真っ赤にしていた。

「それにしても随分いいものを久遠に贈ったわね。ザルバ、私たちの分の指輪も作つてよ」

「そうじゃ！久遠だけズルいではないか！」

『無茶言うな。あの指輪は片割れで俺様と繋がっているんだ。一個までしか作れないぞ』

「あらそうなの？仕方ないわね、ザルバに無理をさせるわけにもいかないわね。まあ私にはこれがあるから良いわ」

結菜は堺で流牙に買ってもらった蝶の簪に触れながら言うと、一葉は羨ましそうに久遠のと結菜を睨みつける。

「ううっ……久遠と結菜は流牙から何度も贈り物を貰っておるから良いかもしれないが、余はまだ一度も貰ったこと無いのだぞ！余は正妻なのにズルいでは無いか！」

「そう言われてもな……」

まるで幼い子供のようにくずりだす一葉に流牙は苦笑を浮かべ、このままだと明日の戦いに支障が出てしまう。

どうやって一葉の機嫌を取るか考えていると、流牙はふと自分の胸元にあるペンダントが目についた。

それは古代の鍬を思わせる荒々しいデザインに中央には赤い宝石が埋め込まれたペ

ンダントで流牙の身につける魔導具の一つ、『月の欠片』だった。

流牙は仕方ないなと思いつながらチェーンの留め具を外し、そのまま月の欠片のペンダントを一葉の首にかけた。

「えっ……？流牙、これは……？」

胸元に夜空の月光の如く輝いている月の欠片のペンダントに今までくずついていた一葉は一瞬にしてキョトンとなり、流牙を見つめる。

「俺のお気に入りの首飾り。魔戒法師が作った魔導具の一つで邪気を払う力があるんだ。それを一葉にあげるから、機嫌を直して」

「え、あ、その……良いのか？これを貰っても……？」

まさか本当に贈り物を貰えるとは思わず、しかも流牙がいつも身につけている物なので流石の一葉も慌ててしまう。

「大丈夫。邪気を払う魔導具はもう一つあるから」

そう言つて流牙は魔法衣の左胸につけてある羅号の形見の牙に触れながら見せる。

「一葉には本当に世話になつていいるからそのお礼の気持ちだ。まあ細かい事を考えないで夫から妻の贈り物つてことで受け取つてよ」

「流牙……うむ！そう言うことなら喜んで頂こう！一生大切にするからな!!」

一葉も満面の笑みを浮かべて月の欠片に触れ、上機嫌となった。

そんな一葉の姿を見て久遠と結菜は流牙をジト目で睨みつける。

「なるほど……これか……」

「そうよ、これが流牙の言葉の力よ……」

「ん？二人共どうしたの？」

「この天下御免の女誑し！」

「ええっ!？」

天下御免の女誑しの力を目の当たりにした二人の厳しい言葉に驚く流牙。

その後、一葉は上機嫌で流牙隊の陣に戻り、胸元に輝く月の欠片を見たひよ子達が大騒ぎしたのは言うまでもなかった。

ちなみに……久遠の左手薬指にはめたザルバの片割れで作った指輪は見た目はとても良いのだが……その元がザルバの口から吐かれた気色の悪い不気味な虫みたいなものから作られたことを久遠が知る由がなかった。

☆

明日の為に久遠達が寝静まった頃……。

「ふっ！はっ！はあっ！」

流牙は暗闇の中、一人で牙狼剣を振るっていた。

空を切り裂き、木の葉や草をなびかせる風を生む刃が煌めく。

そこに一つの影が近づいて流牙にはなしかける。

「良い太刀筋だが、剣に迷いが見えるぞ」

「……桐琴さん……」

酒の入った瓢箪を手に桐琴が近づいて来た。

木に腰掛けながら酒を飲んで流牙と話をする。

「小僧、明日は鬼との戦だぞ？ そんな不安な心では足元をすくわれるぞ？」

「……嫌な予感がするんだ。やらなきゃならないのは分かっているけど……」

「天の世界で何かあったのか？」

「……少し前に俺はある国を裏から支配していた邪悪な者達を倒すために仲間達とすぐにも決着をつけようとした。だけど、その戦いで俺は目を失い、仲間は俺を守るために腕を切り落とす程の大怪我を負ったんだ……」

あの時の大敗があつたからこそ流牙達は守りし者として、魔戒騎士として心身共に強くなった。

しかし今回の戦いはあの時の光景が思い浮かぶほどの嫌な予感が何度も頭をよぎってしまふ。

「確か、お前の母がその潰された目を直したらしいな。そして、最後は異形になりかけた母をお前が介錯をしたと……」

流牙と波奏の親子の絆の話はどこから漏れたのか織田家で既に広がっていた。

「それが母さんの願いだったから……」

「人を斬ったのはそれが初めてか……?」

「だけど……俺はもう人を斬ることはない」

ホラーの返り血を浴びた血に染まりし者は切らなければならぬ。

しかし、流牙は僅かな可能性がある限りその人間を助けるために行動するだろう。

「それがお前の覚悟か?」

「そうだ。守りし者としての俺の覚悟だ」

「ふっ……全くお前はよく出来た奴だよ。お前のような息子を持って母は喜んでいるだ

ろうな」

「そう思ってくれたらいいんだけどね」

波奏の事を思い出しながら流牙は牙狼剣を鞘に納め、桐琴の隣に座る。

「桐琴さん、明日はよろしくね」

「おうよ、小僧も気張れよ」

「ああ……そう言えばお互い忙しくて忘れていたけど、決闘はどうする? 何なら今やる

?」

随分前に約束した流牙と桐琴の決闘の約束。

流牙は牙狼剣を見せながら尋ねると、桐琴はニヤリと笑みを浮かべるが、瓢箪の酒をグイッと飲んだ。

「ぶはあ……いや、止めておく。決闘はこの戦が終わって落ち着いてからにしよう。楽しみは後に取っておくよ」

「そう? ごめんね、先延ばしになっちゃって」

「構わないさ。お前も私もそう簡単に死ぬような奴じゃないし、どうせならお前の心から不安が無くなった心身共に全力の状態で戦いたいからな」

「ああ。全力で相手をするよ」

同じ武人同士として小さく微笑み、拳をぶつけ合い、再び約束を交わす。

「さあ、小僧はとっとと寝ろ。切り札が寝不足で全力を出せないなんて笑えないからな」
「そうする。ありがとう、桐琴さん。おやすみ」

「ああ、おやすみ」

流牙と桐琴と別れ、それぞれの自分の陣に戻った。

桐琴は流牙との血肉が沸き起こる決闘を思い浮かべながら残りの酒を飲み干した。

☆

日の本を救う為の久遠達による大戦。

しかし、この戦いが流牙と久遠の運命を大きく左右する分岐点となるとは今の彼らは

誰も予想が出来なかつた。

悲しき別れと新たな出会い。

禍々しき力と光り輝く奇跡の力。

流牙に更なる試練が待ち受け、幾重にも重なる縁が新たな時代への一步となる。

『罾』
↳ Trap ↳

早朝、連合軍は一乗谷に向けて進軍する。

流牙はザルバのカバーを開き、牙狼剣を持ちながらいつでも戦える準備を整えた。

流牙隊の役目は切り札である流牙と一葉で戦の後半戦で一気に攻め立てる事である。

そのため奇襲対策を兼ねて後方で備え、もしもの時に久遠を逃がすための策を詩乃が考える。

そして……静かに鬼との戦が始まり、武士達の声や鉄砲の音が後方に備えていた流牙達の耳にも届いていた。

戦況などの情報は随時、小波が伝えていてくれるお陰で内容を把握している。

そんな中、流牙とザルバは不安や解せない気持ちでいた。

「ザルバ、どう思う?」

『妙だな。逃げ出した鬼がどこへ逃げた事もそうだが、人よりも強い力を持つはずなのにまるでわざとやられているように見える』

「俺は戦の戦術は疎いけど、いくらなんでも全てが上手く行き過ぎている。知恵をつけているはずの鬼がこうも簡単に攻められているのは変だ」

『確かに。それに一つ気になる事がある』

「気になる事?」

『鬼の姿が見当たらないが、邪気が広範囲に漂っている。こんな感じは初めてだ』

邪気が広範囲に広がっている……しかし、鬼の姿が見えず、周囲の草木などの手つかずの自然は美しかった。

「何にせよ、警戒をするしかないな……」

流牙は周囲に気を配りながら待っていると、小波から驚愕の報告が上がった。

「ご、ご主人様! 森一家との繋ぎをやらせていた手の者から、連絡が途絶えました!」
「何だと!」

それは句伝無量のお守りを渡していた連絡係からの連絡が途絶えたと言うものだった。

伊賀の者たちは皆、事切れる寸前に状況を念で飛ばすよう訓練している。

しかし、それすら無いという事は異常事態が発生している事を意味している。

「みんな、気をつけろ……」

流牙が牙狼剣を抜くと、皆が皆、臨戦態勢を整え始めた。

そして、目を閉じて邪気だけを集中して探知していたザルバが赤い目を見開いて叫んだ。

『……はっ!? そういう事か! 流牙、地下だ! 奴らは地下にいる!!』

「地下!?!」

ザルバの叫びに驚く間もなく地響きが鳴り、地面が盛り上がった。

『グオオオオオオッ!!』

咆哮と共に地中から鬼の大軍が現れ、皆が言葉を失う中、流牙は牙狼剣の刃をザルバに噛ませる。

「くっ!? ザルバ!!」

『応!!』

牙狼剣を滑らせて刃に魔導火を灯して烈火炎装を発動させる。

「薙ぎ払う! 結菜、雷電胡蝶を!」

「え、ええ!! 雷電胡蝶!!」

呆然とした結菜に喝を入れ、雷電胡蝶を出した。

流牙は魔導火を纏った牙狼剣を横薙ぎで振るい、翡翠に輝く炎の斬撃を放った。

魔獣を焼き尽くす炎の斬撃は一気に数十体の鬼を焼き払った。

尽かさず牙狼剣で円を描き、瞬時にガ口の鎧を召喚して体に装着し、結菜が出した雷電胡蝶を取り込んだ。

烈火炎装に続き、雷電を纏う閃迅雷装を発動し、地面に降り立つと同時に地を蹴る。

「はあああああつ!!はあつ!!」

雷の化身となった流牙は雷光を迸らせて鬼を一瞬で斬り裂いた。

しかし、まだ次から次へと溢れんばかりに現れる鬼にザルバは流牙だけでなく詩乃たちにも聞こえるような大声で伝えた。

『流牙!このままだと全滅だ!すぐに撤退しろ!』

「でも前にいるみんなが!」

『流牙だけで対処できる問題じゃない。詩乃のお嬢ちゃん!聡明なお前さんなら分かっているはずだ!すぐにみんなを連れて撤退しろ!』

「もちろんです!このままだと全滅は免れません!流牙様と結菜様と一葉様をここで死なせるわけにはいきません!これより流牙隊は独自に撤退戦を開始する!皆、旗の下に集え!」

完全に不意打ちを受け、全滅は免れないと詩乃は判断して流牙隊に撤退命令を下す。

「詩乃!?!」

『流牙!波奏との約束を忘れたか!今は仲間と生き延びる事だけを考えろ!』

波奏との最後の約束を出されてしまい、反論できなくなった流牙は唇を噛んで心を抑えながら頷いた。

「つ……分かった……流牙隊は撤退だ!俺が活路を切り開く!そうしたら一気に進め

!!

流牙は閃迅雷装を解くと同時に鎧から闇の力が溢れ、黄金の光から漆黒の闇に染まる牙狼・闇となって背中に闇の翼を羽ばたかせる。

「行くぞ!!!」

漆黒の闇を纏う黒翼で滑空し、鬼に向けて牙狼剣を振るう。

流牙隊は鬼の大軍から生き延びる為の撤退戦を開始した。

その後……流牙隊は日が暮れるまで撤退退をしていたが、一向に減る気配のない鬼に必死の攻防を繰り返していた。

「くっ……はっ、はっ……」

そんな中、誰よりも疲労していたのは流牙だった。

仲間を守るために誰より剣を振るい、大量の鬼が現れるとガクの鎧を纏って戦っていた。

しかしその所為で流牙の体力や精神力はかなり消耗していた。

身体中から汗が流れ、体が若干震えている程だった。

「流牙！少しは休みなさい！私達が代わりに戦うから！」

結菜は流牙を少しでも休ませようとしたが、流牙はそれを拒否して立ち上がる。

「そうは、いけない……仲間たちの死を……無駄にしない為にも……」

ここまで逃げ延びるまでに何人もの足軽の命が鬼に奪われてしまった。

流牙は人とは異なる生き方をして鍛えられた魔戒騎士ではあるが、神でも仏でもない……所詮はただの人間。

守りし者である魔戒騎士だが、どんなに手を伸ばしても救えない命はある。

足軽達は死に際にまだ生きたい、家族に会いたいと言葉を残す中……忠義を尽くす者達は流牙に未来を託して死んでいった。

この日の本を救えるのは流牙しかない。

そう確信している足軽達は己が命を犠牲にしても流牙と流牙を支える者達を守ろうとしていた。

その思いを受けた流牙は休んでる暇などないと自分に強く言い聞かせ、魂を震わせて牙狼剣を手に戦う。

「流牙、大丈夫なの……?」

「余らに任せて休んだらどうだ?」

「そうですね。ここで倒れたら元もこうもありません」

流牙に匹敵する剣の腕を持つ鞠と一葉と幽は心配するが、流牙は鞠と一葉の頭を撫でてから牙狼剣を構える。

「心配するな、俺はまだ戦える……」

そして、再び現れた鬼を流れるような剣で瞬殺していく。

剣の達人である三人には今の流牙の剣は怒りや悲しみ……様々な負の感情が混ざり合った心で操る危うい剣だった。

誰よりも優しく、そして誰よりも情に深い流牙だからこそ、その心が剣に反映される。これ以上、流牙が追い詰められないように自分達が支えないとならない……そう思った一葉達は刀を握りしめて流牙の隣で戦う。

そこに小波に本陣からの知らせが入った。

久遠達が無事に敦賀方面に落ち延び、朽木谷に向けて移動しているが、森一家や松平衆の行方が分からないとの事だった。

小波は松平衆の行方が分からないことに不安を覚えるが、流牙は優しい笑みを浮かべながら小波の頭を撫でる。

「小波……葵達はきつと無事だ。綾那に歌夜、悠季がいる。まずはここを切り抜けて会おう」

「はい……はい……」

流牙の言葉に縋り付くように小波は何度も何度も頷きを返した。

久遠達が無事であると知ると安心感から流牙の心に僅かな余裕が生まれ、牙狼剣を握りしめて八咫烏隊と連携をとりながら再び撤退戦に臨んだ。

森に逃げ込み、何とかひとまず追ってから逃れて小休止をしていると八咫烏隊とは別の鉄砲の音が鳴り響き、流牙達が駆けつけるとそれは二手に分かれていた流牙隊だった。

転子、梅、雫……離れ離れになっていた大切な仲間達と無事に再会し、既に体力を大幅に失っていた流牙は湧き上がる力を感じた。

牙狼刀を取り出して夜空に浮かぶ月と同じ光の円を牙狼剣で浮かび上がらせ、牙狼の鎧を纏う。

夜の闇に輝く金色の鎧と二振りの金の刃……黄金騎士ガ口は鬼の軍勢に突撃し、それを結菜や一葉、八咫烏隊が援護をして殲滅していく。

そこに一つの大きな援軍が現れる。

「ひやあああつはあああー………！！！！」

聞き慣れた二つの高い雄叫び……それは織田家最凶親子、桐琴と小夜叉の二人だった。

行方不明だった森一家を引き連れて鬼を虐殺していく。

「桐琴さん！小夜叉！」

「おう！小僧、無事だったようだな！」

「ま、お前がそう簡単にくたばる奴だとは思わなかったがな！！」

「俺も二人が、森一家がやられるとは思わなかったよ！それより、力を貸してくれるか？」

「おう。森一家、六百程度になっちゃったが、好きに使えや！」

「母もオレも、流牙の指示に従ってやんよ！」

「ありがとう！みんな、行くぞ！」

「おう！！」

森一家の協力もあつてその場に現れた鬼をあつという間に全滅させ、更に進むともう一つの行方不明だった松平衆と合流した。

葵たちは無事で小波は安心し、すぐにこれからどうするか作戦会議を開いた。

松平衆も流牙隊と共に撤退し、加賀に向かうことになった。

しかし、この場にいる流牙や詩乃を含む数人は気づいていた。

兵の数は少なく、鬼の軍勢から逃れるための時間稼ぎをしなくてはならない。

それをどうすれば良いか……その答えを流牙は分かっていた。

松平の本陣から出た流牙はザルバのカバーを開いて話しかける。

「……ザルバ」

『どうした？流牙』

「……分かつてるだろ？俺がやろうとしていること」

流牙との付き合いも長くなっているザルバは流牙の考えを察していた。

『……継承者は結菜か一葉のお嬢ちゃん達の子に任せるのか?』

「それしかないよね……牙狼剣は大丈夫だろうけど、ザルバだけは壊れたら直す人がいないからね。二人に託すよ」

『また鎧の継承者が不在になるのか……やはりそう上手くはいかないものだな』

ザルバは諦めたような声を吐き、そこに結菜達がやって来た。

「……結菜、詩乃、一葉」

「流牙……?」

「どうしたのですか……?」

「流牙よ……何を考えておる?」

流牙がただならぬ様子にいち早く気づき、結菜達は不安そうな表情を浮かべる。

「俺が鬼達を止める。みんなは少しでも遠くに逃げてくれ」

それは流牙がここを死に場所として選んだ大きな決断だった。

このままではみんなが死んでしまう……誰か命をかけてが止めないといけない。

それならば、自分が行くしかない。

魔戒騎士の最期は戦いの中で戦死するのがほとんどである。

守りし者として命尽きるまで、肉体が滅ぶまで、闘い続ける……。

流牙のその決断に言葉を失う結菜達……しかし、その決断を止める一つの影が流牙の背後に近づいていた。

『別 ～Parting～』

「俺が鬼達を止める。みんなは少しでも遠くに逃げてくれ」

「!!!?」

それは流牙が命をかけて鬼を止め、結菜達を逃す……つまり、自ら犠牲になるということだった。

「何を言ってるのよ！あなたが死んだらみんなの犠牲が無駄になるじゃない！」

「そうです！流牙様！あなたはここで死んではいけません！」

「流牙が残るのならば余が代わりに残る！流牙を見捨てることなど出来ん!!」

「……結菜、これを」

流牙は自分の大切な相棒であるザルバを抜いて結菜に渡した。

「流牙……あなた……」

「もし……君に男の子が生まれたら、魔戒騎士として育てて欲しい。ザルバを頼んだよ」

流牙は震える手でザルバを受け取った結菜の姿を臉に焼き付けて立ち去ろうとしたその時だった。

「この大馬鹿者が……!!!」

ドスツ!!

「がはっ……!?!」

流牙の背後に現れた桐琴は流牙の腹を思いつきり殴った。

完全に油断していた流牙は腹に強烈な痛みが走り、体の力が抜けて崩れ落ちる。

慌てて結菜と一葉が流牙を支え、流牙は苦痛で顔を歪めながら桐琴を見る。

「桐琴、さん……な、何を……!?!」

「小僧、貴様はこの日の本の未来を背負う男……ここで死んだら日の本は終わる。易々と死ぬような真似をするな」

「でも……誰かが、止めないと……」

「結菜様、公方。小僧を頼む」

「桐琴……」

「……うむ。任せておけ」

「結菜様、久遠様にはよろしく伝えておいてください……。小僧、ここの殿はワシ一人で務める。その間に引け」

それは流牙の代わりに命をかけて鬼を止めるといふ桐琴の決断だった。

「なっ……ふぎ、けるな!桐琴さんを置いていけるわけが……」

「お前の許しはいらん。おい小娘、小夜叉に言伝を頼む。小僧と共に達者で暮らせ。そ

して九郎判官を守つて死んだ弁慶のように、命を賭して小僧を守つてやれ。……そう伝えろ」

「必ずや……!」

桐琴は詩乃に小夜叉への言伝……遺言を託し、詩乃は強く頷いた。

そこに騒ぎを聞きつけた鞠達が桐琴の別れを知り、それぞれが最後の話をする。

鞠、綾那、歌夜は桐琴の死を背負い、流牙を守り、支えると誓いを立てた。

すると、ザルバから鈴の音が響き、持っていた結菜はカバーを開いた。

『桐琴よ……お前さんのその名を黄金騎士の友、このザルバの魂に永遠に刻もう』

普段他人を認めないザルバが桐琴を認めた。

「ザルバ……結菜様達と共に流牙を支えてやれ。これまで交わして来たお前との話、中々楽しかったぞ」

『俺様もだ。さらばだ……』

それぞれが最後の別れを告げる中、まだ認めていない流牙は桐琴との約束を問うた。

「俺との……俺との決闘の約束はどうなるんだ!？」

「悪いな、そいつは来世に頼む……さあ、小僧を連れて行け!加賀を抜け、越中を抜け、日の本を包む闇を抜け!駆けよ!疾く駆けよ!駆けるものこそが歴史を作り上げるのだ!」

桐琴は流牙に背を向けて歩き出し、一葉は撤退命令を下した。

「桐琴、さん……!」

流牙は手を伸ばすが、体が思うように動かず、だんだん桐琴の姿が小さくなって見えなくなる。

「小僧……いや……『流牙』!!」

初めて桐琴が流牙を名前呼び、流牙は目を見開いた。

「生き延びて、必ずこの日の本を救え……そして、皆の希望の光となれ!!!」

「桐琴さん……」

「最後に……お前と小夜叉と一緒に三人で出掛け、鬼狩りをしていた時……とても楽しかったぞ。まるで、自分のガキが増えたようだった。」

流牙はその言葉に目を見開き、息が止まるようだった。

その後ろ姿には自分に未来を託して死んでいった大切な母と師匠……波奏と符礼の姿が重なった。

流牙の両眼から大粒の涙が溢れ、この世界で出来た『母』の最後の勇姿をその目に焼き付けた。

「桐琴……母、さん……」

「ふっ……ささらば、達者でな!!!」

それが日の本の未来を守るために命を燃やし尽くす最凶の女武者の最後の姿だった。

☆

桐琴が鬼を相手にしている間に一葉の先導で流牙達を連れて先を急いだ。

流牙は桐琴に腹を殴られた時の痛みが体に残っており、結菜に支えられながら歩いていった。

「流牙……」

結菜は渡されたザルバを流牙に返した。

「もう二度と自分を犠牲にしようと考えないで……」

「……ああ」

「もし破ったら雷閃胡蝶でぶっ飛ばすから……」

「……分かった」

流牙は桐琴の思いと結菜の約束を胸に抱き、ザルバを握りしめる。

流牙達が逃げ延びた先は九頭竜川と呼ばれる有史以来氾濫を繰り返し、崩れ川との異名がある川だった。

ここを渡河すれば加賀は目の前だが鬼は確実に近づいている。

すると先に来ていた小夜又は桐琴の姿がないのを気づく。

桐琴から言伝を託された詩乃は涙を流しながら小夜又は桐琴の最後の言葉を伝えた。

突然の母の死に小夜又は雨の中、慟哭の叫びをあげた。

まるで雨が小夜又の涙を覆い隠すように降り注ぎ、沢山の涙と声を荒げ、言伝の言葉を噛み締めながら前を向いた。

小夜又は流牙を守り、森一家の頭として生きることを決めた。

流牙は小夜又の再起に心を打たれ、休んでいる場合じゃないと結菜の肩から離れてザルバを左手中指に嵌める。

「ザルバ、俺も負けてはいられないな……」

『そうだな。お前のために命を咲かせた桐琴の想いに応えなくてはな』

それぞれが心に強い思いを込める中、そこに鬼の大軍が近づいて来た。

流牙は目を閉じて心を深く静めて牙狼剣を鞘から抜いて構え、強い意思を持つ瞳を輝かせる。

「桐琴さんの思いを無駄にしないためにも……俺たちは死ぬわけにはいかない。必ず、生き残ってこの日の本を救うんだ!!」

流牙は鬼の大軍に向かって突撃し、牙狼剣を振るう。

今まで以上に生きる意志を強く持つ今の流牙の神経は研ぎ澄まされ、無駄が無い動きで鬼を切り裂いていく。

更に魔法衣から牙狼刀を取り出すと鞘を投げ飛ばして鬼にぶつけながら構えると、刃

が白く輝いて鬼を断ち切る力を増した。

しかし、牙狼刀に引き寄せられるように鬼が次々と集まっていく。

流牙は牙狼剣を掲げて円を描くと、一斉に鬼が襲いかかり、光の輪からガ口の鎧が召喚される。

鎧が装着され、鬼の爪が流牙に直撃しかけたその時、翡翠の炎が旋風となつて天を焼き尽くすように舞い上がる。

流牙の全力の烈火炎装で周囲の鬼と空を覆う雨雲を焼き尽くした。

しかし、まるで流牙達を嘲笑うかのように更に更に鬼の大軍が現れた。

「生きて、守るんだ……」

牙狼剣と牙狼刀を強く握りしめ、流牙は自分に言い聞かせながら鬼を切り裂く。必ず生き延びて、己の使命と約束を果たすために。

これ以上、大切な人達の命を散らさないように。

「うおおおおおおおっ!!」

二つ銀の刃を鬼の血で染めながら凄まじい勢いで鬼を討滅していく。

しかし、鎧の制限時間が刻々と近づいてくる。

『流牙! もう時間が無いぞ! 早く鎧を解除しろ!』

「分かつてる!」

ザルバが流牙に警告を出すのが、今流牙が鎧を解除すればたちまち鬼の餌食になってしまう。

流牙は一旦闇を纏って空を飛び、そこで解除してから再び鎧を召喚しようとした。

しかし……。

ガシッ！

「なっ!?!」

地面の中から鬼の腕が出てきて流牙の足を掴んだ。

それから続々と鬼が現れて触れれば大きな痛手を負うガ口の鎧を強く握りしめながら流牙の動きを封じた。

それを好機と見た大量の鬼が一斉に流牙に襲いかかり、数十体の鬼が覆い被さった。

鬼はガ口の鎧に皮膚が引き裂かれながらその鋭く大きな爪と牙を突き立てていく。

流牙の絶体絶命の危機に一葉達は一斉に救出しに向かった。

そして……流牙の運命を変える『その時』が少しずつ近づいていた。

「流牙!!喰らえ、鬼共!!三千世界!!!」

一葉の三千世界で刀を大量に召喚して放つが、流牙を覆い尽くす鬼の密度が高すぎて捌ききれない。

「くっ……ここでは樹木から流牙殿は遠すぎる」

幽には植物を操るお家流があるが、完全に会得してないことと、流牙と樹木の距離が離れすぎて使うことが出来ない。

8

「流牙！こんなところで死ぬんじゃねえ!!ちくしょう、邪魔だあああつ!!」
小夜叉が流牙を助けようと突撃するが、地面から現れた大量の鬼に阻まれる。

7

「流牙様あつ!!」

「綾那！早く流牙様を！」

小夜叉に続き、綾那と歌夜が加わって鬼を蹴散らす。

6

「流牙を離すの！疾風烈風砕雷矢！！」

鞠はお家流を全力で開放して鬼を切り刻む。

5

「ご主人様！臨、兵……くつ、邪魔だあつ！」

小波は印を結んで句伝無量とは異なるもう一つのお家流を使おうとしたが、鬼が邪魔をして集中することが出来ない。

4

「流牙様！」

「早くなんとかしないと!!」

ひよ子と転子も小夜又たちの助太刀に向かいたがったが、足軽の指示と目の前の鬼の撃退に動けない。

3

「何をしていますの、八咫鳥隊！早くハニーを押しつぶしている鬼を撃つのです！」

「む、無理だよぉ～！鬼が多すぎるよ！」

「っ……」

梅は八咫鳥隊に近づくと鬼を蹴散らしながら叫ぶが、鬼が多すぎて鉄砲があまり意味をなさず鳥と雀は焦っている。

2

「流牙様！早く脱出を!!」

「ですが、このままだと……!!」

詩乃と雫は必死に頭の中で打開策を思いつこうと考えるが、見つからなかった。

1

「流牙ああああっ!!」

結菜の悲痛な叫びが響く。

鬼に押し潰されて動けず、ガ口の鎧と共に流牙が鬼に食われそうになったその時……。

0

バリイン!!!

鎧の中で『何か』が砕け、ガ口の紋章が刻まれている腰のエンブレムが回転して上下反転した逆三角形となり、鎧に異変が起きた。

「うぐっ!?!」

流牙が纏うガ口の鎧から流牙に異変を齎す赤い邪気が解き放たれた。

赤い邪気が強い衝撃波となつて放たれ、覆いかぶさっていた鬼を全て弾き飛ばし、流牙は不思議な力で宙に浮いていた。

結菜達は流牙が脱出し、安心した次の瞬間、その表情が不安となつて崩れることとなる。

解き放つた赤い邪気がガ口の鎧に流れ込むと、牙狼剣と牙狼刀が手からすり抜けるように落ちて地面に突き刺さった。

「あつ、がつ……つ、ぐあ……!」

今まで感じたことの無い自分の中の何かが壊れ、何かが入り込む言葉に表し切れない感覚が流牙の体を襲うと、鎧が大きく膨れ上がった。

鎧が徐々に巨大化していき、人型の鎧からまるで神話の化け物のような姿へと変形し

『獣 ～Beast～』

美濃へと撤退している久遠達。

鬼から必死に逃げている中、久遠は左手薬指にはめているザルバの半身の指輪から一瞬、電気のようなものが流れた感覚が体中に過った。

「っ……!?!」

久遠は咄嗟に手袋を外して指輪を見つめた。

カタカタカタ……。

指輪がまるで何かに怯えているように僅かに震えていた。

「ザルバ……何かあったのか……?」

ザルバの半身で作られた指輪は互いに何かあれば強い反応がある。

久遠の指にはめられている指輪はただ震えているだけだが、それが久遠の不安が大きくなつたいく。

「流牙……結菜……」

久遠の脳裏に浮かぶのは大切な二人の姿……久遠は指輪を額に押し付けて祈るように強く願った。

横に腕で振り払う……ただそれだけの行動だった。

しかし、その一振りで数十体の鬼の体はいとも簡単に引き裂かれてしまった。

幾つもの突き出た刃を持つ腕には鬼の頭部や胴体が無残にも突き刺さっていた。

今までよりも圧倒的過ぎるその力に鬼だけでなく流牙と共に戦う人も言葉を失ってしまうほどだった。

『ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!!』

再び咆哮を上げた流牙は心滅獣身となったガ口の力を駆使して鬼を滅ぼしていく。

鬼の爪よりも鋭く大きな両腕をがむしやらに振るい、近づく鬼を次々と引き裂いていき、その穢れた血が鎧の金色を赤く染めていく。

背中の龍のような尻尾が一気に伸びて別の意思を持つかのように俊敏に動き、鬼を次々と数珠繋ぎのように串刺しにしてから叩き落とし、更に追い討ちをかけるように足で踏み潰していく。

相手が鬼とはいえ、まるでこの世のものとは思えない生地獄のような悍ましい光景だった。

殺戮、蹂躪、殲滅……もはや誇り高き守りし者である魔戒騎士の戦いでない、一方的な滅びだった。

『結、菜……一、葉……詩、乃……』

「つ!? ザルバ!!」

ガロの左手の鎧に装着されているザルバが苦しそうな声で結菜達に呼びかける。

ザルバは心滅獣身となったガロに少しずつ呑み込まれていた。

『早く……鎧を解除、してくれ……流牙が鎧に喰われちまう……』

心滅獣身は強大な力で暴走する対価として装着者の魔戒騎士の肉体と魂が鎧に喰われてしまう。

こうしている間にも流牙の肉体と魂がガロの鎧に少しずつ喰われていつている。

流牙を鎧から解き放つ方法はただ一つ。

それは回転して逆三角形となった腰のエンブレムを『魔戒剣』で突くことだ。

しかし、心滅獣身で暴走する破壊の化身となっているガロの懐に潜り、エンブレムを突くことは並大抵のことでは出来ない。

そして何よりこの世界には流牙以外の魔戒騎士が存在しない。

このままでは流牙は鎧に喰われて死んでしまうが、唯一魔戒剣を『召喚』できる者がいる。

「余だけしか流牙を救えんか……」

一葉のお家流、三千世界……実在や空想を関係なく刀を召喚することができる。

つまり、本来なら魔戒騎士にしか使えないソウルメタル製の剣である魔戒剣を振るう

ことは出来ないが、召喚して一時的に操ることが出来る。

しかし、一つ問題がある。

魔戒剣を召喚する際には通常の三千世界よりも一葉の魂が大きく疲労し、一日に一度しか使えない。

もし仮に三千世界で魔戒剣を呼び出してガ口の腰のエンブレムを突こうとしても周囲にはまだ大量の鬼が存在している。

更には暴走している流牙とガ口がそう簡単にエンブレムを突かしてくるはずがない。

一度しかないチャンス……それを確実に決めるには鬼を全て排除し、流牙とガ口の動きを封じなくてはならない。

「心苦しいですが、ご主人様を……今のガ口を一時的に止める手があります！ 発動には多少の時間がかかってしまいますが……」

それは鬼を一気に倒すために温存していた小波のもう一つのお家流だった。

「流牙の目眩しと小波の時間を稼ぐなら私の雷閃胡蝶でやるわ！」

「鞠も！ 鞠も結菜と頑張るの！」

中距離のお家流である雷閃胡蝶と疾風烈風砕雷矢で目眩しと注意を引きつける役目を結菜と鞠が受ける。

時間がないので簡単な作戦しか立てられなかったが、これしか方法はない。

小夜叉や綾那達も流牙を止める為に動きたかったが、下手に近づくとソウルメタルに触れただけで皮膚が引き裂かれ、鬼以上の力を持つガロに人の身で対抗出来るわけないと今回は大人しく下がった。

一葉達は早速作戦を開始しようとしたその時、一つの影が近づいてきた。

「不穏な気配を感じると思ったら……何なのよ、あの金色の化け物は」

それは結菜達も知らない勝気な態度をした少女だった。

そして、一葉と幽はその少女のことを知っていた。

「……やれやれ。誰が来たのかと思いきや」

「あはっ……」

「長尾景虎。久しいな、美空」

その少女は越後の龍と呼ばれる越後の当主、長尾景虎だった。

「ええ。お久しぶりね、一葉様」

「挨拶はいい。何をしに来た？」

「あなた達のご主人様、天人様を見に来ただけど……何処にいるのかしら？」

「……あそこで暴れている金色の狼の中にいる」

「あの中に……？ 柘榴！」

景虎は一緒に来ていた家臣である柘榴を呼んだ。

「お側に居るつす！つて、何すかあの化け物!？」

「知らないわよ。あれが金色の天狼らしいんだけど、あんな化け物だつて聞いてた？」

「いやいや、あんなに大きいはずはないつすよ!!」

「流牙は今、鎧の力が暴走しているのじゃ！早くしないと死んでしまう！邪魔するなら黙っておれ!!」

「ふーん……まあ何が起きているか知らないけど、今死なれると困るのよね。いいわ、手伝つてあげるわ」

「そうか。それなら流牙の周りにいる鬼を頼む！急ぎでな！」

「はいはい、お任せあれ。鬼を皆殺しにしてあげるわ！」

景虎は目を閉じて腕を組むとその身に白い気を纏う。

「ふふつ、さあ派手にぶちかますわよーっ♪おいで！私の妹たち！」

美空の周囲に様々な姿をした戦装束を身に纏った少女達が顕現した。

それは毘沙門天の加護を受けた景虎が現世に護法五神と呼ばれる仏教の守護神を召喚するお家流である。

多聞天、持国天、広目天、増長天……そして、その長、帝釈天。

「帝釈、ごめんねー。初のお披露目だから派手に行きたくつて」

片目を瞑り、戯けた様子で謝る景虎に帝釈と呼ばれた少女は重々しく頷きを返す。

「さあみんな！日の本の法を守る神として、異形の者どもを皆殺しにしてあげましょ♪ さあお行きなさい！私の可愛い妹たち！」

景虎の言葉と同時に戦装束に身を包んだ護法五神の少女達は光の如く駆け抜け、鬼を瞬殺していく。

「んー……数が多いわねー。時間も無さそうだし、めんどくさいから纏めて殺っちゃおっか」

そんな景虎の呟きに呼応するように、護法五神の光は鬼を囲むように移動した。

そして、護法五神で地面に光を描いて繋ぎ、星の形をした五芒星を描いた。

「三昧耶曼荼羅!!」

景虎の声を発すると同時に五芒星から強烈な浄化の光が天に向かって輝いた。

浄化の光に鬼達は一瞬にして蒸発した。

「……ふう。久しぶりに気持ちよく三昧耶曼荼羅をぶつ放したわね。さーて、鬼は全滅したし、あの狼さんも……」

鬼は確かに全滅したが、三昧耶曼荼羅の中心にいた流牙……牙狼・心滅獣身は……。

『「ゴオオオオ……」』

「えっ……？」

「行くわよ、鞠ちゃん！」

「了解なの、結菜！」

「舞い踊れ！雷閃胡蝶!!！」

「うにゃー！疾風烈風碎雷矢!!！」

雷の胡蝶と気の光弾が流牙の周りに飛び、顔を中心に当てて爆発し、目眩しをする。

その間に両手で印を結んで気を高めていた小波は呪文を唱え始める。

「臨、兵、闘、者、皆、陣、烈、在、前！伊賀流奥義！妙見菩薩掌!!！」

小波が声をあげると同時に、練りに練りこまれた小波の気が一気に爆発した。

「来い！北辰より出でて邪悪を打ち祓う、妙見菩薩が慈悲の手よ！」

小波の叫びと共に天空から巨大な手……妙見菩薩の手が召喚され、そのまま暴れているガ口を押さえつけた。

『ゴオオオオオツ!!』

本来なら巨大な拳で敵を叩き潰す妙見菩薩掌で背中から強く抑えられ、強大な力を持つ心滅獣身でさえ簡単に振り払うことが出来なかった。

そして、ガ口の腰のエンブレムが露わとなっており、今なら魔戒剣で突くことができる。

「一葉様、今です!!」

「任せろ!!」

一葉は愛刀を掲げ、精神を集中させて己の魂を三千大千世界と繋げる。

「古の時代より人々を守りし、名も無き騎士達の剣よ、ここに集え!!」

一葉の思いに応え、周りに沢山の魔戒剣が現れる。

それは黄金騎士や名のある騎士達のように実績を持つ騎士の剣ではないが、ホラーの魔の手から人々を守る為に戦ってきた紛れも無い誇り高き勇者達の剣である。

「そして……」

天から一筋の銀色の光が滑空するように舞い降り、一葉の前で止まった。

暴走する金色の天狼を止めるべく、銀色に輝く狼のオーラが現れ、オーラが消えると同時に二つの剣が姿を現わす。

「黄金と対を成す白銀の光……暗闇に輝く二つの銀の牙……『銀狼剣』!!!」

一葉の前に現れたのは牙狼剣と対を成すような二振りの白銀の双剣だった。

「流牙を……心優しき黄金騎士を闇から解き放て!!」

魔戒剣と銀狼剣が流牙に向かって一斉に飛ぶ。

ガ口は魔戒剣が飛んでくる直前に無理やり妙見菩薩掌を振り払い、飛んできた魔戒剣を両腕で薙ぎ払って行く。

振り払われた魔戒剣は次々と霧となって消えて行き、これでは流牙を救えないと一葉

達が絶望する中……銀狼剣から銀色の輝きが放たれると人の形をしたオーラが現れる。

銀色のオーラが形を成すと、そこにいたのは銀色の鎧に身を包んだ魔戒騎士だった。

「銀狼の魔戒騎士……」

銀狼の魔戒騎士……黄金騎士と負けず劣らずの勇ましさと美しさを持っていた。

銀狼の魔戒騎士は銀狼剣を手中で曲芸のような剣を巧みに回転させる鮮やかな動作をして双剣の二つの刃を交差させる。

そして、銀狼の魔戒騎士はガロに突撃して銀狼剣を振り下ろした。

黄金の爪と銀狼剣がぶつかり合い、金色と銀色の火花が激しく散る。

心滅獣身で暴走しているガロを相手に一歩も引かず、それどころか対等以上に渡り合っている銀狼の魔戒騎士の実力に一葉達は驚きで口が塞がらない。

銀色の魔戒騎士はガロの両腕の爪を銀狼剣で受け止め、器用な手先で銀狼剣を操り、銀狼剣の刃をガロの手の甲を突き刺した。

更にそこから刃を地面に突き刺し、杭として打ち込んで動けなくした。

ガロを動けなくした銀狼の魔戒騎士は流牙が落とした牙狼剣の元まで下がり、牙狼剣を持ち上げて構える。

『目を覚ませ！黄金騎士よ!!』

地を蹴って駆け抜け、牙狼剣を前に突き出してガロに一直線で飛んだ。

銀狼剣に両手を地面に打ち込まれ、動けなくなっているガロは銀狼の魔戒騎士に懐に潜り込まれてしまう。

そして……。

ギイン!!

牙狼剣がガロのエンブレムを突き、ガロの動きが止まった。

銀狼の魔戒騎士は銀狼剣をガロの両手から抜くと、ガロは金色の輝きを放ち、心滅獣身で巨大化した鎧が小さくなり、元の大きさに戻る。

エンブレムを魔戒剣で突いたことで鎧が流牙から強制解除され、魔界に送還される。鎧から解き放たれた流牙はその場に横たわり、一葉達は流牙に駆け寄った。

「流牙！流牙あつ!!」

「うっ……うっ……？一葉、みんな……？」

「良かった……無事のようにじゃな……」

流牙が目を覚まし、安心する一葉達。

何が起きたのか分からず呆然とする流牙だが、自分が心滅獣身を起こしてしまったことを思い出し、顔を真っ青にして体が震えだす。

「俺は……俺は……」

「大丈夫。あなたは……ガロは一人も人を殺していない。鬼を倒しただけよ」

「そうか……良かった……」

心滅獣身で暴走していたとはいえ、奇跡的に人を一人も殺していないことに流牙は心の底から安心した。

そして、心滅獣身から自分を解き放ってくれた張本人である銀狼の魔戒騎士を思い出し、ハッと顔を上げて目を向けた。

初めて見る銀色に輝く鎧に流牙は目を奪われながら静かに口を開いた。

「あなたは……？」

名前を聞き、感謝の言葉を言おうとした流牙だが、それよりも先に銀狼の魔戒騎士は持っていた牙狼剣を地面に突き刺さし、背を向けて静かに歩いて行く。

『強くなれ。新たな時代の黄金騎士よ。あいつらのようにな……』

銀狼の魔戒騎士は流牙にそう言葉を残し、銀狼剣と共に霧となって消滅していった。

「ザルバ……今の人……」

『残念だが覚えがない。だが……とても懐かしい感じがした』

ザルバは銀狼の魔戒騎士の事は記憶にないが、己の魂が懐かしいと言っていた。

流牙は銀狼の魔戒騎士の言葉……『強くなれ』を胸に秘めて自分の胸元を強く握り締める。

「へえー。あの凶暴な鎧を脱いでどんな男が出ると思ったら中々の可愛い顔をしている

じゃない」

景虎は流牙の素顔を見てニヤリと笑みを浮かべて近づいた。

「君は……?」

「私は長尾景虎。通称美空よ。初めまして……金色の天狼、道外流牙殿」

これが流牙と景虎……美空との最初の出会いだった。

そして、それが同時に久遠との一時の長い別れを意味していた。

『龍』
M i k u

心滅獣身で暴走していたガロを止める手助けをした長尾景虎……美空は不敵な笑みを浮かべて流牙を見つめていた。

「君が……越後の当主、長尾景虎さん……？」

「ええ、そうよ。道外流牙。早速で悪いんだけど、私の城までご同行願うわ。……それから時間をかけて吟味してあげる」

美空は自分の国である越後まで流牙を連れて行くとした。

詩乃たちはそれを阻止しようと反論しかけたが、流牙は手をかざしてみんなを止め、ゆっくり立ち上がりながら美空を見る。

「えつと……景虎さん」

「通称は美空。美空で良いわよ。禁裏からお許しが出た天下御免の女誑しくん」

「別に好きでそんな名をつけられたつもりはないんだけどな……とりあえず、助けてくれたことに礼を言いたい。ありがとう」

「まあ良いわ。中々面白いものが見れたからね」

「それで……俺をどうするつもりだ？」

「んー……まだ決めてないわ。どうしようっかなあ……。そうだ。あなたの存在って結構目障りだから、処分しちゃうかな♪」

流牙を処分すると聞いて一葉や結菜達はギロリと睨みつけて戦闘態勢を取ろうとするが、流牙が手をかざして抑えながら美空に真つ直ぐ視線を向ける。

「そんな事を一欠片も考えてないくせによく言うよ」

「……なんでそう思うのかしら？」

「俺は鎧の暴走……心滅獣身で闇に堕ちていた。一葉達からあのままだと俺が死ぬと聞かされているはずだ。俺を処分したいなら手を出さずに遠くから見れば良い。この中で一番価値のある將軍の一葉を救いたいなら一葉を連れてとっとと退散すれば良かったはずだ。それでも出てきて助けたのなら、俺に何らかの利用価値があるからだろ？」

「……ふーん。馬鹿じゃないってことかしら？」

「馬鹿は馬鹿でも大馬鹿かもしれないよ？俺のことに利用するなら好きにしろ。けど、俺の話聞いてほしい」

「……話を聞いて、織田に協力しろって私を誑すつもりかしら？」

「誑すつもりなんてないよ。だけど、この国で起きている現状について日の本の国の一つの当主である君と相談したい」

「話、ねえ……」

「とにかく、今は君について行く。話はそれから……」

「分かったわ。でも、あなたの奥さん達が納得してないみたいよ」

流牙の後ろにいた一葉達は勝手に越後に行くこと決めた流牙に何か言いたそうにしていた。

「みんな。言いたいことや気持ちは分かる。久遠との合流は遅れるけど、今は越後に行く必要がある。ここは彼女達におとなしく従おう」

流牙は皆を宥めながら説得して行く。

ひとまず流牙の意向で話は進められ、大人しく美空と一緒に越後に向かうことになった。

「ザルバ……久遠は？」

結菜はザルバに久遠が無事かどうか尋ねた。

「どうだ……？」

『……心配するな、無事だ。遠すぎて気配は小さいが、他にも複数の人の気配を感じる』

ザルバの半身で作られた指輪をはめている久遠をちゃんと感じており、結菜は大きなため息を吐いて安心した。

「そう……良かった……」

「連絡は取れないけど、無事を確認出来ただけでも良かったよ」

しかし、久遠との合流はそう簡単に出来なくなってしまう、ザルバと久遠の指輪が唯一の繋がりとなってしまった。

「ほら、ぐずぐずしないで早く行くわよ！」

「待ってくれ！行く前に……」

急かす美空に流牙は地面に突き刺さった牙狼刀の元に行った。

牙狼刀は既に元の刀の形となっており、流牙は鞘に納めてから魔法衣にしまった。

そして……銀狼の魔戒騎士が地面に刺して置いていった牙狼剣。

「牙狼剣よ……俺は自分の弱さから闇に堕ちてしまった……」

流牙は牙狼剣に語りかけながら柄を握りしめる。

目を閉じて牙狼剣の声に耳を傾けながら誓いを立てる。

「だから俺は、もう一度ここに誓いを立てる。もう二度と、闇に堕ちたりしない。邪悪な魔獣の魔の手から大切な仲間を守る為に、人々を守る為に、そして……亡き者達の思いを背負って強くなる!!俺は……守りし者。黄金騎士ガ口の称号を受け継ぐ者だ!!!」

二度目の絶望で闇に堕ち、仲間のお陰で救われたこの命に報いるために再起の誓いを立てた流牙は牙狼剣を地面から引き抜く事が出来た。

それは牙狼剣が流牙を黄金騎士として認めている証だった。

「ありがとう、牙狼剣……」

牙狼剣は魔戒剣の姿に戻ると、静かに赤い鞆に納めた。

「剣が大剣から直剣に変化した……うへえ……面白そうじゃない」

姿形を変える牙狼剣を見て興味深そうに見つめる美空だった。

「ああ……御大将の悪い癖が……」

「あの男も大変だ……」

苦笑いを浮かべる柘榴と後から合流した美空のもう一人の家臣、大きな甲冑を持ち静かな雰囲気の少女、松葉が柘榴に同意していた。

流牙達は生き長らえたものの、多くのものを失いながら大きな敗北を受けた。

そして……美空との出会いが新たな運命を刻むこととなる。

☆

流牙と流牙隊は美空達長尾衆と共に越後へ向かう。

流牙はなんとか動けるが、兵のほとんどが敗走の疲れが溜まっており、体に鞭を打って必死に歩いていた。

その後、船に乗って日本海の荒波を乗り込ませてたどり着いたのは越中と越後国境辺りにある海津の湊だった。

船酔いで気分を悪くする者が多かったが、体は休める事が出来、ここからまた歩きに

なる。

すると、湊の入り口の方が騒がしくなってきた。

「おんたいしょー……！」

「……何だありや」

「……おっぱいが走ってきます」

「何それ……？」

雫が変なことを言い疑問符を浮かべている流牙はその声に耳を傾けて、目を細めて遠くを見ると……大きな胸を揺らしながら必死に走っている女性の姿が見えた。

「ああ……そういうことね」

流牙が納得したように苦笑を浮かべ、ひよ子達が自分の胸を触りながら恨めしそうに色々呟いていたが、流牙は何も聞かなかったことにした。

「お、御大将……！」

「秋子？あなた、どうしてここに？」

その女性……秋子は美空の家臣の一人でここにいることに美空達は驚いていた。

秋子は息を整えながら美空達に何が起きたのか話し始めた。

「か、かすが、やまじようが、おちました……！」

「……っ!？」

「かすがやま……?」

「春日山です。長尾家の本拠地ですよ」

「美空達の……? どう言うことだ……?」

流牙は目を閉じて耳を傾けながら美空達の話聞く。

どうやら美空の姉が春日山城を乗っ取ったらしく、場内には空と愛菜と言う美空と秋子にとって大切な子達が人質に取られたらしい。

しかし、難攻不落と言われている春日山城を攻められるとあつて美空達は俄然やる気が出ていた。

話が一通り終わったところで流牙は美空達に話しかける。

「なんか大変な事になっているみたいだね」

「ああ、流牙。いたの」

「盗み聞きは趣味悪い」

「悪いね。昔から耳が良いからさ。それより、空って誰?」

「ああ。空は私の娘よ」

美空に娘がいることに驚きで流牙は目をパチクリとさせながら尋ねた。

「娘? 美空、結婚していたの?」

「してないわよ!」

「え？じゃあ未婚の母？若いのに大変だったね」

「違うわよ!!男と付き合った事ないし、まだ処女よ!!」

「何もそんな暴露をしなくても……」

「はあはあ……く、空は私が養子にしようと思っっている子。正式に盃を交わした訳ではないから、まだ本当の娘って言うわけでもないけどね。ちなみに愛菜はここにいる秋子の養子よ」

「あ、そう言う事？」

『と言うか、お嬢ちゃんみたいなきつい性格の女が嫁だと結婚した男は苦労しそうだな……』

「おおー！指輪さん、分かっているっすねー！御大将、見た目とかはバツチリなんすけど、なかなか嫁の貰い手がいなくて……」

「貰い手よりも先に娘の空様が出来た。夫が出来るのはまだまだ先」

ザルバの呟きに同意し、自分達の大將なのにぶっちゃけた発言をする柘榴と松葉だった。

「あんた達……馬鹿姉の前にぶっ飛ばしてやろうかしらあつ!!？」

「お、御大将！落ち着いてください！」

散々な言いがかりにブチ切れそうになった美空を秋子が抑えながら小さい声で流牙

のことを聞いた。

(と、ところで、こちらの方は、一体どなたなんです?)

(……こいつが例の男。道外流牙よ)

(道外流牙!?あの田楽狭間に舞い降りた天人で黄金の鎧を身に纏う金色の天狼!?はあ……なんか想像と全然違いますね……)

(確かに。私も最初、鎧の下にどんな厳つい顔をしているかと思つたら見た目は結構可愛いし。でも、意外と奥手よ。だって……沢山の妻がいるのに一人も手を出してないですって)

(ええっ!?ほ、本当ですか!?見たところ可愛い子達があんなににいるのに!?)

(一葉様に聞いたたら身持ちが固いらしいわよ。全く、ヘタレなのかどうか知らないけど、男としてかなり勿体無いことをしているわね)

(でも、見境なく手を出す男よりは好感が持てますよ?手を出さないのも大切に思っているからでは?)

(さあ?知り合つてまだ間もないからあいつがどんな男かまだ知らないわ。これからじっくり見定めるわ)

二人がヒソヒソ話をしているのを流牙にはしつかりと耳に届いており、心の中で苦笑いを浮かべながら秋子に近づく。

「えつと……お姉さん、初めまして。俺は道外流牙。これからお世話になるみたいなので、よろしくお願いします」

「お、お姉さんだなんて……えつと……私は直江与兵衛尉秋子景綱と申します。秋子とお呼びください」

「よろしく、秋子さん」

「え、あ、は……はい……」

にっこりと優しい笑みで微笑む流牙に秋子は何故か顔を赤く染めながら頷いた。

「……やれやれ。早速一人誑したのね。スケベじゃないのによくやるわ」

『そう言うなお嬢ちゃん。こいつは素でやっているだけだ。天然と行ってやれ』

「ザルバ……だっけ？あんたも苦労しているわね」

『いんや、もう慣れた』

「ああ、そう……」

呆れと諦めたような感情が混ざったザルバの声に美空は同情していた。

「あはは……さて、話を戻すけど、春日山が大変なんだろ？どうするんだ？」

「……んー。ねえ流牙」

「何？」

「手伝ってみる気……ない？」

流牙を見上げる赫い瞳は牙を隠した龍のように見え隠れしており、流牙はさつきとは違う笑みを浮かべた。

「……ひとまずは保留にして?」

「保留? ふーん……流牙、あなたが見据えている未来に向けて、私に借りを作るのも悪くないんじゃない?」

「一理あるけど、まだ状況が分かってないのにそう簡単に了承できないよ。それに……何を手伝うか明確に言っていないから何をされるか怖いからね」

相変わらず笑顔を浮かべながら美空と交渉する流牙。

場に妙な静けさと緊張感を漂わせており、流牙と美空の背後には狼と龍のオーラが現れて睨みつけているように見えていた。

「……ふん。食えない男」

「食えないか、初めて言われたよ」

美空は流牙達の力を借りられないと知るとすぐに秋子達と現状の整理をする。

どうやら美空の母まで反乱に加わっているらしく、状況はかなり悪かった。

美空は一足先に街の外にある陣へ向かい、流牙達はこれからどうするか柘榴達に尋ねた。

「何すかりユウさん!」

「流牙だって……なんで牙を抜くの？」

何故か柘榴は流牙の事を『リュウ』と呼んでいる。

「あ、失礼しましたっ！柘榴は柿崎景家、通称柘榴っすー！よろしくっすよ、リュウさん！」

「甘粕景持、通称松葉」

「直江与兵衛尉景綱と申します。通称の秋子とお呼びくださいいね」

「改めて、道外流牙だ。よろしく。それで、俺たちはどうすればいいんだ？美空に人質として連れてこられたんだけど……こんな状況になったし」

「んー……どうすりゃいいっすか？」

「わ、私に聞くの!？」

「秋子は家老。松葉たちは武将。よろしく」

流牙達の事を丸投げする柘榴と松葉に秋子は頭が痛くなる思いだった。

「都合の良い時だけ家老なんだかもう……。でもどうしてこんな時に、こんな人たちを拾って来ちゃったのかしら、御大将は……」

「リュウさんの金色の鎧もそうっすけど、一番は姿形が変化する剣に興味があつたんっすよ、きつと……」

「御大将の趣味……」

「ああ……そう言う事……」

柘榴と松葉の話に秋子は呆れ果てて大きなため息を吐く。

「牙狼剣を……う？」

おもむろに魔法衣から取り出した牙狼剣を見つめながら秋子たちを見ると、柘榴と松葉は少し心配するように警告した。

「リュウさん、御大将はその剣を狙ってますから気をつけた方が良くつすよ！」

「御大将、刀を集めるのが趣味だから……」

「まだ若いのにね……」

「そうなんだ……」

刀を集めるのを趣味にするのは珍しくはなく、牙狼剣を目に付けるのは美空の目は正しいと言えるが……。

「そんな事で連れてこられたのか……」

「あれ？でも牙狼剣は流牙にしか持てないじゃない」

「そうじゃな。あの銀狼の魔戒騎士は……まあ、実体じゃないが魔戒騎士だからこそ持てたようじゃな。それ以外で持てるのはこの世界にはいないだろう」

結菜と一葉が牙狼剣を見ながら言うのを聞いた柘榴は興味深そうに牙狼剣を見る。

「そうなんすか？へえー、もしかして選ばれた者にしか使うことができない！とか、そう言う感じの不思議な力が込められた剣つすか？」

「まさか、そんな神話のような剣があるわけ……」

「え？そうだけど？」

「そうなんすか!？」

ガロの鎧や牙狼剣の変化した姿を見たことない秋子は目を見開くように驚いた。

「柘榴、試しに持つてみる？」

牙狼剣を鞘から抜き、刃の切っ先を地面に向けたまま柘榴の前に持つていく。

「え？良いんすか！よっしゃあーこの神剣を持つてみせるっす！」

「離すよ」

柘榴が目を輝かせながら牙狼剣の柄の辺りを持ち、流牙が手を離れた瞬間。

ズドオン!!

牙狼剣がまるで地面に引き寄せられたように突然重くなった。

刃が地面に突き刺さり、柄を持つていた柘榴が地面に撃沈する。

「どわあああつ!?!な、何すかこれ!?!重すぎるっす!!松葉!一緒に持ち上げるっす!!」

「そんなに重い……?あれ……持ち上がらない……まるで杭で止めているみたいに重い……」

柘榴と松葉の二人掛かりでも持ち上げられない牙狼剣……流牙は悪戯っ子みたいに笑いながら二人の手を退けて羽根を持つように軽々と持ち上げる。

「牙狼剣の刃はこの世界には存在しないソウルメタルと言う特殊な金属で作られていて、普通の人は持ち上げることできないんだ。そして、牙狼剣と魔界に眠るガ口の鎧には、何十人と言う先代の黄金騎士の魂が宿っていて、選ばれた継承者にしかこの牙狼剣を扱うことは出来ないんだ」

流牙が持つことによつてソウルメタルが羽根のように軽くなつており、牙狼剣を軽やかに回しながら振るい、鞘に納めた。

「そこまで聞くとリュウさんのお家流、かなり規格外つすね……御大将の護法五神も凄いつすけど、あの鎧に三昧耶曼荼羅が効かなかつたし……」

「……あれはかなり驚いた」

「お、御大将の三昧耶曼荼羅が!?なるほど……これが金色の天狼と言われる所以ですね」
「いや、その三昧耶曼荼羅を受けた時は鎧の力が暴走してあまり記憶に無いんだけど……ところで話は逸れたけど、とりあえずは一緒に行動すれば良いかな?」

「は、はい。食料もお出ししますので安心してください」

「ありがとう。さてと……それじゃあまた後で」

流牙は秋子たちと別れてその場を後にする。

そして、少し離れたところで陣を引いている松平衆の元へと足を運んだ。

『道』
（Road）

秋子達と別れた流牙は松平衆の陣所に向かった。

流牙は今後美空達と行動を共にする考えを示すと、葵と悠季は明らかな反抗的な態度をとる。

「……鬼と戦うために、松平衆は久遠様の呼びかけに呼応したのです。今、越後の内乱に時間を割く余裕はございません」

「そうだけど、今後を考えれば美空達を仲間に取り入れる理由があると思う」

「そのために時間を割くと？……あまりにも迂遠すぎやしませんかねえ？」

「迂遠……そうかな……」

「その迂遠さが金ヶ崎の退き口に繋がった、と私は見ておりますか？」

「……葵も同じ意見？」

「私は、この国の民の事を一番に考えているだけです」

「葵の考えは俺も同じだ。でも、焦って仮に越前に戻って戦えば俺たちは必ず負ける。美空達の力を借りる為にも時間が必要だ」

まだ未知数な敵である鬼……そしてその背後にいる黒幕も分かってない以上、美空達

の力が必要になると流牙は考えている。

「越後一国に十年も時間をかけるおつもりですか!？」

「そんなつもりはない。でも時間をかける必要はあると俺は思ってるから」

「越後の長尾どのと信頼関係を結ぶための時間。それは日の本の力無き民が、鬼に食われ続けている時間でもあるのですよ?」

今こうしている間にも日の本の力無き民が鬼に食われている。

しかし、魔戒騎士である流牙がその事を忘れているわけがない。

「そんな事……俺が魔戒騎士として戦い始めてからずっと悩み続けているよ」

「ずっと……?」

「俺は……俺たち魔戒騎士と魔戒法師は守りし者として魔獣ホラーの魔の手から人々を守ってきた。だけど、全ての人間を救ってきた訳じゃない」

最強の魔戒騎士である黄金騎士の称号を持つ流牙でも救えなかった命は沢山あった。

それは人がいる限りホラーとの戦いが永遠に終わらない全ての魔戒騎士と魔戒法師の終わりなき悩みの一つでもある。

「俺や俺の仲間達も出会ってきた沢山の大切な人達の命をホラーに奪われた。どれだけでも多くの人を救っても、それを嘲笑うかのようにホラーは人を喰らい続ける」

臉を閉じて思い出すのは失ってしまった多くの人々の姿。

「俺たちは万能の神じゃない、どれだけ力を尽くしても救えない命は必ずある。その度に俺たちは悲しみ、嘆き、涙を流してきた……ああしてれば、こうしてれば良かった。もつと自分に力があれば……そう何度も数え切れないぐらい思い続けている」

それはホラーやこの世界での鬼の戦い、どちらでも同じだった。

愛しき者、親しき者、平和に生きる者……失いたくない人達を全て守ることが出来なかった。

その度に流牙の心には負の感情が現れ、絶望へと追いやられていく。

しかし、流牙はどんなに辛いことがあつても大切な人たちとの約束と己の誓いを胸に抱き、走り続けると誓った。

「でもだからと言って俺たちは立ち止まる訳にはいかない。たつた一人でも多くの命を救うためにも、これからも戦い続ける。そして……この日の本に住む人々の為にも、自分の出来ることを全力でやるんだ」

数え切れない戦いを経験し、救えなかった命を何度も見てきた流牙の言葉にはとても重みがあつた。

葵はこれ以上言い争つても流牙を論破することはできないと判断した。

「……分かりました。我ら松平衆は、今しばらくは流牙様に従いましょう」

「ありがとう。それから、言いたいことがあると言えば言ってくれ。松平衆だけでも三河に戻

せるよう美空に相談してみるから。今はちよつと難しいかもしれないけど」

「はい。その時はお世話になりました。……では私は所用がありますればこれにて。……悠季、行きますよ」

「はっ！」

葵と悠季はその場から離れ、流牙はため息を吐いて頭をかく。

葵の言うことは理解できているが、流牙はボルシテイの経験から皆が更なる力を付けなければ勝てないと誰よりも分かっている。

大敗と絶望を同時に受けたことがある流牙だからこそ尚更、美空の力が必要になると信じている。

そこに葵とすれ違って入ってきた綾那と歌夜は葵の表情を見るなり驚いてしまった。

二人は流牙と葵が喧嘩をしてしまったのかと心配したが、流牙は二人を安心させるように笑顔を見せながら頭を撫でた。

そして、互いの思いのぶつかり、意見の違いですれ違った事を伝えた。

「俺は一度、天の世界でこの身に大敗と絶望を受けている。だから、もう負けられないんだ」

「流牙様が大敗と絶望を……？」

「何があつたんですか……？」

「……俺は強大な敵にこの目を剣で潰されて、大切な仲間を連れ去られてしまったんだ。そして、敵の黒幕にお前は負けたんだと宣告されたんだ」

あまりにも衝撃的な流牙の答えに綾那と歌夜は言葉を失った。

「だけど、俺の母さんが目を元に戻してくれて、仲間と一緒に全ての敵を倒して勝つことが出来たんだ。俺はもう何も失いたくないから自分の出来ることを全てやるんだ」

流牙は二人にも葵に伝えたように自分の今の気持ちを伝え、流牙隊の元へ戻った。

二人はそんな流牙の言葉を受け止めてこれからどうするか悩み、相談するのだった。

☆

湊に戻った流牙はこれからどうするか結菜や一葉達と話し合い、流牙の考えである美空に恩を売り、味方につけると言う方針で決まった。

武士としては正道では無いが、元々流牙は騎士であり、自由な性格なことを流牙隊のみんなが分かっており、これが未来に繋がると信じている。

流牙の方針に従い、早速美空の元に向かい、春日山城奪還に参加しようと思ったその時、綾那と歌夜がやってきた。

綾那と歌夜が流牙隊に入ると宣言し、歌夜が詳しく説明すると松平衆は痛手で休ませたい状況。

しかし、綾那と歌夜を流牙隊に入れることで戦力を温存しつつ松平衆に戦う意思を示

すことを意味する。

『あの葵のお嬢ちゃん……中々の狸だな』

策士とも言えるその考えにザルバは変な意味で感心していた。

「ふふっ。これで綾那も、堂々と流牙さまのお手伝いが出るのですよー!」

歌夜は葵と悠季の考えを薄々気づいているが、綾那は流牙の手伝いが出るとあつて無邪気に喜んでゐる。

「葵と悠季が何を考えてるか知らないが、もしも綾那と歌夜と小波に悪い影響を与えるなら、守つてやらなくちゃな……小波、君はどうする?」

「……自分は否を言う立場にはおりません。全てご主人様のお考えに従います……」
「分かった……」

小波も歌夜と同じく薄々気づいているらしく暗い表情を浮かべてゐる。

こうして綾那と歌夜は流牙隊に入る事となり、早速美空の元に向かおうとしたその時、一葉が流牙を止めた。

「待て、流牙。余も同行する」

「分かった、行こう。だけど、喧嘩は無しだよ?」

「分かっておる。さっさと行くぞ」

「ああ!」

流牙と一葉は美空がいる町外れの陣所へ向かった。

美空の陣地で忙しそうに指示を出していたのは秋子だった。

「あら、流牙さん。公方さまも！」

「秋子さん、美空に話があるんだけど通してもらえるかな？」

「何の御用ですか？御大将でしたら、余り機嫌は良くありませんけど」

「ちよつと大事な話だよ」

流牙はそう言うが秋子は黙ったままだった。

仮に流牙一人で来ていたら追い返されていたが、隣には一葉がいる。

一葉は得意げな顔をしており、秋子は將軍を追い返すことはできないと近くにいた兵を呼んで奥に使いを出した。

使いの兵に案内され、陣の奥に入るなり美空の冷たい視線が向けられた。

「あれ。また来たんすか？」

「……なに？忙しいんだけど」

「単刀直入に言うよ、俺たちは春日山城と娘さんの件、手伝う事にしたんだ」

「何？長尾景虎が織田に泣きついたって評判でも立たせたくなった？だったらお断り
よ」

「そんなつもりはないよ。俺の願いはただ一つ、鬼との戦いに手を貸して欲しいんだ」

「ふーん……」

「私とその約束を履行すると信じてるんだ？」

「ああ」

「即答ね……」

「少なくとも、自分の娘や仲間を大切にする人を俺は信用に値すると思ってるからさ」

「会って間もないのにどうしてそこまで分かるのよ？」

「それなりに色々な人と出会って来たからさ。何となく分かるんだよ」

「何となくね……それで、あなたたちはどうするのよ？」

「まずは信頼関係を結ぶことからだと思う。だから、俺たちのことを知ってもらおう」

「試せてこと？」

「そうだな。だけど、今の流牙隊には食料も玉薬も何もないから試して使ってくれ」

「……足らなければ、反故にしても良いのね」

「ああ。だけど、君が力を貸してくれるって俺は信じている」

「すごい自信っすね」

「まったくね。その自身の根拠、なんなのかしら？」

「勘……かな？」

「いい加減なやつ。そんなのでよく一手の大将が務まるわね」

「俺は大将の器じゃないけどね。みんながいてくれるからここまで頑張れだけさ。それで、どう？」

「細かい条件は？その約束と補給以外にもあるんでしよう？証文の裏書まで守る気はないわよ」

「流牙隊は美空の下につくけど、無理難題には応じないよ。俺たちは決死隊じゃないから。それぐらいかな？俺たちは裏方専門だから」

「裏方？」

「潜入や調査、後は後方支援。まあ、鬼に関しては俺はみんなより派手に暴れるけどね」
「鬼ね……まあこの越後には鬼はいないからその力を使うことはないでしょう。じゃあ、あなたは他に何が出来るの？」

「俺？」

「そう、あなたよ。噂では確か、決して人を斬らないのよね？まさか鬼を斬るしか芸はないの？」

「魔戒騎士の掟で人を斬る事は許されない。でも、そう言われたら何か大きな手柄を出さなきゃね。そうだな……春日山城に行って潜入調査をしてこようか？」

「潜入……調査!?あ、あなたが!」

あつけらかんと言う流牙に美空は驚き、流牙は得意げに話し始める。

「こう見えても俺は敵地に乗り込んでよく調査するんだ。潜入調査は魔戒騎士としての仕事の一つだからな。流石に空ちゃんと愛菜ちゃんを連れ出すことはできないけど、城の内部がどうなっているのか調べることは出来るよ」

「随分な自信ね……でも口で言うのは簡単よ?」

「それじゃあ、ちよつとした証を見せるよ」

流牙は一葉の隣から離れて陣の外に出るとそこでバク転をした。

バク転をして地面に着地すると同時に流牙の服が越後衆の足軽が着用している衣服と鎧に変化した。

「……なっ?!」

「何と……?!」

流牙の衣服が一瞬で変化したことに美空達と一葉は目を見開きながら驚いていた。

「ど、どう言うこと? 一瞬で流牙の姿が越後衆の足軽の格好に……?!」

「着ている衣類や鎧もうちで使っているのと同じです!」

「何すかそれ?! リユウさん、凄いです!」

「これは驚き。どんな絡繰?」

「俺が着ている黒衣は魔法衣と言われて霊獣と呼ばれる毛皮から作られ、魔戒法師の法術が込められている。外部からの攻撃を抑え、俺の望む姿に衣装を変化させることが出

来るよ。例えば……こんな感じにね！」

流牙は足軽の姿から次々と魔法衣を変化させていく。

タキシード、カンフー服、軍服……この国にはない、今まで見たこともない服に変身させて美空達を驚かせ、最後にいつもの魔法衣に戻す。

「とまあ、こんな感じに服を変化させられるから、春日山城の兵士たちの格好になって侵入すればいけるよ」

「なるほど……軒猿に匹敵する優れた体の作りに衣服を自由に変化させる魔法衣ね。確かにこれは使えるわ。流牙、早速その力を使つて春日山城の内部の状況を調べてもらえらる？」

「分かった。ただ、春日山城のことは何も知らないから、そここのところの詳しい打ち合わせはまた後でやろう」

「ええ。それから……」

「空ちゃんと愛菜ちゃんの安否の確認だろ？分かつてるよ」

「……頼むわ、流牙」

「流牙さん、よろしくお願いします」

「ああ。任せてくれ」

美空は流牙と流牙隊を春日山城奪還に使う事を決め、すぐに陣を払つて春日山城へと

・
向かう準備をする。

『愛　　〕 Family 〕』

春日山城に向けて移動し、夕暮れ時に流牙は流牙隊のみんなと一緒に夕食を食べていた。

ちなみにそれだけじゃ少し足りないので近くの野山に生えている野草などを流牙や小波で採取し、料理上手の結菜や転子がお浸しやお吸物にするなどをしてなんだかんだで結構充実しているのだった。

そんな楽しい夕食の時、結菜はあることを思い出すように流牙に尋ねた。

「ところで流牙、一つ聞きたいことがあるんだけど」

「ん？何？」

「移動とかで忙しくてなかなか落ち着かなかったけど、あなたのガクの鎧……どうなってるの？」

「どうなってるって……」

結菜の質問の意味がいまいちわからずきよとんとしている、少し不安な表情を浮かべてその意味を答えた。

「ほら、この間……心滅獣身で鎧が大きくなって、色々変化していたじゃない……」

「ああ……」

心滅獣身でガ口の鎧は何倍にも膨れ上がり、魔戒騎士の鎧から破壊の化身となった巨大な獣の姿へと変貌した。

銀狼の魔戒騎士のお陰で腰のエンブレムを牙狼剣で突き、鎧を強制解除をして魔界に送還したがそれ以降、流牙は一度も鎧を召喚していない。

「多分大丈夫だと思うよ？ 鎧は一部が破損しても魔界に送還して再召喚すれば元に戻っているらしいから。何なら食事の後に召喚してみるか」

「そうね、私も久しぶりに鎧を真正面からしっかりと見たいし。みんなも見よよね？」

『はいっ！』

ひよ子達は元気よく返事をし、急いで夕食を食べ終わると陣から少し離れた静かな小川の近くで行う事になった。

結菜や一葉、流牙隊の主要メンバーが集まり、流牙は皆から見つめられて少し緊張しながら牙狼剣を左側に構える。

そして、鞘から抜いて天に向けて光のように掲げ、切っ先で光の円を描いた。ひび割れた円の中から金色に輝く鎧が召喚され、流牙の体に装着される。

夜の闇を照らすように煌びやかに輝く黄金の光。

それは結菜達がよく知る人々に希望を与える金色の光、黄金騎士ガ口の姿だった。

威風堂々とした変わらぬ、心滅獣身の恐ろしくない、いつものガ口の姿に結菜達は流牙に拍手を送った。

拍手喝采を浴びた流牙は照れくさそうにしながら鎧の橙色の瞳で皆を優しく見つめた。

するとそこに四つの影が流牙達に近づいていた。

「へえー！それが金色の天狼の本当の姿なのね。なるほど、この前のと違って勇ましくて美しい鎧ね」

それは流牙が鎧を召喚して披露すると、どこからか嗅ぎつけてきた美空達だった。

「おおー！とつても綺麗っす！こんな真夜中なのにキラキラしてるっす！」

「本当に綺麗……」

「これが金色の天狼……なるほど、この越後までその名が轟いてもおかしくないですね」
美空達がガ口の鎧の美しさに絶賛し、中でも特に気に入った美空が近づいたその時だった。

美空の体から白い光が輝くと五つの光が舞い降りた。

「た、帝釈?!みんな!?!」

それは美空と契約している五つの戦乙女……護法五神だった。

帝釈天たちは美空を守るように前に出てガ口を睨みつけて警戒していた。

ガロの鎧の中にある秘められた邪悪な力……神である帝釈天たちはそれを警戒している。

それに気付いた流牙は静かに帝釈天たちに近づく。

ガシャン！ガシャン！！と、鎧の重みがある音が一步一步と静寂の空気に響きあつた。

帝釈天たちは近づく流牙に警戒心を高め、今すぐにでも交戦しようとしたが、流牙は歩きながら鎧を解除すると牙狼剣を鞘に納めて美空たちにも見せる。

「護法五神の帝釈天、多聞天、持国天、広目天、増長天……で、名前は合ってるよね？」
神仏である護法五神に対し、恐れずに笑顔を向ける流牙。

鎧を解除しても未だに警戒している帝釈天たちに流牙は自分の気持ち伝える。

「君たちは美空のことを大切に想っているんだね。でも大丈夫、この牙狼剣の刃が、ガロの力が人間に向けることはない。守りし者として、俺は人間を守るために戦い続ける。だから……俺を信じて欲しい」

流牙の言葉にそれが嘘ではないと感じた帝釈天たちは静かに警戒と戦闘態勢を解いた。

そして、目を閉じて光となって流牙と美空の前から姿を消した。

「驚いた……帝釈たちが私以外の言葉をちゃんと聞くななんて」

「ふう。流石は神様、ホラーと対峙するより緊張するな」

流牙の世界には神という存在がいるかどうか分からない。

人間以外の異形はホラー、稀に霊獣が存在するが神は見たことない。

「でもまさか美空たちが見にくるとは思わなかったよ」

「二度見ておきたかったからね。あなたの鎧を見れて良かったわ。まさに金色の天狼に相応しい姿だったな」

「ありがとう。そうだ、これから南蛮の楽器を演奏するんだけど、せっかくだから聴いていけば？」

流牙は魔法衣からギターを取り出した。

鎧のお披露目と一緒に皆の心を癒すために流牙のギターの演奏会もやる事になっていた。

「これが南蛮の楽器……せっかくだけど、やめておくれ。まだ空と愛菜と春日山城を取り戻してないし。そうね……演奏は二人を取り戻した時の宴の席で披露してちょうだい」

「分かった。取って置きの曲を演奏するよ」

「ええ、楽しみにしているわ」

美空たちとその場で別れ、流牙はギターを構えて心を癒す月夜の演奏会を始めるのだった。

☆

それは春日山城に向けて準備をしていたある日のことだった。

「たのもー! たのもーっす!」

「ん? 何だ?」

道場破りのように活気のある叫ぶ声が流牙隊の陣の外から聞こえ、流牙は陣の外に出てそれらを出迎えた。

「あ、リュウ」

「これはリュウさん直々にお迎えっすか。丁度良かったっす!」

それは松葉と何故か大量の武器を持って来て背負って来た柘榴だった。

「どうしたんだ? 柘榴、そんなに叫んで。まるで道場破りみたいだっただぞ?」

「え? 破っていいんすか!」

「一応道場みたいな事をやってるけど、看板は無いよ?」

ちようど流牙は久しぶりに道外流道場として陣内で軽く稽古をしていた。

「でも強い奴はいるっすよね!」

「まあいるけどね」

「じゃあ今日は誰がいいっすかね……そうだ! あの槍持ってるちっちゃいのとかいるっすか?」

「槍使いで小さい……どっちだ？」

流牙が思いつく限り槍使いで小さくて強いのは小夜叉と綾那の二人だった。

「どっちが誰だか分かんないけど、どっちでも……何だったら両方でもいいっすよ」

「それだけはやめておけ。とりあえず中に入れば小夜叉か綾那……どっちかいると思うから。好きに戦って」

「分かったつす！松葉、後は任せたですよ！」

「承知」

そう言うつてうきうきと楽しそうな雰囲気で柘榴は沢山持つてきた武器と共に陣の奥へ走つていった。

「それで。俺になんか用でもあったの？」

「柘榴はおまけ。大将がお呼び」

「美空が？分かった、行こうか」

流牙は松葉に連れられて美空の元へと向かった。

その途中でひよ子と転子と小夜叉、そして秋子と会った。

無事に流牙隊と森一家の補給が完了し、八咫鳥隊を含む鉄砲隊は戦で大きな戦力になるので玉薬も補給してくれた。

「ありがとう、秋子さん」

「いえいえ。それより松葉ちゃん。柘榴ちゃんは？」

「いつもの悪い癖」

「……そう。それと……御大将はどうだった？」

「まだ平気。普通にしてる」

美空の様子を気にしている秋子に流牙は目を細めた。

「そう……。なら良かった。すみません、うちの若い衆がご迷惑をお掛けしているよう
で

」

「とんでもない。こちらにも戦いが好きな子が多いから、いい刺激になると思うよ」

「そうならいいんですが……」

「ンだ？何かやってんのか？」

「流牙さま、何かあったんですか？」

「柘榴が流牙隊と腕試しがしたいらしくてね。多分、綾那と戦ってると思うよ。小夜叉も行ってきたら？」

戦うことが好きな小夜叉は流牙にそう言われて元気よくはしゃぐ。

「おっ！いいな、よーし行ってくるぜ！」

「こ、小夜叉ちゃん!？」

「ま、待つてくださいいよー!」

小夜叉は柘榴と手合わせをするために流牙隊の陣に向かって走り、ひよ子と転子は後を追う。

「大丈夫かしら、柘榴ちゃん……その辺の加減は……多分、大丈夫なんじゃないかなーって……思っちゃったりはするんだけど……」

「大丈夫、そう、信じたい」

「まあ、何かあつたら大騒ぎになるし、もし収集がつかなくなつたら俺が拳骨を食らわせで大人しくさせるから」

ちなみにその拳骨だが、実践したことはないが小夜叉と梅が恐れる岩を砕く鉄拳だとは二人は知らない……。

「げ、げんこつですか……? とりあえず、その時はお願いしますね?」

「任せてくれ。それじゃあ松葉、美空の所に行こうか」

「うん」

秋子と別れ、引き続き松葉と歩いていると流牙はあることを思い出す。

「そう言えば……さつき秋子さんと話していた、美空の様子って、何かあるのか?」

「……………出家」

「出家?」

「大将、機嫌が悪くなると出家するって言い出す」

「どういうこと？」

「もともと大将、僧籍の身」

「僧籍だったんだ……」

「普段は空さまがいれば平気。でも、今はないから……みんな心配している」

「美空にとつて家出みたいなものか……小さい頃にお寺に預けられていたからか」

「……喋りすぎた。大将には内緒」

「ああ、分かったよ。美空には黙っておくよ」

「うん。あ、着いた」

話をしているうちにあつという間に美空の陣に到着した。

「大将。リュウ、連れて来た」

「遅かったわね。柘榴は？」

「悪い癖」

「ちよつと抜け駆け!? 誰とやり合ってるの。一葉さまだったら承知しないわよ!」

「違う。槍使いで、ちっちゃくて、強い」

「槍使いで、ちっちゃくて強い……誰?」

「何人が候補がいるけど、多分綾那。今頃やってると思うよ?」

「ちっちゃくて強い槍使いだけでそんなにいるの？ちよつと有能な人材が多すぎるんじゃない？」

「お陰様でね。それより、補給してくれてありがとう」

「大将。松葉はこれで」

「ええ、ご苦勞様」

松葉と別れ、流牙は椅子に腰掛けて美空に話しかける。

「それで、今日はどうしたんだ？何かあったのか？」

「暇だから呼んでみただけ」

「そうなの？それじゃあ、何か話でもする？」

「随分とあっさり了承したわね……」

「美空と友好を深めるにいい機会だろ？まずは話からしなくちや何も始まらないからね」

「全く……本当にあなたは女誑しね」

「ちよつと、その点だけは断固抗議するけど」

「あら何を言うの？幕府公認の誑しの癖に」

「好きで幕府公認になったつもりは無いんだけど……はあ……本当にどうしてこうなっただんたろうな……」

流牙はしよぼんと暗くなり、自分の不運(?)と言う名の女難に酷く落ち込んでいると、流石の美空も少し言い過ぎだと思い、急いで話題を変える。

「えっ……? そ、そんなに落ち込まなくても……そ、そうだ。一つ聞きたかったんだけど！」

「何……?」

「ここに来るまでに、あなたの兵に風邪の予防方を教えていたわよね。あれは南蛮のやり方?」

越後に来る際、流牙は流牙隊や兵のみんなに風邪をひかないように予防法を教えてくださいましたので、寒い地域に住んでいる美空はそれを非常に興味を持っていました。

「ああ……こっちはかなり寒いから風邪を引かないように対策を話していたんだ」

「良かったらそれを教えてくれない?」

「別に良いよ。越後は寒い地域だから通用すると思うし」

「あなたの国も寒いところだったの?」

「いや、俺の生まれ故郷はそうでもなかったよ。ただ、俺は無人島で十年も過ごしていたから、そこで独自に編み出したんだ」

無人島で十年過ごしていたと言う流牙のとてもない発言に美空は自分の耳を疑った。

「……はい？ おかしいわね、今無人島で十年も過ごしていたって聞こえたけど……」
「おかしくないよ。本当に無人島で十年を過ごしていたんだよ」

「何で無人島で十年も過ごすことになっているのよ!? 一体何歳からやったの!?!」

「何でって、魔戒騎士としての修行で、ガ口の鎧を継承するための修行。七歳から魔戒獣の羅号と一緒に毎日ひたすら修行に明け暮れていたんだ。特に冬は寒くてね……最初の方は本当に寒くて、凍えて危うく凍傷になりかけたから。うおっ、今思い出すだけでも寒いな……」

「七歳の時から十年も修行って……ま、まあ、無人島って言っても流石に雨風凌げる家くらいは……」

「そんなものは無かったから外で寝ていた野宿だよ」

「悉く美空の予想を遥かに超える流牙の過酷な修行時代に自分の人生は何だろうと落ち込んでしまう美空だった。」

「……寺に預けられて、越後の当主になって、その結果……捻くれている私の人生って、何だろうって思えてくるわ……」

「み、美空。俺の人生は色々とかかなり特殊だからあまり自分と比べない方がいいよ？ 美空だって十分波乱万丈だし……」

「人を守るために修羅の道を行くあんたも相当波乱万丈よ……ねえ、せっかくだから魔

戒騎士と魔戒法師について話してよ。良いでしょう？あなたが暴走していた時、助けてあげた恩があるんだから」

「魔戒騎士と魔戒法師……気になるの？」

「ええ。私、寺に預けられていたから歴史に興味があつてね。天の世界で戦う、魔を戒める騎士と法師についてね。それぐらい良いでしょう？」

確かに美空と護法五神がいなかったら心滅獣身で暴走していたガ口から流牙を解き放つのは難しかったかもしれない。

そう言われると流牙も弱くなり、仕方ないと了承するしかなかった。

「……分かったよ。とりあえず歴史とか知識とか教えられる範囲で教えるよ」

「頼むわ」

流牙は自分の知る限りの魔戒騎士と魔戒法師の歴史や知識を教えた。

何百年、何千年と続く守りし者の長い歴史に美空は一つ一つじっくりと聞いていく。

「なるほどね……魔戒騎士と魔戒法師、守りし者は言わば一つの宗教的な組織みたいなものなのね。やっぱり昔だと相当闇も深そうね」

「そうだね……歴史が長い分、過ちも沢山あっただろうけど、その過去の過ちがあるからこそ二度と犯さないと今の人たちは戒めている」

「そうね。それにしても、何百年、何千年とホラーとの戦いから人を守り、戦い続けてき

た守りし者たちは本当に凄いと思う。今までよく戦ってこれたわね」

「古の時代から受け継がれてきた守りし者としての永遠の想いがあつたからこそホラーに世界を滅ぼされる事なく守れてこれたんだ」

過去から受け継がれ、そして現在から未来へと繋いでいく永遠の想い……それこそがホラーを討滅することができる、守りし者としての本当の強さなのだ。

「いい話が聞けたわ。ありがとう」

「どういたしまして。あ、そうだ。俺も聞きたいことがあるんだ」

「ん？何？」

「君と秋子さんの娘の空ちゃん和愛菜ちゃんの事」

すると、先程まで良い雰囲気だったのに何故かいきなり空気が凍りつき、美空は目を見開いてから流牙を睨みつけた。

「ん？どうしたの？」

「まさか、あの二人まで毒牙に……！」

「は？毒牙って？」

「柘榴や松葉はあの子達の事だし、秋子は行き遅れなくらいだから別にいいけど、あの二人に手を出したら織田との全面戦争くらいじゃ済まさないわよ!!」

空と愛菜を思うがあまり、色々と妄想して暴走してしまう美空。

しかも自分の配下に対してかなり酷いことを言うほどだった。

「ちよつと!? 柘榴と松葉はともかく、秋子さんに対してかなり酷いことを言っていないか!?」

「事実でしょ!」

「君は鬼か!? 秋子さんが聞いたら泣くぞ!? って、誰が二人に手を出すか!」

「でも天下御免の誑しなんですよ!」

「それは俺にとつて不名誉で誤解だ! 誑しなんてした覚えはない!」

「そうかしら!? あの今川のおちびちゃんだつて愛妾なんですよ!? ほらやつぱりそうじゃない!」

「そ、それは、鞠は俺の事を好いているから結果的にそうなったんだ! それに、鞠は可愛い妹分で、あんな小さな子に手なんか出さないよ!」

「怪しいわね。こう、言葉巧みに……天下御免の誑しのお家流とかで何とかしてるんじゃないの?」

「そんな恐ろしいものがあつてたまるか! 俺にとつてのお家流はガロと、この耳の力だけだ!」

「耳の力? ただ耳がいいだけでしょ!」

「……俺は物に込められた思いや声をこの耳で聞けるんだ」

「はあ!?何それ!?物に込められた思いや声を聞けるなんてありえないわよ!剣といい、鎧といい、魔法衣といい、あなたはどれだけの力を持つてるのよ!」

「そう言う美空だつて護法五神を使役しているじゃないか。俺からしたら神を使役している方がすごいと思うけど」

「その帝釈たちの三昧耶曼荼羅を防ぎ切った鎧の所有者のあんたが何を言うのよ!」

片や伝説にして最強の魔戒騎士の称号である、黄金騎士ガ口の継承者。

片や毘沙門天の加護を受け、護法五神を使役する越後の当主。

どちらも人とは異なる存在の力を操ることができ、単純にどちらが優れているなどと測ることは出来ない。

「……ねえ、俺の負けでいいからもう止めない?話がかかなり脱線してるし……」

「それもそうね……それで、話を戻すけど、何であの二人のことを聞きたいの?」

「気になるだけだ。そこまで美空が大切にしている二人なんだろう?」

「ええ……そうね。空は大切な子よ。それこそ、私の娘にしたいくらいに」

「愛菜ちゃんは?」

「愛菜は秋子の娘だしね。それに空とも歳が近いし、仲もいいから……これから先、絶対に空を助けてくれる将に育つてくれると思う」

「そうか……それなら、尚更何とかして助けなくちゃな」

「……………あなたとは関係ないのに、どうしてそう思うの?」

「……………家族を助けたい気持ちには俺にもよく分かるからさ。それに、魔獣との戦いで巻き込まれた幸せな家族を奪われたことが何度もあったから……………」

「そうなの……………でもそうじゃなくても、あなたはかなりのお人好しね」

「自覚はしている」

「あなたにはそう言う相手はいないの? 大切な人とか……………」

「そうだな……………離れ離れになった久遠や仲間達はもちろん、そして俺と一緒にいる結菜や一葉、流牙隊のみんな。俺たちの為に命を散らした桐琴さん。そして……………」

流牙は晴天の青空を見上げ、空に向かって手をかざし、美空も空を見上げる。

「空……………天……………?」

「俺はみんなが言う天の世界から来たって知ってるよね? その世界には共に大きな戦いを潜り抜けた沢山の仲間がいるからさ。それに……………」

流牙の脳裏には旅の中で出会って来た大切な仲間達の姿。

そして、一番大切な一人の女性の姿。

「大切な相棒を残して来ちゃったから……………」

「もしかして、その相棒ってあなたの恋人?」

「恋人じゃないけど、多分お互いはずっと一緒にいたいと願っている関係、かな?」

「へえー、あなたがそこまで言うなんてね……」

「平和な時と戦いの時……どちらの時間も支えてくれる大切な人。君にとつての空ちやんみたいな存在だね」

「そう……今頃心配しているでしょうね」

「ああ。だから……いつかは必ず、終わらせなければならぬ」

「終わらせるって、何を？」

美空の問いに流牙は空にかざした手を握りしめ、強く握った拳を胸に持つて行く。

そして、美空に己の歩む道を答える。

「全ての鬼を討滅し、その背後にいる黒幕を倒し、この国を人の世にする」

「そのために、春日山で恩を売るつもり？」

「そうだ。そして……全てが終わったら、俺は元の世界に戻る」

元の世界に帰る……流牙のその答えに美空は驚いたように目を見開いた。

今の流牙は幕府公認で将軍・一葉の良人、この日の本で最も大きな権力を持つ権力者でもある。

どんな事でもできる権力者があつさりとその立場を捨てて元の世界を帰ると言ったのだ。

そして何より……。

「…………あなたの奥さん、離れ離れの信長や一葉様達を捨ててても…………帰るの?」

「ああ…………そうだな…………」

「…………最低ね。あんなにも可愛くて良い子達を捨てるなんて」

流牙の妻達は一葉以外会うのは初めてだが、どれも心優しく流牙の事を心の底から大切に想っている。

同じ女として、いくら体を交わつてない夫婦とはいえ、いつか妻を捨てることを宣言しているその夫の流牙を睨みつける。

そんな美空の言葉に耳が痛い流牙は苦笑を浮かべた。

「そう、だね…………最低な夫だよ、俺は。でも、それを承知でみんなは俺の妻になってくれたんだ」

「…………全く、ある意味、歴史上最最低最悪な女誑しね」

「誑しているつもりは無いけど…………そうかもね…………」

この国を守るためとはいえ、皆が了承しているとはいえ…………流牙は男として最低なことをしているかもしれない。

ただ流牙は立ち止まる訳にはいかない。

多くの人の思いや約束を胸に戦い続けると誓ったから。

「…………もう良いわ。色々話してくれてありがとう」

「ああ。じゃあ戻るね……」

「ええ……」

流牙は美空に言われた言葉が棘となつて胸に深く刺さり、苦しい心の痛みを抱えながら静かに陣から立ち去る。

「本当に、難儀な男ね……」

孤高に生きようとするも、お人好しで優しすぎる一人の魔戒騎士……そんな流牙の背中を見て、美空は大きなため息をついた。

『子 ~Children~』

流牙は美空たちと相談し、春日山城奪還に向けてまずは情報を集める事となった。

潜入調査が得意な流牙が春日山城内部、忍の小波は春日山城下の様子を調べる事となり、その間に美空たち長尾衆は兵を集めて各地の豪族を再び味方に引き入れる……そう言う話になった。

その他の流牙隊は流牙たちと美空たちの繋ぎを担当する事となった。

流牙と共に行きたいと手を挙げる者がいたが、出来るだけ少人数で動く方がやりやすいので流牙の説得でみんなは納得した。

翌朝、流牙と小波は早速流牙隊と長尾衆と別れて春日山城へ向かった。

春日山城の城下町に到着すると、町の空気はピリピリと緊張感が漂い、城の異変が城下にも伝わっているようだった。

流牙と小波は拠点として寒梅という旅籠の一室を借り、そこで一息をつき、改めて状況を整理する。

「俺は春日山城に潜入して内部を調査する」

「はい。私は春日山城の城下町の様子と周辺の豪族を調査します」

「もし何かあったらすぐに知らせてくれ。もし城の奴らに目をつけられたら俺のことは構わずすぐに撤退してくれ。俺のことは大丈夫だから」

「は、はい……あの、ご主人様」

「何？」

「必ず、私達の元に帰って来てくださいね……」

「何当たり前な事を言ってるんだよ。必ずみんなの元に帰るって」

不安そうな表情を浮かべる小波に流牙は笑みを浮かべて頭を撫でた。

「は、はい！」

「ところで……一つお願いがあるんだけど」

流牙からの突然の願いに小波はきよとんと首をかしげた。

「お願い？何でしょうか？」

「城下町を調査する時の小波の姿、見せて？」

何の他愛もない願いだったが、それを聞いた瞬間、小波は顔を真っ赤にして首を激しく左右に振った。

「っ!!?いい、いけません!!」

「何で!!小波の忍装束以外の服装を見てみたいんだけど!?!」

「わ、私如きのそんな姿をご主人様に見せられません！」

「どうしてうちの隊の何人かは自分を過小評価するのかな!? 少しは梅の自信を分けてあげたいよ!!」

「と、とにかくダメですー!!」

小波が全力で却下するので流牙は無理やりはいけないと思い、大人しく引き下がったがいつか絶対に小波の忍装束以外の服装を着た姿を是非とも見たいと思いを強くするのだった。

翌日、流牙は小波と別れて早速春日山城に侵入すると同時に魔法衣を足軽と同じ格好にして変装する。

魔法衣は他人に対して認識障害のような魔法が掛けられており、問題なく周囲に溶け込んでいる。

魔法衣の変化と認識障害、これらの能力で流牙は数々の潜入調査を難なくクリアすることが出来た。

そして、春日山城を歩いて感じたことは……。

(これは酷いな……余りにも城の中が汚すぎる)

流牙が最初に感じた感想はそれだった。

春日山城は少なくとも何週間も掃除されていない状態で所々が汚れ、埃が溜まっていた。

そこにいるだけで咳き込みそうだった。

しかも足軽たちは城下町以上に苛立っていてピリピリとした張り詰めた空気が広がっていた。

幾ら美空達と戦う前とはいえ、ここまで城の内部が酷いのは美空の姉と母の性格が出ていると流牙は感じた。

城の雰囲気調べた次は流牙は目を閉じて耳に全神経を集中させた。

城にいる多くの人達の声を聞き取り、その中で二つの女性の声が聞こえた。

その二人は春日山城で異質な佇まいで一人は灰色の長髪をした露出度が高い着物を身につけ兎の耳のようなリボンを頭に付けた少女。

もう一人は深緑色の髪に柘榴の鎧に似た装備をしたスタイルがとてもよく、そして何か頭に狐の耳みたいな髪飾りを付けていた。

恐らくは長尾衆の位の高い人間だとすぐに察した流牙はその二人の後を追う。

二人の話し声は小さなものだったが、流牙の耳にはちゃんと聞こえており、その内容は空と愛菜を心配するものだった。

(あの二人……敵じゃないな。少なくとも人質を心配する訳ないもんな……)

そう思っていた次の瞬間だった。

「何者だ!?そこに隠れている者、出て来い!」

深緑色の髪の少女が刀の柄を持ちながらいつでも抜刀出来るようにしながら振り返り、流牙の隠れている方向に向けて叫んだ。

隠れていたのがバレてしまい流牙は傘で顔を出来るだけ隠しながら二人の前に出る。

「貴様……何故私たちの後を追って来た？」

「す、すみません……ここに入ったばかりで道に迷ってしまい、お二人の後についていけばなんとかなると思って……」

出来るだけ流牙は演技をして答えた。

「この先にはお前が来るような場所ではないぞ。何せ『大事な人質』がいるのじゃからな。下手に近づいたら城の者に殺されるぞ。ほら、早くあっちに行くのじゃ」

うさ耳の少女が手を払い、流牙にあっちに行けと指示する。

「あ、ありがとうございます！」

流牙はその場から逃げるように立ち去り、うさ耳の少女が言った言葉に違和感を感じた。

(今あの子、俺に空ちゃんや愛菜ちゃんや二人がいることを教えてくれた……?)

流牙はうさ耳の少女が何を考えているのか分からなかったがすぐにその場から立ち去って次は城内の備蓄について調べに入った。

流牙を見送った二人は周りに誰もいないことを確認してから口を開いた。

「ふむ……貞子よ、あやつをどう思う?」

「はい。顔は見れませんが、彼の纏う気は並大抵のものではありませんでした。下手したら柘榴や私以上。何者でしょうか……?」

二人の少女は流牙の正体には気付かなかつたが、流牙の抑えきれない力の気には気付いていた。

「もしかしたら囚われた二人の娘達を思う母の差し金かもしれんな」

「まさか美空様の……?」

「その可能性はあるの。しかし、あれほどの力を持った男……この越後にいたかのお?」
「私の知る限りそのような方はいません。もしいたとしたら、越後でも名のある武将になつてゐるはずですよ」

「そうじゃな……ん? いや、もしかしたら……」

「宇佐美老?」

「まさかな……仮にいたとして、それほどの男がこんな事をするわけないの……」

うさ耳の少女はある可能性を思いついたが、『その男』が美空と協力するはずがないと勝手に判断してその可能性を捨てた。

☆

その後流牙は春日山城での調査を終え、夜になると同時に城を抜け出して小波と合流

した。

小波も十分な調査を終え、翌朝の早朝には城下町を出て流牙隊の合流地点へ戻った。それから美空たちと合流した流牙たちはすぐに会議を始める。

「……そう。空と愛菜は無事なのね」

「ああ。なんか小さな兎みたいな子と狐の耳みたいなのを付けていた女の子が二人のこ
とを心配して話していたよ」

「その二人はうちの宿老と武将よ。おそらく空と愛菜を出来るだけ守るために城にいた
のよ」

「そっか……」

空と愛菜がひとまず無事で一安心する美空たち。

しかし、流牙と小波が春日山城と城下町の酷い状態を伝えるとその表情が険しくなっ
た。

美空が国を治めている安定していた時よりも比べ物にならないほど国が荒れており、
何より敵が五千も付いている事が厄介だった。

「空さまと愛菜をどうにかしないと、やっぱり動きが取れないっす!」

「どうする? 御大将」

「……今、考えてる」

美空はじつと虚空をにらみつけて何かを考えている。

人質がいる限り美空たちは責めることはできない。

流牙は春日山城に侵入してからずっと考えていた事を話そうとした時、秋子は何かを決意したように口を開いた。

「……御大将」

秋子は普段優しそうな表情とは違う厳しい表情を浮かべていた。

「何？」

「空さま、そして愛菜を切り捨てることを提案します」

「な、なに言ってるんすか、秋子さん！養子とはいえ、愛菜は秋子さんの娘じゃないっすか
！」

「娘でも、越後のために……いいえ、御大将の為にならないのであれば、即座に切り捨てる。それが武士というものではありませんか」

「……言いたいことは分かる。だけど反対」

「反対は受け付けません。……初めから、そうするべきでした。それさえなければ……」

「秋ー」

美空が秋子に言葉をかけようとしたその時だった。

ガタン!!

突然、椅子から流牙が立ち上がり、美空の言葉が遮られた。

一葉達は流牙の顔を見て言葉を使い、美空と柘榴と松葉は目を疑った。

何故なら……流牙の表情が怒りに満ちていたからだ。

「ふざけるな……」

静かに呟いた流牙は秋子の前に立ち、激しく強い怒りに満ちた瞳で秋子を睨みつけていた。

「見捨てるのか？あんたの娘を……」

「そ、それしか方法がありません！最初からそうすれば……」

「ふざけるな!!!」

流牙は秋子の胸ぐらを掴んで顔を近づけた。

誰もがお人好しで優しいと称された流牙の暴力的な態度にこの場にいる誰もが驚いて言葉が出なかった。

流牙は娘の愛菜を見捨てようとした秋子に対して声を荒げた。

「あんたにとつて、愛菜ちゃんはその程度の存在だったのか？邪魔になったらいつでも切り捨てる都合の良い存在だったのか？所詮あんたにとつて娘はそんなものだったのか!？」

「っ!!?」

「今のあんたに……愛菜ちゃんの母親を名乗る資格なんてない!!」

それは今の秋子に対してあまりにも酷な言葉でそれを言われた秋子は唇を噛み締めて右手に力を込めた。

バチン!!

陣に大きな音が響いた。

秋子は両目に大きな涙を溜めながら右手で流牙の左頬を思いつきり叩いた。

流牙の左頬は赤く腫れ、胸ぐらを掴んだ手の力が抜けて秋子は解放された。

「あなたに……あなたに何がわかるんですか!!?」

秋子は柘榴や松葉と違って武将ではないが、美空の家老としてそれなりに鍛えており、流牙を押し倒して馬乗りをすると、拳を握りしめて流牙を殴り始めた。

「私だつてこんなことを言いたくない!今すぐにでも愛菜を助けてこの手で抱きしめたい!あの子の声を聞きたい!あの子の温もりを確かめたい!でも、それが出来ないから、助けられないから、私が武士だから……こんなことを言うしかないんですよ!!」

大切な娘を救えないかもしれないという自分の怒りと悲しみを全て流牙にぶつけて殴り続ける秋子。

柘榴や松葉が慌てて止めようとしたが、美空と一葉が無言で止めた。

美空と一葉は流牙の考えている事をすぐに察し、理解していたからだ。

秋子の本音を聞き出せた流牙は振り下ろされた拳を受け止めた。

「くっ!？」

「だったら……最初から諦めるなよ」

流牙は起き上がり、秋子の目尻に浮かんでいる涙を指ですくった。

「こんな涙を流すくらいなら、そんな悲しそうな表情を浮かべるくらいなら、最初から諦めるなよ」

「流牙さん……?」

流牙は秋子を退かすと瞼を閉しながら過去を語り出した。

「俺の母さんは……俺が修行に出てから十五年間……邪悪で卑劣な心を持った男に連れ去られて飼いや殺されていたんだ」

「えっ……?」

思わず呟いた秋子の呆然と驚きの言葉、しかしそれは美空達も同様で目を見開いて流牙を見ていた。

「母さんは俺が修行に出てから死んだと師から言われていた。だけど、母さんは十五年間も俺の事を思い続けながら、体に走る激痛に耐えながら俺と再会する事を夢見ながら必死に生きていた。そして……母さんは師に助けられて、俺と再会することができた

……」

流牙は春日山城の方角を指差した。

そこには不安で仕方ないであろう空と愛菜の二人がいる。

流牙は母を……波奏を本当の意味で救う事は出来なかった。

しかし、空と愛菜はまだ救う事が出来る。

「だけど、あんたの娘は死んでいない！春日山城に、手が届くところにいるんだ!!愛菜ちゃんはあると再会するのを待ち続けている、母親のあんたが簡単に諦めちゃダメだ！最後の最後までまで抗えよ!!」

「でも……どう考えても、二人を無事に助ける方法が……」

「……美空!」

「何かしら……?」

「俺が……二人を必ず助ける!春日山城から連れ出して、美空と秋子さんの元に連れ戻す!!」

「……出来るの?」

「いやいや、リュウさんも見たつすよね?春日山城は見て分かる通り難攻不落つすよ」

「出来るわけがない」

「問題ない。春日山城に潜入調査をしてから作戦は既に考えているし、可能性は充分にある。相手は難攻不落な城にいるからこそ侵入されないだろうと油断しているからそ

こを突く」

何度も城に忍び込み、更には囚われた人を何人も救出もしてきた流牙には大きな確信があった。

流牙は秋子を立たせ、両肩を掴んで愛菜を諦めないように奮い立たせる。

「秋子さん……俺はどんな絶望的な状況でも僅かな可能性がある限り、最後まで戦い続ける。だから、あんたも最後まで諦めるな!!」

流牙に自分が一人の母親であると諭され、神にも縋る気持ちで流牙の前で頭を下げ、再び涙を流して怒りや悲しみではなく今度は切なる願いをぶつけた。

「流牙、さん……お願いです……愛菜を、愛菜を助けてください……!」

「任せてくれ」

流牙は秋子の母としての本音を聞き、美空に目線を向ける。

「道外流牙どの」

「……ああ」

「力をお借りしたい。春日山城内に囚われている二人の娘、空と愛菜を取り戻して頂きたい。成功の暁には、この私の全てをかけて、あなたが満足する恩賞を授けましょう」

「承知した!必ず……二人を助ける!」

美空との固い約束を交わし、流牙は空と愛菜を取り戻すと誓った。

「とりあえず詳しい話は後にしましょう。流牙……あなたはまず自分の陣に戻ってその顔を冷やしてきなさい。色男が台無しよ」

「色男じゃないけど、そうさせてもらおうよ」

流牙は一葉達と共に流牙隊の陣に戻った。

陣に戻るなり流牙の所々赤く腫れた顔を見てみんなは驚愕し、急いで冷たい水を用意して濡らした手拭いで顔を冷やしていく。

また、秋子が殴ったと聞き、小夜叉や梅を筆頭に殴り込みに行こうとしたが、流牙にわざと殴られるように言ったのだからと梅たちを止めた。

それから少し経つと流牙に内緒で美空の陣に結菜と一葉が呼ばれた。

何事かと二人は疑問を抱いていると、美空はどうしても聞きたい事があった。

「ねえ、流牙のお母上に何があったの？」

それは美空が聞いて当然の内容だった。

秋子の言葉に流牙が豹変し、秋子の本音を聞き出して空と愛菜を必ず助けると約束した。

しかもそれはもはや美空に恩を売るとか関係無しに流牙のただ助けたいという強い意志が感じられた。

何故そこまでするのか、美空は不思議で仕方なかった。

「あの、美空様……」

「どうしてそれを余たちに？」

「あなたたち二人が流牙に一番近い存在だと思ったからよ」

美空から見て結菜と一葉が流牙に一番近い存在だと思い、二人を呼んだ。

流牙の母、波奏との壮絶なる過去を話していいものだろうかと二人は悩んだが、流牙さあれほど大きな騒ぎを起こしたのだ。

いずれ流牙の口から語られる可能性がある。

辛い過去を語らせるよりはマシだと思い、二人は怒られる覚悟で美空たちに話すことにした。

「良かろう……話した方が良いな。結菜」

「そうですね……では、まず美空様と秋子さんに一つ質問します」

それは流牙が初めて結菜に質問した時の言葉だった。

「もしも二人のご息女……空さんと愛菜さんが敵に目を潰されたら、自分の目を犠牲にしても、その子たちの目を元に戻したいですか？」

☆

細く欠けていく月が暗闇を照らす夜。

美空は陣から離れて一人で河原にいた。

冷たい川の水で足を濡らし、バシャバシャと足を遊ばせながら月を見上げた。

「本当に難儀で馬鹿な男……」

美空は流牙の事を考えていた。

結菜と一葉から流牙と波奏の過去を聞いた。

幼き日の約束を守り続け、十五年の長い間も不屈の心で耐え続け、そして己の光を愛する息子に捧げた。

人間は欲の深い生き物……だがここまで自分ではない息子の為に己の全てを捧げられる母親はこの世界に何人いるだろうか？

少なくとも、自分の母親は愚かな人種に入る。

母親の所為で自分の人生は何度も狂わされ、今は愚かで無能な姉と結託して空を人質にするという愚行に出ている。

その母親のお陰で多くの大切な者ができたのは確かだが……流牙と波奏の親子の絆は美空にとって衝撃的なものだった。

波奏は己の身と魂を削り、ガ口の鎧を金色にする為に想像を絶する激痛と邪悪な者に利用されている苦痛を十五年も耐えてきた。

その苦しみから解放されてやつとの思いで息子と再会出来たのも束の間、強敵の刃で潰された息子の両目を何のためらいもなく自分の目の光を対価に元に戻し、二度と息子

の顔を見られなくなってしまうた。

最後は魔獣となりつつあるその身を人間として死ぬ為に息子の剣で斬られる事を望んだ……。

どれだけ天はこの二人に悲しく辛い試練を与えれば気がすむのだろうと美空はその話を聞いて他人事なのに珍しく苛立って近くの木に怒りの拳をぶつけるほどだった。

そして、流牙は波奏と必ず生き残り、その瞳に多くの笑顔を書すという約束を交わして波奏に牙狼剣の刃を突き刺し、唯一の家族との永遠の別れを告げた。

美空は流牙をお人好しで魔戒騎士としての修羅の道を生きる事しかできない難儀な男だと思っていたが、それは少し違っていた。

最愛の母の願いと約束を胸にその命が尽き果てるまで戦い続ける、優しくも哀しき戦士だったのだ。

「一葉様たちがあいつに惹かれていく理由が少し分かってきたわ……」

流牙の心の優しきや戦士の強き、助けてくれた事に対して惚れた事も理由の一つでもあるだろうが、根本的な理由は一つ……。

優しすぎる流牙が壊れないように側で支え、守りたいと思うからこそ自然に周りに多くの女たちが集まるのだろう。

そして、そんな流牙が愛する娘たちの空と愛菜を必ず助けると約束した。

「あんたに越後の未来を託したわよ……流牙」

余りにも部の悪い賭けかもしれない、だが美空は越後の当主として、空の母親として、流牙ならそれをやり遂げると信じ、賭けてみたくなった。

越後の未来を背負う二つの幼星の未来は流牙の手に掛かっているのだった。

『信 ～Trust～』

流牙が空と愛菜を助けると美空たちに約束した数日後、美空たちの陣に向かった。

「美空と秋子さんにちよつとお願ひがあるんだけど……」

「お願ひ？」

流牙の顔は秋子に殴られた時の赤みや腫れはすぐに冷やした事と魔戒騎士としての優れた自己治療で既に引いており、いつも通りだった。

そんな流牙が二人に頼んだ願ひは……。

「二人に空ちゃんと愛菜ちゃんに向けての手紙を書いて欲しいんだ」

「手紙？」

何故手紙を書くのかと美空と秋子はきよとんとして頭に疑問符を浮かべる。

「今回の救出作戦は美空たちが暴れて相手の注意を引きつけている間に二人を春日山城から奪還するけど、それには迅速で的確に行動しなくちゃならない」

「そうね。人質救出はそれが基本ね」

「……で一つ大きな問題がある。春日山城に無事に侵入出来たとして、その後に変なのが空ちゃんと愛菜ちゃんを連れて行く時だ。長尾の顔見知りならともかく、二人はも

ちろん俺の事を知らない。突然見知らぬ男がやって来て、君たちのお母さんのところに連れて行くから一緒に行こう……なーんて言っても、素直にうんって頷く訳じゃないだろ？」

「そうですね……愛菜なら不審者と思つて空さまをお守りするために大騒ぎしますね」

「無理やり連れて行くとうとして怪我をさせるのは嫌だし、そこで二人に俺が味方だも信じさせるために美空と秋子さんの手紙が必要なんだ。娘さんならお母さんの字を知っているはずだし、疑いも無く、騒ぎを立てる事なく信じてくれると思うんだ」

「なるほどね……空なら私の字をよく知ってるし、そう簡単に真似できるものじゃないわ。いいわ、すぐに書いてあげる。秋子も書きなさい」

「はー」

すぐに紙と筆を用意し、二人は流れるような筆でサラサラと紙に文字を書いていく。

流牙には達筆過ぎる二人の文字に読めないと驚きながら待つと、一足先に書き終わつて手紙を乾かしている美空はある事を考える。

「手紙はこれで良いわ。後はそうね、二人の信憑性を増すために、もうひと押し欲しいわね……」

手紙だけでなく流牙が空と愛菜の味方という事を証明できる物を考えていると、美空はいつもツイントールで止めている黒い髪留めを解いて流牙に渡した。

「美空？」

髪留めを解いた美空の綺麗な髪が下ろされ、いつもと少し違った雰囲気を出していた。

「流牙、それを持って行きなさい。それを見せればあなたを私が『信賴している』味方だと空なら分かるはずよ。この髪留めは私がいつも使っている一番のお気に入りだからね。ほら、秋子も何か流牙に渡しなさい」

「え？あ、はい！えつと……じゃあ、これを！」

秋子はいつも髪に差している短剣のような簪を抜いて流牙に渡した。

「越後の当主と家老の身に付けているものを二つも持っているんだもん。これで二人はあなたのことを信用してくれるはずよ」

「なるほど、私達の手紙と身に付けている物……これを託されたとなれば、愛菜も信じてくれますね」

念には念を入れての作戦に流牙は二人から預かった髪留めと簪、そして二通の手紙を魔法衣に入れてそのまま仕舞う。

「うん、確かに預かったよ」

「決行は五日後……今日また会議をするからちやんと出てね」

「分かった。じゃあまた後で」

流牙が陣を後にしようとしたその時、言い忘れた事を思い出して踵を返した。

「あつ！ そうだ……忘れるところだった。美空、聞いて欲しいことがあるんだけど」

「聞いて欲しいこと？」

「まあいざればバレると思うから予め言うんだけどね。明日一日、俺は絶対に動くことが出来ないから」

「絶対に動くことが出来ない？ 何だよ」

「新月の日にザルバに俺の一日分の命を喰わせているからその間は仮死状態で動けないんだ」

「……………はあ??？」

あまりにも突飛すぎる流牙の発言に美空と秋子のきよんとした声が重なり、再び疑問符を頭に浮かべた。

流牙はザルバとの契約で新月の日に一日分の命を喰わせ、その間は仮死状態となり動くことができないことを美空と秋子に説明した。

「あまりにもこの短期間で驚きの連続があったからすっかり忘れていたけど、そう言えばザルバも異形の存在だったわね」

「ザルバさんは異形とはいえ比較的人には友好的……不思議な存在ですね」

「でも、いいの？ そんな重要な事を話して……」

「え？何で？」

「何でって、新月の日にザルバに命を喰わせているときはあなたは動くことが出来ない、つまりは完全なる無防備であなたの最大の弱点とも言えるのよ？それを簡単に話していいの？」

流牙の世界の魔戒騎士たちは一昔前なら契約したホラーの魂が宿った魔導具を身につけていたが、ある時仲間から今時魔導輪かよと言われるぐらいだった。

流牙は絶望から諦めずに這い上がったことで未熟な小僧から黄金騎士としてザルバに認められた。

ザルバに認められたことを流牙は心の底から喜んでいた、だからこそ共に戦うザルバとの契約を大切にしている。

そして、流牙にとって最大の弱点を美空と秋子に明かしたことを流牙は笑みを浮かべながら答える。

「良いんだよ、だって……俺は美空と秋子さんを信頼しているし」

「えっ……？」

「私達を、信頼……？」

「もちろん、柘榴と松葉も信頼しているよ。俺たちは仲間じゃないか」

「……まだ私達はあんたの仲間……同盟に加わってないわよ」

「そうだけど、俺個人としてはもう美空たちは大切な仲間だ。信頼しているから知ってもらいたいんだ」

流牙の何が何でも美空たちを信頼すると言う言葉に美空と秋子は絶句した。

しかし、結菜と一葉からの流牙と波奏の話を思い出してすぐに納得してしまった。

母の一生分の愛情を受けたからこそ、他人に対する深い優しさがあるのだと。

「じゃあ、そう言うことだからね」

流牙は手を振りながら今度こそ陣を後にした。

去っていくその背中を見て美空と秋子は思った。

「本当に馬鹿ね」

「ええ、大馬鹿者です」

お人好しすぎるというか優しすぎるといふか、流牙の性格に二人は大きなため息がついた。

「でも、そんな馬鹿だからこそあれだけ周りに沢山の笑顔が集まっているのよね」

「そうですね。歪むことなく、あそこまで立派に成長出来たのは波奏様の子への愛情のお陰ですね」

「そうですね……ああもう、無性に空に会いたくなつたわ」

「私もです……なんだかんだで、私たちも一人の母親ですね」

「早いところ、流牙に二人を取り戻してもらわないとね」

流牙に望みを託した美空と秋子は囹役として春日山城の近くで一戦を交えるので、自分たちのやるべき事を成し遂げるために戦の準備をする。

☆

翌朝、新月の日。

流牙は陣を張っている屋敷の一室で布団の上で眠って……否、ザルバに命を喰わせて仮死状態となっていた。

黒の魔法衣は脱いでおり、いつもの赤いTシャツと防護服とズボンを着用していた。

左手を胸の上に置き、ザルバは紫色に怪しく輝いていた。

そして、流牙の周りには一葉を筆頭に手が空いている妻たちが見守っていた。

何度も仮死状態の流牙を見て分かつてはいるのだが、大切な夫のそんな姿を見て平気でいられるわけがなく少し不安な表情をしていた。

このまま二度と目を覚まさないのではないかと……縁起でもない不安が頭を過る。

そんな時、一人の客人が来た。

「へえ……本当にザルバに命を喰わせて、死んでいるのね……」

仮死状態の流牙の隣に座り、ペタペタと体を触るのは自分の仕事を終えてやって来た美空だった。

「美空……あまり流牙を触るでない。何しに来た？」

「見舞いよ。こいつの『仲間』として来たのよ。結菜、はいこれ」

一葉が注意すると、美空は少し大きめの包み紙を取り出して結菜に渡した。

包み紙を解くと中には籠に入った卵や梅干しが入っていた。

「それを明日の朝、流牙が目を覚ましたら食べさせなさい。万全の状態で動けなくて空と愛菜を助けられなかったら嫌なもの」

「こんなに良いものを……はい。ありがとうございます、美空様」

「ほほう……やりますな、美空殿」

見舞いの品である梅干しを見て幽はニヤニヤと笑みを浮かべた。

「な、何よ、気持ち悪いわね……」

「いやはや、まさか美空殿がそこまで流牙様を大切に思っていたとは……」

幽の爆弾発言が投下され、全員の視線が一斉に美空に向けられる。

「はあ!?!、いきなり何を言いだすのよ!?!」

「確か美空殿は梅干しが大好物なはず。自分の好物を流牙様に贈るとは……越後の籠と恐れられているお方が、中々のお淑やかでございますな」

「ちちち、違うわよ! 梅干しは体にいいから贈っただけで、他意なんてないわ!! こいつにはこれから私の為に頑張ってもらわなきゃならないし、命を喰われてへ口へ口になつて

いると思うから……そ、そう！な、情けをかけただけよ!!」

「ほう……なら美空よ、その真つ赤な顔はなんじや？」

「なっ?!」

幽に続いて一葉も援護をするようにニヤニヤと笑みを浮かべて指摘した。

今の美空の顔は誰が見ても恥ずかしさから真つ赤になっており、否定しているとは思えないものとなっていた。

これを見た結菜たちはすぐに察し、全員はこう思った。

(（あつ、これは完全に美空様は流牙（様）に惹かれている……))

そう思うと美空を見てニヤニヤする者から、また妻が増えるのかとため息をする者など様々な思いが交錯する中、益々美空の顔が赤く染まり、やがて体がプルプルと震えていた。

「ち、違う……私がこいつを、こいつなんかを……」

流牙のことを考えれば考えるほど顔が熱くなり、そんな自分を否定しようとする。

「違ーうっ!!絶対!に違あああああうっ!!」

そして美空は脱兎のように陣から飛び出して逃げ出すのだった。

美空の意外な一面が見られて笑う結菜たちはそう遠くない未来に、流牙と共に日の本を守る為に戦う仲間になる……そう確信するのだった。

☆

新月の日の翌朝。

流牙は一日分の命を捧げ終わると仮死状態から体全身に生気が戻り、肉体の機能が復活して何事も無かったかのように目を覚ました。

目を覚まし、みんなが安心すると結菜が美空から貰った卵と梅干しをふんだんに使った朝食を食べ、英気を養うと美空たちと最後の打ち合わせを行い、いよいよ空と愛菜の救出作戦が始まる。

作戦は美空たちが囹役となつて春日山城近くで戦を起こし、敵の注意を引きつけている間に流牙達が春日山城の背後の崖から侵入し、囚われている空と愛菜を連れ出して春日山城から脱出し、美空たちの元へ戻る。

言葉にすれば簡単だが、作戦で春日山城に侵入するのが一番の難所である。

しかし、流牙には秘策……というか既にこの戦国の世の数々の城を侵入する際に使った技を使うだけである。

流牙は小波、ひよ子、転子、綾那、歌夜を連れ、合流地点で待つ一葉たちと別れて春日山城へ向かった。

一日近くの時間をかけて春日山城の背後に到着した。

春日山城の背後の崖は一言で表すならば断崖絶壁、とても人が登れそうにないほぼ垂

直の崖だった。

周囲に見張りがいないか確認するが、こんな場所から侵入する者がいないと思ひ込んでいる城側の兵士たちは見張りを立てずにいた。

すぐに撤退できるように準備をしていると、遠くの空から鉄砲の音が響き渡った。

「始まった……」

美空達が囷となつて戦を起こし、春日山城にいる兵の注意が引きつけられている。

「さあて……作戦開始の準備とするか」

流牙は魔法衣から矢筒と長い紐を取り出した。

矢筒の中に入っていたのはただの矢ではなく、流牙が城の侵入のために特別に作らせていた物で、本来なら木で作られる矢の胴体が鉄の棒で作られており、とても重いものとなつている。

これを普通の弓で射つ事は弦をよほど強く張つてないと射てないが、流牙には弓は必要無い。

矢尻に紐を解けないようにしっかりと括り付け、紐の端を丈夫な木にしっかりと縛り付けて矢を右手で持つ。

「はあっ!!!」

そして、気合を発すると同時に鉄の矢を投げ飛ばし、一直線に飛んだ矢は春日山城の

城壁に思いつき突き刺さり、見事な紐の道が出来上がった。

「よし……まずは俺が行く。春日山城に侵入出来たら、小波と綾那が続いてくれ」

「はっ！」

「わかったです！」

以前まで侵入のための綱渡りは流牙しか出来なかつたが、小波は観音寺城の一件から流牙の役に立つたために密かに綱渡りの訓練をしていた。

綾那は持ち前の身体能力からあつさりと綱渡りが出来るので、救出作戦に採用した。

流牙は紐を近くの木にしつかりと括り付けて縛り、解けないようにする。

流牙は軽く息を整えてから紐の道を一気に渡っていく。

そして、抜群なバランス力で難なく綱を渡りきり、春日山城へ侵入を成功した。

難攻不落の堅城として名高い春日山城……それがたつた今、流牙のとんでもない手によつて侵入されてしまうのだった。

「お見事！」

「流石です！」

春日山城に侵入し、周囲を見渡すと美空達が囹になっている事と背後が断崖絶壁の崖になつている事が重なり、見張りはいないも同然の状況だった。

流牙は地上にいる小波と綾那に來いとジェスチャーをする。

「綾那樣！流牙様の合図です！」

「小波、流牙様に続くです！」

「はい！」

小波と綾那は流牙に続いて綱を渡り、一気に春日山城へと侵入した。

「作戦通り、俺が空ちゃんと愛菜ちゃんを連れて来る。二人は周囲の警戒と降下用の縄の準備を頼む」

「お任せください！」

「綾那達に任せるです！」

これで作戦の第一段階が無事に完了した。

この場を二人に任せ、流牙は空と愛菜がいる直江屋敷へと忍び込む。

『奪』 Recovery 『』

春日山城に無事に侵入した流牙達。

小波と綾那を周囲の警戒と降下用の縄の準備をし、流牙は空と愛菜が囚われている直江屋敷へ向かった。

直江屋敷は元々秋子の屋敷で詳しい内部は秋子から聞いており、中にいる見張りを手で眠らせながら二人がいると思われる部屋へ向かった。

小さな女の子の声が徐々に聞こえ、流牙は障子を開くとそこには……。

「あ……………」

目的の二人と思われる可愛い少女がいた。

一人は水色のおかっぱ頭に美空と同じ赤い瞳の気弱な感じの少女でもう一人は橙色の髪と目をした活発な感じの少女だった。

「君たちが、空ちゃんと愛菜ちゃんだね？」

流牙が話しかけるとビクツと体を震わせて警戒し、おかっぱ頭の少女を守るように橙色の少女が前に出て睨みつけた。

「お主…何者でありますか…この越後の……」

「はいこれ」

「どやっ…」

橙色の少女が何かを言い、面倒な騒ぎになる前に流牙は腰を下ろし、魔法衣から二つの手紙を出して二人に差し出す。

美空の手紙の表紙には『龍』の文字、秋子の手紙には『誠』の文字が書かれている。

龍と誠はそれぞれ美空と秋子を表す文字であり、その文字を見た瞬間、二人は目を疑った。

「ハ、これ、美空お姉様の?!」

「は、母上の字ですぞ!どーん!」

「読んで。お母さんから娘さんへの手紙だよ」

二人は恐る恐る流牙から手紙を受け取り、開いて手紙を読み始める。

手紙には流牙は味方だから安心して、一緒に春日山城から脱出してと書いてあり、見慣れている母の字に二人の流牙への疑惑の目が少しづつ晴れて行く。

流牙は更に魔法衣から美空と秋子から預かった髪留めと簪を取り出した。

「美空お姉様の髪留め……」

「母上のお気に入りのお簪……」

「美空と秋子さんの二人から預かったんだ。俺は君たちをお母さん達の元に送り届けた

い。だから頼む、俺と一緒に来てくれ」

美空と秋子からの手紙と持ち物、これだけの物を目の前にして二人は流牙を信じかけるが、自分たちの立場からやはりまだ信用していなかった。

すると、おかつぱ頭の少女はある決心をすると流牙を見つめながらあることを尋ねる。

「あの……あなたは本当に金色の天狼、道外流牙様ですか？」

美空からの手紙には流牙の事が書かれており、そこにはもちろん金色の天狼の事も書いてあった。

「そうだよ。訳あって美空と協力関係にあるんだ」

「でしたら……あなたが本当に金色の天狼であるという証拠を見せてください」

「証拠……？」

「もしあなたが、黄金の鎧をその身に纏った姿を私達に見せてくれたら、あなたを信じて着いて行きます」

「く、空さま!?!」

橙色の少女が驚きながらおかつぱ頭の少女を『空さま』と呼んだ。

予想通りで、おかつぱ頭の少女が美空の娘の空、橙色の少女が秋子の娘の愛菜であり、強い意志を持つ空に流牙は少し考えてから仕方ないと立ち上がって魔法衣から牙狼剣

を取り出した。

「離れていて。そして、絶対に近づいて鎧に触れないでね」

時間が無いのでそれで着いて来てくれるならばと流牙は牙狼剣を鞘から抜いて頭上に円を描いた。

円が光り輝き、ひび割れた円からガ口の鎧が召喚され、流牙の体に静かに装着される。

この戦国の世でその名が轟いている金色の天狼……黄金騎士ガ口。

ガ口の鎧を間近で見た空と愛菜は驚きの後……目をキラキラと輝かせていた。

まるで尊敬し、憧れている英雄（ヒーロー）に出会った小さな子供のように。

「ほ、本物です……」

「どや……こんな日が来るなんて……」

小さな子供からこんなキラキラとした眼差しを向けられるのは初めてで流牙は戸惑いの声を出す。

「ん……う？と、とりあえず……これで信じてもらえたよね？」

流牙は鎧を解除して牙狼剣を鞘に納める。

二人は鎧が送還されて名残惜しそうな目をするが、それぞれの母の手紙と持ち物を握り、流牙を見つめた。

「あ、あの、流牙様！本当に私達を……美空お姉様達の元に返してくれますか？」

「当たり前だ。美空からよろしく頼むとお願いされて、秋子さんからは涙を流しながらお願いされたんだ」

「美空お姉様……」

「母上が……涙を……」

「今美空達が囷になつてくれている。さあ、早く行こう」

「はい……愛菜！」

「わかりました！この愛菜、空様と共に行きます！どーん！」

「よし、早く行こう。外に俺の仲間が待っている。それから……出来るだけ静かにしてね」

「わかりました。愛菜、静かにしていようね？」

「かしこまりました！」

美空と秋子の手紙と持ち物を一旦流牙があずかり、囚われた空と愛菜を連れて屋敷から出た。

屋敷の外には周囲を警戒していた小波と綾那が待っていた。

「ご主人様、お待ちしておりました。そちらが空様と愛菜様ですか？」

「おー、可愛い子たちです」

「そうだ。空ちゃん、愛菜ちゃん、この二人は俺の仲間だから安心してくれ」

「さあ、こちらへ。すぐに春日山城から脱出しましょう」

小波が案内しようとしたその時だった。

「くせ者、そこに直れ！成敗してくれる！」

「っ!？」

突如、凜とした声と同時に銀色の一閃が流牙に襲い掛かる。

ギイン!!!

流牙の牙狼剣で銀色に輝く刃を受け止め、それを放った主を見て目を見開く。

「君は……」

それは流牙が春日山城に潜入調査をした時に出会った狐耳の少女だった。

「小波、綾那！二人を連れて先に行け!!」

「ご主人様!？」

「だったら綾那が……」

「いいから早くしろ!!ここは俺に任せろ!!」

「つ……わ、分かりました。さあ、お二方、参りましょう」

「流牙様、絶対に戻って来るですよ！」

「ああ！」

小波と綾那は空と愛菜を連れて先に脱出経路へ向かった。

「ま、待て！くつ、先に貴様から倒す！」

少女は流牙から離れると刀を鞘に戻して居合いの構えをし、剣術最速といわれる抜刀術で鞘から刀を解き放ち、素早い剣を繰り出す。

そして、同じく鞘から牙狼剣を抜いた流牙は少女が繰り出した居合いの斬撃を全て弾き返した。

「なっ……っ!?居合いの斬撃を全て弾いた!?しかも鞘走りが出来ない直剣で!？」

「止めてくれ、俺は君を傷つけない。君は美空の……空ちゃんと愛菜ちゃんの味方なんだろう？」

「ど、どうしてそれを……あなたは一体……？」

「俺は……金色の天狼、道外流牙だ」

牙狼剣を鞘に納めながら流牙は自分が誰なのか少女にわかりやすく伝えるために名前と一緒に異名も名乗った。

「ど、道外流牙!!あの田楽狭間の天人!?!、しかしどうして……？」

「訳あって美空と協力しているんだ。俺の目的は空ちゃんと愛菜ちゃんを美空と秋子さんの元に返す事だ」

「空様と愛菜を……!？」

「ああ。これが証拠だ」

流牙は美空の手紙を取り出し、中を開いて少女に読ませた。

「これは紛れもなく美空様の字……なるほど、あなたの言葉は真実のようですね。わかりました、空様と愛菜をよろしくお願いします」

「任せてくれ。えっと、君は……？」

「も、申し遅れました。私は小島貞興です。通称は貞子と申します」

「貞子さん……空ちゃんと愛菜ちゃんは俺が必ず美空と秋子さんの元に送り届ける」

「お願いします……追っ手が参ります。さあ、お早く……！」

「ありがとう。君の事をちゃんと美空に伝える。全てが終わったらまた会おう！」

「ええ。その時は是非とも私の尊敬するお方と一緒に酌み交わしましょう」

「ああー！」

貞子の思いを受け取った流牙は急いで小波達の元へ向かった。

流牙を見送った貞子はその背中を見つめながら願うように呟いた。

「まさか、ここで道外流牙殿に出会うとは……空様、愛菜。どうかご無事で……」

☆

流牙は先に行った小波達と合流すると、流牙が空を、小波が愛菜をしつかりと抱き上げて用意した降下用の縄で一気に下へ降りる。

崖の下には逃走用の馬を用意していた転子と歌夜が駆け寄り、ひよ子は先に荷物を

持つて先に本体の元へと戻っていた。

「よし、脱出だ！ 転子、歌夜、先行してくれ！」

「はいっ！」

流牙と小波は馬に乗り、空と愛菜をそれぞれ横乗りで抱きかかえるように乗せて馬を走らせる。

空と愛菜を救出し、春日山城から脱出する作戦の第二段階は成功し、次の第三段階は流牙隊の本隊と合流する事である。

急いで馬を走らせて春日山の西へ向かうが、空と愛菜が連れ去られたと城側にもばれ てしまい、同じく馬を走らせて追いかけてくる。

先に逃げてはいるが、向こうの方に地の利があるので徐々に距離を詰めてきている。すると小波の句伝無量で一葉達から連絡が来た。

「ご主人様。一葉様から連絡です！ 我々を追っている兵を叩いて良いかとのこと！」
「何?! 合流地点はまだ先じゃないのか!？」

「雫様の指示で展開位置を少しずつ前へ移していたご様子。いかがなさいますか？」
「そうか、さすがは雫だ。よし、雫に任せよう！」

流牙は雫の作戦に全てを任せ、一刻も早く合流するために馬を走らせる。
それから少し経って一葉から再び連絡が入る。

「一葉様からお返事！我々はこのまま街道を直進、敵陣を一杯まで引き延ばせのこと！」
「迎撃で一気に叩くか。みんな、もう少しだ！このまま全力で行くぞ！」

その後……お手本のような雫の奇襲作戦で流牙隊や一葉達を筆頭に流牙達を追いかけている敵陣の迎撃を開始する。

「ふはははは！滅せよ、三千世界!!」

その際、今までの鬱憤を晴らすかのように一葉が三千世界で数多の刀を召喚して迎撃していた。

更に鉄砲隊の活躍もありもはや一方的な掃討戦で圧倒的だった。

後方にいた敵陣はあつげなく退避し、ひとまず安全が確保された。

「よし、それじゃあ美空たちの元に戻ろう！」

流牙達は連絡役で美空達と行動を共にしている詩乃の案内に従い、美空が本陣を構えている寺へ向かった。

焦らずゆっくり移動し、到着したのは夜遅い時間だった。

流牙はすぐに空と愛菜を連れて美空達の元へ向うとしたが、門の前にいる徒士が中々通してくれず、痺れを切らした流牙は空と愛菜の二人を抱きかかえた。

「ああもうあんた達は邪魔だ！空ちゃん、愛菜ちゃん、ちよつとごめんね」

「きやつ!?!」

「どやっ!？」

「通してくれないなら飛び越えるだけだ!!」

助走をつけて高く飛び、寺の門を飛び越えて境内に侵入する。

後ろから徒士の煩い声を完全無視して美空と秋子の元へダツシュをする。

そして、寺の前に美空達の姿が見えて来て空と愛菜の顔が明るくなつて行く。

「ほら、お母さんの元へ」

流牙は空と愛菜を降ろし、二人の背中をポンと押すと満面の笑みを浮かべて元氣よく走り出した。

「美空お姉様!!」

「母上ー!!」

「空!!」

「愛菜!!」

二人の愛娘の姿を見た美空と秋子も走り出してそれぞれの娘を抱きしめた。

「大丈夫? 酷いことをされてない?」

「はい! ずっと愛菜が側に居て、守ってくれました。それに城方にとっては価値の高い人質ですから、端にも置かない扱いでしたよ」

「良かった……」

美空は空の頭を撫で撫でしながら愛おしく抱きしめ、その小さな温もりを確かめた。
一方、愛菜と秋子は再会の喜びから大粒の涙を流し、大声で泣きながら互いを抱きしめて居た。

「どやー……っ!!」

「愛菜……無事で良かった……。うわああああん!!」

二つの親子の微笑ましい再会を見守っていると流牙の帰りを待っていた結菜と詩乃と鞠が迎えた。

「お帰りなさい、流牙」

「流牙様、無事で何よりです」

「わーい、流牙!お帰りなのー!」

「ただいま、みんな」

結菜達が迎え、ホッと一息をつきながら再び美空達を見守ると自然と笑みが溢れて目尻が下がった。

そんな流牙を見て結菜は隣に寄り添いながら尋ねた。

「波奏様のこと……思い出してるの?」

結菜にそう尋ねられ、流牙は瞼を閉じながら頷いた。

波奏の姿を思い浮かべ、ゆつくり目を開けてもう一度美空達の再会の光景を目にす

る。

「そうだな……二人を助けられて本当に良かったよ」

まだ美空達との同盟の話には遠いが親子の再会の光景を見られただけでも流牙にとっては掛け替えのない大きな価値のあるものだった。

そして、美空と秋子は空と愛菜を連れて流牙の元に行き、感謝の言葉を送る。

「流牙……空を助けてくれて本当にありがとう」

「ああ、無事に助けられて俺も嬉しいよ」

「流牙さん、愛菜を取り戻してくれて、本当に……本当にありがとうございました……」
「僅かな可能性にかけたかいがあったね」

「は、はい……」

秋子は流牙との口論を思い出して顔を赤くした。

流牙は笑みを浮かべていると美空があることを聞いて来た。

「ところで、城でもう一人女の子を見なかったかしら？」

「……え？もう一人？」

「空と同じくらい年の年で、大きな髪飾りをつけた巻き毛の……」

「空ちゃんと同じくらい女の子の……？いいや、直江屋敷には空ちゃんと愛菜ちゃん以外は見張りの兵しかいなかったけど……もしかしてまだ人質が……」

「それなら大丈夫よ。その子はちよつと特殊な立場の子でね。馬鹿姉達でも下手に手を出したらとんでも無いことになるから」

「特殊な立場の子……？大丈夫なら良いんだけど……」

「心配しなくていいわ。それより、あなた達は休んでいなさい。後は……私達の仕事だからね」

美空の弱点であつた空と愛菜を取り戻したことで恐れるものは何も無い、後は春日山城を取り戻すだけだ。

「分かった。それじゃあ俺たちは休ませてもらうよ」

「ええ。あ、そうだ。明日の夕方に空と愛菜を取り戻したことを祝して宴を開くから流牙隊のみんなは全員来てね」

「宴か……分かった、楽しみにしているよ」

流牙は結菜達を連れ、新たに敷かれた流牙隊の陣へと向かい、休みに入った。

越後に来て一つの大きな試練を乗り越えた流牙。

ザルバを通じ、遠くにいる久遠との微かな繋がりを感じながら南の空を眺めた。

『宴』
Party

春日山城から囚われた空と愛菜を奪還し、無事に母の美空と秋子に送り届けた流牙。翌日の夕方、流牙は皆を連れて美空達の陣を敷いている寺へ向かった。

「お邪魔します」

「どやーっ！おお、流牙殿！」

出迎えてくれたのは愛菜だった。

「やあ、愛菜ちゃん。美空に呼ばれてきたけど、取り次いでくれかな？」

「今御大将は愛し恋しの我が主、空さまと親子の時間を過ごしておられる真つ最中であらせられます！どや！」

「そうなの？おーい、秋子さーん、いますかー？」

流牙は大声で奥にいる秋子を呼ぶとバタバタと足音をさせながら秋子がやってきた。

「流牙さん、皆さん、お待ちしておりました！さあ、どうぞ」

「ああ。お邪魔します」

流牙達はブーツや草履などの履物を脱いで寺の中へ上がる。

愛菜は秋子にべったりとくっついて一緒に歩き、微笑ましい親子の姿を見て流牙は改

めて助けられて良かったと実感する。

「美空様、流牙さん達をお連れしました」

「入りなさい。みんな、よく来たわね」

「皆さん、お待ちしておりました」

宴会場となる大広間には美空と空が待つており、流牙達を笑顔で迎える。

空は座っている美空の膝の上に乗っており、本当の親子のように仲良くしていた。

それを見た一葉は懐かしむ顔をしており、流牙は一葉が何を懐かしんでいるかすぐに分かった。

「一葉、双葉ちゃんの事を思い出した？」

「……双葉の事はいつも思っておるわ」

離れ離れになった愛しい大切な妹の双葉……流牙も早く会いたいと願う。

そんな中、小夜又は宴に興味が無かったので顔だけ出して帰ろうとした。

「んじや、オレは顔を出したから帰るぞ」

すると……。

「あいやまたれいっす！」

そこに勢いよく現れたのは柘榴でその後ろにはいつものようにどこか呆れた松葉が付いている。

「アンタ、流牙隊のちっこい槍使いの二番目つすよね！ 柘榴といぎ尋常に勝負つすよ！」
「……ンだとコラ。今何つった」

柘榴の言った言葉の内容に苛立ち始める小夜叉。

柘榴は流牙隊のところに道場破り（？）をした時は綾那と戦ったが小夜叉とは入れ違
いになって戦えなかった。

「柘榴といぎ尋常に勝負つす！」

「ンなもん聞いてねえ！ その前だ！」

「ちっこい！」

「ちっこいのはこれから母みたいに勝手にデカくなンだからいいんだよ！」

「いいなあ小夜叉ちゃん……。桐琴さんで保証されてるんだもん……。…」

「ですよね……」

ひよ子と雫の呟きを流牙は聞かなかったことにして小夜叉と柘榴の話を引き続き聞
く。

「ちげーよ！ その間！」

「槍使い」

「テメエわざとだろ！」

「二番目？」

「そうそうそこだよ！誰が二番目だ誰が！じゃあ一番目は誰なんだよ！」

「あの、殺る殺る言う鹿角の……」

「母ならまだしも、本多のガキが一番でオレが二番目だど!? テメエ表に出ろ！ぶつ殺してやる！」

ちなみにその綾那は歌夜と小波と一緒に葵に呼ばれて松平衆の陣におり、後から宴に合流することになっている。

「お、上等つす！こつちこそ刀の錆にしてやるつすよ！」

小夜叉と柘榴はやる気満々で流牙は一応美空に尋ねる。

「美空、いいのか？」

「別にいいわよ。お腹空いたら帰ってくるでしょ。松葉、立ち会ってあげなさい」

「宴……」

「松葉——立ち会うつすよ！」

「あうう……行く……」

宴に出られるはずだったが思わぬところで出られなくなり、いつもは無表情が多くてあまり感情を表に出さない松葉の今まで見たことないほどの落ち込みようだった。

流牙も少し可哀想に思い、松葉の肩をポンと叩いて応援する。

「松葉、頑張れ……やばくなったら呼んでくれ。俺が二人を止めるから……」

「うん……お願い……」

「小夜叉、程々になー」

「そんなの向こうのツス野郎に言えよ！オレあ手加減なんかしねえからな！うまく殺されないようにしろよテメエ！」

「無茶苦茶だな……」

「上等つす！」

「君もそれでいいんかい」

そう言つて小夜叉と柘榴はそれぞれの獲物を持つて外に出て行き、松葉はその後を落ち込みながら付いて行つた。

それから少しして秋子や愛菜達が宴の膳を運んで来たが、それを見て流牙たちは驚く事しか出来なかつた。

「うわ……すごい」

「ごはんです！真つ白でつやつやしていますよ！流牙様！凄いです！」

「さ、魚！焼き魚ですー！」

雫は膳の豪華さ、ひよ子は炊きたてホカホカの白い米、そして魚大好きな詩乃は久々の焼き魚に目を輝かせていた。

「これは凄いな……」

「ええ。うちでもなかなか出せない高級なものよ」

膳にはご飯や魚以外にも色取り取りのおかずや果物などなかなか見ない高級な食材が並んでいる。

「ふふっ。石高こそそれほど多くありませんが、越後の米は美味しいですよ」

「ふふん、驚いた？」

秋子は越後の米を自慢し、美空はドヤ顔をしながら流牙に尋ねる。

「もちろんだよ」

「たまには私たちが流牙達を驚かせてもいいでしょう？」

「もしかして、こんな美味しそうなご飯を毎日……？」

「まさか。普段は流牙隊に補給している食事と大して変わりませんよ」

「左様！本当はもう何日かして使う予定だった所を、空さまご帰還の祝いと称してお振る舞いーどーんー！」

「何日かして？」

「戦を控えた数日は、美味しく栄養のあるものを振る舞って兵たちの英気を養うのが、御大将のやり方ですから」

「なるほどね……懐かしいな、俺も大きな戦いの前にD・リングに美味しいケバブを食べたな……」

「でい……？誰よそれ？」

「俺たちの仲間さ。元氣な爺さんでユキヒメって言う美人の女将と一緒に小売の店をやってるんだ。元魔戒法師らしくて、横流しで沢山の魔導具や文献を持っているんだ」

「よ、横流し……？大丈夫なの、その人……」

「根はいい人だよ。こいつをくれたし、俺たちが戦ってる時に町を守るために奮闘していたからね」

流牙はD・リングから阿号と戦う前に譲り受けた左手に装着するソウルメタル製の手甲を見せる。

「ふーん。面白いわね。ねえ、流牙。どうせだからあなたの仲間について色々教えてよ。話の肴にはいいでしょう？」

「俺の仲間？」

「そうね、そう言えば流牙の仲間は莉杏さんぐらいしか知らないわね」

「いい機会じゃ、他の魔戒騎士や魔戒法師について詳しく教えてくれ。のう、流牙よ？」

結菜と一葉だけでなく他のみんなも天の世界にいる流牙の仲間に興味がある。

「そうだな……わかったよ、大して多くはないけど俺と一緒に死線を乗り越えてきた大切な仲間たちについて教えてやるよ」

流牙は美味しい宴の膳を味わいながら、時にはぶつかり合いながらも強い絆で結ば

れ、共に戦ってきた仲間たちの事を話す。

性格がかなり異なるみんなに負けず劣らずな特徴のある仲間たちに宴はどんどん盛り上がっていく。

「ふう……美味しかった。よし、それじゃあ……」

流牙は膳の料理を食べ終えて席から立ち上がると魔法衣からギターを取り出して下座の方に出てピックを構える。

「美空、前に約束した余興をやるね」

ガ口の鎧を見せた時、空と愛菜を取り戻した際に演奏をすると約束していた。

「余興……？ ああ、確かそれは南蛮の弦楽器ね。覚えていたのね」

「俺たちの世界だと歌は音色に乗せて言葉を送るんだ。それじゃあ、早速一曲目を歌うよ。闇の中の救世主……『SAVIOR IN THE DARK』!!」

流牙は宴のお陰で高まったテンションのまま、ギターを奏でて魅惑の歌声で歌い始める。

美空たちからしたら初めて『天の世界の歌』を聞いたので、この世界の歌の概念とは全く違う心が湧き上がるようなギターの音色と流牙の歌声に驚きと同時に興奮する。

「これが天の世界の歌ね……へえー、なかなか良いじゃない」

美空はすぐに流牙の歌を気に入った。

秋子達も最初は戸惑っていたが、流牙の魅惑の歌声ですぐに受け入れられた。

流牙は自分の知っている歌を五曲ほど連続で熱唱し、心から感動したみんなから惜しめない拍手が沸き起こった。

ギターに興味を持った美空や空は流牙に貸してもらい、使い方を教えてもらいながら宴の楽しいあつという間に時間が過ぎていく。

気付けば外は日が沈んで夜となっていた。

宴も終わり、幼子たちである空と愛菜は就寝のために秋子が連れていき、既に寝ている鞠を見た結菜たちも早めに寝るために陣に戻る事にした。

流牙も陣に戻ろうとしたが美空に呼び止められた。

「流牙、ちょっと話したいことがあるから来てくれないかしら？」

「話したいこと？わかった、いいよ」

結菜たちに先に帰ってもらい、流牙は美空に連れられて寺の奥へと向かった。

美空の為に用意された部屋はかなり良い部屋で流牙は座布団に座ると美空はお茶を用意して湯のみを流牙に渡す。

「はい、熱いうちに飲みなさい」

「ん、ありがとう」

流牙は月を見ながらお茶を啜り、その隣に美空が座って同じくお茶を啜る。

流牙にはあまり高級な物の味の違いは分からないが、お茶に使った茶葉がかなりの上物だと分かるぐらい美味しく、思わずため息が出るほどお茶の味が体に染み渡った。

お互いに宴の興奮から落ち着いて一息をつくとき美空から話し始める。

「流牙、改めてお礼を言うわ。空と愛菜を救ってくれて本当にありがとう」

「ああ。二人共、本当に良い子たちだね。空ちゃんは優しいし、愛菜ちゃんは元気一杯で空ちゃんを大切に想ってるね」

「ええ。あの二人なら私の跡を継いで越後を任せられるのよ」

「そっか……親から子への永遠か……」

「永遠……？何よそれ？」

「魔戒騎士の信条だよ。親から子へと受け継がれる想いこそが真の永遠って言ってね、親から想いを受け継いだ子供達は成長し、魔戒騎士として戦っていくんだ」

「ふーん……真の永遠ね。良いじゃない、私の馬鹿母からは想いは受け取ってないけど、私や秋子の想いは空と愛菜に受け継がせてあげたいわね」

「大丈夫、二人の想いはちゃんと二人にも受け継がれているよ」

「ありがとう。ねえ……流牙」

「ん？」

「あなたは……この世界でどうしたいの？」

「どうしたいって?」

「あなたはこれまで織田信長や多くの仲間と共に多くの鬼から国と人を守るために戦い、天下御免の女誑しになって一葉様達を含めて多くの妻を持った。まあこのままいけば、私たち長尾衆も同盟に加入するかもしれないとして……あなたはいずれこの国から全ての鬼を倒したら元の世界……天の世界に帰ってしまう」

以前話をした時に流牙は久遠たちと離れ離れになっても必ず元の世界に帰ると美空に話した。

美空は流牙が魔戒騎士の使命として戦い続けるのは既にわかっているが、何故そこまでするのか理由が聞きたかった。

「ああ……前にも話したけど、そうだな」

「でも、幾らあなたが魔戒騎士とはいえ、そこまでして戦う理由は何?あなたに得るものなんて何も無いじゃない。地位や権力やお金も要らない……奥さん達だって、その、手を出してないんだし……」

流牙は将軍である一葉の夫でこの国ではとても高い地位にいたので権力を振るうことが出来るが、流牙には権力には興味はない。

お金は生きるために必要だが精々必要最低限ぐらいしか要らず多くは望まない。

そして、男にとって古来より欲望の象徴の一つとも言える女である妻は沢山いるが決

して交わろうとはしていない。

人には欲というものが存在する。

欲があるからこそ人は生きることが出来るが、逆に破滅を呼ぶこともある。

この戦乱の世で欲は必要不可欠な物でその欲があるからこそ、終わりの見えない争いが続く。

しかし、他人から見て流牙にはその欲がほとんど無いに等しいと思えて仕方ない。

鬼と戦うために己を犠牲にして刃を振るい続けている。

「別に俺は今まで損得で戦った覚えはないからな……魔戒騎士として魔獣から人を守る、守りし者としての遥かな古から受け継いだ使命だから。でも、強いて言うなら……笑顔かな？」

「笑顔……？」

「ああ。母さんとこの瞳に多くの笑顔を映すつて約束したからね。平和に暮らす人たちの笑顔、そして俺が戦う事で助かった人達の笑顔……それがあれば俺は十分だよ」

「笑顔を理由に戦うなんて初めて聞いたわよ……」

「俺にとつては戦うに値する理由だよ。昨日の救出作戦だつて、空ちゃんと愛菜ちゃん、美空と秋子さんと再会した時の笑顔……ちゃんとこの瞳に焼き付いているよ」

「うっ……わ、忘れなさい！」

「え？嫌だ。忘れるわけじゃないじゃないか、美空の嬉しそうな顔、とても可愛かったし、臉を閉じれば鮮明に思い出せるよ」

「あんた……意外に良い性格をしているわね……」

「はっはっは！いくらでも言ってくれ」

美空を若干いじりながら楽しんだ流牙は一息をつくど話題を変える。

「ねえ、空ちゃんから聞いたけど、越後は雨が多くて洪水が多発して沼地が多いんだって？」

「そうよ。土地柄、大昔から洪水が多くて水捌けが悪いのよ」

「もつたいないよな……あんなに美味しい米なのに……あ、そうだ。同盟を考えた久遠……織田信長は天下布武を目指していて、座や関所を無くして人や金の物流を活性化しようとしているんだ」

「座や関所を無くす……ですって？何？同盟は鬼を倒すための繋がりじゃないってハナハナ」

「ああ。同盟を組んで多くの国を一つにまとめることで、人や金の物流を活性化する。それだけじゃなくて、それぞれの地方の技術を共有して、土地や天気で困っている事を解決できるかもしれない。もし、他の地方で考えられた技術を使って越後の治水を何とかできれば、越後が有名な米所になるかもしれないよ」

「越後が……有名な米所に……?」

思いもよらなかつた流牙の思い描く理想に美空は目を丸く見開いて驚く。

「あんなに美味しいんだ、越後が米所になれば今よりもっと発展するし、豊かになる。考えるだけでも面白くないか?」

「そうね……面白そうだけど、実現するかしら?」

「実現出来るよ、人間には無限の可能性があるからね」

「無限の可能性……?」

「前に人を守る価値は無いと言われたことがあるけど、俺は守るに値する光があると信じている。そして、人には未来を作る無限の可能性がある」

ザルバをはめた左手を月にかざしながら流牙のこの世界で出来た『夢』を語る。

「この世界に生きるみんなと一緒に鬼を全て倒し、人の世にする。そして久遠たちがつくる、人々が平和に幸せに暮らせる世を見届ける……それが俺の夢なんだ」

この世界の希望と夢と未来を守り、人々の笑顔を見る……それが流牙の望む『欲』であり、『夢』なのだ。

それを聞いた美空は呆気にとられて呆然とした表情を浮かべたが、流牙の性格や本気と思える楽しそうな笑みに美空は苦笑を浮かべて息を吐いた。

「そんな風を実現出来るか分からない、他人が聞いたら大笑いするような夢を語る人を

初めて見たわよ。でも……」

美空も真似して右手を月にかざしながら笑みを浮かべて言う。

そして、草履を履いて庭に飛び出すと月明かりに照らされながら美空は流牙と向かい合いながら微笑んだ。

雪のような白い髪に雪の結晶が描かれた外套を纏っているの、流牙には一瞬だけ美空が雪の妖精のように見えた。

「あなたなら、叶うかもしれないわね。その夢」

「美空……」

「でもその前に馬鹿姉達から春日山城を取り戻さなくちゃならない。だから流牙、見ていなさい。越後の龍と呼ばれる私と、長尾衆の力を！」

それはこれから先、共に戦う仲間だから自分たちの力をしっかりと見ておきなさいと言っているようなものだった。

流牙は笑みを浮かべ、美空の元へ言つて拳を突き出した。

「ああ。見せてもらうよ、美空達の力を」

「ええ！」

美空も拳を突き出してお互いの拳を軽くぶつけ合う。

魔戒騎士と越後の当主……進むべき道と描く未来は異なる。

だが、二人は夢と未来を語り合うことで確かな絆を深め会った。そして、美空たちが越後を取り戻す時が近づく。

『乱』
（Disorder）

美空たちは空と愛菜を取り戻し、いよいよ春日山城を取り戻す最後の戦いに臨んだ。人質を取り戻し、恐れるものが何も無い美空たちは気合い十分で春日山城近くに向かうが越後衆に混じって黒い影が一つあった。

「どうして俺は……ここに……いるんだらう……？」

それは美空の隣にいる呆然とした流牙だった。

本来なら流牙は結菜や詩乃たちと共に戦場から離れた場所で陣を待機をしているはずだが、美空に無理やり連れてかれてしまった。

「言つたでしょ？ 私たちの力を見せるって」

「だからつてこんな間近でなくても良いじゃないか……」

「別に良いじゃない。あなたには絶対に戦わせないし、特等席で見せてあげたいのよ」
「お願いだから結菜達の元に帰らせてください……」

「ダ・メ・よじじゃないと同盟の件を更に先延ばしにするわよ？」

「そんな……」

最低でもしばらくは美空か秋子の隣に居なければならなくなり、軽く意気消沈する流

牙だった。

ちなみに流牙隊の小波を筆頭に何人かは美空の頼みで城内に侵入して内側から扉を開けるように裏方で動いている。

侵入方法はいつもの通りで流牙があらかじめ飛ばした縄付きの鉄の矢を投げ飛ばして城壁に刺し、綱渡りで侵入した。

そして、美空達は春日山城の大手門で最後の戦いに臨むため、戦国武将特有の口上を述べた。

「城方の極悪謀反人ども、御大将の言葉、耳かっぽじつてよく聞くつすー！」

「聞けい！越後に仇なす謀反人どもよ！貴様らの頼みの綱であった人質二人、この長尾景虎がしかと取り返した！もはや貴様らに勝ち目なし！己の罪を認め、降伏するならばしかるべき温情を与えよう！それでも戦うというのなら、越後の武士として、勇敢に殺し合おうではないか！越後の龍に付き従う兵どもよ！天高く旗を掲げよ！この越後の支配者は誰なのか、天に！地に！衆目を教えてやれ！」

越後衆の兵たちの気合の声が轟き、美空たち越後衆を象徴する旗を掲げた。

「長尾の御旗たていっすー！」

「越後が英傑、長尾景虎。その守護を務めるは、武勇名高き毘沙門天の旗」

毘沙門天の化身と謳われ、加護を受けている美空を象徴する『毘』の文字が描かれた

旗を掲げる。

「我らに毘沙門天の加護あらんことを！」

「もひとつ掲げるっすー！」

「大日大聖、懸かり乱れ龍の旗」

また、越後の龍の異名を持つ美空のもう一つの旗である『龍』の文字が描かれた旗を掲げる。

「我らに不動明王の加護あらんことを！」

「毘沙門天よ、不動明王よ！勇敢なる我らの戦い。存分に照覧あれ！」

「かかれえええええい！」

柘榴が先陣を切り、越後衆の兵たちが一斉に走り出した。

その光景を見た流牙は口を開きっぱなしでぼかーんとした様子で先程とは別の意味で呆然とした。

「凄いな……」

こんな間近で戦の開始を見たことなかったのもその勢いや迫力に圧倒されてしまう。

空と愛菜を取り戻したことで恐れるものが何もなくなつたこともそうだが、当主である美空のカリスマ性や武将や家老の柘榴たちの存在が兵の力を高めている。

越後衆の力を間近で見る流牙はこれから鬼に向けて共に戦うことになるとしたら大

きな戦力になると実感するのだった。

ザルバのカバーを開いて一緒にこの戦いの行く末を見守る。

「これが終われば美空たちは同盟に加わるかな……」

『さあな。だが、お前は信じているんだろ?』

「今はそれしか出来ないからね……」

越後衆の力を目の当たりにすると同時にある考えが流牙の頭の中をよぎった。

人同士の争う戦に参加することが出来ない流牙は守るべき存在である人の醜い一面の一つ……戦の光景が瞳に、記憶に焼き付けていく。

元の世界では見ることがなかった戦の光景……。

己の正義、欲、使命……理由は異なるがその為に人は争い続けている。

魔戒騎士と魔戒法師は魔獣の手から人を救う為に影から戦い続けてきたが、長い歴史の中で守るべき存在である人に絶望し、闇に堕ちた者は大勢いる。

かつて、神の牙の異名を持ち、守りし者たちの中で名が通っていた一人の魔戒騎士がいた。

その魔戒騎士は魔戒法師の女と結婚し、一人の子供を授かり、幸せな旅をしていた。

しかし、守るはずだった大勢の人間に裏切られてその子供は生贄にされてしまい、魔戒騎士と魔戒法師は怒りと悲しみで復讐に取り憑かれ、ホラーに憑依されてしまった。

そして、人の心を失い、ホラーを喰らい、大勢の命を奪う化け物へと変わってしまった。

もしも同じ立場だったらその魔戒騎士と同じことをしていたかもしれない……だけど、流牙は一人ではない、側にはいつも共に戦い、苦難を共にする大切な仲間たちがいる。

たとえば道を踏みはずそうになっても仲間たちが止めてくれる。

「俺は人を守る……守りし者として」

流牙は人の醜さを受け入れながら改めて守りし者としての強い意志を確かめていくのだった。

そして……美空たちは無事に春日山城を取り戻すことに成功したのだった。

☆

美空が春日山城を取り戻して、一夜が明けた。

流牙は流牙隊の主要メンバー全員を引き連れて空の案内の元、春日山城内を歩いていた。

ちなみに春日山城を乗っ取った首謀者である美空の姉、晴景は逃亡中、残った母……政景は城に残っていた。

重い処分にはならないそうだが、実の母が謀反を起こして、その上娘の空を人質に

取ったことに流牙は腹が立ち、軽くブチ切れそうになって思わず説教をしに行こうとしたが、結菜たちに止められた。

「着きました。お姉様、流牙様以下の皆様をお連れ致しました」

「通して頂戴」

部屋には美空だけでなく秋子や柘榴、松葉といった春日山の主要な将が揃っていた。

「大所帯ね」

「みんな来いって言っただろ？」

「まあいいわ。本当ならちゃんとした評定の方が良いのだろうけど、一応流牙は裏方だから。……悪いわね」

「別に良いよ、この方が気が楽だから」

「さて、道外流牙どの」

「……はい」

美空の真剣でかしくまった表情と声に流牙に緊張が走り、背筋を伸ばして美空と向かい合う。

「この度の春日山城攻城戦。勝利を得ることが出来たのはひとえに道外どのの助力があったからこそ。その功を素直に認め、かねて貴殿より要請のあった織田との攻守同盟を受け入れよう」

美空からの念願の答えを聞き、流牙だけでなく結菜や一葉たちは一瞬言葉を失った。遂に美空は同盟に加入することを決めてくれたのだった。

そして流牙は笑みを浮かべ、久遠の夫として答えた。

「……織田家棟梁、織田久遠信長の夫、道外流牙。その名において、長尾家との攻守同盟を受け入れる。ありがとう、美空！」

「越後のために働いてくれた、その借りを返すため。そして……あなたの描く未来を見るためにね」

それは宴の夜に流牙と美空の話した描いた未来と夢の話……それを実現するための大きな一歩だった。

しかし、同盟を結んだと言ってもそうすぐに兵を出せるわけではない。

春日山城を取り戻したばかりでまだ色々やらなければならぬことが美空たちに待っている。

流牙たちも美空たちの事情があるのですぐに出してもらえとは思ってもいなかったので、ひとまずは織田との連絡を取れるように依頼した。

流牙の考えた同盟が無事に結び、大きな仕事を終えて皆が喜ぶ中……嵐は突然やって来た。

「申し上げます！ たった今、正門にお客様が……！」

兵から緊急の用事を美空に報告して来た。

美空は内乱の直後だからロクな客ではないと追い払おうとしたが、その客人は見過ぎることができない人物らしく美空は舌打ちをして立ち上がる。

「チツ……流牙、後で呼ぶから今は下がっていて」

「何かあつたのか？」

「……遠い親戚が口出ししてきてね。まあ長尾家内のいざいざよ」

「長尾家内か……分かった、何かあつたら呼んでくれ」

そして、客とは上段で会うと言い残した美空は長尾家の主要メンバーと共に流牙たちにも同席を要請した。

何故自分たちが呼ばれたのか今一理解が出来ないが、ひとまず流牙は詩乃と雫を連れて上段の間へとやって来た。

屋根裏には小波に、結菜と一葉たちは隣の部屋で待機している。

上段に鎮座する美空はいかにも不機嫌そうな表情を浮かべて客を待っていた。

その周囲には長尾家家老である秋子と共に見たことのある二人がおり、立ち上がった近づいて来た。

「流牙どの！」

「貞子さん！」

一人は空と愛菜を奪還した時に出会った、二人を影から見守っていた居合いの武将、貞子だった。

「この度は本当にありがとうございます」

「ああ。それよりも貞子さんが無事で良かったよ」

「はい、ありがとうございます」

流牙は貞子と再会を喜ぶと以前侵入した時に見た、うさ耳のリボンを付けた少女が話しかけた。

「おお。貴様が道外流牙とやらか。ふむふむ、中々どうして。良き面構えをしておるのお」

「あなたは……?」

「我が名は宇佐美定満と申す。通称は彩綾じゃ。よろしく頼むのじゃ」

「どうも。えつと……」

流牙はどこか懐かしさを感じる宇佐美の雰囲気に対し呆然としていた。

「なんじゃ、どきまぎしおつてからに。小僧殿は年若幼児体形型に欲情する変態なのかえ?」

「違います」

流牙はロリコンの疑いを掛けられたが即答で否定し、一つの疑惑を確かめるための質

問をした。

「失礼だけど……もしかして俺より年上ってことは無いかな……？あなたと少し似た雰囲気の人を知っているんだけど……」

それを聞いた瞬間、宇佐美と貞子は目を見開いて驚いた。

「よく気がついたの……その通り、儂は貴様より年上じゃぞ」

「もしかして、おばあちゃんってことは……？」

「そうじゃが？しかし、どうして気がついたのじゃ？」

予感的中し、流牙は苦笑いを浮かべて宇佐美の問いに答えた。

「実は……俺の尊敬する人、リユメ様と言う方がいて。その人は見た目はあなたのように幼女だけど、実年齢はおばあちゃんなんだ……」

「な、なんと……儂以外にも『可愛いババア』を目指している者がおるとは……!?!」

宇佐美は自分以外にも幼い見た目で中身は高齢という者がいることに衝撃を受けていた。

「可愛いババアって……リユメ様は目指して無いよ、確かに小さくて可愛いけど……」

流牙は初めてリユメに出会った時の驚きや自分たちに親身になってくれた優しさを思い出す。

「リユメ様は卓越した法力を持っていて、その影響で肉体の歳が取らなくなってしまう

「ただ」

「なるほどの……是非とも同じ可愛いババア同士会って見たいものよのお。じゃが……そのリュメはお主の世界の者じゃな？」

「そうだよ。でも、もし会えたらあなたと楽しく話せると思うよ」

「そうかそうか。話は変わるが、御大将から聞いておる。鬼と戦う為に織田と同盟を結ぶとな。じゃがのお……」

「もしかして……武田が心配？」

「ほお、気づいておったか」

美空たち長尾衆の宿敵とも言える存在、甲斐の武田。

美空と対等に戦える相手とあって、常に気が抜けないのだ。

「越後との同盟……その為には武田をなんとかしなければならぬ。越後内部は美空たちに任せるとして、武田は機会があれば俺がなんとかする」

「お主が？」

「ああ。それは、武田を仲間に取り入れる」

武田はこの戦国にその名を轟かせている一派で諜報部隊の情報収集能力は凄まじく、棟梁の『武田晴信』は戦の天才と呼ばれている。

流牙は是非とも武田も同盟に加わって欲しいと密かに思っていた。

「武田が仲間になれば同じ同盟国である越後と争うことはなくなる……どうかな？」

「はっ！武田を？あの甲斐の虎を仲間に取り入れる？……くくくつ、あはははははっ♪」
「変かな……？」

「変というより、その考えは思いつきませんよ……」

「武田とは長年敵対しておる儂らでは思いつかん、面白い手じやと思つてな」

「敵対しているからこそ手を組んだら凄い力になると思う。だから機会があれば武田と会つてみたいと思う。まあ……美空にはしてないけど。言つたらやばいことになりそうだし」

「その方が良くぞ。じやがまあ……うむ。儂は貴様を気に入つたぞー！」

「そうですね、ありがとうございます」

「うむ♪……そうじや！小僧には特別に、儂のことを『うささん』と呼ぶことを許してやるのじやー！」

「うささん？」

「そうじや。この呼び方は儂が気に入つたやつにしか呼ばせんのだじや。それで、気に入つたついでに、小僧どうじや？今宵、儂と床でまぐわわんか？」

「う、うささま!?!」

まさかの宇佐美からの提案に隣にいた貞子は目みを開くほど驚いたが、流牙は冷静な

様子で軽く頭を下げた。

「全力で断らせていただきます」

「なんじゃ、つまらんのお。はっ!? もしやお主、実はそちの趣味が……」

「何を考えているか知らないけど、変な邪推はやめてください」

「だったら、ここは一つババア孝行だと思つて——」

「うさあ! この性悪鬼い! そんなところで色目使つてないで、こつちに來なさい!」

流牙に色目を使つている宇佐美に対し遂にブチ切れだ美空は大声で叫んで呼び戻した。

「ほっ。我が儘姫が、自分の物に手を出すなと怒つておられるわい。ここは退散の一手じゃな」

「それでは流牙殿、失礼します」

「ああ。貞子さん、うささん、また後で」

「うむ。後で呼んでやるから来るのじゃぞい♪」

「……酒ぐらいは付き合いますからそれ以上はやめて下さい」

「それは楽しみじゃな。のう、貞子よ」

「はい!」

宇佐美と貞子と酒を飲み交わす約束をし、一息をつくが、隣にいる詩乃と雫にジト目

で睨みつけられて落ち着く暇がない流牙だった。

そして、ここに呼ばれた目的である客人が遂に現れた。

「越後国主・長尾美空景虎さま」養女、北条三郎名月景虎さま、ご入室う」

小姓の呼び声と共に一人の少女が入室してきた。

「……北条？」

北条の名字に疑問を抱きながら流牙は入室してきた金髪のドリルツインテールをし、美空の衣装に似た雪の結晶が描かれた衣服を着た可愛らしい少女を見つめる。

その少女の存在が越後に新たな争乱を起こすことになるのだった。

『継』
S u c c e s s o r

流牙たちは遂に美空たち越後と鬼を倒すための同盟を結んだ。

しかしそこに謎の客人……美空の養女である少女、北条三郎名月景虎がやってきた。

「まずはご無事の内乱鎮圧、誠に祝着至極にございます。美空お姉様。越後国主の世継ぎが一人、名月景虎、お祝いの言上を仕りますわ」

「ありがとう名月。あなたも無事で良かったわ」

（越後国主の世継ぎの一人だつて……？ どういうことだ？ 美空の後を継ぐのは空ちゃんじゃないのか？）

何やら国同士の政治に関わる内容らしく、美空から話を聞いてなかったので流牙は真剣に話の内容に耳を傾ける。

（そう言えば空ちゃんを奪還した時にもう一人女の子がいなかったかつて美空が言っていたな……それはあの子の事だったのか）

特殊な立場の人間……北条という苗字から名月は関東の巨大勢力である北条家の人間ではないかと推測する。

名月は美空が流牙たちに会うために越中に出かけている間、実家の人間が貢ぎ物を

持つて来ていたので空や愛菜のように囚われることなく中立の立場で入られたらしい。

北条の当主……『氏康』の名代として、名月の姉である『北条綱成』が来ており、一人の女性が入室して来た。

柘榴とはまた違った露出度の高い服に身を包んだ凛とした振る舞いの武人で鋭い眼差しで美空を見ていた。

「……本日は長尾の養子となった我が姪・名月景虎の実家として、国主殿に門責に参った次第」

「へえ？相模の片田舎の領主が問責なんて、大きく出たものねえ」

美空は真つ向から喧嘩するような発言をし、秋子たちを困らせた。

そして、綱成の口から衝撃的な内容が出された。

「此度の越後の内乱により、我らが領内である武蔵から上野にかけての治安が乱れに乱れ、北条としては甚だ迷惑至極。これは越後国内の政情が安定しないためであり、長尾家が人心収攬さえも出来てない証左ではなからうか？よって、名月景虎の実家である我が北条家は、長尾家に対し、早期の後継者指名と、当代の隠居を勧めるものである」

それは越後の後継者が決まってるから国が乱れているので早急の後継者と美空の隠居を進めるといふ無茶苦茶な内容だった。

「ええ!?いい、隠居とはどういうことですか？わたくし、そんな話は……」

「名月は少し黙っていなさい。良いわね？」

「は、はい……」

名月は話を聞いておらず、綱成に黙ってと言われてしまい、言葉が出なくなる。

「もしこの勧めを無視するのであれば、北条としては致し方なし。養子に出したとは言え、名月は我が愛すべき姪である。北条家はその実力の全てを持って、名月の身の安全を確保する。……以上。全て氏康の事であると思し召せ」

綱成の言葉に長尾家臣たちの間にどよめきが走る。

「そんな無法な……」

「へえ……面白いこと言ってくれるじゃない」

ふらりと倒れかけた秋子をよそに美空は笑顔で相槌を打っていた。

美空は笑っているがその身からは冷たい殺気が沸々と溢れていた。

流牙は無言で詩乃と雫を下がらせ、魔法衣の内側に手を伸ばす。

「ちよつと確認なんだけどさ。たつた今、私は喧嘩を売られたつて認識で良いのよね？
ねっ？ねっ？そういうことよね？うふふっ……良かったあ。最近、腹が立つことが多くて、むしゃくしゃしてたのよねえ。事態が事態だから前に出る事も出来ないし。丁度良いわあ……その喧嘩、買ってあげる!!」

今までの鬱憤がついに爆発し、美空は冷静さを完全に失って刀を手取る。

「ちよっ!」

「不味い……………」

「ああつ、またややこしいことに…………つ!」

柘榴たちの慌てふためく様も視界に入っていないのか、美空は抜いた刀を構えて下半身にバネを溜める。

「返事はあんたの頸つてことにしてあげるわ!」

怒気と共に啖呵を切った美空が溜めたバネを解き放ち、刀を振り上げたその時だった。

キーン!!

「くっ!?!」

「なっ!?!」

美空と綱成の間に一つの影が立ちはだかった。

「何をするのよ…………流牙」

「刀を納めろ、美空」

流牙が美空の前に立ちはだかり、右手で持つ鞘に納めたままの牙狼剣で刀を受け止めた。もう一方の左手では後ろにいる綱成がすぐにも抜こうとした刀の柄を抑えていた。

美空はギロリと殺気の込めた瞳で流牙を睨みつけた。

「これは私が売られた喧嘩よ？ 邪魔しないでよ」

「……子供に血を見させるな」

流牙は静かな怒りを漂わせながら美空を睨みつける。

「つ……」

今まで感じたことのないその怒りに美空は思わずたじろいでしまう。

「何が起きているのか、どういう関係か知らないけど、その子の姉を斬ろうとしたな？
せつかく城を取り戻し、平和になった越後でこれ以上悲しみを作るな!!」

流牙はこれ以上越後に悲しみを作らないために、そして……名月を悲しませないために美空を止めに入った。

暴走する美空をたとえ気絶させても止める……流牙はその覚悟で美空の瞳を見つめる。

「……ちっ。今回はあんたに免じて引いてやるわ」

美空は流牙の言葉で頭が冷え、刀を下げて鞘に納める。

流牙も牙狼剣を下ろし、綱成の柄から手を離れた。

綱成は流牙の牙狼剣とその風貌に目を見開いて驚く。

「赤い鞘の剣……黒衣に銀の指輪……まさか、金色の天狼、道外流牙!?」

「え？うん、そうだけど？」

綱成が流牙がここにいることに驚き、流牙は振り向いて肯定する。

「……美空殿、どうしてこの方がここに？」

「尾張の織田信長と離れ離れになったところを私が保護したのよ。そして、馬鹿姉たちに囚われていた空と愛菜を春日山城から救い出したのよ」

「春日山城から……お二人を？」

「ええ。だから、春日山城奪還の一番の功労者と言える男よ」

「そうでしたか……」

只者ではないとすぐに分かったが、まさかこの戦国の世で今一番の話題の人物と言える流牙が越後にいるとは綱成にとっては予想外だった。

すると、綱成の隣にいる名月は胸元を強く握りしめながら流牙に近づいて勇気を出して話しかけた。

「あ、あの！」

「ん？」

「わ、私！北条三郎名月景虎と申します！初めまして！」

目を輝かせ、頬を少し赤く染めながら自己紹介をする名月に流牙は腰を下ろし、膝をついて名月と視線を合わせた。

「初めまして、俺は道外流牙だ。えっと……名月ちゃんでもいいかな？」

「は、はい！あの……流牙様と呼んでもよろしいでしょうか？」

「様はつけなくてもいいけど、名月ちゃんの好きに呼んでいいよ」

「ありがとうございます！ああつ……まさかここで金色の天狼様にお会いになれるなんて……」

その嬉しそうな反応は空と愛菜に初めて会った時と同じで流牙は笑みを浮かべた。

すると、流牙を気に入らないのか綱成は少し苛立った態度で話しかける。

「……美空殿を止めたことには礼を言いますが、下がっていただけですか？今は越後と北条の重要な話をしているので」

「そうだね。じゃあ名月ちゃん、またね」

「は、はい！あの……もしお時間があれば後でお茶でも……」

「いいよ。しばらくはこの国に留まることになるからいつでも呼んでくれ」

「わかりました！楽しみにしています！」

本当に嬉しそうな表情をする名月に流牙はニッコリと笑みを浮かべて軽く手を振りながら元いた場所に座ると詩乃は呆れ顔でため息をつき、雫は苦笑いを浮かべていた。

そして……綱成は先程よりもさらに鋭い眼差しで流牙を横目で睨み付け、美空は大きなため息をついて呆れ顔で流牙を見る。

「流牙……」

「何？」

「後で一発ぶん殴らせなさい」

「はっ!? な、何で!!？」

「うるさい! この天下御免の女たらしが!!」

「ええっ!? 何のこと!!？」

本当に鈍感すぎる流牙に詩乃たちがやれやれといった様子の中、宇佐美は笑いを堪えてますます流牙を氣にいたのでした。

それから改めて話の続きをし、美空は今の自分の考えを伝える。

「私はまだ壮健であり、後継者を決める必要性を認めないわ

「では我らは名月の身の安全を守るために、護衛の者を越後に派遣させてもらう」

「そんなこと許すと思っているのかしら？」

「身内を守るための手立てに許可など必要無し」

「その物言いが喧嘩を売ってるって言うてるんだけど、やっぱり買って……無理ね、流牙がまた止めるか」

喧嘩を買おうとしたが、流牙がまた止めると分かっているので大人しく刀から手を離す。

しかし、互いの主張を譲らないのでいつまで経っても打開策が見つからなかった。その時、小さな影が立ち上がった。

「あ、あの……後継者を決めると言っても、一体、どうやって決めるといいますか？」
それは弱々しいわけでない、強い意志を秘めた声を発したのは空だった。

「……というと？」

「美空お姉様が決めれば、北条の皆様はご納得されるのでしうか？　そういうことをお求めになっている訳ではない……そう感じるのですが、如何でしうか？」

「……我が北条が越後に求めるのはただ一つ」

「一つ、ですか？　それは？」

「西と東に難儀を抱える北条としては、北で面倒事が起きれば、この上もなく面倒な仕儀となる。それだけは避けたい。だからこそ、今回のような事が無いよう、越後は後継者を決め、領内の安定を図って欲しいのだ」

「なるほど。越後が後継者を決めていれば、今回のような内乱は無かった、と。そう言いたいのですね」

「……その通りだ」

空の言葉に頷いた綱成だったが、その表情には僅かな乱れが見て取れた。

「分かりました。ならば長尾としての答えは一つ。私と名月ちゃんの二人、どちらがお

姉様の後継者に相応しいか、決めましょう！」

「ちよつ……空っ!?何を……!?」

空の瞳には覚悟が宿っており、美空は越後の当主として、空の母として口出しする事ができなかつた。

「……分かつた。あんたに任せる」

「はいっ……!」

「あなたは美空様の養子の一人、確か空様……と仰いましたね」

「いかにも」

「決めると仰つたが、一体どのようなにして、越後国主の跡継ぎに相応しいと決めるのです？」

「私も名月ちゃんも、後継者と言う前に一人の武士。一人のものふなのです。当然——」

「戦で事を決する、か」

空は頷き、普段の弱々しさを全く見せない威風堂々とした態度を見せた。

「……その意気やよし!しかし空様。名月には我ら北条がついている……果たして勝てますかな?」

「もとより」

「相分かった。ならば……戦場で会いましょうぞ。事、ここに決したり、一のご養子、空様が後継者となるか。氏康が末娘、名月景虎が後継者となるか……篤と拝見させて頂こう」

「あ、ちよつ……お姉さま、お待ちくださいまし！」

振り向きもせず退出した綱成達の背を黙って見送っていると、

「……へ、へううう……」

「危ないっ！」

へ口へ口な声を出しながら頭から湯気が出そうなほど顔を真っ赤にして倒れそうになる空を流牙は駆け寄って抱きとめた。

「う、うう、が、頑張りました……私、がんばりましたよ……」

「ああ。しっかり見ていたよ、頑張ったね、空ちゃん」

「はい、頑張りました……っ！一生懸命に頑張りましたよ……」

「空様あー！空様あー！これぞとやっでございます！どやーっでございますぞ空様ー、どやー！」

「うん、頑張ったよ私。愛菜、見てくれていた？」

「越後きつての義侠人、樋口愛菜兼続、この可愛いおめで確かに見ておりましたぞー！どーんっ！」

「あはは、ありがとう、愛菜」

「……全く。よくも大見得を切ったものね、空」

「あ……か、勝手をしてしまい、誠に申し訳なく……ごめんなさいです……」

「……うん。とにかく今は愛菜と共に部屋に下がっていなさい。他の者も下がれ！」
強い口調の美空の下知を受け、過労級の者たちも上段の間から立ち去っていく。

だが、その殆どの者たちの表情には一様の表情……不安が浮かんでいた。

「……美空」

「なによ？あんたもさっさと出て行きなさい」

「あまり多くは言わないけど、休める時には休んでくれよ」

「あんたもね」

「ああ」

互いに頷きあい、部屋を出た。

新たな争乱、次の戦に備えるために……。

☆

美空が春日山城を取り戻してから早数日……流牙は詩乃たちにもしもの時に備えて戦の準備を頼んでいた。

流牙は越後に鬼がいないか見回りをしながら情報収集をしていた。

鬼が出現しているか、現段階で行わなければならない事、そして……空と名月の後継者の事。

幸い鬼は越後には現れてはおらず、内乱が終わった後で武士たちは忙しそうに働く。しかし、誰もが後継者の事を話そうとしなかった。

流牙は越後の恩人であり、同盟の重臣とはいえ、当然といえど当然の話である。

不安の未来が続く中、これからどうなるんだろうと思っていると……。

コロソ。

「ん……？小石？」

どこからか小石が投げられ、流牙は周りを見渡すと鈍い風切り音が飛び込んできた。

「はっ!?上か!？」

音からすぐに察して上を見上げると大きな岩が落ちてきた。

流牙は魔法衣から牙狼剣を取り出し、膝を曲げてから高く飛び上がり、鞘から刃を解き放つ。

「はあっ!!!」

牙狼剣の刃が岩を真っ二つに切り裂き、二つの岩の塊が地面に墜落する。

「敵襲か!!」

流牙は自分を狙う暗殺者だと思い、牙狼剣を構えるが……。

(流牙!こら、流牙!いい加減気付け!)

「……美空?」

(わっ!バカツ!シート!)

(何やっっているんだこの娘は……)

建物の影に隠れて身振り手振りで流牙に黙れと文句を言った後、美空は付いて来いというように背を向けた。

ひとまず流牙は牙狼剣を鞘に納めてそのまま美空の後をついていった。

そして、到着した場所は小さなお堂でその中に美空に続いて流牙も入った。

こぢんまりとしたお堂の内部は思っていた以上に狭く、流牙と美空の二人が入った事で必然的にお互いの体温が空気を伝って感じられるほどの距離になっていた。

「全く……呼んでるんだからさっさと気付きなさいよ」

「あんな岩を落としてそれはないよ……俺を狙う暗殺者だと思つたよ」

「ははっ、女誑しのあんたならいつか本当に暗殺されちゃうかもね」

「……今ほど自分のこんな運命を呪いたいと思つたことはない」

「あんた……色んな意味で難儀な性格よね。早くなんとかしないとますます苦勞するじゃない」

「……出来ると思う?」

「ごめん……言ってみたものの、あなたには無理だと思っわ」

「はあ……それで、こんなところに呼び出して何の用だ？」

用件はなんとなく察しているが、流牙はあえて美空の口から聞きたかった。

「そうね……でもどこから話せば良いのかしらね……」

美空にしては珍しく、躊躇うような吐息が美空の今の想いを伝えていた。

「空ちゃんのことだね？」

「……どうしてそう思うの？」

「それぐらいわかるよ。それで、美空を悩ましていることはなんだ？」

「そう……ね。長尾空景勝と北条名月景虎。二人の差に、私は納得がいていないのよ」

「二人の差？能力の差ってことか？」

「いいえ。能力の差じゃない。……景虎には実家の力があるけど、空には……」

「無いのか？」

「……ある、とは言えないわね。空の実家は、前の春日山城の戦で城方についた長尾政景なの。そして政景は今、罰を受けて謹慎中よ」

「なるほど……今の空ちゃんには味方はいない。仮に美空が許して謹慎中の政景が空についたとしても周囲が認めないし、謀反を起こした奴と同じ陣営にはいたくないと思うだろうな……」

「そういうこと。だから今、空に後ろ盾は無いの。でも……名月には大きな後ろ盾がある。あの子自身がどこまで理解しているかわからないけど。名月の後ろ盾があそこまで口を出している、それは越後の脅威でしかないわ」

「……俺はこの世界の人間じゃないからまだそこまで知識は無いけど、子供を政治の道具にするなよ。つたく……氏康って人は相当な切れ者だな」

「それが関東の盟主、北条の当主なのよ……」

「それで、美空が納得してないことって何？」

「この勝負、五分じゃない。名月の方が圧倒的に有利な状況になっている。そこが不満なの。もちろん五分の状況を作り上げるのも、人の上に立つ者の資質よ。でも今回は——」

「裏で手を引いている人間の影響力が大きすぎる……ってことか？」

「そう……五分で勝負するならば、私は越後のために、その勝利者を後継者に指名するわ。でも——」

「分かった、それ以上はいい。だけど……条件がある」

「……何なの？」

「気づいていると思うけど、『俺自身』は力を貸すことはできない。美空に力を貸したのはあくまで同盟のためだ。魔戒騎士である俺が人同士の争いに加勢することは許され

ない」

流牙は魔戒騎士最強の黄金騎士の称号を継ぐ者。

鎧を使わなくとも魔獣と渡り合える身体能力、剣術と体術はこの戦国の世でも最強とも言われている。

仮に流牙が戦場に出れば一騎当千の力を発揮し、戦局をあつという間に変えてしまうだろう。

「……やっぱりね。分かっていたわ、あなたが力を貸せないことは」

「だけど、流牙隊なら力を貸せる。流牙隊は元々尾張の織田信長の部隊だ。俺が許可を出せばすぐに動いてくれる。長尾の人間じゃない。だから、口出しされても無視はできる」

流牙隊には流牙を抜きにしても武将や軍師、更には忍者など様々な分野に優れた人材が多くいる。

これは力無き空の大きな支えになることは間違いがなかった。

それを聞いて美空は少し安心したように小さく笑みを浮かべた。

「そう言ってくれると思っていたわ……あなた達は他国の者だから越後の縛りはない……空のこと……頼んだわよ」

「みんなにそう伝えるよ。それじゃ俺はみんなにこのことを伝えるから部屋に戻るよ」

「あー……」

「ん？まだ何かある？」

美空は無意識のうちに流牙を呼び止め、その無邪気な瞳が美空を見つめる。

「……無いわよ」

「そう？」

「良いから、あんたはさつさと行っちゃいなさいよ。ほらしっし」

「はいはい、わかったよ。じゃあね」

流牙は美空に手を振りながら挨拶をし、お堂を後にした。

お堂に一人だけとなった美空は大きく息を吸い込んでからため息と一緒に色々な気持ちを抱き出した。

「はあく……参ったわね。私、また……いつのまにか、あいつに頼っちゃってる……」

最初は鎧などに興味を持つただけで何かの利用価値のある男だと思っていた。

しかし、流牙の覚悟や想い、そして過去を知り、彼への思いや気持ちが少しずつ変わっていった。

「まさか私……ううん、やっぱり私……」

美空は胸をぎゅつと強く抑えた。

初めて感じるその痛いけど心地よい気持ち……それが確信に変わるのはいま少し先

となる。

・

『憧
～Yearning～』

美空の極秘の依頼で流牙隊は空に力を貸すことになった。

もつとも、流牙は力を貸せないので頭抜きの隊となるが、それでも詩乃や雫、一葉たちがいるのでそこは問題ない。

流牙は魔戒騎士の掟があるので今回の空と名月の戦には中立の立場でいることになった。

しかし、中立の立場と言っても流牙は流牙隊の頭であるので周囲の人間がこっさり空に味方するのでは？と疑惑を持つのも当然なので、流牙は美空と宇佐美の立会いのもと一つの契約書を一緒に書いてもらった。

それは流牙が完全なる中立の立場であり、双方の勢力の情報を漏らさない、一切の手助けをしないという内容のものだった。

この書状を写し、美空は空と名月、越後の家臣たちにも配布し、その事を周知させた。

これにより流牙は比較的自由に動くことができ、空と愛菜の動きを客観的視点から見守る事が出来るのだが……。

「さあ、流牙様！お茶ですわー！」

「ありがとう、名月ちゃん」

中立の立場という事を伝えるや否や、すぐに名月からお茶会の招待状が送られてきた。

しかも流牙だけで。

北条側の何かの罠だと推測したが、中立の立場である流牙を罠にかける理由もないし、同盟の重鎮である流牙を傷つければ美空が許さない。

下手をすれば一葉たち流牙隊のメンバーがブチ切れて殲滅する勢いの襲撃になったり、仮に久遠たちがその事を知れば全面戦争になりかねない。

特に危険がないだろうと判断してひとまず流牙は名月が滞在している屋敷へ赴いた。

到着するなり名月が出迎えて流牙を茶室に案内し、見事で雅のある手際で茶を入れて流牙に出して今に至る。

「俺、茶の席の作法とか分からないからごめんね」

「まあ、そうでしたの。流牙様は天の国から来たと聞きましたが、天の国ではこのような茶の席はありませんの？」

「そうだな。俺たちの世界ではこういう茶の席はほとんど無いな。やっていたとしても極一部の人たちしかやらないな」

「それは驚きです。流牙様、天の国について教えていただけませんか？」

「俺が答えられることならいくらでも」

それから流牙と名月は茶の席で話をしながら楽しい時間を過ごした。

ちなみに……名月は気付いてないが、隣の部屋の襖の奥から流牙に向け、名月の姉……正確には叔母だが、綱成が鬼のような殺気を放っていた。

『名月に手を出したらその頸を切り落とす……』

と言わんばかりの殺気に流牙は苦笑を浮かべながら茶を飲む。

しかしその殺気はそれほど名月を大切に思っていることの表れなので悪い気はしなかった。

ある程度天の国についての話が終わると今度は流牙が名月に質問をする。

「名月ちゃん、今度は俺から質問いいかな？」

「はい、何でしよう？」

「美空の後継者として空ちゃんと争うことになって、君はどう思ってる？」

「そ、それは……」

「もちろんその事を空ちゃんはもちろん誰にも話したりはしない。俺は中立の立場だからね。俺はただ、越後の後継者である名月ちゃんの素直な気持ちを知りたいだけなんだ」

「わ、私は……私、空様をお慕いしておりますの」

「慕ってる？嫌いじゃないんだ。こういう後継者争いを行う人達って違いを嫌うって印象は強いけど。まあ、空ちゃんはありませんか？」

「嫌うわけがございませぬ。空様は物静かであらせられますが、事に及んでは決断早く、また果敢な決定をされる事も有り、将としてはとても素晴らしき方です。少し人見知りな激しいところもありますが、それも空様の魅力の一つだと思っておりますわ」

「ほう……それで？」

「乱世渦巻くこの時代、国を守り、民を守るのは、果敢であるだけの主では不可能です。国内にしろ、国外にしろ、一朝事あるとき、多くの繋がりを用いて事を鎮め、国と民を守る。それこそが乱世の主が持つべき本当の力かと考えておりますわ。この戦に勝利した暁には空様を友として迎え入れ、共に越後の繁栄を築いていきたいと考えていますのー！」

「そうか……まだ幼いのにしっかりしているね。俺なんかと比べ物にならないよ」

「流牙様は幼い頃はどうぞお過ごししていたのですか？」

「俺？俺は七歳の頃から無人島で十年間も修行をしていたよ」

「まあ！無人島で十年も!？」

「ああ……辛かったけど、俺にとっては大切な日々だったよ」

流牙は名月の後継者候補としての強い自覚と空への思い、そして越後を思う心を聞

き、名月もまた美空の思いを受け継いでくれると確信した。

少しすると綱成が茶菓子を持って部屋に入ってきた。

そして、鋭い眼差しで流牙を睨みつけながら質問をしてきた。

「ところで、道外殿。一つお尋ねしたいことがあります」

「何かな？」

「あなたは金色の天狼という名をお持ちですが……本当に黄金の鎧を呼び出せるのですか？」

「え？」

「お、お姉様！流牙様に無礼ですよ！」

「いいえ、名月。噂というものは遠ければ遠いほどその事実が書き換えられていることはよくあります。武人としての活躍ならともかく、訳わからずの存在の噂なら疑うべきです」

「……確かにそうかもしれないね」

流牙は茶器を置くと畳んでおいた魔法衣を纏う。

「ねえ、綱成さん」

「……何でしょう？」

「もし俺が黄金の鎧を呼び出したら少し話を聞いてもらおうよ」

「話？」

流牙は茶室を出て玄関でブーツを履くと庭に出て、名月と綱成の前に現れる。

魔法衣を翻して内側から牙狼剣を取り出して左手で持つ。

そして、柄を握り、鞘から刃を抜いて切っ先を上に掲げ、円を描く。

牙狼剣の切っ先は満月のような綺麗な光の円を描き、ひび割れた円からガクの鎧を召喚し、装着する。

金色の天狼……その名に相応しき黄金の鎧を装着した流牙を見て名月は目を輝かせ、綱成は困惑した表情を浮かべる。

「まあ……!!」

「まさか本当に……!?!」

「これで信じてもらえたよね？」

「はい！もちろんです！ね？ 朧お姉様！」

「え、ええ……そうですね……」

綱成はまさかは本当に流牙が黄金の鎧を召喚出来るとは思ってもみなかったので予想外の展開に内心焦り始める。

流牙は鎧を解除して魔界に送還しながら綱成に話しかける。

「さて……それじゃあ話を聞いてもらおうよ」

「何を、でしようか？」

「今……この日の本に巢食う邪悪なる存在、鬼についてだ」

流牙は綱成―臙と名月の二人に日の本に巢食う鬼について話した。

越後ではまだ現れてないが、臙の話では関東近辺で少しだが現れているとの情報がある。

流牙はこの世界から鬼を全て討滅するために仲間たちと戦っている事を説明し、臙にある事をお願いする。

「綱成さん、一つお願いがある」

「臙で結構です。それから、御本城様が以前仰ってましたが、北条は同盟には加わりません」

「それは構わない。ただ、あなたが関東に帰ったら鬼に対する警戒を強くしてくれ」

「お願いとはその事ですか？」

「ああ。鬼の脅威がいつ広がってもおかしくはない。だから警戒を強くして、いつでも対処できるようにしてくれ」

「……分かりました。相模に帰ったら御本城様にお伝えしておきます」

「ありがとう。さて……それじゃあそろそろ失礼するよ」

流牙は名月と臙の二人と話ができてひとまず満足し、春日山城へ戻る準備をする。

「名月ちゃん、立场上あまりこう言ったことを言えないんだけど、頑張ってるね」

「はい！頑張ります！」

「あ……そうだ、最後に一つ。どうして名月ちゃんはそこまで俺を……金色の天狼を慕っているんだ？」

「決まっております！金色の天狼はこの日の本の幼子たちの憧れですよ！」

「憧れ？」

「はい！調べてもらったところ、日の本各地で金色の天狼の数々の偉業は伝わっておりまして、特に幼子たちの憧れであり、希望の象徴にもなっておりますの！」

これは流牙にとっては驚きの事実だった。

戦乱渦巻く戦国の世では戦が続き、更には鬼という魔獣が現れ、不安な未来が人々に負の心を与える。

しかし、そんな中に現れた一筋の希望の光……金色の天狼、またの名を黄金騎士ガロが日の本を平和にすべく鬼を討滅するために戦い続けている。

その噂が日の本を駆け巡り、特に英雄などの大きな存在に憧れを持つ幼子たちの間では黄金騎士ガロは希望の象徴なのだ。

知らず知らずのうちに自分の存在が日の本に生きる者たちの希望の光になっていることに流牙は思わず笑みがこぼれるほど嬉しかった。

「そうか……じゃあ俺は君たちの希望の光になれるようもつと頑張らなくちゃな」

「はい！応援しています！」

「ありがとう、名月ちゃん」

流牙は名月の頭を撫で、名月は嬉しそうな笑みを浮かべて流牙を見送った。

ちなみに……隣にいる朧は北条の妹たちを溺愛しているため、名月をたぶらかす存在として流牙が気に入らず、殺気を込めた瞳で睨み続けていた。

屋敷を出た流牙はのんびりしながら春日山城に戻ろうと足を運ぼうとすると、流牙の耳に不穏な音が届く。

「金属音……？こんな街中で？」

流牙は気になってその音の方へ赴くとそこには目を疑う光景があった。

「小波!？」

それは小波がくノ一と思われるギャルみたいな風貌の女にボコボコにされて踏みつけられている光景だった。

「じゃあね、伊賀の服部さん」

くノ一が苦無を振りかざし、小波を殺そうとしたその時、流牙は魔法衣から鉄の矢を取り出した。

「やめろおっ!!!」

「なっ!?!」

鉄の矢を投げ飛ばし、二人の近くに刺さるとくノ一は小波から下がった。

流牙は小波の前に降り立ち、倒れている小波を抱き上げた。

「小波、大丈夫か!?!」

「ご、ご主人様……!?!」

小波は体中傷だらけで傷つけたのは間違いないくノ一だった。

「どうして小波がここに?」

「そ、その……ご主人様が心配で勝手に後をついていたのです。遠くから見守っていたら風魔忍者のあの女が襲いかかってきて……申し訳ありません、頭に血が上ってしまいこの様です」

「あなた、確か道外流牙だっけ?」

「誰だお前は……?」

「風魔忍軍棟梁、風魔姫野小太郎よ」

「風魔……? 詩乃たちが言っていた北条の忍者か……」

「はっ、弱い草を配下に置くんなんて可哀想な男ね。そいつ、あなたのことであつと挑発したら簡単に頭に血がのぼったのよ?」

「俺を……? そうか、小波。一緒に帰るぞ」

「は、はい……」

「傷は酷いがほとんどが打ち身だな。早く傷薬を塗れば大丈夫だろ。よし、すぐにでも行くか」

流牙は小波を連れて帰ろうとするが、小波との戦いに水を差された姫野はそれを許すはずがなかった。

「そんなことさせると思ってるのっ!?!力尽くでもあんたなんかに渡さないんだから!」
「勝手に言ってる。俺は小波を早く治療したいんだ」

「ふざけんじやないわよ!伊賀の服部い!あんた勝手に逃げるんじやないわよおーっ!」

「ご主人様!危ないっ!!」

姫野は大量の苦無を投げ飛ばし、流牙は目を細めて魔法衣から再び牙狼剣を取り出し、柄を握る。

「いい加減にしろ……」

キーンキーンギイーン!!!

高速の抜刀で苦無を全て弾き返し、そのまま姫野の周りに弾き飛ばした。

「ひっ……!」

姫野は苦無を弾き返され、更には流牙から放たれた気……姫野には一瞬だけ獲物を狙

う牙を向けた狼のような気が見え、恐ろしくなつて体が震えてしまった。

この世界に来てから流牙は様々な戦国武将……一葉をはじめとする多くの戦国武将と共に行動してきた。

武術の達人である彼女たちは自分の気を発し、自分よりも格下の相手の心を呑み込む術を持っている。

魔戒騎士として幼い頃から修行し、日頃から魔獣ホラーと戦い続けている流牙も既に武術の達人であり、気を放つことをすぐに習得した。

「今から小波を連れて行くんだ、邪魔するな。もうこれ以上大切な仲間を失いたくないんだ……失せろ」

「……………っ!!」

仲間を失いたくない故の怒気は充分な脅しとなり、心を吞まれてしまった姫野はガクと震えて動けなくなっていた。

気は下手に人間を傷つけずに済む方法として重宝している。

「……………これで追つてこないだろう。小波、大丈夫か?」

「はい、これぐらい……………っ!」

「無理をするな。忍者でも小波は女の子なんだから……………よいしょっと」

「え?」主人様、何を……………きやあつ!」

流牙は小波をお姫様抱つこで軽々と抱き上げてそのまま歩き始める。

「(ぎゅ)ぎゅ、(ぎゅ)主人様!?!何をなさるのでですか!?!」

まさか流牙にお姫様抱つこをされるとは思わなかったので小波は今までで一番顔を真つ赤にしてオロオロとしていた。

「何つて、このまま春日山城まで運ぶんだけど?」

「(ぎゅ)、このままですか!?!」

「嫌だった?」

「い、いえ、その……お、重く、ないですか……?」

「全然、とつても軽いよ。一気に春日山城まで走るから首に手を回して」

「は、はい……では、失礼します……」

小波は恐る恐る流牙の首に手を回して更に体を密着させる。

密着させて初めて感じる魔法衣と防護服の上からでも分かる流牙の鍛え抜かれた筋肉に温かい体温、そして……流牙から漂う良い匂い。

結菜や一葉たちと同じく流牙に惹かれている小波はこれほどの幸せはないと思うほどに顔がにやけてしまいそうになってしまいが、何とかそれを抑えて流牙の顔を見る。

凜々しくも優しいその横顔……惚れた弱みと言うか、小波は更に顔を真つ赤に染めてしまう。

「行くよ、小波」

「はいっ！」

流牙は小波を連れて春日山城まで走っていった。

ちなみに、その後ろ姿を見た姫野は小波に更なる対抗意識を燃やし、流牙に対しては絶対に勝つと意気込むようになったのだった。

そして……春日山城近くで流牙隊が滞在している宿に戻るなり、小波をお姫様抱っこをしている流牙を見て一葉を筆頭に自分たちにもと一悶着があったのは言うまでもなかった。

『勇
～Brave～』

空と名月の越後の後継者を決める戦の準備が着々と進んでいく中、流牙は越後の街で買い物をしていた。

「やっぱり土地柄によって食材は違うな」

流牙は珍しく食材の買い物をしていった。

美空から生活のためにお金を少し貰っており、それで米や野菜などの食材を買っていた。

「こんなもんかな？流石にこの世界にはない食材もあるから……」

野菜は時代と共に作られて普及してきたものや観賞用だったものが食べられるようになったりする。

流牙が今から作るものはこの国にはないものがほとんどなので代用品を使うことにする。

「結菜も暇みただし、一緒に作ってみるか」

食材が入った籠を手に流牙は宿に向かった。

その食材で試行錯誤を繰り返しながら結菜と一緒に流牙の大好物を作るのだった。

その夜……流牙は小さな包みを持って春日山城へ向かった。人に会わないようにしながら隠れるようにして向かった先は……。

「こんばんわ」

「流牙様!」

「おおっ! 流牙殿!」

戦のための夜遅くまで事務作業をしている空と愛菜だった。

「はい、陣中見舞いの差し入れ。遅くまで作業をしていたからお腹すいたでしょ?」

「これは……何ですか?」

「どや……? 見たことない食べ物ものですか」

それは薄く焼かれた白い生地に細く刻んだ野菜が包まれた食べ物だった。

「これはケバブで俺の好物なんだ。まあD・リングのに比べたらそんなに美味しくないけどね」

ケバブとは、ピタパンを半分に分けた袋状の中に牛肉と玉ねぎとトマトなどの野菜は入れ、様々なソースをトッピングしたものである。

本来ならピタパンという中が空洞の小麦のパンで作られるが、流牙はピタパンの作り方がわからないので代用として米粉を使ったクレープ生地を作った。

そして、具材の野菜は猪肉を炙ったものと越後の地元の野菜、ソースの代わりには味

贈、更に卵と油と酢を混ぜて作った特製マヨネーズでD・リングのケバブとは程遠いがこの時代の食材で出来た『戦国ケバブ』を完成させた。

「確か先日の宴の時に話してくれた流牙様の仲間のおじいさんが作っているものでしたよね？」

「妙な形をしておりますが、香ばしい香りが……じゅるり」

「ははは、よほどお腹空いているみたいだね。ケバブはそのままかぶりついて食べる物なんだ。ここには俺たちしかないから遠慮なく食べて」

「は、はい。それじゃあ……いただきます」

「いただきますー！」

空と愛菜は小さな口をできるだけ大きく開けてケバブにかぶりつく。

地元の野菜や味噌を使っているので食べなれた味が口の中に広がるが、クレープ生地やマヨネーズなど初めて食べる食感や味に二人の舌が踊り、驚きと同時に美味しさが緩んだ。

「美味しい……！」

「これは味わったことのないものですぞ！」

「良かった、気に入ってもらえて」

そうしてケバブは二人のお腹の中に納まり、夜食が終わると愛菜が淹れたお茶を片手

に一息をつく。

「けばぶ……これはかなりの美味でござったぞ。是非とも母上に食べて頂きたいですぞ！」

「私も美空お姉様に食べさせてあげたいな」

「そうだな。明日にでもまた作って美空たちに食べさせてやるか」

美空たちも精神的にかなり疲れているだろうからと流牙は明日も結菜と共にケバブ作りをしようと思っていると、空は湯呑みを置いて立ち上がる。

「……よしつ、休憩お終いです」

「仕事の続き？」

「はい。もう少して一区切りですから、そこまでやってしまおうかと」

「頑張ってるんだな……」

「いえ、私なんてまだまだで……ですが、負けていられませんから。きつと、今大変な思いをしているのは私だけじゃなくて……名月ちゃんも頑張ってるはずですから」

そう言い切った空の言葉には、普段の優しげな彼女からは考えられない力強さが籠っていた。

「流牙様……私、名月ちゃんのこと、好きなんです」

「へえ……」

「生まれ故郷を……関東を離れて大変じゃないはずがないのに、いつも笑顔で自信満々で……そんな明るい性格が少し憧れで……越後のこともきつとすぐく真剣に考えてくれています。今はこうして戦うことになってしまっていますけど、そんな名月ちゃんのこととが、私、大好きなんです」

流牙は空も名月の事を思っていると知り、心の中で安心した。

そして、空は一度目を瞑り、何かを決意するように一呼吸。

「けど……だけど、この戦いは私が勝ちます。大好きだから、大好きだけど……私のことを応援して、支えてくれるみんなの為に、私が勝ちます。それがきつと、まっすぐにぶつかることになる名月ちゃんに、私が出ることだと思えますから」

「……そうか」

空が心に決めた大将としての覚悟。

空が勝った時、先日聞いた名月の答えと同じように将として迎え、共に越後の未来を作っていくだろう。

流牙は空の覚悟と想いを聞き、名月の時とはまた違ったエールを送る。

「空ちゃん、君は自分が傷つくより他人が傷つく事を恐れるほどとても優しい。その優しさは戦いには向かないが、それが君の大きな力になる。そして……」

流牙は空の頭をしっかりと撫で、互いの額が合わさりそうなほどまで顔を近づけた。

「強くなれ」

「強、く……?」

「美空を越える……誰よりも優しく強いて、越後を導く最高の当主になるんだ」

それは師であり、父のような存在だった符礼法師から何度も伝えられた『強くなれ』の言葉。

憎しみながらもその言葉を受け止め、誰にも負けない強い黄金騎士へと成長することが出来た。

流牙は越後の未来を背負う空に強くなって欲しいと願ってこの言葉を送った。

「流牙様……はいっ!」

空は強く頷き、流牙……黄金騎士ガ口のように越後の希望になれるよう、強くなろうと心に強く誓った。

「どやっ!空様にはこの愛菜がおります!名月殿にも負けませぬぞ、どーん!!」

「ありがとう、愛菜」

「そうだな。愛菜も……強くなれ。お母さんの秋子さん以上に素晴らしく、空を支える守護者にな」

「どやっ!必ず、強くなって空様をお守りし、黄金騎士のように光り輝く立派な守護者となりますぞ!」

愛菜の頭も撫で、空と同じようにその言葉を送り、愛菜も元気よくそれに応えた。

越後を愛する小さな星々たちの思いを聞いた流牙はそれが未来に続く希望の光になると信じて城を後にした。

☆

ある日、流牙は外を歩いていると籠を担いだ行商人とぶつかった。

流牙は慌ててばら撒いてしまった野菜を籠に移すと、行商人が流牙に書状を渡した。

その行商人は美空からの使いの軒猿で書状には今夜毘沙門堂で二人だけで会いたいと言う内容が書かれていた。

流牙は日が沈む時間になると暗闇に紛れて春日山城の奥にある毘沙門堂へ向かった。

「失礼するよ」

「良かった……来てくれたのね、流牙」

中には美空が待つており、待ちくたびれたように立ち上がる。

「聞きたいことはわかっているよ。両陣営の様子だろ？」

「流石ね。書状に書いた私の思いを読み取ったのね？」

「まあね。とりあえず客観的に話すよ」

流牙は現時点での大まかな情勢を説明した。

両陣営とも将兵の切り崩しや、情報収集に力を注いでおり、今の所大きな衝突は起き

ていない。

しかし、名月の陣営には、明確に北条の力が働いている。

「ふん、そうでしょうね。越後に下心を抱く相模の連中にとつて、名月はまたとない神輿だもの」

「俺さ……魔戒騎士だから人間社会には干渉してはならないけど、今回のことで北条の当主に少しだけ苛立つてるんだ」

「氏康に……？」

「空ちゃんと言月ちゃん、二人の気持ちを聞いたんだ。二人共、互いの事を大好きだと思っている。だけど、こんな形で争うことになったからさ……」

「そう……でも、よくある戦の形だわ」

「それは分かってる。でも、二人の想いを聞いたから余計にさ……」

相変わらず優しい流牙の思いに美空は苦笑いを浮かべた。

「流牙……あなたの優しさは理解しているわ。でも、その優しさはいつかあなたの身が滅ぶ事になるかもしれないわ。覚えておきなさい」

「……分かった。でも、俺は一人じゃない。いつも一緒にいるザルバに頼れる大切な仲間たちがいる。俺を想ってくれる誰かがいる限り、俺は大丈夫だ」

「私はこういう立場だから、何も言えないけれど……もしもの時、あの娘たちのこと、よ

らしくね」

「ああ……」

空と名月、越後の後継者として争うことになってしまったが憎み合っておらず、殺そうなどとは微塵も思っていない。

しかし、名月の姉……臙率いる北条が何をするか分からない。

考えたくはないが戦に乗じて空を亡き者にする可能性がある。

流牙は戦には参加しないが、空に何かあつては今後の同盟に大きな影響を与えるかもしれない。

流牙はもしもの時には空と愛菜を救出するつもりだ。

あくまで同盟のためだと、自分に言い聞かせながら……。

「ね、ねえ、流牙……」

「ん？」

「実は最近噂になってるけど、空や名月と仲良さそうね……う？」

「そうだけど、それが？」

「あなた……空と名月に手を出してないでしょうね？」

美空は腕を組んで堂々としたように尋ねるが、顔は赤くなっており、流牙はその問いに思考が止まりかけた。

「……………はあ？何で俺が空ちゃんとか月ちゃんを??」

「ね、念の為に聞いているの。あの娘たちの親なんだから、若い男が側にいれば、気になるの当然でしょ?」

「そんなことするわけないって。もしそんな小さい子を虐めるような男だったら莉杏に銃を乱射された後に馬乗りになって拳でポコポコにされるよ……」

「り、莉杏って過激なのね……」

「うん……俺もたまに暴走するけど、莉杏もかなり暴走する……」

「ふーん、似た者同士ね。同じ一族だからかしら?」

「さあね……ただ、たまに来る過激な発言だけはやめて欲しいけど」

「過激な発言?」

「例えば……口づけをしたいだの、抱きしめて欲しいだの、子供を作りたいだの……」

とんでもない暴露に美空の顔は更に赤く染まった。

「ぶっ!!ちよっ、まっ!流牙!あなた!?!」

「あー、誤解するなよ。俺は莉杏にまだそういう事はしてないから」

「だだだだっ!莉杏はあなたの一番大切な人なんですよ!!」

「そうだけど、何ていうかな……莉杏は俺を支えてくれる大切な相棒で、家族みたいな存在だからそんな気持ちにはならなかったんだ」

無人島で十年間も修行していたためか、『そう言うこと』には無関心というか全くと言っていないほど関わらなかった。

そんな流牙に美空はズバツと鋭いツツコミを入れた。

「あんたらは熟年夫婦か」

「あはは、そうかもね。まあいずれは子供は欲しいけど……」

魔戒騎士の義務……特に黄金騎士の称号を継ぐ流牙は鎧の継承者として自身の血を継いだ男子を騎士として育てなければならぬ。

「流牙……その言葉を流牙隊のみんなの前で口を滑らせないほうが良いわよ……修羅場になるわ」

美空は想像する……流牙を巡って己の武や知、そしてお家流を駆使して争う女同士の激しい戦いを……。

「うん、とんでもなく恐ろしいほどの修羅場になるわね……」

「やばい……想像しただけでも恐ろしすぎるよ……」

思わず二人の背筋が凍るほどの想像をしてしまった。

「と、とにかく……色々両陣営の事を知れて良かったわ、ありがとう」

「どういたしまして。そう言えば、戦の時って美空たちは城の中で待機するんだよね？」
「そうよ。本音は近くで見守りたいけど、それが出来ないのよ。だから城で待っていて

随時兵が戦況を知らせてくるのよ」

「やっぱりか……ねえ、美空」

「……何？」

流牙は珍しく何かを企むような笑みを浮かべた。

「戦の日に俺とデート……俺と一緒に出掛けないか？」

「……へ？」

流牙の突然のデートの申し出に美空は頭の中が真っ白になった。

そしてこれが数日後の春日山城に大混乱を引き起こすこととなるのだった。

『星』
（Stars）『

空と名月……越後の後継者を決めるための戦が遂に始まろうとしていた。

空には金色の天狼の元に集った癖のある精鋭たちが集う流牙隊、名月には関東最大勢力の北条、それぞれがバックに付いている。

一見すると北条の名の下に集まった勢力の数で名月に分があるが、流牙隊には一騎当千の武将から戦局を見極めて操る名軍師など有能な粒揃いの少数精鋭が揃っている。

予想出来ない波乱な戦が幕を開けようとしている。

一方、戦が今か今かと始まろうとしている中、春日山城で柘榴と秋子と松葉の三人は美空の様子を見に行く。

「御大将、大人しくしてるっすかね〜」

「流石に御大将が言い出したんだから、大人しくしてなかつたら困るからね？」

「抜け出すかもしれない……」

破天荒などころがある美空が何かをするのではないかと心配しながら美空の部屋へ向かう。

その時だった。

「きゃー！何をするの!?! 離しなさい!!」

突然、美空の悲鳴が春日山城に響き渡った。

「「えっ!?!」」

柘榴たちは耳を疑いながら急いで美空の部屋へと向かうと、美空の部屋から勢いよく黒い影が飛び出して庭に降り立った。

「あれ? みんな早かったね」

その黒い影は春日山城奪還の功労者であり、同盟国の重鎮である道外流牙。
そして……。

「は、離しなさい、流牙!! 私をどうする気!?!」

その腕に抱き上げられて暴れていたのは越後の当主、美空だった。

何故流牙が美空をお姫様抱っこで抱き上げているのか分からず柘榴たちは目を疑う。

「お、御大将!?! リユウさん何をしてるんっすか!?!」

「今から美空を少し借りて行くよ〜」

「はあ!?! 流牙さん! あなた何を言っているのですか!?!」

「何を企んでる……?」

「悪いね、俺たちの世界だところという天気の良い日には可愛い女の子と遊びに行くもんだからね。最近美空は疲れ切っているから気分転換のためにこのまま連れて行くよ〜」
柘榴たちの答えを聞かず、流牙は美空を連れてそのまま春日山城を脱出して逃げてしまった。

「……お、御大将が誘拐されたっすー!?!」

「ああもうっ! 流牙さんはこんな時に何を考えているのよー!?!」

「まさか……リユウは御大将を……!?!」

流牙らしからぬとんでもない行動に柘榴たちは大慌てをし、急いで美空を連れ戻すために流牙の後を追いかけた。

しかし、軒猿よりも早く動ける流牙を追いかけることはできず、姿を見失ってしまっ
た。

そして……流牙が美空を連れて向かった先は……。

「よし、着いた。ここならよく見渡せるよ」

そこは春日山城から少し離れた空と名月が戦う戦場を見渡せる丘だった。ありがたい。いやー、みんなの慌て顔は見ていて面白かったわね〜」

美空は流牙に無理やり連れて行かれたように装っていたが、実は違っていた。

流牙の考えで誘拐されたことにして美空を春日山城から連れ出したのだ。

美空は出来ることなら近くで空と名月を見守りたいが、越後の当主としてそれは出来ない。

そこで流牙が無理やり連れ出し、戦場の近くの丘で見守ることにした。

丘には陣幕を張り、そこにいたのは……。

「流牙、無事に美空様を連れてきたのね」

流牙の妻の一人、今回の戦に参加してないもの一人である結菜だった。

結菜はあくまで流牙の側で見守り、共に戦う役目があるので今回の戦に流牙が参加しないなら自らも参加する理由がないので、今回は美空のおもてなしをする。

「お茶とお菓子を用意しましたのでどうぞ」

「あら？ 気が聞くわね」

既に結菜が淹れたお茶と越後の街で買った和菓子を用意して美空をおもてなしをする。

「まさかあの美濃の虻……その娘の結菜にこうしてもてなされるなんて、夢にも思わな

かったわ」

「私も越後の龍の美空様をこうしておもてなしをするなんて、考えたこともありませんでしたよ」

片や美濃の虻の娘で織田信長の妻、片や毘沙門天の化身で越後の当主……本来なら二人共会うことは叶わぬ相見えぬ存在だった。

しかし……。

「出会いと縁って不思議なものね……」

「そうですね……」

二人の目線の先には険しそうな目で戦場を見る流牙の姿があった。

流牙という存在によって不思議な縁が生まれ、こうして一緒に時を過ごすことになった。

本当に不思議な存在だぞと思い、二人は笑みが零れた。

「ん？どうした？」

「何でもないわ。流牙、あなたにもお茶を淹れたから飲みなさい」

「ありがとう」

流牙は結菜から湯呑みを貰い、ズズーっと口の中に茶を流し込んで静かに開戦の時を待った。

☆

越後の未来を決める戦が始まろうとする中、そこに邪悪なる者たちが近づいていた。

「ぐんぐんぐんぐん……」

それは飢えた獣のようによだれを垂らしながら歩く鬼の軍勢だった。

その軍勢の中に悪しき力をその身に漂わせる少年がいた。

「おうおう、腹を空かせて泣いておるのか？もう少し待てば腹一杯食わせてやるからの」
まるで親のように鬼に接し、鬼たちは喜びの雄叫びをあげる。

「ぎゅあーっ！」

「うむ、うい奴らじゃ。宝刀の煌めきを感じ、越後くんだりまで来てみれば、やはり居たか。黄金騎士よ。魂までも鬼血に濡れ、その手その身を汚泥で穢す。さすれば刀は鍵となろう。早うなれ……早う立派な鍵となれ」

その者は黄金騎士……流牙に何かを求めているように邪悪な笑みを浮かべた。

☆

戦場のあちこちから声や刀や鉄砲の音が鳴り響き、静かに開戦した。

美空は目を細めて神妙な面持ちで戦場を見つめて戦況を見ていく。

流牙も隣でそれを見ていくとザルバから呼び出しがあった。

チリーン……！

「ザルバ、どうした？」

『流牙、戦をしている場合じゃないぞ』

「どういうことだ？」

ザルバの言葉に結菜と美空も耳を傾けると衝撃的な発言が飛び出す。

『鬼の邪気を微かに感じる……あの時と同じように土の中を潜っているかもしれない』

「なっ!？」

「鬼が近づいている!？」

「ちよつと待つてよ! 鬼なんて越後には出た報告がないのよ! それが急に何で……」

鬼が現れるかもしれないという事に困惑する流牙たち。

すぐにでも対処しないと戦の途中に出てこられたら兵のほとんどが混乱して大きな被害が出る恐れがある。

「流牙! 私は春日山城に戻って柘榴たちを連れてくる!」

「なら私は空様たちの本陣に向かってすぐに対応出来るように詩乃と雫に伝えるわ!」

美空は春日山城へ、結菜は空の陣へ向かう事にした。

幸い移動用に馬を用意していたので走る必要がなくなりに向かう事が出来る。

「……俺は名月の元へ向かう。臆は拒否するだろうけど、名月なら俺の話を聞いてくれるはずだ。すぐに向かう!」

しかし、今は戦の真つ只中、幸い空の陣は近くだが、走つてすぐに名月たちの陣に向かえる訳ではない。

「仕方ないか……!」

流牙は陣を飛び出して走りながら魔法衣から牙狼剣を取り出すと同時に鞘から抜き、前方に円を描いて魔界からガロの鎧を召喚する。

そして、流牙が鎧を装着すると同時に大剣となった牙狼剣から闇の力が溢れ出し、金色の鎧が漆黒の闇を纏った。

牙狼・闇へと姿を変え、背中に漆黒の翼が生え、羽ばたかせながら空を飛ぶ。

走るよりも比喩物にならないほどのスピードで戦場の上空を飛び、一気に名月の元へ向かう。

「名月……っ!!」

「えっ? ああっ! 流牙様!」

「と、飛んでいる……!?!」

陣にいた名月は上空から聞こえた流牙の声に驚き、隣にいた朧は流牙が空を飛んでいる事に驚愕し、開いた口が塞がらなかつた。

流牙は翼を消して地面に降り立つとすぐに鎧を送還して名月の元へ向かう。

「流牙様! どうなされたのですか!」

「名月ちゃん、落ち着いて聞いてくれ。今この戦場に鬼が近づいて来ているんだ」

「ええっ!?!それは本当ですか!?!」

「ああ。今、美空はすぐに柘榴たちや兵を連れてこつちに向かつてくれるようにしているし、俺の仲間が空ちゃんたちや他の仲間達にもこの事を伝えに向かつてくれているんだ」

「そ、そうですので、ですが私はどうしたら……」

まさか鬼が近づいているとは思ってもよらなかったのか名月は怯えてどうすればいいのか混乱している。

「もう空ちゃんとの戦どころの話じゃない。今すぐに戦いをやめて鬼との戦いに備えるか、撤退するんだ。後は鬼との戦いに慣れていく俺たちに任せてー」

「待ちなさい!!」

すると突然臃が怒りの形相を浮かべながら流牙を睨みつけていた。

「道外流牙……貴様、鬼がいるなどと虚言をしてこの戦を有耶無耶にしようとしているのではないのか?」

誰よりもこの戦の勝利を望んでいる臃は流牙の話をまともに聞こうとしない。

「何を馬鹿なことを……俺はそんな嘘をつかないし、つく理由がない」

「貴様は名月と空どの……二人が争うことを酷く心を痛めていた。だからそんなー」

「いい加減にしろ!!」

「っ!?!」

流牙は声を荒げて臍を睨みつけ、その声に臍だけでなくそばにいる名月も驚く。

「今この国は最大の危機に瀕しているんだぞ?!こんなところで争っている場合じゃない!このままだと大勢の人間が犠牲になるんだ!あんたはそれでもいいのか!?!」

流牙は越前の戦いで大勢の仲間と桐琴を失った事からもうこれ以上大切なものを失いたくない為に強い気のこもった言葉を発する。

「し、しかし……」

「名月ちゃん、君は空ちゃんと共に越後の未来を担う希望だ。君が今何をすべきなのか……それを考えるんだ」

流牙は名月にそれを伝えようと魔法衣を翻して邪気が近づく方へ向かう。

「流牙様、どちらへ……?」

「俺は戦う。この剣は、この力は邪悪なる魔獣の手から人々を守る為にある!!」

流牙は大切な仲間達を、越後に住む大勢の民を、美空達を、そして越後の未来を担う幼星達を守る為に走り出す。

「流牙様……」

その後ろ姿に名月はギュツと胸元を強く握り締める。

流牙達と鬼との大きな戦が始まろうとしている。
そして、越後の未来を左右する大きな決断が幼星達に迫る。

『竜　　』
　　(Dragon)

戦場に鬼が近づくと気配をザルバが感じ取り、流牙は名月の元へ行き、これからどうすべきかを考えさせてからザルバの案内の元、戦場を駆け抜けて鬼の気配がする方へ向かった。

到着したのは関川と呼ばれる大きな川だった。

そして……到着してから数分もしないうちに『それ』は現れた。

「グオオオオオオツ!!!」

鬼は何と海から関川を登って現れ、次々と越後の地に上陸をして来た。

その数は数百を越え、流牙の後ろにいた兵士たちは恐怖で逃げ出す。

「来たか……!」

『流牙、気を引き締めていけ!』

「ああ!」

流牙は右手に牙狼剣、左手には既に鞘から抜いた牙狼刀を構えて鬼の群れに突入する。

牙狼刀は鬼を対峙してその刃から輝きが放たれ、牙狼剣と同等の鋭さを持ち、次々と

鬼を切り裂いていく。

すると、青空に暗雲が覆われ、大雨が降り出して来た。

「ちっ、こんな時に雨か……」

越後では雨が多いとは聞いていたが、これほどの大雨が来るとは予想外だった。

雨は視界を悪くし、体温を奪っていくが、鬼はそれを物ともせず流牙に襲いかかる。

「三千世界!!!」

凜とした気迫のこもった声と共に無数の刀が飛来し、鬼たちを滅多斬りにする。

「この刀は……一葉!」

無数の刀の後に走りながらやって来たのは今まで戦の中で沈黙を守って来た一葉だった。

一葉は将軍であるため、流牙隊の一員といえどもこの戦にはまともに参加することは出来ない。

「待たせたな、流牙!余が来たからには千人力じゃぞ!」

しかし、鬼の出現にやっと戦えると一葉は意気揚々となり、刀を手に鬼の群れに突撃したのだ。

「ははっ、相変わらず暴れ好きだな。だけど、油断するなよ?」

「分かっておる。さあ……鬼狩りで行こうかの!」

流牙と一葉は背中を合わせ、互いに笑みを浮かべてアイコンタクトをすると再び鬼の群れに突撃するが……。

「喰らえ、鬼ども！三千世界っ！三千世界っ！ふふっ、三千世界っ！！」

今までの鬱憤を晴らすかのように一葉は楽しそうに大笑いをしながら三千世界を連続で発動をし、鬼を蹴散らしていく。

その光景に流牙は内心驚愕し、ザルバも口をあんどりと開けるほど珍しく驚いていた。

（あ、あれ……？一葉の三千世界って一日数回しか使えないんじゃないかな……？）
（末恐ろしいお嬢ちゃんだな……味方で本当に良かったぜ……）

「ふははははははははははっ！三千世界ーっ！」

一葉の鬱憤を晴らす怒涛の三千世界に蹂躪されていく鬼たちを見て戦慄する流牙とザルバだった。

☆

「ヨナヨナノ……ナグサメナリシ……」

「ツキダニモ……」

「ぐるるるるう……」

関川の近くの森で控えている大量の鬼とそれを従えている謎の少年。

「詠えや詠え。喰らえや喰らえ。可愛い子たちよ、たんと遊んで大きくおなり。天よ、朕の子らを祝福せよ！蔵王の君よ。朕は所望する！この日の元の全てを！そして朕による濟世を！扉は既に目星はつけておる。器よ、早う鍵となれ。鍵となつて、朕の願いを叶えてみせい」

この状況を楽しんでいるように言葉を紡ぎ、その視線の遙か先には流牙の姿がある。
「ミヤコへ……ミヤコへ……」

「もうすぐじゃ。もうすぐ、京に戻れるのじゃ。そのためにも、子らよ。たんと食べ、たとと遊び、朕の願いを叶えておくれ」

少年の叶えたい願い……それを成すために少年は更に鬼を戦場へと送り込む。

☆

一方、空と名月は鬼の出現に一つの決断を下した。

それは戦を止め、共に手を携え、越後を守るために奮戦することだった。

名月は流牙の想い、そして名月の共に戦おうと言う想いを胸に秘めた。

北条の血が流れていても今は美空の娘、越後を愛し、越後を守る者として臚の元から離れて空と合流し、共に越後を守る為に戦うことを誓った。

空と名月は合流し、共に鬼を倒そうとした矢先にザルバの予想通り越前の時と同じく地面から鬼が出現し、次々と襲い掛かって来る。

越前の幼星達が最大の危機を迎えたその時だった。

「私の娘たちに手を出しているんじゃないわよ、このケダモノどもーっ!!!」

雨の音をかき消すかのような怒号と共に白刃の一閃と五つの光が空と名月に襲いかかって来た鬼を切り裂いた。

五つの光から現れたのは日の本の法を守りし神々、帝釈天たち護法五神だった。

「空！名月！大丈夫!？」

「美空お姉様!!」

美空と護法五神が空と名月たちを守る為に参上した。

しかも美空だけではない。

「おらおらっ！空様と名月様に手を出すケダモノ、死にたい奴から前が出るツスよ！」

「越後の未来を担う希望……失わせない！」

「私の大切な愛娘に手を出すなんて許さないわ!!」

「我らの幼星を狙う化け物どもめ、成敗してくれる!」

柘榴、松葉、秋子、貞子……更には越後の勇敢な兵士たちが馬に乗って駆けつけて来た。

秋子は馬から降りるとすぐに愛菜の元へ向かった。

「愛菜!」

「母上!」

「よく頑張ったわね」

「どやっ!母上、共に越後を守る為に戦いましたよう!どーん!」

愛菜の頼もしい言葉に秋子は一瞬目を見開いて驚いた。

「愛菜……ええ!」

男子三日会わざれば刮目して見よと言われるが、本当に少し会わないうちに頼もしく成長していることに母として嬉しく思うのだった。

美空たちが援軍としてやって来たことで状況は一気に有利となり、軍師である詩乃は美空に進言する。

「美空様。鬼は流牙様と一葉様を筆頭に数を減らして来ています。ここで一気に攻めましょう」

「そうね。これ以上、鬼たちに好き勝手にやらせないわ。一気に決めましょう!!」

美空たち越後衆は流牙隊と空と名月の兵と共に連携を取り、越後を守るために鬼狩りを開始する。

詩乃たちが考えた刀、槍、弓の三種の兵を一組とした基本にした陣形で鬼を倒していき、美空も護法五神を駆使して鬼を次々と倒して行く。

そして……この戦いの中心人物とも言える、鬼の群れに単騎で突撃した流牙は……。「ふっ、はあっ!!」

その流牙は牙狼剣と牙狼刀を振るい、鬼を切り裂いていく。

すると、越前のとぎのように牙狼刀に光が灯され、鬼が流牙を優先して近づいていく。流牙は牙狼剣で円を描いてガ口の鎧を召喚してその身に纏い、大剣と大刀へと変化した牙狼剣と牙狼刀を構える。

越前の時は大量の鬼によって身動きが取れず、鎧を解除出来ずに心滅獣身へと堕ちてしまった。

もう二度とそのような事が起こさないよう流牙もあれから考えて対策を練っていた。

魔導火ライターを取り出して翡翠色の魔導火を付けて頭上へ投げ飛ばし、揺らめく魔導火を交差させた牙狼剣と牙狼刀の刃に灯した。

「はあっ……うおおおおおおおっ!!」

そこから落ちていく魔導火ライターの魔導火はガクの鎧に触れると、一気に鎧にも魔導火が灯され、流牙の気合いと共に膨大な翡翠色の炎が火山の噴火のように燃え上がった。

「喰らえっ!!!」

そして、魔導火が灯された牙狼剣と牙狼刀を地面に突き刺さすと流牙を中心に地面がひび割れ、地中から大量の魔導火が吹き荒れた。

吹き荒れた魔導火は流牙を中心に半径数十メートルにいる鬼を全て焼き尽くした。

地獄の業火を操るかの如く敵を焼き尽くす大技……地中を潜る鬼にも大打撃を与える大技で、一旦鎧を解除した流牙に大量の汗が流れる。

すると魔導火の攻撃から逃れた鬼達が口を開いた。

「ナゼ、キサマハタタカウ?」

「何……?」

鬼達は流牙に襲いかかりながら次々と問いの言葉を繋げていく。

「ヨワキソンザイヨマモツテナンノイミガアル」

「ドウセキエユクイノチヨマモツテナニナル?」

「キサマモヤミノソンザイ、ワレラトヒトツニナレ」

「断る!!!」

流牙は鬼の言葉を全て否定し、牙狼剣で問答無用に切り裂く。

「生きとし生けるものはいつかは死ぬ。だけど、心や願いが次の世代に紡がれ、それが永遠の想いとなる！その想いが未来を生きる人々の希望になるんだ！」

流牙はこの越後で空、愛菜、名月の三人の心に宿る未来への希望の光を見た。

この子達なら美空達の後を継ぎ、越後を……やがてこの日の本を支える大きな存在になると信じている。

「俺はこの力で、この剣で、邪悪なる闇であるお前達からその希望の光を守る!!」

だからこそ、その想いを繋ぎ、小さな光を消させないために守っていかねければならない。

流牙は三度目の鎧を召喚し、鎧のパーツが周囲の鬼に激突してぶっ飛ばしながら流牙の周りを舞う。

「それが、黄金騎士ガ口の称号を継ぐ、俺の役目だ!!」

そして、ガ口の鎧が流牙に装着され、流牙の強い想いが反応して鎧の金色の輝きが眩い光を放つ。

流牙の未来への希望を守ろうとする想い、そして……美空達、越後に住む全ての者たちの強い想いが重なる。

すると突然、護法五神たちは何かに導かれるように美空の命令なく勝手に動き、一直

線に流牙の元へ飛んだ。

「帝釈!?!みんな!?!」

そして、鬼に囲まれている流牙に暗雲の隙間から差し込まれた一筋の光が優しく包み込んで鬼を弾き飛ばした。

「何だ!?!」

『こいつは……今まで感じたことのない、大きな存在の力を感じるぜ』

光はガ口の鎧の金色の輝きを更に強めていく。

「毘沙門天……? あなたが流牙に力を……?」

流牙を覆う聖なる光、それは美空が契約している仏教の神・毘沙門天、その力の一端が放つ光だった。

護法五神は流牙の周りに集まるとそれぞれが小さな光の玉となり、ガ口の鎧の中に入り込み、眩き強い黄金の光を放った。

流牙を……ガ口を包み込んでいた光は大きな玉となり、ヒビが割れると何かが生まれるように弾け飛んでその姿を現した。

「黄金の……竜!?!」

それは百メートル以上にもなる黄金に輝く巨大な竜だった。

美空たちは突然の黄金の竜の出現に驚き、瞬きをすることも忘れるほどだった。

黄金の竜は縦横無尽に飛び回り、大きな烈風を吹かせて鬼たちを空中に投げ飛ばすように吹き飛ばした。

更には空に覆った暗雲をも全て吹き飛ばし、綺麗な青空が一気に広がった。

黄金の竜が天に昇り、その大きさが一瞬で小さく収縮する。

黄金の竜は真の姿である希望……黄金騎士の新たな姿を現した。

牙狼・翔の鎧の形に大きな変化が現れていた。

両手両足の甲には巨大な鉤爪のような鋭い爪、背中には漆黒の翼と酷似した大きな金色の翼、そして蛇のように長い尻尾。

それは狼を模して作られているガ口の鎧がまるで竜人のような姿を模した形へと大きく変化していた。

更には美空たちの衣装にも描かれている雪の結晶のような煌びやかな装飾が飾られていた。

越後に住む全ての人たちの想い、そして毘沙門天と護法五神の力が一つに重なり、ガ口の鎧に新たな奇跡を生み出した。

闇を打ち払い、希望の光を守り、そして導いていく奇跡の竜人。

その名は『護法天竜・牙狼』。

流牙の……牙狼の新たな奇跡の力である。

•

『対　　　　　Confronting　　』

流牙の未来を繋ぐ決意と越後に住む全ての人たちの想い、そして毘沙門天と護法五神の力が一つに重なり誕生したガ口の鎧の新たな奇跡……『護法天竜・牙狼』。

黄金に輝く竜人の降臨にこの場にいる全ての人間が見上げ、まるで本当の神が降臨したかのように崇めたくなる気持ちだった。

流牙は牙狼剣を呼び出すと、それはいつもの両刃の大剣の形ではなく竜の姿を模した大剣、『天竜牙狼剣』へと変化していた。

黄金の翼を羽ばたかせて急降下し、鬼の群れに突撃し、天竜牙狼剣を振り下ろした。すると、天竜牙狼剣の先端の竜の頭部が動きだし、まるで意思を持つかのように口を開いて鋭い牙を向けた。

刀身が柔らかく限りなく伸び、縦横無尽に駆け巡る竜の如く次々と鬼を斬り伏せて行く。

しかし、流牙は鬼がこの地上にいるものだけでないとすぐに気付いた。

鬼はまだまだ地中の中を潜っており、何処から現れたのか不明だがこのままではキリがないほどに増え続けてしまう。

それならばと流牙は静かに美空の元へと向かい、珍しく口をあんどりと開けている美空に静かに話しかける。

「美空、力を貸してくれ」

「ふえっ？ち、力を貸せって、何をするのよ!?」

「決まっている。君の大技だ!」

鎧から五つの光が現れ、光が人の形をなすと美空にとって見慣れた姿が現れた。

「帝釈!みんな!」

美空の可愛い妹と称する帝釈天率いる護法五神、だがその姿は少し異なっていた。

「つて、何かみんなが黄金に輝いて武装も豪華にいるんだけど!」

護法五神全員の体が黄金に輝き、更には身に纏っている鎧がガロの鎧に似た形へと変化していた。

一時的だが、ガロと一体化したことにより護法五神もその力の一部を宿しているのだ。

「美空、一気に全ての鬼を浄化する」

「まさか三昧耶曼荼羅?でもまだ他のみんながいるのに、使えるわけじゃない!」

三昧耶曼荼羅は護法五神を五芒星の形に配置し、美空の霊力や精神力を使い、浄化の光を放つ。

しかし、それ以外にも物理的な攻撃も可能で衝撃波を放って敵を攻撃したり建物を派手に破壊することも可能である。

今この戦場には鬼以外にも鬼と戦っている大勢の兵士がいる、仮に三昧耶曼荼羅を放ったら鬼と兵士が一緒に倒されてしまう。

美空はそのことを一番気にしていたが、流牙には一つの確信があった。

「心配するな。今から放つ三昧耶曼荼羅はこの場にいる全ての人を守るためにある」
「全ての人を守る……?」

「そうだ。美空、俺を信じてくれ。仲間を、越後の民を、そして……越後の未来を担う希望を守るために」

「流牙……」

美空は流牙から少し離れた空たちを見つめ、目をそっと閉じて両手を組んで印を結んだ。

「わかったわ。あんたは何度も私の期待に応えてくれて、約束を守ってくれた。だから……あなたを信じる!!」

「美空……一緒に行くぞ!!」

「ええ!!」

流牙は天竜牙狼剣を掲げると護法五神は五つの方向へと飛び、越後の広大な戦場を囲

むような巨大な黄金の光で紡がれた五芒星を地面に描いた。

三昧耶曼荼羅の五芒星の光は本来なら半径十数メートルほどにしか展開出来ないが、今の三昧耶曼荼羅は半径数キロほどの巨大な五芒星を描いている。

「邪悪なる魔獣たちよ、その穢れた魂を浄化し、正しき魂となりて来世へと旅立て！」

「希望の光よ、人々を守り、未来を繋げ！」

流牙と美空の心が一つとなり、共に天に向かってその名を叫んだ。

「三昧耶曼荼羅!!!」

戦場に黄金に輝く五芒星の光が天を突くほどの閃光を轟かせる。

黄金の光は地上と地中にいる数百……否、数千の鬼を一匹残らず全て浄化した。

その醜い体を灰にし、穢れた魂を浄化して天へと登って行った。

そして、三昧耶曼荼羅の光を同じく受けた人間達には浄化ではなかった。

「おお……？何と、疲れた体が癒えておる」

「これは……鬼に傷つけられた兵の傷が治ってる……？」

三千世界を放ち、極限まで疲れていた一葉は活力を取り戻し、詩乃は兵の傷が癒えていることに驚いた。

「これが流牙と美空様の力……悪しき力を浄化し、傷き命に癒しを与えているの……？」
結菜は自分に纏っている黄金の輝きを見つめながらそう呟いた。

ガ口の鎧を構成しているソウルメタルは人々の想いを力に変える性質を持っている。それに加えて毘沙門天と護法五神の力も合わさり、流牙と美空の望む人に仇なす鬼を全て浄化し、この戦で傷ついた全ての人を癒す力が誕生したのだ。

それは越後を守りたいという願いが作り出した奇跡の光でもあった。

三昧耶曼荼羅はこの戦場にいた全ての鬼を浄化し、唐突に始まった鬼との戦いに終わりを告げた。

流牙はガ口の鎧を解除し、護法五神達を美空の元に返すと、鎧を魔界に送還した。

その瞬間、流牙と美空の意識がクラツと失いそうになり、倒れそうになったところを慌てて結菜と柘榴が受け止める。

「ちよ、ちよつと流牙!？」

「御大将!大丈夫っスか!？」

「ごめん……かなり疲れた……」

「三昧耶曼荼羅であんなに力を使ったのは初めてよ……」

護法天竜・牙狼の放った三昧耶曼荼羅。

それは流牙と美空の体力と精神力を根こそぎ使い果たすほどの対価が必要だった。だがこれで越後に現れた鬼は全て討滅し、緊張が解けて安堵することが出来る。

そう思った矢先だった。

『流牙！背後から強い邪気だ！』

「っ！みんな、下がれ!!」

「空！名月！私の後ろに！」

ザルバの声に続き、邪悪なる気配をすぐに察した流牙と美空は疲れなど一瞬で吹っ飛び、いつもの調子に戻り、みんなを下がらせながら剣と刀を構える。

そして、その剣と刀の切っ先の先にいたのは白髪に赤い目をした不気味な雰囲気をした少年だった。

少年の身なりはこの時代では着られない束帯を身につけており、首には深緑色に輝く勾玉の首飾りをかけていた。

「おうおう、威勢の良いことよ。だが、切っ先を向けたところで、何かを得ることは叶わぬぞ?」

「貴様、何者だ……?」

「越後の人間じゃないわね。それに、今時そんな格好をする奴は珍しいわよ……」

流牙と美空、そして後ろにいた一葉達は空や名月、詩乃や雫を下がらせながらすぐにも動けるようにそれぞれ武器を構える。

「ようこそ。血にまみれた戦乱の世へ。朕は道外流牙を祝福と共に迎えようぞ」

そう言つてにやりと笑った姿は、少年の形に似つかわしくない、深く、黒ずんだ悪意

が見え隠れしていた。

『気をつけろ、二人共。そいつからは鬼以上の邪気を感じる。ただの人間じゃないぞ』

「分かつてる……」

「そうね……」

不気味な笑みを浮かべる少年にしか見えなかったが、流牙にはその体に纏う邪悪な気配に今まで戦ってきた数々の強敵のホラーの姿が重なって見えた。

「もう一度聞くぞ、貴様は何者だ？」

「吉野に住まう者。じゃが、朕のことなどどうでも良いであろう。知ったところで、貴様には何も出来んのだから」

「それはどうかな？この場には俺以外に頼れる仲間たちがいる。貴様を斬るぐらい造作もないことだ」

「ふはははは！確かにそれは可能かもしれない。しかし、それは朕がこの場にいればの話だな？」

そう言うとう少年の姿が少しずつ薄くなつてく。

まるで幻のように体が消えていき、それは流牙たちが攻撃しても無意味だと言うことを表していた。

「此度は顔を見に参っただけ。今は何もするつもりはないから安堵いたせ。道外流牙

よ、この調子でこれからも精進せい。朕は貴様を応援しておるぞ」

「応援、だと?」

「鬼を殺し、邪を殺し、殺し殺して鬼血を流せ。さすれば鬼血は浄化され、この日の本を美しい世に変えてくれるであろう。良いか?もつともつと鬼を殺すのじゃ。この日の本を救いたいのならばな」

「いまいち少年の狙いや目的が分からず、流牙は改めて少年に問う。

「貴様の目的は何だ?」

「言ったであろう。朕は貴様を応援しておると……花に寝て、よしや吉野の吉水の、枕の下に石走る音。雌伏は飽いた。黄金騎士の継承者よ、貴様の働きを楽しみにしておるぞ。くくくく……ははははははははははははっ!!」

そして……少年の姿が霧散した霧のように完全に消え、気配も感じられなくなった。

「消えた……ザルバ」

『奴の気配が消えた。少なくとも越後から完全にいなくなっただろう』

「流牙……まだ断定出来ないけど、まさか今の奴が……?」

「可能性は十分ある。奴の口振りや雰囲気……黒幕と考えて間違いないだろう」

あの少年が一連の鬼の事件の元凶……黒幕の可能性。

つまり、流牙たちが倒すべき最大の敵と対峙したのだ。

流牙は静かに牙狼剣と牙狼刀を鞘に納め、少年の姿を思い浮かべる。

あの邪悪そのものから生まれたような雰囲気や漂わせる少年に流牙は牙狼剣と牙狼刀を握り締めながら怒りを露わにする。

「あいつが……多くの民を、仲間を、そして、桐琴さんを……」

今まで奪ってきた多くの命の仇を遂に見つけることができ、必ず少年を倒すと心に強く誓う。

「流牙」

「美空？」

「黒幕を見つけたのはいいけど、今はこの戦いを無事に乗り越えたことを喜びましょう？」

美空は優しい笑みを浮かべて流牙の肩をそっと触れ、少年と対峙して強張っていた心を和らげた。

流牙はそっと周りを見渡すと自分を見つめるたくさんの笑顔を目に映す。

流牙隊のみんな、越後衆のみんな、そして……この戦を通じて大きく成長し、互いの絆を深めた空と名月と愛菜。

今度は大切な失うことなく守ることができた喜びを噛み締め、牙狼剣と牙狼刀を魔法衣にしまい、流牙も笑顔を見せる。

「それじゃあ……帰ろっか？」

美空たちも頷き、全員で春日山城への帰路に向かう。

国同士の陰謀が渦巻く戦の中に現れた鬼の元凶。

それは流牙に新たな戦いと出会いを導く切っ掛けとなるのだった。

☆

一方、流牙たちを遠目で見つめる二つの影があつた。

一人は流牙が以前に堺に向かう途中の茶屋で出会った飄々とした雰囲気少女。

もう一人は右目に眼帯をつけた大人しそうな少女。

二人は流牙が越後に訪れてからずっと監視をしていた。

「見たかい？あれが金色の天狼……黄金騎士ガ口の真骨頂さ」

「まさかあれほど凄まじい力を使いこなすとは……危険ですね」

流牙の……黄金騎士ガ口の力を目の当たりにし、興奮と同時に畏怖の念を抱いた。

「確かに危険だ。だけど、彼が刃を向けるのは人ではない、鬼だけだからね」

「だけど、いずれ我らにとつてとつてもなく大きな障害になるんじゃないの？」

「だからお屋形様が断を下し、典廐さまを海津に待機させているのだろう？」

「そうだけど……」

「とにかく、判断はお屋形さまに任せよう私達は課せられた任務に専念しよう」

「そうね……」

二人は流牙たちに鉢合わせないようにその場を後にし、次の行動に移すのだった。

『混
~Confusion~』

越後での鬼の戦いから数日が経過した。

美空の後継者は名月が辞退したことで空に決定した。

名月はこれから空を支え、共に越後を繁栄していくと誓うが、自称空の愛の守護者である愛菜と度々小競り合いを起こして行くことになるのは言うまでもなかった。

今回の後継者争いのきっかけとも言える隴は名月の成長と決断を見届け、関東に帰ることになった。

隴は最後の最後まで名月を誑かした流牙を許さなかったが、結果的に名月を鬼から守り、成長するきっかけを与えたことを少しだけ感謝した。

そして、流牙の頼み通り関東に戻ったらすぐに鬼の警戒を強めることを約束した。

まだまだ問題は多いが、少しずつ平和へと近づいた越後だったが、そこに流牙と美空に魔の手が近づいていた。

始まりは愛菜の緊急事態の知らせだった。

春日山城の南方、海津城方面に風林火山の旗……甲斐の虎、武田が動き出した。

美空たち越後衆の因縁の相手とも言える武田に緊張する一同。

武田が来ることは予想しており、美空たちは冷静に状況を整理するが、反乱から後継者争い、果てには鬼の乱入で武田とまともにやり合えるだけの兵を揃えることが出来ない状況だった。

すると、雫が美空に提案を申し出た。

「あの……宜しいですか？」

「どうかした？ちっちゃな軍師さん」

「はい。同盟国として、いくつかご提案が出来るかと」

雫は同盟国である越後に倒れてもらうわけにはいかないとして、幾つかの手を説明する。

まず最初に織田と長尾の攻守同盟を周辺諸国に派手に宣伝する。

それにより武田に背後……幾つもの同盟国を気にさせるところができる。

そして、次に打つ一手は賭けになる。

「賭け？」

「賭け、というか。久遠様が認めてくださるかどうかわからない、ということですが」

雫が苦笑を浮かべていうと、ひよ子たちを筆頭に流牙隊のみんなはわかったように頷く。

「ああ、なるほど。大丈夫よ、もしもの時は私が説得するから」

結菜も苦笑を浮かべながらそう言い、流牙はきよとんとして何のことだ？と疑問符を浮かべていると雫の口から衝撃的な提案が出された。

「美空様。流牙様の嫁になりませんか？」

「……………はい？」

突然の雫の衝撃的な提案に久しぶりに流牙の頭が真っ白になった。

「はあ……………？私がいいつの嫁になればいいの？」

「はい。この日の本で鬼と戦う決意を示すため、道外流牙という天の御遣いと添い遂げる。越後ではなく、日の本のために。そう喧伝すれば、日の本全土の為という点、そして婚姻による決意を強調することによって、万人が受け入れやすい大義名分を得ることになります。これは無形の力となるでしょう」

それにより日の本の為に戦う越後に対し侵攻すれば武田は国賊の汚名をきることとなり、幕府より正式に認められている天上人でありは流牙の妻に弓引くことは畏きところにも引引くことと同じということだ。

これで武田が引くかは分からないが、少なくとも越後内部の平定には十分な効果を發揮する。

「そういうことか……………」

「……………ねえ、流牙」

「何？」

「あなたは私が嫁になること、どう思うの？」

「どう思つて……えつと……」

「ちよつと！悩んじやうことなのっ!？」

「リュウさんひどいっす！」

「失望しました」

「女の敵」

「流牙様……」

まさかの自分を慕う空にまで疑惑の視線を向けられ、誤解とはいえ流牙は少し悲しくなつた。

「……さいつてえ！」

「ちよつとお嬢さんたち？まだ俺は何も言つてないんだけど……」

「御大将の何が不満なんすか！そりや、性格は振くれてるし、気分屋だし、歪んでるのは否定しないっすけど、顔は可愛いし、おっぱいとそこそこあるっすよ！」

自分の使える主である美空に対してかなりぶつちやけ過ぎた発言をする柘榴だつた。

最も、その主の美空も部下に対してかなりぶつちやけ過ぎた発言をするのでどつちもどつちであるが。

「ちよつと！ 柘榴はちよつと黙ってなさい！」

「……美空はそれでいいのか？」

「え……」

「男としては美空みたいな可愛くて良い子を嫁に来てくれるのは嬉しいと思うよ。ちよつと性格は捻くれてるけど、そこは美空の魅力だと俺は思うからさ」

流牙の飾らない素直な言葉に美空は頬を赤く染めた。

そして、流牙は美空が嫁になることを洩る理由を静かに語る。

「でも、美空が越後の為に、日の本の為に、そしてこの戦況が有利になるから俺の嫁になる……それっておかしくないか？」

その言葉に秋子達越後衆は言葉を失い、流牙隊はやつぱりと言った感じで小さく笑みを浮かべた。

「俺は黄金騎士になるのが夢で母さんや法師との約束だから、今までどんな辛いことがあつてもこの体が傷ついても、歩き続けることができた。だけど、美空は寺で一生を終えるはずだったのに周りの人たちに散々振り回されて……その果てが夫を越後を守る為に決まってしまったら、美空が自分を犠牲にして傷ついてばかりじゃないか」

流牙はどんな痛みも苦しみも自分で乗り越える覚悟を持っているが、美空の人生は越後と言う名の国を守る為に振り回され続け、何度も何度も傷ついて苦しんで来た。

「だから……俺としては別の方法を、そして美空が幸せになれる方法を見つけたんだ」
流牙は美空の報われない人生をなんとかしたいと思い、自分の嫁になることを決めたのだ。

流牙の優しさに触れ、どう言えいいのかわからない美空に結菜は優しく教える。

「美空様」

「何よ、結菜……」

「ご存知の通り、流牙はそう言うことに関しては鈍感です。だから、今の気持ちを素直に言葉に表してください」

「言葉……」

美空は軽く目を閉じ、これまでの流牙との様々な出来事を思い出していた。

黄金騎士ガロの鎧の美しさに感動し、流牙のお人好しに呆れ、流牙と波奏の親子の強い絆に感嘆し、いつの間にか流牙の強さと優しさに惹かれていた。

「流牙」

「何？美空」

「今から言う言葉……心して聞きなさい」

美空は流牙をじっと見つめる。

白い肌と淡い髪に包まれたその紅い瞳はまるで氷の中で燃える炎のように見え、流牙

は真剣に耳を傾ける。

「ば—————つか!」

「は、はいっ!」

「あなただって、前からずっとずっと思っていたけど、ほんつとーにお人好しのね!いくら状況が差し迫っているからって、相手の言うことを素直に聞いて、ここまで無駄働きしちゃうなんて、お人好しにもほどがあるわよ!黄金騎士で能力があるくせにそれに鼻にかけることもない。どんな大きい手柄を得ても、功を誇ることもしない!そのクセ命だけはしっかり賭けてやるんだから……挙げ句の果てに何?この私が嫁になってあげるって話なのに、素直に喜ぶどころかそつちの心配!」

「だ、だって……」

「これでバカでお人好しでなくて、何て言うのよ」

「それは言い過ぎじゃ……」

「な、ん、て、い、う、の、よ!」

「ごめんなさい、返す言葉がない……」

「……ほんとバカ。ううん。バカを通り越して、うつけようつけ!大うつけ!そんなうつけ者、心配で放っておけないわよ。だから、私が側について、そのお人好しな性格を叩き直してあげる。いいわね!」

「美空……」

「いいわねって聞いているの！返事は！」

「……ああ、分かったよ」

美空の歪んだ性格故の遠回しな告白によようやく気付いた流牙は困ったような表情をしながら笑った。

「美空、本当にいいんだな？」

「越後の国を渡してきたのは豪族たちだけど、受け取ったのは私の意思よ。空や名月を娘に迎えたのも私の意思だし、晴景姉様を追い出したのも私の意思。選択を突きつけられたことは何度もあったけど、それは全部黄金騎士になつて戦うと誓ったあなたと同じで、自分で全部決めてきたのよ。私の意思なら、文句ないんでしょ……」

それは美空が自ら選択して流牙の嫁になりたい、側にいたいと遠回しに宣言していると同じことだった。

流牙は美空の元へ行き、右手を差し出して微笑みながら言う。

「美空……頼りないかもしれないけど、よろしくな」

「……良いわよ。よろしくしてあげる」

美空は頬を赤く染めながらも笑みを浮かべ、流牙の差し出した右手に自分の右手を重ねてお互いに優しく握り締めた。

美空が流牙の嫁になることが決まり、めでたい事だと越後衆は喜び、流牙隊は頼もしい仲間が出来た喜びと同時に新たな恋敵が増えて少し複雑な心境だった。

話がひと段落したところで次に武田をどうするか色々知恵を出し合っているところにお茶を用意しに出ていた愛菜が再び大慌てでやって来た。

それは武田晴信の妹、武田典厩信繁が訪れたと言う新たな緊急事態だった。

そして……夫婦となった流牙と美空を引き裂く別れの時を訪れようとしていた。

『誓　　』 P l e d g e 』

武田典厩信繁の突然の来訪に驚く一同。

美空は典厩を客間に通して茶菓を用意して時間稼ぎを秋子に命ずる。

その間に流牙隊は旗を片付け、流牙は今後のために魔法衣の力で越後の兵に変装して美空の近くに、流牙隊の何人かは主人を守るために武士が待機する武者溜まりで待機して話を聞くことになった。

そして、しばらくして美空と典厩が上段の間へとやって来た。

典厩は小柄な子で落ち着いた雰囲気を出しており、一国の使者と言わんばかりの風格だった。

「夕霧……久しいわね。光璃は元気かしら？」

（夕霧……は典厩の事で、光璃は……武田晴信の事か？）

美空の口から語られた二つの真名に流牙はそう推測すると典厩からとんでもない口調が飛び出す。

「すくぶるく健勝でやがりますよー！」

（やがりますよ!?!）

初めて聞く独特な口調に流牙は一瞬耳を疑うほどだった。

その後美空と典厩は敵対国としての話をしていき、典厩は晴信から預かった手紙を美空に渡す。

手紙を見た美空の目の中には明らかに怒りの意思を表すように燃えていた。

典厩は手紙の返事を聞こうとしたが、内容が即答できるものではないらしく、典厩は一日猶予を晴信からやつても良いと言われてたので明日返事を聞くことになり、典厩は客殿に案内された。

典厩が上段の間から出て行くとすぐに流牙はいつもの格好に戻り、待機していた流牙隊も出て来て手紙の内容について話し合う。

「美空、武田はなんて言ってきたんだ？」

「……無理難題ってほどじゃないわね。けど、どちらかを選ばないとまずい状況をうまく作り出されちゃったわね。見る？」

「俺は読めないから……幽、訳してくれないか？」

「承知しました……こほん」

幽に手紙を渡し、内容を訳して分かりやすくしてもらおう。

ところが……。

「ええと……越後のみんなー。内乱鎮圧おっ疲れー！たぶんへーきな顔してこれ読んで

と思うけど、ほんとはチョー大変だったでしょ？こつちが調べた限りじゃ思った以上に被害も出てるみたいだし、疲弊してるよね？っていうか、姉妹で内輪もめってどんな感じ？ねえねえ、どんな感じ？でもぎーんねん♪別に光璃そういうの興味ないしー。私たち天下一の仲良し三姉妹だしー！でさ、今から越後を攻めよーと思っちゃってるの♪きゆるーん♪けどお。弱ってる美空ちゃんを倒してもあんまり意味ないし、♪決着は正面から付けたいなくって思ってるし。今なら見逃してあげてもいいかなーって♪だからさ。その代わり、そつちにいる金色の天狼とやらをくれないかなーっていうかよこせ。春日山攻めでも助けてもらったんでしょ？興味あるのよねー。そうすれば今回だけは疲弊しまくってる美空ちゃんと越後を見逃してあげてもいいかなーって。ねっ？お得な取引でしょ？光璃ってばやつさしーい♪じゃ、お返事待ってるね。でも、明日までにお返事くれないと、すぐ典厩と勘助に春日山を包围させちゃうからね☆じゃあねー意識すればこんな感じですか？」

まるで流牙のいた元の世界にいる女子高生みたいな話し方をして手紙の内容を訳した幽だった。

「うむ。あっぱれである」

「光栄の至り」

「あんたら、天守の外に吊してあげましようか!？」

あまりにも酷い幽の手紙の通訳に美空は少し切れてしまい、流牙は苦笑いを浮かべて宥める。

「まあまあ、美空落ち着いて。ねえ、幽……君って本当にこの世界の出身？もしかして俺と同じように天の世界から来たんじゃないのか？」

「いえいえ、私はこの日の本で生まれ、今日まで生きて来ましたよ」

「そ、そう？」とところで俺を寄越せつてどういう事だ？わざわざ越後を攻める好機を逃してまで……」

いまいちピンとこない流牙に詩乃は分かりやすく説明する。

「簡単なことです。要求を断われれば、内乱で疲弊している越後に攻め入る大義名分を得る。そして要求を呑んだとすれば……武田は、今この日の本で起こっている大きなうねりの中心にいる、流牙様を手元に置くことが出来ます」

「俺がうねりの中心ね……」

今まで魔戒騎士として戦って来たからあまり自覚はなかったが、この世界にとつて流牙は重要な存在であることは確かだ。武田はそれを見抜き、理由は不明だが流牙を手元に置きたい。

少なくとも流牙がいなければ春日山はおろか、空や愛菜を取り返すことが出来なかった。

更には鬼によつて越後に多大な被害が出てもおかしくはなかった。

田楽狭間の天人や金色の天狼としての数々の活躍、そして織田の縁者なら上洛する上で織田との交渉材料にも使える。

それだけ重要な存在だと認識した流牙は美空にどうするのか聞いた。

「美空、どうする?」

「……分からない」

「……美空、俺は武田の方に行った方がいいと思う」

「え……?」

「美空のことだから越後を守り、俺も守らないと……なんて、考えてくれるんじゃないのか?それはとても嬉しいけど、越後を守るには俺が行くしかない。だから、その間に体勢を整えてくれ」

「……分かつてるわよ。そんなの。でも……また自分一人で、そんなお人好しみみたいなことやつて……それこそ、あんたが一番犠牲になつてるじゃない」

「犠牲? そんな訳ない。今回の事をいい機会だと思つてる。前々から武田を仲間にしたといつて考えていたからな」

「なに。越後勢だけじゃ不満なの、あなた!」

「違う。俺たちはこれからの鬼の戦いでもう二度と負ける事を許されないんだ。吉野の

者とかいう黒幕も現れた……益々鬼との戦いは厳しくなるはずだ。だからこそ出来るだけ力を集める必要がある」

流牙はこれまで何度も敗北を経験したからこそより大きな力で臨まないと戦いには勝てないと感じている。

そして何より、流牙にとってこの世界でできた夢と未来をみんなで叶えるために。

「それに、前に美空と話しただろ？ 同盟を組んで多くの国を一つにまとめて人や金の物流を活性化する……鬼の脅威が無くなれば色々なことができる」

「仲良く、ねえ。人の欲望は果てしないものよ？」

「そんなことはわかっている。だけど、美空や久遠、それに他の国の主たちは国の領土を広げようとしている。それは……天下を統一して戦いを無くそうとしているからじゃないのか？」

そう言われて美空は言葉を失う。

この世界は戦国時代と呼ばれる天下を統一し、それぞれの主たちが理想の国にするために戦いを繰り返している。

しかしその大元のほとんどは一刻も戦いを無くし、平和な世にするのが目的である。

「俺一人の力はとても小さい。だけど、人が集まれば大きな力となる。だからそれを見つければ、みんなを守るために武田に向かう」

「……流牙、本当に行くつもりなのね？」

「ああ」

流牙の決意は固い、そう感じ取った美空は暗い表情をしながら小さく口を開いた。

「正直に言おうと、今の越後はあなたの提案を受け入れるしかない……ごめんなさい、流牙」

「大丈夫だ、これは美空たちを守るためじゃない。この日の本を守るための選択だから」

「……ありがとう」

美空は流牙の想いを受け取り、その想いを無駄にしないよう一刻も早く越後を立て直し、万全の体制にする事を誓った。

その日の夕方……流牙は久遠への手紙を書いて美空の元へ向かった。

秋子は流牙隊の旅立ちの宴を開くが、美空は出席しておらず、流牙の出席も禁じられた。

美空を探しているとその途中で空と愛菜と名月と会った。

「みんな、美空を探しているんだけど、何処にいるか知らないか？」

「美空お姉様なら、多分庭の方にいらっしやるかと」

「庭か。ありがとう」

「あの……流牙様」

「本当に、甲斐に行かれるのですか？」

空と名月は悲しそうな表情で流牙を見つめて尋ねた。

流牙は腰を下ろして膝をついて空たちと視線を合わせて言う。

「ああ、そうだ」

「そうですか……」

「せつかく越後も少しずつ平和になってきたのに……」

やはり憧れの人がこんな形で旅立ってしまうことに空と名月は悲しいと思っており、隣で黙っていた愛菜も同じ気持ちだった。

「……空ちゃん、名月ちゃん、美空の事を頼む。心の支えになれるのは君達だけだから
や」

「……はい。流牙様も、道中お気をつけて」

「ご無事を祈っております」

「ありがとう」

流牙は両手で空と名月の頭を撫で、二人はふわりと優しい微笑みを見せた。

「愛菜も秋子さんを支えてくれよ。多分秋子さんが一番苦労すると思うから」

「どやっ！この愛菜にお任せあれ！」

「ふふっ、頼むよ」

いつものように元気に返事をする愛菜にも優しく頭を撫でると空はある事を思い出して一つ質問をした。

「そうだ、流牙様。もう一つ、伺ってもよろしいですか？」

「何かな？何でも聞いて」

「流牙様は……美空お姉様の旦那様になられたのですよね？」

「そうだよ。といっても祝言はあげてないし、色々と慌ただしくなっちゃったけどね」

「でしたら……美空お姉様の娘の空と名月ちゃんにとって、流牙様は……」

「……あっ!!」

「え?え?何?」

きよんとする流牙に空と名月は同時に口を揃えて言った。

「…………お父様?」

ガーン!!!

流牙にまるでタライを頭に落とされたような強い衝撃が走った。

「え、ええっ?!?」

流牙はこの世界に来てから今までお頭とか旦那様とかお兄ちゃんとかご主人様など様々な呼び方をされて慣れて来た。

しかし、まさかこんな予想外な一撃が来るとは思いもよらなかったので流牙は困惑する。

確かによくよく考えれば空と名月は義理とはいえ美空の娘であり、美空の夫となった流牙は二人にとって父親になるのは必然である。

「あ、あの、やはりお嫌でしたか……?」

「お父様では……馴れ馴れしいですか……?」

空と名月は不安そうな表情で見つめ、流牙は子供達の笑顔を壊したくない気持ちやお父様と呼ばれる言葉に表せない嬉しい気持ちなどが合わさり、微笑みながら答える。

「確かに美空の旦那になったから空ちゃんと名月ちゃんは俺の娘になるね……父親がど

んな感じでいけば良いかわからないけど、良いよ。君達が望むなら今から俺の娘だ」

次の瞬間、空と名月は満面の笑みを浮かべてこう言った。

「はいっ！お父様!!」

ガン!!!

再び流牙に強い衝撃が走った。

こんなにも可愛くて素晴らしい女の子二人にお父様と呼ばれた時に心が暖かくて満たされるようなこの不思議な感覚。

娘を可愛がる全ての父親の気持ちが一瞬にして理解した瞬間だった。

すると、愛菜はこの光景を羨ましそうに見ていると流牙に遠慮しながら話しかけた。

「あ、あの、流牙殿……」

「どうした、愛菜」

「その……流牙殿は、母上をどう思いですか……?」

「秋子さんを? そうだな……美人で大人っぽいと思いきや意外にも可愛いところがあるし、家老でありながら愛菜の良き母親をしていて……これで今まで結婚相手がいないのがとても不思議なんだけど」

「あの……こう言つては何ですが、みんなからババくさいと言われてますが……」

「……もし仮に秋子さんが俺たちの世界の街に出たら男女関係なく視線を集めて絶対男

に声かけられるよ」

美人でスタイル抜群で頭脳明晰と言うハイスペックの割には何故か結婚相手が見つからないかなり不遇な秋子だが、流牙の世界の街に出たら確実に注目を集めるのは間違いない。

もつとも、久遠をはじめとする流牙と関わりのある乙女たちもどれも可愛らしいので間違いない注目されるだろうが。

「そ、そうですか……で、では一つお願いが！」

「お願い？」

「娘の私が言うのも何ですが……母上を嫁にもらってくださいー！どーん!!」

「はあっ!?!」

「じ、実は母上は流牙殿に好意を抱いておるのです！結婚してお嫁さんにしてもらいたいぐらいに!!」

「え？ほ、本当に……?？」

きつかけは流牙が秋子に叱咤し、愛菜を取り戻したところからであり、それ以降流牙に淡い恋心を抱いていた。

その母の恋心を娘の愛菜は既に気づいたのだ。

「ど、どうですか？年は流牙殿よりかなり上ですが、美人でおっぱいも物凄く大きいです

ぞ!!どーん!!」

「いやいや、娘の君がそんな事を言っちゃダメだろ……」

何とかして秋子を流牙の嫁にしてもらいたい愛菜に空が助け舟を出す。

「あの……愛菜。前に結菜さんが言っていたんだけど、流牙様……お父さんと結婚出来る条件は鬼との戦いを決意すれば無条件で結婚できるって」

「おおっ!?空様、本当ですか!」

「うん、だから秋子の意思があればお父様と結婚出来るよ」

「そ、そうですか……これは良い事を聞きました!それでは、流牙殿!否……父上!母上をよろしく頼みますぞー!!」

愛菜は秋子に流牙と結婚出来る事を知らせるために元氣よく、そして風の如く走り去って言った。

ちやつかり流牙の事を父上と呼んでいたのも、空と名月の事が羨ましくなつて流牙に秋子との結婚をお願いしたのだろう。

秋子は流牙に好意を抱いているのは事実なので遅かれ早かれこうなっていたかもしれない。

流牙は空と名月と別れると、唐突に娘が出来た喜びに浸っていた。

「まさか、一気に娘が三人も出来るとはな……」

この世界に来て多くの妻と妹、そして娘……たった一人の家族である母を失った流牙にとつて、大切な絆となった。

この絆を失わないよう、守り抜いていくと改めて心に誓う流牙だった。

その後流牙は美空を探して庭に出たが何処を探してもいないのでザルバに頼んで美空の匂いを探してもらい、到着したのは小さな庵のような場所だった。

「流牙……」

「隣、いいか？」

「ええ」

流牙は美空の隣に座り、様子を伺う。

「大丈夫？」

「大丈夫……じゃないわよ。出家したいぐらいよ」

「そうか……大変だよな、一国の主も」

「一国どころか日の本の棟梁の良人が言っている台詞じゃないわよ、それ。と言っても、流牙は自覚とか無いんだっけ？」

「あはは、そうだね」

みんなが宴に出ているお陰か珍しく二人つきりで過ごせる時間ができた。

流牙は心が沈んでいる美空に優しく話しかける。

「みんな心配していたよ？」

「わかってるわよ。でも、どうしても一人でいたい時つてあるでしょ」

「一人ね……そう言ってもいつも側に仲間の誰かがいたり、何よりザルバがいるからな……」

「……恵まれてるのね」

「そうだな、ありがたいことにね。この世界に来てどうなるか不安だったけど、沢山の奥さんと仲間が出来た」

「本当に運がいいわね……それもあなたの運命かしらね」

「運命か……それは分からないけど、奥さんだけじゃなく、妹と娘も出来た。家族を失った俺には本当に大切な宝だ」

「娘……？」

「空ちゃんと名月ちゃん、そして愛菜ちゃん」

「そっか……空と名月は私の娘だからそうなるわね。でも愛菜は……」

「愛菜ちゃんから聞いたんだけど、秋子さんが俺に好意を抱いているらしくて、鬼と戦う意思があれば妻になれることを伝えに言ったよ」

「なるほどね……秋子、愛菜を助けた時からずっとあなたを見ていたから。相変わらず罪な男ね」

「反論したくても出来ないな……」

「……ね、流牙」

「ん？」

「もう一回、川中島を起こしちやダメ？あなたを光璃に渡すくらいなら、典厩の申し出なんか蹴っ飛ばして、川中島で戦つても良いのよ。柘榴や秋子だつてわかつてくれるはずだし……」

美空は越後の当主としては流牙を武田に渡すべきであると分かっているが、流牙の妻としては渡したくない気持ちが強く、流牙を守るために戦いたいと思っている。

「……美空、君の気持ちは嬉しいよ。だけど、俺のせいで越後の大勢の人が犠牲になるのは嫌だ」

「じゃ、じゃあ……一緒に出家しましょうよ。どこか誰も知らない山の奥に小さなお寺を構えて、私と流牙の二人で……静かに……」

様々な気持ちがある美空の心の中でぐるぐると混ざり合つて美空らしくない弱気な事を言つていく。

しかしそれを流牙が了承するはずがなかった。

「美空……俺の歩むべき道を知ってるよね？」

「……分かつてる、分かつてるけど……だって、他にどうしたらいいか……分からないん

だもの……母様には物心ついた時からお寺に預けられて、姉様が頼りにならないとわかつたら還俗させられて……越後を平和にするためにずっと戦ってきて……」

「美空……」

「お寺に帰りたいつて言う以外に……どうしろつて、言うのよ……」

流牙の瞳には今の美空は越後の当主ではない、一人のか弱い乙女に見えた。

美空が出家したいと言うのはそれ以外に逃げ道が分からない、どうしたらいいのかわからないという意味の表れなのだ。

「美空」

流牙はそんなか弱い美空の両肩を掴むとそのまま強引に抱き寄せて美空の背中に手を回して抱きしめた。

「ひゃっ!?!りゅ、流牙!!」

突然抱き寄せられ、そのまま強く抱きしめられた美空は顔を真っ赤にする。

「……今、俺が美空の想いに応えることは出来ない。だけど、これだけは出来る」

美空の弱っている気持ちを受け止め、優しく包み込む……これが今の流牙にできる事だった。

美空は母親として空や名月を抱きしめることはあつたが、逆にこうして誰かに抱きしめられることは記憶にない。

甘えるように流牙にしがみつぎ、その温もりを肌で感じていく。

そして、流牙は美空との一つの大切な約束を交わす。

「約束する……必ず戻る」

それは必ず美空に再会するという流牙の決意の表れだった。

「本当に……？」

「ああ。時間は少し掛かるかもしれないけど、必ず美空の元へ戻る」

「破つたら……承知しないんだから……」

「分かってるよ。よし……それじゃあ行こうか！」

流牙は美空を抱き上げて立ち上がる。

「い、行ってくつてどこによ!!」

「宴だよ。秋子さんに出るなって言われたけど、しみつたれたことより大騒ぎをしよう

!!」

「宴?!でも私は行かな……きゃあつ?!人の話を聞きなさい!!」

流牙は美空の話を聞かずに庵から連れ出し、そのまま宴の席に突撃した。

秋子は流牙の登場にすぐにでも怒って叩きだそうとしたが、流牙の嫁になれると愛菜と結菜に言われて顔を真っ赤にし、恥ずかしくて何も言えなくなってしまう。

流牙は魔法衣からギターを取り出し、まだ一葉以外には聞かせていない旅立ちと再会

を約束する歌……『風く旅立ちの詩く』を披露した。

必ず美空の……みんなの元へ戻る。

改めてその約束を込めて流牙は心を込めて歌うのだった。

越後での最後の一夜……流牙と美空たちはこの時を忘れないよう大騒ぎをして楽しく過ごすのだった。

☆

越後の隣にある甲斐の国。

そこに物静かな雰囲気をした赤い髪をした少女が小さな神社に訪れていた。

神社の社の中に入り、地下への階段を降りて少し開けた地下室に到着する。

その部屋の奥には大きな岩で作られた扉で閉じられた不思議な空間が広がっていた。

そして、その扉には驚くべき壁画が描かれており、少女はそつと扉に触れながら呟いた。

「もうすぐ……やつと……返せる時が来た……」

その扉には棹立ちで後ろ足で立ち上がる鎧に包まれた馬に跨る、鎧を纏う騎士の姿の壁画が描かれていた。

馬に跨る騎士……その鎧の兜は狼を顔を模しており、腰に三角形の紋章があった。

それは正しくこの世界に現れた希望の光……黄金騎士ガ口の姿だった。

そして、その扉の奥に一つの物が眠っていた。

それは壁画と同じ、鎧に身を包み、真紅の鬘を持つ不思議な馬だった。

しかし、その鎧は漆黒に染まっており、力を無くしているように目を閉じて静かに眠っていた。

いつか現れるであろう『誰か』を待つように。

その時を待つように、静かに、静かに……。

『武』
　　＼ T a k e d a 　　＼
『』

関東最大勢力……北条。

隴は関東に帰ると姉であり、当主である北条氏康と今回の名月の後継者争いの顛末について話していた。

「姉様。この度の仕儀、誠に面目もなく……」

「ああ、別にいいわよ。仕方のないことだし、隴は良くやってくれたと思うわ」

「ですが……」

「良いの良いの。今回のちよつかいは、越後の小娘に、北条を忘れるんじゃないわよ、って思い出させるためのものだったから。北がある程度落ち着いていけば、それで良かったの良かったの……名月も成長出来たようだしね」

「それは……ええ。名月はとても強くなりました。私たちの庇護は要らないのかもしれないかもしれません」

「子が巣立つのって、嬉しい気持ちも強いけど、何だか寂しい気持ちにもなるわね」

「全くです……ただ」

「ただ？」

「名月が成長するきっかけを作った男……道外流牙、あの男の存在が気に入りません」
名月が強い心を持って成長出来たきっかけを作った流牙。

流牙がいたからこそ名月は強い心を持つことが出来たが、空を支えて共に越後を發展していくという結果になってしまった。

「道外流牙……金色の天狼と呼ばれる今話題の天人ちゃんね、あなたの目から見てどんな男の子だった？」

「そうですね……この戦国の世では異端のような男です。女や権力などの欲に溺れず、人を鬼の手から守るためだけに生きている……そんな男です」

「姫乃の話だと、沢山の奥さんを大切にしているけど決して手を出してないのよね。」
それからかなり強かったんだって？」

「ええ。実際に刃を交えていませんが、鬼を相手にまるで修羅か戦神のように戦っていました。それに……黄金の鎧を纏った彼は美空殿の護法五神以上の力を発揮します」

「へえ。誰よりも優しく、そして誰よりも強い男の子。ふふっ、それは一度会って見たいわね」

氏康はこれから流牙を中心に起こる数々の出来事……それを傍観しながらいつか出会う日を楽しみにするのだった。

☆

宴から一夜明け、流牙は上段の間で美空の隣に座っていた。

流牙は遠慮したが美空の夫になったのだから上段の間に座るべきだと秋子たちが推薦する。

そして、いよいよ典厩との対談が始まる。

典厩が上段の間に入り、明るく堂々とした態度で挨拶をする。

「おはようでやがります！昨日のお返事を伝えくさりやがれです！」

典厩の独特な口調に既に疲れる美空。

すると、典厩は美空の隣に座っている流牙を尋ねる。

「して、こちらにいらっしやりやがるのは？」

「ああ。紹介が遅れたけど、私の良人よ。流牙、名乗りなさい」

「道外流牙。美空と夫婦の契りを結んだ者だ。よろしくな」

「はあ……っ!?そんな情報、こちらの草の誰も仕入れてやがりませんぞ……!?一二三も知らぬとは、いつの間に……」

流牙と美空がいつの間にか夫婦の契りを交わしていたことに典厩は酷く困惑して驚いていた。

「あら。天下に知らぬ事なしと言われる武田にも、知らない事があるものなのね」

典厩に一矢報いたとあつて美空はニヤニヤと笑顔を浮かべていた。

「むむむ……ど、道外流牙殿と言えば……金色の天狼と呼ばれやがる、あの道外流牙殿でやがりますよな？」

「一応そう呼ばれているよ。誰が言い出したのか知らないけど」

「光璃がご所望の金色の天狼よ。私の良人でもあるのだから、丁寧に扱いなさい」

典厩は流牙をじっくりと見つめてその風貌や身につけているもので本物だと判断する。

「黒衣に銀の指輪……それにこの気……間違いないでやがりますな……」

「ねえ、武田に行くのは良いんだけど、二つ聞かせて欲しいことがあるんだけど」

「何でやがりますか？」

「一つ、俺をどうしたい？」

「……あなたに姉上から返す物があるのでやがります」

「返す物？」

晴信から流牙に返す物があると言われ、心当たりがない流牙は首を大きく傾げる。

「流牙、あなた光璃に会ったことあるの？」

「無いよ。俺だって武田家の人間に会うのはこの子が初めてで、別に誰かに何かを貸した覚えはないし……ねえ、その返す物って一体何のことだ？」

「これに関してはこの場では言えないのでやがります。ただ、流牙殿にとって非常に重

要なものでやがりますのでそこだけは納得して欲しいでやがります」

「そつか……分かった。もう一つは俺には美空以外に妻がたくさんいるんだけど、甲斐に行く時は同行させて欲しい」

「確かに、離れ離れにというのは、ちょこつとだけ忍びないでやがりますな。ですが、美空様は流石にダメでやがりますよ?」

「分かつてるわよ」

「で、その嫁殿とやらはどちらでやがりますか?」

「ああ。あそこにいるんだけど……」

そう言つて流牙は広間の一角、秋子たち長尾勢と向かい合う位置に座つていた結菜たちを指差す。

「ふむ。で、どちらでやがる?」

「だから、そこ」

「ここにいらつしやるのは分かるでやがります。ですから、ここにいらつしやるあなたが嫁殿でやがりますか」

「全員だけど」

「はああ?!?こんなにいやがるですか!?!」

「そうだな、越後にいるのは」

「これが全部じゃないでやがりますかー!？」

「仕方ないだろ……俺に拒否権なんて無いに等しいんだから……嫁になりたいと言えば無条件でなれるんだから……」

「……流牙は本来、妻は一人だけって考えなのに色々な成り行きで現状がこうなっちゃったのよ。察してあげなさい……」

「あー、なるほど。あの天下御免のお触れ……男としてなら嬉しいが、それが逆に苦しめているんでやがりますね」

典厩は流牙の置かれている立場を様々な情報を基に直ぐに察したのだった。

その後、典厩の妥協による提案で嫁を五人まで甲斐に連れて行くことを許可した。

その内の五人を流牙の考えで選ぶことになり、結菜、詩乃、綾那、歌夜、小波に決定した。

結菜は何が何でも付いて行くと行って聞かなかつたので選ばれ、詩乃は知恵、綾那と歌夜は流牙の護衛、小波は情報収集役として選ばれた。

ちなみに選ばれなかつた一葉は駄々をこねたが、流牙隊を任せられるのは一葉しかないと言われて何とか納得してくれた。

小夜叉は森一家の仕切りと久遠との繋ぎを任せ、鞠は信虎の事もあるので越後に残らせた。

出来ることならみんなを連れて行きたいが、これが最善の選択としてみんなが納得した。

そして、典厩……夕霧と話をつけて共に流牙たちが部屋を出ようとしたその時。

「流牙！」

「美空……」

「その……」

美空は流牙に言いたい言葉がたくさんあったが、上手く言えなかった。

そんな美空に流牙はもう一度約束をする。

「約束する、必ず戻る」

昨夜と同じ約束の言葉。

その言葉を聞いた美空は流牙の妻として旅立つ夫に微笑みながらこの言葉を贈った。

「ええ……行つてらっしゃい」

「行つてくる」

そして……流牙達は越後を後にし、甲斐へ旅立った。

☆

流牙達は越後から馬で甲斐の中心地、甲府に向かった。

途中、綾那と歌夜は夕霧と馬術勝負をしたりしていた。

武田は戦国で一番馬の扱いに優れており、夕霧の馬術は素晴らしいものだった。

小波は流牙達と離れながら忍者らしく隠れて移動していた。

そして、数日かけて到着したのは武田の本拠、躑躅ヶ崎館。

そこで流牙達を出迎えたのはいかにも武人と言った感じの少女だった。

「拙は武田家にて侍大将を務める、馬場美濃守信房。通称は春日と申す。そちらは……道外流牙殿に……織田信長の妻の斎藤帰蝶殿、今孔明の竹中半兵衛殿、三河の本田平八郎殿と、榊原小平太殿にあらせられるな？」

既に流牙達の名前を知っていることから武田の情報網の恐ろしさを目の当たりにした。

「流石は武田……情報網が凄いな」

「この武田に知らぬ事などありはしませぬ。ましてや、こちらからお招きしたお客人のことであればなおさら」

「そうか……早速だけど、ここにいらっしゃるみんなを休ませてもらえないか？俺は大丈夫だけど、みんなをゆっくり休ませたい」

「うむ。己が妻に対する細やかな気遣い、流石は天下御免の女誑しだけある」

「いい加減それは勘弁したいけどね……」

「その事ばかりではないがな。金色の天狼としての鬼狩り、織田足利の同盟のこと、鬼ど

ものこと、金ヶ崎での暴狼の如き暴走、御館の乱の時の美空殿の護法五神と一体化した竜を模した姿、そして……貴殿らの前に現れた謎の少年のこともな」

武田は流牙の活躍だけでなくガロの心滅獣身や護法天竜、更には謎の少年の事も調べていた。

武田の情報網や情報収集力……もはや凄いを通り越して恐ろしいものだった。

流牙達はそんな武田に恐れを抱きながら部屋に案内され、そこで武田信晴と面会する夜まで休むこととなった。

小波も無事に合流し、そこで武田の話がある程度するとみんなに旅の疲れがひとまず夜まで眠りについた。

流牙はいつでも動けるように壁に寄りかかりながら静かに眠りについた。

しばらく休むとザルバから鈴の音が鳴り、流牙は目を覚ましてカバーを開いた。

「ザルバ、どうした？」

『流牙、ここから少し離れたところで鬼の気配がニヶ所を感じた』

「ニヶ所だつて？分かった、すぐ向かう」

しかし、今流牙達は武田の客人とはいえ実質人質のようなもの、勝手に流牙が鬼狩りに向かえば結菜達の身が危ない可能性が出る。

流牙は鬼の魔の手から人を守るために急いで武田と交渉してすぐにも討滅する許

可を貰いに部屋を出た。

部屋を出たのはいいが、躑躅ヶ崎館の屋敷は広く、何処をどう進めば良いのか分からなくなってしまうほどだった。

するとそこに小さな影が近づいた。

「あなた……何をしているの？」

流牙が振り向くとそこには赤い髪をした静かな雰囲気をした鎧を身につけた少女がいた。

少女の紅い瞳が真っ直ぐ流牙に向けられており、流牙も真っ直ぐ少女を見つめて堂々と自分の名を名乗る。

「俺は道外流牙。この国に鬼の気配を察知した。鬼狩りに向かうために武田の人間と交渉しようとしている」

「道外……流牙……」

少女はゆっくりと近づきながら流牙の姿を目に焼き付けるように見開いていた。

「あなたが、黄金騎士ガ口の継承者……」

少女はまるで流牙と出会うことを待ち焦がれたようにザルバがはめられた左手を手に取り、そのままザルバごと流牙の左手を両手で優しく包み込んだ。

「これは黄金騎士の友、ザルバ……やっつと、やっつと……あなたに会えた……」

両手で包み込んだ左手を少女は自分の頬まで持つて行き、その瞳に小さな涙を浮かべていた。

「君は、一体……？」

ここまで自分を待ち焦がれている少女に戸惑いを隠せない流牙だった。

「もつと後に打ち明けるつもりだったけど、ここで会えたのも運命……私は……」
少女はにっこりと優しい笑みを浮かべ、自分が何者なのか打ち明けた。

「私は武田家棟梁、武田晴信……通称は光璃」

それは美空の宿敵にして流牙を甲斐に呼び出した張本人である武田家棟梁、武田晴信だった。

「君が、武田晴信!？」

晴信……光璃の突然の出会い。

流牙は目の前の少女が光璃だとは思っても寄らずに驚いてしまう。

美空が散々悪口を言うほどの策士である少女だとは思えないおっとりとした不思議な雰囲気漂わせていた。

すると、光璃の口からとんでもない言葉が放たれた。

「そう……そして私は、黄金騎士と共に戦う一族……ジンケイの血を引く者」

黄金騎士と共に戦う一族。

それは流牙の体にも流れている亡き母の血筋……黄金騎士を支える魔戒法師の一族『ジンケイ』。

光璃は流牙や天の世界にいる莉杏と同じ、ジンケイの一族の末裔だった。

「俺と同じ、ジンケイの末裔……?」

自分と莉杏の二人だけとなった同じ一族の末裔を目の前にし、言葉を失う流牙だった。

『血　　』
　　Blood　　』

武田晴信……光璃と出会った流牙はジンケイ一族の末裔と聞かされて混乱する中、光璃に連れられて庭の一角に案内された。

そこには夕霧と春日、その他の武田の武将、そして光璃と顔立ちが似た少女がいた。夕霧たちは流牙と光璃と一緒にいることに驚いており、光璃は自分と顔立ちが似た少女を紹介した。

「流牙、あの子は私の妹の武田信廉。通称は薫。戦場で私の影武者をしている……」

「お、お姉ちゃん!？」

「お館様!武田の秘中を何故……!？」

影武者は敵国などには知られてはいけない秘密の存在。

信廉……薫が自分の影武者であることを流牙に教え、武田衆は驚愕している。

「大丈夫……流牙は信頼できる。黄金騎士は……この日の本を救う希望になるから」

「君がどうしてそこまで俺を信頼しているのか、何故ジンケイ一族の末裔なのか、色々聞きたいことは山ほどあるけど……今は鬼を討滅することが先だ。光璃、俺に戦わせてくれ」

流牙の守りし者としての心意気を見せ、光璃は淡く微笑んで頷いた。

「うん……そう言うと思つてた。春日……部屋で休んでいる流牙の妻を呼んで。色々思ふことはあるけど、今は鬼を討滅して民を守ることが先決」

「お館様……はっ！」

家臣として光璃に進言したいことはあつたが、今は一刻も早く鬼を倒すことが先。

春日たちは流牙への不信任を一旦収めて部屋で休んでいる結菜たちを呼んだ。

早速軍議が行われ、鬼は二手に分かれて甲斐の南、駿河方面かは山を越えて来ているらしい。

流牙たちは西にいる鬼を叩くこととなつたが、客人である流牙たちに勝手な真似をされるわけにはいかないと春日は武田で決めた作戦通りに動いてもらおうとしたが……。

「私が一緒に行く。流牙は好きなように動いて……」

武田の棟梁である光璃が流牙に好きに動いても良いと承諾した。

「光璃、良いのか？」

「流牙……黄金騎士としてのあなたの力を見せてもらおう」

「俺をその目で見定めるか。分かつたよ」

光璃の流牙に対するあまりにも甘い対応に春日たちは疑惑や不信任を抱いたが、一刻を争うのですぐに馬に乗って戦場へ向かつた。

早馬が出来ない詩乃と詩乃の護衛として小波が残り、結菜と綾那と歌夜が流牙と共に鬼狩りへ向かった。

そして、しばらく馬を走らせると月明かりの下に蠢く影を見つけた。

「見つけた……結菜、援護を！綾那と歌夜は左右を頼む！」

「ええ！」

「はいです！」

「お任せください！」

「行くぞ!!!」

流牙たちは馬から降りると鬼狩りを始める。

数え切れないほどの数の鬼を倒してきた流牙たちにとって一番下級の鬼は取るに足らない存在で流牙たちは瞬殺して倒して行く。

報告では下級の鬼しかいなかったものでこれでひとまず安心したと思ったが、ザルバから驚くべき警告が言い放たれる。

『流牙！強い邪気だ！しかもこいつはただの鬼じゃない、鬼の子だ！』

「鬼の子だつて!?!」

それは鬼に犯された女が産んでしまった鬼と人のハーフで強大な力を持ち、かつて一度だけ対峙した流牙は桐琴と小夜叉と協力してなんとか退治できた。

それが近くにいと知り、流牙の目は鋭くなる。

「ザルバ！方角は!!」

『このまま進め！恐らく別に動いているお嬢ちゃんたちの近くにいたはずだ!』

「分かった！みんな、ついて来い！」

流牙はザルバの案内で走り出し、結菜たちは馬に跨ってその後を追う。

南方へ進み、山奥に入るとそこに武田の二人の武将がいた。

「あれは……粉雪と心！」

一人は灰色の髪に槍を持つ少女、山形昌景……通称は粉雪。

もう一人は粉雪の相手である内藤昌秀……通称は心。

粉雪は心を守るために一人で鬼子と戦うが、今までの鬼とは比べ物にならないほどの力に追い詰められていた。

流牙は牙狼剣で鏝鳴りを響かせると鞘に仕込められた仕込刃が十字に展開し、高くジャンプして一回転をしながら牙狼剣を横薙ぎで振るう。

「はあっ!!」

二枚の仕込刃が回転しながら飛んで鬼子の顔と胸に突き刺さった。

その強烈な痛みから悲鳴を上げ、鬼子が怯んでいる間に呆然としている粉雪と心を流牙が回収して後ろに下がった。

「大丈夫か!？」

「うわあつ!？お、お前は!？」

「あなたは……!？」

「光璃、この子たちを頼む!」

「うん……粉雪、心、大丈夫?」

「お、お館様!？」

「ど、どうしてここに!？」

粉雪と心を光璃に任せ、流牙は牙狼刀を地面に突き刺す。

鬼子は顔と胸に刺さった仕込刃を取って投げ捨て、ギロリと赤い目で流牙たちを睨みつけて他の者が臨戦態勢を取ると、それを制するように流牙が静かに前に立つ。

「みんな、下がってろ……俺がやる」

流牙は鞆に納めたままの牙狼剣を持ち、力を込めながら体の左側へ垂直に立てる。

鞆から一気に抜いて天高く掲げ、頭上に光の円を描く。

切り裂いた光の輪の中の空間がひび割れ、中から光の塊が流牙の体に装着される。

魔獣を狩り、人々を守る者。

闇夜に輝く金色の光……黄金騎士ガロが降臨する。

黄金騎士ガロの存在は知っていたが、その姿を初めて見る武田衆は目を見開いて驚い

ていた。

「希望の光……黄金騎士ガロ……!!」

特に光璃は目を輝かせて黄金騎士ガロの姿を目に焼き付けるように瞬きせずに見続けた。

流牙は大剣となつた牙狼剣を鞘から抜き、地面に突き刺した牙狼刀を構えて大刀にする。

「はあっ!!」

流牙は地を蹴り、鬼子に向かって走り出した。

鬼子は刀より鋭い爪を振り下ろし、流牙の牙狼剣と牙狼刀の二刀流と火花を散らしながら激しい斬り合いをする。

鬼と人の子である鬼子は数が少ないが、その力はとても強く鬼とは比べものにならないほどのものだ。

それ故に鬼子は無尽蔵の体力を持ち、長期戦は不利で短期決戦が望まれる。

結菜は目を閉じて体からバチバチと稲光を轟かせると、流牙は目を開いた結菜とタイミングを合わせて鬼子から離れた。

「流牙!」

「おう!!」

結菜は一瞬で雷閃胡蝶を作り出してから放ち、軽やかに舞いながら百匹の内の数匹は鬼子の目の前で爆発して目くらましをする。

今は夜中なので強い閃光と爆発は鬼の視界を封じるのに効果的だった。

その間に流牙はガロの鎧から翡翠の魔導火を放出させて烈火炎装を発動し、そこに集まる雷閃胡蝶を鎧に吸収させていく。

魔導火と雷閃胡蝶の融合……流牙と結菜の連携技、雷炎天装を発動させる。

「うおおおおおおおっ!!!」

牙狼剣と牙狼刀を十字に交差させて雷炎の斬撃を放ち、高速に回転する十字の斬撃が鬼子に襲いかかる。

そして、雷炎天装の全ての雷と炎を牙狼剣と牙狼刀の刃に纏わせ、斬撃を喰らって反撃も出来ない鬼子の体に突き立てて内側から焼き尽くす。

雷炎が鬼を灰になるまで焼き尽くし、鬼子が消滅して雷炎が静かに消えると流牙は鎧を解除して魔界に送還する。

流牙は牙狼剣と牙狼刀を鞘に収めて魔法衣に仕舞い、体中に汗を垂らしながらみんなの元へ戻る。

その後、春日たちと合流して躑躅ヶ崎館に戻ると流牙たちは上段の間に案内されてそこで光璃たちと再会し、流牙はザルバのカバーを開いて改めて話し合う。

「それで……光璃、君が俺と同じ一族の末裔……それは本当なのか？」

流牙と光璃が同じ一族の末裔……その言葉に結菜たちだけでなく春日たちも驚いていた。

それも当然である、流牙は天の世界から来たと言われており、武田の棟梁である光璃と同じ一族の末裔とは俄かに信じられない話である。

「うん……」

「何故そう言い切れるんだ？」

「私には先祖の記憶がある……」

「先祖の記憶？」

「そう……この世界に偶然来てしまったジンケイの女魔戒法師……その人の記憶を受け継いでいるの。あと、こう言う力」

光璃は戦で武器の代わりに使う『風林火山』と刻まれた指揮に使う軍配を取り出した。その軍配を少し分解すると、中には先祖が使っていた古い筆……魔戒法師の武器である魔導筆が入っていた。

『魔導筆か。しかも相当古いものだな』

光璃はその魔導筆を持って軽く振るうと筆先から小さな光の玉が出て来て綺麗に弾けた。

「魔導筆に法術……そして、この世界に來た魔戒法師の記憶か……」
「うん。これがその先祖が書いた日記……後で読んで」

光璃はかなり古い日記を流牙に渡すと日記の中にはこの国で使われている文字の漢字や平仮名ではない魔戒騎士と魔戒法師が使う魔戒語で書かれていた。

「じゃあ、夕霧ちゃんと薫ちゃんには？」

「残念ながら、私達には無いんでやがります……」

「お姉ちゃんには記憶と一緒に昔から不思議な力があるけど、私と夕霧ちゃんには使えないの」

光璃には祖先の魔戒法師の記憶と魔戒法師の法術を使えるが、夕霧と薫にはそれがない。
い。

つまり、先祖返りに近い事が光璃には起きており、記憶と法術を受け継いでいるのだ。

「まさか……俺以外の魔戒に関する人間が何百年も前に来ていたなんて……でも、本当にジンケイの血を？」

「疑うのも無理はない……でも、証明出来る方法がある」

光璃は目を閉じて手を胸に置き、大きく息を吸い込んだ。

そして……。

「—————」

光璃の喉から不思議な歌声が静かに響き渡る。

「っ!?その歌は……!?!」

『そいつは波奏が歌っていた女神像の歌だな』

それはジンケイに伝わる古の歌。

ゼドムの力を封じ、陰我を浄化し、ソウルメタルを育てる、ジンケイの女魔戒法師にしか歌えないものだった。

光璃の歌に夕霧や薫たち武田衆は既に何度も聞いているのか目を閉じてうっとりしながら聞いており、初めて聞く結菜たちも目を閉じて静かに聞いていた。

「母さんが歌ってた……古の歌……」

波奏が歌っていた同じ古の歌を耳にした流牙は涙を流しそうになった。

ジンケイの血を引く女魔戒法師にしか歌えない古の歌。

光璃がそれを歌えるということは光璃がジンケイの末裔という証明となった。

古の歌を歌い終わった光璃は首を傾げて可愛らしい反応をしながら流牙に尋ねる。

「これで……証明できた?」

「ああ……それは俺の一族の女魔戒法師にしか歌えない歌だ。光璃は間違いなく俺と同じ一族の末裔だ」

『まさかこの世界でジンケイの末裔がいるとはな、こいつは驚きだぜ』

自分と莉杏の二人だけとなったジンケイ一族の末裔がまだ生き残っていることに流牙は嬉しさがこみ上げて笑みを浮かべた。

するとここで夕霧と薫はあることに気がついた。

「……あれ？姉上が流牙殿と同じ一族の血を継いでいると判明したと言うことは……」
「妹の私達も、流牙さんと同じ一族の末裔だから……遠い親戚ってこと？」

明確な血の繋がりがあるかどうかは分からないが、同じジンケイ一族の末裔と判明したことは遠い親戚といっても過言ではない。

「そうだな……俺たちは同じ一族の末裔、遠い親戚関係と言う訳だな」

「ふむ……では親戚なので他人行儀はやめて、兄上と呼んでもいいでやがりますか？」
「あ、じゃあ私はお兄ちゃんって呼んでいい？」

夕霧と薫から兄と呼ばれて一瞬驚いたが、親戚同士なので流牙は笑顔で頷いた。

「良いよ、呼んでも。あ、そうだ……光璃、夕霧から聞いたけど、俺に返したいものって何だ？その魔導筆……じゃないよな？それは光璃が使っているものだし」

「うん、返したいもの……それはここには無い。少し離れた場所に眠っている」
「眠っている？」

「そう……でも今日はもう遅いから明日の朝に案内する」

「分かった。じゃあ、明日頼むよ」

「うん……おやすみ、流牙」

「ああ、おやすみ」

流牙と光璃は互いに笑みを浮かべ、流牙は結菜達を連れて上段の間を後にした。

流牙は嬉しそうな表情を浮かべながら廊下を歩いており、そんな流牙に結菜は静かに尋ねた。

「嬉しい？ 遠い親戚に出会えて」

「ああ……一族の末裔は俺と莉杏だけだと思っていたからな。この世界で出会えたのは奇跡だと思うよ」

流牙の手には光璃から預かった日記があった。

数百年前に光璃の先祖の魔戒法師に何が起きたのか、それがここに全て書かれており、部屋に戻ったらゆっくり読むつもりである。

慌ただしい一日であったが流牙にとって大切な出会いの日となった。

☆

異なる世界同士にある時と空間の狭間。

その狭間を一つの闇が彷徨っていた。

『グッ……グオオ……』

その闇は大きな角を持つ怪物だが、大きな深傷を負い、胴体がなく首だけの存在と

なっていた。

大半の力を失い、全く動けない状態で漂っていた。

『お、のれ……黄金、騎士、め……』

闇は黄金騎士を怨んでおり、憎しみの念を放ち続けていた。

すると、そこに闇とは異なる邪悪なる存在の無数の欠片が集まっていた。

そして、闇はその邪悪なる無数の欠片を吸収して取り込み、その体を再生していく。

屈強な肉体に鋭い爪や角が生え、その手には巨大で邪な形をした邪悪な剣が生まれていた。

そして、闇の視線の先には暗闇に染まりつつある世界を照らす一筋の金色の輝きがあった。

『居る……あの世界に、黄金騎士が……』

闇は背中に大きな翼を生えさせて、その光がある世界に向かって飛んだ。

『待っている、黄金騎士！今度こそ滅ぼしてくれる!!』

復活した大いなる闇が黄金騎士を……流牙を狙うのだった。

『怨
～Z A J I～』

流牙は光璃から預かった日記を読んでいた。

他の人が読んだら魔戒語で書かれた日記はチンプンカンブンだったが、流牙は魔戒語は魔戒騎士の必須事項でもあるので幼き日から勉強していたため、問題なく読める。

日記を書いたのは光璃達の祖先でジンケイの女魔戒法師、名は『光瑠（ひかる）』。

偶然か必然か、光璃とは一文字違いで名前の雰囲気も似ていた。

その光璃は流牙の先代に当たる黄金騎士の仲間で有能な魔戒法師だった。

しかし、ホラーとの大きな戦いで時空に大きな歪みが出来てその歪みの中に呑み込まれてしまい、この世界に迷い込んでしまった。

その直後に黄金騎士の『力の一端』も時空の歪みに呑み込まれてこの世界に落ちてしまった。

その『力』は光と主を失ってしまい、深き眠りについた。

そして、光璃はその地に住んでいた神社の神主と結婚し、『力』をこの土地を守る守り神として崇め、死ぬ最期の時まで守ってきたのだった。

「黄金騎士の力の一端か……多分、ガロが金色と主を失う前の出来事だと思っけど、鎧の

金色の輝きは母さんが命を懸けて取り戻してくれたし、何だろう……？」

『その守り神と言うのが気になるな。その魔戒法師が最後まで守り続けてきたものだから重要なものだと思うが』

「それが何なのか今は分からないけど、光璃とその子孫……光璃達が守ってきたものなんだ。ちゃんと受け取ろう」

この世界に来たのは偶然ではない……そう改めて感じた流牙は日記を閉じて床に就いた。

☆

翌日、朝食を取った後に流牙たちは光璃に連れられて躑躅ヶ崎館を後にした。

光璃だけでなく夕霧と薫、春日たち武田四天王も一緒だった。

どこに連れて行かれるのだろうかと考えているとやがて綺麗に整えられた石畳を歩いていた。

そして、大きな赤い鳥居が見えて来て額東にその神社の名前が書かれていた。

「天馬、神社……？」

武田らしい馬の神を祀る社に案内され、鳥居を潜った流牙たちは綺麗に整備された神社の境内を眺めながら社へ向かう。

所々に馬の石像などの置物が置いてあり、見事なものだなと感心していると見事な社

へと到着した。

そのまま社の中へ入るとそこには薄暗い地下への階段があった。

「これって、地下への階段？」

「うん、暗いから気をつけて……」

光璃の後をついていき、社の地下への階段を降りていく。

地下の開けた部屋に到着すると、春日たちが火打ち石を使って部屋の隅に置かれた燭台に火をつけて地下を明るくした。

そして、部屋が明るくなると奥にある大きな岩に刻まれた壁画を見た瞬間、流牙は目を見開いて驚愕した。

「あれは……ガロ!?!」

その岩には黄金騎士ガロの姿が刻まれており、更にもう一つ……ガロの側に別のものが刻まれていた。

それは黄金騎士が跨っている棹立ちで後ろ足で立ち上がる鎧に包まれた馬の壁画だった。

「ガロが馬に跨ってる……でも、普通の馬とは違うわね……」

壁画に描かれているガロは流牙のとは細部が異なるが、それは浄化されて翔へと形を変える前の姿であるが、跨っている馬は普通の馬とは異なる姿が描かれていた。

その壁画の馬を見た瞬間、流牙は全てを察して震える声で光璃に尋ねる。

「まさか……光璃が返したい力って……!?!」

「そう……それは魔戒騎士の大きいなる力」

光璃は目を閉じながらその岩に触れ、その奥に眠る物の正体を語り始める。

「主を背に乗せ、天を、地を、海を……そして戦場を風の如く駆け抜け、その力を蓄えた蹄の清き音色は騎士の剣に力を与える」

それは黄金騎士が失った力の一端。

黄金騎士の継承者である流牙が取り戻すべきものだった。

そして、光璃はその力の名を高らかに宣言した。

「黄金騎士と共に魔獣と戦って来た光り輝く天馬……その名は『魔導馬・轟天』!!!」

魔導馬。

それは魔戒騎士がホラーを百体討滅し、浄化した際に鎧に込められた英霊から与えられる『内なる影』との試練をクリアした騎士にその力を受け継ぐ資格を得る。

しかし、全ての魔戒騎士が魔導馬を召喚する資格を得るわけではない。

魔導馬を召喚できる魔戒騎士はほんの一握りの存在だけで、ホラーを百体倒せる魔戒騎士はその時代毎に数人程度しかない。

そして……轟天。

轟天は黄金騎士ガロの魔導馬でその鎧はガロと同じく金色に輝いており、美しい赤い鬣を靡かせ、蹄の音色は牙狼剣に凄まじい力を与える。

流牙は黄金騎士の鎧を継承してから年単位で流浪の旅を続け、ホラーを狩り続けて来た。

時には強敵である上級ホラーや異端のホラー、時には伝説のホラーを相手にして討滅をしてきた。

仲間の力で討滅したこともあるが、それでも既に流牙はホラーを百体は討滅しているはずだが、内なる影との試練が起きる気配がなかった。

闇の力で空を飛ぶことができるのであまり気にも留めなかったか、何故ここに轟天が

いるのか急に不思議に思い始める。

「ザルバ、何か知ってるのか？」

『悪いな、流牙。俺は一度壊れて前のガロとの記憶が無いんだ』

ザルバたち魔導輪は人間に対し友好であるホラー達が自らの肉体を魔界に残し、魂を現世での器であるソウルメタル製のアクセサリに移して完成し、契約者である魔戒騎士と意思疎通が出来る。

しかし、器である魔導輪が壊れるとその時までの培った記憶が全て失われてしまう。

ザルバは流牙である先代の黄金騎士との記憶が無く、轟天の存在も忘れてしまったのだ。

「だけど……轟天は力を失っている」

「力を……失っている!？」

「この目で実際には見てないけど、轟天は黄金騎士と同じ金色の輝きを失っている……」

「なっ……!？」

『そう言うことか……』

流牙とザルバは言葉を失い、全てを悟った。

流牙が生まれる遙か前、ガロは轟天と共に大きな戦いで人々を守るために金色の輝きを放って戦いを終わらせた。

しかし、その代償にガ口の金色が失われ、それと同時に共に戦った轟天も金色を解き放って力を失ってしまった。

そして、この世界に迷い込んでしまい、力を失ったまま眠りについてしまったのだ。新たな主……ガ口の継承者が現れるまで。

「流牙……この扉を壊して。その中に轟天がいる……黄金騎士に轟天を返すのが先祖……光瑠の願いだから」

光瑠から脈々と受け継がれてきた意思。

そして、光瑠の記憶を受け継いでいる光瑠はこの世界に流牙が現れてからずっとこの時を待っていた。

「分かった……見ていてくれ、光瑠。今こそ……光瑠の想いをここで繋ぐー！」

流牙は扉の前へ静かに向かいながら魔法衣から牙狼剣を取り出す。

目を細めて見ると岩には法術による結界が張られているとすぐに分かり、その奥には轟天の主を呼ぶ声が微かに聞こえてくる。

「待つてろ……今すぐにお前の元へ行く」

ゆつくりと牙狼剣を鞘から抜き頭上に円を描いてガ口の鎧を召喚する。

流牙の落ち着いた心に反応したガ口の鎧は静かに装着される。

牙狼剣が大剣になると同時に地を蹴って跳び、扉に斬りかかるが結界に弾き返され

た。

数百年前に施された結界とは思えない強度に内心驚きながら流牙は何度も何度も斬りかかる。

更に闇の力を纏い、翔から闇へと姿を変えて光と闇の輝きを牙狼剣に纏わせて振り下ろし、結界を大きく揺らがせる。

「はあっ……はっ!!」

そこから渾身の突きで牙狼剣を岩に突き刺すことが出来たが、ヒビが入っても結界と岩が割れることはなかった。

流牙はあえて牙狼剣を抜かずにそのままにし、岩から離れて地面に着地する。

「うおおおおおおっ!!!」

流牙は闇を解いて翔に戻ると気合の咆哮と共に烈火炎装を発動してその身に魔導火を纏う。

そして、全ての力を右拳に込め、再び飛んで牙狼剣の柄に全身全霊をかけた拳を叩き込んだ。

牙狼剣が更に岩に押し込まれ、ヒビが全体に広がって行く。

そこに烈火炎装の魔導火が鎧から牙狼剣の刃に纏われ、そして岩に広がったヒビへと伝わった。

牙狼剣と魔導火が遂に結界と岩を打ち砕き、数百年間も封印されていた扉を開いた。牙狼剣は流牙の手元に戻り、地面に降り立つと同時に鎧を解除した。

そして、打ち砕いた扉の奥……そこに一つの影があった。

しめ縄で体を縛られ、無数のお札で封印が施されている漆黒の馬が眠っていた。

「あれが……轟天……」

光璃は目を輝かして漆黒の馬……轟天を見つめ、結菜たちは驚愕で目を丸くしていた。

流牙は漆黒の轟天を見て悲しそうな表情を浮かべる。

轟天もかつてのガ口と同じく金色を解き放って今の姿となってしまうた。

今までずっとガ口を……流牙を待ち続けてくれた。

「すまなかつた……長い間、待たせてしまって……」

流牙は涙を堪えながら轟天に手を伸ばした。

その時だった。

『遂に……見つけたぞ!!黄金騎士!!!』

悍ましい声と共に世界が白黒へと変化した。

「何だ!?!」

周りを見渡すと結菜や光璃たち、そして燭台の火が動かずに止まってしまっていた。信じられないことに流牙とザルバ以外の全ての時が止まっていた。

『時間が止まってる……流牙!・ホラーの気配だ!』

「何!?!」

ホラーが存在しないはずのこの世界にホラーの気配が現れ、流牙は牙狼剣を抜いて構える。

すると、轟天の前に邪悪な闇の気が集まって人型へと形を変えた。

それは身体中に刃のような突起が出た流牙にとって見慣れた邪悪な存在……ホラーだった。

「貴様は何者だ!？」

『俺の名はザジ……黄金騎士に討滅されたホラーの怨念によって生まれた存在だ!』

「ザジ、だど!？」

流牙はそのホラーの名を聞いて耳を疑った。

ザジとは黄金騎士に倒された数々のホラーの怨念が集まり生まれた、ホラーであつてホラーでない時空を越えて存在する邪悪な思念である。

話には聞いたことがあるが、まさか本当に自分の目の前に現れるとは思わなかった。

『まさか一度系譜を失った黄金騎士が新たな主を得るとは……ならば、貴様を殺して系譜を途絶えた証を手に入れる!!』

ザジは流牙が一度主を失ったガ口の継承者だとすぐに気付き、再び系譜を途絶えさせるために流牙に戦いを挑む。

「大切な人たちの想いを背負ったこの身と、母さんが命をかけて育てた黄金の輝きを貴様に奪わせたりはしない!!」

『……いつとそこにいる人間たちを殺されなくなったら、俺と戦え!黄金騎士よ!!』

ザジは時空を越えた存在故、時を操る能力を持っている。

流牙は今、力を失った轟天と結菜たちを人質に取られている状態だった。

そして、ザジが腕を振り上げると流牙のいた地下室から世界を変えて薄気味悪い森が広がる異空間へと移動された。

『さあ行くぞ！黄金騎士ガロよ！貴様の命を奪い、勝利をこの手に収めてやる！』

ザジは右手から巨大な鋭い爪が生え、左手には自分の体の一部から作られた禍々しい形をした大剣を構える。

「貴様の陰我……この俺が斬り裂く!!」

流牙は左手の手甲に刃をこすり合わせるように牙狼剣を構える。

黄金騎士ガロと時空ホラー・ザジとの時空を越えた戦いが幕を開けた。

『闘 ～Fight～』

時間が止まった世界の中で人質となった結菜たちと力を失った轟天を守るために流牙は黄金騎士に倒されたホラーの怨念が集まった時空ホラー・ザジと対決する。

流牙は最初から全力で動き、剣術と体術を駆使してザジを攻撃する。

攻撃しながらザジの最大の武器である爪と剣を特に注意し牙狼剣で防ぎ、捌いていくが爪と剣の二つの武器を相手に牙狼剣一つでは分が悪く逆に流牙が攻められていく。

ホラーの怨念が集まって生まれたザジの力は並みのホラーを遥かに超える強さを持つていた。

このままではジリ貧でやられてしまう、そう感じた流牙は自分だけが持つ『力』を駆使する。

「来い!!」

流牙は魔法衣の端を翻すと牙狼刀が現れた。

柄を持つて勢いよく鞘から刃を引き抜き、鞘はそのまま魔法衣の中へ戻り、牙狼刀を振り下ろしてザジに斬りかかる。

ザジは慌てて牙狼刀を爪で受け止め、目の前に迫る牙狼剣と牙狼刀の二つの刃に目を

見開いて驚愕した。

『何!?黄金騎士が剣と刀の二刀流だど!?』

黄金騎士ガ口の武器は牙狼剣……それは絶対に変わらないことだ。

流牙のは牙狼・翔へと形を変えた事で牙狼剣が前の物よりも一回り大きくなっていたが、それでも古から受け継がれてきた牙狼剣と言うことには変わらない。

しかし、牙狼刀と言う鬼を討滅するだけではない魔戒の力を持つ刀を操ることにザジは驚きを隠せなかった。

今まで戦ってきた黄金騎士は皆、牙狼剣主体の戦いをしていた。

その中には拳や蹴りなどの体術を加えた者や牙狼剣を納める赤い鞘を使った二刀流を扱う者もいた。

しかし流牙は今まで戦ってきたどのガ口の継承者とは異なる力を持っており、その事にザジは恐怖を覚えるがそれと同時に心が湧き上がるような興奮が体を走る。

『面白い!それでこそ、殺しがいがあると云うものだ!!』

大笑いしながらザジは大剣と爪を激しく振るい、流牙も牙狼剣と牙狼刀で受け止めていく。

流牙は敢えて受け止めることに専念し、反撃の時を静かに待っていた。

激しい動きの中に必ず隙が生まれる……ザジの爪を牙狼剣で受け止めるとすぐに手

の甲を牙狼刀で突き刺した。

『グオオッ!?!』

ザジは激痛に耐えながら大剣を振り下ろすと流牙は牙狼刀から手を離して魔法衣から牙狼剣の鞘を取り出した。

牙狼剣を鞘に納めると仕込刃が十字に展開し、鞘に納めたまま大剣を受け止めるとその衝撃で仕込刃が発射された。

鞘から発射された仕込刃はザジの顔に突き刺さった。

『グオオオオッ!?!』

思わぬ反撃にザジは絶叫すると、流牙は回し蹴りを食らわせてザジを蹴り飛ばし、手の甲に刺した牙狼刀を抜いた。

そして、一気に牙狼剣と牙狼刀で怒涛の剣戟をザジに喰らわせる。

「うおおおおおっ!!!」

二つの白銀の刃が煌めき、ザジの体を次々と切り裂いていく。

戦国の世で数多の鬼を切り裂いてきた天狼の刃が怨霊を滅多斬りにする。

そして、滅多斬りにされたザジの体は力を失って消滅するが、まだ気配が完全に消えていなかった。

「……ザジ！まだ続ける気か！」

『当たり前だろう……!!』

ザジの声が響くと森の異空間が今度は無数の星々が煌めく夜に廃墟が宙に漂う不思議な世界へと移動させられた。

『今までは貴様自身の力を見せてもらった。次は黄金騎士としての力を見せてもらおうぞ!!』

再び現れたザジはその体を一回りも巨大化させてその力を何倍にも増幅された『超ザジ』へと姿を変えた。

『さあ、黄金の鎧を纏え!この空間は貴様の鎧の時は存在しない!そして、今度こそガロの系譜を永遠に消し去ってやる!!』

魔戒騎士の鎧は99・9秒の時間制限があるが、魔界や異空間ではその制限が一切無くなり、心滅獣身の心配がなくなる。

「そうはさせない……俺は誓ったんだ。この想いを、ガロの輝きを未来へと繋いでいくと!必ず貴様を倒し、みんなの元へ戻る!!」

流牙は牙狼剣を掲げ、円を描いてガロの鎧を魔界から召喚して一瞬で装着し、大剣と大刀となった牙狼剣と牙狼刀でザジに斬りかかる。

巨大化したザジの剣のような爪が牙狼剣と牙狼刀とぶつかり合い、激しい火花が散る。

すると、牙狼剣と爪が激突した瞬間、ザジの胸から腕が現れて流牙の首を掴んだ。

「ぐあつ!!」

『ウラアツ!!』

ザジは流牙の首を抑えながら巨大な足で踵落しを喰らわせて思いつき蹴り落とした。

「があつ!!」

そのまま廃墟を破壊するほどの勢いで叩き落とされ、流牙は異空間の真下……底が見えない奈落へと落ちて行つた。

ザジは飛ぶ術がないガロ……流牙にトドメを刺そうと急降下をしながら爪を前に突き出す。

しかし、ザジは知らなかった。

流牙だけのガロの力……心の闇を受け入れた漆黒の輝きを。

「はあつ……ふつ!!」

牙狼剣から闇の力が溢れ出し、金色の鎧が漆黒に染まり、背中に漆黒の翼が現れた。

『な、何いつ!!』

そして、流牙は急降下するザジを通り越して空高く舞い上がり、蝙蝠のような漆黒の翼を大きく広げた。

鎧が牙狼・闇へと姿を変えたことにザジは口を開けて呆然とした。

『お、黄金騎士が……ガロが、漆黒の闇を纏っただと……!?!』

今まで戦って来た全てのガロは皆、同じ黄金の輝きを秘めていた。

しかし、黄金騎士が漆黒の闇を纏うその姿に今までのガロとは違いすぎることにザジは再び混乱するのだった。

「これが俺の大切な人の想いの力で手に入れた、俺だけのガロの力だ!」

流牙は黄金の光と漆黒の闇を持って邪悪なる怨念を討つ為に空を駆け抜ける。

ザジも翼を背中から生えさせて流牙の後を追いかけ、今度は亜空間の夜空を高速に翔ける激しい空中戦となった。

幾つものの刃が激突し、互いに強く弾き返し、ザジは体に力を込めると翼から無数の短剣を作り出して一斉に発射した。

無数の短剣は流牙の周りを取り囲み、串刺しにするように弾丸のように飛んだ。

「はあああああつ!!」

全ての短剣を牙狼剣と牙狼刀で斬り落とし、鎧を闇から翔へと戻して急降下しながらザジの間合いに入る。

間合いに入って来た流牙を追い払おうと、爪を振りかざしたザジに対し、流牙は体を横に回転させながら牙狼剣と牙狼刀で斬りはらい、遂にザジの両腕を斬り落とした。

『ぐあっ!!ば、馬鹿な!!』

「はっ!!!」

ザンツ!!!

そして、ザジの胸に牙狼剣と牙狼刀を深く突き刺した。

『グゴツ!!』

「ザジ……これで、終わりだあっ!!!」

牙狼剣と牙狼刀を持つ両手から両腕に全ての力を込めて左右に斬り開き、ザジの胴体を真つ二つに切り裂いた。

胴体を真つ二つに切り裂かれたザジの下半身は消滅し、残った顔などの上半身も少しずつ砂のように消滅しながら流牙を睨みつける。

『これで、終わりではない……俺はまたいつか必ず蘇る……そして、何度もその称号を継ぐ者たちを呪い、襲うだろう。その称号がある限り、お前たちは永遠にその命を狙われ続けるのだ!!』

ザジは消滅しても倒されたホラーの怨念が募り、必ず蘇って再びガロの継承者に襲いかかる。

それは黄金騎士の切っても切れない宿命の呪いとも言えるものだった。

「例え何度お前が時空を超え、戦いを挑もうとも過去から現在、そして未来へ紡がれる想

いの力がある限り、俺は……否、『我ら』は絶対に負けない!!」
『な、何……!?』

流牙は守りし者として、その称号を継ぐ継承者として過去から受け継いだ『その名』を叫ぶ。

「我が名は牙狼!!黄金騎士だ!!!」

黄金騎士として威風堂々と名乗る流牙にザジは怨みを込めながら叫んだ。

『おのれええええええーっ!!!』

そして、ザジの体が爆発し、遂に黄金騎士に倒されたホラーの怨念から生まれた魔獣を討滅した。

流牙は討滅したザジに背を向け、ガ口の鎧を魔界に送還しようとした……その時だった。

『っ!?流牙!まだ終わってないぞ!』

「何!?!」

ザルバの警告で急いで振り返ると討滅し、宙に舞うザジの粒子が集まり、ボコボコと不気味に混ざり合っていく。

「何だ!?!何が起きているんだ!?!」

『流牙!ザジは鬼の力を吸収していたみたいだ!』

「鬼の力!?!」

『だが、ホラーと鬼の力が奴の中で混ざり合い、ザジと言う支配者がいなくなったことで新たな存在が生まれようとしている!!』

ザジの粒子が集まり、形を成して現れたのは翼を持った素体のホラーの体に巨大な爪と角を持った魔獣が現れた。

「ホラー……!?!いや、鬼なのか……!?!」

『あれは……ホラーと鬼のハーフみたいな存在だ!ホラーの怨念から生まれたザジが鬼の力を取り込んだ事で偶発的に生まれたんだ!』

集まった粒子から次々と生まれるホラーと鬼のハーフ……『ホラー鬼』

ホラー鬼は狙いを定めると翼を羽ばたかせて一斉に流牙に襲いかかる。

『『ゴオオオオオオッ!!』』

「ぐっ!!?があっ!!?」

流牙は攻撃を受けながら牙狼剣と牙狼刀を振るうが、ホラーや鬼が持つスピードやパワーを兼ね備えた最悪な存在に追い詰められていく。

それが次々と生まれて行き、鎧にダメージを与えて行き、九頭竜川の時の鬼と同じように大量のホラー鬼に押しつぶされそうになっていく。

亜空間による鎧の時間制限がなくなり、心滅獣身になる心配がなくなったが、それでも絶体絶命の危機には変わりなかった。

邪悪なる力に流牙が命が奪われそうになったその時だった。

『ヒヒーン!!』

馬の高い声と共に空の果てから一つの金色に輝く流星が飛来し、流牙を囲むホラー鬼に突撃し、全てのホラー鬼を吹き飛ばした。

ホラー鬼に押しつぶされそうになり、横たわる流牙の前に現れたのは一人の騎士だった。

「黄金騎士……!?!」

流牙の目に映ったのは金色の輝きを放つ魔導馬に跨る黄金騎士。

黄金騎士は流牙を見下ろしながら鎧の中で静かに口を開いた。

「……無事のようにだな」

騎士は流牙に素っ気なくそう言った。

それは……流牙の橙色の瞳とは異なる、翡翠の瞳を持つ黄金騎士ガロだった。時空を超えた奇跡……二人の黄金騎士が会おうのだった。

『鋼』
K o u g a

ザジを撃破した流牙だったが、ザジが取り込んだ鬼の邪気が暴走し、ホラーと鬼のハーフであるホラー鬼が誕生してしまい、流牙は絶体絶命の危機に陥った。

そこに颯爽と現れたのは壁画と同じ金色の鎧の騎士と金色の馬……正しくそれは黄金騎士ガロと魔導馬轟天だった。

「ガロと、轟天!？」

流牙は今までで一番の驚きで目を疑った。

そのガロは翔になる前の鎧の形で瞳の色が橙色ではなく、詩乃と同じ翡翠の瞳をしていた。

ガロは轟天に乗ったまま見下ろしながら流牙に話しかけた。

「立てるか？」

「はい……」

流牙は立ち上がり、ガロと向かい合った。

何とも不思議な光景だった。

自分もガロの鎧を身に纏いながら翔以前の昔の形をしたガロの鎧を纏った者と向か

い合う事に流牙は奇妙な感覚を覚えた。

「形は少し異なるが、それはガ口の鎧か？」

翡翠の目を持つガ口は流牙の纏う鎧を見ながら静かにそう尋ねた。

「は、い、い」

流牙は緊張しながら声を出して返事をした。

鎧越しの声しか分からなかったが、その佇まいはとも落ち着いており、自分よりも遙かに上の死地を潜り抜け、卓越した騎士であると瞬時に理解した。

「……まだ戦えるか？」

「当然です……ふっ！」

流牙は牙狼剣と牙狼刀を拾い、牙狼剣を掲げると再び闇の力を纏って牙狼・闇となり、漆黒の翼を広げ、その姿に翡翠のガ口は目を疑った。

「ガ口の金色の鎧が漆黒の闇を纏った……!? お前、まさか暗黒騎士なのか!？」

魔戒騎士の禁忌……心滅獣身のその先の禁断の境地、闇に堕ちた最凶最悪の騎士。

それが暗黒騎士。

闇の力を扱う流牙に翡翠のガ口は暗黒騎士なのかと勘違いをするが流牙は首を左右に振って否定する。

「違います……この力は俺を想う大切な人と、俺自身の心の闇を受け入れたことで手に入

れた光と共にある闇の力です!!」

流牙の強い意志を持つ声に翡翠のガ口はジツと流牙を見つめた。

流牙のガ口の鎧は確かに漆黒の闇を纏っていたが、その奥底から眩き金色に輝く光が秘められていた。

「なるほど……確かにお前から強い光を感じる。まさか対を成す光と闇を備え持ち、尚且つ二刀流のガ口がいるとはな。お前には俺にはない力を持っているようだな」

翡翠のガ口は流牙の事を認めると、その直後にホラー鬼達が次々と増殖していき、亜空間の星空を覆い尽くすまでの数となっていく。

「無限に増え続けている……一匹でも倒し損ねたらまた増えるな。お前、烈火炎装は使えるか?」

「もちろんです!」

流牙は牙狼剣と牙狼刀を交差させて火花を散らせるとその身に翡翠の魔導火を纏って烈火炎装を発動させる。

「ふっ……」

翡翠のガ口は何かを思い出したかのように小さく吹き出した。

「あの、何か……?」

「……昔、お前と同じ二刀流の魔戒騎士とこうして烈火炎装を纏いながらホラーの大群

と戦ったことを思い出しただけだ」

翡翠のガロも流牙と同じ色の魔導火を纏って烈火炎装を発動させる。

同じだが異なる金色の輝きを持つ二人の黄金騎士ガロ……闇を照らすその輝きを恐れたホラー鬼たちは一斉に襲い掛かる。

「ハアッ!!!」

「フッ!!!」

翡翠のガロが先陣を切って轟天を走らせ、その後を流牙が漆黒の翼を羽ばたかせて続く。

烈火炎装を発動しているガロの鎧はその魔導火に触れるだけで並みのホラーは問答無用に焼き尽くされて消滅する。

それに加えて同じソウルメタルで構成された体を持つ轟天の体にも魔導火が灯され、止まることのないその脚で天を駆け抜け、主であるガロと共に突撃してホラー鬼を焼き尽くしていく。

流牙は空を自由自在に駆け巡りながら牙狼剣と牙狼刀を振るい、轟天と共に駆ける翡翠のガロと同等の戦いを見せた。

二人の黄金騎士が天を風の如く駆け抜け、闇を焼き尽くすその姿はさながら亜空間の夜空を彩る二つの流れ星だった。

わずか数分で数百……否、千体近くのホラー鬼を討滅し、最後の一体を二人同時に斬り裂くと怨霊の最後の悪あがきが起きた。

微かに残ったホラー鬼の邪気が一つに集まり、そこにザジの意識が再び目覚めた。

『おのれえ……黄金騎士めえええええ……っ!!』

ザジの最後の怨念……余りにも儂い怨念が二人の黄金騎士に襲い掛かる。

『ヒヒイイイーン!!』

轟天の高い叫び声と共に後ろ足で立ち上がり、前足で地面を思いつきり叩きつけ、聖なる蹄音を響かせた。

キーン!!

轟天から放たれた衝撃波が周囲に響かせると、二つの牙狼剣に大きな変化が起きた。

牙狼剣の刃が何倍にも巨大な両刃となり、大型のホラーも一撃で葬れるガ口の必殺剣の一つ……『牙狼斬馬剣』へと姿を変えた。

轟天の蹄の音は牙狼剣を構成するソウルメタルに大きな変化を与えることができる。

流牙は自分の牙狼剣も変化した事に驚きながら残り全ての魔導火を牙狼斬馬剣に纏わせ、翡翠のガロも同じように牙狼斬馬剣に魔導火を纏わせる。

そして、向かってくるザジの怨念に二人は牙狼斬馬剣を振り上げる。

「うおおおおおおおっ!!」

魔導火を纏わせた牙狼斬馬剣で同時にザジの怨念を叩き斬り、今度こそ塵一つ残さずに消し去った。

ザジとホラー鬼を残らず全て討滅し、今度こそ戦いが終わるとザジが作り出した亜空間が消え、代わりに真っ白な亜空間へと変わった。

流石に濃厚な戦いを続けた流牙は疲れが出て鎧を魔界に送還した。

そして……翡翠のガロは轟天を魔界に送還してから地に降り、元の大きさに戻った牙狼剣を鞘に収めた。

「これでもう大丈夫だな」

翡翠のガロも流牙と同じように解除して魔界に送還した。

鎧を解除したガロの装着者……それは純白の魔法衣に漆黒の軽装の鎧に身を包んだ茶髪の男だった。

黒のイメージがある流牙とは対照的にその男は白のイメージが強かった。

男の左手中指には流牙の持つカバーが付いたザルバとは異なる前の姿のザルバがはめられており、静かに流牙に近づいた。

流牙はその男に対して姿勢を正し、頭を深く下げた。

「助けてくれて、ありがとうございます」

この男には敬意を表して礼を言わなければならないと流牙は誠心誠意を込めて礼を

言う。

「礼には及ばない。それよりも、お前もガ口の称号を継ぐ者か？」

「はい！俺は道外流牙！黄金騎士ガ口の称号を受け継ぐ者です!!」

「道外、流牙……なるほど、あの子の言っていたガ口はお前のことか……」

男は何かを知っていたようであるほどと言った風に小さく頷いた。

「え？」

「いや、何でもない。今度は俺が名乗る番だな」

鋼牙は無愛想な表情から小さく笑みを浮かべて名を名乗る。

「俺の名は冴島鋼牙だ」

流牙とは異なる世界の黄金騎士ガロの継承者……冴島鋼牙。

鋼牙は流牙よりも魔戒騎士として、黄金騎士として格上であり、先輩として流牙と話す。

「お前はザジに連れ去られてこの世界に来たな？だとしたらもうすぐ元の世界に帰れるだろう」

「そうですね……でも、あなたは どうしてこの世界に？」

「俺はある目的のために時空をさ迷っていた。少し前に倒したはずのザジの気配を感じて轟天でここに来たんだ」

「そうでしたか……あの、ある目的とはもしかして、あなたの大切な人を探して？」

鋼牙の憂いの表情に流牙は大切な誰かを探しているような気がした。

「分かるのか……？」

「何となくですが、例えば……あなたの奥さんとか？」

既にたくさんさんの妻を持つ流牙は鋼牙の時空をさ迷う理由を推測すると、鋼牙は静かに

頷いた。

「……そうだ、俺の愛する女だ。亜空間の歪みに飲み込まれて今もさ迷っている」

「亜空間の歪みに!?!大丈夫なんですか!?!」

「心配ない、あいつは強い女だ。息子の為にも必ず連れ戻す」

必ず妻を連れ戻し、愛する息子の元へ戻る。

それは一人の男として、夫として、父として、鋼牙の瞳には強い決意が込められていた。

「鋼牙さん……」

「そろそろ時間か……」

鋼牙の体が徐々に薄くなり、この亜空間にいらなくなっていた。

すぐに次の亜空間へ移動しなければならなくなり、鋼牙は流牙に背を向けてゆっくりと歩き出す。

そして、最後に流牙に顔を向けて言葉を送る。

「流牙、俺は自分の旅を続ける。お前は自分の守りし者としての信じる道を突き進め」

「はい……!!!」

流牙は強く頷いて頭を深く下げ、鋼牙は再び歩き出して光の中へと旅立つて行った。

そして、鋼牙を見送った流牙の体も徐々に薄くなり、亜空間から消えた。

(もつと強くなろう……黄金騎士として、守りし者として、鋼牙さんのように……)

異世界の黄金騎士ガ口の継承者、冴島鋼牙との出会いは同じ黄金騎士として流牙はもつと強くなることを心に誓った。

☆

流牙は元の異世界に戻り、轟天の前に降り立つと緊張の糸が途切れてその場に座り込む。

その直後にザジに止められた時間が動き出し、結菜たちは突然座り込んだ流牙に唾然とする。

「流牙……どうしたの？」

「ごめん……疲れて動けないや。このまま寝かせて……」

そのまま大の字に横たわり、流牙は眠りについた。

突然流牙が眠りについたことで結菜たちは慌てて駆け寄った。

魔戒法師の血が流れ、記憶を持つ光璃は流牙に何かが起きたと察してすぐに地上へ運んで流牙の体に異常がないか調べた。

調べた結果、流牙は急激な疲労で眠ってしまった事がわかり、そのまま流牙を天馬神社で休ませる事にした。

『……ブルッ……！』

一方、地下に眠る轟天は流牙が扉を開けた事で意識を取り戻し、目覚めようとしていた。

それにより、流牙の持つ牙狼剣、そして……魔界に眠るガ口の鎧が静かに鼓動を繰り返して輝きを放っていた。

一度失われた黄金騎士ガ口の力……その全ての力が蘇る時が近づいていた。

『轟
～Gouten～』

ザジとホラー鬼との激闘に疲れ果てて眠った流牙が目を覚ますとそこは見知らぬ天井だった。

「流牙、目が覚めた？」

「結菜……」

「流牙、大丈夫……？」

「光璃……ああ、大丈夫だよ」

心配そうに見つめてくる結菜や光璃たちを見て流牙は笑顔を見せた。

あの地下室で何があったのか尋ねられ、流牙は隠す必要が無いと思つて静かに語る。

黄金騎士ガロに討滅されたホラーの怨念から生まれた時空ホラー・ザジとの壮絶なる戦い、そして……愛する妻を探して亜空間を旅していた異なる世界の黄金騎士ガロの継承者、冴島鋼牙。

その突拍子もない驚くべき話に皆は驚き、魔戒法師の血と記憶を受け継ぐ光璃は目を輝かせながら真剣に話を聞いていく。

「時を操る魔獣に、流牙とは別の世界の黄金騎士ね……はあー、何だかちよつとした神話

「みたいなすこい話ね」

「しかも何処かへと消えてしまった奥方を探すためにあての無い旅を続ける……一途なお方なのですね」

「鋼牙さんと言いましたか？流牙様が認める方なら、是非ともお手合わせしたいです！」
「綾那つたら相変わらさね。でも、確かにもう一人の金色の天狼様のお力を見て見たい気持ちがありますね」

「しかし、まさか我々が人質になっていたとは……面目ありません」

結菜、詩乃、綾那、歌夜、小波はそれぞれの思いを口にする。

「でもそれは仕方ない……ザジは時を止める事が出来るホラー、時を止められたら私たちに為すすべがない。でも、流牙は勝った」

「時を止める……そんな恐ろしい奴がいるとは兄上もよく勝てましたでやがりますね」

「うんうん。流石は私達のお兄ちゃん、黄金騎士ガ口様だね！」

光璃、夕霧、薫は流牙がザジに打ち勝った事を素直に喜んだ。

その後も色々話が弾んでいくと、ふと結菜があることに気付いた。

「ねえ、流牙。一つ思ったことがあるんだけど……？」

「何？結菜」

「地下室に眠っている轟天……あの子、どうやって蘇らせるの？」

「どうやってって、それは……あつ」

ここで一つ大きな重要なことに気がついた。

地下室に眠っている轟天はかつてのガ口の鎧と同じく金色の輝きと共に力を失っている。

「分からない……どうやって轟天を蘇らせればいいんだ……？」

それをどうやって蘇らせるのか流牙には見当がつかなかった。

ガ口の鎧の金色はかつて母の波奏が行ったゼドムの種子を体の中に取り込んでソウルメタルの黄金の輝きを体内で育てる方法を使ったが、ゼドムは既に流牙達が討滅している。

何よりゼドムの種子を取り込んだ術者の命を蝕むその方法を流牙が絶対に承認するわけにはいかないので省く。

「私も……轟天を蘇らせる方法は分からない……」

光璃も困った表情で首を横に振って分からないと言う。

祖先の光溜からの願いは轟天を黄金騎士に渡すことで蘇らせる方法は見つけられなかったようである。

この世界には魔戒関係の人間は流牙と（一応）光璃の二人だけであり、轟天を蘇らせる方法を見つけることは不可能である。

「仕方ないか、無理に探す必要はない。俺たちの目的は鬼を倒すことだから」
「役に立てなくて、ごめん……」

「いいさ、光璃は武田の棟梁だ。光璃は自分のやるべき事を精一杯やればいいんだよ」
「うん……」

シユンと落ち込む光璃に流牙はポンと頭を撫でて慰める。

まるで兄妹みたいな光景に場の空気は和むが、詩乃はため息をついて「またですか……」と呟いていた。

その後、結菜達はそれぞれ自分に任されたことや自分の思うがままに行動をし、光璃達は武田家の仕事をやる。

ただでさえ魔戒騎士と言う職業柄、過労気味の流牙は皆に言われて大人しく天馬神社で休む事になった。

ふと魔法衣から牙狼剣を取り出し、耳に当ててみると……。

ドクン……！

「牙狼剣……!?!」

流牙は牙狼剣から心臓の鼓動のような声が聞こえ、鞘から抜いて刃に自分の顔を映す。

牙狼剣から聞こえる微かな声……それは牙狼剣と繋がっているガ口の鎧からの声

だった。

流牙は急いで天馬神社の地下へ降り、轟天の前まで来た。

轟天は相変わらず動かないままだったが、流牙が来たことで僅かに動き出していた。

「……轟天の前で呼び出せばいいのか……？」

流牙は静かに牙狼剣を掲げて円を描いて魔界からガ口の鎧を呼び出して召喚する。

纏う必要はないので流牙はその場から下がり、牙狼剣が宙に浮いて召喚されたガ口の鎧と共に轟天の前で飾られるように現れた。

数百年の時空を越え、遂にガ口の鎧と轟天が再会を果たした。

再会を果たした轟天は力を無くしながらもガ口の鎧を前に少しずつ首を動かして顔を上げた。

どうすれば轟天が蘇るのか……その方法がわからない流牙に応えるように鎧から無数の金色の粒子が溢れ出して一つの塊となり、人の形へと変えていった。

そして、それは中国服に似た服装に身を包んだ女性となり、流牙は目を見開いて眩くような声で尋ねた。

「母さん……?」

それは流牙の失われたたった一人の家族、愛する母……波奏だった。

金色の粒子で現れた波奏は優しい母の笑みを浮かべて流牙に話しかける。

「流牙、立派になったわね」

その優しく、懐かしい声に流牙は瞳から涙を流しながら近づく。

「母さん……本当に、母さんなんだね……?」

「そうよ、流牙……私の愛する息子……」

波奏は流牙を優しく抱きしめ、流牙も波奏を抱きしめる。

自分の手で殺さなければならなかった母と再会することが出来た流牙は涙を流しながら波奏を強く、強く抱きしめる。

親子の再会を喜びながら流牙は何故鎧から波奏が現れたのか尋ねた。

「どうして母さんがガロの鎧から……?」

「ここにいる私は魔導ホラーに込められたガロに金色の輝きを取り戻す為の無数の光の粒子に宿った魂の欠片が集まったもの……私が命をかけて作って来たものだから、光に私の魂が宿ってガロの中に今までずっと入っていたのよ」

ボルシテイにいる全ての魔導ホラーに宿っていた光は全て波奏から生まれ、波奏が育てて来たもの……その光に波奏の魂の欠片が含まれていてもおかしくはなかった。

「ガロに……母さんの魂が……？それじゃあ、ずっと俺の事を……？」

「でも、見守ることしかできなかった……あなたが苦しい時、辛い時に何もしてこれなかった……」

ガロの鎧の中でどんなに流牙が苦しい時でも辛い時でも魂の存在となった波奏にはただ見守ることしか出来なかった。

しかし、今は違う。

「だけど、もう一度……あなたの力になれる」

「母さん……？」

波奏は轟天に触れると、その体を構成している金色の粒子が少しずつ轟天の中に入っていく。

「流牙、私の力で……轟天を蘇らせるわ」

「轟天を!?!そんな事が出来るの!?!」

「出来るわ。ガロの金色の輝きを少しだけ轟天に分ければ蘇られるわ」
「少しだけ？それだけで大丈夫なの？」

「この土地は良い龍脈の流れがあつて、長い年月をかけて自然の気が傷付いた轟天を癒していたの。だから、金色の輝きを分ければ元の力を取り戻すわ」

「龍脈の気……そうか、だから光瑠はここに轟天を……」

轟天をいつか必ず蘇らせるために光瑠は龍脈の流れが宿るこの地の深くに轟天を眠らせ、気の力で長い年月をかけて癒す事を考えていた。

そして今、光瑠の永きに渡る想いが成就する時となった。

「流牙、あなたはこの異世界でこれからも辛い戦いをする事になるわ……でも、忘れな
いで。あなたにはザルバと私、そして……この異世界で生まれたあなたの大切な家族が
いる」

「あつ……そうか、母さんは久遠たちを知っているんだよな……」

ガロの鎧の中で波奏は久遠たちのことを見ていた。

久遠たちがどれだけ流牙の事を愛しているのか……。

「全く……誰に似たのか知らないけど、あんなに沢山の奥さんを持つなんて、母さんは驚
きよ？しかも妹も娘も出来るなんて……」

息子が沢山の美少女たちにモテモテナ事を素直に喜べばいいのか、呆ればいいのか

母として複雑な心境だった。

「えっ?! いや、その……俺もまさかこんなことになるなんて……」

「私としては莉杏に奥さんになって欲しかったんだけど……」

波奏は死ぬ直前に莉杏に流牙の事を頼むとお願ひしていた。

莉杏が流牙を支え、ゆくゆくは流牙と結婚して子供を……と波奏は考えていたが、まさか流牙に沢山の奥さんが出来るとは思わなかった。

「でも、久遠さんや結菜さん、それに一葉さんたちみんな可愛くて流牙を大切に想ってくれているいい子たち良かったわ。流牙が誰を選ぶのか分からないけど、誰を選んでもお母さんは応援するわ」

「え、えつと……ありが、とう……?」

素直に喜べばいいのか分からず首を傾げながら言う流牙だった。

とりあえず波奏が奥さんたちである久遠たちを気に入ってくれているので安心した。

「轟天は……魔導馬は魔戒騎士の大いなる力。これからの戦いで必ずあなたの力になれるわ」

「でも……俺はまだ内なる試練を受けてない……そもそも、俺にその資格があるかどうか……」

魔導馬を使うにはホラーを百体浄化してから『内なる試練』と呼ばれるものを受けて

クリアしなければならぬ。

仮に轟天が蘇っても流牙自身はまだその資格がないと思っていた。

『その心配はいらない、道外流牙よ』

その時、ガロの鎧から威厳のある雰囲気を醸し出す低い声が響いた。

「誰だ!?!」

すると、ガロの鎧から眩い白い光が辺りを包み込むとそこに一人の男が現れた。

それは流牙の鎧とは異なる前の姿の黄金の鎧に大きな黒いマントをなびかせる黄金騎士だった。

「ガロ……!?!」

『我は先代の黄金騎士の英霊だ』

「先代の、黄金騎士!?!」

それはガ口の鎧が金色を失う前の黄金騎士の継承者。

そしてここにいるのは鎧に込められた死んだ黄金騎士ガ口の継承者の魂……英霊である。

流牙は姿勢を正して頭を下げると英霊はゆっくりと流牙に近づけながら話す。

『道外流牙よ、お前は既に百体以上のホラーを討滅している。更に……お前は己の心の弱さと闇を受け入れ、ガ口の闇であるザジを倒した。これ以上ないほどに轟天を受け継ぐ資格を手に入れている』

流牙は既に轟天を受け継ぐ資格を得ており、英霊からも認められていた。

「ありがとうございます!」

『いいや、礼を言うのはこちらの方だ。よくぞ……よくぞ、ガ口の黄金の鎧を蘇らせてくれた』

突然の英霊からの感謝の言葉に流牙と波奏は目を丸くした。

しかし、英霊からの感謝の言葉はある意味当然のことだった。

『私はかつて人々を、仲間を守るためにガ口の鎧の金色を解き放った。だが、そのせいで鎧は真の力を失ってしまった』

一度ガロの血筋を継ぐ者がいなくなり、流牙は波奏と符礼法師との約束を胸に十年間の厳しい修行の末にガロの鎧に認められた。

しかし、金色の輝きを失った鎧はその力を本当の意味で發揮する事が出来なかった。そして……ガロに金色の輝きを取り戻したのは他でもない、流牙と波奏だった。

『流牙と波奏……二人の親子の強い絆で鎧の金色を蘇ることが出来た。鎧に眠る全ての英霊を代表して礼を言う。二人の守りし者としての想いに感謝する』

英霊は流牙と波奏の二人に向かって頭を下げ、感謝の気持ちを伝えた。

なんと云えばいいのかと言葉に表せられない嬉しい気持ち、流牙と波奏の心の中から溢れてくる。

ガロの英霊に認められたことや感謝されたことは魔戒騎士として、魔戒法師として嬉しいものだった。

しかし、喜ぶのも束の間だった。

チリーン！

「ザルバ？」

ザルバのカバーを開くと驚くべき言葉を発した。

『流牙、話のところ悪いが鬼の気配だ』

「また鬼が現れたのか!？」

鬼が現れたと知ると、英霊は奥の方を指差して言う。

『行け、お前の力を、助けを待つ者がいる。守りし者としての使命を果たせ』

「はいっ!!!」

黄金騎士として、守りし者としての英霊の人々を守る為の強い想いに応えるため、流牙は強く頷いた。

そして、波奏はポンと流牙の背中を叩いて笑顔で見送る。

「流牙、気をつけてね。行ってらっしゃい」

「行ってきます、母さん！」

波奏と英霊に見送られた流牙は牙狼剣を取り、鬼を倒し、人々を守るために走っていく。

流牙を見送った波奏と英霊は轟天に向かい合い、手を前に突き出す。

『行くぞ、波奏』

「はい」

二人の手から金色の粒子を放ち、轟天に金色の力を与える。

漆黒の鎧に包まれた轟天の体にヒビが入り、そこから金色の輝きが漏れ出した。

☆

地上に戻った流牙は光璃たちと合流し、既に武田四天王が鬼の討伐に向かっていた。

「光璃、付いてきてくれるか？」

「もちろん行くけど、どうしたの？」

「君と……光瑠に見せたいんだ。天馬の本当の輝きを！」

「天馬の……!? うん、わかった……！」

流牙は光璃と共に鬼が現れた場所へ向かった。

鬼は下級ばかりであるが、それを統率する中級の鬼がいた。

中級の鬼は下級よりも一回りも二回りも大きく、下手に動けば武田軍に大きな被害が出る可能性がある。流牙と光璃が来るまで周囲の民の避難誘導に専念した。

その後、流牙と光璃が到着し、鬼の群れを遠くから見つめる。

鬼の数は三十体ほどで中級の鬼が統率して操っていた。

そして、流牙は牙狼剣を手にし、耳に当ててその声を聞く。

『流牙……！』

牙狼剣から波奏の音が響き、流牙は遂にその時が来たと頷いた。

「……………」

流牙は鬼の前に出て静かに牙狼剣を抜き、天に掲げて円を描く。

描いた円からガロの鎧が召喚され、流牙の体に装着される。

黄金騎士ガロとなった流牙は韜に収められた牙狼剣を抜かずにその場に立つ。

鬼たちは流牙を……黄金騎士ガ口を殺そうと一斉に襲いかかる。

「来い……古の時代より黄金騎士と共に戦地を駆け抜ける金色の天馬……」

流牙は牙狼剣を抜いて再び天に掲げ、今まで待ち焦がれていたその名を呼ぶ。

「轟天!!!」

流牙がその名を呼んだその時、天馬神社の地下に眠っている天馬が遂に目を覚まし

た。

『ヒヒイーン!!!』

天馬神社の地下室から一度魔界に送還され、流牙の周りが金色の光に包まれた。

襲いかかって来た鬼たちが突然現れた金色の光に吹き飛ばされ、光璃たちは目を見開いた。

そして……光が止むと同時に現れたのは漆黒ではなく、ガロと同じ眩い金色の鎧に身を包み、真紅の鬘を靡かせる天馬。

愛する母と尊敬する英霊の力によつて永きに渡る眠りから解き放たれた黄金騎士ガロの魔導馬、轟天の降臨だった。

「あれが……轟天の真の姿……!!」

光璃は轟天の真の姿に黄金騎士ガロの降臨の時と同じく目を輝かせた。

永きに渡る先祖、光瑠の念願が叶い、目を輝かせた後に涙を流した。

戦国最強の騎馬軍団を持つ武田衆はその轟天の美しい輝きや勇ましい姿に感動して目を奪われた。

流牙は轟天の手綱を左手で握り、牙狼剣を右手で構える。

「はあっ!!」

手綱を操り、轟天を走らせて鬼の群れに突撃する。

轟天は決して止まることのない駿馬の如き屈強な脚で鬼を次々と轢き殺し、流牙は牙狼剣の刃で次々と切り倒していく。

轟天の名馬と呼ぶべき素晴らしい力にそれを操る流牙の見事な馬術。

魔戒騎士と魔導馬、二つの力が重なり、まさに人馬一体としての最高の力が生まれている。

ほぼ全ての鬼を討滅し、最後に残ったのは一回り体が大きい中級の鬼だった。

そして、流牙と轟天……魔戒騎士と魔導馬の力の結晶がその姿を現わす。

「轟天！」

『ヒヒイイイイーン!!!』

轟天は流牙の想いに応えて後ろ足で立ち上がり、前足で地面を思いつきり叩きつけて聖なる蹄音を響かせた。

キーン!!!

轟天から放たれた衝撃波が周囲に響かせると、牙狼剣の刃が巨大な両刃となり、鋼牙の轟天が与えた力と同じ『牙狼斬馬剣』へと姿を変えた。

牙狼斬馬剣を構えた流牙は手綱を操って中級の鬼に向けて轟天を走らせた。

巨剣とは思えない滑らかで軽々とした動きで牙狼斬馬剣を掲げ、轟天の駿馬としての脚で中級の間合いに入り、一気に牙狼斬馬剣を叩きつけた。

剛劍一閃。

まさにその言葉が適切と言わんばかりの凄まじく、力強い一撃で中級を真つ二つに叩き切り、轟天は急激に足に力を込めて地面に焦げ跡が残るほどにブレーキをかけて止まった。

現れた全ての鬼を討滅し、鬼の気配が無くなり、ようやく一息をつくと流牙は轟天に手を添えた。

「これからよろしくな、轟天。俺と一緒に人々を守ろう」

『ブルウ……』

轟天は新たな主である黄金騎士ガ口の継承者、流牙と心を通わしながら鎧と同じくその体を分解させながら魔界へと帰って行った。

「流牙……」

「光璃！」

流牙は光璃の元へ行き、早速感想を聞いた。

内容はもちろん、轟天についてだった。

「どうだった？轟天の真の姿を見れて」

「うん……とつても綺麗で勇ましかった。黄金騎士が跨った姿は戦神みたいだった

……」

念願だった轟天の復活に表情はあまり見られないが、光璃は小さな子供のように興奮している様子を見せていた。

「褒め過ぎだよ、俺なんて鋼牙さんに比べたらまだまだだからね」

「そんなことないよ、あなたは最高の黄金騎士だよ」

「ありがとう。それじゃあ、一旦屋敷に戻ろうか」

流牙がみんなと一緒に屋敷に戻ろうとしたその時、光璃が魔法衣の裾を掴んで止めた。

「光璃？」

「これで……流牙の、黄金騎士の力が揃った。次は私の番」

「私の番って、何が？」

「ねえ、流牙……」

「何？」

首を傾げる流牙に綺麗な紅い瞳で見つめる光璃の口から驚くべき告白を受ける。

「私と……祝言を挙げて、夫婦になつて？」

「……………え??？」

それはこれから起きるであろう流牙を巡る龍と虎の……否、乙女と乙女の意地のぶつかり合いを告げる始まりの言葉だった。

そして、流牙の度重なる女難が更なる追い討ちを掛けるのは言うまでもなかった。

『虎
（H i k a r i）』

轟天を無事に復活し、流牙の……黄金騎士ガ口の力になったのも束の間、光璃が何と流牙に夫婦になろうと告白して来た。

流牙たちは評定の間を集められ、光璃はみんなに向けてある宣言をする。

「光璃は御旗、楯無に誓い、流牙と祝言を挙げる」

祝言を挙げる宣言に春日たち家臣や結菜たちは困惑する。

ひとまず冷静さを取り戻した流牙は落ち着いて光璃に質問する。

「つまり……一緒に鬼を倒す同盟に組むと言うことか？」

「うん……織田信長、尾張は弱卒だけど、流牙が信頼する者なら信用する……」

「じゃあ、美空は？わざわざ越後を脅さなくても良かったのに」

「ダメ……美空は信用出来ない」

「あ、そうですか……」

光璃は美空とは色々ありすぎていくら流牙が美空を信用してもなかなか無理な話だった。

少し拗ねたように言う光璃に流牙は「美空は何したんだよ……」と呟いた。

「流牙、祝言を挙げよ」

「いや、別に祝言を挙げなくても、人々を守るために、それに同じ守りし者の一族の末裔同士だし一緒に鬼と戦えば良いじゃないか」

「ダメ、覚悟を見せた相手には相応の覚悟を見せるのが礼儀」

「……ねえ、光璃。もしかして、国やみんなのために俺と結婚するのか?」

流牙は目を細くして鋭くし、静かな声で光璃にそう尋ねた。

一瞬だけ光璃は国の為、民の為に流牙と結婚した美空の姿が重なった。

もちろん、美空はそれだけのために結婚した訳ではない。

流牙に好意を抱いているからこそ妻になった。

すると、光璃は首を左右に振って頬を赤く染めながら口を開く。

「確かにそう聞こえるかもしれないけど、それは違う……」

そして、光璃は武田の棟梁ではなく、一人の少女として流牙に想いを打ち明ける。

「私、流牙の事……好きだから」

「えっ……?」

光璃からの突然の告白に流牙は目を丸くした。

「巫女たちにあなたの事を調べてもらって、どんな人なのか聞いて来た。光瑠の記憶に残る魔戒騎士たちとは異なり、人にとっても優しく、慈しみの心を持っている。だけど、一

度鬼を相手にすれば人を守るため、修羅の如く剣を振るう……」

流牙は波奏の愛情と約束、そして流牙自身が持つ物に込められた声を聴く事が出来る能力から誰よりも優しく、寄り添える心を持っている。

光璃はそんな流牙に出会う前から心が惹かれていた。

「ずっと会いたいと思ってた。あなたと言葉を交わしたいと思ってた……それから、この地に来たあなたと同じ時を過ごし、戦いの勇姿をこの目に焼き付けた。そして、時を重ねるごとにあなたに惹かれて行つた」

「光璃……」

「流牙、私は……あなたの事が好き、ううん。大好きだよ」

光璃の少女としての強い想いに何も言えなくなつた流牙は困つたように笑う。

「もう……ずるいよ、光璃。そんな事を言われたら何も言えなくなるよ。分かつた……こんな俺だけど、夫婦になろうか？」

「うん……!」

「御旗・楯無も御照覧あれ。今宵より武田太郎光璃晴信、道外流牙の妻となることを誓う

……」

「楯無……?」

先ほどから何度も聞いている楯無と言う名、最初は誰かの名前かと思つたが人の名前

ではなかった。

「御旗、楯無は武田の家祖・新羅三郎義光から受け継がれている武田家伝来の家具。御旗、楯無に対して誓約したことは何人であろうとも覆ることは叶わない。流牙も自分に誓いを立てて」

「俺が誓うのはもちろん、この剣と鎧だ！」

流牙は牙狼剣を抜いて光の輪を描いてガ口の鎧を召喚する。

召喚された鎧は流牙が纏うことなく飾られるように流牙と光璃の背後に置かれる。

鎧は黄金の粒子が溢れ、二人を祝福するように放たれる。

「ガ口……」

「牙狼剣とガ口の鎧……俺たちの世界とこの世界の希望の光となる黄金の輝きだ。この剣と鎧に誓う……俺は光璃の夫として力を尽くす」

流牙と光璃の誓いの言葉の後、祝言の杯を取り、薫が御神酒を注いだ。

そして、三回に分けて飲み干す三段の杯……それを終えて御神酒を飲み干すと春日が代表して言葉を発し、皆が唱和と同時に一斉に頭を下げた。

「武田家、家臣一同、武田太郎光璃晴さまと、道外流牙さまの祝言、言祝ぎもうしあげまする」

「……大義。流牙、これで夫婦だよ」

「ああ……」

流牙と光璃はこうして夫婦になり、久遠、一葉、美空に続く四人目の正妻となった。しかし、まだ道は交わることなく分かれている。

その道が交わる時はもう少し先となる……。

☆

祝言から間も無く流牙は光璃の部屋に案内されたが……。

「あ、あの、光璃……ちゃん？ちよつと落ち着こうか？」

流牙は今までにない大ピンチに陥っていた。

光璃の部屋には布団が一つでその上には寝間着姿の光璃、つまり……。

「流牙……夫婦の初めての夜にやる事は一つだよ……？」

光璃は寝間着の着物姿で今にも胸元がはだけて素肌が露わになりそうで流牙は今すぐにも脱走したかった。

しかし、光璃の近くには魔導筆が内蔵されている軍配があり、流牙が逃走するものなら容赦無く法术を使うというものだった。

そして、光璃の口からとんでもない爆弾発言が放たれる。

「初夜だよ……子供、作ろう？」

何となく予想していた言葉だったが、光璃の本気が伝わり、流牙は顔を赤く染めて首を左右に激しく振る。

「ま、待ってよ！俺には早いし!!」

「でも、遅かれ早かれ魔戒騎士は男子に鎧を継がせるのは使命だし……流牙は何より黄金騎士だからね」

莉杏たちのように長い修行を積んだ純粹な魔戒法師ではないが、魔戒の知識を持つ光

璃の言葉はもつともであり、流牙はだんだん心で追い詰められていく。

光璃は久遠たちに負けず劣らずの綺麗な赤い髪と目と可愛らしい童顔を持つ美少女で、体が小柄ながらも胸はかなりあり、スタイルもすらつとしていている。

普通の男ならクラツとなるが、流牙は不屈の精神で何とか耐えているが、光璃は更なる追い討ちをかける。

「それに……流牙と私の赤ちゃんなら、きつと最強だよ?」

(ボルシテイで莉杏に言われた台詞と同じなんだけど!?ちよつとちよつと、ジンケイの女つてみんな好きな男に対して大胆になれるものなの!?そういう血筋なのか!!?)

追い詰められて冷静に判断できなくなつて絶賛大混乱な流牙だった。

「大丈夫、頑張つて元気な男の子を産むから……」

「光璃ちゃん!年頃の女の子なんだから、お願いだからもつと自分を大切に!!」

「私は大丈夫、痛いのも激しいのも耐えるから……でも、少しは優しくしてほしいな……」

(ダメだ!全然話を聞いてくれない!つてか、光璃の目がなんか怖い!?正気を失つているといふか発情してる!!?)

念願だった流牙と夫婦になった光璃が暴走しかけているのには大きな理由があった。

光璃は話してないが、先祖・光瑠は実は先代の黄金騎士に好意を抱いていた。

しかし、結局その想いを打ち明けることなく世界に来てしまった。

後に結婚した夫のことはもちろん愛していたが、やはりその黄金騎士の事は忘れられず、その忘れられない恋心が光瑠の記憶に受け継いでいる。

光瑠の流牙への純粋な恋心と合わせり、結果として二人分の乙女の恋心が光瑠の中で爆発して暴走しているのだ。

「流牙……」

目がトロンとしており、頬を赤く染めながら今にも流牙に襲いかかろうとしている。

流牙は逃げようとしたが、予想通りと言うべきか光瑠が軍配を持って振るうと金縛りの法術をかけて流牙の体が動かなくなる。

「うぐっ……う、動けない……!?!」

気合を入れれば何とか解除出来そうだったが、光瑠に攻められてそれどころではなかった。

流牙の貞操の危機が迫る中……光瑠の背後に黄金の粒子が現れた。

「流牙、今回だけ助けてあげるわ」

「ふあ……?」

次の瞬間、光瑠の体が粒子に包まれて一瞬で睡魔に襲われて眠りについてしまった。

「ひ、光瑠?」

流牙は眠ってしまった光璃を受け止めてそのまま布団に眠らせると流牙の前に黄金の粒子が一つに集まって形となった。

「母さん……」

それはガ口の鎧に宿っていた波奏の魂の欠片だった。

「どうして……？」

「流牙がさつき鎧を召喚した時にちよつとね？まさか祝言に立ち会うとは思わなかったわ」

「あ、あはは……」

流牙がガ口の鎧を召喚した際に波奏の魂が出て来て影から流牙と光璃の祝言を見ていたのだ。

波奏は眠っている光璃の顔を撫でて母の表情を浮かべた。

「光璃さん、とても良い子ね……流牙、夫婦になったんだから幸せにしてあげなさい」

「は、はい……」

「さて、私は今のうちに会いたい人がいるから行くわ。流牙、お休みなさい」

波奏は流牙が幼い頃、二人で暮らしていた時のように優しく頭を撫でる。

「うん……お休み、母さん」

流牙も今だけは母に甘える子供に戻り、波奏はその場から静かに消えた。

一息をついた流牙は眠っている光璃に掛け布団を掛け、交わることは出来ないがせめて添い寝だけはしようと思ひ、隣で静かに眠る。

「お休み、光璃……」

光璃の髪に触れながら流牙は目を閉じた。

『波
　　ハ　カ　ナ　』

月が輝く夜……縁側で結菜は寝間着の浴衣姿で静かに月を見ていた。

「越前から越後、そして甲斐……随分色々回ったわね」

流牙の側について守るために今まで一緒にいたが、まさか色々回ることになるとは思わなかった。

結菜は流牙の贈り物で久遠とお揃いの蝶々の飾りが付いた簪を手に取りながら月を見上げる。

「久遠……元気にしているかしら……？」

たった一人の大切な親友で夫の久遠。

離れ離れになってしまった久遠が今どうなっているか分からない。

おそらく一緒にいる一葉の妹で結菜と同じ側室の双葉や壬月たちが側について支えているはず。

久遠の手にはザルバの半身の指輪がはめられており、久遠の無事は確認出来ているが、それでも心配が重なるだけだった。

「越後で美空様たちの問題を片付けた次は信州で光璃様たちの問題か……下手したらお

二人が激突してもおかしくないわね」

轟天という先祖から受け継いだ黄金騎士の力の一端を返すという大切な理由があったとはいえ強引に脅す形で美空から流牙を奪い取り、そしてすぐに祝言を挙げてしまった。

美空もいつ怒りを爆発……否、既に爆発して次の怒りを溜めているかもしれない。

しかも美空の側には一葉を始めとする流牙を想う乙女達がいる……越後の小さな問題を片付けたらすぐにでも攻めてくるかもしれない。

「そうしたら、流牙は何が何でも二人を止めようとするでしょうね……」

流牙をきっかけに戦が始まったとなれば人間同士の戦いとはいえ、自分の全てをかけたでも戦を止めようとするだろう。

結菜は雷閃胡蝶の雷の蝶を一つだけ出し、人差し指に乗せる。

「私が……ううん、私達で流牙を支えないと」

雷の蝶を夜空に舞い上がらせながら静かに消えるのを見つめながら結菜は流牙を守る決意を新たに固める。

すると結菜の背後に金色の光が現れた。

「ふふつ、流牙は幸せ者ね。こんなにも素敵なお嬢さんに想ってくれているなんて」

「っ!? 誰!？」

結菜は振り向いて雷閃胡蝶を出そうとしたが、その姿に目を疑った。

無数の金色の粒子が集まって女性の姿となり、結菜はその金色の光に見覚えがあった。

「ガ口の輝き……?」

「こんばんは、結菜さん。いつも息子が、流牙がお世話になっています」

流牙を息子と呼び、結菜は今度は耳を疑って困惑の様子を見せる。

「息子!? そんな、まさか……あなたは!?!」

結菜が困惑するのも無理はなかった。

何故なら目の前にいる人物は結菜が会って話をしてみたいが、それは永遠に叶わないとずっと思っていた女性だからだ。

「初めまして、流牙の母の波奏です」

それは流牙の母でガ口の鎧の中に眠っていた波奏の魂だった。

「あ、あの!は、初めまして!私、流牙の側室で、名は斎藤結菜と申します!」

結菜はずっと会いたがっていた波奏を前に珍しく慌てながら礼儀正しく礼をした。

「ふふふ、本当に可愛くて良い子ね。結菜さん、少しお話してもよろしいかしら?」

「は、はい!もちろんです!」

結菜と波奏は縁側に並んで座ると波奏から話を切り出した。

「まずは結菜さんにお礼を言わせて。流牙をずっと側で守ってくれてありがとう」

「い、いえ！とんでもありません！私は流牙の妻ですし、それに……放っておくと流牙は誰かを守るために無茶ばかりしますから」

「それが守りし者……ううん、流牙の持つ優しさだからね……私も鎧の中でいつもハラハラしているわ」

「波奏様は鎧の中で流牙を見守っていたのですか？」

「ええ。本来ならこうして鎧から出ることは出来ないのだけど、この人界とも魔界とも異なるこの異世界の影響でこうして顕現することが出来た……」

波奏は流牙と再会し、こうして結菜と話すことが出来たことに心の底から喜ぶがこの異世界が干渉する説明がつかない謎の影響力に不信感を抱くのがあった。

しかし、愛する流牙と再会することが出来、結菜と話せることが出来た……それだけで十分価値がある。

「ところで、ずっと気になっていたんだけど……流牙の奥さんってどれくらいいるの？」
「えっ!?!」

まさかの質問に結菜は固まる。

波奏が気になるのも当然の話である。

自分の愛する息子に何人妻がいるのか母として知る権利がある。

もつとも妻が数えなければならぬほどたくさんいるのもとんでもない話だが。

奥を取り仕切る結菜は苦笑いを浮かべながら妻の正確な人数を教える。

「えつと……正妻は四人、側室は二人、愛妾が十二人です……」

正妻は久遠、一葉、美空、光璃。

側室は結菜、双葉。

愛妾はひよ子、転子、詩乃、鞠、梅、雫、麦穂、和奏、雛、犬子、秋子……合計で十八人である。

もつとも、流牙に好意を抱きながらも素直になれず妻になってない者もいるのでまだまだ増えることは確定である。

「まあ……全部で十八人も……多いわね」

多いと最初から覚悟はしていたがまさか十人以上はさすがに予想以上で肉体を失い、魂の存在である波奏は頭痛を覚えるのだった。

「それから、補足で妹が四人に娘が三人……かなりの大家族になってますね」

「知らない間に義理とはいえ孫ができておばあちゃんになっていたのね……」

喜ばばいいのか、困ればいいのかよくわからない心境になる波奏を結菜はすぐに察した。

「波奏様のお気持ち、お察しします……」

「結菜さんこそ、色々大変な立場でしょう？あ、そうだ……良かったらこの世界での流牙の話の詳しく聞かせてもらえないかしら？」

「はい、私の話で良ければ」

「その代わり……流牙の小さい頃の話、聞きたくない？」

波奏だけが知っている流牙の修行に出るまでの幼少期の話に結菜は目を輝かせた。

「はい！是非お願いします！」

あの流牙がどんな幼少期を過ごしたのか妻として気になるのは当然だった。

そこから結菜と波奏……義理の娘と母の話が始まった。

流牙という共通する話題で二人は心の底から楽しんでいった。

そして……楽しい話はあつという間に過ぎ、静かに結菜は眠気が襲うと波奏は結菜の頭を優しく撫でる。

「そろそろ寝なさい、あまり夜更かしはよくないわ」

「は、はい……波奏様はこの後どうなされるのですか？もしかして、ガ口の鎧に……」

「そのつもりだけど……こうして魂で動けるなら色々都合なのよね」

「都合合？」

「少し、この世界のことと調べたいことがあるから旅に出るわ」

波奏の姿を構築していた金色の粒子が分解されて無数の粒子となる。

「流牙のこと、お願いね」

最後に結菜に流牙のことを頼むと波奏の魂が宿った金色の粒子は天に昇って何処かへと向かった。

「はい、お任せください。お義母様……」

結菜は波奏を見送り、何があつても流牙を守ろうと改めて心に誓うのだった。

☆

流牙と光璃の初夜……と言つても波奏が寸前に光璃を眠らせて止めたので何も起きなかつたが、何も出来なかつたことに光璃は少し不機嫌になつていた。

しかし、流牙の母である波奏が止めたと聞いて誰もが信じられなかつたが結菜が実際に会つたと言ひ、本当に現れたのだと信じるしかなかつた。

もつとも、その波奏はガ口の鎧に戻らずに何処かへと行つてしまつたが、流牙を置いて消えるわけなのでその内戻るだろうとザルバが言つた。

ひとまず初夜のこととは置いておき、光璃は流牙たちや武田のみんなを呼んで重要な話を始める。

「流牙……今川氏真が流牙隊に入っているのは本当？」

「ああ。氏真……鞠が流牙隊に入っているのは本当だ。今、美空たちと一緒に越後にいる」

光璃以外の武田家は今川の当主である鞠が流牙隊に入っていることに驚いた。流牙たちは鞠が駿府屋形で叛乱が起きて逃げ延びてその後流牙隊に入ったこと説明した。

武田のみんなは鞠が当主でないのなら誰が駿府を支配しているのかと疑問に思いはじめ、夕霧や薫は真実に気付きはじめた。

そして、流牙は静かにその真実を語る。

「駿府屋形は今……光璃、夕霧、薫の母……武田信虎が支配しているんだ」

武田の先代の棟梁である武田信虎が駿府を支配していると聞いて夕霧たちは驚愕した叫びをあげた。

夕霧と薫は自分の母がしてきた事に怒り、悲しみの表情を浮かべていた。

流牙は鞠の身を案じて甲斐に連れてこなかったが、光璃は鞠を腹中において駿府奪還を名目に攻めるつもりだった。

鞠の親の今は亡き義元公には恩があり、更には信虎は身内の恥であるので駿府を奪還して鞠に返すつもりだった。

光璃が鞠のために駿府を信虎から奪還する決意を聞き、流牙も決意を決めた。

「俺も戦う……」

「流牙……」

「鞠との約束を果たすために。そして、信虎も俺たちジンケイの血を継ぐ末裔の一人だ。そいつが俺たちに刃を向けて立ち向かうなら、守りし者としてじゃなく、同じ一族の末裔として、光璃の夫として信虎を止める……それがジンケイの血を継ぐ俺としてのケジメだ」

魔戒騎士ではなく、同じジンケイの末裔として、光璃の夫として信虎と決着をつける。そう誓いを立てる流牙に光璃は流牙の魔法衣を握り締め、上目遣いで静かに口を開く。

「一緒に……あの人を止めよう」

「ああ。必ず……！」

流牙と光璃は信虎を止める誓いを立て、他の者たちも一緒に信虎を止めると誓い合った。

流牙は信虎と戦う前にまずは甲斐に出没する鬼を討滅するために春日たち武田四天王や綾那たちと共に鬼狩りに勤しむ。

少しずつ武田に馴染んできた流牙たちだったが、この時はまだ知らなかった。

流牙を……愛する夫を取り戻すために、越後から怒り狂う龍が近づいていることを。

『激　　〕Crash〕』

流牙たちが甲斐に移住してから数日が経過した。

鬼狩りをしながら甲斐の生活に慣れたある日、夕霧が流牙たちを甲斐に案内すると提案した。

早朝、夕霧に連れられて流牙と結菜と綾那と歌夜は馬に乗って甲斐巡りをする。

詩乃は朝がとても弱く、書庫の書物をのんびりと読むお休みの日でもあるので置いた。

しかし、早朝といってもまだ朝日は出ておらず、結菜たちは眠そうに欠伸をしていた。

「ふわあ……甲斐の人は本当に早起きね」

「綾那、まだ眠いです……」

「私もちよつと……」

「そう？俺は別に平気だけど」

流牙はまだ朝日が昇ってない夜中でもけろつとして馬に乗っている。

「あのね……魔戒騎士で四六時中動き回れるあなたと一緒にしないでよ」

ため息をつく結菜の言う通り魔戒騎士はホラーという魔獣が夜に現れる関係上、夜中

に行動することが多い。

それに踏まえて日中はホラーの情報を集めたりホラーの出現を抑えるエレメントの浄化を行なっている。

片や普通の人間である結菜たちから見れば人外並みの体力と体質を持つ魔戒騎士と一緒にされては困る。

「流石は兄上でやがりますな」

「それほどでもないよ。それにしても、いい風景だな……やっぱりこういう自然は心が落ち着くな」

山や森が広がる甲斐の風景を五感で楽しみながら馬を進ませる。

名所の山々や寺を案内した後、お昼時になり薫が作ってくれた弁当を広げて食べていると夕霧が話しかけた。

「あのですね……兄上」

「どうした？」

「一つ、聞きたい事があるでやがりますが……」

「何だ？」

「兄上は、姉上のことや夕霧のことを……その、恨んでやがりますか？」

「……え？何で？」

「何でって……改めて考えてみれば、あの時期を狙つての長尾への一撃は我ながらひどいでやがるな……と」

「ああ、あれか……」

長尾の内乱が終わつた直後に夕霧がやってきて流牙を寄越さないと攻めるといふ脅し……あれは強力で完璧な一撃だつた。

「確かに夕霧は姉上の意思に従つたでやがりますし、先祖の光瑠様や眠っている轟天などのことで間違つたとは思つてやがりませんが……こうやつて兄上と仲良くなつてから考えたら、悪いことをしたな……と」

「夕霧が気にすることじゃないよ。俺をここまで連れて来させるにはそれしかなかつたと思うけどね。光璃と美空のいがみ合いは何とも言えないけどね……」

「面目次第もないでやがりますよ」

「だけど、流牙は好機だと思つていたのよね」

結菜が笑みを浮かべながら補足説明をする。

「好機、でやがりますか？」

「鬼退治をするために武田を味方につける好機よ。みんな驚いていたわよ」

「ああ。でもまさか光璃たちが俺と同じ一族で、光璃と祝言を挙げるとは思わなかつたけどな。そういう意味だと、俺も武田を利用したと同じようなもんだけどな」

「それはお互い様でやがりますよ」

「だろ？そういうもんさ、鬼退治は協力してくれるんだよね？」

「兄上の望むような協力体制は姉上次第でやがりますが……少なくとも、長尾とのいがみ合いよりも日の本を蝕む鬼を倒す方が優先だと、夕霧は考えてやがりますよ」

「十分だ。説得は俺がする。それに……何となくだけど、光璃と美空は仲良くなれる気がするんだ」

「ええっ?! い、いやあ……流石に姉上と美空殿が仲良くは難しいかと……」

光璃と美空の間には犬猿の仲と言わんばかりの強いがみ合いの関係であり、夕霧は仲良くなれるのは無理だと汗をかいて首を左右に振った。

しかし、流牙はそんな事ないと微笑みながら答える。

「俺だって昔、一時期一緒にいた同じ魔戒騎士とあまり仲良く出来なかつたからさ。それこそ光璃や美空の関係と同じで考え方が違うから合わなかつたんだ。けど……」

流牙の脳裏には弓を持つ月下に輝く魔戒騎士と斧を持つ小さなたくさん命を守る魔戒騎士の姿が浮かんだ。

「だけど？」

「ある出来事をきっかけに、同じ守りし者として、同じ魔戒騎士として、そして……共に戦う仲間として心を一つにすることが出来たんだ。だから、光璃と美空もきつと……」

傷つき、崩れ落ち、倒れそうになりながらも共に立ち上がり、人々を守るために刃を振るう。

流牙はいつか光璃と美空もそんな関係になればいいなと強く願う。

「流牙なら光璃様と美空様の関係を紡ぐこと出来るわ。私は信じてる」

「綾那も信じてるです！」

「私も流牙様なら出来ると信じております」

「ありがとう、みんな」

その後流牙たちはお昼を食べ終え、馬に乗って次の目的地に向かおうとしたその時だった。

チリーン！

「ザルバ？」

『流牙、鬼の気配だ』

「っ！分かった！みんな、鬼だ！」

ザルバが鬼の気配を察知し、みんなの表情が鋭くなる。

すぐにザルバの案内で流牙たちは馬を走らせて鬼のいる方向へ向かった。

こっそり流牙たちの護衛で動いていた小波から句伝無量を伝って鬼の居場所が特定し、一刻も早く小波の援護に向かおうとしたが……。

『流牙、鬼の気配がなくなった』

「気配が無くなった？」

小波が早々に倒してしまっただのかと思ひ、小波の元へと急ぐとそこには見慣れない二人の少女がいた。

何と、鬼は少ないながらもこの二人が退治してしまったらしい。

一人は右目を眼帯で覆った少女でもう一人の浪人風の少女……それは流牙は見覚えがあった。

「君は……茶屋の時の……」

「やあやあ、あの時はご馳走になったね」

「流牙、知り合いなの？」

「前に久遠たちと堺に行つた時に茶屋で会つたことがあるんだ。ただのお嬢さんじゃないと思つたけど、なるほど……君は武田の人間だったんだね？」

「御名答。ちなみに、自分はあなたのことを調べていたのさ」

「俺を？」

「田楽狭間に舞い降り、金色に輝く狼を模した鎧を纏う天人。甲斐の足元でそんな噂話が出たのなら、調べるのは当然だろう？」

「まあ、光璃が知りたがったのはそれだけじゃないと思うけど」

黄金騎士ガ口の継承者が天人としてこの世界に現れたと噂を聞けば光璃はそれを徹底的に調べ上げるのは必然である。

「君の活躍はこの目で見させてもらつたよ。特に衝撃的だったのは九頭竜川での破壊の神の如き姿をした暴狼と、越後で美空殿の護法五神と一体化した天龍の姿……破壊と守護、相反する力を宿す金色の天狼の鎧とそれを纏う君はとても興味を持つよ」

「それはどうも。まさかあの戦いを遠くから見ているとはね」

「見れば見るほど興味が溢れる、こんな気持ちは初めてさ。天人は人を惹きつける魅力でもあるのかな？」

「さあね。ところで君の名前は？」

「おっとこれは失礼、改めて名乗ろうか。我が名は武藤喜兵衛一二三昌幸。下山城代を務めております。お気安く、一二三とお呼びくだされ」

「俺も改めて、名は道外流牙。光璃の夫になった。それで、君は？」

「私は……山本勘助湖衣晴幸と申します」

浪人風の少女は一二三、眼帯の少女は湖衣、流牙は名前を覚えて頷いた。

「一二三と湖衣か、二人共よろしくな」

「ええ、よろしくお願ひいたします」

「よろしくお願ひします……んっ？」

湖衣は流牙の両目を見ると不思議なものを見たような表情を浮かべて首をかしげた。

「ん？どうした、湖衣」

「あ、あの……流牙殿は目に不思議な力をお持ちですか？」

「目に不思議な力？」

「は、はい……なんて言うか流牙殿の両目が何かには守られているような……そんな感じがあるのだ」

湖衣の説明に流牙たちは納得がいった。

流牙の両目には大きな秘密があり、流牙は少し暗い表情を浮かべながら湖衣と一二三と真実を語った。

「実はね……この両眼は一度、剣で潰されたんだ」

「なっ!？」

「……剣で潰された目がどうして見えるようになってるんだい？」

「ある強敵との戦いで目を潰され、一度は光りを失い何も見えなくなつた。だけど、生き別れた母さんと再会した時に母さんが術を使って自分の目の力を代償に俺の目を直してくれたんだ……」

もう何度目か分からない自分の瞳にかけてくれた波奏の母の愛情……それに湖衣は目を見開いて驚き、マイペースな一二三も心が揺れた。

「そう言うことでしたか……納得がいきました、その両目に宿っている力からは優しい光が見えましたから……」

「なるほど、流牙殿のお母上の光をその目に宿し、多くのものを見続けているわけか……」

「俺は一人でも多くの人間を鬼の魔の手から守る。そして、母さんから貰ったこの瞳で多くの人の笑顔を映すんだ」

百聞は一見にしかずとはよく言うが、湖衣と一二三は何故流牙に人が集まるのか、その理由の一つがこうして目の前にしてなんとなく分かった気がした。

その後流牙たちは一二三と湖衣と一緒に下山城へ向かい、これからに向けて情報交換をする。

鬼や駿府屋形の状況……駿府屋形は嵐の前の静けさのように特に動きはないが、鬼の動きが複雑に変化していた。

バラバラだった動きが統率が取れてきているように一二三は見えている。

『恐らくは鬼を操る統率者と呼べる存在が現れたのだろう。特に自ら鬼となった武と知恵を持つ人間が鬼を束ねていることが鬼の行動に変化が現れただろう』

「……ホラーと同じだな。魔獣は力のあるものに従う。それは何処の世界でも同じだな」

「流牙殿の天の世界でも同じとは世も末ですな。しかし、こうなるともはや鬼はただの獣ではなく、危険極まりない勢力であると認めるしかないでしょう」

「そうだな。一刻も早くみんなを一つにしないと……」

流牙は未だにバラバラな織田、長尾、武田を一つにして日の本を守る同盟にしないと
いけないと焦りがではじめる。

この同盟の鍵を握るのは言うまでもなく流牙である。

流牙は何かきっかけがあれば良いんだけどと思いつながら下山城で一夜を明かした。

翌朝、下山城を出て躑躅ヶ崎館に戻ろうとしたその時だった。

「典厩さまー!」

「兎々!こんな時間にどうしたでやがりますか!」

それは武田四天王の一人で兎耳をつけた小さな少女、兎々だった。

「越後勢が信州に向けて行軍を開始したと報が届いたのれす!急ぎ、躑躅ヶ崎館にお戻りくらさい!」

「美空達が!」

美空達が進軍していると聞き驚く一同。

流牙たちは一二三と湖衣と別れてすぐに躑躅ヶ崎館へと戻った。

すぐに軍議が行われ、詩乃は美空の目的が流牙の奪還が目的であると推測した。

このままでは長尾と武田が激突することは必至、流牙は光璃にあることを提案する。

「光璃、俺を行かせてくれ。美空を説得する」

「ダメ……美空は信用出来ない」

「そんなことを言っている状況じゃないだろ。俺たちがやらなければならないことはわかっているだろ？」

「でも……仮に流牙が行ったら美空に捕まって取られちゃうかもしれない……」

「確かにそうかもしれない、だけど……俺は二人が傷つけ合うのを見たくない！」

流牙にとって光璃も美空も大切な妻であり、

この日の本を守るために共に戦う大切な仲間でもある。

これ以上大切な仲間が争い、傷つけ合うのを見たくない。

「頼む、光璃！」

流牙は深く頭を下げ、光璃に頼んだ。

流牙にベタ惚れの光璃は流牙に頭を下げられたら首を左右に触れるわけがなかった。

「……流牙に頭を下げられたら、嫌と言えない。わかった……流牙に任せる」

「ありがとう、光璃！」

武田はひとまず長尾を迎え討つ準備はするが、基本的に流牙と詩乃の策で被害を出さないようにする作戦に出る。

流牙が一足先に美空の元に向かい、説得を試みてその間に詩乃たちは流牙隊と合流する予定だ。

片や流牙を奪うため、片や流牙を守るため……二人の乙女の戦いの間にいる流牙。いがみ合う二つの大国を結ぶために流牙は架け橋となるために駆け抜ける。

『誇り Pride』

美空と光璃が川中島での対決が近づくその頃……遠く離れた美濃の地では……。

「人間五十年、下天のうちを比ぶれば、夢幻の如くなり、一度生を稟け、滅せぬものあるべきか——」

久遠は美濃の城で扇子を広げて敦盛という舞を踊っていた。

田楽狭間以来舞っておらず、流牙に見せたことがなかった。

「お疲れ様です、久遠様。それでお身体の方は……」

敦盛を見守っていた双葉は久遠の体を心配していた。

「心配ない、ようやく『力』が体に馴染んできたところだ」

久遠は白い手袋を外すと両手に不思議な模様が怪しく浮かび上がった。

それは流牙と離れ離れになる前には無かったものだった。

「これは……私の覚悟だからな。流牙のように己と大切な者を守るために、二度と失わないためにもな……」

「ですが、あまり御無理をなさらないでください。家中の皆様や今は遠く離れている流牙様と結菜様もご心配なさいますよ」

「わかっておる。あまり自分を疎かにすると特に結菜に叱られるからな」

「ふふふ……ようやく、お会いになられますね」

「ああ……陣貝を吹け！出陣する！流牙と結菜と一葉を迎えに行くぞ、双葉！」

「はい!!」

離れ離れになっていた流牙と久遠、二人の再会の時が間も無く近づいているのだつた。

☆

流牙は甲斐の地を風の如く駆ける。

武田と長尾……光璃と美空の戦いを止めるために。

武田の情報を元に流牙は一直線に長尾衆の軍団へと向かう。

宿敵同士である二人がぶつかればただでは済まない、鬼との戦いが迫る中二人が戦うのは非常に危ない。

しかも二人が戦う理由が流牙ともあれば何が何でも止めなければと流牙は思いを強くして更に加速する。

そして……越後の『龍』と『毘』の旗を掲げる長尾衆の本陣を見つけ、そこには美空たちがいた。

流牙は大声で美空の名を呼びながら降り立った。

「美空!!」

「っ!りゆ、流牙!」

「おお!流牙!」

「流牙殿、ご無事でしたか!」

「流牙さん!」

「リュウさん、お久しぶりっす!」

「リュウ、元気そうだ」

美空だけでなく一葉、幽、秋子、柘榴、松葉も一緒にいた。

流牙隊のメンバーの姿は見られず、どうやら別行動をしているようだった。

「美空!再会を喜びたいところだけど、俺の話を聞いてくれ!」

流牙は美空を説得しようとして声を荒げたが、美空は目を閉じて首を左右に振った。

「ごめんなさい、流牙」

「えっ……?」

「あなたが来る事は分かっていたわ。優しいあなたの事だもん、私を説得しようとしていたことは予想できたわ。でも、これだけは譲れないのよ」

すると美空は両手で印を結ぶと流牙の足下の地面に五芒星が描かれて輝いた。

「何だ!」

「三昧耶曼荼羅・封魔結界」

五芒星の光が更に強くなると五芒星の線から光の鎖が現れて流牙の体に巻きついて捕縛し、更に円柱の形をした結界で流牙を中に閉じ込めた。

「何だこれは……ぐあつ!？」

流牙は鎖を引きちぎろうとすると結界から雷に似た衝撃波が放たれて流牙に襲いかかる。

「無理に動かない方がいいわよ。その結界は邪悪な力を一時的に封じ込めるための結界よ。今まで使う機会はないと思つてたけど、まさか旦那様に使うことになるとは思わなかったわ」

「邪悪な力を、封じ込める……!？」

「そうよ。あなた達魔戒騎士の鎧や剣はソウルメタルつて言うホラーの一部を元に作られたものでしょう？毒を以て毒を制するとはよく言うけど、あなたはその力を人を守るために使われているけど、九頭竜川の時の心滅獣身の時のように邪悪な一面を持ち、しかも流牙は闇の力を纏う事が出来る。だからこそこの封魔結界はその真価を發揮する」
魔戒騎士……否、守りし者たちはホラーに対抗するためにホラーの力を逆に利用してきた。

魔戒騎士の鎧がその代表例でソウルメタルはホラーの一部を加工して造られたもの

である。

つまり、魔戒騎士の力の源はホラー……即ち、邪悪な力から生まれたのだ。

美空はそこに着眼して流牙を護法五神の聖なる力で封じ込めたのだ。

「何故、こんな事を……?!?」

「私だつてこんな事をしたくないわ。今すぐあなたを抱きしめたい……だけど、その前に光璃と決着をつけなきゃならないのよ」

自分の今の想いを押し殺してでもやらなければならぬ事……光璃と決着をつけるために流牙を封じた。

「柘榴、秋子、私について来なさい。一葉様と幽と松葉はここに残つて流牙を見張つてな
やこ」

「了解つす!」

「すいません、流牙さん……」

「まあ良いか。流牙のそばに居られるならな」

「やれやれ、まあ私たちはのんびりしていきましょうか」

「御大将、気をつけて」

美空は柘榴と秋子と兵を連れて再び進軍し、封じた流牙を見張るために一葉と幽と松葉が残る。

「待て……美空!!ぐああっ?!!」

流牙は立ち去る美空を止めようとしたが結界から雷が降り注ぎ、動きを止められる。流牙の疾走も虚しく、美空と光璃の因縁の対決が無情にも近くのだった。

☆

流牙が護法五神の封魔結界に閉じ込められてからというもの何とか結界から抜け出すために試行錯誤を繰り返していたが、下手に動くたびに雷が襲いかかり、動くことから出来なかった。

「くっそお……」

「流牙殿、いい加減にしないと体が持ちませんぞ」

「そうじゃ。流牙よ、ここは美空を信じて待つのが得策だぞ?」

幽と一葉は流牙に大人しくしろと説得するが、それで大人しくする流牙ではなかった。

「一葉……美空は何でこんな事を……」

「決まっておる。これは美空の武士としての誇り、そしてお前の妻としての誇りをかけた戦いなのだ」

「誇り……?」

それは騎士とは異なるこの日の本に生きる戦う者、己の誇りを守るために戦う者たち

……それが武士である。

「越後の当主として、リュウの妻としてその誇りを傷つけた武田と決着をつけるために御大將は最後の戦いに向かった。大丈夫、御大將は死なないからリュウは安心して待て」

「安心しろだと……？」

松葉にそう言われ、カチンと来た流牙は体に走る雷に耐えながら魔法衣の内側に手を伸ばし、何とか牙狼剣を呼び出した。

すると、僅かな時しか離れてないのに懐かしいたくさんの声が響いた。

「お頭！」

「流牙！」

「ハニー！」

「流牙様！」

「……………」

「お兄ちゃん久しぶり〜！」

流牙を呼ぶ五つの声は越後で別れた流牙隊の主要メンバー、ひよ子、転子、鞠、梅、雫と八咫鳥隊の鳥と雀だった。

「みんな……………」

「流牙！大丈夫!？」

「これは……どういふ状況なのですか!？」

「な、何なんですかあれは!？」

「流牙様が囚われてる!？」

「この力の気は美空様の護法五神!？」

更に光璃たちと別行動を取っていた結菜、詩乃、綾那、歌夜、小波……ここにバラバラだった流牙隊が遂に全員集合していたのだった。

流牙隊がなんとか流牙を助けようと行動に移すが、封魔結界に阻まれて吹き飛ばされてしまう。

「みんな……うおおおおおおつ!!うらあつ!!」

流牙は激痛に耐えながら牙狼剣を抜いて円を描き、ひび割れた円からガ口の鎧が召喚されて流牙の体に装着された。

しかし、ガ口の鎧を召喚しても封魔結界を破れそうになかった。

「リュウ……その結界は何日もかけて御大将が溜めた霊力を使って作ったからガ口でもそう簡単に破れない」

美空の渾身のお家流に松葉は余裕を見せていたが、流牙にはこの甲斐の地で手に入れた力がある。

「ふっ……俺が甲斐の地でのんびりしていたと思っていたのか？」

鎧を纏った流牙の周囲の空間から金色の輝きが溢れ出し、結菜はとっさにみんなに聞こえるように大声で叫んだ。

「みんな！急いで流牙の周りから下がって！轢き殺されなくなかったらすぐに！！早く！！」

結菜の突然の注意喚起にみんなは驚いていたが、ひとまずその言葉に従って流牙から下がった。

「見せてやる……蘇った黄金騎士の大きいなる力を、轟天！！！」

一葉たちが聞いたことのない名前を耳にした瞬間、封魔結界に大きなヒビが入り、流牙の体が金色の輝きに包まれた瞬間、何かが誕生するかのように結界が突き破れた。

『ヒヒイイーン！！』

結界を突き破った金色の輝き……それは金色の鎧に身を包み、赤い鬣を持つ馬だった。

魔導馬・轟天は主である黄金騎士がいる場所……それは例えどのような異界であつても何処へでも駆けつける能力を持つ。

「御大将の結界を破った……!?!」

「……金色の馬だ?!」

「おお、これはこれは……」

松葉と一葉と幽は封魔結界を破った轟天に驚いて呆然とした。

「綺麗……」

「凄い……こんな馬、見たことないよ」

「ふわあ……ガロと同じでピカピカなの！」

「まさに金色の天狼のハニーに相応しい馬、いいえ……これは言うなれば『金色の天馬』ですわ!!」

「まさか甲斐でこのような力を手に入れるなんて……」

「……………!!?」

「凄いですごーい! さっすがお兄ちゃんだね!」

ひよ子、転子、鞠、梅、雫、鳥、雀は轟天の美しさと勇ましきに見惚れるのだった。

「俺は美空と光璃を止める! 詩乃、雫! 後のことは頼んだ!」

「はっ!」

「お任せください!」

「待て、リュウ! ここを通すわけには……」

「悪いな、松葉。大切な人たちの想いが込められたこの轟天を止めることはできない!!」

松葉が流牙を止めようと傘を手取るが、轟天の強靱な脚からの跳躍と疾駆に対応出

来るわけがなく、瞬く間に走り去る。

「頼むぞ、轟天！」

轟天を手綱を持ち、ガロの闇の漆黒の翼よりも早い速度で地を駆け抜ける。

（頼む、間に合ってくれ!!）

流牙はそう願いながら轟天を走らせる。

☆

「っ！この気配……封魔結界が破られたわ！」

美空が張った封魔結界が流牙に破られたことを察知すると柘榴は信じられないと言った様子で声を荒げた。

「ええっ!? 御大将渾身の結界が!? リユウさん何したんっすか!？」

「分からない……しかも物凄い速さでこつちに来ているわ。闇の翼じゃない……何かしろ?」

牙狼・闇とは異なる力の気配に美空は何か新しい力を入れたのか? と疑問に思いながら柘榴に指示を出す。

「柘榴、露払いしときなさい! 私は先を急ぐわ」

「了解っす! 柿崎衆! 柘榴に続くっす!」

柘榴は自分の兵を連れて先に武田の兵に向かって走らせる。

「さあて……光璃。あなたは私を、ちゃんと楽しませてくれるんでしょね……この機を逃したら、もう次は無いわよ……?」

美空は楽しそうな笑みを浮かべて馬を走らせた。

☆

流牙は鎧の制限の99・9秒ギリギリを使って轟天を走らせる。

美空が向かったと思われる光璃がいる武田の本陣へ轟天を一直線に全力疾走で走らせる。

「頼むぞ、轟天!!」

普通の馬では困難なハイスピードで走り、急なカーブを曲がりながら流牙は手綱を握り締めながら振り落とされないようにしていた。

轟天は馬の姿をしているが、そのスピードは空を駆ける牙狼・闇の漆黒の翼よりも速くあつという間に長尾と武田の戦場近くまでたどり着いた。

しかし、既に戦いは始まるうとしており、その先頭には両軍の武将である柘榴と心がいた。

「止めろおおおおおおおつ!!」

「ふわっ!!?リユウさん!!?」

「りゅ、流牙さん!!?」

轟天に乗ってやってきてきた流牙に柘榴と心が驚愕し、流牙は魂の叫び声を轟かせた。

「轟天えええええん!!!」

『ヒヒイイイイイーン!!!』

長尾と武田の兵が激突しかけたその時、轟天が間に入り、渾身の四つの足から放たれる蹄音が衝撃波となって広がる。

「どわああああつ!!」

「うひゃあ!」

轟天の放った衝撃波に柘榴と心を含めたこの場にいた全ての兵が倒れてしまった。

「ちよっ!リュウさん!何すかその金ピカなお馬さんは!?!めっちゃかつこいいんですけど!!」

柘榴は轟天の美しきや逞しきに一目惚れして目を輝かせた。

「そんな事より美空はどうした!?!」

「御大将なら武田の本陣で光璃殿と戦ってるっすよー」

「なっ!?!ちっ、遅かったか!!轟天助かった!」

流牙はガロの鎧と共に轟天を魔界に送還して急いで武田の本陣に向かった。

ちなみにこの場の戦は轟天によって出鼻をくじかれてそれどころではなくなつた。

「美空!?!光璃!?!」

流牙は最悪な未来を脳裏によぎりながら武田の本陣に突入した。

そして、流牙の目に映った光景は……。

「あら流牙、早かったわね」

「おかえり、流牙」

「えっ……？」

敵同士のはずの美空と光璃が武器を納めて本陣の中でのんびりとしていた。

美空は空に三昧耶曼荼羅の光を放ち、更に鎗矢の音が鳴り響いた。

何が起きているんだと困惑する流牙に美空と光璃は少し嫌そうに答えた。

「休戦したの」

「休戦……？」

この戦いは光璃が美空を、美空が光璃を見極めるための互いの覚悟を決めるためのものだった。

これから日の本をかけた大きな戦をする中、僅かな疑惑も許されない。

そこで互いの思いを打ち上げながら先程一騎打ちをしていた。

美空と光璃は流牙を大切に想っていることを伝え、流牙が望んでいた織田との同盟を組むことを決めた。

「良かった……」

流牙は美空と光璃を抱き寄せた。

突然抱き寄せられた美空と光璃は顔を真っ赤にして大慌てする。

「ふええっ!?!りゅ、流牙!?!」

「流牙……?」

「本当に良かった……」

声が震えている流牙。

密接している二人は日の光に反射した瞳から流れた雫を見逃さなかった。

「俺はまた、大切な家族を失うかと思った……」

流牙は家族を失う恐怖に襲われており、それを瞬時に感じ取った美空と光璃は申し訳ない気持ちになりながら流牙の背中に手を回してポンポンと背中を撫でた。

こうして長年の宿敵であった長尾と武田の戦いはここで幕を閉じた。

と言つても美空と光璃はすぐにでも仲良くなれるわけではなく、仲良く喧嘩する喧嘩友達となるのだった。

そして……遂に流牙と久遠、二人の再会の時が近づいていた。